

奇譚クラフス

■ 新しい風俗文献誌 ■

10
月
号



'69
10

成人向
NO!

作・六・鬼 団

好評の傑作集大成第四弾刊行!!

花と蛇 特集号

定価 五〇〇円 略号 『花』

団鬼六作長篇サディズム小説『花と蛇』は、昭和37年8月号の奇譚クラブ誌上より現在まで引続いて連載し圧倒的人気で満天下のSFファンを沸かせた傑作であります。過去三回に亘って発行した特集号も悉く売切れとなる人気でありましたので、ここに新しく昭和42年1月号以降の分を一括登載、堂々三百数十頁の特集に加え四馬孝画伯筆の秀麗きわまりない口絵を添えて御覧にいたします。

四馬孝画 口絵

美女羞恥責 花と蛇 画集

- 一、恐ろしい浣腸の末排泄を強要される美女
- 一、中腰で縛られた美女の品定めする調教師
- 一、清純な美女に初めて縄掛けしていたる
- 一、剃毛の羞恥責めに悶える地獄部屋の美女
- 一、全裸の開股縛りで深窓の美少女を責める
- 一、俵のように縛られて宙吊りにされた美女
- 一、股間縛りの全裸責めにされる絶世の美女
- 一、足吊りで強制浣腸を施される全裸の美女

本文内容見出し

発端 美女を狙う狼たち

第一章 清純な令嬢の屈服

(カメラと令嬢・女奴隷・口惜しき陶醉)

第二章 人身御供の令夫人

(燃ゆる美体・狼の酒宴・人身御供)

第三章 深窓の美少女とズベ公

(赤いしごき・再び奈落へ・奸計)

第四章 小夜子への執拗な調教

(鈴と縄)

第五章 変性色事師の登場

(二人のシスターボーイ・化物の計画・京子の哀泣)

第六章 生れかわるスター京子

(崩潰する京子・夏の罠・地獄の宣誓・まんじの舞)

第七章 激しいスターへの訓練

(奈落への道・美女と白痴)

第八章 低脳男と令夫人の結婚

(奴隷の花嫁・二対一)

第九章 愛弟子を調教する静子夫人

(蛇の果・悲しき決意)

第十章 羞恥と屈辱の日本舞踊

(美花の踊り・薔薇と百合)

第十一章 悪魔たちの哄笑

(白い関係・調教日記・手鏡)

第十二章 地下室の羞恥と汚辱地獄

(甘い調教・挫折)

第十三章 珍芸を開陳する令夫人

(おとし穴・筆と硯)

第十四章 淫靡な時代劇ショー

(三人の風来坊・時代劇ムード・牢獄にて・フランス式)

第十五章 華々しきショーの展開

(ショーの開幕・楽屋の中・検舞台)

第十六章 野卑な妾二人のいたぶり

(珍芸・姐の上)

第十七章 ズベ公達の邪悪な責め

(美女と野獣・ある日の回想)

第十八章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち

(美女崩潰・別離)

第十九章 悪党の執拗ないたぶり

(鏡の部屋・卑劣な録音)

第二十章 文夫と小夜子の屈辱的対面

(鏡地獄・断髪令嬢・悲しき対面)

第二十一章 勝ち誇る悪党一味

(受難の姉妹)

第二十二章 中国伝来の秘法

(鬼女よりの招待・中国の秘法・羞しい唄)

第二十三章 緊縛された美女の泣泣

(三悪女の狂態)

第二十四章 新しい餌食への触手

(義兄弟)

第二十五章 苦痛と屈辱の生地獄

(肉の媒介・美津子の号泣・同志討)

第二十六章 恐怖の責め続く

(地獄の接吻・巨大な責め)

第二十七章 結末なき責めの結末

(調教柱・復讐劇・肉の拷問・京子の珍芸)

「最新版」 美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印画紙 (9×13 厘米) 極鮮明焼付

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇円

十組十枚 一〇〇〇円

二十組二十枚 一八〇〇円

五十組五十枚 四〇〇〇円

百組百枚 七〇〇〇円

郵便番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

☆

1 正面強烈亀甲縛 (大島 照代)
2 美貌は鞭に泣く (関谷富佐子)
3 襲う影に慄く (佐々木真弓)
4 弾む裸身に縄目 (佐々木真弓)
5 柱縛りで鞭打ち (関谷富佐子)
6 縛られて困るわ (金原奈加子)
7 私を襲わないで (左近麻里子)
8 縛られて嬉しい (中河 恵子)
9 麗わしの縛女体 (中河 恵子)
10 蒲団の上に狂う (関谷富佐子)
11 豊満女体の縄目 (大島 照代)

12 二つ折りの裸身 (川越美佐子)
13 痛打に哭く美貌 (関谷富佐子)
14 長身の脚を伸す (佐々木真弓)
15 若肌は縄に美し (長井葉津子)
16 恥らいの女体美 (中河 恵子)
17 何故私を縛るの (金原奈加子)
18 感泣する胴縛り (ローズ秋山)
19 猿ぐつわの悦虐 (関谷富佐子)
20 荷造り縛りの女 (中河 恵子)
21 足指はく字に (佐々木真弓)
22 麻縄の柔肌責め (金原奈加子)
23 美しき亀甲縛り (左近麻里子)
24 柱縛りの隙間見 (長井葉津子)
25 緊縛全裸の極美 (左近麻里子)
26 海老責めの苦悶 (佐々木真弓)
27 全裸の縄は輝く (佐々木真弓)
28 猿轡と縄に泣く (川越美佐子)
29 縄に喘いだ童顔 (長井葉津子)
30 出臍を晒す縛り (佐々木真弓)
31 後手吊りの全裸 (長井葉津子)
32 首膝縄にあえぐ (長井葉津子)
33 大の字で晒す裸 (関谷富佐子)
34 全裸緊縛の哀愁 (佐々木真弓)
35 高手小手の全裸 (佐々木真弓)
36 真迫の縛プレイ (ローズ秋山)
37 豊満な裸身縛り (左近麻里子)

38 竹棒責めに悩む (大島 照代)
39 亀甲縛りで寝る (左近麻里子)
40 縄目に喘ぐ表情 (中河 恵子)
41 開股縛りの正面 (中河 恵子)
42 猿轡に喘ぐ緊縛 (左近麻里子)
43 縛りの肌を見て (金原奈加子)
44 私は縛りが好き (金原奈加子)
45 強烈縛りを味う (金原奈加子)
46 麗身を横たえて (左近麻里子)
47 二つ折に弾む胸 (佐々木真弓)
48 柔肌に縄は厳し (長井葉津子)
49 柔肌に痛む麻縄 (左近麻里子)
50 全裸の女体引廻 (中河 恵子)
51 開股縛りを諦観 (左近麻里子)
52 突き出した尻 (中河 恵子)
53 あどけなき緊縛 (金原奈加子)
54 首縄股間縛の女 (長井葉津子)
55 強烈後手で括る (佐々木真弓)
56 恥しい縛り初め (金原奈加子)
57 海老縛りで悶ゆ (関谷富佐子)
58 翻られる緊縛女 (長井葉津子)
59 豆絞りの猿轡で (金原奈加子)
60 もう虐めないで (金原奈加子)
61 畳に転す股間縛 (金原奈加子)
62 女体は縄に映ゆ (左近麻里子)
63 全裸の縛を見て (長井葉津子)
64 答は柔肌を乱打 (関谷富佐子)
65 臀部に答は炸裂 (関谷富佐子)
66 この裸身を捧ぐ (佐々木真弓)
67 諦観の縛り表情 (長井葉津子)
68 足吊りで晒す肌 (長井葉津子)

69 美体は縄に映る (中河 恵子)
70 逞ましき臀部晒 (左近麻里子)
71 両手吊りに喘ぐ (長井葉津子)
72 左近麻里子の裸 (左近麻里子)
73 開股縛りの羞恥 (中河 恵子)
74 捧げられる女体 (中河 恵子)
75 鉄砲責めの女体 (左近麻里子)
76 麗わしの肌を縄 (佐々木真弓)
77 後手縛りの連続 (ローズ秋山)
78 開股の股間縛り (大島 照代)
79 強烈な縄目の女 (川越美佐子)
80 逆エビ責め地獄 (ローズ秋山)
81 豊麗な裸身の美 (関谷富佐子)
82 羞らいの流し目 (佐々木真弓)
83 肌に喰い込む縄 (長井葉津子)
84 胴締縛りと猿轡 (長井葉津子)
85 投げ出された裸 (金原奈加子)
86 正面の亀甲縛り (左近麻里子)
87 開股縛りの女体 (左近麻里子)
88 後手縛りの全裸 (中河 恵子)
89 柱に晒す強烈縛 (長井葉津子)
90 羞恥の脚挙げ姿 (佐々木真弓)
91 豊かな乳房誇示 (佐々木真弓)
92 美しい女の縛り (佐々木真弓)
93 股間縛りに羞う (長井葉津子)
94 ホステスの緊縛 (佐々木真弓)
95 椅子坐開股縛り (中河 恵子)
96 無防備な両手吊 (関谷富佐子)
97 息づまる猿轡 (川越美佐子)
98 人身御供の乙女 (長井葉津子)
99 両手吊で晒す肌 (金原奈加子)
100 爪先立つ強烈縛 (ローズ秋山)

奇譚クラブ

昭和四十四年九月二十日印刷 昭和四十四年十月一日発行 十月号(第二十三巻第十一号) 毎月一回一日発行
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日国鉄大岡特別郵便物認可 第二〇号

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisyupan

Osaka Japan



定価三五〇円

10月号 ￥ 350

くくすぐるのであつた。

くくすぐるのであった。

若妻初妊娠の哀歎

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号△さい▽
後手高小手に厳しく縛った胸
の縄目は脂肪のついた柔肌を情容
赦なく痛めつけている。可憐な素
顔に、豆絞りの猿轡をかまされた
顔に哀愁の表情がにじみ出る。

妊婦全裸縛り全身

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号△さに▽
小柄ながら均整のとれた肢体の
奈加子であつたが、今は臨月近い
太鼓腹を突き出して、その全裸の
全身像は一種異様なエキセントリ
ックの美をかもし出している。後
手に縛られた初産婦の全身を見た

妊婦腹の緊縛側面

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号△さみ▽
今まさにはちきれそうな便々た
るお腹を誇らしげにさらして、き
りきりと肌に喰い込む縄目を甘受
した若妻は、淋しくうつむきなが
ら自分のさがを悔いている。

強烈縛り妊婦責め

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号△さろ▽
沢山の縄を用いて皮下脂肪の豊
富な肌に埋もるばかりに力一杯縛
り上げた若妻の臨月腹を中心にし

て鮮鋭なレンズの目は産毛一本も余まざじとばかり執拗に妊婦の神秘をあばきだしてゆく。

金原奈加子 略号ハさま

膨満妊婦乳房責め

大木村三校一組
金原奈加子 略号△さむ▽
授乳に備えて乳汁のしたたるばかり膨大となつた乳房を更に強調するようになつた乳房を無慘にも締め上げて瓢箪のようにくびつてしまつた。縄に悶えて息づく大きな腹部は、まるで太鼓のようにはりきつてゐるのだつた。

妊婦全裸姿態の部▽

臨月腹全裸晒人形
大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号△さち▽
二十才の若さに溢れた女体ながら妊娠という異常美を宿している裸像を惜しげもなくカメラの前に晒して見る者の好奇心をそそって

縛りなしの妊婦ヌードを
見る方は、この全裸姿態の中

躍動する妊婦裸像

指示される通りのポーズをとってアクロバチック的な動きをする

示す。粘つてカメラアイは、その動きを追って次々と躍動する妊婦の姿態をキャッチしていった。

妊娠という異常美

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号△さへ▽
単なるヌードと違って、妊娠と
う命敵な事実は、この可憐な小

の肢體を一躍動物的な生ぐささ

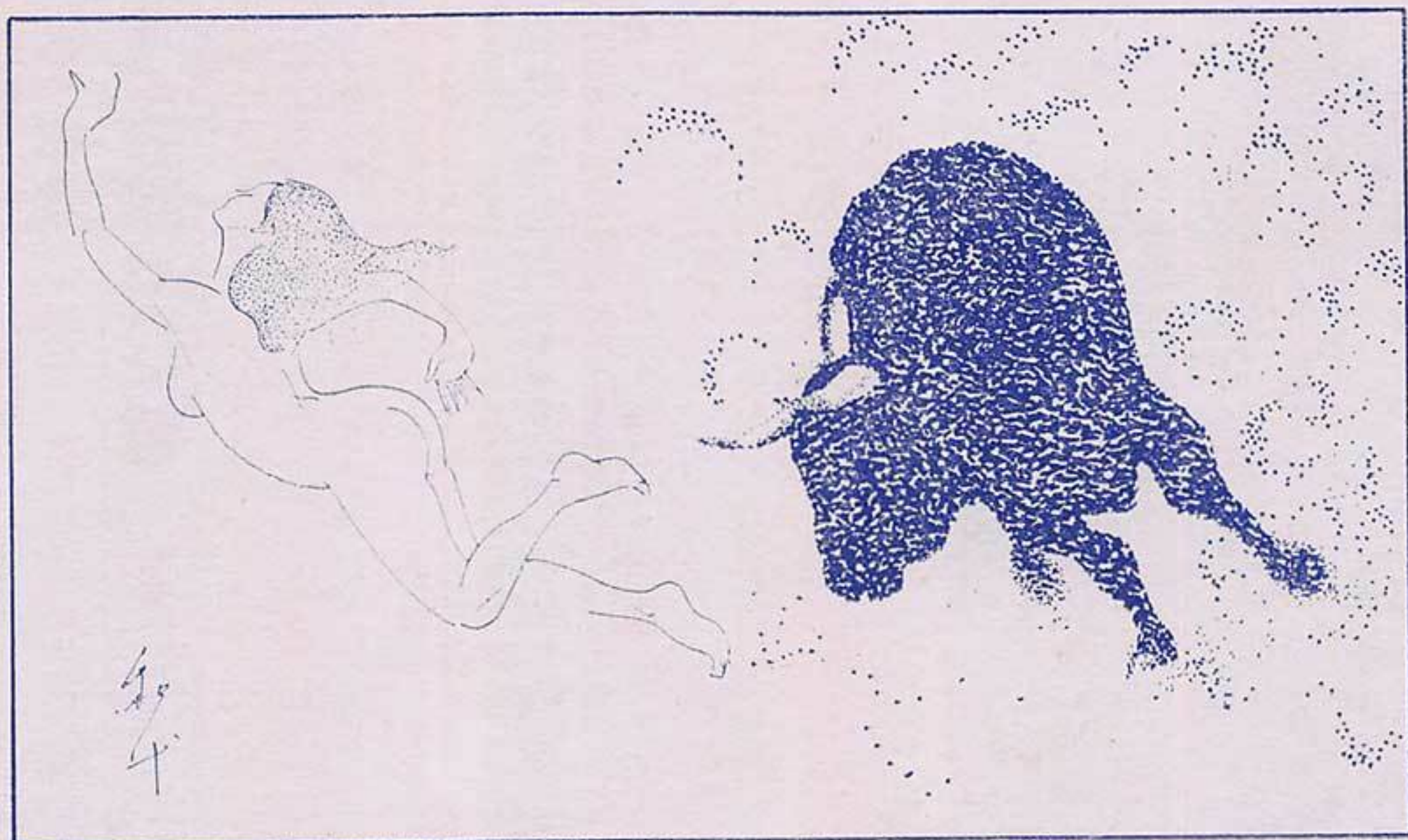
見てほしい臨月腹

女性だけに、ときには誇らし

来る妊娠という事実を、その裸身
ににじませて、異性の目で見てほ
しいという露出症的M性をポーゾ
にあらわにしているフォト。

金原奈加子 略号△ささ▽
妊婦マニアの中には縛りのない

妊婦のヌードを好む人がある。妊婦といっても経産婦では、やはり新鮮な魅力は薄いだらう。



奇譚クラブ

〈第二三卷 第十一号・通刊第二五八号〉

(昭和四十四年) 十月号 目次

〈本 文〉

懸賞入選 異常者のカルテ 〈告白篇〉……………暗闇 太郎……………(10)

告白『女囚懲罰房』……………高橋 順子……………(18)

十人十色 〈第六話 混色の巻〉……………泉野 薫……………(22)

読者論壇 (奇ク誌のバックナンバーを買った外人) 新宿 町人……………(33)

連載小説『大噴火』 (13)……………千葉 青鬼……………(38)

ゴム雨具責め雑考……………森中雨奇男……………(46)

男性虐待快樂術 (第九話)

『フレンチキッス劇場』 〈前〉……………馬族 保……………(48)

「urine」の表現について……………麻曾比須人……………(58)

連載時代小説『緋縮緬地獄』 (17)……………白鳥 大蔵……………(60)

わが要望 緊縛美雑感……………鈴木 三三……………(69)

私の体験談 「ふんどし物語」……………鈴木ゆり子……………(72)

想い出再現 れんげ畑の劇斗……………小高 純……………(82)

創作『妖鰻記』……………秤 蕩也……………(88)

珍書探訪 見捨てられた艶笑資料 (二)……………斎藤 夜居……………(106)

奇クサロン……………編集部構成……………(232)



編集長様お許へ……………	藤野 友子
私が試作した「豊胸用吸引器」……………	沢瀉 しの
サロン楽我記 (第六十四回)……………	辻村 隆
イメージ画「コンドルのいけにえ」……………	五屋 和十
同好者大いに語る「女優よ、縛られる」……………	金岡 直行
続・あるグロなたわごと……………	須渾 朔
Mプレイ 昆虫標本台……………	犬 畜 生
隠花の夢想……………	英 堅 守
「奇クに望む」……………	和田 平助
代償行為でない創作を……………	梶井 利一
イメージ画「引き責め」……………	小妻 容子
「神よ、罰し給え」……………	室井亜砂路
自作の緊縛写真……………	柴 利 美
編集部だより……………	編 集 部
私の映画愚評……………	S M 映画 生
フォト紹介 ドイツのアマゾン……………	佐野 寿
解臭剤とオトイレ……………	酒井 米子
イメージ画「うごかないで」……………	杉 よしお
「メイ文句」……………	青井 松造
イメージ画「透視式三面鏡」……………	柏木真佐男
奇クよ、高級悪書に徹せよ……………	高杉 愁郎
イメージ画「黒い枷」……………	志羽 利也
「シャワー」……………	赤ちゃん

読者のたわごと (辻村・団両先生へ)……………小杉 千恵……………(113)

S・C・R回答欄

「射精後の疼痛について」……………弓削 達人……………(116)

ある会合 「S Mプレイに関する告白」……………木崎 進……………(120)

読むためのシナリオ 「お弓受縛譜」……………風流極道軒……………(132)

告白 レダの血は薔薇……………西条 夏……………(144)

懸賞入選作品 「白い牡」……………(完結)……………麒麟田 欧二……………(150)

臨月妊婦逆吊りの感激……………高野 原美……………(163)

連載M小説 ヴピエロ床屋……………(8)……………鬼山 絢策……………(166)

懸賞応募 体験記「受診羞恥譜」……………小林 武……………(175)

S Mカメラ・ハント△岡本嬰子の巻△
「お気に召すまま」……………辻村 隆……………(178)

ブチツクの魔女……………芳野 眉美……………(196)

さもの漫談「帯揚げはいつも悲しからずや」……………牧 高志……………(203)

懸賞応募創作 黒い日記帳……………加藤 広夫……………(210)

マニアの随想「ある風景」……………早木 夢二……………(217)

M派小説 「獣 人」……………香川 泳三……………(218)

読者通信……………編集部選……………(252)

(目次カット「挑むは赤色のみにあらず」……………五屋 和十)

(扉カット「マイ・プリティ・ペット」……………豪 城二)

〔最新緊縛資料写真一覧〕

梁からの両手吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(ろふ)

床柱に宙吊り縛り

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(ろへ)

開股股間縛り正面

大手札二枚一組 三〇〇円
山原 清子 略号(ろほ)

二女連縛責模様組写真

大手札十枚一組 一五〇〇円
大塚・山原 略号(ろそ)

二女連縛煩悶場面組写真

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原・大塚 略号(ろひ)

股間縛り刺青競艶

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろさ)

股間縛り正面妖美表情

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろす)

喰込む股間縛りの縄目

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろせ)

手足宙吊り

大手札三枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子 略号(つた)

オムツの股間縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号(むく)

強烈責、被虐の果

大手札五枚一組 八〇〇円
梨花悠紀子 略号(りお)

乳房いじめ

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(とお)

激痛ノ逆エビ責め

大手札四枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号(きえ)

美貌の裸身に縄目

大手札三枚一組 四〇〇円
絹川 文代 略号(きん)

腰元吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
村井知可子 略号(こり)

腰元間謀の拷問

大手札四枚一組 六〇〇円
村井知可子 略号(こく)

椅子エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(おき)

六尺縛縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(ろは)

吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
梨花悠紀子 略号(つき)

狙われた和装の娘

大手札十二枚一組 二〇〇〇円
愛川 悦子 略号(ねい)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
水本 茂美 略号(えひ)

ゴム衣緊縛

大手札三枚一組 四〇〇円
水本 茂美 略号(みす)

抓ねりと擦ぐり責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚、東浦、木村 略号(きし)

バンド責め

大手札五枚一組 八〇〇円
東浦ひかる 略号(はん)

夫人の表情

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号(せや)

後手吊り足挙縛り

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うら)

二つ折りエビ責め

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うり)

足挙げ椅子責め

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うる)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(えり)

鼻の穴責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大手 啓子 略号(なく)

鼻なぶ

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ない)

鼻責めの陶醉

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(なは)

完全逆さ吊りフオート

大判判三枚一組 一五〇〇円
木村 洋子 略号(さつり)

両足首括り逆さ吊り

大判判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(さか)

逆さ吊り女体折檻

大判判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(させ)

手足逆滑車宙吊り

大判判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(さと)

啓子をいじめめる清子

大手札八枚一組 一五〇〇円
山原、大塚 略号(うの)

啓子を縛しめる清子

大手札八枚一組 一五〇〇円
山原・大塚 略号(うな)

山原を責める大塚

大手札八枚一組 一五〇〇円
大塚・山原 略号(うね)

逆さ吊り正面と背面

大手札二枚一組 四〇〇円
増田みゆき 略号(つる)

煙草責めの裸身

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(たく)

乳房責め五態

大手札五枚一組 七〇〇円
山原 清子 略号(てら)

全裸麻縄強烈縛

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原 清子 略号(いね)

奇 譚 ク ラ ブ

昭和 44 年 10 月 号

(1969年・10月号<第23巻第11号・通刊第258号>)



本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
として編集しておりますが、青少年の保護
育成に関する条例には抵触しないよう、十
分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの
は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
載した文章は十二分に検討を加え、いやし
くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
めの努力はいたしません。

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表



異常者のカルテ

— 告白 編 —

暗 闇 太 郎

(カ ッ ト も)

一、SM夜尿症

夜尿症——私にとっては何とも恥ずかしいような、実に言いにくい言葉である。そう、恥ずかしい事だが、私は夜尿症なのである。それも、私がサディズムの所有者であるが故の、“SM夜尿症”とでも名付けられる症状なのだ。“SM夜尿症”としたのは、放尿の原因がSMプレイの夢に因るからである。

私は現実に女体を自分の手で緊縛した事しなければ、裸にむかれた緊縛女体を見た事

ない。だから文章に書き表すことによって、絵に描くことによって女を責め、私のサディズムを抑制しているのが現状である。それ故か、度々、ひよんな事で緊縛女体の夢を見る事があるのだが、それは毎日見る訳でもなくといって周期的に見れる訳でもない。時には何日か続けて見ることもあるし、又一カ月間も見ないこともある。しかし、いずれにせよ私はその都度、意志に反して放尿してしまい言いようのない惨めな気持ちに襲われるのである。子供の時代ならまだしも、私は自分自

身に落胆せざるを得ない。

夜尿症について、奇ク十二月号(68年版)

に「夜尿願望者の現状」という告白が載せられたが、この時、私は同じような人もいるのだ、と少なからず、ほっとしたのを覚えていた。しかし私は子供の時から夜尿症だった訳ではない。女体の緊縛、責め、といったものを幻想し、心底奥深く潜んでいたサディズムを意識し始めた学生時代から、急に始まったのである。度々に亘り夜尿症がおこるのでその原因をあれこれ考えているうちに、きま

って緊縛された女体の夢を見ると、その直後におこっている事に気付いたのだ。

この事実は私にとって非常なショックだった。せつかく、夢の中ではあるが、願望する女体緊縛を楽しめると思ったのに、それには夜尿症の具現という屈辱を、代償としなければならなかったのである。

以後、私は考え、悩んだ。私は夜尿症という屈辱には耐えられなかった。そこで、悲壮な決意をもって自分の性癖を断とうとしたのである。

しかし、私の心に根をはってしまったサディズムは、もはや私の心から消える事はなくなっていた。女体——縄——緊縛を忘れようと試みれば試みる程、夜毎、夢の中で緊縛された女体がうごめき、私は放尿していたのだ。

失敗につぐ失敗を重ねた上で、夜尿症という屈辱は辛い事だが、縄による女体緊縛はそれを埋め尽くす魅力がある事に思い至った。一旦は焼き捨てた奇クを再び手にしたのは、そう気付いてからであった。私は、やはりサディストだったのである。いくら憧れても実際に自分のこの手で女体緊縛ができない今、私がサディストとしての欲求を慰める事のできるのは、この奇クと、そして私の見る夢でしかないのだ。

「犯罪」——正直言つて私は、今までに何度

もこの恐ろしい衝動にかられた事がある。夏などは、女性に殆ど、みなブラジャーの透けて見えるブラウス等を身につける。女性も酷ではないか、わざわざ見せつけて歩きまわるとは……。私は、そんな女性のブラウスを引き裂いて、ぎりぎり縛りあげてやりたいと思う。また、ワンピースの背中ファスナーを、ひき降ろしてやりたいと思う。事実、夏には痴漢が多く横行するそうなのだから、私の欲望も人並みらしい。

ただ私は、異常であることは自認のことだが、それを実行する勇氣はない。否、実行できる状態ではないのである。が、SM夜尿症——やはり私は変態とされるのであろうか。

* * *

私はどことも知らない本屋、そう、古本屋に立っている。そして緊縛女体の満載された厚い本を手にとって、次から次へと頁をめくっていく。一頁一頁に、薄ぼんやりと、縄でぎっちり縛られた女体がうごめいているのだ。両手を背中に回され、胸の上下を締めつけられ、乳房を押しつぶされ、猿轡をかまされた女達が、柱に縛りつけられ、畳に、布団に転がされ、椅子に括りつけられて、緊縛に顔をゆがめているのだ。しかし、それは薄ぼんやりとした、はっきりしない写真の群れなのだ。

「なぜ、ぼけているのだ」私は、鮮明な緊縛写真を求めて必死に頁をめくる。「はっきりしたヤツはないのか！」私のいらだちは、しだいに高まっていく。一枚、一枚……「あった！」私は叫んだ。

鮮明な写真だ。裸にされた女の胸に、腹に縄がむごたしく喰いこんでいる。私の目はそれをむさぼり追う。屈辱に押しまげられた足の指、無理やり押し拡げられた膝……

瞳、瞳だ。猿轡に覆われた麗しい瞳は——私の興奮は音を立てて舞い上がる。その瞬間夢は終わった。そして濡れた下着。限らない屈辱感に打ち砕かれた自分の気持ちに気付くのである。

「うっうっう……」暗闇の中に女のうめき声が断続的に響く。私の手によって着ている物を一枚一枚剥ぎ捨てられ、後手にぎゅぐゅと縛りあげられた女のうめきである。

「うっうっう、うっ……」もう逃げられることはない。女の自由は、みな奪ってしまったのだから。しどけない裸にされ、手足を縛られ、猿轡で唇を裂かれているこの女に、何の自由が残されていよう。

「うっう、うっ……」うめけ、うめけ。無駄な事だ。どうした？ 声が出せないか。私は足許に転がっている女の顎をこづき上げて、せせら笑うのだ。女の瞳は羞恥と恐怖に満ちあ

ふれて、今にも涙を流さんばかり……。すばらしい幻想の世界に、今、私はいるのだ。夢か、それとも現実か……。

「うううう……うう」女は必死に、もがく。縄の緊縛から逃がれようとしたって無駄な事だ。私は、しなるような皮鞭を女に見せつける。すると、どうだ。女は目を見開いて首を横に振るのだ。「やめて」とでも言っているのだろうか。馬鹿め！ 私は一撃を女の腹に打ちおろした。「ヒューパシッ」闇に響き渡り、そして女はびくつとのけぞる。痛いか、痛かったら転がれ。私は鞭をふりおとす。鞭のうなりと女のうめきが交互に、私の心を楽しませる。

「うううううう……」女は、もがく。逃げられるものか。「ピシッピシッ」私は女を責める女の尻に、腹に、胸に、太腿に……。ピシッ「うっ！」ピシッ。「ううっ」女の肌には、赤紫のミミズばれが浮きあがってくる。そして女は、様々なうめきを発しながら、ごろごろと、あてもなく縛りあげられた裸身をくねらすのだ。無駄な事だ。ハハハ、もっと、くねらせろ。もっと、うめくのだ。私は夢中で鞭をふるい続ける。そして、「ぐう！」と、悲愴な女の最後のうめきと共に……夢は終るのだ。そして又……情けない事だ。幻想の余韻に陶酔する間もなく、私はトイレへ走らね

ばならないのである。

二、そそう責めの羞恥

女と羞恥——これは切っても切れない縁のものだろうと私は思う。女に羞恥というものがあるからこそ、男は女を責め、女は男に辱しめられて、それぞれの境地に陶酔できるのだろう。もっともこの逆もあるようだが、私はこの「女の羞恥責め」が好きである。

羞恥責めにも色々な責め方があるだろうがそれは何と言っても、女をいじめにいじめ抜いて、あげくの果てに人前で「そそう」をさせてしまう事ではないだろうか。例えば、全裸にされて縄でひしひしと縛りあげられても、乳房や鼻をいたぶられても、又どんなにみだらな姿態にさせられて、目のくらむようなフラッシュをたかれたとしても、それは、面前で無理やり「そそう」をさせられる恥ずかしさほどの仕打ちではないだろうと思う。

というのも、私自身が恥ずかしい事だが、前述のように夜尿症の身であるが故に、その辛さを十分知りつくしているからだ。男がそうなのであるから、ましてやそれが女にとつて、どれ程の屈辱となるか、私には想像しうるのである。それ故に、私はこの「女体羞恥責め」（以後「そそう責め」としたい）を好み、あこがれている。

女の羞恥をあばく——夜尿症——中には、よくもまあ、こんな恥ずかしい事が書けるものだ、と驚きあきれる人もあるだろう。ひょっとしたら、同じ悩みの人もいるかもしれないという微かな期待を持って書いているのは勿論だが、私は、むしろ前者を承知で書いている。又、今までに奇クに載せられてきた、数多くの告白に誘惑された事も事実だが。

ところで「そそう責め」についてだが、奇ク七月号に「有田久美さんへ「甘い空想」に応える」という一文が載せられた。これを読んで私は異様な興奮に寒気を感じ、全身がブルツとしてしまった。何とここには、私が秘かに思いこがれていた、女の「そそう責め」の何とも痛快な？ 情景が、ありありと描かれていたのである。

勿論、それは写真もない、文章における想定にすぎないが、その文章は実に生き生きとしており、私にその場にいるような気をひきおこさせ、身にせまる女のもだえ、羞恥の喘ぎといったものを感じとらせてくれた。特に私にとっては、女のおの哀願の言葉、「お願い。トイレだけは行かして下さい。お願いです、それだけは……」早く、早くトイレへ行かせて下さい。ああ、もうだめ……」などは女の羞恥を最も含んだ言葉の一つであろうと思えた。女にこの言葉を口に出させ、ついに

は「そそう」をさせてしまうことは、更に女を辱かしめる仕打ちにちがいない。

ところで、私がこの「そそう」に対する女の羞恥について感づいたのは、高校時代のことである。授業中に尿意なり便意なりをもよおすのは、まあ、ありがちなことだ。だが、私の隣の女生徒がそれに襲われたのを目にした事が、私が「そそう責め」にあこがれた所以でもあるようだ。

彼女は良家の娘で美人で、ありがちな高い女の子だった。何の授業中だったか等ということは覚えていないが、とにかく始めのうちには、何かそわそわして、上を見たり下を見たりしていたのだが、私には彼女に何がおこっていたか知る由もなかった。しかし時は正に冬であり、冷たい木製の椅子は、彼女の尻から全身を、冷やし続けていったのだろう。

一瞬、彼女は大きく瞳を見開き、上を仰いだかと思うと、両手で腹部を押えて、ドッと机にうつ伏してウーンとうめき出したのだ。

その時の彼女の表情は今でも印象に残っているのだが、額は油汗で濡れ、歯を喰いしばり、目を強く閉じ、側から見ても真っ青で悲痛な表情だった。彼女は、すぐに医務室へ運ばれたが、その日は、それっきり教室に姿を現わさなかった。

便意・尿意——私は、これが女の羞恥である

事を知った。小学校の時ならば何の気がねなく言えた「オシッコ」と言う言葉が、女子高生である彼女には、どうしても言えなかったのであろう。私は何か物珍しい、新しい物を見たようで、異様な感動を覚えた。

「そそう責め」を、実際にやった事はない私であるが、自身の悩みと、一女子高生の行動から「そそう責め」の女の羞恥は判断できるつもりである。そして今、女に無理やり「そそう」をさせてみたら、と妙なS性を持つに至ってしまった。SMプレイにしても、私は夢には見る事もあるが、鞭打ちなどの極度の苦痛を与える拷問系プレイは好まない。女の羞恥をあばくというのか「そそう責め」に限らず羞恥責めの方が好きである。

三、そそう責めの図

今の処、私の見るSMプレイの夢は前述のように緊縛フォートとしての夢が最も多い。まれに鞭打ちの夢を見る事もあるが、〇〇責めという、こみいった動きのあるプレイは見えない。しかし色々な縛りの場面の緊縛フォートは良く見る。股間縛り、立ち縛り海老縛り、亀甲縛り、足挙げ縛り、後手高小手縛り……色々な角度から捕えたフォートを夢に見た。しかし私の好みは羞恥責めであり「そそう責め」の夢を見られたら、と思い

やまない。しかし何分にも夢のことで、具体性はない。もし、自分の思い通りの夢が見られたら、素晴らしいだろうが。

「そそう責め」女を縛りあげて、手の自由を奪い、無理やり女の意志に反して「そそう」をさせてしまう——これが夢として現われたら私は文句なしに私自身が粗相をしてしまうであろう。しかしそれでも、SM夜尿症である私には、放尿という屈辱を被むっても「そそう責め」の夢が見られるのなら、それも満足である。

先に奇ク七月号「有田久美子さんへ」甘い空想」に応える」に、私の言う処の「そそう責め」を一足先に発表されてしまったのは、二番せんじのようで残念だが、私は私なりに長年、暖めてきた「そそう責め」の図を、ここに書き記させていたきたいと思う。

* * *

前夜に、女にいやという程飲み食いさせ、腹を十分に張らせた後、朝以後を待って、このプレイは遂行される。一晩中、トイレへ行く事を許されなかった女は、昨夜よりも更に腹をふくらませて、尿意——当然、便意も伴なうが、意識として尿意が、よりもよおす——を訴えることだろう。

「行、行かせて下さい」

女は恥ずかしそうに言う。

「どこへだ？」

「おトイレです」

女は、顔をほてらせて言うのだ。私はこの言葉を確認すると、女をパンティ一枚にしてしまう。そして、ゆっくりと、ぎっちり女の身体に縄をかけて行くのだ。女に勝手な真似をさせないようにである。

両手は勿論、背中に高々と押し上げ、次に乳房の上下を思いきり締めつけて、くびりあげる。そして三筋程の縄で、くびれあがった女の乳房を押しつぶすのだ。初めは直接的に尿意を刺激するのではなく、間接的にジワジワと尿意を高めさせてやるのだ。

「縛るなんて、あんまりです。トイレへ行かせて下さい」

私が知らぬふうでいると、女は尿意の高潮につれて、羞恥を忘れていく。

「お願いです。トイレへー」

女は無意識のうちに「トイレ」という言葉を夢中で使うようになる。しかしまだ早い。

「お前はパンティを脱がないでやるのか」

女は後手に縛りあげているのだ。当然、自分でパンティを下げる事などできはしない。

「甘い空想」では女の手は自由であり、トイレに鍵をかけて、じらし続け、そして尿瓶に醜態をさらさせる訳だが、私は女に自分で自分のパンティを汚させてやるのだ。女は必死

に足をすりあわせて、パンティをおろそうとするが、いくら尻をふろうが女の身にぴったりとついたパンティはずれもしやしない。やがて女は訴える。我を忘れて叫ぶのだ。

「パンティをおろして下さい。ああ……」

私は、待ってましたとばかり吐きつける。「お前は女だろう。私の手でパンティをおろされるなんて、恥ずかしいのか」

女は、はっとした様に言葉を切るだろう。女にとって他人に、しかも男の手によってパンティをひきおろされるのは、又耐えられない羞恥だろう。そして、ますます高まる尿意に、女は二つの選択を迫られるのだ。私は女を柱の前に立たせ、別の縄で、もう一度、女の乳房をしめあげて、上体を柱に固定してしまふ。しかし、ふくれあがった腹には何もしない。じわじわと責めつけるのだ。パンティをおろせない事を知った女は、泣き声で言うだろう。

「お願いします。縄をといてトイレへ行かせて下さい。もうがまんが……」

「だめだな。お前は、そうして立ったままやるんだ」

私は、うすら笑いを浮かべて言う。女は顔をこわばらせ、後手に回された手を、ぎりぎりと握りしめ、足の指をくの字に曲げて身体を震わせるのだ。

ここで私は、女に二つの道を与える。

「お前は、そのまま自分のパンティを汚すか、私にパンティを下げてもらって、この尿瓶にするか、どっちがいいんだ」

「そ、そんな。両方共——」

女は小刻みに身体を震わせて、困惑するだろう。私は、女にとっては尿瓶にする事よりパンティを汚す事の方が、羞ずかしいことと思う。尿瓶は放尿を許されたものだが、パンティには、それが許されていないのだ。「甘い空想」では尿瓶の使用を許した。しかし私は、この女にパンティを汚させて羞しめてやるのだ。

このまま放置しておけば、女は放尿してしまふだろう。しかしそれでは、つまらない。まず初めに、私は女をくすぐり責めにする。「あつ、やめて。そんな事したら、も、もう……」

私は、羽毛で女の身体をなでまわすのだ。もう膨張しきった腹を、緊縛に硬直した乳房を、ゆるりとなでつける。

「や、やめて。あ、あうう……」

張りつめていた女の緊縛は、くすぐりに耐えかねて、思わずそうしてしまい、替えたばかりの純白のパンティを汚すのだ。しかしこれでは、ほんの少量に違いない。まだ女の体にはたっぷり入っているのだ。女は、こ

の一瞬間の屈辱に、泣き叫ばんばかりに全身を紅潮させるだろう。しかし、まだまだ。

「何て女だ、お前は。その年になって」

私は思い切り、ののしってやるのだ。

「お願いします。もう許して下さい。トイレへ行かして下さい。まだー」

がまんがまんをしてきたのだ。少しばかり放尿したからといって、収まる訳はない。

女の尿意は益々高潮していくのだ。

「尿瓶が欲しいか。だめだ、お前は自分のパンティを汚すのだ」

次は股間縛りをしてやるのだ。私は床に垂れている後手縛りの縄尻をとり、背後から通して胸元を締めつけている縄に結びつける。

「ああっ、やめて下さい。お願い」

女にもこの一筋の縄が、この場合には何を強いるのかわかるだろう。そして哀願の言葉と並べるのだ。しかし私は、その縄を力いっぱい引き絞るのだ。

「ああっ、ああっ、ああ……」

女は新たな緊縛に目を見開く。そして女の意志に反して、無情な縄は女の身体に放尿をしいるのだ。

「お、お願い。もう、もうやめて……」

女は耐え難い羞恥に殆ど屈服するだろう。

純白のパンティは、さきほどのそそを証拠だて、女はこの屈辱に下をうつ向いて目を堅

く閉ざすのだ。この自分の醜態を見まいとして。そして女は、ただ「やめて、もうやめて」と繰り返すだろう。まだまだ終ってはい

ないのだ。最後に、私自身の手で女を完全に屈服させてやるのだ。私は女の腹部に、満身の力をこめた、げんこつを突きつけるのだ。

「ぐうえっえ！」

女は、うめきともつかない声をあげ、ついに耐えきれずに私の眼の前に敗北の証しをさらけ出すのだ。

* * *

自分のパンティに下着を濡らすこの屈辱は、夜尿症に悩む人と「そそう責め」を受けた女性にしかわかってはもらえない。それゆえに、私は若く美しき女性に、この仕打ちを加えてやりたいと欲するのかもしれない。女の羞恥をあばくために。又パンティのかわりに六尺褌をきりとりとせめた勇ましい姿態で責めるのも、またオシメをしめた、あどけない姿で責めつけて放尿させるのも、女にとっては別の羞恥が加わるのかもしれない。

四、オシメへのあこがれ

放尿の時の、あの快感。人間誰でもがまんにがまんを重ねてトイレに落ちつき、思い切り排尿することができた時、放尿の間、何とも言えない快さを感じるであろう。この放

尿の快感自体は、動物の本能的な感覚でありこれ自体は異常でも何でも無い事だと思う。しかし私は、いつの間にか、異常の域にひきずりこまれてしまったのである。

SM夜尿症の私は、いつとなく朝方近くに女体緊縛の甘い夢に誘われてしまい、それと同時に時間、場所、場合を問わず、私は放尿してしまうのである。私は床に転がされて縄の緊縛にもだえている女体の妖美にとりつかれ、緊縛された女体に手を触れようとして、手をさしのべるその瞬間に、私の意志とは無関係に突如と放尿が開始されるのだ。と同時に、甘い夢は一瞬にしてさめ、私は粗相をしてしまった現実にはききもどされ、ハッとばかりにそれを止めようとするのだが、悲しいかな一度おこってしまった以上、私がいくら被害を最小限にとどめようと抑制しても無駄なのである。少しも衰えることなく、どっと滝のように放出し続け、私の心を嘲けるかの如くなるのだ。

その間、ほんの一瞬ではあるが、私はどうする事も出来ずに、ただ「ああ」と悲嘆にくれているしかないのだ。自分の身体が放尿しているというのに、私の意志でそれをくい止める事ができない。そして惨めな結果を、苦々しくかみしめなくてはならないのだ。下着は勿論のこと、全てが、ぐっしりと濡れ

たのを確認して、私はこの事態が夢ではなく現実である事を改めて知り、むなしい屈辱感に放心してしまふ。

しかし私の心の一角では、この屈辱をよそに、この惨めな結果を呼ぶ以前の甘い陶醉境——いつとなく思いこがれている女体緊縛の幻想と、私の意志に反して突如、襲ってくるあの放尿の快感——に溺れ、限らない喜びを覚えていたのだ。

女体緊縛は言うまでもなく、私にとってはあの放尿の時——解放の一刻——の感じさえもが何とも気持の良いものに感じられるのだ。しかし、これらの幻想も、洪水の被害を直視すると、一瞬のうちに消え去ってしまうのだ。この屈辱こそ、動かせぬ現実であり、あの甘い幻想は、やはり空しい幻想でしかないのである。

「オシメ」私は、ふと奇ク十二月号に掲載された「夜尿願望者の現状」という、やはり夜尿症の読者の告白を思い浮かべ、「オシメ」というものに不思議な興味を持つようになったのだ。「オシメ」——晒木綿を幾重にも束ねて腰にまとい、その上をゴムカバーで覆う「オシメ」……放尿を外に洩らすことのない「オシメ」。

私はふと「オシメ」をしめると、どんな感触があるのか、という妙な、あこがれを抱い

た。そして「オシメ」さえして寝れば、いくら放尿しても、汚してはいけないものを濡らすことは絶対にならないのだ、という大きな魅力は、私を絶大な力でひきつけてしまったのである。「オシメ」さえしていれば、女体緊縛の幻想に、心ゆくまで浸れるのだ！ 何と素晴らしい事だろう。私は「オシメ」にとりつかれてしまった。そして直ちに近所の衣料品店へ出向いて、多量の晒木綿とゴムカバーを購入した。

誰でも「オシメ」の用意とわかるものを、若い女店員に頼むのは気がひけるのだが、私の期待と悲願は迷うことなく女店員に言っているのける推進力となった。その時の女店員の疑惑に満ちた顔は、語るまでもない。

そしてその夜、私は胸をときめかせて「オシメ」を着用したのである。気持ちの良い程白い晒木綿を厚く折り重ねた上から、ゴムカバーでしっかりと留めた。さらさらした、柔らかく、あたりの良い晒木綿と、ゴムカバーで、ぴったりと包まれた気持ちの良い緊迫感が、軽く腰をしめつけてくれるのだ。私の胸は期待に、はずんだ。

私は「オシメ」をつけているのだ。もういくら放尿しても、大丈夫なんだ。私はワクワクしながら床についた。そして、夜が更けるまで女体緊縛のあれこれを頭に描き、夢に呼

びおこそうとした甲斐があつてか、緊縛に、責めの苦痛に、羞恥に、顔をゆがめてもだえうごめく女達の狂宴が、私の脳裡にありありと展開された。そして案の定、放尿がおこった。習慣的に私はハッとなった。しかし、すぐ安心感がこれを打ち消し、眠りは継続され甘い幻夢は続けられたのであった。私は緊縛女体の美に酔い、かすかな意識の内に、心ゆくまで放尿を促す快感に浸ったのだ。私はその夜、初めて、そのまま緊縛女体に魅せられたまま、朝をむかえたのである。

何とすばらしい朝であつたことか。今までは、せっかく女体緊縛の夢を見ても記憶にまで残ったものはなかった。しかし「オシメ」のおかげで、はつきりと緊縛の幻想の再現ができた。そして、腰のまわりも期待通り濡れたあとはなかった。私は、ほっとした安心感に、しばらくは、かえって呆然としていた。

私の尿は厚く敷いた晒木綿を貫通して、ゴムカバーの内側をわずかに濡らしていた程のものだった。純白だった晒木綿は、尿を吸いこんで変色をみせていた。もしも「オシメ」がなかったら——私はただ、喜びの気持ちでいっぱいだった。晒木綿をとりはずすと、臭いが強烈にこみあげてきたが、苦にはならない気持だった。初めて味わった異様な喜びであった。私のサディズムは「オシメ」の着用によ

り、十分に満たされたのだ。翌日もこの快楽に溺れた。しかし同時に一つの不安が浮かんできたのである。

もし家を離れたら。旅先で、又複数の中で「オシメ」をつける訳にはいかないのだ。放尿を快感とする―これはやはり異常行為だろう。ましてや「オシメ」を着用してその快感を追い求めることになってしまつては、例え夜尿症という理由があつても、それは完全に異常行為であるにちがいない。

私は、もしこのまま「オシメ」にとりつかれていったなら、放尿に対する抑制力が完全に、失われてしまふだろうことに気付いたのだ。放尿への抑制を失う。―これは大人としては廃人を意味するのではないだろうか。下着を汚すことは耐えがたい屈辱ではあるがそれ以上に、この抑制力が失われる事を、私は恐れた。そして私は「オシメ」を戸棚の奥深くしまいこみ、以後使うことを避けようと決心したのである。

そして今、「オシメ」着用以前の状態にもどり、夢の中で女体を緊縛しては下着を濡らしている―抑制はするのだが―現状である。

私は「夜尿願望者」ではない。そして、そうなる事を恐れる。しかしわずかに二夜の使用ではあったが、以後「オシメ」のあの快い緊迫感と肌ざわりは、私の心に灼きつけられ

てしまったのである。そして度々「オシメ」への欲望をかりたてられる事もしばしばあった。そして、耐えに耐えていたのであるが、そのうちに何回かの誘惑に敗けて、再び「オシメ」をとり出し、夜尿願望者にはなりたくないという不安とが交錯する複雑な心境で、「オシメ」をつけてしまったのだ。

本当に、忘れたものを思い出したような良い気持ちだった。ふつくと、そしてさらさらした晒木綿と、ごわごわしたゴムカバーの感触―。私にとって、もう「オシメ」の魅力は忘れる事はできないであろう。しかし、どうしてもつけては眠れないのだった。今の私にとっては、「オシメ」を着用しての心ゆくまでの放尿は、何とも言えない魅力であり、又、快感である。本当にもう一度、あの幻想の中に没頭してみたい気持ちでいっぱいなのだ。しかし私は―私は「夜尿願望者」ではないのだ。

ああ、私を苦しめる、あの白くさわやかな晒木綿の「オシメ」よ……

* * *

S M夜尿症。女体緊縛にあこがれ、しかも「そそう責め」の夢に浸り、あげくの果てには「オシメ」にとりつかれる―こんな人間を誰が異常ではないと弁護できよう。私自身、自分は異常だと認めざるを得ない。

私は完全な二重人格者なのだ。一人の私は女体緊縛にあこがれ、そしてもう一人の私はそんな私を否定し抑制する。私の中には、そんな冷静で確固たる眼を持った自分もいるのである。だから欲望にかられて、犯罪をおかしたなどという事は、今までに一回とてもなかったし、又これからも絶対にさせない。もっとも緊縛を許してくれる女性が現われた場合は別だが、当分そんな夢はおこりそうもないのである。

私は異常ではあつても、自分を統制する意志を持つ者であり、絶対に変態ではないと自負したい。私がこの告白を記したのは、私の性癖を一般に押しつけて共感を求めようとしたのではないことをわかってもらいたい。ただ今の自分の混乱した心をまとめあげて、改めて自分を見てみたかったのだ。そして私の心の中の二人の私に、問いかけてみたかったのだ。できることなら私は、どちらか一人の私になりきってしまいたい。

女体緊縛にあこがれ、ただがむしゃらに縄を愛する私―むろん犯罪に走るかもしれない私。そして反面、縄を捨て、女体緊縛の夢も忘れて、夜尿症も何もない私。今のこの中途半端な私には、満足できないし、耐えきれないのだ。

告白

女囚懲罰房

高橋順子

私は今年四十八、うらぶれた人生の残りを
かろうじて、やっと、その日その日を送って
いるのです。たつきと申しましても元赤線地
帯のアルバイト料亭の客引きで、しがない暮
しをたてています。

元はちゃんとした家庭の主婦であつた私が
こんな掃きだめのような暮しに落ち込む羽目
になったというのも、二十年近く前のいまわ
しい事件が原因といえは原因なのです。

その時に経験した警察や拘置所、更に送ら
れた女囚刑務所での筆舌につくせない苦しみ
は、今思い出してもぞっとします。

後で詳しくお話しますように、一番ひど

かったのは拘置所で反則した時に入れられた
懲罰房ですが、これがよく話に出てくる江戸
時代の女牢もはだして逃げだすような所でし
た。今いる料亭に初めて入った時、仲間の女
達から昼間の退屈しのぎに、私が何故捕えら
れたか等には全然同情してくれずに、懲罰房
の中で房長達古参の女囚に、どんな目にあわ
されたかを、根掘り葉掘り喋らされるのでし
た。事の性質上、どうしても話が下がかった
ことになるのですが、彼女達は目を輝かせて
そんな話を喜ぶのです。



仲間の女達といっても、中には赤線時代の
居残り組のお女郎達も多かったのですから無
理ありません。今では私も客引き専門にな
っていますが、この界限へ流れ込んだ頃
は客も結構とっていましたが、商売がたき
の意地の悪い朋輩達に、ムシヨ帰りと言って
よくいじめられました。

話が余談にそれましたが、それは忘れもし
ません丁度昭和二十五年のことでした。私が
二十九の時で結婚してから七年。五才と三才
になる二児の母でした。駅前繁華街の一角を
占める洋品雑貨店のあるじとして主人は商売

熱心でよく働き、私も二人の子供の成長を楽しみに平和な日々を送っていました。

それが突然降って湧いた災難と申しますか主人が自転車で注文品の配達中、後から走ってきた進駐車のトラックにはねられ、脊髄を折って半身不随で入院してしまいました。

女手一つで店の切り回しが出来ようもなく店をたたみましたが、意外に借金が多くて店の権利金が戻ってきても手元には余り残りませんでした。そのため二児を祖母に預けてアパートの一室に住んでもらい、私は町外れにある旅館に女中として住み込み、病院とアパートへ送金して一家の面倒を見ることになったのです。

旅館の仕事は、今までの奥さん稼業でのにきに暮していた私にとっては重労働でしたが幸いそのうちには馴染のお客もつきチップを貰うことも知って、どうにか息もつけるようになりました。旅館といっても料亭をかねた料理旅館で、素人じみた私はお客のうけもよかったです。中には特に私にと名指しで来るお客さんもあって、それが同僚の嫉みをかっただのしょうか、夢にも思ってみないといんでもない事件が起こってしまったのです。或る日、宴会で上客が脱いだ上衣のポケッ

トから所持金が紛失するという騒ぎが起こったのです。すぐ警察から係の人が来て調べ始めたのですが私は身に覚えがないことなので平気で仕事をしていたのです。ところが何としたことでしょうか。そのお客の財布が中のお金を抜いて私の行李の中から発見されたということです。あまりのことに物も言えずびっくりした私は、直ちに容疑者として警察へ連行されました。

通いで幸子という若い女中がいるのですがその幸子の証言で私が金を盗まれたお客の上衣をいじっていたというのです。警察でそのことを聞かされた私は気も動てんして、幸子に会わしてくれと喚きましたが、狐のような顔をした刑事は、はなから私を罪人扱いにして、私の願いなどてんで聞いてくれませんでした。なんといいっても私に不利なのは私の行李の中から、盗まれた空の財布が出てきたことです。しかし、本当に私が盗んだとしたらどうして証拠の品を自分の行李の中へ入れて置くでしょうか。

お金もなく弁護士も頼めない私は、無実の罪を泣き叫んでも聞いてもらえない筈もなく、そのまま送検となり否定のまま起訴されました。保釈金の工面もつかぬまま拘置所暮らしを

強いられました。昭和二十四、五年頃が敗戦のどさくさで拘置所や刑務所の一番乱れていたとのこと。そんな時に拘置所に入った私が貧乏くじを引いたわけです。

それでも拘置所の雑居房で公然とリンチが行われているというようなことはありませんでした。生まれて始めてそんな所へ放り込まれた私は、凄いいえちゃん達の傍で小さくなっているだけでした。自分の境遇の激変もさることながら、残してきた家族のことが心配で心配でなりません。起訴されてやっとな面会が許され妹と金網越しに会いました。入院していた主人が、入院代の滞りから追いつめられそうになっているという悲しい知らせを聞くと、無実の自分が余りにも哀れで泣くにも泣けない気持ちで逆上してしまいました。

誰に訴える事も出来ない鬱積した気持はやはり手近かにいる女看守に向かって爆発させてしまったのです。こんな所に入れられている理由はないと喚いていると女看守が止めに入ってきました。自分では余りのみじめさにならば狂乱状態になっていたもので、よくは分らなかったのですが、暴れているうちに女看守の手の指を噛んでケガさせたのだそうです。

当然反則女囚として懲罰房へ入れられるこ

となりました。反則囚には革手錠といってお腹に革のベルトのようなものを巻き、その背の方についている手錠に両手を固定させられるのです。力のありそうな若い女看守達は仲間を傷つけられた腹イセで特にきびしく、革ベルトをつけるときにわざわざ着ているワンピースをずっとずり上げるようにしてつけるものですから、丁度今の超ミニスカートのように太股のあたりまでむき出しになってしまふのでした。

あまりの仕打ちに泣きながらもがく私にかまいたく、三人がかりで引きずるようにして地下の懲罰房へ連れてゆかれました。鉄格子の鍵ががちゃがちゃと鳴ると、無気味な金属製のきしむ音を残して私は突きとばすように中へほうり込まれました。

当時は人手不足でもあり、又新制度へ移る過渡期でもあって、看守が直接手を下すと問題になりかねないので、所内の保安対策のため、女囚に女囚の取締りをさせるという便利な方法をとっていました。つまり懲罰房内での役付女囚の一般女囚へのリンチを黙認して懲罰房へ送るぞと脅して取締りの効果をあげていたのです。

ほうり込まれて目が馴れてくるに従って、

よく見ますと、凄そうなあばずれが四人、思いの恰好で寝そべって、こちらをにらみつけています。横を見ますと、私と同じ後手に手錠をはめられた女囚が四人、壁際にきちんと正坐させられています。

いずれも素人風の女で、後で知ったのですが一番右の端に正坐の膝を横一直線に近い姿にさせられているのは、いかにもこんな所到场違いな感じの上品な奥さんタイプです。会社の課長だった主人が飲み屋の女に入れ揚げて浮気をするので、その女に主人と手を切ってほしいと談判に行ったところ、逆に罵られた上殴りとばされたので、つかつかとなつて、家に帰り包丁を持ち出してその女を刺し傷害罪で捕えられたのだそうです。

その横の女は三十位の凄いグラマーで、お面相は余りよくないのですが、むき出しになった太股は、はちきれそうでバストも素晴らしいものです。放火犯として喰らい込み三年の求判をされているとのことでした。

あとの二人は、共に二十二、三の若い娘で一人は情夫の強盗の見張りをやり一人は郵便局の事務員で公金をごま化して使い込んだということです。いずれも後手の革手錠でスカートをずり上げさせられているため、太股も

まる出しで、しかもノーパンティで膝を開かせられているので、見られたさまではありません。そんな哀れな姿を見せつけられて、ふるえ上った私は、膝をがくがくさせながら、扉の前に立ちすくんでいました。

房長は人殺しのパン助で玉江というあばずれでした。良家の奥さんとかお嬢さんには特に敵意を抱いているらしく、課長の奥さんには意地悪い仕打ちをしているようでした。

玉江の脇で寝そべっていた二人の女囚が立ち上ると私の両脇へかけ寄り両手を抱え、「いつまでばやばやしとるんだよ、このどあほ！」

一見して売春婦上りと知れる下品な罵声を浴びせるなり、握り拳で私の顔を数回殴りつけるのです。

「ひー、痛い」と悲鳴を挙げながら私は二人の力でずるずると引きずられて、房長の玉江の前に引きすえられました。

「おとなしそうな顔をしているが、コロシかい、タタキかい」

「は、はい、お金を盗んだと言われました。絶対に私じゃありません」

「とばけるな、このスベタ。いくらまげて、くらい込んだんだよ」

「五万円だそうで。でも濡れ衣ですわ」

「亭主持ちかい」

「はい」

「人様の物を盗んだ上に白を切り、担当さんに手向いするとは、中々見上げた度胸だよ、おカミさん。お前さんのその精神をここでたっぷり入れかえてやるからな。さあ新入り、挨拶がわりにフラダンスを踊ってもらうよ。絹子、皮手錠をはずしておやり」

仲間をドスで刺して大怪我をさせて捕ったお女郎の絹子は手にした合鍵で私の手錠を外し皮ベルトより解きます。合鍵は房長が管理していて、房内の女囚に皮手錠をはめるのも外すのも意のままなのです。

「フラダンスは裸で踊るものだよ。さあ、すっぱだかにおなり」

仰天した私は

「他のことは何でもしますから、それだけは勘忍して下さい」

床に顔をすりつけて哀願する私を、玉江は冷ややかに見下ろしながら

「洋子、絹子、早くそいつをむいてしまいな」

二十二、三の若いあばずれには抵抗しようもなく、必死にあらがう私の着ているものは全部はぎとられてしまいました。全部といっ

ても夏のことですからワンピースとパンティだけですが、はぎとったものを、まるで雑巾でも捨てるように投げすてるのです。

「さあ、おネエちゃん、フラダンスは腰みのをつけて踊るんだよ、これをおつけ」

と言って出房の時に履くゴム草履を七足縄に通して私の腰に巻きつけようとしています。

「生娘じゃあるまいし、いつまで両手で前を押さえているんだよ」

何とからかわれようと、恥しいものですから前を押さえてうずくまろうとする私を抱え上げて私の腰に洋子と絹子は、手早く縄を巻いてしまいます。意地の悪い洋子は、腰のまわりのゴム草履の前のところだけをあけて吊るものですから、前をかくす意味は全然ありません。房長の玉江は

「お手本がないと踊れないだろう。栄子が先程からシビレを切らしているようだから、栄子にやらせよう。栄子、ここへきてフラダンスのお手本を新入りに見せてやんな」

誰だと思ったら、あの課長夫人です。先程から、無理に膝を真一文字に近いまで開かせられて、苦しさで恥しさでシクシクしていたのだが、この房長の言葉にわっと泣きくずれました。

「どこまで私をいじめようというの」

そんな課長夫人の栄子を洋子は足を挙げて顔を蹴りつけました。

「こいつ、懲罰囚のくせしやがって、房長様にタテつく気かよ」

達磨のように転った栄子の上に馬乗りになって頬に四つ五つとビンタを食わせます。ここでは少しでも反抗的になると、逆に笠にかかっていじめぬかれるので、そのことを入房十日目で十分知っている栄子は、泣きじゃくりながら、しおしおと立上り、絹子に皮手錠を外して貰い服を脱ぎました。

残ったゴム草履を縄に通して腰に巻き、目にいっぱい涙をためて房内の中央に立ちました。色白で太り気味の脂ののりきった身体は実に見事なものです。

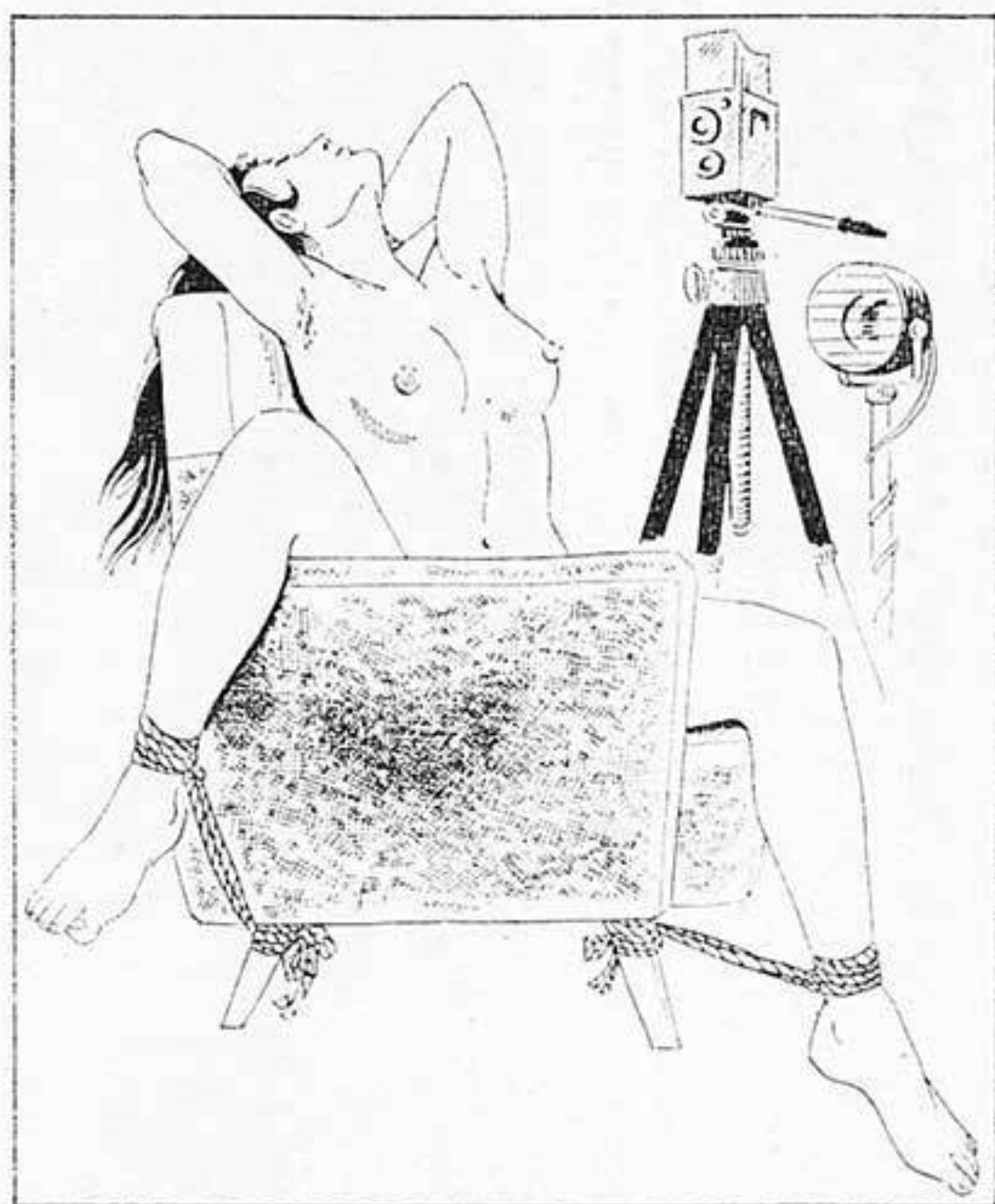
「スッテン、スッテン、スッテンテン」

スッテンばかりは参りません

お次はよいのが参ります

スッテン、スッテン、スッテンテン

あばずれ達のはやすスッテン節に合わせて課長夫人の栄子が、手を振り足を上げて踊りだしました。



十 人 十 色

第六話 混色の巻

泉 野

薫

—

葉子との関係は妙なものになってしまった。

葉子を女房に迎えようという積極的な気持があるわけでもなかったが、さりとてこのまま「はい、用はすみしました」と放り出す気にはなれない。金銭だけでは割り切ってしまうもの、私の心の中に芽生えていた。

女房でもなく愛人でもなく、秘書でもなく助手でもなく女中でもない、が逆に言えばそのどれにでもなるような存在に、葉子はいつの間にか落着いてしまっていた。

これまで交渉を持った多くの女たちと、そんな関係になった事は皆無だったのに、葉子にかぎってそんなことになってしまったのはおそらく彼女がひかえ目な女だったせいだろう、と思っている。

私がまる一日声をかけないで仕事に没頭していても、淋しがって寄ってくるようなことはせず、世話女房よろしく、部屋の片隅で何かコマゴマしたことをやっている。モデルがやって来てアトリエでふたり切りでこもっていても、やっかみ半分に顔をのぞかせることもない。男にとっては、まことに重宝、理想的なふるまいと言わねばならなかった。

もっとも、同棲したわけでもないのに、しよっちゅう一緒に居ることはないのだが、そ

「どこか良いバーなんか御存知ないかしら。このままひとりではやっていけないし、働こうと思うんです」
あんなことがあって間もなく、葉子がこんなことを言い出した。
「ばかなことを言うんじゃないよ」
私は言下に止めた。

「でも……」

「きみ一人ぐらい、ぼくがなんとかする」

こう言ってしまったのが始まりで

れでもやはり有難い女と言わざるを得まい。

そうこうしている間には、もちろん縛った写真をとったりした。金を払ってやとった気を張るモデルというのではないから、思い切ったポーズもとらせた。思いつくかぎりのえげつないいたぶりを加えて、泣き叫ばすようなこともした。もちろん、門外不出のものばかりである。

始めは単なるプレイのつもりが、次第に女性の緊縛美、悦虐美をトコトンまで絞り出してやろうと思うようになったのは、ひとえに葉子の協力によるものと言ってよいだろう。もっとも、協力と言っても、彼女は私の意図などとは関係のない所で、肉のうずきに陶醉していただけなのだろうが……。

「女に溺れる」とは、よく言ったものだ。と最近つくづく思う。男は女を征服しようとするばするほど、女がとめどもなく吐き出す粘液質の手にからめ取られて、底なしの沼に溺れ込んでしまうのだ。官能に弱い女とかかわり合った男こそ、いい面の皮と言わねばならない。

こうして、私と葉子との関係は先に述べたような妙な事になっていったのだが、このあやふやな関係——それでいていつかは何ら

かの形の破局なり大団円なりを迎えずにはすまない関係に、案外アツサリと結着をつけてくれたのは、先々話に記したキキとミミのレズでもあった。

二

キキとミミはあれからも時々押しかけて来ては、私の精を絞り抜いて行くのだったが、葉子の姿を私の部屋でチラホラ見かけるようになってからは、プツリと現われなくなっていた。

(ヤキモチを焼いてるな)

ひそかに私は小うるさい女どもを追い払ったことに安心していった。ところが、である。

「こんちわ——」

「おじゃまします」

仕事がちやうど一段落したところで、葉子とシンネコでいたところへ、ふたりが騒々しくやって来た。

葉子は、まるで悪い所を見られた生娘のよう、あわてて立ちかけた。これまでも私のアトリエへ女が来ると、できるだけ隠れるようにして来た、その習性が顔を出したのである。

「あら、葉子さん、いいじゃありませんか」

「いっしょにお話ししようよ」

キキとミミが両側から挟むような恰好で葉子を長椅子に押しもどした。

「でも、お仕事なんじゃありません？」

もう羞ずかしげに顔もあげられないといった風情で、葉子は頬を染めている。

そんな内気なところが、私にはこの上なくこのましいのだった。そんな女が官能の嵐に巻き込まれて、我にもなく崩れてゆく所を見るのほど、心をくすぐる情景はないのだ。

しかし今の場合は、葉子の困惑を黙って見過ごしておられるような気分ではなかった。ふたりきりのしみじみとした気分をブチこわされたのも腹が立った。

「突然、なにか用なのかい」

「ううん、ただちょっと……ネ、ミミ」

「ええ、長い間お顔見なかったから……」

ミミが鳥肌立つような流し眼をくれた。

私はチラと葉子の方を見た。眼を伏せて、

あい変らずモジモジしている、こうやって葉子、キキ、ミミ、と三人の女が一堂に会したのを見るのはこれが始めてだが、並んで見ると、葉子のしつとりと落ちていた容姿は、他のふたりの間で、ことに際立って見える。

今日の葉子は、長い髪をアップにセットし

て珍しく和服姿であった。この姿を、私の部屋に迎え入れた時から、私は痛いほど葉子の口に出さない欲求を感じ取っていたのだが、いざこれからというとき、レズが騒々しく闖入してきたわけなのである。

「これという用がないんなら、帰ってくれないかな。これから出かける所だったんだ」

葉子のみずみずしい装いをタネにして、私は嘘を言った。

「あら、ガッカリだわ」キキが芝居がかりに肩を落とす。

「よろしいですわ。あたくしのことでしたら……」葉子が早くも身を引こうとする。

「しょうがないなあ。それじゃ、四人そろった所で、マージャンでもするか」

葉子がマージャンを知らない事を承知の上で言った。

「ほんとうにあたくし、いいんです。もうそろそろおいとましなければ……」

ふたりの女にはさまれているのがこわいとも言うように、葉子はまた腰を浮かしかかる。

「それじゃ悪いわ。ね、キキ、あたしたちお邪魔だったのよ」

「そうらしいわね。じゃあ、いさぎよく退却

しようか」

私は知らん顔をきめ込んでいた。

普通なら、フェミニストの私のことだからまあいいじゃないか、とかなんとか言ってる取り持つのだが、今日に限って、早くふたり切りになって、先刻からのシンネコを続けたかったのだ。

「これ置いてくわ」

と言ってキキがズダ袋から取り出したのは封を切ったばかりの、サントリーオールドだった。

「ふたりで飲みはじめただけど、つまらないから、先生も一緒にと思って持って来たんだよ」

「先生、ウイスキー党だったでしょ」

そう言われて、私もこれまでの冷たさが、ちよっと反省された。

「そりゃすまなかったな。きみたちも一杯やって行けよ」

「フフ、先生ってげんきだね。女の顔より酒の顔？」

「あら違うわよ。女にも、よりどりみどりがあるってことよ」

「あたくし、失礼させていただきますわ」まだグズついている葉子を、今度は私が引

き止める番だった。モテモテ男は妙な所で苦勞しなければならぬことになる。

「葉子さん、ゆっくりしてってね。あたしたちがサービスしますから」

ふたりは、ウイスキーのビンをかかえるとキッチンに出て行った。

「あきらめようよ。それに、そう急ぐこともないだろう」

ふたりきりになったスキに、私は小声で言っ、葉子の指を握った。葉子はうるんだような眼をあげて、小さくコックリした。彼女がそんな眼になったときは、体の別の場所も同じ状態になっていることをよく知っているだけに、私は無理やり引き裂かれた恋する男とでも言ったような切ない気分になった。

が、もちろんこれは身勝手な感想というべきで、もっともって葉子のうらみに同情すべきだったのだ。彼女は内気だから色にこそ出さないが、キキにミミというピチピチした女を同列に置いて、女である以上相当の嫉妬を感じていたに違いないのだから。

やがて、キキが四つのグラスを置いた盆をうやうやしく捧げ持ち、ミミがその後からクラッカーやチーズなどを盛り合わせた皿を持って現われた。

「乾杯しようよ」

キキがなみなみと注いだグラスを手にとった。私はうなずいて、ためらいがちな葉子とうながした。葉子のグラスは、気をきかして三分の一くらいしか注いでない。

「乾杯！」

「乾杯！」

ひと息にほしたが、オールドにしては妙な舌ざわりであった。

（こいつら、ビンだけ本物で、中味は安物をつめて来たのかも知れんぞ）

ビンの封が切ってあったことを思い出し、そんなことがチラと頭をかすめた。

が、次のグラスを口に含んで、別にすてたものでもないな、と思い直した。気のせいだったのだろう。

葉子は三分の一の酒さえ空けられずに、チビチビすすっている。

酒がまわるにつれて私の舌もまわり始め、ふたりを相手に、とりとめのない話がはずんだ。葉子ひとりは、おだやかな微笑を頬に浮かべているだけで話には加わろうとしない。

どれだけだったか——私は突然どうにも抵抗しようのない眠気におそわれて、ガクンと頭を折った。ハッと頭を上げたが、どうにも

まぶたが重くて、すぐに、うとうととなってしまう。

「どうなさいましたの？」

問いかける葉子の姿が宙によろめいた。

「妙だな……」

眠り薬——ということが、ふと頭の片隅にまたいたが、その時はもう、クラゲのように、テーブルに突っ伏してしまっていた。

三

二日酔いの朝のような眼ざめだった。頭が重い。舌がザラザラする。まぶたが糊づけになったようにこわばっている。

が、もやもやとした視界に映じたものに気づいたとたん、そんなものなど、どこかに消し飛んでしまった。

葉子が眼の前のベッドの上で、ふたりの女に組み伏せられていたのだ。乱れた裾からのぞいた赤いものが、私の眠気を吹き飛ばしてしまったのだ。

「あら、お眼ざめのようなね」

キキがニヤリと笑った。

「どう、御気分は？ フフフ……」

私が自分自身のみじめな姿に気づいたのはその時である。

なんと素っ裸に剥かれて、例の柱——女たちを写すために幾度となく利用した、あの柱——に立縛りに縛りつけられていたのだ。角ばった柱が、じかに背中当って、両手はそれを背負うように後ろにまわされている。御丁寧に、脚にも縄がかけられて、自由に動かせるのは首だけという有様。

「おいッ、どうしようというんだ！」

自由になるその首を、ひっくり返された亀の子よろしく突き出すようにして、私はどなった。

怒りより何より、自分がこんなブザマな恰好にされているという意識が、居ても立ってもおれない気持ちに駆り立てる。

「今日は、これまでのお返しを、タップリしてあげるわ。あたしたちに万事まかせて、気楽にしててね」

「な、なんだとお……」

「フフ、いつもあたしたちのことを、こんなふうにして可愛がってくれたじゃない」

キキが言えば、あのオトリしている筈のミミまでが無邪気な意地悪さで、

「いつも、先生にばかり立ちまわらせて、あたしたち身を任せたままですよ。たまには慰めてあげなきゃ」

こんな場になると、すぐトロンとしてしま
う眼を、いやにキラキラ輝かせている。

「冗談はよせよ。なあ、早く解いてくれ」

「ダメダメ、あまりギャアギャア言ったら、
猿轡をはめちゃうわよ」

これ以上自由を奪われてはたまらない。私
は口をつぐんだ。

ふたりは、今度はそこに押し倒した葉子に
向かって行った。どうやら私が眼をさます前
からの続きらしい。

帯は解けて、しごきがゆるんでいるのをふ
たりがかりで更に脱がせにかかったのだ。

「やめて。ね、おねがい、変なことなさらな
いで」

葉子の抵抗は齒がゆい程におっとりしてい
る。といっても、これが葉子として精一杯の
あらがいののだ。

私に脱がせてもらうために着て来た盛装が
薄桃色の長襦袢や肌着もろとも、引きはがさ
れた。

「ま、きれい……」

剥き出しになった、まるい肩から背すじへ
かけての、人妻らしいあぶらの乗った肌の美
しさに、キキが思わず嘆声をあげる。

「キキ、みとれてないでッ」

ミミが肩脱ぎになった着物を、腕から引
たくるように剥ぎ取った。

「あっ、ゆるして……」

背をまるくして突っ伏す葉子。眼もあやな
深紅の腰のものが、はち切れそうな腰の線
を見せて突き出された恰好になる。

私は我を忘れて、その妖しくも美しい情景
に眼を奪われていた。

私はこれまで数え切れぬ程、女を裸にして
来た。葉子を裸にしたことだって、もう数え
切れぬくらいある。だのに、この新鮮さはど
うだろう。まるではじめて眼にするような興
奮が全身をしびれさせるのだ。

自分でするのと、他人がするのを見ると
では、これほど感覚に与える刺激が違うもの
だとは、始めて知ることであった。

が、そんな哲学的なことをゆっくり考えて
いる余裕はなかった。

「あらあら、キキ、ごらんなさいよ。先生っ
たら……」

ふとふり返って私の方を見たミミが、ゲラ
ゲラ笑い出したのだ。私は羞恥に血が逆流し
た。が、これだけはいくら力んでみたところ
でどうなるものでもない。

「好きな女が裸にされるのを見ただけでこ
う

なんじゃ、先が思いやられるわね。エッチ」
ニヤニヤ笑いながら見ていたキキが、指で
弾いた。

「お、おいッ、よセッ」

苦痛に全身を刺し貫かれたようで、私は悲
鳴をあげてしまった。

「なんだ、えらそうな顔してて、てんでダ
ラしない」

今度は柔らかい所をつねられて、気が遠く
なる。

「チョン切ってやろうかしら」

キキの眼尻は吊り上がっている。

私は心底からふるえあがった。縛られてい
ることの頼りなさ、骨身にしてみた。ヘシ折
られようと、握りつぶされようと、はたまた
ナイフを腹に突き立てられようと、どうし
うもないのだ。

「キキ、その楽しみは後まわしの約束だっ
たでしょ。まず女の方から料理してかかりま
しょうよ」

ミミの口ぶりからすれば、どうやら私たち
は、まんまと罠にかかったらしい。

「おい、どうするつもりなんだ」

私は不安のあまり、怒鳴ってしまった。

「やかましいわね。殺しやしないから、安心

「して見てなさい」

葉子は、羞ずかしさにまるくなったからだを引き起こされて、後ろ手に縄がけされ始めた。

「あんたも、先生に縄の味を教え込まれたんだろ」

「ちがいます……」

真っ赤になった顔を左右にふりたてながら葉子はあらがう。

「フン、お上品ぶるなってこと。あの先生があんたみたいな綺麗でポチャポチャした年増を、黙って見ている筈がないよ」

「あ、いやッ」

たわわな胸のふくらみを、力まかせにねじられて、葉子は悲鳴をあげる。情容赦もなくかけまわされたいましめは、ただでさえこぼれんばかりの乳房を、いやが上にもくびり上げているのだ。

「さあ、できあがり」

キキは葉子の張り切った尻をピシヤリと平手打ちした。

「おや、この女、パンティをはいてないようね」

手ざわりからキキはさとしたらしい。葉子のいじらしい用意が、ここでも仇になった。

「畜生、許せないぞ」

キキは嫉妬にいきり立って、葉子を突き飛ばした。

「あッ……」

ひるがえる裾をかばういとまもなく、それは逆しまに引きめくられ、すかさず躍りかかったミミの手で引きほどかれてしまった。

「いや、いやですッ……」

「なにがいやなもんか。どうせ先生にこんなことをされて、キヤアキヤアよろこぶつもりでいたんじゃないか」

キキは、葉子の背中に逆さ馬乗りになたがって、眼の前に妖しくうごめく白い双丘に打撃をくれている。白足袋をはいた葉子の足がバタバタやっている。

その間に、ミミが赤い布を手にして私の方へ寄って来た。

「腰巻をさしてあげようか」

とろけそうな眼で見上げる。

「よせよ」

私は観念の眼をつむった。

ふわりと柔らかな絹の肌ざわりが腰のあたりにまつわりつき、私は思わず身ぶるいした。そんな柔らかな布でさえ、かすれて痛いほどだった。

「ホホ、こっけいだこと……でもこれじゃあかえって眼に立つわねえ。先生、なんとかならない？」

「おい、やめんかッ」

身悶えしながら私は、うわのそらで口ばしっていた。

縛られた上に女装までさせられたので、私の平常な感覚が狂い出しそうだ。

「ミミ、そんな邪魔つけなものは、取っちゃいな。いまこの女に挨拶をさせてやるんだから」

キキは、縄尻を取って、葉子を引き起こしていた。葉子の綺麗にセットされた髪は、あとかたもなく乱れて左肩のあたりに崩れかかっている。そのつややかな黒と、肉づきの白い統のような肩の白さの対照が、ふるいつきたいほど、なまめいて見えた。

引きずられるようにして、葉子は私の足元にしゃがみ込んだ。

ガックリと折った細いうなじと、背中にたかだかとくくし上げられた手が、私の眼の下にある。可憐な十本の指がいましめの中に羞ずかしげに縮かまっている。

私は、いとしさに胸がつまった。

「葉子……」

「先生……」

葉子はすすり泣くような声で言うと、うなだれた頭を、私の脚にこすりつけるように寄せた。

「フン。ようこ……せんせい……だってよ。とんだ愁嘆場だよ」

キキが声色をまねて、囁みついて来た。

ふたりきりの時は、私のことを葉子は「あなた」と呼ぶようになっていたが、今はさすがに、はばかりられたのだろう。が、この場合「先生」と呼ばれることが、かえってなにか禁じられた恋に身を灼くようで、私の胸にジーンと、ひびいたのだった。

「きみたち、もういいかげんにやめてくれな

いか。十分、気を晴らしたろう」

「ナニナニ、これからが本番。さあ、ようこそ、愛する先生に、ちょっと浮気をするけれど、ゆるしてください、と許可をもらうんだよ」

「そ、そんな……」

いやいやと首を振るのを、グイと髪を掴んで仰向けにした。

「あくまでいやだと言うんなら、痛い目にあうよ」

「ゆるしてッ……あ、いたいッ」

「さ、言いな」

髪を掴んだまま、キキは葉子の顔を私の脚にこすりつけるようにした。

「乱暴はよせ」

「乱暴じゃありませんよ。そら、こうしてやる」

「あッ」

私と葉子は同時に悲鳴をあげた。あまりのことに、一時にあぶら汗が噴き出した。

こともあろうに、私のからだを利用して、葉子の燃え立つような頬を、ピシヤリと張ったのである。

「どう、こんな鞭でなら、どれだけひっぱたかれても痛くないだろう？」

「やめろ、やめてくれ」

私は体をガタガタゆさぶって絶叫した。

「先生ッ……」

せっぱつまったような声を葉子が発した。

と同時に、私のからだに、なま温かいものが走った。

「葉子、だめだよ、だめだったら……」

涙か唾液か——肌を焼かんばかりの熱さが私の下肢を伝わって落ちるのを感じた。

「わあ、すごい……」

ミミが、とんきような声をあげた。

キキの方は、自分で強制しておきながら、怒ったような眼つきで、うっとり眼を閉じた葉子の、ほてった頬のあたりを喰い入るように凝視している。

えたいの知れない妖気が、葉子の肌から立ち昇り、それが爪先から私のからだを押し包んで行くようだった。

私は耐え切れずに、呻き声をあげた。

四

これまで夢にも思ったことのない経験であった。行為そのものの経験は、皆無というわけではないのだが、今のように完全に受身の立場で経験したことはなかったのである。

私に限らず、男性が完全に受身の立場に立たされる機会というのは稀であろうと思う。従って、その立場に立たされた際の感覚の動きが、能動の立場に立った際のそれとは甚だしく違うものだ、ということを知らない。

私が経験させられたのは、その完全に受身に立たされた際の感覚の陶酔なのであった。

完全な陶酔に没入するのに意志の存在が障害物になるとすれば、能動の立場にある限り完全な陶酔への道はふさがれていると言わねばならない。あなたまかせのあり方こそが陶

酔への最短距離がある筈である。

ここで私は、女性がほとんど常に受身であるという事実を考えを及ぼさざるをえない。女たちは受身の立場を常に持することによって、男性のうかがい知ることのできない快楽の深淵に、やすやすとただよっているのではあるまいか？ 女が快楽に弱いということ、なにかこういったことと関係があるのであるまいか？

こんな深刻な哲学を、もちろんその時考えふけていたわけではない。それどころか葉子がようやく離されたときには、私はほとんど氣息えんえんの状態であったのだ。

からだのすみずみにまで快いしびれが侵透して、齒ぐきがゾクゾクうずき出すような気持ちにおかされていた。

「どう先生、まんざらでもなかったでしょ」
キキにのぞき込まれて、私はようやく正気を取りもどした。

腹立たしいことながら、そんなふうになされて、私はまるで処女のように穴があればもぐり込みたい程の羞恥にかられたものである。
「エッチの王様みたいな先生でも、はずかしらしいわね」

「そんなふうに着せられているところ、とて

も可愛いわ」

ミミまでが、からかいだす。

「なんとでも言え。さあ、縄を解け、もう腹いっぱい楽しんだろう」

「これからが本番じゃないの。ねえ、ミミ」

「そうよ。これからあたしたちが楽しむ番」

「なにを、まだやろうってんだ」

「葉子さんだってこうやって身をもんでらっしゃるわ。このままじゃあ、体に悪いと思わない？」

葉子は私の足元に背中をまるくして突っ伏したまま、顔もあげられないでいる。柔らかな肉づきが、全身桜色の暈に包まれているようだ。

「さ、いきましょ。うんと楽しませてあげるわよ」

毒を含んだ丁寧さで言うと、キキは葉子の縄尻を取った。引き起こされ、押しやられながら、葉子は愛執と羞恥のこもった瞳をチラと私の方に向けた。私も無量の思いをこめて瞳を返した。その時の切なさ——まるでニキビ面の高校生に還ったようなダラシなさであった。

ベッドに乗せあげると、ふたりがかりで葉子のいましめをすっかり取りはらい、今度は

足を私の方に向けて、葉子を仰向けに押し倒した。

「なにをなさるの？……いや、いや……」

小さく抵抗しながら、哀しげな声をあげる葉子。おびえた眼が、両方からつかみかかるキキとミミに、へりくだった訴えを投げかけている。

「いいから、いいから。おとなしくおねんねしな」

「さ、お手々をズーッと伸ばして」

「あ、縛らないで……もう、いやです」

「なにいつてるの、カマトトぶっても通らないよ」

年上の葉子は、テもなくキキにおどかされっ放しである。

いったんさわぎ始めたマゾの血に制せられて、葉子はやすやすと大の字なりにベッドに仰臥させられたうえ、手足をベッドの四隅にしっかりと固定されてしまった。

「綺麗だわア……あたしまでカーとなっちゃう」

為しおえた仕事を立ち上がって眺め降ろしながら、ミミが言う。

「なにさ、まだ縄が絞り足りないって顔しているよ」

キキは吐き出すように言うと、足首を縛つてある紐を更に縮めて、両足がほとんどマトレスを逆にはさみ込むような形にした。

「ああッ、いや、いやッ……」

葉子は腿の付け根がピンと張る苦痛に、背をそり返らせて悶える。

「どう、これだけ引っぱりゃ満足だろ」

眼を固くとざし、半開きにした唇をわなわなふるわせている葉子の顔をのぞき込んで、

キキは小気味よげに鼻を鳴らした。

葉子は左右に開けさせられた腕の中へ、真っ赤になった顔をかくそうと、モジモジ身悶えを繰り返している。

「ここも、ここも。ホラ、こんな恥ずかしいことはないってかおしてさ。うわべはさも羞ずかしそうにしているけど、からだの方はズキズキしてるんだろ」

意地悪いキキの指に、つままれたり引っ張られたりして、葉子は悲鳴のあげ通しだ。

そんな葉子のあからさまな姿は、ミミでなくとも、魂が宙にふわつき出すほどの悩ましさであった。柱に縛られて、かなり離れた所で見ただけに、全体のかもし出すムードが桃色の霧のように、私の感覚を包むのだ。これもまた、自分がじかに手を下している時には

感じられなかったものであった。

「はじめようか」

さんざん葉子に悲鳴をあげさせておいて、キキは立ち上がった。ふたりはかねて申し合わせてあったらしく、スルスルと服を脱ぎ始めたのである。

五

キキもミミも、パンティひとつになった。

「この女のパンティを使うつもりだったんだけど、はいてなかったから、ミミ、あんたのを代りに使いな」

「いいわ」

「でも、素っ裸になって、気分出したりしちゃひどいからね」

ミミだけがなんのためらいもなくパンティを取ると、それを小さく丸めた。

「先生、お口を開けるのよ」

「バカ、よせ」

「あら、いつもあたしたちには、こんなことするじゃない。葉子さんのでなくって気にいらないかもしれないけど、あたしんだって、マンザラでもないわよ」

抵抗しようとすれば出来ないわけではなかったが、私は心の底からジワジワと私をむし

ばんで来るものに、思い切って身を任せる決心をした。

不潔感はなかったが、そんなものを口一杯に頬張らされる屈辱感は相当のものだった。

「こんなことになるんなら、もっとよごしておくんだっわ」

ミミも大分キキの色に染まって来たような口ぶりだ。

ほのかな体臭と香水のミックスしたものが口の中にあふれ、その上を更に手拭で固くふさがれた。息が苦しい。興奮していて息づかいが激しくなっているの、息苦しさは想像以上だ。

もはや自分の意志を伝達する、いかなる手段をも奪われてしまったのだという意識が、たとえようもない不安をかきたてる。

「あとは、おとなしく好きな女の奏でる音楽に耳をかたむけることね」

そう宣告してから、キキは葉子に寄りそうように横たわった。

「あんたも雑音に悩まされずに、うんと燃えたらいいよ。女のよさというものを、骨のズイまで味あわせてあげるからね」

「ああ……許して、おねがい……」

「その哀れな声がたまらないんだよ」

「先生の眼の前で……そ、そんな……葉子、死んでしまいます……」

「もちろん死なしてやるさ」

「あッ、そんなッ……やめてくださいッ」

「フフフ……いい匂いをしているよ」

「ヒーツ……」

身をうねらせるようにしてのけぞると、葉子はこれまでに聞いたこともないような昂ぶった呻き声をあげ始めた。

ベテランのテクニクは、いかなる反抗の気構えも奪ってしまうらしかった。呻き声かとぎれがちになったと思うと、もうすべてを任せて屈服した女の涕泣に変わってしまったのである。

「あんた、なかなか素質があるよ」

〔伝言板〕

○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申上げます故、今暫くお待ち下さるようお願いいたします。尚 フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛願います。○御送金は、現金書留、小為替、定額小為替、切手代用、振替にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留（封筒は郵便局で売っています）にて御送金下さい。○既

キキの声もうわずっている。ほっそりした姿態が蛇のようにからみついてうねった。

「ああ、せ、先生ッ……」

こらえにこらえていたものが噴出したような叫びである。

が、その先生もまた、猿轡にかろうじて声を発するのを押えられている状態にあった。ミミがしなやかな指で攻撃をかけてきていたからである。

私は殆ど官能だけの人間になっていた。眼と耳と、そして、あらわにされた末梢神経とに対する刺戟が、私を海綿のようにふやけたものにしていた。この海綿は水のかわりにあらゆる刺戟を、どんらんに吸い込む。

時に、激痛とほとんど区別できない感覚に刊の臨時増刊号〈花と蛇〉第一回分（前篇写真と絵画特集）第二回分（続篇小説絵画特集）第三回分（前篇続篇収録小説特集）のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありまして最近号に掲載してないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社へ願います。

背すじを貫かれる。すると、ミミが意地悪く手を引くのだ。宙ぶらりんに捨て去られた感覚が悲鳴をあげる。

が、それにも限度があった。

「せ、先生ッ……ゆるしてッ……」

魂切らんばかりのなまなましい声をはりあげて、葉子がマットレスをはさみ込んだ足の爪先をそり返らせると同時に

「あらあら」

キキとミミの勝利の哄笑も上の空に聞いて私も敗北の陶醉に投げこまれていたのだ。

嵐がようやく過ぎ去って顔をあげた時、葉子はまだ死んだように身動きもしなかった。心なしか真っ白な全身がヒクヒク痙攣を続けているかのようにさえ見えた。ガックリと右に向けて投げ出された顔に、乱れに乱れた髪がまつわりつき、汗に濡れた額から頬に張りついている。汗はそこばかりではなく、全身を沈んだ光でおおっていた。

「どうやら胸がスツとしたわ」

キキが額の汗をぬぐっている。

「あたしはスツとするどころじゃない」

ミミが口をとがらせる。

「おや、約束を忘れたようね。この尻軽娘」
「だって……」

「それほど言うんなら、重ねて四つにしてやろうか」

キキも、そのままではすまなかったのだらう。たちまちパンティを脱ぎすてた。

それから後のことは書くことをはばかる。いや、もうゲンナリして書く気さえ起こらない。ひとことで言えば、葉子も先ほどのまでの姿のまま、一役買わされたのであった。

六

キキとミミは葉子の手のいましめだけを解いて立ち去った。立ち去り際に、ふたりとも縛られたままの私にからみついてキスしてくれた。

「これで忘れてやるよ」

「先生、お元気でね」

これがふたりの挨拶であった。口のパンティはミミの腰にもどっていた。ミミは別にいやがりもせずに、はいたのだ。

私は何も言わなかった。彼女たちに対する恨みなど毛頭なかった、が別れがたい気持ちがあるわけでもなかった。

彼女らが立ち去って大分たってから、葉子はノロノロ起き上がって、足首のいましめを解いた。解き終ると、はじめて私の方に眼を

あげた。

私も、じっと見返した。

ふたりとも、みじめに汚れ切っていた。

「先生……」

悲鳴のような声をあげると、葉子はパッと飛びかかって来た。首に両手をまわして抱きしめると、ワッと泣き出した。

流した汗が肌と肌の間でネトついた。私の唇は何度か吸い取られ、顔中がツばきにまみれた。

「おちつきなさい」

あえぎながら私は幾度か制しようとした。が、葉子は自分のからだを、トコトンまで汚しさいなみつくしたいらしかった。

いましめを解かせた私は、しつようにまつわりつく葉子に、ほとんど憎悪さえ感じながら、再び縛り上げた。愛撫のための縛りではなく、まじないとしての緊縛である。葉子のからだに巣くった何かを追いつために縛ったのである。

憑き物が落ちたのは、もう夜がしらじらと明けそめる頃であった。

ふたりは身なりを整えてテーブルに向かいあい、モーニングコーヒーをすすった。

ふたりともサッパリした顔であった。

「お別れですわね」

「そのほうがよさそうだな」

さすがに明け方は冷えこんで、コーヒーの温かさがなつかしかった。

トコトンまでの姿を見せ合ったのだから、かえって結びつきが強くなった筈なのだが、ここは一応別れてみるべきだという気が強く働いていた。

それは葉子も同じらしかった。

葉子の今後の生活について懸念がないわけでもなかったが、口には出さなかった。頼りたければ、またやってくればいいのだ。

その時、葉子は

「先生、またモデルに使っていただけないでしょうか」

と言うだろうか？

それとも私の気がつかないうちにやって来て、流しに山積みになっている食器類を洗い始めるだろうか？

私は、なにか楽しい未来を夢見るような気持で、コーヒーの湯気のアたっている、葉子のつつまじやかな顔に見入っていた。

七月二日。東京で世界的な奉仕機関として有名な「ライオンズ・クラブ世界大会」が、世界一〇〇カ国、一二、〇〇〇名の会員を集めて開かれ、国際色ゆたかであった。これより一日前、東京へやって来たそれら外国人のすがたで、浅草の観音さまは、たいへんな賑わいであった。

近來やや不振とはいえ、アサクサの名は、むしろ海外に有名で、ふだんでもカメラ片手の参拝観光客をみかけるのは、めずらしくないが、この日は、いちだんと外人の客が多かった。



読者論壇

奇ク誌のバックナンバーを

買った外人夫妻

——再び「本誌自粛の徹底」にふれて——

新宿町人

アサクサといえば、この近くにはわれらのアイドル芳野眉美も、たしかサイケバーを開き、ときどき、ここまでやってくるらしい。

久しく会わないが元気かな、相変らずテキトウに呑んでるかな、と、ふと、この賑やかな友のことを思いだしたりする。

いや、このさい芳野眉美はどうでもよいので、本題に入ろう。

この日、浅草では「市の市」が、客足を呼んでいた。市の市とは植木、セトモノ、ハキモノなどがズラリ露店を張る、町の風物詩。ひやかしあるきもたのしい。

そのなかに、ここでははじめての参加といわれる古本市があった。めずらしいせいかわの賑わいで、晴天六日、かなりのホリダシもあったという。

その古本市の一角に、五十冊ほどの、わが奇ク誌が並べられていたのである。

いずれも、グラビア華やかなりしころのポリュームのあるぶんで、したがって売価一冊千五百円前後。でも、神田あたりよりは安いとみえた。

なつかしさに口絵をひろげていると、六尺ゆたかな外人サンが、おくさんらしい婦人を

つれて入ってきた。私のひろげるグラビアが目にとまったのだろうか。

「オー」

と、口ぶえならして、屋台に並べられた奇ク誌に手をのばしたのだ。

おくさんは、理解あるはなしのわかりそうな、二人ともたしかに五十才は過ぎていたろうか。

かなり長時間、あれこれ品定めしたすえに彼は、奇ク誌を五冊買い込んだ。

表紙は、たしか見おぼえある昭和二十八九年のもので、かなりくたびれていた。

一冊千四百円均一のそれを五冊。一万円サツでツリをとると、二人は、たのしそうに店をはなれた。

この光景を終始ワキで見ていた私は、ある感動すらおぼえたのである。

ゆきずりの観光客の二人だもの、記事はおそらく読めないであろう。

あるいは、率直にいった奇ク誌のタイトルだって、はじめてみるのかもしれない。

絵は国際語だといわれるが、この外人はグラビアで奇ク誌の内容を知り、熱心に並べられた一冊一冊をよって気に入ったのを買ったのである。

おそらく、恰好のスーベニアとして彼らはスーツケースに買った奇ク誌を珍藏して本国に持ち帰るにちがいない。

金七千円也の外貨獲得は、かならずしも多いとはいえないが、しかし確実に二十ドル弱の外貨を奇ク誌は、かせいだにちがいない。さて、識者はこれをどうみるか。

「貧弱な日本ムスメの、しかも、嫌悪をもよおさせる愚劣な口絵の古本なんか売って国辱だ」

と息ましく向きもあるであろう。

しかし、勘定だかいすべてにうるさい外人が喜々として、表紙が手アカにくたびれ本文も茶いろに変わった本誌を貴重なドルを投じて求めていったその心理をいまずこし掘りさげて考えてみる必要はないだろうか。

愚劣と息ましく前に、もういちど奇クの口絵に目をやるくらいの度量をもってほしい。

たしかに、若い女性を縛ったり、ムチを肌にあてる行為は、けっして明るみにだすべきものではない―それは、人間の正しい性のいとなみでさえ、かくされなければならぬのと同じ意味で―また、我々はそれを求めようとも、すすめようともするものではない。

しかし、モノは見よう。一枚のカミにもウラオモテがあるのと同じである。

よい友人にめぐまれた筆者は、ときとしてすばらしいシーンにぶつかることがある。

M・T氏は、若手のプラスチックモデル玩具の問屋として、業界には有名な存在であるが、夜、仕事を終えてプライベート・ルームに入ると、ガラリと生活を変える。

昼のM・T氏は商売一途。ガムシヤラな稼ぎっぷりでは恐れられるが、深夜この室へ入ると一学究となる。

風俗研究家というのだろうか、広い自室のカベいちめんに特別注文したスチール製の書類ケースが、天井から床まで間口三間。中には文献がギッシリ。

ところが、さすがのM・T氏だが、三十年以前の本誌は不揃いである。余談だがバックナンバーを完全に揃えている筆者に、「ゼヒゆずれ」

と一冊古本市価の二倍をつけるのだが筆者も貧乏はしてもこれだけは売る気はない。それはどうでもよいとして、敬服するのはM・T氏の行き届いた文献管理態度だ。

子どもが三人。男女、大・高生とりまぜ、

住み込み店員五人。二十才—二十七才。

計八人の好奇心に燃える若い人びとが、とくにパパの室、社長の室へ集まってステレオをきいたり、唄をうたったりするが、誰ひとり問題のロッカーへ指一本かけないどころか、いわゆる歯牙にもかけない態度なのだ。

「パパのタブウ」

若い人たちは文献のつまったロッカーを冷ややかに、そう呼ぶ。

健全な若ものたち—筆者は訪れるたびにそういうサワヤカナ印象をうけるのだ。

「はじめに、ガンと一発くらわせたなら、センセイたち、それはそういうものと思いきんだのかユビ一本だしよらん。なにかよっぽど特殊なもの信じてるらしい」

M・T氏は豪快にわらいながらいう。ようするに、風俗文献は我々には無縁のモノという考えが徹底してるのだ。だからこの室では「成人向」のマークは、いっさい必要がないのである。

問題は、いわゆるエログロを興味本位に扱うか、細心の注意をもって取りあつかうかにかかってくるのではなからうか。

それにつけて近頃思うことだが、一般誌、

ことに、有名な週刊誌がきそって、かつての旧奇誌の口絵さながらのアクションをとり入れた有名作家の小説をのせはじめたのは興味ふかい。

作家自身、そうしたものに興味も知識もなく、編集者にシリをたたかれるままに書いたと思われるような作品もないでもない。

内面の心理描写。ナゼ叩かなければならなかったか。ナゼ呑むことを強要されねばならないのか。ナゼ富豪が美女のはき古したクツを、万金を投じて買わねばならないのか。そのへんの必然性に稀薄なものを感じるのは、筆者のみであろうか。

文章の巧拙、構成のたしかさ、興味の惹きかた、ストーリーの展開、そういったテクニクでは一流大家には、とても大刀うちではないが、内面の心理描写においては、すくなくとも本誌に投書の形で寄せられる読者からの手記、告白のほうで、ずっと厚みもあり迫真力も濃厚だ。

数行の「読者通信」からでも、ほんとうの人間のウメキを汲みとることはできる。

筆者は先日、あるミステリー雑誌の編集者と会談するさい、思うところあって奇ク誌の

バックナンバーを三冊持参、見せてやった。娯楽雑誌の編集ではベテランのこのひと、まだ奇ク誌を手にとってないという。

パラパラとひろい読み二〇分。

S氏は、ためいきまじりにいった。

「ときどき、ウワサには聞いているが、これはイケる。いまの時勢にピタリだ。ただ温泉マークや、ハジキや、クルマや、ヨットや、ベッドシーンがないのは物足らねえが」

たしかに、奇ク誌のムードは異質のものであり、好色夫人と手をたずさえてホテルへいった、なんて不マジメな話はない。

あったって、読者はうけつけないだろう。

筆者も読みはじめ、保存して十七年になるが、そういった意味における不倫行為の場面は、いまだかつて一行たりとも読んだことがない。

そこに、奇ク誌の高さがあるのだ、と思うのである。

度々くり返すが、奇ク誌は断じて悪書ではない。

むしろ一般週刊誌のあるものにこそ、成人向のマークを贈呈してしかるべきものが、多々ありとみるのである。

東京の杉並区にTという古書屋がある。

古書屋といっても四階建てのビルで住宅兼店舗、別棟が倉庫。主人公は仕入れのため、月の半分は全国をかけめぐって旧家の土蔵から丸ごとソックリ買付けるといふ超ビッグストアなのだ。

主人は二代目で、まだ三十五、六才。おくさんは、古本屋のカミさんなどにしておくのはもったいないような小柄な美人で、年中和服を着こなし、店を訪れる図書館、学校関係の客との応接に追われている。

筆者は、十年來の交友なのだが夫婦仲がきわめてよく、店も繁昌、子どものないのはやや物たりないようだが、じつに幸福なおところである。

他人禁制の、お二人の居間へ出入りご免をゆるされている三人の客の一人の筆者だが、それだけにお二人の特別の仲むつまじさにはしばしば圧倒される。どれほど仲がよいか、エピソードは、二、三にとどまらないが、たとえば、おくさんがトイレに立つとき、「ドレ、ボクも」

あわてて、ご主人のTさんも、そのあとを追うのを見かけたのは五回や六回ではきくまい。

ハシや茶わん、歯ブラシまで共通というのが、ほんとうの夫婦だ、とひと口にいうが、トイレまで共通というのは、めずらしい、と気になってしかたがなかったが、あるときビールに酔ったまぎれのTさんの告白からナゾがとけた。

Tさんは、おくさんのあと始末をしてやるのが趣味で、個室でのご用はぜんぶ、おくさんの代りをやってやる。

「ボクだって人間ですから、出張中に浮気のまねごとぐらいしたくなります。でも、そんなとき、東京であと始末してやるときの楽しさを思いだすと、浮気の虫がおさまるんですよ」

Tさんは、テレながら言った。

テレることないよ、Tさん。夫婦というものはそれでいいのだよ。あと始末しようが、口にうけようが、自身がトイレトペーパーの代りしようがいっさい自由。他人がオセツカイやくことはないのだ。

おそらく、Tさん夫婦のような楽しみをひそかにやり、自分たちだけがそこに人生の意義を見出す向きは少なくないだろう。

あと始末を喜んでやってやる夫、つましく（あるいは、いやいやながら）その奉仕を

ゆるす妻。あるいはまたこの逆に、やさしく夫の身のまわりの世話をやくことを楽しとする妻もいるであろう。

それでいいのだ。

ただ、問題はこのようなひそやかな愉悅—第三者がみたら、とてつもなくふしだらな不倫、不道德の変態的行為を公然と第三者に公開するからいけないのだ。

そうではないだろうか。

皮肉なことに、こんなプレイまでやるためか、Tさん夫婦は至って仲むつまじいのである。

夫婦相和シ、と、むかしの人は後進に道を説いた。夫婦相和すためのさまざまの遊び。それをとがめる権利は誰にあるのか。誰にもありはしないのだ。ただ、アタマの固まらぬ青少年層にむやみに示すような行為は、これは厳につつまねばならないのだが。

そして七月五日（土）午後八時。いまは、解放広場とか、ささやかれる新宿駅西口地下広場には、こんやも何千人の若者の集まり。

リーダーはギターをかかえ、女学生はベトナム反戦歌を高唱し、そして、若い学生はジリジリと交番へエネルギーギッシュな移動を開始する。まさに一触即発。翌朝の朝刊は、その

ときその交番には、警察署長みずから視察に来ていたが、民衆の声なき声に圧倒されたのかどうかはわからないが、地上の交番へ座をうつしたと報じている。

誰かが小石一コ投げて、ガラス一枚割ったら、おそらく群衆は立ちあがるだろう緊迫した日本人どうしのニラミ合いが、ここでは毎土曜日まで展開される。

まさに殺伐の世代。

しかし、と筆者は考える。

政府打倒を叫び、時の総理大臣を公然と警官の面前でヤユする「フテイのヤカラ」と、悪書かなにかしらないが、奇ク誌を心のささえとし、生甲斐を感じ、おとなしくくらす同年令の人の、いったいどちらがよいのだろうか、と。論点の飛躍は筆者自身よくわきまえているつもりだが、それはそれとしておいておなじ世代に生きる若者の青春のはけ場は、どちらにあるのかと考えるまざるをえないのだ。

ゲバ棒よりは、奇ク誌という表現はいけないただろうか。

毎号の奇ク誌の巻頭第一ページを飾る「本誌自粛の徹底」という、まことにケツコーな珍声明を、本来の目的を達したとの理由のも

とに、編集者みずからが誌面から引退させる日がくるまで、どうやら筆者の疑義は解けそうもないのだが。

(追記) 7月12日のサンケイ夕刊は左のように報じた。論旨明快、賛成。

本文を紹介して本稿のむすびとしたい。

○

「デンマークは成人向けの書籍、写真、映画など、あらゆる表現のワイセツ罪を、七月一日から全廃した。どんなに「ヒドイ」ものでも売買、鑑賞自由になったわけで、近代史上はじめてのことでもあり世界の注目をあびている。」

といって別に突然廃止にふみきったわけではなく、過去数カ月は在来法律の適用をさしひかえてようすをみるテスト期間をおいた上でこんどの正式な措置となったもの。一足さきにワイセツ文書にかんするベルヌ協定からは脱退している。

そんなことをして大丈夫なのかと、よそごとながら気のもめる話だが、結果は案外らしい。公衆道徳は高まり、性犯罪は減少し、ワイセツ表現にたいする興味が目立って少なくなるという調子でよいことづくめ。ひとり

泣いているのはエロ本、エロ映画の業者たちで、その方面のある出版社は五十万部の在庫をかかえて嘆息し、ブルー・フィルムの製造元では、昨年まで一万五千円していたものを三分の一に値下げしたがそれでも売れ行きはさっぱりだという。

こんどの法律改正でも十六歳未満のものにこの種の書物、写真などを売れば六カ月以下の禁固になるという法律は残っているが、こどもはそんなものに興味を示しません、こどもに見せてはいけななどというのは要するにおとなのテレかくしです、とコペンハーゲンのある校長さんは割り切っている。

法務大臣は「自由に手にはいるようになれば、好奇心は消えてしまうもの。見たがるのは禁じられているからだ」と述べているが、過去二年間この問題を研究してきた専門家の四人委員会もまったく同意見だという。

盗んだ酒はうまいというが、禁じられているから見たいし、見ればおもしろいので、公然と見られるとなると案外退屈だというわけだ。――退屈でもよいからデンマークのようになってほしいという声がかきこえそうだ。

肉 体 梱 包

イーラと五人の「肉体梱包」の運び屋達は組織の予想した通り、難なく羽田の税関をパスしてしまった。税関吏にしても女子大生の山岳隊だということで素姓もハッキリしているし、多少ギコチない動作があったとしても思いがけない災難で皮膚病にかかったという話を真に受けて、かえって同情心が動いたから、むしろお座なりの検査でパスさせてくれたのである。しかし事實は羽田始まって以来といってもよい程巨額の密輸品が、この一行

によって国内へ持ち込まれたことになった。仮りに、この宝石が一時にマーケットにあらわれたら、相場に大恐慌を起こさせるに十分なものだった。しかし、犯罪シンジゲートはそんなヘマはしない。闇から闇へと、知らない間に売られて行く仕組みである。それに、こうした宝石の九十パーセントは、最終的に買われたところで、陽の目を見ずに死蔵される運命にあったから、一層、足のつきにくい利点があるとして、組織の資金調達用として専ら珍重されていたのである。

しかも、それら出迎えの人達すら、挨拶もそこそこにロビーで別れさせられてしまう。すぐまとめなければならぬレポートがあるので、一両日、東京でカンヅメになってから帰ると説明されたのである。組織が差し廻したマイクロバスに、六人がせき立てられるように乗ってしまったからと言った方が適切だったかも知れない。すべてが、デリーで繰返し繰返し教え込まれた綿密な計画通りに行ったことになる。

マイクロバスは慎重に尾行のないのを確かめながら、高速道路を走って目黒に降りた。目黒の、とある横丁を左折すると、相当な



第十二回

屋敷町になった。有名な芸能人や政治家の表札が、チラホラする界限である。その中でも一きわ大きな、鬱蒼とした植込みにかくれて母屋の見透せないような一画があった。バスは吸い込まれるようにその門の中に消えた。

広い地下ガレージがあって、倉庫に接続していた。早くもイーラは別のところへ連れ去られたらしく、五人だけがガランとした倉庫に導かれる。防音ゴムを巻いた扉が内側から嚴重にロックされた。およそ二十畳も敷けそうなスペースだが、何も置かれていない。八方が打ちっぱなしのコンクリートで、天井に四力所ばかり裸電球がぶら下っていた。その黄色い光に照らされて、覆面をした数名の男達が、うっそりと佇んでいる。デリーへ戻ったかと錯覚される位似通った光景だった。それだけに、五人には恐ろしい記憶が蘇ってきて、一カ所に固まったまま相手の出方を宣告を待つ被告のような顔付きで待ち受けるのであった。

「着てるものを脱いで裸にナンナ」

ややあって男の一人が、乾いた声で命令した。丁度、その声を待っていたように、女達は口口に哀願し始めた。何も裸にならなくっ

たって、チャンと預ってきたものは身体の中にあるのだから、自分でとり出して渡させて欲しい。

男はフンと、せせら笑って、

「おまえ達のものじゃナイんだ。おまえたちに触らせはしない。さあ、言うことをきかないと腕ずくでもヒン剥いてしまうぞ」

ジリッと男達が間合いをつめた。この上、抵抗したところで、もっと辛い目に合うのは判りきっている。五人は蒼白な顔を見合わせると、遂に心を屈したのか、ノロノロと洋服に手をかけるのだった。

数分も経過しないうちに五人は、例の貞操帯を除いて一糸も纏わぬ裸身を、見ず知らずの男達の視線に曝していた。

「おとなしく手を後へ回すんだ」

この上、又も縛られるのはたまらないと思っただけであろうか、女の一人がベソをかきながらいった。

「なんでも、おっしゃる通りにしますから、縛らないで下さい」

「だめだね」

と男の返事は、ニベもなかった。

「第一、これから始まることは、両手が自由だったら、おまえたち自身がミジメでやりき

前号までⅡ中共側私掠船に部下を鑿殺された青帮の指導者、蔡樹理は復讐を決意して彼等の巢窟を襲った。勝利の後、一味を絞首して一切を破壊し、囚人たちを解放した。その中に、拷問を受けていた美少女、林美玉がいた。首領の呂は、ミサイルで到着した星、エミー司令の乗り合わせていたジャンクに連行され、さんざんなぶりものにされた挙句、周少姐の手で帆船に吊るされた。一方、莫大な宝石を体内に入れた女子山岳隊員五人とそれと同じ変装をしたイーラは東京に向けて出発した。デリーには全裸の人質が獄中に泣いている。彼女等は、その友人を救うため、イーラの護送と、密輸を強制されたのであった。その頃、有明友之助は香港に近づきつつあった。

れなくなるぜ。これがホントの「お慈悲」というやつさ。フフフフフ」

オロオロしているうちに、男達は馴れた縄さばきで、片っ端から後手にくくって行く。今はもう観念するほかはない。自由を奪われた五人は、観念したように首をうなだれて立ちすくんでいた。

「一列に並びな」

ぐずぐずしていると、他の男達に背中を小

突かれるので、嫌でも応でも横一列に整列させられてしまふ。

男の手に金色の鍵束が握られていた。子分の一人が、かがみ込むように股のつけ根に眼を近づける。羞恥に思わず腿を固く合わせるのに、ピシヤリと後から尻をなぐる。他の一人が後で待ちかまえていたであろう。

「バカ、股をひらくんだ」

しゃがんでいた子分が、

「一〇八六番」

と、錠前の番号を読みあげた。

「ヨシ」

五つの錠前には、それぞれ五つの合鍵があった。パチッと小さな音がして貞操帯が外れて足元に落ちた。ポリ袋の端が覗いているのを、指でつまむ。

「アッ、痛ウ」

たまらなく嫌な気持である。尿意が起こってくるのを、あわててこらえねばならない。あらかじめ用意してあったバケツの水で、綺麗に清められた「密輸ソーセージ」は、中



味になっている宝石が放つ反射でキラキラ輝いて見えた。このようにして、五人の女性の苦痛と羞恥を代償に、高価な宝石包みは五本共、無事、組織の手に回収されたのである。

まだもう一箇所の隠し場所が残っていた。ここから如何にして取出すのかと思うと、いけにえ達は慄然とならざるを得ない。

男どもはもう、こんな愁歎場には馴れっこになってしまっているらしい。泣こうがわめこうがお構いなく、どんどん作業を進めてし

まう。

順番に、いやがる女を引き据えて胡坐を組ませる。両方の足首を太腿のつけ根に乗せて深く組み合わせると、自分では外せなくなってしまう。昔、遊女の拷問に使われたという「坐禪ころがし」である。足が折れそうに痛むので、五人は次から次へと悲鳴をあげた。次に手首を一時ほどこいて、上膊で深く交叉させると左手の親指を左足の親指に、右手足の親指を同じく、夫々紐でシッカリとククリ合わせた。これで手足が前後で交叉したまま、胴をはさんでダブル・クロス型に固定されてしまったことになる。仮に、何とか骨を折って足首を外そうとしても、手足の親指がつながっているの、それも不可能である。背中で腕が深く組み合わさっているの、自然、胸が張って乳房が突き出した恰好になった。突然、一人が「ギャッ」と獣のように絶叫した。片手で髪を掴み、片手で臀を深くひっかけ、男達が次々と女達の上体を前に倒しはじめたからである。正確に、五回、何とも云いようもないような叫び声が終ると、女達は両膝と顔の三点で、うつぶせの身を支え、豊かな双丘を頂上に振りたてたピラミッド型の姿勢を強制されたまま、動くも引くもなら

なくなってしまうた。まことに女として、これ程恥かしく不様な姿はあるまい。

どうしようもないところまで露呈しつくされた彼女たちに容赦なく浣腸が行なわれる。直腸にタギリ込んでくる冷たい液体の奔流が内臓を圧迫して、熱い吐息を吹き出させた。局所と自尊心と、つまり肉体も心もキリキリと痛んだ。

臀部が嵌まる位の大きさのホーローびきのパットが五枚用意してあった。思いきり石鹼液を呑み込んだ女体は坐禅ころがしの態位のまま再び髪を掴んで起きあがらされる。そして、あらかじめあてがっておいたパットの中に尻を落とし込んでしまう。パットの縁が腿の部分に喰い込んで、ひどく痛む。その痛みは時間の経過と共に次第に痺れて、苦痛の感覚すら薄れて行く性質のものだったけれどもそれと反比例して段々と嵩じてくる苦しみが徐々に耐えきれないものとなってゆく。コンクリートの床にジカに置かれたホーローの冷たい感触が腰のあたりをひえびえとさせて、便意に一層、拍車をかけるのだった。

最後の一人が浣腸を済ませ、パットを尻にあてがって上体を起こし終った時分になると最初の女はもう我慢しきれなくなっていた。

スーッと血が下がるような気がすると、門を押しやぶろうとする感覚が括約筋の抵抗を上廻りはじめる。僅かに押えていたのは羞かしという一念だけだった。

「どうした、ちっとも遠慮いらないぜ。何しろ、ダイアモンドを排泄するんだから、大したもんだ」

揶揄するような男の声も空ろな耳に入らないらしく、切なげにあえぐと、

「アッ、アッ、もう、もうダメ」

豊かな臀が、白いパットにつぶれたようになっていたあたりから、羞恥と屈辱がパット一ぱいにひろがった。次の瞬間には女の尻がそれに漬かったようになってしまった。はずかしさに、おいおいと泣き出すのに、

「ハッハッハ、何のことはない、イザリのネグソだなあ」

という意地の悪さである。

臨界点は五分と違わない筈だ。つぎつぎとあとの四人も自分の意思とは正反対の、いまわしい行為を発せざるを得ない。

あたりに特有の臭気が漂いはじめるが、男達は一様に意に介さない風である。

頃合いを見て、つぎつぎに腰を蹴って再び前へ倒される。

「ひい、ふう、みい、よう。おや、一個、足りないぞ。どうしたんだ」

ザラザラしたコンクリートの床に頬をおしつけられて、そんなカラカイ声を後に聞いていると、口惜しさがこみ上げてくる。思わずワツと泣き出す。涙が止めどなく流れて、床を濡らした。

「こっちは、どうだ。こいつは固まってないから調べやすいぞ。どうだい、チャンと五つ揃っていらあ」

二番目の女も、つられたように、おいおい泣き出した。あとの三人も、必死にこらえていたのが、どうにもこらえきれなくなったらしく、次々に悲しい声を立てはじめた。

「力を入れてイキむんだ。ありったけ出してしまえ。一コでも残っていると、もう一遍浣腸しなきゃなんなくなるぜ」

大声で罵る声におびえたのか、最初、足りないといわれた女のみじめな体が大きくうねった。と、奇術のように小さなプラスチック玉がコトリとパットの中に落ちた。泣き声が一層、甲高くなった。

二十畳ぐらいといっても密閉した地下倉庫である。音が洩れないように、換気装置もなかった。十数名の男女の呼吸で何となく息苦

しいところへ、いたぶられる五名の放つ臭気がミックスされて一種異様な雰囲気生まれだ。責める者も責められる者も、それに酔ったように、あさましい作業に熱中するのだった。

突然あたりが、あかるさを増した。携帯スポットが点灯されたからである。

ジョットと音がしてエルモが廻りはじめた。ハツとして顔をそむけるのを髪と顎を掴んで無理矢理にレンズの方へねじ曲げてしまう。全身から部分部分のアップまで、一人一人、レンズがなめるように追って行った。

「いいか、チョットでもわれわれの秘密を喋ったら、このフィルムが物をいうぞ。一生、嫁にも行かれなくなっちまうぜ」

何という悪賢さであろう。悪魔のような声をききながら、五人共ほとんど気を喪いそうに動転していた。

結局、一人だけ、どうしても五個、揃えることの出来なかった女がいた。

「どうしたんだ。盲腸にでもいれちゃったのかね。まあ時間はタップリあるんだ。あしたの朝になって、もう一ぺん浣腸してみて、それでも出なかったら、おまえの腹を断ち割ってでも探し出すぞ！」

と凄まれては、気絶しそうに恐怖におののくばかりである。

「ほかのもんも、こいつにつきあって坐禅をしてるんだ。スッカリ出揃ってしまいうまでは解いてやらない。おいおい、そんなしかめっ面をすることはしない。インドではバンド・パドマサナといって、ヨガの標準姿勢とされているんだ。ハッハッハ、まあ、せいぜい修行することだな」

嘲笑を残して男どもが立ち去ってしまうのを見て、一様に何とかしようと身をもむのだが、どうにもならない。臀が次第にコワばってきて皮膚がカブれたのかヒリヒリ痛んだ。無情に放置されたまま、次第に痺れて行く四肢の感覚から、ふっとヨガの恍惚境らしきものすら感じ始める者もあった。

ヘルマフロイデ

ホンコンの山手に林立する高層アパートの群は、はじめての人だったら、まるでニューヨークにでも来たかのような錯覚を感じるほど素晴らしい景観である。しかし近くから見ると二度、吃驚せざるを得ない。十数階もあるのにエレベーターもないのだ。やたら手造り

で仕切った羽目板には、ケバケバしい赤や緑の彩色が住む人のわびしさを表現して、一層みすばらしく見えた。

この一劃は、たしかに、陸続と密航してくる難民を收容するために政庁が窮余の一策として建てた高層建築なのである。従ってその内容も、玉石混淆というか、四川もいれば江蘇もいる。いわば、中国のあらゆる地方人の「ゴツタ煮」といえよう。貧しさは生活ばかりでなく、心までも貧しくさせていた。ホンコンでは英国旗の下で、中共系の人間と台湾系の人間が共存していた。そして、勢い、激しい謀略活動が暗躍している。そして、難民たちは常に恰好の情報源とされていた。敵か味方かわからない隣人にはウツカリしたことはいえない。人々は、たえず疑惑と猜疑の中で生活しなければならなかったのである。

青帮のジャンクが中共系の武装ジャンクに襲われたことも公然の秘密だった、蔡樹理が如何にしてそれに復讐を加えたかも、数日を経ないで彼等のニュースとなった。

さて、そこでの原因不明の行方不明事件とか、所謂、蒸発事件とかは、それ程珍しくはなかったのだが、とりわけ若い美女の消失は人々の話題にのぼったし又、その後の悲しい

運命についても比較的、長い間、人情話めいたストーリーが語られるのだった。

中共私掠ジャンク団の頭目呂親分を血祭りにあげた青帮のヒロイン、周月鏡のことは難民アパートの大衆にとって、まるでジャンヌ・ダルクのように尊敬されていた。しかし自分達の住んでいる一角にヒソソリと暮している貧乏な女性が周少姐その人だと知る人はなかった。勿論、美しいということは隠すべくもなかったが、そんなことがこの界隈では余計な災難に遭う原因ともなり得るという常識から、まるで壊れやすい名陶を見るような目で注目されてもいたのである。

したがってフィと彼女がいなくなると、ヤッパリ——といった会話が交されるのが常だったが、不思議なことに一週間、或いは時として一カ月近くになることがあっても、必ず又、ヒョッコリ帰って来る。つまり、この名陶は、なかなか壊されないのである。

勿論、名前は変えていたし、手廻りの荷物とて殆どなく、同郷の老人夫婦の占めた一角にベッドだけ持ち込んだだけの、きわめて簡単な世帯だったから、帰ろうが帰るまいが実質的には大して問題とならない。ただ、下宿

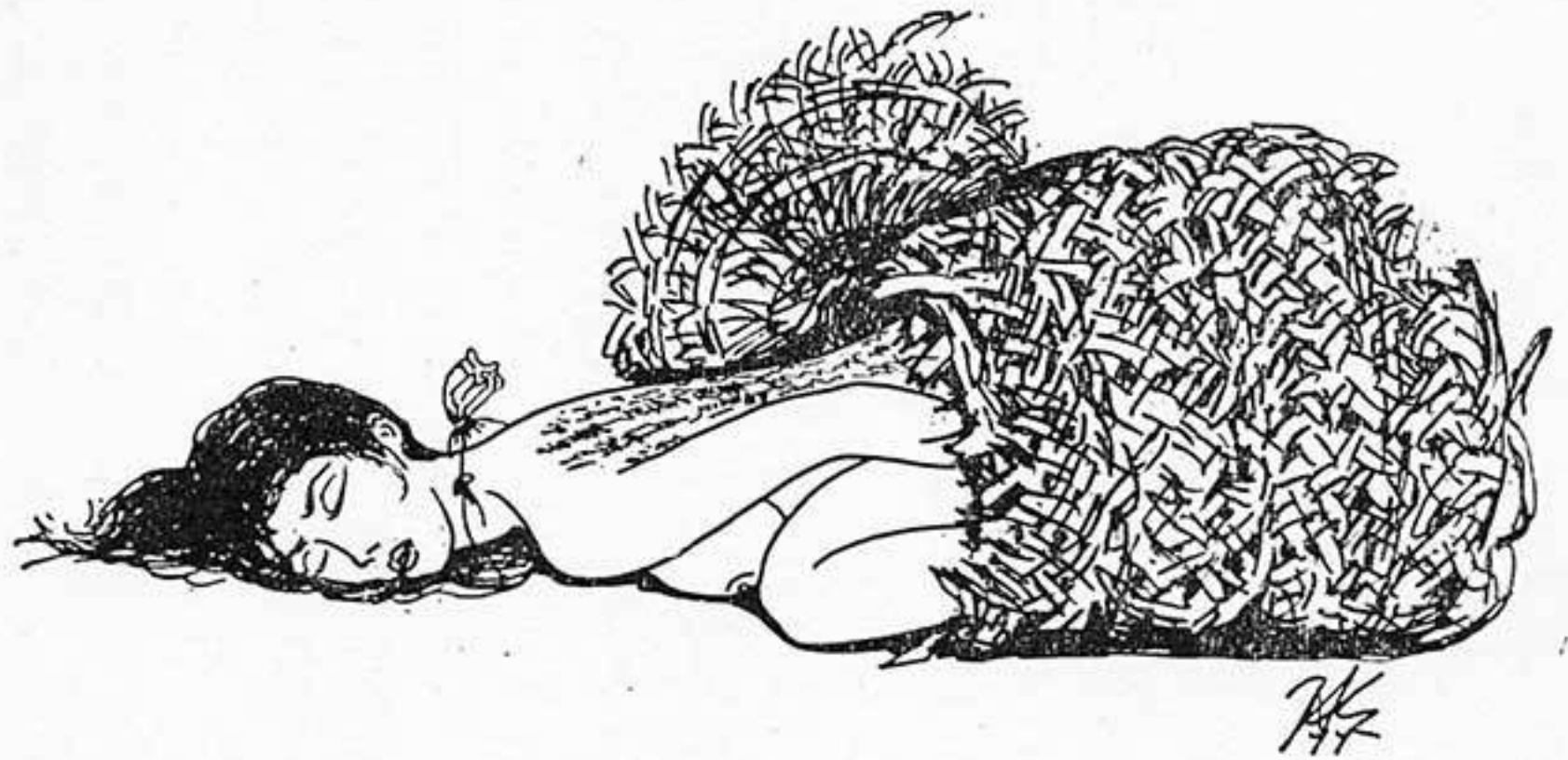
代の入らない老人夫婦が心配するだけのことだった。

しかし、それも帰ってくるし、又、時にはまとめて前払いしておくこともあったから、人のよい老人達はホクホクしていた位である。

そんなわけで、ジャンク事件のあと一週間ほど暮していた周月鏡が、再び消え去ってしまったも、誰も怪しむ者もなかった。しかし今度こそ周月鏡は「帰らざる女」となってしまったのである。

ホンコンの権力者や富豪の家は、云うまでもなく島の

側に多かった。段々と斜面を上って行くにつれて、立派な家並みが続いて行った。そうしたロットの一つに蔡樹理の隠れ家があった。隠れ家とはいっても、立派に市民権を持っているのだから堂々としたものだ。ただ、この男が青帮の頭領だということを一般が知らな



いという意味で、隠れ家といただけなのである。

当主の蔡が日本へ行っていて不在だというのに、今夜は広い邸中が煌々と輝いて、次々と着飾った男女が出入りしていた。いうまでもなく、アフリカはガボン共和国から来た日本人有明の主催するレセプションである。蔡は有明のために自分の邸を全部、明け渡していた。これをもってしても有明の勢力と青帮とが如何に密接な関係にあるかが明瞭となるであろう。だが、きわめて重要なことは何故彼等がこのことを秘密にしなかったかということである。これは回を追うに従って次第に解明されて行く。

周月鏡も招待客の一人であった。清楚な髪型ではあったけれど、ピタリと身についた絹の中国服は、その美事なプロポーションを

余すところなく強調している。誰が見ても対岸の難民アパートの住人とは思えなかった。

導かれてサロンに入ると、太陽のように惑星にとりまかれている中年の日本人が目に入った。惑星の一人、星恵美子がキラキラした瞳を、まっすぐに周月鏡に向けた。

「周小姐、よくいらっしやいました。私たちの有明をご紹介上げましょう」

その声を待たずに有明が進み出た。紺地に黒縞子の襟をつけたナイト・スーツがよく似合って、洗練された社交性を示していた。

「あなたの御活躍は星から承っています。お会い出来て本当に幸せです」

流暢な英語で話しかけるのを、星が引きとって通訳する。青帮の仲間も多勢来ていたから、周小姐もすぐ楽しいパーティの雰囲気になじり込んで行った。

不意に嬉しそうな歓声と拍手の音が起った。二階からサロンに降りるラセン階段のあたりに一人の美しい少女が姿をあらわしたからである。あのようなひどい拷問をよく耐え忍んだ林美玉だった。今は焼け爛れた皮膚もすっかり癒えて、それを証拠だてようとするのか背中をあらわにした夜会服をスラリと着こなしていたのである。彼女は今日の主賓と

目されていた。

同志愛と信頼に満ちた楽しい一夜が果てて夫々、三々五々家路をたどったのであるが、周小姐も再び質素な労働衣に着がえてフェリーの待合室へ歩み寄ったのだが、突然、数名の男に取りかこまれてしまった。厭も応もなく側に駐車してあった黒塗りの乗用車に押し込まれる。車はまっしぐらに走り去った。誰も気がつかない一瞬の間の出来事だったがそれでも青帮の一人が気付いて、直ちに報告された。蔡樹理の留守宅は電話を受けて、正に色めき立った。油断はしていなかったが、まさかこんなことになるとは夢にも思ってみなかつたからである。それに肝心の蔡樹理が留守では、適切な命令すら下せなかつた。彼女はおそらく、呂親分の讐を討とうという一味に誘拐されたのに間違いない。とすれば彼女を待っている運命は、呂親分が受けた屈辱に勝るとも劣らないことは明らかである。青帮および有明の一味にとって、気が気でないような数日が過ぎたが、周小姐の行方は杳としてわからなかつた。

焦燥と憤怒に明けくれた拳句、哀れむべし

周小姐は物言わぬ死体となって帰ってきた。いや送り届けられて来たといった方がよいかも知れぬ。

ホンコン独特の野菜類を入れる大きな籠がある。ある朝、邸の門前にこの籠がポツンと置かれているのを見たとき、蔡の召使いは、まさか、あれほど探しあぐねていた周月鏡が押し込められているとは想像することも出来なかつた。しかし、そばに寄ってポンと死臭をかいだから大騒ぎとなった。

有明の命令で籠のまま奥まった一室に運んで、円蓋を切り破った。ハラリと長い黒髪が揺れた。それだけが最後の命ある気配だったといえよう。その下には無念そうに蒼ざめた冷たい死に顔があつた。蠟のような頬に血が固まっていた。

もう硬直期間も終わっていたらしい。籠をかたむけるとズルズルと一糸残らず剥ぎとられた全身が転がり出した。

有明や星、それに急を聞いて集まって来た青帮の幹部達にしても、大抵のことには経験を積んでいたのだけれども、今、見せつけられた光景は、さすがの彼等にしても息を呑むようなものだった。

それは、彼女の全身がアザだらけに汚され

ていたからでもない。両手両足の縛られたあたりが手酷く擦りむけていたからでもない。居あわせた全員の恐怖に凍る眼は、ただ一点に釘付けになっていた。恐るべきことに、女性としてあるまじきモノが移植されていたからである。

「背中に何か書いてあるわ」

カスレた声で星がいった。有明がソッと死体を裏返した。

背中一ぱいにマジックペンの走り書きがあ

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規 定☆

- 一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。
- 一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。
- 一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

った。新造語で読みづらいが大要はこうだ。

『同志、呂君の復讐を志した吾等は、周月鏡に古来の腐刑を施すことに決した。手術は同志の隠れ家でなされた。激しく抵抗したので大量の麻薬を抽入してフラフラにさせた。反逆者の若者をえらんで隣りに縛り付け、あらかじめ定められた方法により、先ず周月鏡の摘除手術を行い、海綿体を露出せしめ、これに反逆者から切りとった同じ組織を接合させたのである。手術は成功し、器管は見事に癒

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思ひます。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

着した。これは正に毛沢東語録の果した奇蹟そのまもの、わが医学界の勝利である。数日間には四肢を固定した姿勢のまま、つづけざまに麻薬を投与して行った。いずれ特殊な趣味を持つ要人の愛玩用に供する目的であるから予め麻薬中毒にしまった方が扱いやすいからでもあった。もはや、周月鏡はヘルマフロイデとなった。（臍から上は女のままであつたけれども）刺戟の与え方によって局所は立派に目的を果し得るまでに治癒した。偉大な勝利は目の前であった。然るに何たる事か吾等の一寸した油断を見すまして、彼女は（彼は？）舌を噛んで自殺してしまった。そこで、死体は吾等にとって何の興味もないから送り返すことにした次第である。おそらくはこれにより吾等の実力と怖ろしさを実感されるであろうし、蔡はじめその一党に、やがてこれ以上の復讐がなされるのを自己批判しつつ待つがよいであろう』

署名も日付もなかったが、可哀そうな周月鏡は自らの肌を敵の便箋に提供してしまったのである。しかも、その細い首にビニール袋がククリつけられていて、半ばひからびた肉塊が入れられてあった。

（未完）

ゴム雨具責め雑考



森中雨奇男

もう都会などでは、すっかり姿を消してしまいい、期待できなくなってしまう若い女性のゴム雨具姿。

その昔、このスタイルにあこがれを抱き、夢にまでみたその責め折檻のシーン。

古くは古川裕子さんが多くを論じ、もう十一年以上になるか。また「レイン・コート」と題して大塚啓子さんが演じたグラビア写真など思い出はつきないが、いつ果てるともない私ども夫婦のゴム・プレイは、命ある限り続くことであろう。

近くは梅川幸子さんが「私のゴム・プレイハイレン」を述べていたが、最近に至って、雪の多い、とくに裏日本地域では、この種の婦人用のゴム製ハイ・ブーツ（ひざまであるもの）も種類が多く出廻り、女学生には黒色が主に、BGなどには白、黄、赤などのものが、よく使われている。レイン・シューズについていうならば、戦後すぐに流行した裏地

のない折返しをついた、ホックボタン式のアメゴム、茶、黒、白、白茶コンビのゴムものなどは、どこへ行っても全く姿を消してしまつたが、裏地のついたブーツものなどは地方の露店などへいくと二〇〇—三〇〇円ぐらいで、どんなものでも揃うようだ。それに農家向け用の、とくに田植時などによく使われている、ヒザまでの裏地のついていない、アメゴムのブーツなども、かなり安く売られており、これなど二、三足並べただけで、生ゴム臭がプンプンとして、ゴム・マニアにとってこたえられないものだ。

拙宅に現在あるものは合計二十六足で、内訳は長靴類六足、ブーツ類八足、レイン・シューズ類十二足で、そのうち裏地のついていないもの十五足は、殆ど外してしまっており、押入れの中にある下駄箱を開けただけで、むせかえるゴム臭に包まれる始末。これらを手足は勿論、猿ぐつわや便器や食器代り、その

他、色々なことに愛用させてもらっている。

レイン・コートについては、ついでゴム引のものは見かけなくなり、最近では、せいぜい透明ビニールものやエナメルものなどが、少し興味を引く程度だが、丁度、昭和二十五年頃から三十年頃にかけて大流行したゴム引ものが、現在でも二十着近く（近くというのは度重なる使用でボタン穴が裂けてしまつたり破れたりして、満足なものは約半分しかない）あり、これも随分と方々へ探しに行つて大阪鶴橋の商店街の中にあるY商店などで、わずかに残っていたものを、不審気な顔をする店の人から、何だかんだと理由を述べて、安く買つたりしていたが、もう殆どどこにもなくなつてしまつたようだ。しかし特別に注文すれば二、三千円でできるようなので、むしろ奇巧の特別分譲品などで考えてもらえばありがたいのだが……。

私どもの場合、大抵、妻にオムツ・カバー代りにレイン・コートを股間に一着あてがい素肌にならず前後を逆にして着せた上に、普通に着せて、計三着は最低でも使っている。この上へゴム合羽などを着せることは時々やる程度で、室内では大抵、レイン・コートの色彩美を楽しみながらプレイすることが多い。しかし、きびしい責めには男物の黒ゴム雨合羽なども含めて、合計十着を着用（猿ぐつわに二着、オシメ代りに三着も入れて）させた

こともある。いずれの場合も、共地のフードとベルト付きで使うことは勿論だ。

近頃、縛りや責めシーンのふんだんにある映画は、ピンクものの以外にも実に多くみられるようになり、我々ファンには嬉しい限りであるが、ただ残念なことは、ゴム雨具を用いてのものが全くないことである。もっとも、ゴム・マニアの数が少ないといえればそれまでだが、それなら、せめてエナメルやビニール・コートにブーツ・スタイルぐらいの責めシーンを経験させるのはほしいものだ。本誌の最近号にあった「女の城」のようなものを原作にしたものなどだったら、毎日でも見に行きたいと思う。

常々、何か変ったアイデアによるプレイを考えているのだが、なかなか名案は浮かばぬものだ。しかし最近、ちょっとしたプレイを試してみた。

六月二日、白昼、大阪市内の中心部で、衆人注視の中で実行した。五月下旬のある日の不始末が原因で「雨の降る日の夕方から夜にかけて、大阪のメインストリートである御堂筋を、カサを持たずゴム引レインコートにフードをつけ、ロング・ブーツ（ハイレイン）をはき、このスタイルで梅田―ナンバ間を八十分で往復してくること。コートの下は素裸で、股間しぼりを含めた、きびしいいましめを加え、もし時間に遅れたとは、きさらに梅

田から天満橋まで引きつづいて三十分以内で歩くこと。スタートは梅田で、ナンバまで行ったという証拠に、南海ナンバ駅の入場券を買ってくること」という仕置である。

しかし、その日、大阪は午後三時頃に雨が上ったので、最初のとりきめを少しかえて、フードを外すことだけは認めて、十六時ジャストに曾根崎署の前からスタートさせた。

まだ明るすぎる大都会の繁華街に、時代おくれの、恥かしい雨具姿で放り出された妻はうつむき加減に小走りの姿勢でミナミへ向かう。恐らく何千何万の人にみられた、この変ったお仕置。中には、いぶかしげに振り返った人も多かったろう。その中の何人かは、恐らくこの記事を見て、心当り――あれが私の妻だったのかと思ひ当る人もあるかと思う。このときは、時間になりに遅れたために結局延四時間ほど歩かせて、夜遅く家に帰ってからも、きびしい責め折かんと深更まで加え、とどのつまりは「他の種類の、もっと恥かしいお仕置でも受けますが、この『街頭行進』だけは、どうかお許し下さい」と言わせたものだ。

私は今度、大阪―神戸、あるいは京都などの「行進」を実行したいと考えている。

大阪の、どまん中を歩かせたことは、やはり若い女性にとっては、肉体的な苦痛とは別に、相当なショックを与えたいらしい。内心、

大満足。

その他、最近、試みたものは

一、ゴム雨具の責めスタイルで風呂場へ連れて行き、湯舟に長くつけたのち、シャワー責め、ムチ打ちなどをする。そして、後手しぼりのままで、私の身体をきれいに洗わせる。

二、郊外の田んぼの中の無人の元豚小屋のようなどころを探してきて、夜そこへ連れて行き、もちろん完全ゴム姿にして、長時間、吊るし責めの上に、ムチ打ったりする。

三、同じくその近くで、別の日の夜、泥田の中を這い廻らせ、泥だらけにした上で、逆立ちの稽古をさせたり、十円硬貨を遠くに投げ、泥田の中を探させたりする。

梅雨のシーズンには、以前だと若い女性のゴム衣装が、ふんだんにみられて、わくわくしたのであったが、時代の進歩？ か、最近ほとんど見られぬようになった。

だが我が家では、梅雨もヘチマもなく、これがなければ夜も日を明けぬ。できることなら、梅川女史らとのプレイを交させてほしいと思うが、妻はそれだけは堪えてほしいと哀願する。

今日もまた、汗と涙と唾液にべとべとに濡れた可愛い顔に、純白のゴム・ブーツを噛ませ、うるんだ瞳を僅かにのぞかせてうごめいている妻を眺めながら、これからの責めの構想を考えているのだ。



男性虐待快樂術……………（第九話）

フレンチキス劇場

（前篇）

馬 族 保

（一） 石川隆作、銀座の喫茶店で 鳳マヤと相席すること

はなしの発端は、東京からはじまる。

銀座七丁目の喫茶店・コンパルの階上席。

石川隆作は分厚い株式相場のノートブックをテーブルに拡げて、新聞の株式欄の数字を丹念に書き込んでいた。隆作の株価対象は、三十社に及んでいた。

隆作のノートブックは大型で分厚い。銘柄毎にインデックスで見出しをつけ、記入するにも、抜いてみるにも、至極便利のように作

られている。隆作お手製のものである。

七年前、石川隆作はふとした機会に、株に興味を持つようになった。株式界は、まったく低迷の様相を呈し出した時分で、早くも株を諦めて、絶対間違いないといわれる土地に宗旨替える投資家達が目立ちはじめた頃だった。

ちょうどその頃、土地を処分したあぶく銭ともいえる金を、何かに化体しておく必要があつて、好餌を物色中であつた隆作が目をつけたのは、日本製鉄だった。株価が五十円台を割ったことがある。株に対してズブの素人

であつた隆作も、日本製鉄は間違いないと思ひ迷わなかつた。手堅く六万株を買った。増資による新株も含めてのことだが、とにかくそれだけ買うにも大変な苦勞が要つた。

隆作の郷里、福岡県K郡C村は福岡市との合併前では一農村にすぎなかつた。戦後、福岡市と合併し、県営住宅がつぎつぎに建設され、住宅団地にふくれあがるに従つて、灌木の生えた山林の地価は、あれよあれよという間に千倍を超えた。畑も田圃も宅地に姿を変えた。一農村であつたC村は忽ち市街地を形成し、学校、病院、娯樂施設が付随して出来

あがりマンモス団地化していった。

石川隆作は、海に近い砂地の赤松のチヨロチヨロ生えた山林を、一万五千坪ほど、親の代から受継ぎ、何ということなしに持ちこたえていたのが、土地ブームの波に乗って、放っておけば、天井知らずの値上りを呼んだ。

隆作は時期を見計らって山林を処分し、別の山林から杉の木を伐採して、五十坪の家を建てた。『石川御殿』と自ら称する、築山、泉水のある家であった。

石川隆作は、四十八歳にして、金の使途に頭を使う身分になった。彼の得意や、思うべしである。

資本の増殖で勝負するには、株が最高である。その時分から、彼の株式相場の研究は始まったのだった。どん底の低迷をつづける株相場も、いつか大台に乗る時期がかならずくる。隆作は信じて疑わなかった。日本製鉄はそれまでの試験的な、安全投資であった。ということとは、隆作の持っている財産の、ほんの一部でしかなかったからである。

隆作の撰んだ銘柄は、だいたいテレビ、冷房装置、照明器具、自動車、肥料、建築内装材などの約三十社であった。

株価は寸秒を競う。昨日の相場を、ブック

に青と赤の線で表示しても、それが直ちに役立つことにはならない。しかし毎日それを繰返し、飽くこともない隆作のカンともいうべき予感が、ピタリと当たった。株価は二千円の大台に乗り、あっという間に暴落した。

素人の石川隆作の予感と度胸は、みごと金的を射止めた。彼はこの投資で、短日の間に五千万円をかせいだ。

隆作は笑いがとまらなかった。

彼は慎重派である。郷土出身の代議士を通じて、新都自動車を見学したいから、実現にお骨折願いたいと手紙で申し入れていたが、それも容易に叶い、今日その希望を果たしたところだった。

「恐れ入りますが、相席お願いしたいのですけど」

気づいてみると、もう夜になっていた。各テーブルは満員の客であった。

「どうぞ」

隆作は、ひょいと顔をあげた。ウェイトレス若い女を案内していた。

「お願いします」

ウェイトレスが去ると、女客は黙礼し、椅子に掛けた。

「あっ」

隆作は小さな驚きの声をあげた。たしかにどこかで見た顔だった。だが思い出せない。

テーブル越しにみる相手の女性は、とき色の薄いワンピースを着ている。超ミニの服の裾から、脚の線が太腿まで露出している。髪は長い。やはり服地の色と同じ、とき色のヘアーバンドで髪を結えている。輝くように美しい化粧だった。

「失礼ですが、貴女をどこかでお見かけした記憶があります。しかし思い出せません。どなたでしょう。有名な芸能人か何かではないですか」

「ほ、ほ、ほ。でも、有名じゃないわ」

女は艶然と笑った。白い歯がこぼれて、光った。入歯一つない歯であった。

「そうですか。たしかに僕は、貴女の顔に記憶がある。思い出せないけれど……」

「ほ、ほ、ほ」

女——鳳マヤは、もう一度、笑った。面長の下ぶくれのした頬が、くいつきたいほど魅惑的である。マヤは東洋映画の女優だ。ピンク映画、またはエロダクションといわれる映画会社の専属女優だった。

石川隆作が、すぐ思い出せないのもムリはなかった。お寒いスクリーンのマヤに較べて

実物のマヤはあまりに違いすぎていた。実に眼のさめるような美貌であった。

「それよりも、おじさん、何を書いていらっしゃるの」

「これですか。株価ですよ。僕は株をやっているんです」

「株って、儲かって？」

「まあね。ついこのあいだ、五千万円儲かりましたよ」

「ウソばかり」

「ウソなもんですか。本当ですよ」

この貧相な田舎のおやじに、そんな大金があるとは、マヤにはどうしても思えない。このおやじ、わたしの関心を惹くためにホラを吹いてるのに、違ういわ。

ウェイトレスがコーヒーを運んで来た。

「おじさんは、どこの人」

「九州です」

「へエ。何しにいらしたの」

「新都自動車の本社を見学に来ました。この会社は有望ですよ。出来たら、十万株ばかり買いたいです」

どうも、ウソをいってるとも、思えなかった。

「おじさんのお仕事は、何よ」

「さあ、何でしょう。正直にいうと、地主でしょうか。今は福岡市に合併されましたが、大変な土地ブームでしてね、僕はいつの間にか大金持になってしまったのです」

あとになって考えてみると隆作は大変なことを、うかつにいつてしまったものである。このような凄い美人の前で、彼は自分の富豪振りを誇示したい男の虚栄^{みえ}があった。

マヤの目色が変わった。コーヒー碗を朱い唇にゆっくり運びながら、

「わたしも、あやかりたいわ。ねえ、わたしのパトロンになってよ」

(二) 鳳マヤ、恋人を肥料に映画女優になること、並びに石川隆作に目をつけること

鳳マヤは、東洋映画に入社して丸三年になる。その間に、七本の主演映画に出演した。彼女も二十二歳になった。収入は少ない。まだ当分、結婚する気持にはなれなかったし、そうになると、ピンク映画にいるのが、つくづくいやになった。

気位の高いマヤにすれば、七本の作品のどれもが、気に入らなかった。だいいち、脚本がどれも幼稚でつまらない。スタッフはズツこけていて、うすぎたなくみえた。監督もい

やに尊大ぶってばかりいて、面白い映画を作るコツさえまるで知らないデクの棒だった。

エロダクシオン結構、ピンク映画結構である。なぜ思い切った作品を作ろうとしないのか。もって廻った作り話ばかり撮らないで、男女のセックスを芸術的に鮮烈に描写できないのか。わたしの女優としての肢態美は、そのために必要なはずである。

マヤは、将来を想像すると暗澹となった。アルバイトに、銀座のキャバレーのホステスを勤めたこともある。彼女の肉体をめがけて男達が一斉にひしめいた。軀を張っての商売であった。

マヤの郷里は川崎市である。彼女が高校三年の秋、母親は病死した。父親が再婚してからというものの、家庭に暗い翳りが掩いはじめた。若い、ホステス上りの母親とマヤとの間が、険悪になった。十九の正月二日、マヤは家をとび出した。

単身上京すると、新宿の喫茶店に勤めた。工良房は、喫茶店時代に知り合った男である。彼はマヤの均斉のとれた肉体美に、もっとも早く眼をつけた男だった。工は理髪職人であったが三十を越してもまだ独身だった。その彼が、マヤを見ると夢中になった。

「マヤは自分の身体が、どんなに素晴らしく美しいかに気付いていないんだ。僕がこれから磨きをかけて、美事なダイヤモンドに仕上げてみせる。ねえマヤ、僕を信じて下さい」

こうして、マヤと良房の交友は、はじまった。工はマヤに靴を買ってやった。服を与え、ネックレス、イヤリングの順で、マヤが美しく変貌してゆくのを、眼をほそめて眺めた。

香水風呂でマヤの身体を洗ってやり、マヤの手足の爪を剪り、マニキュア、ペディキュアを施し、ブラジャーとパンティ姿の四肢に化粧水を刷いて、念入りのマッサージをしてやる。

「良房さん。マヤ、うれしいわ。こんなに愛されているんですもの。わたし幸福よ。ほんとうに、わたしは綺麗になってゆくような気がするわ」

「とにかく、マヤは美の女神だよ。自信をもってよ。世界一の美女だと思いきむのよ」

工良房の六万円の給料は、ほとんどマヤの装飾品と遊興費に消費された。

その年の夏、マヤは海の女王に選ばれた。それがきっかけで、東洋映画に入社した。

工は、マヤの映画入りに極力、反対した。しかしマヤは、彼の意見とは反対に、彼女の

魅力を試すのは、今だと思った。またとないチャンスだと判断した。

工の執拗な反対を押しきって、マヤは映画女優になった。工は、もう反対しなかった。

「マヤ、もう何もいわないから、君のその身体だけは、大切にしていね。僕は休み毎に、マヤのアパートを訪ねて、マヤの美容に奉仕してゆく。ねえ、いいだろう」

マヤは眉をひそめて返事をしなかった。

「ねえ。いいだろう、マヤ。ウンといっておくれよ」

「良房さんでなくとも、これからは、男は誰だって、よろこんでわたしに奉仕するわよ。」

あなたは、もう来ないで頂戴」

工の貧相な服装に、ジロリと視線を流し、つめたく、いい放った。

「ひどいよマヤ。僕がいないと、きっと君は不精でおしゃれをしなくなるよ。とにかく住居だけは、はっきり教えといておくれよ」

映画入りに反対された頃から、自尊心の強いマヤのころは、眼にみえて良房との距離を拡げ出していた。

「彼とも、しばらく、会ってないわ」

男が惚れたとなると、女は強い。しかも、何かの形で、彼女に貢ものをしない限り、良

房のように、マヤの美容に奉仕することさえも、無料では許したがいらないのであった。

良房は毎月、彼の給料の半分をマヤのために貢ものしている。なのに、マヤは一度もお礼をいったことがない。

「フン」

木で鼻をくくつたようなせせら笑いをうかべるのが常であった。

いや、却って、

「良房、ヒゲが痛いわ。わたしの足に頬擦りするのに、ヒゲも剃らないなんて。この次から、ヒゲを剃ってなかったら、お金だけ置いて帰って貰うわよ」

と、不機嫌を、ぶちまける始末だった。

「パトロンになってくれって、本当？僕は九州に帰るんですよ」

話がとぎれて、相手を探るような目付の石川隆作が、半信半疑の表情で訊く。

「ええ。本当よ。わたし、おじさんについてゆくわ」

「ご冗談でしょう」

「いいえ。ほんとうに随いてゆくわよ」

石川隆作の胸が、年甲斐もなく騒いだ。彼にとって、生まれて始めての出来事である。

しかも相手は東京の女——それも、隆作の眼から見ると、天女にも紛う美女であった。

「ついて来て、どうするの」

「おじさんの奥さんにして貰うわ。都合が悪けりゃ、愛人でもいいわ」

「——」

「おいや？」

「いや、いや。あまりだしぬけなので、まごついてるんです。——それで、手当は、いくらぐらい？」

「そうね、月十万では、どう？」

「十万か。……考えてみましょう」

「条件があるわ。わたしのために、おじさんの家庭に波瀾が起きても、困るのよ。だからわたしの家を別に建てて頂戴」

「マンションを一部屋、借りるのでは、いけませんか」

「マンションね、それもいいわね」

そのとき、階段を昇って、階上席にパンタロンスタイルの女が現われた。如何にも素人ではないという派手な服装とサングラスが目立った。

「眉美、ここよ」

「よお」

ガムを噛み噛み、あけてくれた椅子の一つ

に腰をおろしたが、相席の石川隆作の顔を珍しいものでも見るように、ジロジロ眺めた。

マヤが眉美の耳もとで、何か囁いた。

「ヘーエ」

眉美の表情は、驚きの色にかわった。

そのあと、マヤが手洗いに立って、

「おじさんは、お金持だってね。あたいと契約しない？ あたいは、丘眉美。マヤと同じく東洋映画の女優。よろしく」

「東洋映画？ そうか、おもしろい出した。鳳マヤ——彼女が鳳マヤか。どこかで見た顔だと思った。——君達、東洋のスターでしょう。収入も多いことだろうに」

「ううん、だめだめ。あたい達は、しおどきを見計らって、やめちゃうの。売れている間だけで、売れなくなるとポイと放り出されるの。寄らば大樹の蔭っていうでしょう。あたい達、ちゃんと身のふりかたを、考えなくちゃ」

どぎつい化粧をしているくせに、話し始めると、おやつ、と見直すくらい、あどけなさが残っているのが、意外だった。

「眉美！」

トイレから帰ったマヤが、ムダ口を叩くでない、というように、たしなめた。

「あたい、何にも話してないわよ」

「おじさん、名刺戴きたいわ」

ふたりの映画スターに囲まれて、石川隆作は、羽根で撥られるような快感を味わっていた。男の度胸一つで、儲かった金である。何に使おうかな、と考えていた矢先だった。

「こういう者です」

名刺を渡し、ノートブックを鞆にしまいこむと、石川はマヤの顔を見た。

「今後、かならず貴女のファンになります。住所、教えて下さい」

眉美を憚かって、隆作はうまいい廻しをした。

「きつとよ」

ハンドバッグから万年筆を取り出して、鳳マヤは、サインでもするように、手帳の一枚に住所を書き込むと、それを手切り石川隆作の手に握らせた。

(三) 花形歌手立花紅子、ジャズ喫茶で太宰港二を発見し生贄にする 目的で弟子にすること

石川隆作は五人の子持ちであった。

上からふたりは女、次が男の子であったがその長男は死んだ。その次がまた女で、末っ子は、戦後も、あまりに間がひらいたのでも

うおしまいだらうと諦めかけた頃、生まれた男の子である。とにかく、大切な男の子であった。

石川瑞穂。

末っ子の男の名前である。十七歳。その瑞穂が家出したまま帰って来ないのである。もう一年になる。

歌手志望であった。

歌手の卵は、うんざりするほど、ウヨウヨいる。

八方手をつくし探してみたが、浮き草稼業の、それも無名の歌手では、すべて徒労だった。上京を機会に、歌手を養成している芸能社を、片っ端から訪ねて見たが、だめであった。

隆作は、あと三日、東京に滞在することにしている。あとは、名のある作曲家を、瑞穂の写真をもって根気よく訪ねて廻る決意を固めていた。

実はその頃、当の石川瑞穂は神戸にいた。

元町のジャズ喫茶『ダイヤモンド』のステージで歌っている歌手は、女の子のように肌の白い美少年だ。彼の芸名は太宰港二。石川瑞穂の別名である。高音よりも低音に余韻の残る魅力があった。しびれる音質である。

「港ちゃん！ しびれるウ」

「その頬に食いつきたいわ」

若い女の席から、不遠慮な声がとぶ。

太宰港二が一曲歌いおわり、衣裳を換えに舞台の裾へ姿を消したときである。支配人が次の曲を紹介するために、マイクに近づいてゆくと、客席から、支那服姿のハッと息を呑むほど華やかな顔の女性が、ステージに上った。

支配人の耳もとに、何かをささやくと、彼の顔に喜色があふれた。

「お客さま方に、すばらしい人をご紹介します、申し上げます。作詩家で作曲家、そして歌手、わが神戸が生んだ佳人、キャラバンレコードの立花紅子さんが、とくにお客さまのために自作の歌を一曲、歌って下さるそうでございます。歌は、八月の夜のひめごと———ではどうぞ拍手をもって、美貌の歌手、立花紅子さんをお迎え下さい」

一斉に、ざわめきと拍手が湧きおこった。

ピーツと指笛が鳴る。

立花紅子は、ニッコリ笑って、バンドに合図した。

もえる野火のように 果てなくひろがり
ああ くるおしくもはげしく灼きつくすこの胸

あのひとは いまどこにいるのかしら
殺したくなるほど にくい
殺したくなるほど 恋しい

歌の感情をうたいあげるテクニックが聴く者の胸を締めつける。まったくすばらしかった。歌詞を肉づけする声の表現のうまさといったら、まさに天才というほかはなかった。二節目を歌いおわると、割れるような拍手が起こった。

「紅ちゃん！ うまいぞ。大好き」

「日本の恋人」

ステージを降りて、まだ鳴りやまぬ拍手の中を、かるく会釈しながら、客席へ戻った。そこへ支配人が近づいて来た。立花紅子の耳もとに唇を寄せて、

「ありがとうございました。お暇は取らせませんから、ちょっと私の事務室まで、ご足労下さいませんか」

「そうお。そういえば、わたしも支配人にたのみたいことがあるの」
「どうぞ」

月の光りの 蒼い夜は

ステージでは、太宰港二が歌っていた。
支配人室に這入ると、

「これは、ほんの寸志で失礼ですが、お納め頂けないでしょうか。とにかく、立花紅子さんに歌って頂くんて、ダイヤモンドに取って、誠に光栄です。どうぞ、お納め下さい」

支配人は、しきりに揉み手をしながら、謝礼の封筒を奨めた。

「いいえ。お礼は要らないわ。そのかわり、たのみたいことがあるの。聞いて下さる？」

「何でしょう」

「ほら、いま舞台上で歌ってる太宰港二。あの歌手、わたしがお預りしたいの。おいや？」

「といたしますと」

「あの太宰港二を、本格的にみっちり勉強させたいの。あの歌手は、きっと物になるわ。いいえ、わたし——立花紅子が、かならずものにしてみせるわ」

「では、あの太宰港二を、紅子先生が……へエ、コーちゃんついてるな」

「どうせアルバイトでしょ。ここの舞台は当分、続けさせる条件で、どう？ わたしも時々港二のために賛助出席するわ。そんなところで、どう？」

「結構ですとも。願ってもない話です」

舞台をおわって、楽屋に引き揚げる太宰港

二の靴音がきこえた。

「コーちゃん、ちょっと」

紅子の姿を認めると港二は真赤になった。

「ああ、可愛いいわ」

「こちら、立花紅子さんだ。紹介するまでもなく、歌謡界の花形——コーちゃん、君は運のいい男だよ。実はね、立花さんが、君を弟子にして、本格的な勉強をさせたいとおっしゃるんだ。どうする？」

「——」

じっと紅子の眼を見つめる。すがるような眼の色だった。

「紅子先生は、音楽学校出身だから、基礎勉強からやり直すには、いい機会だと思うよ。コーちゃん、牧村先生の承諾は貰えるの？」

「はい。それは大丈夫です。——立花先生、よろしくお願いします」

美しい頬をさらに真赤にし、ペコリとお辞儀する。

「ああ、可愛い。この坊や、生菓子みたいだわ。食欲を感じるわ」

みしめるのであった。

(四) 立花紅子、赤坂九十九と対面すること 並びに美少年太宰港二と接吻すること

クラブ・紅子は、三ノ宮の繁華街の裏通りにあった。

二〇〇平方メートルぐらいの長方形の店構えである。正面にステージがあって、バンドの伴奏にあわせ歌っているのは、立花紅子だ。スポットが、彼女の周辺を円く照らし出している。

クラブ・紅子の経営者は立花紅子だった。

ホステスは年令が制限されていて、二十四歳までであった。若鮎のようにピチピチした女の子が、ミラーボールのゆっくり回転する水色の客席を、超ミニのスカートからこぼれる脚を眩しいほど燦かせながら、泳ぐようにゆき交っている。

立花紅子の歌が終わると、客席から盛んな拍手が起こり、喚声がとんだ。

紅子は拍手に応ずるように笑顔で会釈していたが、喚声の鎮まるのを待って、

「皆さま、毎々クラブ・紅子をご最下さいまして、ありがとうございます。厚く御礼申し上げます。実は今晚ここにおいでのお客様さまに、ぜひご紹介申し上げたい新人歌手がこ

ございます。まだ無名でございますが、近くキヤラバンから売り出す新人でございます。その新人の名は、太宰港二という十七歳の少年でございますが、目下、わたくしのもとで、猛勉強いたしているものでございます。まだ学生でございますけれども、将来が愉しめられたしに素質のある歌手でございます。デビューいたしました節は、何卒わたくし同様、お引立てご支援下さいますよう、お願い申し上げます。では、太宰港二をご紹介します上げます。どうぞ彼の歌をお聴き下さいませ」

コーちゃん——と紅子が合図すると、太宰港二は、マイクの傍まで歩いてゆき、紅子と並んで立った。

「唯今ご紹介いただきました太宰港二です。よろしく願いいたします」

ペコリとお辞儀をした。紅子が引き取って「太宰港二の歌は、八もの想うセンチメンタルの季節」です。コーちゃん、張り切って歌って頂戴」

港二が歌い始めると、紅子は舞台から降りて、客席に酌をして廻った。歌手から、クラブ・紅子のママさんに変身する。

「太宰港二って、ママさんの親戚かい？」

「あの美少年、ママさんの稚児さんと違うか

い？」

「ママさん、太宰港二は掘り出し物だよ。愉しみだな」

一つの席に約十分、適当に愛想をふりまき応待しながら、テーブルを一巡し、クラブの入口に近い席までくると、そのテーブルには三十一、二の男がホステス相手にビールを飲んでいた。

「ママさん、お願いします。……お客さん、ママさんの猛烈なファンですわ」

それだけいい残し、ホステスはトイレに立った。

「そうお。それはどうも。お注ぎしましょ」

「サンキュウ。——僕、立花紅子さんの猛烈なファンです。あなたのレコードは全部、揃えています。あなたに関する記事の載っている雑誌なら、目についたものは一冊欠かさず集めています。オール立花紅子さんです」

レコードの歌の題名を全部、挙げた。それから、あの雑誌、この雑誌の名をあげながらゴシップの一つ一つを列べるのだった。

「まあ！ それはそれは。紅子うれしいわ。握手しましょう」

「僕はこの歳になるまで、あなたのような性的魅力にあふれた女性に会ったことがありま

せん。女は美人でない限り何の値うちもありません。ご本人は気付いていらっしやらないが、あなたは男をくるわせる悪魔の魅力をもっているのです。歌の魅力も勿論ですが、僕はあなたのために、あなた自身の中にいる悪魔がよろこぶようなことをしたい。それは、僕のこれからの生甲斐になるのです」

男の言葉に、異様な熱気が帯びて来た。抽象的ないい廻しだった。

「僕なんか、あなたの足許にも寄りつけないつまらぬ男です。だから、せめてあなたのその豪華な肉体に着けられたものでも、譲っていただくしか、自分を慰める方法はないと思うのです。馬鹿な男とお嗤いにならないで下さい」

「いいえ、嗤わないわ。日本中のファンの皆さんがいて下さってこそ、立花紅子は存在するのですもの。でも、独占は、いやよ。立花紅子は、日本中の恋人」

「そうです。だから、僕なんか寄りつけないんです」

彼の服装も立派だし、服の好みも洗練さんていた。

「あなたのご商売、何ですか」

「タクシー会社を経営しています。——僕は

こういう者です」

渡された名刺には、赤坂九十九つくもの名が印刷されていた。

「紅タクシーって、いんですの」

「そうです。紅子さんにあやかって、紅をもじったのです。車は三十台持っています。紅子さんに僕の会社の顧問になって頂きたいのですが、如何でしょう」

「まさか」

紅子は眼を瞠った。すこし紅子熱の度がつすぎる。気味がわるいくらいである。

「僕はこれで帰ります。店にくるのは、これで五度目です。やっと今晚お会い出来たし、親しくお話しもしていただきましたので、帰ります。さっきの顧問のことは、考えておいていただきたいのです。——あ、そうだ。この手紙、読んでおいて下さい」

一通の封筒を内ポケットから取り出すと、紅子に手渡した。

「じゃ、また来ます」

もう何事もなかったように、すうっと席を立った。彼の席番のホステスが、目敏くそれを見つけて出口まで送って出た。

そのとき、拍手が起こった。バンド演奏が終わったところであった。このあと、ステ-

ジは暫く休憩するのである。

立花紅子の自宅は摩耶山麓にある。

鉄筋三階建の建物で、外側から螺旋階段のついた、各階が一つ一つ独立しているという風変わりな設計だった。

紅子の部屋は階下である。

紅子がクラブを出たのは、十一時を少し廻っていた。愛用車の助手席に太宰港二を乗せ彼女自身、夜の街を運転し、途中、鯛茶漬の食事を摂って帰宅したところであった。

紅子はバスを使っていた。

港二は、脱ぎ散らした紅子の服や下着を、ていねいに洋服箆筒にしまいこむ。

彼が弟子入りしたときの紅子の最初の言葉は、

「これからコーちゃんは、わたしの弟子。レッスンは厳しいわよ。よくって。コーちゃん はわたしの身の廻りの一切の世話をするの。わたしはわがままだから、辛いこともあるわよ。それをじっと我慢するのが修業なのよ。やり通せるの」

「はい。やってみます。僕も紅子先生のように立派な歌手になりたいのです。だから、命がけで頑張ります」

「いいわ。その覚悟なら、わたしも教え甲斐があるわ。コーちゃんは、わたしの秘書もつとめるのよ。わたしのプライバシーは、一切外に漏らさないこと。できるわね」

「はい」

一流の歌手になるためには、完全服従するほかはなかった。しかも立花紅子のパトロンはキャバレレコードの会長、上原篤三だ。紅子が二十二歳、港が二十七歳で、五つ違いだった。

「紅子先生、ここに封筒がありますよ。開封して構いませんか」

湯殿の中から紅子の声が返って来た。

「読んでごらん。返事が要るなら、お前、書くのよ」

短い時間が経った。

「先生、一万円札が這入っています。……それから、紅子先生のパンティを譲ってくれてという手紙です」

「ふ、ふ、ふ。やっぱり、そうなの。港二、その手紙、見せてごらん」

港二は、中身の便箋をバスルームに持ってゆく。ザッと湯水を切って、紅子のまぶしいばかりの白磁の裸身が浴槽のそとに出る。流し台に掛けると、

「どれどれ」

文面を、ゆっくり読んでゆく。熱にうなされたように誇張した文字が綴られていた。

「わかったわ。この次、店に来たら頒けてあげるわ。この男にとって、もうわたしは天女に見えるのよ。——港二、手紙を置いて、わたしの身体を流しておくれ」

バスルームから出るとバスタオルを腰に巻き、紅子は寝台に横たわる。乳液を刷いて、首筋から、肩——腰——ふくら脛の順に揉みほぐしてゆく。

「港二、お前はわたしのお小姓よ。そのつもりで仕えるのよ。港二、お前に、わたしの美しさがわかるかい」

「はい。わかるつもりです。紅子先生のように美しい人を、他に見たことはありません。本当です」

「そうお。本当にわかるのかい、さあ、わたしの乳房吸わしてあげるわ。やってごらん。唇に柔らかく挟んで……そうそう。ああ、いい気持。お前は可愛いわ。ここへおいで。キスしてあげるから」

赧らめた顔を右腕を曲げて挟みこみ、瑞々しい清潔感の匂う美少年の唇を、立花紅子はいつまでも吸いつづけた。

そのとき、チャイムが鳴った。

立花紅子のパトロンであるキャラバンレコードの会長、上原篤三が、お忍びで訪問したのだった。

彼は紅子の豚であった。紅子と港二の刺激具の効用を果たす人間ボートでもあった。

(五) 石川隆作、四十八歳にして恋を知ることに、並びに鳳マヤより九州入りの電報を受取ること

白昼夢をみている顔は、きっと放心した眼の色をしているにちがいない。

石川隆作は東京から帰って以来というものキヨロ、キヨロと落ちつきがなかった。

あれほど精力的に動きまわり、金儲けの吸覚神経をつねに駆使し、経済の変動にまで細かい注意を払い、精いっぱい勉強に励んでいた彼が、いまは鈍重な一匹の獣のように無思考の状態を顕わしていた。

そうかとおもうと、夜中、突如大きな声でうわ言をいったり、ガバと刎ね起きて天井をじっと凝視したり、とにかく尋常ではない。

うわ言に、女の名前が出て来た。始めは妻の多津も、本能的に嫉妬の焰をもやしたこともあったが、度重なるに従って、こんどは逆

に、良人の気がおかしくなったのではないかと心配になり出した。

多津は、良人が何でそのようなに取り乱しているのか、その原因については知るよしもなかった。東京で何かがあった。それ以外には隆作の説明がないかぎり皆目、見当さえつかなかった。

石川隆作の四十八歳の運命は、くるいかけていたのだ。

息子の瑞穂の消息を尋ねて、芸能社、作曲家の門を敲いたが、結果は徒労に終わった。タフな隆作も、さすがにクタクタになった。ホテルに戻った隆作は、ものをいうのも憂うつなくらい疲れ切っていた。あたまの中が空っぽだった。

そんなとき、ふと思ひ出したのが、鳳マヤである。

東京都北区王子三一六―八 香蘭荘
隆作は教えられた電話番号のダイヤルを回した。半信半疑だった当のマヤの声がハキハキときこえた。

早鐘のように胸が鳴った。

「もしもし、鳳マヤです。どなた？」
十年のなつかしさにも似た感情が、隆作の胸の中で、にじみ出した。

『Urine』の表現について

麻 曾 比 須 人

英語では Urine と呼ばれているが、文学作品や、小説には一体どういう表現が使われているだろうか。

私が最初に Urine なる言葉にお目にかかったのは旧制中学二年生のころだったと思う。当時谷崎文学に心酔して、友人から文学全集や単行本を借りたりして、よく読んだ。ある時「少年」という作品を読んでいた。この言葉に出会ったのだ。この「少年」という作品は、ご存知の方も数多いと思うが、梗概を説明すると、「栄ちゃん」という十歳位の少年の話で、友達の信一の家へ仙造というやはり同年輩の少年と遊びにゆき、信一の姉の光子という十三、四歳位の女の子と、いろいろな遊びをする話だが、最後には男の子三人が、光子の家来にされてしまい、蠟燭の燭台にされたり、腰掛けにされたりする。そして原文を引用すると八次第に光子は増長して三人を奴隷の如く追い使い、湯上りの爪を切らせたり、鼻の穴の掃除を命じたり、Urine を飲ませたり

始終私達を側へ侍らせて、長く此の国の女王となった。V という。この Urine という英語の単語がわからなくて、辞書を引いて見た。そしてそれを知った時。私は目くるめくような感激を心に感じたことを、いまでもはっきり覚えてる。

その後本誌に接し、十数年も前になるが沼正三氏がこれに「神酒（ネクター）なる、すばらしい名前を授けてくれた。神に捧げる酒ではなく、神が作りたもうた酒という意味だと私は考えている。それを経験した人でなければ、神酒という実感は湧いて来ないであろう。たしかにその名前にふさわしい味わいであろう。

化学的に分析すれば、水分九〇何パーセントに、尿素、窒素、塩素、カリウム、ナトリウム……etc というこの液体。人によって、また男女によって、そう大差はない。しかし、わが尊敬する映画女優兼ダンサーのK嬢のそれと、これでも女性かと思うような、ミス・ブスまたは男のそれを比

「マヤさん、石川隆作です。今晚は——」

「石川さん？ どちらの石川さんかしら。あつ、わかったわ。まあ、おじさま！」

急に、うれしそうな大声をあげた。

「今、どちらから電話していらっしゃるの」「第三ホテル」

「あーら。まだ東京にいらしたの。もう帰ったのかと思っていましたわ。ああ、お会いしたいわ。……六時四十分か。もしもし、わたしね、今から、そちらへ訪ねてゆくわ。そこのホテルなら知ってるの。いいでしょ」

隆作の憂うつが一遍に消しとんだ。玄関に出て待っているから、と答えた。

その夜、マヤはホテルに泊った。

石川隆作の四十八歳の生涯にとって、はじめての体験であった。鳳マヤほどの美女は、そうザラにいるものではない。隆作に、よほど好意を抱いたからにちがいなかった。もう一つは、彼が口走った財産の額に目をつけたのかもしれない。

ともあれ、一夜にして、石川隆作の人生は異変した。

隆作が福岡市のC町の自宅に帰りついて、もう三カ月を過ぎた。

明日にでも東京を発ちそうな口吻だったマ

べるならば、化学的には全く同一液体であっても、それを欲するマニアにとっては、まさに天と地、いや月とスッポンという表現をもってしても、なおいい足りないほどの差異を感じるのは私だけではあるまい。

さて、その表現方法だが、作者はそれぞれ苦心している。宇能鴻一郎氏は週刊新潮（六月二十一日号）の風流滑稽譚「黄金茶碗綺譚」に、豊臣秀吉の愛妾お茶々の方のそれを黄金の茶碗で受け、茶会の席で有力な諸將に飲ませるといふ話を書いている。

この中ではこういう表現をしている。△お茶々の方の御衣を持ち上げ、その白い尻の下に、太閤殿下おん自ら、例の黄金打出しの茶碗をさし入れられます。ちろ、ちろと澄んだ音が黄金茶亭にひびき、やがて一杯になった茶碗を、まず太閤殿下が押した

だき、一口飲んで、……▽と書いています。その味わいについては「ああ、甘露々々」といい、家康は「靈妙なる味わい極楽の浄土水といえども及ぶまじ」と述べています。また、△御かくしどころより玉露を受け参らせ▽という表現も用いている。

一方、梶山季之氏は、「男を飼う」の中では、「冴子女王のウリンを頭から浴びせかけられたり……」といった言葉を使っているほか、「フレッシュ・ジュース」とい

う表現もしている。あるいは、男性のそれを「日本茶」と呼んでいるが、日本茶を出す時の急須の形から来る連想でそう呼んだのだろうか。しかしそれにしても、フレッシュ・ジュースという表現は言い得て妙。コクがあつて、新鮮な味わいを連想させるではないか。果物のジュースを缶につめネクターと呼んで販売しているが、ネクターとネクター、語呂が似ていて、味もどこか似ているのでは……（もっとも、これはマニアだけの話なのだが）

また、本誌では芳野氏は、「神酒拝受」「Urine」なる言葉を用いているのは既にご存知のことと思うが、同氏は十数年前、「女のしと」という言葉を使っておられたように思うが如何。しとは漢字をあてると「尿」ということになるが、こういう語源であろうか、古くて奥床しい言葉である。私愚考するに「しとど」（ひどくぬれる様子。びっしょり）という意味から来たものではないかと思う。あるいは「しとしと」という音感から来たものだろうか、誰かご存知なら教えてほしい。

「しと」と似た言葉に「いぼり」（またはぼり、ゆまり）という言葉もある。これも語源についてはよくわからないが、なんとなく、そのものを連想させる響をもった言葉ではないか。

△完▽

ヤからは、その後、何の音沙汰もなかった。マヤ恋しさが嵩じてくると、隆作は毎日いらして、立っても坐ってもいられない焦躁感にさいなまれた。隆作は三回ほど、マヤ宛手紙を書いた。十万円の前金も渡してある。やはり返事はなかった。

年甲斐もなく、隆作は懊悩した。はた目には、ずいぶん滑稽に見える深刻さであったが本人は真剣そのものだった。

眠れぬ夜が続く、石川隆作はゲッソリ寝れた。

そんなある日、一通の電報が届いた。

二三ヒハヤブ サデ トウケウヲタツハカタエキニムカエタノム」オオトリ

多津が電文を読んで、

「オオトリって、誰だすかいな」

と訊いた。

隆作は引ったくるように電報を取って、電文を読んだ。

△おお、マヤがくる。とうとうマヤがくるのだ▽

胸がつまり、声も出ない。

南国の暑い夏が、青い波に乗って、もうそこまで来ていた。

（中篇へつづく）

連載時代伝奇小説

緋

ひ

縮

ぢり

緬

めん

地

じ

獄

ごく

(第十七回)

白鳥大蔵

割れ竹の音

久六は、部屋の片隅に寝そべったまま、若い母娘の苦悶の姿態を眺めていた。

からだが弱っているために、起きたくとも起きられないのだ。食欲がないので、なにもたべていなかった。水だけで生きている。しかし、氣力だけはまだ衰えていなかった。

これまでにいくどか苦境におちいり、一時は弱気になったときもあるが、一時をすぎると、また氣力を盛りかえすことのできる久六だった。

こうして、大津屋の若くて美しい女房と娘の、苦悶にのたうつ姿態をみているうちに、彦兵衛に対する久六の敵意と闘志は、ふたたび、めらめらと燃えあがってくるのだ。

「ふふ、ふふふ……どうだお静。痛いかな、苦しいか。どんなに痛くとも、お前につぶされた、おれのこの眼の痛みよりは楽なはずだ。お前のかんざしに突かれた、おれのこの右眼は、もう見えなくなっちゃったんだぜ。見ろ片眼片腕だ。うふふふ……お仙のアマは、おれのことを化け物だとぬかしやがったが、そう言うのも無理はねえ。この片眼の礼は、たっぷりとさせてもらうぜ。なあ、お静」

久六は、虫が這うような暗い低い声で、いった。もう、低い声しかでないのだ。

「ゆ、ゆるして、久六さん！」
お静は、あえいだ。白い頬の筋肉が、ひきつれたように、けいれんしている。

お雪の苦痛をやわらげるために、いまお静は、自分から、つまさき立ちになっていた。十本の足の指さきに全身の重量をかけているために、おそろしい苦痛が襲っていた。胫に異常な力が入って、腿から下が棒のように硬直している。

お静の顔が光っているのは、あぶら汗に濡れているためだった。背中に縛りつけられて

いる手首が、いまにももぎれそうなほど痛々しく、ねじまがっていた。

「うふふふ……いまのお前の姿を、彦兵衛にみせてやりてえなあ。彦兵衛のやつ、どんな顔をしやがるかなあ。うふふふ……」

久六は、地の底からひびいてくる幽鬼のような不気味な笑い声をあげた。

「親分、いっそ、裸にむいてしましましょうか」

政が、首を突きだすようにしていった。

「よけいなことはしなくてもいい。それよりも、政、そこに割れ竹が落ちているだろう。」

その竹で、お静の尻をたたけ。うふふふ。肌に傷がつかねえ程度にたたいてみる」

「へい、かしこまりました」

その三尺ばかりの長さの竹は、すでに先のほうが割れていて、手ごろな、ささらになっていた。

政はその割れ竹をつかむと、母娘が左右に吊られている、そのまん中に突っ立った。そして、にやりとうす笑いをもらすと、お静のまるい尻をたたきはじめたのだ。

お静は、この新しい攻撃に、われを忘れて身をよじり、悲鳴をあげた。腰から下の緊張がゆるみ、突っばっていた両膝が折れまがっ

た。

つぎの瞬間、お雪を縛っている縄が勢いよ上へひっぱられて、お雪はのどがちぎれるような声をあげたのだ。

「ひいッ、おっかさん。ああッ！」

お雪の足は、床から三寸ほども宙へ浮きあがり、上半身を締めつけている縄は、苛烈な勢いを増して、お雪の胸へくいこんだのだ。

久六が、お静の尻をたたけと言ったのは、

この効果を期待していたからである。

政は、また割れ竹をふりあげて、お静の尻を、ぴしッとたたいた。奇妙なほど肉感的な音をだして、お静の尻はゆれた。

着物に包まれているとはいえ、政が力まかせにたたき割れ竹の咎は、お静の身にこたえた。

声をあげまいと思っても、たたかれた瞬間に、つい恥ずかしいほどの悲鳴をあげてしまったのだ。

政のねらいは小気味のいいほど正確だったが、ときどき咎は尻からそれで、背中に縛りつけてある手首や腕を打った。

手首にあたった割れ竹の痛さに、お静は身を一回転させて悲鳴をあげた。肌身に巻きつき、締めつけている縄目がよじれて、いっそ

うぎりぎり、骨にまで苦痛がくいこみ、お静は打たれる瞬間ごとに、背後にいる娘のことを忘れた。

お雪の悲鳴をきいて、すぐまた自分にもどき、あわててつまさき立ちになって、お雪の苦痛をやわらげようと努力するのだが、政が連続してふるう咎の痛さに、その努力も、しだいに、むなしなものとなっていく。

お静は疲れ、自分の目の前がすこしずつ暗くなっていくのを自覚する。尻に鳴る恥ずかしい音も、それほど恥ずかしいとは感じなくなっていく。

お静の唇は、いつのまにかだらしくひらかれ、唾とも、よだれともつかない濁った液体が流れはじめた。お静は、気を失う寸前の状態にいたのだ。

それでも、尻を打たれるたびに、のどの奥のほうから「ひいッ、ひいッ」という悲鳴をふきあげていた。

着物の裾は大きく下から乱れて左右にひらき、膝の上のむっちりとした肉のついている太腿のあたりまで、はだけた。

無残な姿だった。しかし、それをつくろう自由はまったくない。いまのお静は、それを恥ずかしいと思う心の余裕すらないのだ。

お静の目の前が、墨を流したように暗くなっている。

しかし、氣を失うのは、お静よりも娘のお雪のほうが早かった。お静が政の答をうけて突っぱった足の力をゆるめるたびに、お雪のからだは十数度も床から宙に吊りあげられ、同時に、縄は野獣の爪のようにがちりと胸へくいこんで、お雪を苦しめつづけていたのだ。

「おっかさん！」

ひと声さけぶと、お雪のからだは緊張を失って、ぶらりとぶらさがった。こわれた人形のように、みじめで、いたましい姿だった。しかし、お雪にとっては、氣絶したほうがむしろ、しあわせだった。たとえ一時でも、この地獄から逃避することができたのだ。

「くそッ、のびるのはまだ早いぜ！」

政が腹立たしげに、すでに意志を失っている、お雪の尻をたたいた。

みだら虫

「ばかやろう、このアマ、なにをしゃがるんだ。あぶねえじゃねえか！」

刺身庖丁をにぎって、もうすこしでお京の

のど首に突き立てようとしている、おりんの右手を、とびこんできた五郎蔵が、あわててつかんだ。間一髪のところ、その庖丁をもぎとり、頭に血がのぼっているおりんの横ッ面を二、三発、したたかになぐりとばした。おりんは部屋の隅まですっとなでいて、柱に頭を打つと、そのままもう起きあがれない。

肩で息をしながら五郎蔵をにらみつけるおりんの目は、嫉妬をむきだして血走り、髪の毛は逆立っている。

「おい、おりん。ふざけた真似をするんじゃない。この女はな、おれの大事な金ヅルなんだ。てめえみてえなスベタが出てくる幕じゃねえんだ。ひっこんでろい。ぐずぐずしてやがると、この庖丁でてめえのどッ首をかつ切るぞ！」

五郎蔵は激怒し、足をあげると、おりんの顔といわず、胸といわず、めちやくちに蹴りつけた。

おりんは畳の上に、蛙のように這いつくばって、うめき声をあげる。

「ちくしょう。あたしをすてて、この若い女をめかけにするつもりなんだろう。あたしやちゃんと知ってるんだ。このままじゃすま

れないからね。どうするか、おぼえていやがれ！」

脾腹を蹴られてもう一度ひっくり返ったおりんは、顔を醜くゆがめ、わめきながら廊下へ這いだし、自分から庭の敷き石の上へころがり落ちた。

「あたしだって女なんだよ。それを忘れるんじゃないよ。ちくしょう、利用するときは、さんざん利用しやがって！」

と、なおもわめきながら、はだしのままで表の店のほうへ逃げていく。

「まったく、女のヤキモチってものは、しょうのねえもんだ」

大きく舌打ちしながら、五郎蔵はお京のからだに異常がないかを調べた。

どこにも目立つような傷はないが、もどつてくるのがあとすこしでも遅れたら、あるいはお京のいのちは、なくなっていたかも知れない。

裸のまま、床柱に縛りつけておいたお京である。刃物で突き刺されたら、ひとたまりもない。

「おい、お仙。こっちへあがれ」

五郎蔵は、庭へ声をかけた。

黒い縄をうしろ手にかけている縄つき

のお仙が、庭さきに立っていて、不安の目で五郎蔵をみあげた。

見世物師岩松の家で、五郎蔵に縛りあげられたお仙は、自分がつれて行かれる先は、番屋だとばかり思っていた。

ところが、ここは今戸八幡のすぐそばにある『花鳥』という小料理屋の離れである。

「親分、ここは？」

と、お仙はいぶかってきく。つれてこられた場所が番屋ではないのでホッとしたが、また、べつの不安が湧く。

「まあ、そんなところに突っ立ってねえで、こっちへあがれ」

五郎蔵は、うす笑いをうかべながら、お仙の縄じりをとって、部屋のなかへ引きずり入れた。

部屋へあがって、ぺたりと畳の上に腰をおとしたお仙は、床柱を背にして縛りつけられている女の顔をみると、ぎょっとして、目を見はった。

「お前はお京……お京じゃないか！」

お京も、さすがにおどろいて、お仙の顔をみた。

「姐さん、お仙姐さんじゃないの」

二人の女の視線が、寸時、火花のでるよう

な激しい敵意に燃えた。

五郎蔵は、その二人の顔をみくらべて、にやりと笑った。

「そうか。お京は立花屋久六一家子飼いの女掏摸で、お仙は久六のめかけだったなあ。たがいに顔は見知っているはずだ。こいつは話が早いぜ」

この岡ツ引きは、自分の情婦にやらせている小料理屋の離れ座敷へ二人の女をとじこめて、これからゆっくりと、楽しみながら尋問をはじめようというのだ。

五郎蔵はまず、お京の前へどっかりとあぐらをかいた。

胸にくいこんでいる縄のあいだから、むっちりと突きでている左右の隆起を、卑しい目で見くらべながら、五郎蔵は口をひらいた。

「お京。深川扇橋の見世物師岩松の家に、久六はいなかったぞ。おめえ、まさかおれに、嘘を言ったんじゃないやあめえな」

「そんなはずはありませんよ。久六はたしかに、岩松の家にいるはずですよ。それはこの、お仙姐さんにきいたらわかります」

お京は、首を横にふりながら、必死になっ

ていった。

この男にそばへ寄られるだけで、お京の肌

には粟粒が生じてくる。この岡ツ引きの目はそれほどいやらしく濁っている。目玉の周囲の白い部分に、青と赤の細い筋が何本も浮いていて、それがみだらな虫のように、いつもうごめいているのだ。

その五郎蔵の濁った目が、こんどはお仙にむいた。

「ほんとうか、お仙。お京の言うように、ほんとに久六は、ヤレツケの岩松の家に隠れていたのか」

きかれたお仙は、一瞬、なんとこたえたらよいのか、迷った。

いまここで、本当のことをしゃべって、よいものか、どうか、見当がつかない。なにしろ相手は岡ツ引きである。

しかし……とまた、お仙は思いなおす。

久六とは、もう縁が切れたはずだ。いまさらあんな化け物に、義理だてすることなんかありやしない。あんな片輪者の化け物なんかどうなろうと、もうあたしの知ったことじゃない。

こんどは、この五郎蔵をうまくたらしこんでやろう。岡ツ引きのくせに、かげでこんな小料理屋を女にやらせている男だ。きつと、たより甲斐のある男にちがいない。

「いましたよ、久六は。……あの岩松の家にたしかに隠れていましたよ。大津屋のおかみさんと、娘と一緒にね」

お仙は、いまの五郎蔵が最も知りたいことを、ぺらぺらとしゃべってしまったのだ。

「なんだと。やっぱり岩松の家に、大津屋の女房と娘がいたのか。するってえと、いまでもいるのか！」

五郎蔵の声が、思わず高くなった。

だが、すぐに冷静になって考えた。

いや、そうじゃねえ。おれが踏みこんだときには、久六も、大津屋の女房も娘もいなかった。その気配がなかった。

ということは、おれが踏みこむ前に、久六と人質の女二人は、あの家から、どこかへ移ったのだ。

そうにちがいない。おれのカンに、くるいはない。

五郎蔵は、腹のなかで舌打ちした。おそろく、ひと足ちがいだったにちがいないのだ。

もうちょっと早く踏みこんでいれば、二人の女を救いだすことができた。そして大津屋彦兵衛から、たんまりと礼金をもらうことができたのだ。

惜しかった……と悔んでみたが、もうおそ

い。久六は、二人の人質の女をつれて、こんどは、どこへ雲隠れしたのか。

痛め吟味

「お仙。おめえは顔に似合わねえ正直な女だな。おれは気にいったぜ。おれの知りたいことを、もうすこししゃべってくれば、その縄を解いてやつてもいいんだが……」

五郎蔵はお仙の肩に手をかけ、愛撫するようにさすりながらいった。

お仙のぼってりした肉づきのいい白い顔が小判の山に見えてくる。

大津屋彦兵衛から内密にたのまれたお静とお雪のゆくえ。そいつが、どうしても知りたい。久六の人質になっている二人をうまく取り返せたら、褒美の金は望み次第……。

五郎蔵は、舌なめずりした。あの大身代の大津屋が口にしたと言った望み次第という言葉は、文字通りの望み次第にちげえねえ。

「それで、お仙。久六は、お静とお雪の二人をつれて、こんどはどこへ移った？ どこへ逃げやがったんだ？」

五郎蔵は、膝をのりだしてきいた。

「さあ、それが……もし久六が逃げたとした

ら、その先は……あたしにもよくわかりませんよ。いえ、本当なんです。なにしろあたしは、親分もごらんになってご存知のように、岩松のために裸にされて縛られて、ねちねちくどかれていたんですからねえ。あのとき、半九郎が入ってきて、岩松を斬ってくれなかったら、あたしやどうなっていたか、わかりやしない……」

お仙は、しゃべらなくてもいいことまで、また、ぺろりとしゃべった。

「なんだと。半九郎が、岩松を斬った？」

五郎蔵の目が、キラリと光った。どんな片言も、この男の耳はするどく、ききつける。

「半九郎ってのは、何者だ。ヤレツケの岩松を斬ったのは、その半九郎というやつなんだな？」

完全に岡ッ引きの目つきになっている五郎蔵だった。

お仙は、ウツと息をのみこんだが、もうおそい。ここまでしゃべったら、もう駄目だ。

大津屋の人質をめぐっての久六と岩松のいざこざ、さらに用心棒の寺尾半九郎のこと、そしてオランダ歌留多の秘密まで、洗いざらいぶちまけないと、この蛇みたいな岡ッ引きは、あたしをゆるしてくれないだろう。

お仙は、身が縮んだ。

こんどの騒動のもとをたどっていかれたら大変なことになる。

なにしろ、殺したり殺されたりした人間だけでも、まず南町奉行所の同心八木沢左内、久六の子分の新助、銀三、源次、そして岩松など、数が多い。これらの人殺しには、お仙もかならず、ひと役買っているのだ。

罪状のすべてが発覚したら、お仙もまた、ハリツケ獄門、さらし首の極刑は、まぬがれないだろう。

「おい、どうした、お仙、啞になったのか。岩松を殺したのは、その半九郎なんだな？」

五郎蔵が、凄んだ声をだした。

お仙は息をのみこんだが、もう遅かった。そんなお仙の表情の変化をみのがするような黒縄の五郎蔵ではない。

「その半九郎ってのは、だれだい。きかせてもらおうじゃねえか。ええ、お仙？」

五郎蔵は、腰から十手をひきぬくと、お仙の鼻の前に突きつけた。

この女に縄をかけて、ここまでしょっぱいできたのは、やっぱり無駄じゃなかったと、五郎蔵は自分のカンのよさを、自分でひそかに誇った。こういうカンが的中したときこそ

岡ツ引きにしかわからない愉悦がある。

「半九郎というのは……」

いいかけて、お仙はごくりと唾をのみ、自分のすぐ横に縛られているお京に目をやってから、あとをつづけた。

「寺尾半九郎といって、久六が雇った用心棒なんです。ものすごく強くて、平気で人を殺す男なんですよ」

「侍か。……浪人者だな」

と、五郎蔵はつぶやく。

「ええ。……なんでも、久六に雇われる前には、大津屋の用心棒をしていたということなんですけど、大津屋を裏切って、久六に手を貸すようになったと言っていましたよ」

「なんだと？ はじめは、大津屋の用心棒だったのか？」

堅儀の廻米問屋が、なぜそんな乱暴な用心棒を雇う必要があるのか？

五郎蔵の胸に、大きな疑念が湧いた。

どうもこの一件は、大津屋彦兵衛を中心に、黒い妙な渦が、血なまぐさい泡をふきだしながら、ぐるぐるまわっているような気がする。

——なにかあるな。こいつはただの、みのしろ金目当てのかどわかしじゃねえぞ！

五郎蔵は直感した。

「その寺尾半九郎が、なぜ、岩松を斬ったんだ？」

五郎蔵の追究は、俄然きびしくなった。

「そ、それは、あの……久六と岩松が喧嘩をして……」

お仙は、しどろもどろになる。

「そいつは妙だな。久六と岩松は香具師仲間の兄弟分じゃなかったのか。仲のいい兄弟分が、なぜ喧嘩なんかしたんだ？」

「あの……たぶん、女の奪い合いじゃなかったんでしょかねえ」

お仙は、次第に追いつめられてくる。

「女の奪い合い？ その女ってのはだれだ」

たたみかけるように、五郎蔵はいった。

お仙ののどが、ぐとつままった。その問いに対する返事は、いくらなんでも、うっかりできない。

「おい、その女ってのは、一体、だれなんだよ」

お仙は、顔じゅうに不安の色をうかべて、首を横にふった。

五郎蔵の表情がけわしくなった。

「やい、お仙。てめえ、痛い目がみてえんだな。そこまですらすらしゃべって、そこから

先がしゃべれねえって法はあるめえ。おい、おれをだれだと思う。黒縄の五郎蔵だぜ。女を責めることにかけては、自慢じゃねえが、江戸で一番の岡ッ引きだぜ。ええ、おい、お仙……」

五郎蔵の十手が、お仙を縛った縄目に、こじいられた。ちょうど左の乳房のまるみの下あたりにかかった縄のあいだに、十手の先をこじいられたのだ。

「うッ、ううッ……痛い、痛いよ、親分」
お仙は、からだを前に折って顎をふるわせながら苦痛を訴えた。

こじられるたびに、肉がねじれる。十手の固い先端は、骨までとどくかと思われるほど残忍に、ぐりぐりとお仙のゆたかな胸のやわらかい部分をえぐってくるのだ。

「ああッ……ひいッ……痛ッ、痛いよ。あ、ああ、親分！」

黒い縄に上下を締めつけられた豊満な年増ざかりの乳房が、大きくとびだしてふるえている。両膝がくずれてきて、着物の合わせ目から、むっちりとした白い脚がさらけでる。

「痛かったら、先をつづけるんだ。みんな吐いちまうんだよ。知ってることは吐いたほう

が、さっぱりするぜ。ええ、おい、お仙」

五郎蔵は、手を休めた。

お仙は両眼をうつろにひらいて、荒い息を吐いている。

「素直だと思ったら、おめえも案外しぶといんだな、お仙。そう強情をはるんならしょうがねえ。すっ裸に剥いで、もう一度この黒い縄で縛りあげた上で、おれの得意のとろろ責めといくか。やい、お仙。おめえ、とろろ責めっていうのを知ってるか。なに、そんなもの知らねえ？……ふふふ……知らねえのなら教えてやるぜ。どんなにしぶとい女でも、おれのとろろ責めをくらったら、半刻もたたねえうちに、ひいひい声をあげて泣きわめくんのだ。この白いむちむちした肌を、ひと晩じゅう、とろろ責めでかわいがってやろうか。へへへへ……」

五郎蔵の口が、お仙の耳たぶをなめるほどの距離に接近して、いやらしい抑揚をつけながら、ささやくのだ。

ささやきながらも、十手をにぎったほうの手は寸時も休まずに、ぐりぐりと乳房の下のところを突きなぶっている。

お仙は、腹の底から声をだしてうめいた。
この岡ッ引きなら、そのとろろ責めとやら

を、本当にやるだろう。五郎蔵のねちねちした、うれしそうな声をきいているうちに、そのとろろ責めというものが、お仙にもすこしずつわかってくる。想像すると、ぞおっとして、背筋から腰のあたりまで寒くなってくるのだ。

「言います、言います。親分、言いますからもうゆるして！」

お仙は髪をふりみだし、自分の年を忘れて小娘のような悲鳴をあげた。

残酷歌留多

お仙の屈服に、五郎蔵の手の力が思わずゆるんだ。

「そうかい、そうかい。それじゃ、久六と岩松の争いのもとになった、その女の名前をきかせてもらおうかい」

お仙はあえぎながら、のどの奥から声をふりしぼった。

「その女ってのは、大津屋の……」

「なに、大津屋の？」

十手に、また力がこもった。

「彦兵衛の女房のお静さ」

「お静……そうか。ふてえやつらだ」

五郎蔵は、低い怒声をあげた。

小遣いをせびるために、月に一度ずつは大津屋の店さきへ顔をだす五郎蔵だった。そのときに、お静の姿をみている。芸者のころの色っぽさが、ほのかに残っていて、ふるいつきたいような、いい女だった。

あんな女と、ひと晩でいいから寝てみたいと、五郎蔵はお静を盗み見るたびに、心底から思ったものだ。

「お静とお雪は、岩松の家の土蔵のなかに縛られていたんですよ」

「ところが、おれが踏みこんだときには、久六も二人の女も消えていたんだ。そこで、おれがききてえのは、久六と二人の人の質のゆくえだ。おそらく、その寺尾半九郎とかいう用心棒も一緒にちげえねえ」

「そ、そんなこと、あたしゃ知りませんよ。あたしはそのときには、岩松の野郎に責めつけられて、死ぬほど恥ずかしい思いをしていたんですから」

「おい、おめえは久六のめかけだった女なんだぜ。久六のつぎの隠れ場所ぐれえ、見当がつきそうなものじゃねえか。女を二人もつれているんだ。めったなところに身を隠すことはできねえはずだ」

また意地わるく十手の先が、ぐいぐいと、

うごめきだした。こんどは右の乳房と右腕の腋のあいだに突っこんで、大きくゆっくりとえぐりまわす。

「あッ、待って。痛い、ひいッ！」

お仙は、胸から腰を激しくゆすり、派手な悲鳴をあげた。

そのとき、床柱に縛りつけられているお京が、なにを思ったか、ふいに口をひらいたのだ。

「親分、あたしにひとつ、心あたりがあるんですけどねえ……」

五郎蔵の顔が、お京にむいた。

「お京、本当か。どこだ、言え。言ったら、その縄を解いてやる」

思わずせきこんで、五郎蔵はいった。

お京は、感情をむきだしにして、せまってくる五郎蔵をつめたく凝視し、不敵な微笑をうかべていった。

「うふふ……その手にはもう乗りませんよ、親分。さっきはそれで、うまうまと一杯くわされたんですからね」

うっ、と五郎蔵は、つまった。そのとおりである。

「とにかく、この縄を解いてくださいよ。冗

談じゃない。こんな黒い縄で縛られて、あた

しゃ手も足もしびれて、生きた心地がしやしない。それから、あたしの着物を返してくださいな。着物をきてから、あたしが親分を、

久六の隠れている場所へご案内します。これならおたがい、嘘はつけない。どうです、

親分、名案でしょう。もしあたしが嘘をつい

たとわかったときには、その場でまた、あたしを裸にして、縄をかけておくんなさい。あ

たしがご案内した場所に久六がもしいなかったら、あたしのほうから両手をうしろにまわ

して、だまって親分に縛られますよ」

つとめて平静をよそおい、冷笑をうかべながら言うお京だが、内心は必死だった。

たとえ、いつときでもいいから、いやらしいこの黒い縄から脱けだしたかった。

「早くしないと、久六のやつ、なにをするかわかりませんよ。せっぱつまったら、二人の女を殺すかも知れませんよ」

お京は、さらにひと押しした。

その気迫に負けたように、

「そうか……」

といって、五郎蔵は数呼吸考えたが、

「まあ、それもいいだろう。だが、おれに無駄足を踏ませるようなことをしたら、どうな

るか、わかっているだろうな、お京」

底光りのする目で、念を押した。

「あたしを信用してくださいよ、親分。さっきだって、嘘をついたのは、親分のほうなんですからね」

「よし、善はいそげだ。お京、縄を解いてやる」

五郎蔵は、ようやく決心した。

それまでお仙の縄目に突っこんでいた十手をひき抜いて、自分の腰にさすと、お京の縄を解くために立ちあがった。

そのはずみに、五郎蔵の懷中から、オランダ歌留多の半片が、ひらりと落ちた。そして偶然にも、お仙の膝の上へ、舞うようにして乗ったのである。

お仙とお京の視線が、同時に、その歌留多へそがれた。

「あっ、オランダ歌留多！」

顔色を変えて、奇声を発したのはお仙のほうだった。

五郎蔵は、すばやく二人の女の表情を読みながら、自分の懷中から落ちたオランダ歌留多を、ゆっくりとひろいあげた。

五郎蔵が二人の女の前で歌留多を落としたのは偶然だが、その歌留多をみて、二人の女

が同時に顔色を変えたのは、けっして偶然ではなかった。

「おい、お仙」

五郎蔵は、ふいに猫なで声をだして、お仙の前にかがみこんだ。

「この歌留多は、岩松の家の裏庭でひろったんだが、こいつに、どういう意味があるんだか、教えてくれねえか」

お仙の顔から、血の気がひいた。

「ななめに半分、すっぱりと切れているところに、なにか、いわく因縁がありそうだな。おい、この妙な歌留多が、岩松の家の裏庭に落ちていた意味を、おれにきかせちゃくれめえか」

お京は、身を固くして、自分の乳房の上にかかっている縄をみつめている。歌留多の意味をしゃべって、自分の利益になることは、ひとつもないのだ。利益どころか、ますますこの地獄の泥沼から這いあがれなくなる。

「おい、お仙、お京。こうなったら、どっちでもいい。このオランダ歌留多の謎を、おれに教えてくれたほうの縄を、さきに解いてやるぜ。もし、知らねえなんぞとシラを切ったりすると、おれはおめえたちの肌に、なにをするかわからねえぜ。……おい、どうした、

なにを黙っていやがる。ここをただの小料理屋の離れ座敷だと思ふなよ。本当を言うと、とろろ責めなんざあ序の口だ。その押入をあけてみる。おめえたちの、その白いやわらけえ肌を拷問する、おもしろい道具がいっぱい詰まってるんだ。おれもいままで、ずいぶん女を責めてきたが二人の女をこう並べて一緒に責めたことはねえ。どうしてもしゃべらねえと言うのなら、二人一緒に、すっ裸にして縛りあげ、どっちが先に悲鳴をあげるか、腕によりをかけて責めぬいてやろうか。どうだお仙、お京」

五郎蔵は、また腰から十手をぬくと、お京の膝の上を、軽くたたいた。

その十手の非情な感触に、お京は総毛立った。お京の四肢のすみずみまでを、猫が魚の骨をなめるように、ねちねちと責めなぶった十手である。どんなにいやらしい十手か、しつっこい十手か、お京の肌は知りつくしている。

じわじわと這いのぼってくる十手の感触につめた汗を全身から流しながら、お京はあえいだ。

「なあ、お仙、やっぱりおめえから始めようか。それにはまず、この着物をぬいで、裸に

わが要望——緊縛美雑感

なってもらわねえ。おれのこの黒い縄は、裸の女のほうが好きなんだ」
五郎蔵は卑しく笑いながら、お仙の白いどの下を手で触れると、軽く愛撫した。お仙

は、肩をひねって、その手を避けた。
五郎蔵の両眼が、次第に野獣の光を帯びてくるのを、二人の女は敏感に察した。
「親分、そ、そのオランダ歌留多は、大津屋

彦兵衛の……」
声をあげたのは、お京とお仙と、ほとんど同時だった。
(つづく)

はどういうわけか映画中には登場せず、残念でなりません。

最近の映画では責めのシーンが多い割に、観賞的緊縛容姿はあまり見ることは出来ず、縛りⅡ残酷・縛りⅡ犯す、といったケースにとられすぎている傾向にあります。最近のもので(すべての映画を見ているわけではないので見落としもあるかも知れませんが)観賞的緊縛容姿というべきものを見せてくれたのは日活作品「東京女地図」での佐藤サト子(サト子)が皮具に拘束されたシーンが唯一のものでした。

本誌八月号に青井松造氏が、東映作品「責め地獄」についての感想を寄せられています。極言すれば、この映画が、ぼくも同感です。宣伝ポスターの



～ 緊縛容姿観賞派の立場から～

鈴木 三三

縛り容姿のみでした。(このポスターの縛り容姿は、その殆どが後手首の部分が宣伝文句で消されていましたが「アサヒ芸能」誌登載のものは隠されておらず、実に魅力ある縛り容姿でした)但し、せっかくのこの縛り容姿

東映の一連の作品や、ピンク映画の縛りシーンの演出意図が、残酷さやセックスの表現のみにあるのであれば止むを得ないといえるものの、そのストーリーの構成からみて、観賞的緊縛容姿の表現を為し得る場面がふんだんに備わっていると思われるだけに、その点に意をそそいだ演出や緊縛指導が為されていないことは、ぼくにとっては残念でならない

次第なのです。

○ ○ ○

縛り上げられた美女の容姿の魅力、それは人間一般の普遍的感情です。従来それは隠され、秘められつづけてきています。小説や映画において、美女受難の光景として登場していながら、それはあくまでも悪の行為・受難の表現としてのみとりあつかわれ、その実、そのような表現をなすこと……表現されたその光景に人々がある種の魅力を感じることが人間一般が抱いている普遍的なサド性であることを、肯定的に認識しようとはしてきませんでした。

ぼくの考えでは、縛りに対する人間一般の普遍的サド性が、肯定的に社会に顕在化すれば、テレビのゲーム番組において、美人タレントが後手高手小手に縛られてゲームを行うといった光景も登場して然るべきことになります。例えば、若い女性の羞恥心を煽るといった悪戯は、従来は悪徳とされていましたが最近ではテレビ番組「裏番組をブッ飛ばせ」などに見られるように、ジャンケンで負けた美人タレントの着衣を脱がせたり、トイレにおけるエチケットなどと称して清纯派女優高田美和を便器代用の丸椅子に腰を下ろさせる

等は、いわゆるハレンチという心情が普遍的に肯定されたからに他ならず、縛りもこのような意味において、普遍的魅力として肯定されて然るべきだと考えるのです。競技ゲームに負けた美人タレントが罰ゲームとして縛られる。といったような具合にです。

○ ○ ○

縛りは、残酷・犯す……といったものと結びつかなくとも、状況の設定・演出によってそれ自体で観賞的魅力を発揮し得るものであり、青井氏が莫然と考えておられるような縛り……「笑っていてもサマになる」……縛りの魅力もあると、ぼくは考えます。

テレビ番組「プレイ・ガール」「俺とシャム猫」など、観賞的緊縛容姿への演出を行なうて、スリラー・エロチック・コミック等を味つけとすれば、魅力的なサディカルな番組になると思います。喜劇的に強がり粹がるギャングに、緊縛されながら色気をふりまき悩殺してすきをうかがう美女。緊縛されてなおも勝気な美女に、わざと紳士的に世話をやく紳士ギャング等。

また幻想的スリラーものでは、高い塔の尖端に縛られ繋がるシーン。死を刻む大時計の振り代りに後手に吊られ、揺らされるシー

ン等。特撮方法を用いれば、いわゆる残酷物とは異ったサディスティックな緊縛美が、展開出来ると考えるのです。

○ ○ ○

前記のような縛りに対して、ピンク映画のムードの縛りがあります。ぼくはまたこのムードにおける観賞的緊縛容姿をも好みます。この縛りは前記の縛りに比べて、より責めの要素が強く、また賜るという味も加わっています。このムードの観賞的緊縛容姿の表現強調を、ぼくはピンク映画に期待している次第です。

以前、谷ナオミさんの実演を見たとき、谷さんが「ピンク映画が五社映画に対抗し得るのはベッドシーンにおいて他にない。私はベッドシーンを一生懸命に演技したい」と挨拶の言葉をのべられ、その熱意に敬意を表した次第ですが、ベッドシーンに対するごとく、緊縛シーンについても熱演を示してほしいと思います。

それは、宙吊りや逆吊りを我慢して実行して下さい、といったことではなく、観賞に堪える被縛演技をしてほしいということです。辰巳典子さんは「しっかり縛られていないと演技がしづらい」と言われたそうですが彼女

の被縛演技をみているとうなずける話です。両手を鳴居に吊られて翻られるシーンはよく見られますが、殆どの女優さんの場合は、単にぶら下げられているといった感じにすぎませんが、辰巳典子さんの場合は、吊られて翻られる女の表情が吊られた全身に表現されていて見事です。

ピンク映画におけるある特殊な状況におけるストーリーの構成、特定シーンにおける入念なカメラ・アイ。この二特性を生かし、辰己嬢のような被縛演技の素質をもった女優さんによって、強力で魅力的な、ピンク映画特有の観賞的緊縛シーンを生み出してほしいものです。

女性写真モデル募集

分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。
○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。

○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

○ ○ ○

ところで観賞的緊縛容姿を構成する基本的なポイントは、緊縛された体の表情、顔の表情、緊縛された手首の表情、この三点が有機的に演技し、その動きをカメラが効果的にとらえることにあると思います。屈辱・羞恥等の表情と胸・腕・手首を緊縛した縄目との有機的表現は、観賞的緊縛容姿の表現に欠かせないポイントです。また、繋がれ、引き立てられる縄じりと、後手首の表情との表現。加害者とのやりとりの間における縛られた体の微妙な動き。猿轡によって生ずる様々な表情……観賞的緊縛容姿は、責めの方法や縛り方法より、これらの基本的な表現によって

載の上編集部宛お申込み下されば、報酬その他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。

○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇々編集部▽

こそ成立するものです。

これも以前見た実演ですが、後手縛りに猿轡をされた水咲陽子が、芝居が他の二人の役者の会話のやりとりに移っている間、縛られた上体を左右にゆすってもだえたり、猿轡の顔を上向け、せつなげな様子の演技をして縛られた身にたえず動きをつけていましたが、縛りそのものは簡単なものでしたが、仲々良い緊縛容姿でした。

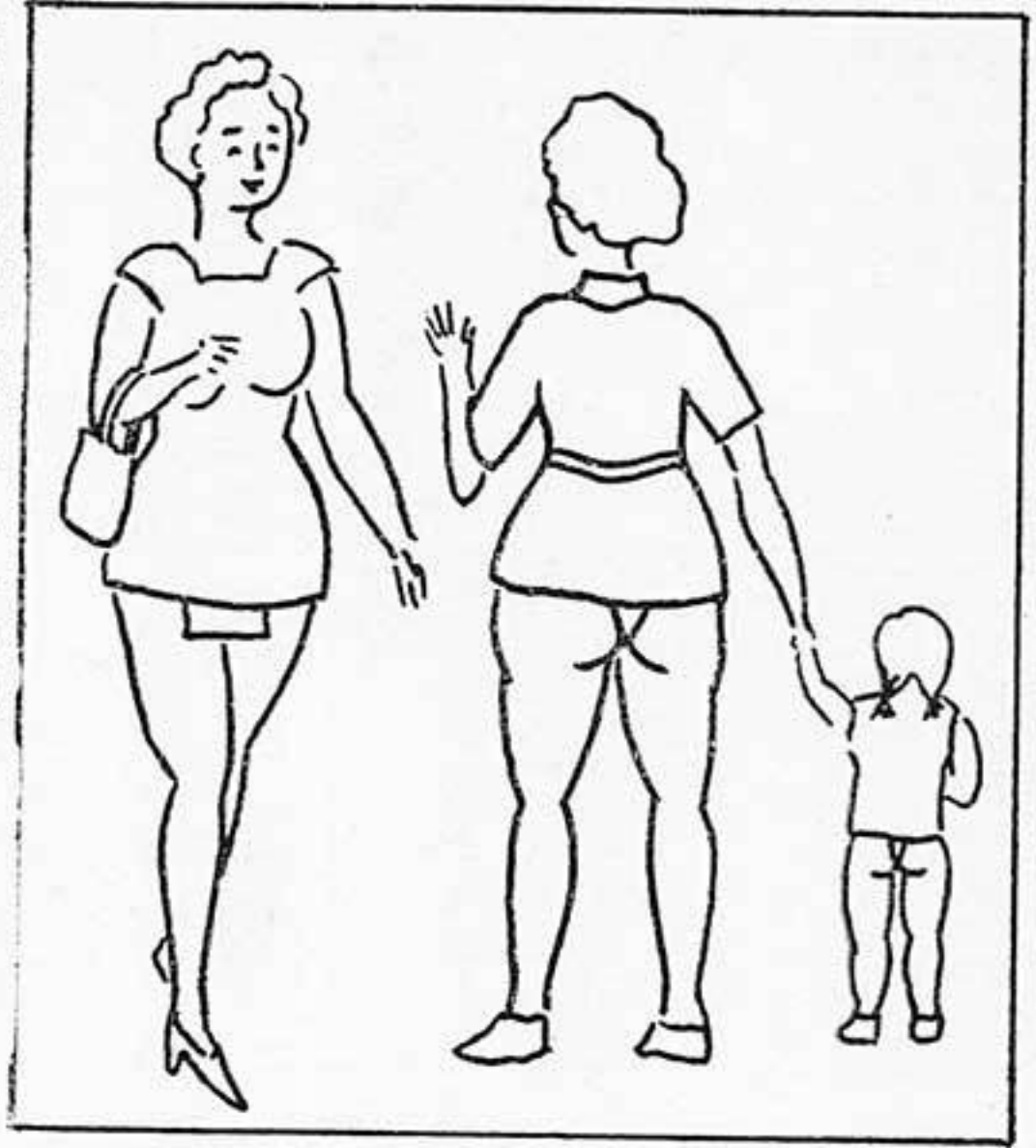
一般映画・テレビの縛りシーンが、しばしば所謂緊縛映画より以上の観賞的緊縛シーンを与えてくれるのは、縛りは簡単でも、縛られる、捕えられるということに対しての動きが、演出・演技にとり入れられているのに対し、所謂緊縛映画では、責めに対する大げさな演出・演技があるだけで、縛られるということ自体についての微妙な被縛演技・演出が欠けていることにあると思います。

○ ○ ○

以上、思いつくまま勝手なことを書きました。また今回は筆がつかぬので触れることをやめました。本誌八月号の紫仮面氏の感想にも、同感の点が多かったことを記し、筆をおきます。

—以上—

(カット・山田 毅)



さて、私じしん、ビキニふんどしには、あまりなじみがありませんが、映画や写真で見る欧米の女性のビキニ姿には、「ふんどし大賞」を贈りたいような、みごとなのが少なくありません。

こまかいことですが、以前「軽蔑」という映画を見て感心したことがあります。アメリカのドル支配を痛烈にやっつけている映画ですが、ブリジット・バルドーが、ベッドで裸で寝そべっているシーンで、そのお尻にビキニの陽やけ跡がクッキリとうつっています。それが、パンティ型でなく、明らかにふんどし型なのです。演出か、偶然か、わかりませ

私の体験談

ふんどし物語

(下)

文と絵

鈴木ゆり子

んが、どちらにしても、フランス女性が、ビキニふんどしを自分のものに行っているには違いありません。

一九六五年の夏、私は映画でなく、じかに自然のままのフランス人のビキニ生活にふれることができました。能登沖の舳倉島に四泊まったのですが、その内、二日間、フランスのテレビ局の一行十数名と一緒にいたのです。日本人は合計四名。二人は男の技師、二人は女性の通訳でした。フランス人の内、二人は女性、のこりは中年の男性でした。女性は四人とも二十台のなかばぐらい。フランス女性のうち一人は、たまたま来日中の

女優。もう一人は高校の先生だということですが。二人共キングサイズではなく、中肉中背ですが均整のとれたよい体をしています。

さて、二人の島での生活は、家の内外を問わず、ほとんどビキニ・スタイルでした。日本のセパレート型水着のような醜悪非合理的なものではありません。人間が運動すると、腰のあたりの筋肉が伸縮するものですが、背腹ともに動かない逆三角形の部分があります。この部分だけを被覆し、筋肉の動きの邪魔をしない合理的な水着です。女優はボタン色と紫、先生は濃淡のある赤、青の幾何学模様、ブラジャーも同じ布です。着用すると、生け

花の「根締め」のように、体のアクセントになっていますが、物干竿に干したところは、それこそ小さなボロ切れのかけらのようなものです。

手入れには、顔と体にまったく区別がありません。オリーブ油か何かを絶えず薄く塗り込み、全身に陽を浴びて堂々と歩きます。

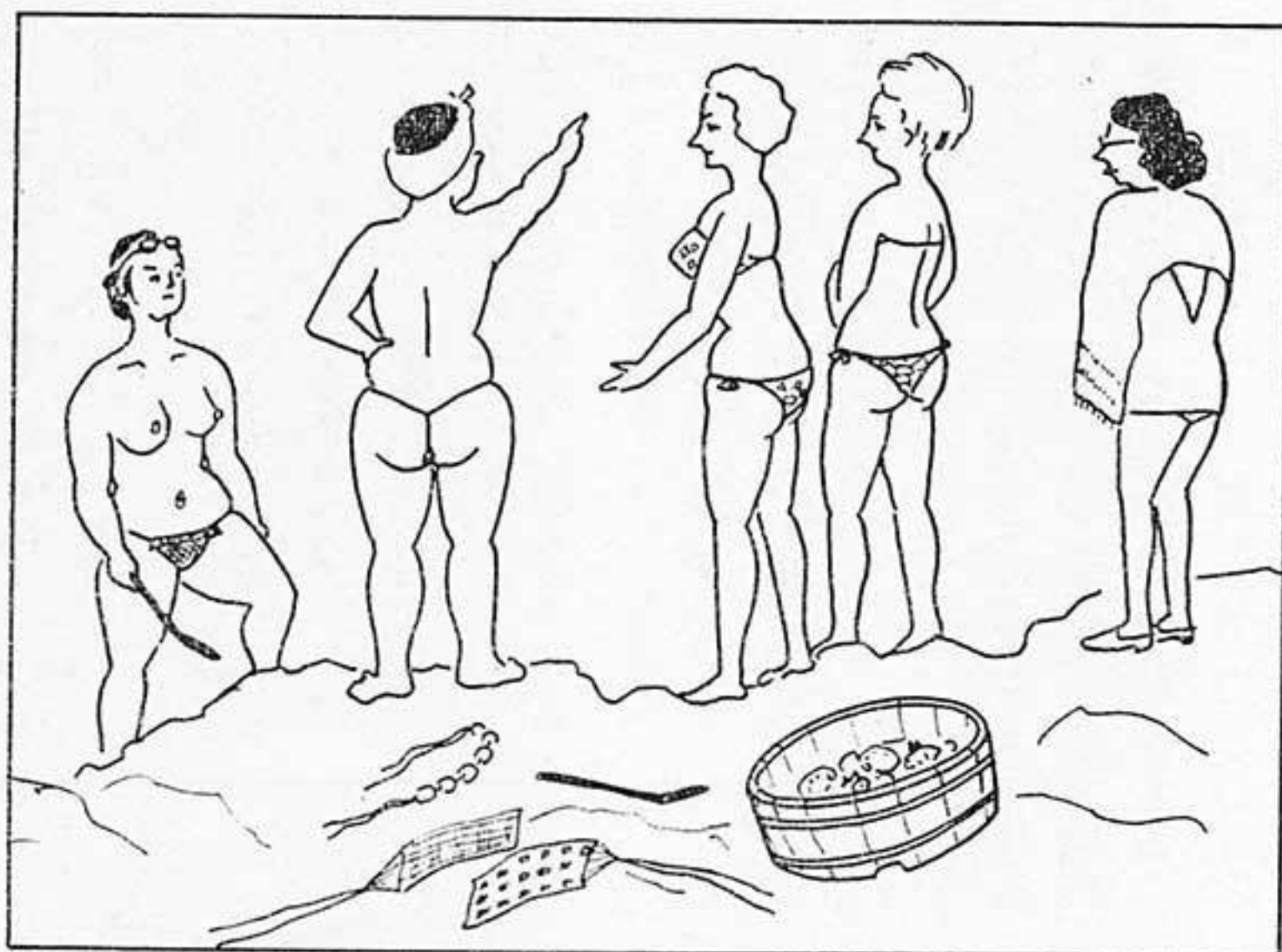
日本人の女性は二人とも空色のワンピースの水着を着て、そのうえ、肩にバスタオルを羽織り、にわか雨にでも逢ったようなかっこうで、日蔭を縫ってヒョコヒョコ歩きます。同じ期間の滞在なのに、日本人は、もやしのように青白く、フランス人は裏も表も茶色く輝いています。

夏になると、毎年きまって、週刊誌にビキニ水着論が出ます。署名、無署名を問わず、それらの結論は殆ど同じです。曰く、日本人の体格は白人より劣っているのだから、ビキニは似合わない。

こんな不見識なことを書く人間の、間のびした顔を見てやりたいような気がします。あとで、サイズの所で述べますが、舢倉の海女さんは、みんなビキニどころか、ブラジャーはなく、前は逆三角、後は縦一本ですが、フランスの女優とならべて見劣りする人はひと

りもいません。要は体格ではなくて「尊厳」の問題だと思っています。フランス人は、市民の力で皇帝を抛り出し、今世紀には外国の占領軍とその手先を血祭にあげて、身を以て人間の尊厳を守ったのです。

大せつな体に太陽の恵みを受ける機会を当然の権利として闘い取り、憶面もなく実行す



ればよいのです。その気力があれば、体格など問題ではありません。女子大の仏文科を出たのか何だか知りませんが、二人の通訳女史は、ワンとも言わずに尻尾を巻いて逃げる負け犬みたいなもので、こんな人にビキニが似合う筈がありません。

さて、極端な説かもしれませんが、顔とか気だてとか、いろいろな不純な要素を取りのぞいて考えたとき、ほんとうの女性美は何できまるのでしょうか？ たとえば百万円の着物を着た女性は、衣紋掛けの役を受け持っているに過ぎません。私は、女性美の六割までは、お尻の露出面積に陽やけ度を掛けた値で決まるような気がします。その点、さすがのビキニ美女も、舢倉の海女のサイズ一本の美しさにはおよびもつきません。

〔縄ふんどし〕

サイズに入る前に、縄ふんどし一般にふれておきましょう。

学者先生がおっしゃることには、「なるほど」と感心して、後で「ハテナ？」と思うことが少なくありません。ふんどしの起源も、その例です。たいていの本には、次のように書いてあります。

ふんどしは、昔は犢鼻褌と書かれていた。

これは、牛の鼻の孔から足を出す、つまり今日のズロースのような形のものである……。

考えてみると、みょうな話です。ズロースが進化して、どうして、ふんどしが生まれたのでしょうか？ 南洋の原住民やアメリカのインディオも、日本人そっくりのふんどしを締めています、あれも昔はズロースだったのでしょうか？

私は、学者の説がウソなのだと思います。日本の、しかも現存している文献だけから物を考えるので、こんな近視眼的なあやまちを犯したのでしょうか。「褌」というのは、いまの「ふんどし」に対応するのではなくて、単なる「はかま」の事だったのではないのでしょうか。そうすると、褌鼻褌は、ミニはかま、つまり昔の半ズボンのことで、ふんどしは別にあつたのだと思います。

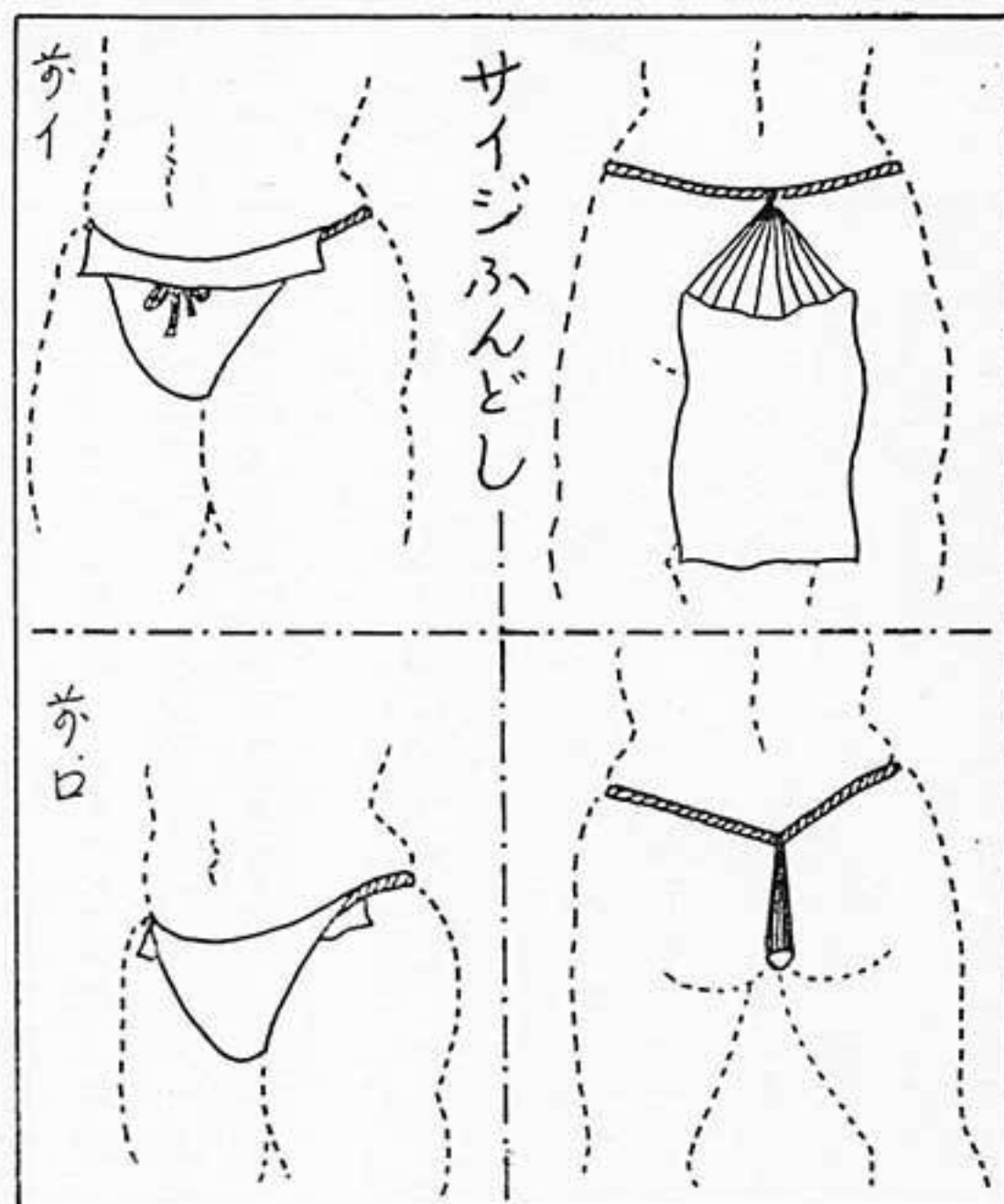
昔は出版文化がありませんから、現存している文献や絵は、ごくわずかなものです。今の男の人は、殆どがブリーフをはいています、ブリーフが登場する文学や美術品は目につきません。そのぐらいのもんですから、文献に出ていないから、昔の日本には、ふんどしがなかったと断定するのは冒険ではないでしょうか。

さて、それでは、ふんどしの直系の祖先はどんなものだったのでしょうか？

「イブの砂」という映画がありました、これが或る事件で、ヌーディストの団が、南海の無人島で生活しなければならなくなった、という設定になっています。そこで、ヌーディスト達が始めた第一の仕事はジャングルの茨や虫からデリケートな部分を守るために、草の繊維で縄をない、シュロの皮等をつけて、ふんどしを作ることだったのです。

ふんどしの始まりは、こんなところではないのでしょうか？ その内、着心地のよい織物が発明されると、ふんどしの前袋がまず布になったのでしょうか。布が貴重品だった時代には、紐まではなかなか布が進出しなかったと思われる。江戸時代でさえ、わらの帯、わらの元結が普通だったそうですから、この想像は、それほど外れてはいないと思います。

この状態のふんどしを「縄ふんどし」と言うことにしましょう。男用の縄ふんどしは、北九州の潜水漁民の間に残っています。女用のものにヘコとサイズがありますが、この三



者はおそらく同じ起源ではないでしょうか？ 中国地方や九州では、はかまや、ふんどしのことを、一般にヘコと言いますが、ここで問題にしている狭義のヘコは、対馬の曲部落の海女のふんどしです。これは、前袋とたてみつつが一体としてつながった布できており、ふつうはハッコナワといっしょに締めます。ハッコナワは舳倉へ行くと完全にふんどしから独立していて、ハチコと呼ばれています。

日本に少なくとも三種類の縄ふんどしが残っており、ヤップ島には今でもイチビ草のふんどしがあるそうです。古い写真集を見ると

南米のバカイリ、ファイヤ・ランド、カラド旧英領ギアナ等では若い女性が縄ふんどしを締めています。今の内に世界じゅうをさがせば、男女のいろいろな縄ふんどし類が見つかる可能性が残っていそうです。

世界の熱帯や亜熱帯で、人類の進化と共に草ふんどしのようなものが生まれ、その中のある物は縄ふんどしを経て、布製のふんどしにまで発展したのでしょう。各段階で、民族の移動や交易があり、その結果、現在のふんどし地図ができ上がったに違いありません。日本の各種のふんどしも、この世界ふんどし地図の中の点として理解すべきではないでしょうか？

こういう訳で、縄ふんどしは、ふんどしの歴史の中で極めて重要なものですが、恐らく誰も研究していないかと思われれます。

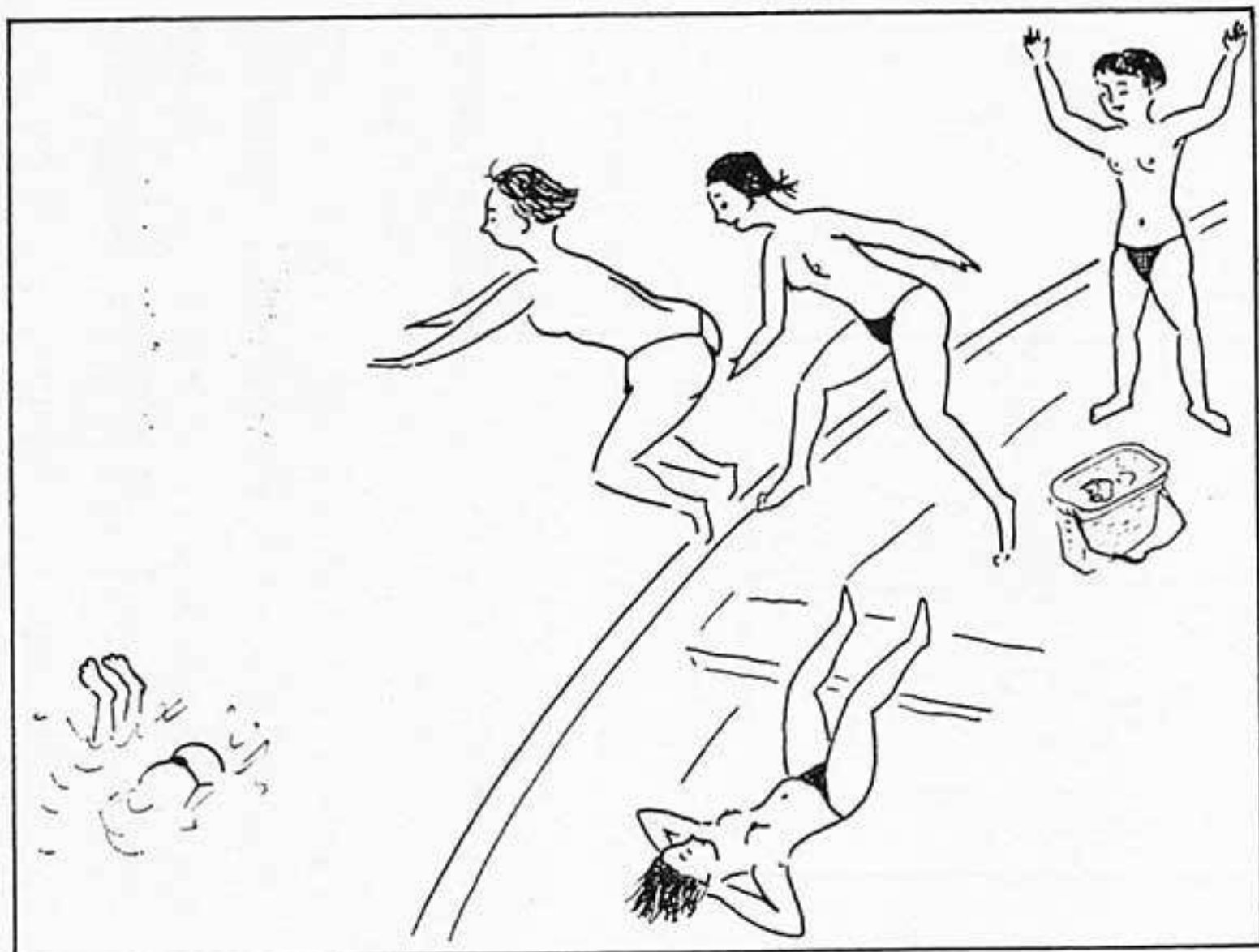
井上ますみさん、出雲肌香さん、亀山順子さん。この仕事をするのは、私たちより他にないわよ。ああ、世界ふんどしハントに行きたい！

「サイズ」

サイズは舢倉島および七つ島の海女さんだけが締めているもので、アイデア、美しさ、実用性、あらゆる点から言って、縄ふんどし

界で最高の傑作です。

写真をごらんになった方は多いと思います。が、前から見ると水泳ふんどしそっくりの逆三角形、後から見るとTまたはY字形です。Yのたては一本の細い紐のように見え、いちばん下に、布がちょっと頭をのぞかせています。腰紐は白い縄で、原則として、どこから



も結び目が見えませんが。写真を見たぐらいでは、ちょっと構造がわからないもので、本誌にのった久我芳一さんの文章のさしえはサイズになっていませんし、さすがの松原三千代さんも、見当違いの想像をしておられます。地元、輪島でさえ、わきで紐をむすんだ黒い水泳ふんどし姿の海女さんの絵はがきを売っている位ですから、無理ありません。

もともと女性の仕事着であり、部屋着であり、島での街着でもある、たいせつな衣裳ですから、各自が体に合わせて、心をこめて作ります。従って決まった規格はありません。標準的なものを申し上げますと、長さ四十二センチ、巾三十二センチぐらいのネルの布の一端に、十ないし十数束の黒い木綿糸を立間隔にとりつけ、その糸の他端約八センチのところをひとつにまとめて、約九十センチの白い縄の中央に結びつけたものです。

縄の太さは、直径一センチ近いものから、数ミリのものまであり、主には木綿ですが、漁網の部品ですか、化繊のゴウゴウしたものもあります。黒糸の一束は四本ぐらいのことがふつうです。

縄を腰に巻いて臍の下でキュッと結ぶと、後に、糸の束でつりさがった四角い布がヒラ

ヒラします。これを前へ持って来て、越中ふんどしと同じ要領で、腰紐にはさめばよいのです。

越中の場合、二、三十センチも前だが垂れますが、サイズの場合は、ほんの二、三センチ、縄の結び目がかくれる程度のものです。人により、また場合によって、前垂れの部分が内側へ入るように、逆にはさむこともあります。

わずか二、三センチでは、賭け事と何とかではないが、前からはずれるのではないか、と心配なさるでしょう。しゃがめば、後がみごとなY字になり、また、潜水という最重労働をする訳ですが、はずれるような事は決してありません。女性の体というものは、そういうふうに出てくるのです。男性では、とても無理でしょう。

うしろは、この場合、四十本の黒糸が重なり合って、一本の細い紐のように見える縦みつになります。股下は、全部、やわらかいネルで覆われています。



ネルの柄は、紅の水玉もよう等、派手なものも見受けますが、黒っぽい系統のこまかい格子縞など、地味なものが多いようです。体の色が濃く、空と海と岩の世界なので、それが実にシックで、心憎いばかりの配色です。短靴をはき、カメラをぶらさげてゾロゾロ通る観光客の、黄色い、くたびれた顔とくらべると、全く異人種のようなです。アルゼンチンの川崎大使も、舢倉の海女さんを知っていたら、日本人は魅力に乏しいなどと書かずに

すんだ事でしょう。

古老の話によると、昔はマツマイサシと言って、さらし木綿にさしこを施した布が用いられていたようですが、今では全く見られません。一方、二、三年前から、縄の代りに布製の紐を使ったものがふえて来ました。

ひと仕事終えて、体をあたためる為に海から上がると直ぐに乾いたサイズと取り換え、ぬれたサイズは磯なら岩の上、舟なら板の上にひろげておきます。布の部分は半紙ぐらいの大きさなので、夏の陽ざしに、たちまち乾いてしまいます。こんな合理的で美しい労働着を、私は他に見たことがありません。

志摩や伊豆の海女は数メートル潜る程度がふつうですが、舢倉では二十メートルから、最高四十メートルまで潜ります。一方、人間の息の長さは、激しく労働している場合、約一分と決まっていますから、わずかな水の抵抗や、筋肉の動きに対する邪魔が大きな障害になります。この点、サイズは、まず理想的なものと言えるでしょう。

さて、舢倉島は、能登半島の突端、輪島の北方約五〇キロメートルの沖合に浮かぶ偏平な小島で、周囲は約六キロメートルです。シベリヤに面した岸は黒茶色の安山岩の磯、本

土に面した部分には、登山ことばで言うガレ石がゴロゴロした浜があります。このあたりに、たくさん海土小屋があり、夏は二百前後の家族が住んでいます。秋の祭がすむ頃には大半は輪島市の海士町に引き揚げます。

島のまわりにひろがった陸棚は恰好の漁場で、女は海に潜って、アワビ、サザエ、ワカメ、エゴグサ等を探り、男は発動機船を出して、トビウオ、鯛、サンマその他、季節の魚を獲ります。その他、寒中には香り高い磯海苔が育ちます。

夏の朝は四時頃に、島の活動がはじまります。父ちゃんと、小学校か中学校の男の子が起きて、ふたりで船を出し、まだ暗い海を、ポンポンと沖へ向かいます。前の日に仕掛けておいた刺網をあげている内に、東の水平線に、たらいより大きい真赤な朝日がのぼります。

船が帰って来る頃、海土小屋には煙が立昇り、主婦としての海女が出入りし、潮できたえた大きな声で、隣どうし、あいさつ等はじめます。朝の標準スタイルは、白い袖なしにフワツとしたスカート、髪を包んだ向う鉢巻という所です。しかしモサモサしたものが嫌いな海女さんは、両手があいてさえ居れば、

スカートや腰巻の裾をつまんで脇の辺までたくし上げた形で、立ったり歩いたりします。中学生の女の子まで同じしぐさですが、まことに魅力的で、かわいらしいものです。

スカートをたくし上げたその下は、むろんサイジ一本です。しゃがむ時は、パツとスカートをまくってしまいます。輪島の海士町の露路でさえ、スカートをまくり、サイジの丁字を見せて漁獲物の仕分けなどしている海女さんを見かけることがあります。島でのスカートの風俗は、おそらく本土との間に観光用の定期船が就航しはじめてから普及したもので海女さんの体は、まだ、これになじんでいないでしょう。

十時ごろ、水がぬるんで来ると、カチカロゲ（大きなタライ）をかかえた海女さんが、三々五々、海岸さして出て来ます。食器も洗わずに定期券が入ったハンドバッグをひっそらって駆け出して行く町の勤め人たちとくらべれば、まことに悠然たるご出勤です。

こちらでは中学生でしょうか、仲間がそろいの待ち切れないらしく、五、六人でイルカのように泳ぎまわったり、船の上ではしゃいだりしています。全身栗色に輝き、まだ子供っぽいお尻に、ま新しいサイジがピツタリ

と似合っています。今年をはじめて、おとなの仲間入りをしたのかもしれない。

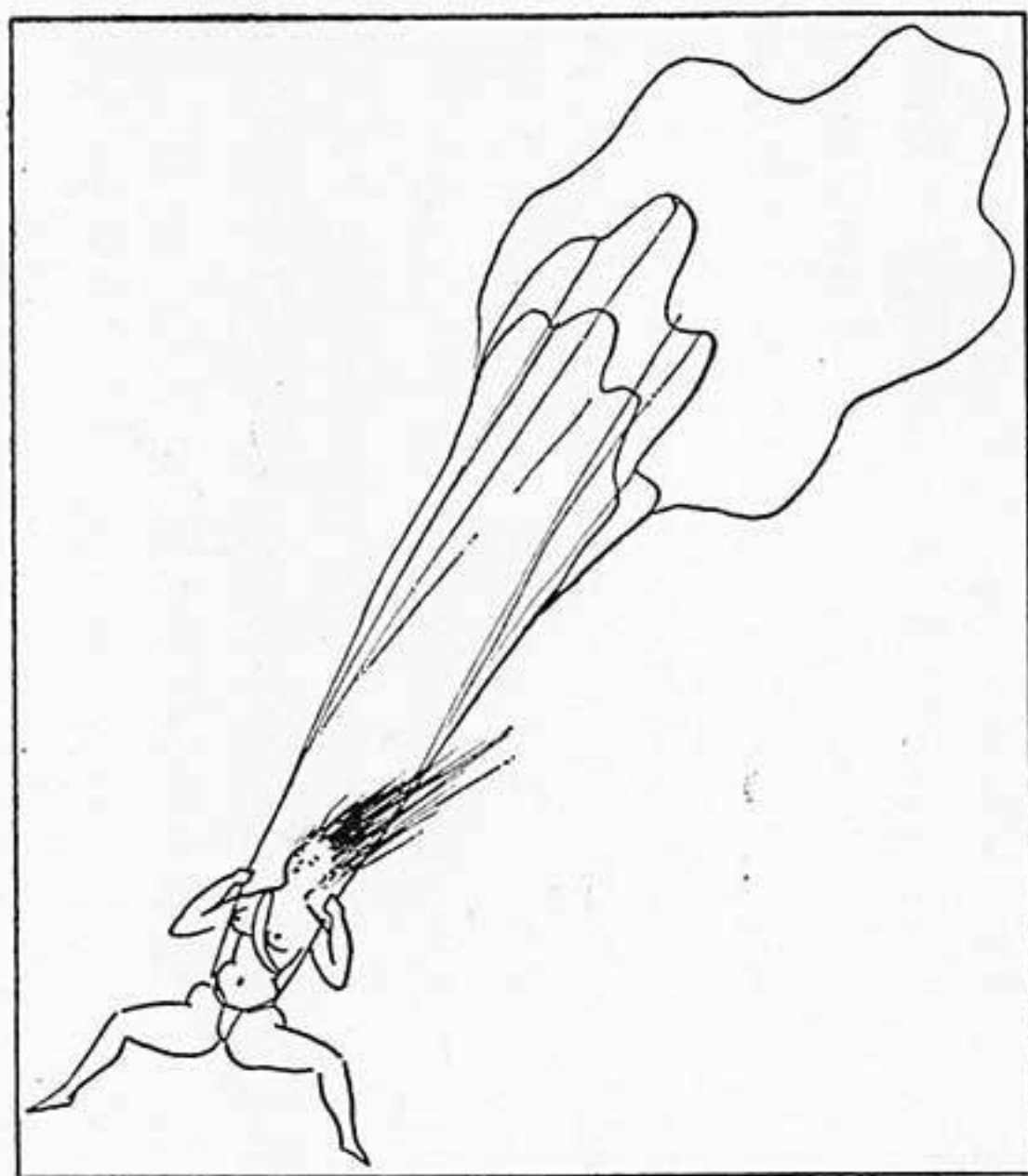
私が、家族に内緒で、そっと、ふんどしを締めていた年頃なのに、この子たちは、親や友達といっしょに、晴れてサイジを締めて、大海原で、のびのびと仕事をするのです。

夕涼みよくぞ男に生まれけると言いますが、舢舨では、男は、ひるまでもシャツにステテコかズボンという暑くるしい姿。女ならば、サイジという世にも涼しい制服が天下御免です。

暑いさかりは、家の中でもサイジひとつ、ワンピースを着た十代の娘も裾をからげてサイジを見せびらかします。うらやましくてうらやましくて、それで島の娘に生まれかわれるなら、今すぐにでも切腹して死にたいと思います。

働きざかりの海女は、夫婦で、或は団体で船で沖へ出て、鉛の分銅をつらねたハチコを腰に巻き、ずっしりと重いオービガネを刀のように差し、命綱をつけて、二十メートルを越す海底に潜ります。

さしもの透明な水を通して、かすんで見える程の海底へ、流星のようにおりて行き、悠々と、しかもテキパキと仕事をして、貝を



かかえて、はるばると浮き上がります。女のいちばん美しい姿は？ と聞かれたなら、私は即座に答えます。サイジひとつで、色とりどりの魚の群に囲まれて、海底で仕事をしている海女を、こちらふんどし一つで、海中で見るときだと。

水面にもどった海女は、ホウ、ホウという「いそぶえ」で呼吸をととのえ、カチカロゲや船にえものを入れ、カチカロゲにつかまって立ち泳ぎをしながら、再び海底を物色します。私は泳ぎは好きで得意な方ですが、引き上げてくれる人が居ないときは、せいぜい八

メートルを潜りの限度にしています。ひる前島の西「通り瀬」の沖合の海中から上を見ると、エナメル色の水面のあちこちから、サイジひとつの海女の下半身がぶらさがって逆光を受けています。都会の人がいちばん気にする顔は水面上にありますので、もちろん見えません。これが、純粋な「女」なんだわ、と思います。

ひるは、船を岸につけ、海岸で食事するところもありますが、多くは小屋に帰ります。ひる下り、海土小屋の軒端で裸の乳呑子を抱いて、いつくしんでいる、サイジひとつの若い母親を見ることがあります。この方面の民俗学の草分け、瀬川清子さんも、海女ほど子供を可愛がる女は他にないと言っておられますが、褐色の全身でやわらかい赤子を包み込んでしまいうな風情です。一面の黒い石ころは、真夏の日ざしを照り返しています。白波の寄せる向こうには、あくまで青い海原がひろがっています。

腎臓病のようなラファエロのマドンナ、ダブダブの布で無感動に腹を包んだゴーギャンのタヒチの女など、日本刀の前に置かれたブリキのサーベルも

同じです。

ひる過ぎに海女小屋の前を通ると、サイジひとつの海女さんが、なめし革のような雄大なお尻をこちらに向けて、あけっ放した家の中で、ひるねしています。石の上や物干竿には、真水でゆすいだ色とりどりのサイジが、ひろげられています。台所で立ちはたらく人も、浜で何かしている人も、井戸端で話をしている人も、朝とちがって、スカートなどはいけません。小屋の内も外も、茶色い乳房とお尻でいっぱいです。

三時の便船が出航して観光客の大半が引き揚げ、午後のしごとが終ると、ポンポンポンと、一斉に船がもどって来ます。浜には再び海女があふれ、波打際で、えものの仕分けがおこなわれます。たくましくもしなやかな、海女の背越しに、金色の夕陽の箭がさす光景が、あちこちに見られるのです。

以上は一九六二年ごろの光景ですが、その後、島の様子は急にかわって来ました。島の漁業組合は、濫獲を防ぐために、新式の潜水漁具の使用を禁止して来たのですが、一昨年から、七月いっぱい迄は、ウェット・スーツ、いわゆるダッコチャン式潜水服が公認されるようになりました。朝日新聞の有馬真

喜子さんのルポは、その後のものです。

ですから、七月以前に行くと、海女さんは黒一色の潜水服から、顔と手先、足先をのぞかせているだけで、私たちにとっては、文字どおり暗黒時代です。潜水服の下には、さすがにサイズを締めています、黒いズロースの人もあります。

八月になって、潜水服を脱いでも、当分は体が白くて、海女本来の美しさにはお目にかかれませんか。調子がでて来る頃は、はや台風の季節で、何日でも足止めを食う覚悟でなければ滞在できなくなります。それに、港のまわりのコンクリート舗装がすすみ、私共には全く、いまわしい能登ブームで、無神経な観光客が押し寄せるようになりました。ですから、海女さんは年一年と警戒的になり、行きも帰りもボットウ（はだかに羽織る一種のあわせ）をはおり、沖へ出るまでサイズ姿を見せないようになって来ました。

舳倉島が再び昔にもどることはないでしょう。福岡県の鐘崎や、山口県の大浦などの先輩地域と同じく、やがて舳倉からも女性用ふんどしが姿を消す日が来るかもしれません。しかし、古きよき日の舳倉島の光景は、私や夫の心の中に灼きついていきます。そして日本

全体を、ふんどし天国に変えようという情熱のささえになっているのです。

「六尺ふんどし」

こんな事をしたのでは、命がいくつあってもたけませんので、実現性は少ないと思いますが、私には、ひとつ夢があります。パラシユートのベルトを見ての連想です。晒の六尺ふんどしをキリリと締め、パラシユートの綱をふんどしの両脇にしばりつけ、予備のふんどし一本に、当座の食糧と短刀を包んで、たすきに背負います。その上にガウンを着て、南米の奥地を飛ぶのです。

適当な部落の上へ来たら、私は、突然立ち上がってガウンを捨てます。同乗の客が、ふんどし一本の美女の出現にアレヨアレヨとさわぐのを文字どおり尻目に、パツと飛びおりののです。

青空の一角に、フワリと丸いものが浮いたので原住民は総出で見上げます。かくれる所がない空の上で、私は心ゆくばかり足をひろげ、全体重をかけた緊縛感にうっとりとしながら衆人環視の中をおりて行くのです。

パラシユートはずして、立ち上がった私に、現住民はいろいろ話しかけますが、もちろん、何のことかわかりません。けれども、

かねて覚悟の私は少しも困りません。何を聞かれても、ニッコリ笑って

「フンドシ」

と答えるのです。お前を食うぞ！ と言ったのかもしれませんが。それなら食べられてあげましょう。私の腿や腓は、乾し草の匂いにして少し酔っぱくて、きつとおいしいわよ。大和撫子ふんどし一本、こわいものはありません。もしかすると、仲良しになってしまいかもしれません。そのとき、現住民は私のことを何と呼ぶか？ そうです。

「フンドシ！」

と呼びかけるでしょう。この地では、鈴木ゆり子イコール、フンドシになったのです。

三角ふんどしやビキニふんどしでは、命を託すには、ちょっと御軽すぎます。何と言っても完璧なふんどしは六尺でしょう。

黒の三角ふんどしなら、誰が締めても見られますが、六尺ふんどしは貧相な男女には、似合いません。個人の名を出しては失礼かと思いますが、細川アヤ子さんでは、ちょっとふんどしに負けてしまうような気がします。遠藤百合子さんさえ、腹筋のしまりがたりないようです。関谷富佐子さん、刑部典子さんクラスになれば、ガッシリと六尺を受け止め

ることができます。左近麻里子さんなら、肌さえやけば、私といっしょにパラシュート降下もできます。

六尺ふんどしは高級なふんどしです。一本の布ですが数限りない締め方があり、同じ締め方でも手加減で、さまざまになります。私は、いろんなふんどしを渡り歩きましたがいつも最後は六尺に帰って来ます。今後死ぬまで、六尺さえあれば怖いものもなく、退屈することもないでしょう。

奇クには、よく男の人が、半巾の六尺をきつく締めると書いているのを見受けますが、私には、これは理解できません。夫に聞いても、それは男じゃあるまい、と申します。男の場合、縦も横もギュウツと締めて、しかも大切な部分には充分なゆとりを取ることができ、これも晒一巾の六尺ふんどしの妙味だと思います。私の家にはパンツはもちろん、ステテコやズボン下の類も、ひとつもありません。私がいちばん好きな男の姿、それは、仕事から帰って来て、パッパッと服を脱いだとき、いつも出て来る六尺ふんどし一本の夫です。

その後姿を見ると、二人きりで婚約の誓いをしたときのことが、昨日の事のように思い

出されます。二人の六尺ふんどしを腰からはずし、重ねてたたんでお湯をそそぎ、しばった汁を二つのコップにのみなみと満たして乾杯したのです。

私の六尺は、ふだんは晒ですが、黒赤もたまに用います。スケスケ・ルックが普及すれば、ごく薄手の藤色のもの等、使ってみようかと思っています。

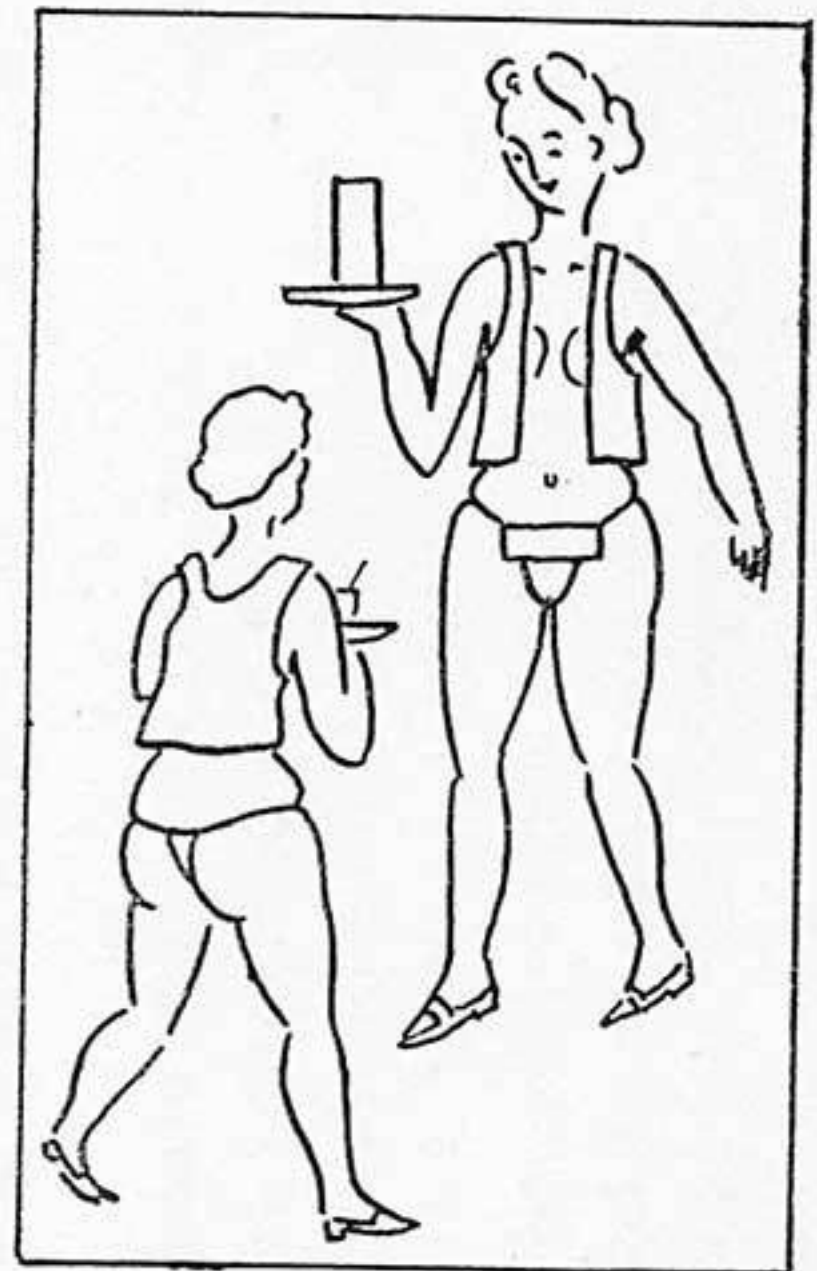
〔九尺ふんどし〕

六尺ふんどしを、もうひと巻、余分に巻けるようにしたものです。あとの一卷は、前袋の上から締める方法もありますが、これですと、前後共にY字に近くなるように締めるとスッポ抜けてしまいます。ですから、私たちは、前だれなしの、ふつうの六尺の要領で九尺を締めます。

洗濯機の中でもつれるのが玉に瑕ですが、着用感は、したぎの女王と言えましょう。ふんどしと股間しぼりの中間のようなもので、パラシュートに吊り下げられて体がフワフワと浮いたような気分になります。夫も私も、ときどき愛用しています。

〔その他のふんどし〕

柳川敬子さんの生物ふんどし、森太一さん



の昆布ふんどし等は、ためしたことがあります。せんが、亀山順子さんの亀山ふんどしは、早速作ってみました。女性用には使えますが、六尺とちがって布に余裕がないので微妙な調節がきかず、夫には不評判でした。女性が、もっこのから本物の六尺に進む中間のものとしては、手頃でしょう。

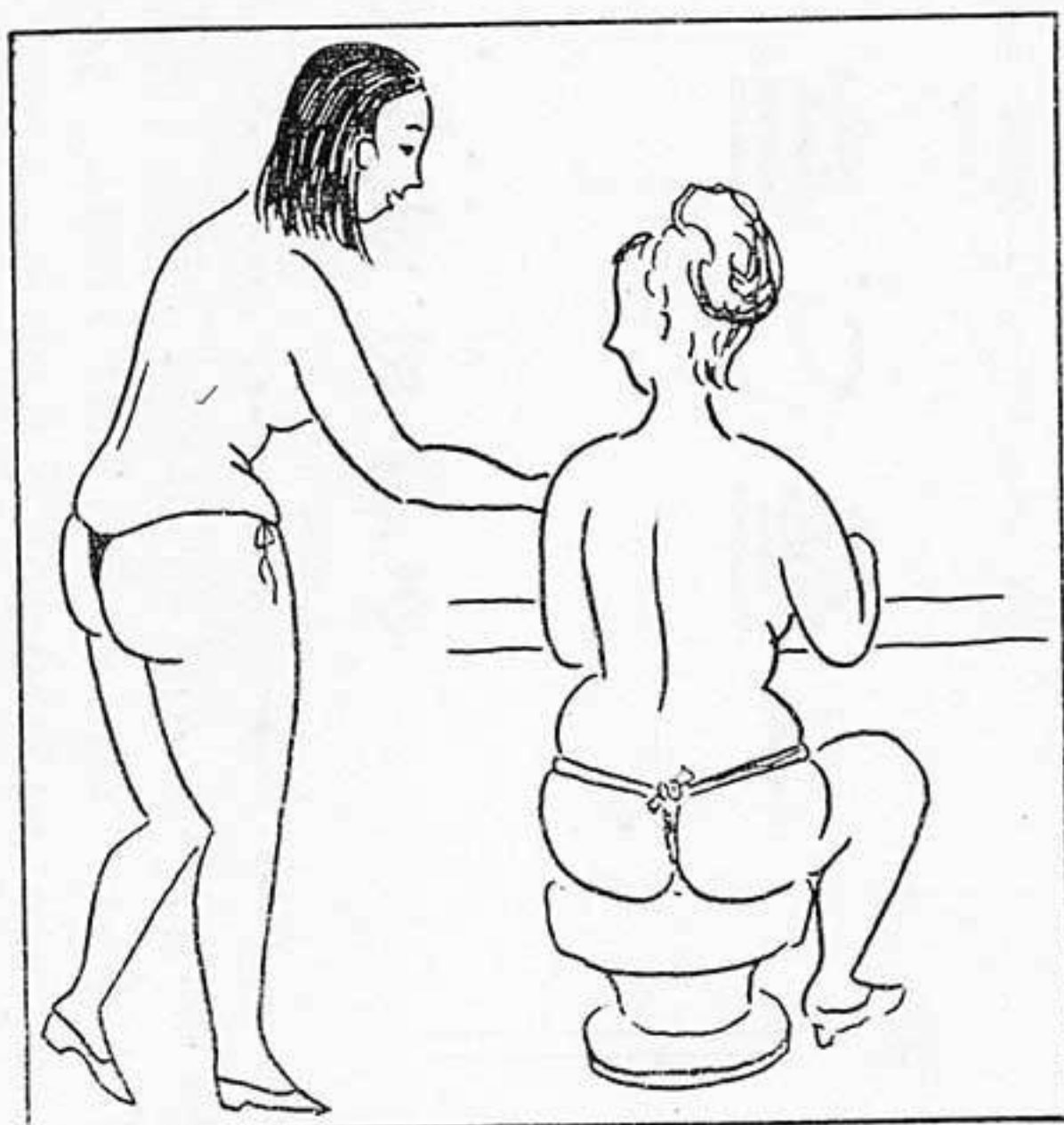
私はふんどし、特に女性用ふんどしは、シンプルでミニなほど無難だと信じています。六尺でさえだれでも美しく着こなせるとは限らないのですから。角力のまわしとなると、更にたいへんです。男でも、クワイ頭のふんどしかつぎのクラスでは、まわしが似合いません。女なら大鵬級でないと無理でしょう。ズロースよりは、はるかにましですが、私は

まわしにはあまり執心がありません。松原三千代さんは、ふだん着として使われることが、ふんどしの要件のひとつだと言っておられますが、まわしは、この点にも難があります。

越中ふんどしの系統には、いろいろあります。ブッシュ・マンや、アメリカ・インデアンの中には、前後にビラビラをたらしした越中のようなものがあるようです。これは、腰に縄を巻き、長方形の皮などを前後にかけて、はさんだものでしょう。災難に逢って身ぐるみはがれた時などには参考になりましょう。

インカ帝国の遺物の中には、巾二尺、長さ一間もある、極彩色の越中ふんどしがあります。王様か大臣が胸高々と締めて、宮殿の中を静々とお出ましになったのでしょうか？ ユーモラスではありますが、私たちが参考にしようとは思いません。

近頃、クラシック・カラー・パンツという色物の越中が売り出されているようですが、女性用としてなら、一顧に値します。たとえば、お臍が出るチャンチャンコに、十センチ巾のカラー越中のユニフォームは、バニー・スタイルよりは気がきいています。超ミニス



カートから、カラー越中の前だれをのぞかせたファッション、三角ふんどしを締めた上にスケスケ・ルックのカラー越中を重ねたオリエンタル・スカート等もたのしい街着です。男でも、幼稚園か小学校低学年用の制服としてなら、かわいいでしょうが、男のおとな用には、何としても、いただけません。

ストリップパーのツンパは、官憲の介入によって生まれた醜態なもので、私には興味ありません。下ツンは、ビキニ扱いをしても良いでしょう。バタフライやGストも、スパンコ

ール等をつけず、ふだん着として使えば、りっぱなふんどしです。

【あとかき】

私たちのふんどしクラブが大きくなったら銀座か、京極か、どこかに、「ふんどしセンター」の看板を掛けたいと思います。

センターの中には、売店、クラブ、喫茶店「サイジ」、レストラン「三角」、バー「ビキニ」および出版部があります。

売店では、世界のふんどしの実物、ふんどし人形、ふんどし美術、ふんどし文学、ふんどしファッション、スターが締めた古ふんどし等売っています。ふんどし人形には大小いろいろあり、軟質ビニール製ですから、締めれば、人体のように食い込みます。各種のミニふんどしが揃っているので、着せかえができます。小さいものは、車のマスコットとして流行するでしょう。等身大のは、ふんどしデザイナーの必需品です。

クラブは、各種の会合のほか、ふんどしファッション・ショー、撮影会、展示会などに使われます。実物のふんどしの万国旗が張りめぐらされた下で、今日もどこかのふんどしグループの例会が開かれます。思い思いのふんどし姿で。

出版部では「ふんどし百科」、ふんどしスタイルばかりの「日本の美女」、ベストセラ―「世界のふんどし」などの単行本のほか、週刊ふんどし、月刊ふんどしグラフ、こども用の「ふんどし乙女」、「ふんどし少年」、「ふんどし学会誌」および、それらの各国語版などを刊行します。

社員は、みな、この作業に生き甲斐を感じているふんどしマニヤから選り、売り子などサービスに当る要員は、すべて、ふんどし姿の露出を無上のよろこびとしている若い美女をあてます。

腋香コーナーも設けましょう。色浅黒く、目鼻立ちがはっきりした小柄な美女で、腋臭

のある子が、えんじ色のミニ三角ふんどしをキリリと締めてサービスをします。客の背後から腕をのばして皿を置くとき、脱毛クリームを使わない腋の下から、野性の匂いがプーンとただよいます。むさくるしい男の人の腋臭ほど不愉快なものはありませんが、肌もさやかなふんどし乙女の腋香は、それこそ、絵にもかけない美しさです。

若い女性客が、ふんどし姿で飲食する場合は、半額扱いにします。安いミニふんどしを買って食費を節約している内に、しぜんにふんどしの魅力にとりつかれて行くでしょう。

お勤めの若い女性も女子高校生も、テレ臭いので、食費節約を口実に、ここへ来て露出を

楽しむことができます。

はじめの内は、評論家やPTAや警察にたかれるに決まっています。その内、ピエール・カルダンはじめ欧米の有名人がほめ、若い人たちの間に支持層がふえて来ると、形勢が逆転し、方々でマネをするようになるでしょう。

ここまで来たら、私たち夫婦は後進にセンターをまかせ、次の計画、つまり生産点および学園の攻撃に全力をあげます。浜辺で、畑で、工場で、オフィスで、中学、高校、短大で、乙女たちが集団でふんどし美を誇り、ふんどし結婚式を挙げ、続々とふんどし家庭が誕生する日まで。

(おわり)

遠き想い出の再現を観る

れんげ畑の劇斗

純

これは去る四月末の飛石連休の一日、私の目前でくり展げられた少年少女混戦の目撃顛末記である。

此の日、私は所用で池袋から私鉄で一時間余りのB駅へ行かねばならなかった。

―その日も朝から、春たけなわの陽光が、新緑の葉や花に、まぶしく輝き映え渡っていた。都塵をはなれた此の辺りは、文字通りの田園で都会に生活している吾々にとっては清澄そのものの別天地である。駅に降り立った

だけで、すがすがしい大自然の息吹きと香りが満ちあふれているからだ。れんげ畑が、まるでピンクの絨毯を敷きつめたように一面に咲き広がり、白や黄の蝶が飛び交い、かげろうも舞っている。すぐ向うの林と森。小高い丘陵。そこで自然を謳歌する雲雀たち。目を転ずれば、色とりどりの積木細工のような分譲住宅の群れ。どこからか聞こえてくる赤ん坊の泣き声。その何もかもがのどかだ。本当にのどかである。私は此の澄みわたった自然の息吹きに身も心も洗い清められている



高 小

ような心地で、しばらくは溶け込んでしまっていた。

私がタバコに火をつけようとした時、数人の子供が何かわめき乍ら走ってきた。見ると十才前後の男の子四人が、やはり十一二才位の女の子二人に追いかけられ、そして私の立っている目の前のれんげ畑の中へ逃げ込んできたのである。みんな此の辺の新興住宅街の子であろうか。

先ず私の目に入ったのは、その女の子達である。二人共びっちりしたショートパンツ姿

でおさげ髪。一人は健康さうな肌色に黒い大きい目が印象的な、はつらつとした元気がが体中にみなぎっていた。もう一人はその子よりも大柄で、子供ながら美人型の顔だち。それに二人とも可愛らしく丸くひきしまったお尻の逆ハの字のパンティライン。私にはそれ等が、彼女達の初々しいシンボルのように見えた。

四人の少年達はこれ又皆半ズボン。男とはいっても、年も一、二才下らしく、彼女等よりも皆一回りは体が小さい。それで圧倒されているのであろう。だがそれでも悪態をつきながら、じりじりと後ずさりをしている。

彼女達はその彼等に向かって

「……だから文句があるんなら、ここで勝負を決めようよ」

「……」

「誰もかかってこれないじゃない？」

双方共に、ふざけ半分とも真剣ともつかぬさまで相対峙していたが、男の子の一人が何やら青い色をしたプラスチック製の水切り籠のこわれたやつを素早く拾い上げると

「それッ、みんなでやっちゃえッ」

掛声をかけてカゴを振りあげ、小さい方の女の子に打ちかかっていった。

「よし、やる気ッ？」

女の子は、カゴを持った少年の右手を難なく両手で捉まえると、先ずカゴを取りあげて遠くへ放り投げ、尚もその腕のつけ根を抑えて一回振り廻すと、少年はあっ気なく仰向けに倒されてしまった。

「一丁あがりッ」

快心の笑顔で、すっとんきょうな声をたてた少女は、彼の腕根っこを抑えつけたまま、彼の腹の上に腰かけてしまった。丁度私に背を向け彼の顔を見下ろす姿勢で組敷いてしまったのである。彼女の丸いヒップが、彼のお腹に円くめり込んで、彼は相当苦しそうだったが、それには構わず彼女は尚も抑えつけ乍ら

「どうだ、降参するか？」

「……みんな、助けてくれよ、早くー」

仲間が女の子にやられているのを見て、残る三人の少年達はニヤニヤ苦笑いし乍らも浮き足だってしまった様子。だが、仲間が捕えられているのを見殺しにすることは、男としては出来ない……少年達の気持はそんなところなのかも知れない、一人が声援した。

「待ってろッ。降参なんかすんなよー」

そして三人頭を寄せて何やらヒソヒソ。

一方、捕えられた少年は、あがき苦しみながら何とか逃げ出そうと暴れ始めた。そのはげしい暴れ方に、彼女の体勢が少しくずれ出したので腰かけていた姿勢から、彼におおいかぶさる様にして右脚を伸し彼を大きく跨いで馬乗りになった。そして彼の両腕を真横にして手で抑え、ぐいぐいとお尻で敷きつぶし乍らいつていた。

「さあ、これでもか？ 苦しいか？ 苦しかったら降参しなッ」

「ばかやろう、何言ってるんだ。えーい、ちきしょうー」

少年はさかんに悪態をつき乍ら反抗するが彼の胸の上には、ずっしりと馬乗り跨った彼女のお尻があり、彼を完全に組敷き圧迫しているのもどうにもならない。

私は、これは面白いことが始まった、そう思いながら見ている中に、何時しか彼等のムードの中に引き込まれ、私自身が彼の立場になって組伏せられている——そんな錯覚さえも起こしながら見とれてしまっていた。

つまり彼等にとっては別世界のことらしく私が目の前で見物していることなど全く無頓着に無視し、ただもうひたすら、彼等子供だけの次元で遊んでいるということなのである

う。若し彼等が、人が見ているからと言って此の遊びをやめるようなら、私は彼等の目の届かないところへ移動して、そっと眺めていたいと言うのが私の本心である。

さて組伏せられた少年は、幾度も泣き出しそうな顔をするが、それも出来ないでいる。

男の子と云うプライドからか？ 意地か？ 或はみんなの手前からか？

そのうちに少年組三人の相談がまとまったらしく、一人と二人に分かれた。

「いま助けてやっからな」

「がんばってろよ」

組敷かれた仲間を励まし乍ら、一人は組敷いている女の子の背後に、もう二人は大柄の女の子へ手向かう気配をみせた。

大きい方の女の子は、先程から少年達と言い合いをし乍ら押問答をしていたのだが、彼等が相談を始めると、捕えられて暴れている少年の両足を押えつけて居た。

威勢のいい馬乗りの女の子は、大柄の女の子に

「よつ子ちゃん、早くあいつ等もやつつけちゃってよ。みんな生意気なんだからー。わたしたちが女だと思ってさー。ね、ギューギューづめにしちゃおうよ」

「オッケー。まかしとき。——さあ、みんなッ、どうしたのさ、どこからでもいいですよ。のしてやるから」

「チエッ、女のくせに、威張ってやがらー。みんなでやっちゃおうぜ」

「それッ、うわー」

合図の喚声と共に、彼等は一せいに女の子に突進した。

まず、馬乗りの少女の後ろに回った少年が彼女の背後から襲いかかり、これを仰向けに引き倒そうと試みるのであるが、彼女は、そうはさせじと少年の胸の上に跨ったまま、上体だけをひねって敵に相対し、攻撃の手を払いのけていた。だがそんなことを繰り返している中に、うまくその少年の腕を掴んだ彼女は、後ずさりして逃げようとするのを強引に引き寄せてしまった。仲々の力持ちである。

「さあ、捕まえたぞ。あやまるか？」

少年の手首をねじ上げた。

「いて……、ちきしょう。痛えってば……」

「痛ければ、あやまるか？」

「だれがー。い、いた……」

「強情な奴め。お前もたくあんづけにしてやる」

言い乍ら最初の捕虜を膝で抑えつけ、次の

少年を尚も引きずり寄せて、その上にうつ伏せに重ね餅にすると意気揚々その背中に馬乗りに跨った。一番下になった少年は、この重圧に「フーウー」うめき苦しみ、汗をたらして頑張っていたが、その中に此の二人が最後の力をふりしぼって協力し、暴れ始めた。重ね餅がくずれ、跨った彼女の両足が大きく開いた格好で、彼女の姿勢も亦くずれた。さすがに仰向けに並んだ少年二人を同時には組敷けないらしいのだ。二番目に捕えられた少年は、ここぞとばかり、するりと彼女の脚下から転がり抜けて逃げだした。少女は慌てて再び最初の捕虜の胸の上に跨り直し、肩で息をし乍ら一休みのていである。

逃げ出した少年は、一人では手に負えぬとみたか、まだ斗っている仲間の方へかけ寄せた。だがその処にも「よつ子ちゃん」と呼ばれた大柄の子が、反撃少年の一人をでんと組敷いている。

この組敷き方が哀れにも面白かった。

仰向かせた少年の、左右の二の腕あたりを両膝で抑え込んでいるのである。しかも逆馬乗りの格好で、彼の顔の真上によつ子ちゃんの大きなお尻が跨り、そのまま彼女が腰を落とせば彼の顔は完全に彼女のお尻の下敷きになる運命である。踏み敷かれた腕の痛みと、脱出のため彼が下半身をばたつかせると、彼女のゲンコツが腹へ落ち、その都度

「痛かったら、おとなしくしてんのよッ」

二度三度その目に遇わされ嚇されているので、暴れることも出来ず苦痛に耐え乍ら、下から恨めしそうに彼女のお尻を眺めている。

その少年の心情は如何ばかりであろう？ 私には知る由も無いが、ただ惜しむらくは、彼女がショート・パンツでなくスカートをはいていてくれたら——と想ったことである。

そのよつ子ちゃんには、さっき脱出した少年が加わって、敵が二人になってしまったので少しうるさくなってきた。一人を取り抑え左右からちよっかいをだされるので面倒だと言わんばかりに、組敷いた少年の両手をつかんで胸の上に重ね合せ、腰をずらしてその上にぺたんと坐ってしまった。両手もろ共に彼女の丸い大きいお尻の下に、逆馬乗られた少年は、全くペシヤンコにされてしまったのである。

万全の体勢で勝ち誇った彼女は

「ひでちゃん、その子をこっちへ引きずっておいでよ。わたしがまとめて乗っかるからさその間にあんた、この二人、とっちめちゃっ

てよ。うるさくって……」

「よーし、よーし、オーケー。それっ、こっちへ来い。よーいしょっと。——重いな、こいつ」

お転婆少女ひでちゃんは彼女のお尻に敷かれっ放しで、ぐったりした少年の両の手を持ってよつ子ちゃんの傍まで引きずってきた。

よつ子ちゃんは、体をくっつけて並べられた少年の一人の胸の上に腰を下ろして両足を投げ出し、太ももでもう一人の胸のあたりを同時に抑えつけた。最初に胸の上に腰かけられた少年は、そのまともに受ける重圧に

「ウッ。い、いたた……死んじゃうよ」
顔をゆがめ、あえぎあえぎ抗議する。

「あたり前よ。お前が悪いくせに。あやまるか？ 降参するか？」

「こ、降参する」

少年は、彼女のこのヒップ圧が余程こたえたのだろう、ギブアップした。

「よーし、じゃお前だけは許してやる。その代り、これからはわたし達の家来になるのよッ。そしてこの子を抑えつけてんのよ」

「そ、そんなの？……やだよおれ」

「それじゃ許さないわよ。もつととっちめてやる、いいか？」

そう言い乍ら、今まで浮かしていたお尻を再び彼の胸の上に乗せた。

「あーッ、やるよ、やるよ、分かったよ」

彼女が、もう一人の少年の方へ跨り直している間に、やっと彼女のお尻の下から解放された少年は、上体だけを起こして深呼吸をしながら胸のあたりをなで廻し、

「あーあ、いてー。ちきしょう、重いなあ、あいつ」

顔をしかめ、憎々しそうに呟き乍ら——。

確かにこの少年の体格からすれば、あのよつ子ちゃんの丸い大きいお尻は、相当に重かったことだろう。その彼女に代って仲間を抑えつけることを命ぜられた彼は、仕方なく渋々、一度は彼の腹の上に跨ってはみたもののそこは同僚の誼、彼女等二人が他の二少年を追いつける間に、遁走協定を結んでしまった様子なのである。二人共、長い時間に亘って、お尻の下敷きにされていたのだから無理もない。小声で何か語り合い乍ら、最初に来た方角へすぐと退散の足どりである。

さあこの後、取り残された二人は誠に哀れである。成功こそ出来なかったが、救出に精一杯斗ってやったではないか。それなのに裏切られ、あげくの果てに斯うして捕えられてしまっているのに——。残された少年達の気持は容易に察することができる。

捕えられたばかりの少年達は、まだ威勢がいい。手足をバタつかせ、必死の抵抗を試みつつ逃げ帰る同僚の背に、救援を叫んでいるのだ。だが、よつ子ちゃんもひでちゃんも、その抵抗する彼等を、まん丸い大きいお尻でずっしりと押し敷き、胸を弓にそらせるように全体重をかけて、ぐいぐいと胸の辺りから喉首の近くまでのしかかり、苦しめ抜いている最中である。

ひでちゃんに組敷かれている少年は、恐らくはその羞恥と忍苦のためであろう、顔を赤らめ引きつった声をはり上げ

「おーい、おめえ等。助けてくんねえのかよう？……帰っちゃうのかよう。卑怯だぞー。逃げんなよー、おーい……」

逃げ腰の二人はその声に振り返り

「……やめたー、もう帰る」

この二人にしてみれば、自分達が捕えられている間中、彼等はたしかに救出してくれようと斗っては呉れた。だが結果として助け出せなかったではないか。そのおかげで俺達二人は、半死半生の目に遭わされ、最早降参しなければどんな事にも成りかねない、ぎりぎり

りの限界まで、ねばったんだ。もう斗う気力も体力もない。したがって本当に済まないが君達を救出する義務はあっても、自明の敗北と体力気力の喪失のため帰らざるを得ない。

——この敗北の二少年の表情は、こんな処であつたのだろうか？ やがて足早に、そそくさと帰ってしまったのである。

二人の遁走兵が出たため、とり残された二人の戦意喪失は時間の問題のようである。何しろ体力の差というか、二対一でも勝目が無いのに、一対一となつては、も早、惨敗は明白であるからだ。

ひでちゃんに首のあたりまでしのかかられ彼女のお得意らしいギューギューづめに、顔

【伝言板】○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりませんの故御諒承下さい。

○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。

○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所など御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

を真赤にして苦痛を耐えていた少年が、先ず降参した。それを見ていたよつ子ちゃんが、「ほら、お前の仲間は降参したよ。お前はど

うするの？」
ひでちゃんのそれよりも一回り大きい彼女のお尻が、ぐいと少年の胸を圧しつぶした。
「……う……」

蛙のように、彼女のお尻に敷きつぶされた少年は、やはり顔を朱に染め乍ら健気にも、ひと声うなただけで頑張っている。

「お前、一人で勝てる気？」

尚もお尻で圧しつけ乍らよっちゃんは、遂に首の上に跨ってしまった。ぺったりと、まるで座ぶとんでも敷いている様な格好に——この少年の心情や如何に？

さすがの少年も耐え切れなかったとみえ、とうとう降参し、やっと彼女のお臀の下から釈放された。

この激斗ならぬ劇斗は、時間にして約三十分ほど。その間に到着した電車は一度。それも土地の人、二、三人といふ鄙びた処。たかが子供のお転婆遊びと、見過ごして行ってしまう事が、私にとって、又彼等にとっても幸いした様である。

私が、彼等のこの斗争に見とれている間中

で、あの一番長く組伏せられギューギューの目に遭っていた少年を見ていた時が、最も興奮を覚えたものである。

少年時代、この様なれんげ畑の中で、騎馬戦をやり、引きずり落とされて大柄な女の子に馬乗り組敷かれた時のことが彷彿と思ひ出されてきたからだ。思えば懐かしいことでもあった。

この思いもかけぬ所で、予期せぬ楽しい寸劇を見ることが出来たことは、Mである私の日頃の願望が、そっくりそのまま少年達によって演劇された訳で、面映ゆいこともないでは無い。

そしてこの可愛い少女に組敷かれた四人の少年の中に、異常な興奮と、快感を感じた者が居たはずだと穿った憶測さえしてしまったのである。

否、この四人の中の誰かは、きっとこの日この時のこの事を末長く忘れ得ず、或は再びも三度も被虐の願望を抱き、夢見ながら成長して行くであろう。私のようにMになってゆくかも知れないのだ。

(カット・春川ナミオ)

——(了)——



沙賀城文（あや）。

……宣伝文句ではないが、この初春、突如として斯界に登場。その『ショウ・縄抜け』の秘技をもって忽ち紳士たちの人気を独占するや爾来下降することのない『女王の座』に君臨する美しい女の名、である……。

もちろん斯界と言ったって、俗に「自分は正常である、変態なんかじゃねえや」と宣いその自信の有られるという御仁には少々のこと

—— 創 —— 作 ——

妖 よう

鰻 まん

記 き

秤

蕩

也

とで関知される筈もない世界のことだ。

残念ながら、依って人気絶頂の榮譽を担う『女王』としてもその登場する処は必然、正常社会に要れられず、みみっちく限られた処の舞台となっていたことは否めない。

それは、ファンの紳士が提供する邸宅の、奥まった一室であったり、人里離れた屋敷の一部屋であったり——最低格は裏通りの軒の傾いたしもた家の二階であったりした。

この沙賀城文なる女の過去現在に就いては何ひとつ、誰も知らなかったと言えよう。

気取ったらしい名はきつと本名じゃねえだらうな位で、その曖昧さ加減は『年令』を判断するにも一致をみない。

或る者は、彼女の生国に中国地方の一県をあげ、年令は当年とって十九才、これは本人から聞いたのだから間違いないと言った。

が、すぐ横から或る者が、イヤ生国は北陸で年令は二十八才、これこそ確かに彼女の口から耳にしたものと言う。

十九才と二十八才——不思議なことだが、他の者は「成る程さうだろう！」と信じ顔になって約半数ずつと割れたのである。

ところで、この沙賀城文の『舞台』にいつも影のごとく付添う人物があった。

いつの頃からか紳士達はこの者を「ナマズのおっさん」と称んだ。

問題の秘技に入る前、このナマズが纏わり

ついで彼女の全裸を隈なく、それこそ隈なく愛撫するのが常、ときているんだから紳士連としては実に気になる存在であった。

無論、終始神妙なおつきだというから、愛撫としても秘技に関わりあるものとして、やっかむ連中の方がどうかしてるのだろう。

——彼ら、この『ショウ・縄抜け』コンビは秘技を披露し終えたあと、会話会食に同席を望む声たかまるにもかかわらず、荷物を……と言っても化粧具と縄だけが入った鞆らしいのだが……まとめて風の如く去る。

まことに退き際の冴えたやり口で、サテ風の如く去って行く先は、招いたその家の主人とて知っちゃいない。訊いてみると、このショウに関する連絡はすべて沙賀城文の側よりの一方連絡らしいのだ。舞台、日時の指定、決定。みんな先方さんがやってくれて、承諾したならその家の主人は舞台を控え、その日のその時刻までボヤーと待っていてよいのである。何処から来るのか判らないのに何処へ消えっちゃうのか、そんな事ア知る道理がないでしょうが！ と、自棄糞みたいな口調でその主人は言った——。

扱て、斯くして益々の人気を得ながら、尚も全国を巡りに巡って……はまアいいとして

も、どうしてか春以来、一向に私の住む街に近づかなかったその沙賀城文の『ショウ・縄抜け』が、突如、それこそ突如、来たって拙宅にて上演！ の報を、悪友のM市に住む便器製造販売商事の社長から受けたのは遅い梅雨にはいった、湿気過分のある日の午後であった。

「おう！ 来たかッ」

私は一も二もなく駆けつける決意をした。実を言うにも何も、沙賀城文、初登場とも言うべき此のO市の春の公演？ には、迂闊千万にも私は、折角の悪友の一報も聞きながし、駆けつける事をしなかったのである。

以後、人気上昇する沙賀城文の噂話を耳にする度の私……ア此の心中お察しあれ。

日時、その日の、八時。

恋人をようやくこの腕のなかに出来る時のような弾み様で、私は女房を説得し、ぶわアとふくれているのも構わず、水道設備の商売を押しつけて、早速、発った。

K市まで車を飛ばして約四十分。

前方の暗い梅雨空に、奇妙に一点だけ白い瞳のような箇所があった……。

(1)

「ほらア、来た！」

馴染みの婆やさんを手で制し、勝手知ったる足どりで上がって応接間のドアを開けたとたん、何やら賑やかだった中のひとりが振り返って大声をあげた。

秤だか斤量だか、くだらんネームで雑文書きの趣味がある男である。

「さア、俺の勝ちだ……」

手帳を持って何だか書き込んでいる。どうやら、また賭けをやっていたらしい。いや、いつ会っても、どうしようもない男である。

「やっぱり来たのか」

賭けに負けたらしい本屋の佐藤が肩をすくめて、それでも久し振りの私へ歓迎の笑みを浮かべてくれた。

私は、社長の好みでその時もまた乱雑風に置かれてあるソファの空いた一つに、足を跳ねあげて腰をおろした。そんな子供っぽい仕草も、やはり今日此処に同席出来た、という欲びがさせたものに違いない。

「すると、あとは誰だ？」

と、こちらに正面むいていた自動車屋の森が小首をかしげた。

「連絡が通じているのは、兼さんだけになっ
たな……」

と、隣りで後頭部を見せていたニヒルが、
の印刷屋、江原が応えた。

「よし、兼の野郎、来るか来ないかも一度
やろうぜ！」

どうしようもないのが、佐藤に言ってる。

——私たちは其のあと世間話、と言えるかど
うか、日頃から胸中で醗酵をつづけている問
題？ を互いに提供しつつ、賑やかに一時間
ばかりを過ごした。

その間、婆やさんが嫌によそ行きの顔を
つって珈琲のいれ換えに來ただけで、社長は
何をしているのか姿を見せなかった。

その社長が、やっと姿を現わしたとき、た
ったいま着いたばかりらしい洋服屋でホ・モ・ち
ゃん趣味もあるらしい兼が一緒に、その背に
もうひとり私の知らない顔があった。

社長は、私たちと同様『今更挨拶なんてや
って見せられる仲間かい』といった顔で、ず
かずかと一同の中に割って入り、

「ホイ、其処の御仁は……筋村明志というん
だ、そうな……」

と簡単にかの人物の紹介をやったのけた。

まず、恰幅がよかった。私の目には、一見

ズボラを代表したような容貌に見えたが、よ
く見ると、さにあらず、何となく行動力と相
俟って繊細で理智的な感じがその瞳と口もと
にひそみ、尚かつ、これはまた艶福の相さえ
窺えるのだった——とこれはまあ、一瞬のう
ちに感じ取ったわけでもなかったが。

サテ筋村氏は、社長に合わせたように簡単
な挨拶をやったのけると、それが人格らしく
憎まれる筈もない微笑を浮かべながら、一番
入り口の椅子へゆったりと坐り腕を組んだ。

連中に比べると（勿論、私をも含めて）堂
々過ぎる位の身ごなしで、秤のごときなど、
まだ「開幕」まで時間もあることだし、マア
此の場のつなぎに此の「新来」のカモ？ を
話題の餌にでもしようか、と考えたらしいの
だが、三言四言話しかけて返ってきたのが、
ただ軽い頷きと微笑だけだったというんだか
ら恰好がつかない。黙ってしまいがった。

そして如何いうわけか社長は、この筋村氏
に就いては他の新参者の場合のように詳しく
——と言っても、大体我等の仲間となるに相
応しい性向の持ち主であるとか、過去の実績
はこんな具合であるとかいった説明程度だっ
たが——紹介しなかったことである。私の直
感では、この社長と筋村が何かをしめし合わ

せているようで、ちょっと面白くなかった。
それに、他の連中が筋村に対して案外と素知
らぬ顔をしているのが、不思議であった。

六時。私たちは軽い晚餐を摂った。

そのあと、真っ暗になつてゐる窓の外を見
詰めながら、佐藤が、低声で社長に訊いた。

「雨は本降りだけど、来るかね？」

社長は葉巻のけむりを噴きあげながら、ニ
ヤリとわらった。

佐藤も、それを見てわらった。

私は今夜が初めてだから何とも言えなかつ
たが、みんなは沙賀城文が今まで絶対にすっ
ぽかしをしなかった事実を知っている……。

一時間ほど、話し上手な兼と森を中心にし
て雑談がつづいた。

適量のアルコールが、みんなの体を火照ら
せている。いつもは無口のほうの森も、さか
んに冗談をやりとりしては笑った。そんなこ
ろ、婆やさんが虫喰ったような顔してやって
来て、旦那さん……と社長に目くばせした。

「あたしゃ、これで引っ込みますからね」

と言って、彼女が去って行ったドアのそこ
ろに、長い髪を垂らした、ひどくスタイルの
よい女と、ずんぐりした禿頭の男が突っ立っ
ていた。

「やア、沙賀城さん！」

社長が、狸みたいな眼をいっぱいにあけて言った。一同の視線が集中するなかで、女は無言のまま頭を下げた。

——はじめて見る沙賀城文は、異妖な、と言えは可笑しいが、そんな美しさを私に感じさせた。

白いレースのワンピースを着て、それに化粧というほどの化粧もしていなかった故か、ちょっと肌黒には見える。がその肌は、たった今磨きあげられたような艶を放って、いかにも生々しいのだ。

そうだ、よく磨き抜かれて、よく撓い、よくうねり、そして、よく妙音をも発する『皮革』のような感じがする女……

黒髪にかたちどられたやや面長の顔は、なるほど私みたいに疎い人間には年令のことなどくだらぬ想像は起こさせない。その瞳は素晴らしく活きて光り、はじけたような唇の紅さと共に、その『皮革』のような感じにつつまれて、一瞬にして私を魅了してしまったのである。

彼女は社長の手招きに応じて入って来ると躊躇う風もなくすすめられたソファに身をしずめた。其処は奇しく？ も私に近かった。

またしても私は、その見事な脚線のために内奥を攪乱されてしまった……

彼女は、なにやら意気込んで話し掛けている社長にちいさく頷き、また微かに左右にかぶりを振りながら時折り指先で、リズムをとっているように膝頭のあたりをたたいた。その仕草が、このときの彼女のところを何らかの意味で示していたものやら、それとも全くの無意識の上でやら……いや、その時の私には、そんな事を考える、気の利いたところではなかった。ただ凝っと、その『皮革』の部分のしなやかな動きに見惚れていた。いい歳して不甲斐ない話だが、社長の大声も連中のやってくる事も一切聞こえず、見えなかった。

——やがて彼女は立ちあがった。

はじめて笑みらしいものを唇のはしに浮かべた彼女は、一同に軽く会釈して、先刻とは別のドアから出て行った。社長が恰好悪く揉み手などしながら、スタコラ尾いて行った。「てやんでエ。お前ら、あとで泣きっ面を搔くなよ」

ようやく彼等の例の悪たれが耳に入って、振りかえると秤が大手をひろげて盛んにひらひらやっていた。

「ふん、あれがトレーニングだってよ」

佐藤が、うそぶいた。

「おい。いくらそんな事をしたって、彼女にちょっと触れただけで痺れる野郎は痺れちまうんだ。そんなことより、いまから「棄権」する言い訳でも考えて置きやがれ」

「阿呆。いったん男が「挑戦」するからにや何が何でもあとには退けねえんだ」

「うひひ、盲蛇に怯じずか……」

「あれ。そういうお前はなんだってんだ、わがカアチャンにも「挑戦」した事アねえんだろ。いざとなつて怯じけ付き、わが足からげて引っくり返るなよ！」

——たしかに連中には、先刻まで見られなかった興奮があった。悪たれ口にもいつものような冴えはなく、怒鳴り交しながらも個々の眼は空を見詰めて「狭い」光りを宿しているのだった。彼らの考えていることは、決して悪たれの文句ではなく、間もなく「挑戦」を行なうその時のおのれの事であろう。むろんその行動にともなう或る種の悦びにいち早くつまれながら。

そういう私とて、たしかに普通ではなかった。特に、私のごときは過去に彼らに比すべき経験とてないときている。お話にならなかった。「挑戦」のその時まで、一体この私は

なにを思い、なにをしておればよいというの
だろう……。落着かない視線の隅で、不意に
ドアがあいた。なるほど、ナマズそっくりの
薄暗い顔が覗きこみ、ニヤリと笑って、

「お待ちせいたしました……応戦の準備が整
いましてございます。御足労恐れ入りますが
離れの、和室のほうへどうぞ……」

布地を擦ってるようなシュルシュルした声
音で言った。

私たちは一斉に立ちあがった。気心の知れ
た者同志、何も気取ってる必要はない。「闘
志」を剥き出しにして椅子を蹴った……。

いや、ただひとり。あの筋村明志と名乗る
紳士だけは違っていた、と言ってよかろう。

ドアを出る時いちばんしんがりにいた私は
ふとふりむいて、気持はそれどころじゃない
けど、まアお愛想のつもりで、サア御一緒に
と眼で誘ったのだったが彼は、うんと軽く頷
き、緩慢に上体を揺らしたかと思うと、アア
何とじれたい、ポケットからハンカチをひ
きずり出して、ゆっくりと顔を拭いはじめた
のである。

——私の見たのはそこまでで、なんでも早け
れば幸福だと思っている秤を先頭に、ドタド
タと行く連中のあとをすぐさま追った。

(2)

その和室には、半分を占めて燃え立つよう
な緋の毛氈が敷かれてあった。

従来のものらしい照明のほかに、三脚に付
けた小さなライトがひとつ。それらが緋の色
を一層に煽り立てているようでもあった。

隅の床の間ちかくに、フリルが美しい淡い
ブルーのネグリジェを着て、沙賀城文が坐っ
ていた。

まるで優雅な花束が置かれてあるようで、
期せずして私たち荒くれの目はうばわれた。

三呼吸ほどしてから——部屋の中央、つま
り一番好い場所であるところに、社長がチョ
コンと坐っているのが目にはいった。

(ちくしょう！ ずるいや)

突っ立ったままの私たちの間に、不穏？
なる空気がながれた。

「それッ！」

と誰かが言った。私たちは鼻ったれ小僧み
たいに肩をぶつつけ合い、互いに強引な牽制
を行ないながら「第二の好い場所」に殺到し
た。

やがて不平の呟き交錯させながらも着席を
終えた。なんともはや残念ながら理性度高い

私？ はしんがりの着座となっていました。

「社長、その位置はお宅にとっては不幸じゃ
ない？ なにせ、お目々がつぶれてしまうか
も知れないんだから——」

「なに吐かす。わからんのか……だまって身
替りにつぶれてやろうという、儂の友情が」
ガヤガヤやっているとその頃になって障子
が開き、かのナマズのおっさんが到着した。

考えるとこの男のほうが私たちなんかより
余程紳士だったかも知れない。まさか擦り足
でもなかるうけど、静かに、悠然と今までか
かってやって来たのらしいから。

——彼は、ふたこと、みこと、沙賀城文に低
声で話し掛けたあと、壁際にあった黒い鞆か
ら——黄土色というか、ちょっと変った色の
綿ロープを取り出し、すすみでると、それを
毛氈の上に置いた。この時の男の手付きは嫌
に丁寧そうであった。この邸の主人である社
長に目くばせしてから、思いついたように揉
み手をし、

「では皆さま、ただいまより沙賀城文が入神
の技、お目にかけます……」

と、これはまた古臭い口調で始めた。

「……と申しましてこそはそれ、ご面倒な
がらも皆さまの御挑戦を頂戴致さねば価値あ

るものと申せませぬが、まずはそれに先立ち今回の特別披露、応戦させていただく前にちよっと、本人沙賀城文さんがタネも仕掛けもないところを御覧願ひあげます」

なにが特別披露。それがこの一座？の常套の筋運びだと私は聞き及んでいる——。

「サテ、其処で御納得が参りましたならば、本夕、一番駆けの勇者として、われこそはお思いの方より挑戦くださいますよう！」

らんぐい齒のぞかせて愛想わらい、ペコリと一礼してから後退りをはじめた。

そして手合図をする——

花の束が、ゆらりと揺らいで立った。

立って、毛氈の敷かれた真ん中まで来て、私たちに正面むいたままその花の束をかなぐり捨てた……。

他の連中のことなどは知らない。私は息を詰めて、男の言う「特別披露」を凝視した。

果たして、彼女がすべてを脱ぎ捨てた場合も、あの『皮革』を見るような、私の思いは消えてしまわないだろうか、と。

数秒後。私は言い知れぬ悦びに胸の内をうずかせていた。

想像していた通り彼女の躰は、ボイン型でも枯れ枝型でも、日本女性伝来家宝型のズ

ンドウでもなかった。大げさに言うのじゃない、今まで私が想像と夢の世界の中にのみ造っていた裸像が現実に、確かに其処に在ったのだ。そして、その現実を一層正確化せしめるかのように肌黒の躰は隈なくぬめり、尚のことライトに映えて、妖しくも凄まじいばかりの光沢を放っていたのである。

『皮革』……たしかに彼女のその裸像に私が見たものは『皮革』であったのだ……。

そのとき、彼女は傲岸？にも、挑戦者である私たちに大の字となり、四肢をひろげてみせた。腰にまでとどいていた髪が、まるで生き物のようにうねって、左右に躍った

「ちくしょう！」

そんな呻きが連中の中から聞こえた。

「あのライト、置き場所が違う！」

そんな文句が飛んで出た。

——と、今度はひどく神妙な顔で、ナ・マ・ズがしゃしゃり出て来た。

そして、身動きもしない沙賀城文の足許に跪くと、私たちが目をまるくし噛みつきそうな顔になるのも構わず、その太股のあたりに頬を押しつけたのである。

「野郎ッ！」

と、誰かが唸り声をあげた。だが本人はあ

くまでも神妙な面つき。そんな面つきで、バカでかい掌でもって「愛撫」をはじめた。

ところが、バカでかい掌のくせしてその指先のなんと繊細なこと。大まかな動きの愛撫を繰り返しながらもその指は別個に附着させた触角のように、緻密なふるえを帯びながら、ぬめる肌を微妙に「打診」していくのだった。

やがて、仰向け気味だった彼女の顔に血のいろが差し、見る間にそれは薄い赤銅いろと変って光りはじめた。

例の弾けたような唇が痙攣して、なにか眩きを洩らしているようにも見えた。そして、ひろげた腕が次第に下がり、やにわに、その掌が乳房をつよく握りしめたとき——。

彼女の全身に汗が……というより、脂めいたものが見る見る浮かんだ。

閉めきった上にライトを点けているせいもあるが、部屋の空気はもう先刻から熱れに熱れきっている。その熱気のなかに、一種異様な……いや、甘美と言おう、そんな匂いが徐々にながれていった。

首を、胸を、腹を、そして下肢をつたいはじめたそれに片頬を濡らして、ナ・マ・ズは今はいじめてするどく眼を光らせながら顔をのけぞ

らせた。

イヤイヤをするかのように、顔を振りながら俯向いた女と、眼と眼を合わせ、さてその眼で何を言ったのか——私には判ろう筈がない。不意に立ちあがって、彼はただひと言、

「さあッ！」

と、言った。

「ようオし。俺が先陣うけたまわる」

すかさず大仰な宣言があつて、シャツの袖をまくりあげながら佐藤が立ちあがった。

これは瞬間のことであつたが、このとき沙賀城文のうるんでいた瞳が一変して、まるで別人のように冷たく燃えあがつた炎の色をはしらせるのを、私は見た。

佐藤は、やられた！ と絶句して見あげる秤に薄ら笑いを浮かべながら、「挑戦」の場におどり出ると用意の縄を引っ掛けた。

ナ・マ・ズが突然、蹴立てられたように跳ねて壁際まで逃げた。事実、先刻から見せつけられてきた恨みで、佐藤は彼を蹴ろうとしたのかも知れない。

さて、そのころにはもう、「女の瞳」にはいささかの炎すら感じられなかった。

間近に迫った佐藤を見てちょっと小首をかしげ、向うむきになると片膝折って、その円

やかな臀を足首へにじらせた。

いっばしの緊縛師を氣取ったか、佐藤は大袈裟なポーズをとって縄を捌いた。しかし上気し過ぎている色らしいのが、ありありとその横顔に窺えるのは、恰好よくない。

果して……、沙賀城文が『これでいいかしら？』という風に双腕を背中に廻してそっと彼を見あげたとき、彼は氣負って足を踏ん張ったまではよかったが、サテ縛る、その縄の先端をもとめてオロオロしゃがった。

けっけッ、と笑つたのは兼と江原だ。

「チャレンジャー、焦ってちゃ自分が身動き取れなくなっちゃうよ！」

嬉しげな声で喚いたのは、森だった。まあ一番若手である私は仕方なく諦めるとしても彼等はどうにも一番駆け（掛け？）の榮譽を攫ってしまった佐藤に、一矢報わずば措くべきかの心算らしい。

佐藤は振り向きもしないで、と言うよりそんな糞弥次、耳に入るかいと言つた表情で間もなく「挑戦」に掛かった——。

女の両手首へ四巻きほどもすると、はねのけたばかりの髪も一緒に首へひと掛けして、手首へもどると其処から胸へ廻して二の鬚を締めつけた。

作業なかばにして彼は素っ頓狂な声で、

「あれ、足ンねえや」

と言つた。なるほど、彼は胸へ三巻きもするつもりでいたらしいのだが、見ると縄は二巻きちょっとで終つていた。

「おそれいます。それが規定の縄寸法、悪しからず縄止めしてくださいませ」

壁際からシウルシウルと、例の嫌に落着いたナ・マ・ズの声。

「ひでえや、この前のときと同じだぜ。この縄みじかくしたんじゃないのか？」

「いいえ、そんな事はありません」

「そうかなア？ この前に懲りて作戦は随分と練つて来たつもりなんだがな、これじゃ足りないや」

呟きながら佐藤は、本当に名残り惜しげに女の胸前に回していた手を引っ込め、二巻きしたところで縄止めをはじめた。

「愚痴らない、愚痴らない」

また嬉しそうな声で、森が弥次った。

佐藤は、縄止めを終えると身を起こし、うーむ、とうなると腕組みをはじめた。その顔には正直に、不安のいろを浮かべている。

「さ、それでおよろしければお席のほうへ」とナ・マ・ズが急かした。

佐藤が戻って来て着席した、それを待っていたかの様にナ・マ・ズが合図をし、沙賀城文が仰向けに倒れた。

倒れても程よく隆起を描いている乳房のむこうで、脚が僅かに、はねあがった。

間もなく、その軀は仰向けのままゆっくりと右へ廻りはじめた。

『——そら！』

というように、連中が身を乗り出した。

私から見れば、まさしく『皮革』の鞭のようになしなやかさで彼女は下肢を動かしていたのである。

やがて彼女は半円を回って、その指を反り返らせている足の裏を私たちに向けた。

案の定——「かぶりつき」の社長は身を浮かせてしまった。だが、

「惜しいッ！」

と、誰かが声をあげたとき、同時に、動きを止めた彼女はぴったりとその下肢を閉じてもう軽やかに上体を起こしていたのだった。

そして驚いている私たちに腕をひろげ、こまかく微笑ってみせた。

「勝負あった！」

突然、喚いて立ち上がったのは秤だった。

彼は足許へ上衣を叩きつけると、

「二番手——勝負所望ッ」

と、大時代的なことを言って飛び出した。

本人としては今度こそ此の二番手名乗りを攫われてたまるか、と言った意気込みで先制作戦に出たつもりらしいのだが、うしろ姿を見ていると尻に鈴でもつけてやりたいほどの慌しさだ。

沙賀城文は、纏れて垂れさがっていた縄を首から外して、この二番手の挑戦者へ無難作に差しのばした。そのとき私は、ふと、彼女の頬に相手を小馬鹿にしたような、冷たい笑みが浮かぶのを見て取った。

縄を差し出された秤は、

「よしきた文さん……」

と、どうせ彼のことで、待ってたホイなんて言おうとしていたのだろうけど流石に縄を手にしたとたん、嘗て私が一度も見たこともない「チト真剣」のような表情になった。

——彼は、佐藤のように彼女の首へ縄を掛けたりはしなかった。縛ったうしろ手をその胸にのみくりつけた。痛々しいほどに緊く縛りつけた。

しかし、彼のこの懸命の挑戦は、佐藤を嘲笑うどころではなかったのである。佐藤以上に呆気なく、沙賀城文の「応戦」に敗れてし

まったのだった。秤が自信ありげな顔で席へ戻りつつあるとき、すでに——彼女は、腕をひろげ、立ちあがりながらフラダンスのような身振りでその緊め縄の残骸を腰から落としてはじめていたのである……。

第一の「挑戦」が始まった時から、もう二時間以上が経っていた。

佐藤、秤のあと、森、江原とつづいて、たったいま此の私が沙賀城文の「秘技」に敗れ去ったところである。

もちろん私ごときには、その挑戦に作戦も屈ったくれも無かったことである。彼女の、その肌に触れる事だけで目眩みし、無我夢中のうちに辛うじて、いつもの女房相手の決まりきった縄掛けを、なんとかまあ恰好づけてやってみたことだけを覚えていた。

ただ沙賀城文が心憎かったのは、そんな私を「初対面」の男だと判ってくれたものか、ちよっとばかり『勝負』までの間をつくってさも困難らしく反転したり喘ぐ振りをして呉れたことであつた。実際のものとしてそれまで見てきたことに比べると私の縛りなど、彼女にとってカーテンをくぐり抜ける程の苦労も要らなかつただろう……。

私は彼女の脂の匂いを近々と吸えた事だけでも満足しながら——五番手を譲ってくれた兼に礼を言っていた。

「さあ、服屋、次はあんたの番だぜ」

みんなが入れ替り席を立てている間に、いつのまにやらうしろの席から「かぶりつき」にまで進出していた森が、ふりかえって兼に言った。

「社長が、いるぜ」

と兼は、こたえた。

「へッへ、社長はさ、例によって例の如し。挑戦はこちらまかせの『覗き専門』だってよ。なア社長」

その社長は知らん顔して眼の前の、背中をみせて坐り、髪をもてあそびながら呼吸を整えているらしい沙賀城文を、まだ執拗な眼で凝っと見詰めていた。

「俺ア……やめる」

と兼は言った。

「なぜ？」

「どうやら、勝目は無さそうだから」

「おい、おい、本気で言ってるのか？」

「らしいなア」

「なにを言うんだよ。折角、きみも彼女に挑戦するため来たのだろ」

「そのつもり、だったがな」

「じゃやれよ。それに、きみもさっきから見承知の筈だ。これは別に勝負勝負と言ったって……」

すると横から、聞いていなかったと思った社長が、

「自動車さんよ、ま、いいじゃないか。本人の好きなようにさせてやれよ」

と、そっと森のズボンを引っ張った。

「しかし社長、そうすると挑戦のほうはもうこれでおしまいってことに……」

「いや、結びの一番が、あるさ」

社長は森を見て、ついでに私たちを見回して薄ら笑いを浮かべた。

「なんだって。結び……？」

「今夜のハイライト、とでもいうかな」

「ちょっと訊くがそれは挑戦のことか」

「そう」

「誰のこと？……それは」

そこまで聞いたとき、私はハッと気がついた。思わず口出し仕掛けたとき、

「筋さん、さ——」

と言って社長は、うしろを振り返った。

「ア、あの人……でも社長、此処には居ないじゃない。何処にいるのさ！」

「ふふふ。先刻から其処の隣りの間でひとり……寝そべってでもいるんだろうよ」

私たちはそれを聞いて呆れた。もちろん今の今まで筋村という人物の存在も忘れて打ち興じていた私たちも私たちだったが、その沙賀城文の素晴らしい秘技を観賞しようとしてもしないで、隣室で「寝そべってでも」いる男！社長の口ぶりでは、挑戦することにはなっていたのらしいから、私は他人のことだ放って置けばいいものを、呆れついでに「何を気取ってやがんだ」と気を悪くした。

「おい、筋さん！……」

そのうちに社長が隣りの部屋へむかって呼んだ。みんなはつられたように一斉にふりかえったが、私だけは沙賀城文のほうを見て、ふり向かないようにした。

沙賀城文は、四つん這いですすみ出たナマズと低声でなにやら話し合っているようだった。縄の型が歴然と残った肌を、時折り中指でそっと撫でている。美しい背すがただ。

——襖の開く音がして、その筋村が入って来たらしい、連中の重なった質問やらお世辞やらが部屋を賑やかにした。

「フン！」という気持だった私も、知らぬまに振り向いていた。

と、なるほどこれは、社長が言ったように彼は寝そべり、睡っていたのかも知れなかった。なんとなく腫れぼったい眼をし、だれたように上唇を舐めていた。

「じゃア、光栄の最後の挑戦、やらして貰いますか」

と、彼は言った。初対面の時とは随分と違う、間のびがして濁み声であった。

(ひでえな、寝呆けのまままで彼女に触ろうというのか……)

しかしその時はもう彼は、後頭部をゴシゴシ搔いたりしながら窓際づたいに沙賀城文へ近づいていた。

ナ・マ・ズがあわてて後退りをして、沙賀城文が、ゆっくりと彼を見た。

「失礼しますよ」

と、筋村が、また私の疳が立つような台詞を吐いた。すると、だ。沙賀城文が、

「……とうとう、ね」

と、私が今始めて聞く声で筋村に言い、そしてニッコリとわらったのである。

私の上体は思わずシャンとした。

私たちはおろか今夜の主人である社長とも話し合っているところは、ついぞ見せなかった女である。その光景は、意外というよりは

かなかった。

私は今更の事ではないが安っぽい男だ。嫉妬と興味の半々に駆られるまま耳を敬^{そばだ}てた。

「いつかはきっと、あたしに挑戦なさる、と思っていましたわ」

丹念に言葉を区切って彼女は言った。

どちらかといえばハスキーな、しかし語呂のはっきりした声音である。

気がつく^と他の連中も、私の場合とはまた意も違^うだろうけど、雑談を打ち切り、真顔になって二人のほうをみつめていた……。

「筋村、といいます。よろしくね」

私の幼稚な結び目がそのままの縄を、彼女の膝もとからひろい上げながら彼が言った。

「うふふ。——存じあげていましたわ」

「え、それは不思議。どうして？」

「あなた、ここ一週間ばかり……いつもあたしの舞台を観にいらっしゃったわ……」

「う？ うん」

「そのくせ、最初から最後まで腕組みをなさったきり、皆さんのうしろからジッとあたしの事を睨みつけてらっしゃるだけ」

「そう……だったかな」

「あたしだって、これでも人並みよ」

「——」

「いつお見えになっても、何もしないでジッとあたしを睨みつけているひとって、此処の社長さんのぞいては……今までには貴方ひとりだけだもの。うふふ……それに社長さんと違って、貴方はそのお目々だけでは、一体なにを考えてらっしゃるのかわからない。なんだか薄気味悪くなっちゃったの」

「——それで？」

「それであたし、一度だけ貴方の事をお客さまに訊いてみたわ」

「ふうん、なんと教えられた？」

「卑怯だわ。それを、此処であたしに言えとおっしゃるの？」

沙賀城文は笑っていた。しかしその瞳は不意に、名状し難い光りを帯びはじめた。

「……貴方、今夜に限って、なかなか、お姿みせなかったわね、どうして？」

「いや、別にどうもしてなかったね」

「隣りのお部屋で居睡り？」

「まあね」

「ふふ、余裕たっぷりというところね。でもいいわ——」

彼女は顔を振って髪を背中へ払うと、その居ずまいを直した。

いつのまにやら笑みは消えていた。かわり

に、きつとしたものが、その横顔に疾った。

「どうせ今夜のことは、其処の社長さんと打ち合わせ済みなんでしょう？ あたしとしてはこんな形で貴方が挑戦して来ようとは思っていなかったけど……でも、いい。いさぎよくお受けするわ」

すでに、部屋の空気は変わっていた。

誰も身動きひとつ、しなかった。社長が手にしている葉巻が直っすぐに立ちのぼり、その先端の微妙な揺れが、なぜか私の心理をなお異様に乱した。

「——きみは、なにか感違ひをしているらしいね」

身を屈めながら筋村が言った。

「なぜきみに、そんな言い方をされるのかも判らない……」

ふたりは近々と顔を見詰め合っていた。

「……では、やはりぼくは止めることにしよう！」

と、不意に筋村が言った。社長のほうをニやりと見て、立ち上がると縄を捨てた。

すると、社長が身を乗り出すより速く、ライトの陰に居たナ・マ・ズが「泳ぎ」出た。

「まあ、まあ、筋村さま……」

と、筋村の捨てた縄をひろい、それを差し

出しながら、

「これこの通り、このひとの失礼はわたくし奴が幾重にもお詫びいたしますで、どうぞお腹立ちにはなりませんように……」

「いや、別に怒ったりはしていないよ」

「なら良うございますが……ヘッヘッヘッそれに筋村さま、実を申しますとね、このひとつたら……」

「？」

「あの筋村ってお人は、いつかきつと此の沙賀城文に挑戦してくる。その時はわたしも筋村さんに応えて大いに頑張らなくちゃ——とそれはもう、ここ二、三日は楽しげにしていたのでございますよ」

「——」

「なあに、このひとつたら貴方が今夜に限って最初から観ていて呉れなかったから、勘ねているのでございますよ。ですからその、其処はひとつ此のわたくし奴に免じてお遊びのほうを……」

ナ・マ・ズは愛想たっぷり下手に出ている。ところがそのナ・マ・ズの仕草に、ちょっと「強引」な節が——と私が見たは僻目か。と、

「そうだよ！」

社長が待ち兼ねていたように口を出した。

「遊びに決まってるだろう。ハッハッ、儂だってなにも変な事を筋さんと打ち合わせたりした覚えはない。だからさ、御両人とも行き掛かりの事は忘れて此処はひとつ、楽しく終らせて呉れないかなア」

沙賀城文は、ゆるく首を振っていた。その顔には先刻の笑みが、もどっていた。

「——筋村さん、お詫びしますわ」

そして、語調を変えて言った。

「ではお遊びの最後の挑戦者、ただし性根を据えていらっしゃいませよ。うふふッ」

向うをむいたので顔は見えなかった。残念ながら、その表情を私は知り得なかった。

一同は身動き出来なかった？ ことから解放されて、漸くざわめきを起した。

筋村も流石に大人げない事を、と思っていたのか、私たちのほうを見渡し、笑いながら肩をすくめてみせた。

そして彼は、社長やナ・マ・ズに催促され、縄を受け取ったのである。

「ううむ、あの筋村って男、一体何者なんだろうな？」

煙草を啜えながら私は小さく呟いていた。すると、

「あれ、知らなかったのか！」

聞き咎めた隣りの兼が、私を覗きこんだ。

「迂濶千万だぜ、水道屋」

「なんだ、きみは知っていたのか」

「知らないでか、いやみんな知ってるさ」

「誰だ」

「馬鹿だなア、よく聞けよ。——彼、筋村って名は、どうせ俺たちが相手の今夜のために新しくつくった名前、といったところだ。本当の……仮の名は、ホレ……」

(3)

その男が縄を捌くと、縄はまるで生命を吹きこまれたもののように緋の上で躍った。

男は、縄の中ほどでつくった輪に女の手首を通すと、それに片一方の手首を重ねて、見た眼にも緩く縛った。というより、巻いた。

（——いいか？）

という風にチラッと女のほうを覗き込んだ

男は、そのうしろ首に手を掛けて押した。

思わず、女の臀部が持ち上がる。

其処へ、すかさず男の片膝が入って、女体

はたじろぎながら横向きにと変った。

男は手首を背中高く押しあげながら女の動きに従って回った。

女の姿態が苦痛に歪み、その横顔が反りか

えったとき、男は素早く縄を分けて、左右に張られている二の腕に掛けた。

一ト巻して、背中で捻り合わせながら、今度は例の見た眼にも緩い手首縄の間へ通す。

まだ縄は残っていた。

——しかし男は、背中の捻り合わせの部分に縄を一ト通しすると……それで止めてしまったのである。男は立ちあがり、ふうッと軽い吐息をついて私たちを見た。

しばらくして、

「え？」

と社長が顔をあげた。

あまりにも呆ッ気なかったからだろう。

特に私など、女を縛るとなるとやはり胸のほうにも縄を回して、という先入観念みたいなものがある。筋村が中途半端に、まだ縄を残しながらも立ちあがってしまったとは思われなかった。

「それでいいの？」と社長は言った。

「うん」

と頷いて、どうして？ といった顔をしながら筋村は、もどってきた。

私たちは、もう筋村なんか？ 見向きもしないで、沙賀城文のほうを注視した。

「さあ、これぞ今回フィナーレの一ト幕、沙

賀城文が神技のほどを篤と御覧くださいませよう！」

これがいつもの口上か、それとも図に乗ったかナマズのおやじ、この緊迫した一瞬に突然、邪魔ッ気な大声を張りあげた。

——女は、毛氈をにじりながら、私たちに正面向いた。のけぞらせていた顔が急に落ちて長い髪が太股へみだれた。

肩がすぼんでいき、また戻って、その繰り返しがつづいた。しばらく経った。

動きが停まった。

——なんだ、抜けたか。

と思ったとき、女の顔があがって、上体が反り返りはじめた。

未だだ！

と胸でさけんでまた眼を凝らしたとき、その女の仰向きの顔にみるみる変化が起きた。

それは一度赤黒くなり、たちまち異質な白さとなっていったのだ。

眼の隅で男たちが、ナマズが、身を乗り出していくのがわかった。

女は次第につよく反り返り、そうしながらも今までに無い身のくねらし方をしめした。

先刻から見馴れた？ その『皮革』が其処にも彼女自体の歪みがあるように、た・お・り、

くねった。いや、それは激しく蠢き、流脂しながら、次第に高まる『恐怖』に声を発しているようにさえ見えはじめた。

「ア、ア……」

と彼女の口唇がいっぱいにひらき、赤胴の軀はそのとき、うしろへ倒れた。

まさしく、鞭のように、下肢が私たちの眼前で跳ね躍った。

一層つよく匂いがしてきたと思ったら、彼女の肉体の全面からさらに『脂』が噴き出てそれは彼女の揺らぎに合わせて肌にどよめきはじめた。

沙賀城ッ！ と誰かが叫んだ。

その声で私たちは此の場の譬えようもない悲愴な空気を、今更のように感じ取った。

横転した女は、すでに脚まで、足搔かせていた。逆合掌型の手首がふるえ、なにかを掴もうとするかのように空を搔いた。

縄はそんなに喰い入っているのでもない。むしろ、今にも解けてしまいそうだ。

しかし捻じ向けている女の顔は、あきらかに苦悶し、恐怖し、やがて諦めの色を浮かべていったのである。

斯うなると、もう演技などではないことは確かだ。たまらなくなったのか、ナマズがそ

の丸い体でころがり出た。

「おい！……どうしたというんだッ」

しっかりと瞳を閉じていた沙賀城文は、その声に薄っすらと光るものをにじませた。

「……起こして」

と彼女は言った。ナマズが起こすと、瞳は閉じたままで私たちのほうへ向かい、

「……筋村さん、この勝負あたしの負けでしたわ」

と、つとめて明るく、しかし声をふるわせて言うのだった。私にはそのとき、彼女のその心情がよくわかるような気がした。

「いや、辛うじてよくが勝たせていただいたというところだろう」

筋村は顔をつるりと撫でてこたえた。また安っぽいと思われるかも知れないが、その彼の言外に含むものをも私は感じ取ったように思った。

「でも筋村さん、いつの日かもう一度だけあたしに挑戦……いえ、あたしに応戦させてくださいね！」

よろけつつ彼女は立ち上がって言った。

「きつと……貴方が思ってくださいたようにあたしは、一流の『縄抜け師』になつてみせますわ」

「ありがとう、そう言ってくれれば……」

「きつと——です！」

「うん、おなじやる事なら、その方がいいじゃないか……ただし沙賀城さん」と彼は言った。「ぼくだってこれでも一応は『緊縛師』で通っているらしい男なんだ。だからね、その、もう一度のお目見得の時までは、しっかりと腕を磨いておきますよ」

彼女は、縛られたままの身で深々と一礼した。

そして滴る『脂』をきらめかせながら二、三歩いて、呆然とした顔で立ちつくすナマズに言った。

「帰るのよ、早く！」

ナマズが彼女のうしろ手に手を掛けようとする、

「解かなくていいわ！」

「え、なんだって」

「今夜は……このままで帰るのよ」

「し、しかし」

「さ、早く！」

ナマズはあわてて彼女の服を取ると、ちょっと小首を傾げたのち、抱き上げるようにしながら着せてやった。うしろのチャックはそのまま、鉤ホックだけ掛けて、そして鞆を

取ると……ふたりは、もう私たちを見返えろ
うともせず、しずかに部屋を出て行った。

なにを、どう話し合えばいいのか、私たち
までがシュンとして、黙くりかえっていた。
「これで……」

と、筋村の呟きに似せた声が私たちの耳を
うったのはしばらく経ってからであった。

「彼女は、きっとけれん味の無い一流の『縄
抜け師』になってくれるかも知れない……」

彼は、別人のように、疲れ果てた顔でうっ
そりと立ちあがった――

(4)

沙賀城文は、この夜を限りとして紳士ども
の前に姿を現わさなくなった。

現今流でいうと、突然の『蒸発』である。

蒸発されてしまった男たちは、これに気づ
いたとたん大いに嘆き、少し色をつけて言え
ば、これから生きていく楽しみの半分ぐらい
は持って行かれてしまったような、悲しい顔
をした。

多分、各地では、この縄抜けの女王蒸発の
件がああ夜の男たちから伝えに伝えられて、
人々のあいだにあらぬ憶測が乱れ飛んだこと
と思う。しかし、いくら残念至極の言葉を繰

り返してみたところで、どうにかなるもので
もなかった。もともと縄抜けを披露している
時の彼女しか知らない手合いである。プツ
リと一方的に消息を絶たれてしまったのは、そ
れっきりで打つ手もないのが当然だった。

一体彼女は、何処へ行ってしまったのか。
斯うして、彼女のファンにとっては実に面
白くもない一年余が過ぎ去っていった……。

この間、私の場合ただ残念がってばかりし
ていたのではないことを、ここに言っておか
なければならぬ。

話は前後するが私は、あの夜、筋村が如何
にも疲れ果てた、といった感じで立ちあがっ
たその瞬間から、よし！ これから絶対
に彼に「接近」していなければならぬ、と決
意したのである。

事実それからは、彼が許す許さないに拘ら
ず強引に、図々しく、私はまとわりついてい
ったことであつた。

その下心は、もうお察しの筈だ。

そう、この行動はすべてあの夜の彼と沙賀
城文との最後のやりとり起因する。斯うし
て彼にくっついてさえおればやがて彼女を、
いま一度この目にする事が出来る。いや――

彼と彼女の、その「決着」の如何を知る事が
出来る。そんな信念がああ瞬間から、この
私に燃えはじめたのである。この信念があつ
たが故に私は、彼が困惑するのも構わず、ま
とわりついていったのだった。――あらゆる
方面に訊ね廻っても遂に誰ひとりとして知っ
てはいなかった彼の住居――これを知る大努
力も、その目的があつたればこそだろう。別
に、屁を鳴らすほどの苦勞とも思わなかつた
のは確かだ。

さて此のような私に、彼はやがて呆れ果て
なお執拗にまとわりつかれて遂にカブトを脱
いでしまったようであつた。

――何が動機か、其の辺は私には明確ではな
かつたが、彼筋村はとみにあがつていた。

察するに彼が女体緊縛をやらかすのは、あ
くまでも自分自身のためである。いつか彼が
呟いていたことがあつたが、『ぼくが女を縛
るのは、取りも直さず自分のためだけでしか
ないという、恐ろしく自閉的な觀念から成り
立ったものなんだ。そう思っている。他人の
ために女を縛るなんて、それはもう甚しい自
己欺瞞だろうぜ……』私はこの言葉を何とな
く信じてしまっている。だが、しかし、だ。

彼が、その性向を満たそうとすればするほど、現今の状勢は逆に、彼をあの手この手と責め立てて、人々は彼のその「卓抜」した緊縛の技をただ彼ひとりのものとは絶対にしておかなかったのである。さらに『緊縛師』たる名も、同じやるなら卓抜たる彼にと、夢を託しているに過ぎぬかも知れない。

女を縛る、という言葉からくる想像とちがって、彼にも実に人の好いところがあった。

相手の熱心さにも依ったが、そんな時の彼は本業を放ったらかしてノコノコと出掛けてしまうのだった。

あるとき彼は、都心で評判の集団『オリジナリティ……ナントカ』いう、この私からみても怪ッ態な連中に頼みこまれてその集會場の「裝飾」に手を貸してやった。彼は、自分が頼まれた範囲内に於いて凄まじくその腕をふるった。そしてその集會の雰囲気（ムード）を盛り上げた幾多の写真、彫刻、またパンフレット……：勿論その主題は、『縛』であった。

この事がまた、その世界に大いなる反響を巻き起こして彼はいよいよ、窮すれば通ずならぬ通ずれば通ず、実社会の企業にも進出させられていくのである。もちろん、どのように通じたのか私にはこの点不明ではあるが。

ともかく、そんな、恐るべき巨人となりつつある彼に、この私はもう必死となつてまわりついていったのは、当然のことと、すでに彼女に会いたいがために、また「決着」を知りたいがためにという単なる道具視だけ、どころではなかった。

「一体、そんなきみの執念は、どこからきているんだね？」

あるとき彼が何気ない口ぶりで訊ねた。

私は考えて、斯う、こたえた。

「——いえ、むこうに皮革（かわ）があるから、涎を垂らし、追いかけていくんですよ」

——或る、秋雨の降りつづく午後。

私は彼の留守宅に邪魔して、その縁側で彼の帰りを待たせて貰っていた。

その日は、案外と予定時間にそうて彼は帰って来た。

「あらわれたよ」

と彼は言った。

そのころにあつても私は何も他意があつて彼に会いたがつていたのじゃない。たったそのひと言が、一瞬わが耳を疑わせ、しばらく絶句させた。視界がぼやけて、彼の口もとだけが見えた。

「……彼女？」

「そう」

「……何処に？」

「いや、それは相変らず知らせてくれない。ただ、いつか約束した通りに、ぼくに挑戦してくれないかと——さるお人を通じて話があった」

「……」

「ふふふ、こうなると、どちらが挑戦で、どちらが応戦か、わからないねえ」

十数分後、私は膝がしらをかくがくさせて彼の家を辞そうとしていた。

〈二日のち——深夜十一時！〉そのことだけが、脳裡にだぶりつづけていた。

「これが終われば、きみ、まさかぼくにひっついていくことはあるまいね？」

「多分。——それでわたしも、本来のわたしに……いや、戻れないかも知れないが……」

半分は口のなかだった。自分でも何を言っているのか判らない。

ひとりになったとき、今更のごとく、鮮明となった彼女の、あのときの折り折りの姿態が浮かんで、不覚にも鼻のあたりがキナ臭くなるのをおぼえた。

沙賀城文、いったいお前は今まで、何処で何をしていたんだよ？

あの筋村に挑戦しろなんて、なんでそんなだいそれた事を言って現われたのかよ？ なぜファンの皆さんお久しゅう、と言って、戻って来てくれなかった……。

お前は、あの筋村に挑戦が出来得ると思っているのか？ そんな自信が、本当にあるのか？……

私は無性に、彼女のこの一年半のことが知りたくなった。挑戦応戦などと言えども実際は『縛る者』『縛られる者』で、そこには歴然とした差が存在する。その差を、完全に消滅させようという何かが、この一年半のあいだに彼女に取り憑いたとでもいうのか？——扱て。

私の、その事前の悩みなど、いくらここで並べ立ててみたって仕方がない。

この私の疑問を説明？ するには、ここで一足跳びに『その当夜』の光景を述べるよりほかないであろう。

あの、いまだに思うに、身の毛もよだつ凄まじい『勝負』の有り様を語るよりほかないだろう。

これを語るだけで、その沙賀城文という女のすべてを解き明かせよう、と思っているからだ。そう、信じているからだ——。

筋村明志側の条件。

縄に制限なし。本数、長短いずれも——。

沙賀城文側の条件。

相手の挑戦方法、如何なるものであっても一切構わず。ただし、その場において火勢強き篝火ふたつ用意のこと。それのみ。

——その篝火が、あかあかと燃えていた。広い庭園全体がゆらめいているような、火の勢いで。

その真ん中に、地中深く根を埋めこまれた……X字型に組んだ白木の丸柱が建つ。

沙賀城文は——。

その柱を背にして喪服のように黒っぽく見える着物をかなぐりすてた。

篝火に照りかがやく素晴らしい裸体、むしろ一年半前よりも豊かに映えた女体が浮かびあがった。

それを正面の縁側に坐って眺めやるのは此の屋敷の主人と、私と、そして何故かひどく痩せこけて見えるナマズのおやじであった。

三人は、先刻から彼女と筋村のほうを忙しく見くらべていた。

筋村はすでに沓脱ぎ石へ降り立っていた。一步庭へ降りて、その彼がふりむいた。

微かな瞬きをする。——それは、サアこれから始めますよ、という合図みたいなものにもとれたし、沙賀城文の、その時の余りな気迫に押されてしまったという、彼らしくもない弱々しい仕草とも受けとれた。

「沙賀城さん。本当に、彼がやることに異存はないんだね！」

この時また、主人のK氏が念を押した。心配そうな顔で、ムズムズしている。

沙賀城文は返事をするかわりに、

「筋村さん！」

と言って白い歯を見せ、誘った。

この日、筋村が「提供」した決着の方法、『大の字逆磔』を、まさかと思っていた彼女は堂々と受けて立ち、いままた念を押されても些かも動じる風がないのだ。もっとも彼女はその場になって、駄目だ出来ないとは言いが兼ねたであろう……？ が、それにしても彼女の「応戦」態度は堂々とし過ぎていた。

「——よしッ」

と筋村が応じた。やはり女のぎらつくような瞳に誘われてか、彼の眼も漸く光りを放ちはじめた。

彼は縁側に重ねて置いてあった縄の束を引っ握んだ。このロープは彼愛用のもの。

そして大股で砂利を踏んだ彼は——
彼女に近づくなり、飛び掛かって軽々と引きあげ、休まず矢庭に半回転させた。

彼女の顔は黒髪を長く曳いて彼の脚下に達した。

「うう……」

期せずして、K氏と私の口から唸りが洩れた。

「やっぱり、やるつもりか……」

K氏が唸りついでに、言った。

筋村は大きくひろがった女の片脚を、X型の上部にくくりつけた。そしてもう一方の脚も。

女の顔を足許に揺らして足を踏ん張る筋村の横顔は、私にはまさしく悪鬼の形相と見えてしまった。

女の脚が固定されると、今度はX型の下部へ、彼は女の双腕をそれぞれへ縛りつけた。

そして次にしたことは、Yの字型に架けた腹から首もとまで、女の軀をまるで俵掛けでもするように緊く柱へ固定させていったことである。

女の顔が異様に膨れた。

ひどく鰓が張って見えた。同時にドス黒く髪との境目もつかぬほどに変じた。

そのなかで剥いた両眼が、黄燐のようにもえながら、私たちを睨みつけた。

余りな……余りな女体の残酷図に私はもう息も乱れがちになっている。

一目瞭然、彼女がいくら執念にその身を焦がそうとて、なんでこの緊縛から逃れられようか！ 彼女の技を信じたくても筋村がその縄掛けを見ては、もう絶望を禁じ得ない。

彼女は本当にそれから脱け出せる自信があるのか？ いや、本当に自分がそんな『とんでもない』事が出来ると思っているのか？

もし、仮にだ、彼女にそんな『恐ろしい』ことが出来たとすると……彼女はもう、人間ではなくなるのではないか……

筋村は、三本目の長いロープも終らせようとしていた。足を突っ張り、ロープを引き締めながら、そして梱包した荷物のように結び目をぽんぽん叩きながら間もなく彼は、彼女のうしろに回った。

どうやら、縄止めだった。

やがて彼は、後退りになって離れ始めた。見ると、手を胸もとで摩っている。

ゆっくりと、顔を振っている。

まるで道化ているような、踊っているような恰好であった。

——だがそんな彼の眼が、仕上げたばかりの『作品』を丹念に検べながらランランと光っているのを、私はみて取った。

見方によっては、これほど冷徹な姿はないではないか。これほど慎重な姿はないではないか。

芸術家というものを一切知らない私が、其処に歴とした『芸術家』見た。

ようやく納得がいったか、彼は顔をひと撫ですると、くると此方をむいて例の、揺するような歩き方でもどって来た。

「おお。大丈夫か？」

とK氏が言った。誰に対して言ったのか暫く私にはわからなかったが、K氏はすぐに泳ぎ出すような恰始で手を沙賀城文のほうへ差し伸ばし、縁側から降りようとした。

と、この時、

「来ないでッ！」

ぴしッと極めつける声が前方の地上すれすれに浮いている女の逆様顔から飛んできた。

K氏はぎくん！ とし、そのままの交てこりんな中腰で身動き出来なくなった。

私たちの近くに立ち、顔の汗を拭っていた筋村がそんなK氏へ手を貸して、そっと元の位置へ坐らせた。

「彼女、大丈夫かの?……」

筋村を見上げながらK氏は、さも自分が危急存亡の時であるかのような表情をした。

「大丈夫ではないですか」

「いや、抜けられるか、と訊いとる」

「それは……さあね」

筋村は甚だ誠意のない声音でこたえた。

「違う……やっぱり抜ける、抜けられない……」

……そんな問題じゃない……」

K氏は口をもぐもぐさせた。

「そう、彼女がもしも、あの縄から脱け出すことが出来たら——この世にはもう、素直な意味で言う緊縛師たる名の者は、存在し得なくなるでしょうな」

私は、彼等のやりとりなど上の空で聞きながら、しきりに鼻をうごめかせていた。

最前から、例の、あの『匂い』がたゆとうていたからである。

しばらくして、私はオオ! とさげんだ。

彼女の躰が、濡れはじめたのだ。全身に、あの『脂』を噴き出しはじめたのだ……

太股から、腹から胸から、みるみるうちに溢れ出たどろどろの液体が、どよめきながらながれつづけ、そしてそれは間もなく髪を侵して砂利の上にと溜っていくのである。

「おう!……」

ひとつの声になって筋村とK氏が唸った。

私は思わず目をとじた。

(駄目だよ……。しかし、それでも駄目なんだよ!……)

彼女がいくらそんなに『脂』を流しても、そしてその身を捻り、くねらせ、撓わせてもこの筋村の呵責極まる緊縛『逆磔』からは、到底、脱け出せないのだ……

うっすらと目をあげると、靄が掛かっていた。絶望感が満ちた。

と、そのとき、その靄のなかで鈍く逆さ大の字で照っていたものが、奇怪にも、下のほうにと流れはじめた。

アア、錯覚だ……と思ったとき、突然耳許で絶叫があがった。

「ひッ!——あ、あれを、あれを見ろッ」

膝が、ものすごい力で掴まれた。

顔を振って、眼をこする。

瞬間、視界から灰色のものが消え失せて、そして私はこのとき、此の世のものとは思わぬものを、見てしまったのである。

……女の掌は、その腰の辺りにあった。

大きくひらいていなければならぬ筈の下肢は、一条の縄を曳きながら、その空間でび

ったりと閉じられていた。

砂利にまみれた髪の上に、夜空を眺めている顔があった。

だが、見ているうちにも、その女の肉体は——あの『脂』そのものに化してしまったように縄をぐぐり抜け、どろどろと、微かにうねりながら、地上へとながれつつあった。

さすがの筋村にも声はない。

K氏も私も、呼吸をわすれている。

この三人の空虚な凝視のなかで、やがてその『流動物』は完全に柱からながれ落ちてしまった。

そして尚もうねりながら、テラテラと輝きを増して、砂利をきしませて此方へと近づきはじめた。

「きえッ!……」

突然、ナ・マ・ズのおやじが悲鳴を上げたかと思うと、顔をおおい、その場に突っ伏した。

下肢をそろえて左右へ跳ね、脂ぎる全身を撓わせて躍りあがると、その、私たちの傍近くに落ちた地面から、鰻が張って不気味にドス黒い顔で、沙賀城文がニタリとわらいかけてきたのはこのときであった……。 (了)

(カット・野江三郎)



珍書探訪

見捨てられた艶笑資料 (二)

齋藤 夜居

春霞 謄写版 黄半紙 全十二丁

『春霞』第一冊 となっており叢書の型式になっている。内容は「女の情」と「紅燈の快淫」の二篇を収録。戦前、昭和十年頃の作品である。そのうちの一篇のみ荒筋を次に記すと、

女の情

ある近郊近在の音に聞えた物持ちの家に、出産を寿ぐ祝宴があった。田舎のこととして二里、三里は何のその十里も遠方から、親類縁者が多数より集り、長者の家では上を下への大混雑であった。

物数奇に金をあかして作った立派な湯殿で

も、この日は男女ひっきりなしの出入りが絶えず、湯番の下男は眼の廻るような忙しさだ、夕方を過ぎると流石に忙しき騒がしさ

も閑になって、時折、座敷の方から聞こえて来るさざめきが、静かな湯殿のぐるりを波紋してくる位のことである。下男の佐助はまずまずと煙草を一服、湯殿の釜前にぐったりと坐り込んでしまった。

「アラ、誰もいないのね。恰度好いあんばいだこと」と言いながら、明けた戸をピツタリ閉じて、なまめかしい女の声。

(おやッ、こんな田舎じゃ滅多に聞いたことがねえ声だ。どれ、じっくり拝ましてもらいましょう) 佐助は家人には内密でつくった、

女部屋の着物脱ぎ場の戸板を、こちらからは暗くしきってあるので、向こうからは見えないう便利なのぞき穴に、眼を寄せた。なまめかしいのは当然だ。隣村の若庄屋が東京から馴れ合ってつれて来た、近在あまねく知れ渡っている美人で知られた若奥様。年の頃は三十九前後の、あぶらぎった大年増である――。若庄屋とは相惚れの仲とて、水も洩らさぬその夫婦仲は、これ又近郷までもの評判だった。

好きなのか、酒を少し飲んだのであろう、艶かな頬には、なお色を増して、息を、ふとぶとと吐くと、着物を荒々しく脱ぎすてた。佐助は、おどる心を抑えて眼を離さず、じっと見ていた。勿論、女は誰れひとり見る人ある

とは夢にも思わず、大胆に、太帯を解き着物を脱ぎ、長襦袢をぬぎすてれば、豊かにもむっちりとした、まるで肉の重みに堪えかねているような双つの乳房が現われ、

「オオ暑い」と言いながら、燃えるような真赤な緋縮緬の腰巻一つになった。そして、じぶんの手で両の乳房をぶくぶくともみほぐし、ホッと溜息をつき、艶な姿態のまましばらくぼんやり物思いに耽っている様子。やがて、佐助のお目当ての赤い腰巻の紐を解きにかかると、今はまったく息を殺して、穴のあく程じーいっと見据えていると、乳房だに見てさえたまらぬものを、ちょっと腰をもじったと思うと、もう腰巻を……（中略）……まったくさても助平なことをする女よ、と佐助が思いながら見ていると、女は片手に手拭いをぶら下げたまま、前に蓋をもせず湯殿に入ってしまった。

今度は湯殿にはいつてしまったので、釜前に廻らなければ見えない。音をしのばせ、急いで板と板の割目から、無我夢中でのぞいたトタンに、「あッ」なんたる無造作なことにや、女は板前にどっしりとしやがみ、まっ白いお尻を引っ立てたかと思うと、ジャージャーとすさまじい滝のような音を立てて小便を

たれる。もう、其処までで佐助はたまらなくなって、みずからを慰めると、「アアたまらぬ。あの太腿のあたりを嘗めてみたい」などと言いながら、疲れ果てて横になる——さて、良い夢を見たものである。

ところで、しばらくウトウト眠り込んでいると、この家の下女下男頭のお金婆さんに起こされ、さっきの若庄屋の奥様がお酒に酔ってしまっているの、旦那様がお供してお送り申してくれとの用命。大酔している奥様は帰りの途中で、前後不覚に青草しげる田舎道で打ち倒れる。佐助は介抱にとよせてムラムラと謀反気をおこし、最前からの夢にまで見た目的を遂げてしまう。たとえ酔って意識を失った上とは申せ、「アラ、何をするのです」と金切声を上げながらも、「ああ残念、名もなき下男に犯され、なんと夫に申し訳があるのか」と口惜し涙のうちにも、佐助の逸物に浮かされて思うがままになってしまったのも、それは女の情であろうか。

扱て、戦前の見捨てられた艶笑資料として所謂春本といわれた読物を考える場合、こうした一種の創作型でまとまったのは少なく、

多くは新妻の書簡式のストーリーのいらぬ紋切型と、至極オーソドックスな江戸時代から知られた艶本の読和（よみわ）で、それも無責任な校訂や書き替えとなっている。また明治末期の伝小栗風葉作の例の「むき玉子」というのが人気があつて、幾度も幾度もむしかえされて出ている。読和式のものには「春情妓談水揚帳」と「淫書開好記」「千草の花双羽蝶々」とか「壇の浦」。漢文直訳式の「肉蒲団」「百戦百勝」まであり、名の通った作品で良心的な翻刻もあった。が、素材として扱おうとしても最も散逸が甚しくて、とても系統的に順序立てることは無理である。

併し、一般の民衆が如何にかくれて喜んで読んだか、ということは今年許にある数点の資料を眺めていると、実によく判る。手垢まみれになって、紙がささくれたっていたり、不潔なシミ跡ではないかと思われる汚点があったり、更には自家製の写本もあり、その用箋として大日本帝国海軍と印刷されたケイ線入りのものまであった。恐らくは艦内回覧用の下士官の手すさびでもあったのだろうか。

◇ ◇ ◇

その点、△戦後▽になると事情は、すっかり変わってしまう。

戦争に負け、社会百般のあらゆる事柄がひっくり返り、百鬼夜行どころか昼でも夜の女があらわれ、通行人の袖を引いたのだから、春本の横行また怪しむに足らなかった。カストリ雑誌に続いて、やがて性風俗雑誌の大流行の時代に入ってから、それらの誌上に次の記録を見出すことができる。

○秘密出版捕物帖 城戸幸夫（『あまとりあ』一ノ八 昭和26・9）

戦前戦後にわたる珍書屋と警察とのいたちごっことも云うべき取締りの裏話、文芸市場社時代の古い雑誌記事からの書直しで余り参考にならないが、戦後はストリップやヌード写真、エロ小説のハンランなどから、秘密出版の艶本に対する欲望も戦前ほどではないように見受けられる、と書いてある。

○ワイ本屋魂胆ものがたり 青山繁（『あまとりあ』一ノ九 昭和26・10）

これも戦前を主としての淫書蒐集家の体験談であるが、短章ながら実際でなければ書けぬ事柄がわかる。

○私は猥本作家だった 秋元重男（『あまとりあ』二ノ五 昭和27・4）

「人生にはこんな裏道もある、哀しい秘密出

版界の実態」内職に春画を描いている画伯と売れない作家、通信販売の猥本業者の苦しい経営の様子など、内容は一面の真実性を持った読物である。

○戦後の隠れた艶本 藤本雅也（『人間探究』秘版艶本の研究二 昭和27・9）

戦後都内の盛り場やガード下の闇で実際に売られた春本類の集録と一部分を解説している。

「風流文学選」「綾吉と三人の女」「修善寺物語」「四畳半襖の下張（ガリ版刷春画入）」「お嬢さんと番頭」「好色大名」「離れ島」「女中の貞操」「結婚の初夜を友に報ず」「桃色の夜」「たわむれ」「空閨」「慶長物語」「地獄の享楽」「和尚と娘」「春情江戸物語」「好色十二の扇」「桃山御殿」「女主人と雇人」「未開紅」「乙女の歓喜」「処女宝」「淫売窟」「肉体の争い」「未亡人」「淫戯の相手」「壇の浦」「バルカン戦争」「蚤の自叙伝」「聖書」「女女で日を暮す」「汚れた花園」「風流花月源氏」「人性縮図」「模範女学生」「ある人肉市場」「淫盗伝」「恋の百面相」「平家蟹出生諸誉嘶」「ガミアニ」「義経と女院」「ある新妻の手記」「あいびき」

「春淫妙戯の秘法」「夜の花園」「炬燵物語」「多情多淫」「家庭愛慾図絵」「姐妃伝」「やまと肉ぶとん」「ずいき物語」「性交奥伝」「お夏清十郎」「花吹雪情の白菊」「もだえる未亡人」「日本珍書復刻集」「閨房秘書」「稀書複刻全集」「憩」「桃」「青春泉の如し」「旅の嵐」「枕鏡」「狂態」「秋月」「二人の暴漢」「のぞきみ」「覗かれた女達」「貞女」

等々の書名を知ることができる。今となつては仲々珍重すべき記録である。筆者藤本氏は『愛書家くらぶ』（4号 昭和42・4）にこの続稿を発表し、「女郎蜘蛛」「旅日記色ざんげ」「龍子」「夏まつり」の四篇を追加した。

○仕掛本の秘密 秋元重男（『人間探究』昭和27・12）

春本屋の経営をあばく、となっており、「春本屋と云っても、大ていは正業をもっているのが常で、春本出版は殆ど副業だ。正業が行きづまると、春本で儲けて一息つくこうとして始めるのが多く、素人が殆どだから、頒布の要領が不味く、その上、早く金にしようとあせるから、すぐに捕る。春本屋で一カ年と続いた者は極めて少ない」とある。その通り

であろう。

○秘密出版の実態 秋田宗一（『風俗科

学』一ノ四 昭和28・12）

どこで誰がワイ本を作るか？ この種の裏話のうちでは実に詳しく、値段や製作者のこゝとまで出ており、如何なる人が春本を出版するかを三つに分けている。「第一に雑誌出版社などで、興味を持って研究的に蒐集していったものが、営利目的で出版する。第二は筆耕屋とか手先の器用な連中が、事業として出版する。第三はある程度の資本を持った人物が、この種の本の売れ行きと儲けに着眼して投機的な考えで出版する。——この中で最も多いのは第二の場合で、この人達は一、二の例外を除き、事業に失敗、又は職を失って、明日の糧にもこと欠くような悲惨な情況に追いつめられ、強盗盗をはたらく元氣も詐欺横領をやるさもなく、さりとて食わねばならんという所から、道義上から考えても、比較的良心的なものとして、この種の本の出版を志したのである」云々。詐欺・強盗を働くよりは、春本屋は良心的だという珍説。

○エロ本執筆者の手記 前山春久（『風俗

科学』二ノ十一 昭和29・11）

ある文学志望の青年がカストリ雑誌社から

原稿を突き返えされ、悲嘆の涙にくれていると、出版社社長と名のる怪しい人物が現われ春本書きをすすめ、一夜のパンパン宿をおごってくれる。青年はその体験を作品化する、そんなことを繰り返すうち、しだいに深みに入ってしまう。……と云った小説である。

大体以上に採録したものを特志の方は漁って読んで頂くと、戦後の春本刊行事情がよくお分かりになれると思う。此処まで書いて私自身の体験談を思い出した——当時、写真や春本を好奇心のおもむくまま、蒐集に熱中しているうち、春本屋の老人と知り合いになりその自宅と云っても古ぼけたアパートの一間を訪問したことまであった。その老人は若い頃は書物狂で、焼け出されるまで立派な蔵書家だったことは座談の端々に現われていた。字が上手だったので、自家版のプリントの春本作りに熱中し、製本も自分でやって、古本屋に売ったり、露店におろしたりしていた。そのうち、仲間にも密告されたりしく、とうとう警察の留置場に放り込まれてしまったが、何分ともそういう所は生まれて初めてだし、元々が根は善良な、気の弱い、おまけに持病の喘息まである老人のことだから、顔は

真っ青になってしまふし、ブルブルと身体ふるえが止まらず、恐怖心の余り取調べ中に思わず小便をダラダラと洩らしてしまった。

下着はもとよりズボンから、腰をかけている椅子を伝わって床板まで大洪水。齒の根も合わずにガタガタふるえているのだから、捜査主任の方がかえって驚き、おそれをなして、こんな臭いお爺さんにいつまでも警察にいられてはかなわん、と判断したものか、そのまゝ「モウ帰れ」ということで、事件はウヤムヤのうちに済んでしまったそうだ。

この老人の云った言葉で、今でも忘れられないのは、「春本づくりなんて、何か他に生計手段のある人のやることではない。貧乏というより、もっと悲惨なことで、今日明日を食うのに追われてやったことなんだ。それに読書生活のうちエロはどうしても、やがて倦きが来るものよ。エロ物からは早く足を洗って、卒業しなければ駄目だ」。これも戦後の生んだ弱者の悲鳴と云えばそれ迄だが、焼け出されさえしなければ、家作持ちのご隠居さんであり、好書家で無事にいられたのに哀れな話である。

ほかに、この種の読物にはショッキングな世評にのぼった事件。古くは説教強盗と未亡

人。阿部定。戦後では小平義雄の事件の告白物などと素材を新聞種から取ったものもあった。ノーマルな交合よりも珍奇なスリルを追う傾向は、読書界いずれの場合にしても同じことが云えそうである。以下、二、三かたんに作品そのものに就いて紹介しよう。だが先ず以てお断りしなければならぬことはそれは当然のこと乍ら、オブ・シーン抜きでは絶対に、無難ではあるが、酔わないビールで物足らぬものであるということだ。

◇ ◇ ◇

強羅の女 活字 90頁

この一篇の物語の主人公はシベリヤ帰りの復員者だが、いまは秘密探偵社の仕事をしている。戦争中の上官の未亡人あき子と既にねんごろな仲となっており、その家庭に起居を共にしている。今朝も勤務先の会社に出掛けようとするのだが、あき子はベッドから男を離れたがらない「さあ、会社に遅れるから」「いやーん、薄情もの。ねえ、わたしたた欲しくなっちゃったの、だから……ねえ、いいでしょう」「困るなア、あき子さん。じゃあホンの五分間だけです」と男は遂に女の欲情に負けて、ベッドに崩れるように重なり合

う。昨夜三回もたのしんだというのに、なかなかお旺んなものである。こうした開巻早々の取組みがあり、読者を倦きさせず、この作は当時評判が良かったと云われている。この男あき子の妹の由利ともうまいことをやり、探偵社の仕事の依頼主の戦後成金の夫人の娯楽ともよろしく、戦友の妻の臨月の女を味見したり、あき子の友人で箱根でホテルを経営している女性とも仲良くなると云った、戦後派ドンファンが行状記となっている。戦友の妻との一件のところを少し写して見よう。

臨月の大きな突き出たお腹がぐっと弧を画いている。膝の裾が乱れたところから、白い太股がのぞいている。男は時分よしと女の手首をぐいと握って引き寄せた。

「あら、ご冗談ばかり」

「本気ですよ。僕は、お腹の大きな女のひとがすきです」

その場に夫人の体を押し倒した。夫人もいやではないらしく、それ程抵抗はしない。

「バカねえ、そうお腹をおさえると苦しいわ。でも、駄目よ変なことなさっちゃ」唇を吸われても、乳房を握られても、少ししか抵抗しない。

「赤ちゃんはどこに入ってるのかな。見せ

て下さい」

「いやよ。そんなとこのぞいちゃ、男っていやだわ、すぐそこを見たがるのね」

「それは仕様がなですよ、のぞきたいところなんですから」

「じゃ一寸だけよ。主人が帰って来たら大変だから。ねえ、一寸だけよ」……。

夫婦綺談 孔版 52頁。

だいぶ手の混んだ多色刷孔版の口絵付、字体も鮮明で、読み易い。「これは子なき夫婦の、人工妊娠に関する物語である。若き人妻が、人工受精を望みながら、遂には男性によって性交のダイゴ味を知るにいたる奇談」というタイトルが付いている。

人工受精などと流石に戦後らしい新しいテーマをねらった作品。だが産婦人科医院内部の事情は、まさか此処に描かれた如きではあるまいが、エロ写真のうちにも医者や看護婦の服装をしたものが喜ばれるのと同様、これも亦、猟奇趣味的な一種のおもしろさを求めたものと思われる。

産婦人科医院の看板を、もう一度見てから

意を決して、康子が入って行った。待合室には、どんな診察を受けるか知らないが、三人の女が居て、康子の足下から頭の天辺まで、吸いつくような視線を走らせた。順番がきて診察室へ通ると、院長は五十前後の気の置けない感じで、彼女はホッとした。何しろ生まれて始めて、恥かしいところを、いかに医者とは云え、他人である男性に見せるのであるから、若くて美男子では困るのである。——

かいつまんで云うと、彼女は良人の亮平と結婚生活三年を過ぎて来たが、未だに子供が出来ない、そのことが診察を受けにきた目的なのであった。院長は彼女の話を書いてから簡単に内診してベッドに上るよう指示した。そのとき、やはり白い上ツ張りを着た若い医師と看護婦が入って来た。教えられた通りに帯を解き、パンティを脱ぐと、看護婦は無雑作に、康子の着物の裾をはだけさせ、両足を持上げて動かないように結び付けたようである。彼女は眼をつぶった。恥かしさに顔が火照っていた。老院長だけならよいのに、若い医師まで覗いているのが、恥かしかった。若い医師は無表情で、ピカピカ光っている器具で押し拡げて、棒状の器具等を入念に検診した。診察が了ると、「奥さんは至極健康です

よ。なんら異状はないですねえ。こんど御主人にも来てもらえば如何ですか。御夫婦とも健全であれば、妊娠なさらない筈はないんだから、とくと、それから御相談に乗りましょう」と云った。

その夜、彼女は夫の亮平と寝ものがたりに「ネエ、あたしお医者に行つて来たのよ」「へえ、そうかい。それでどうだったの?」「あたしには別に異状はないんですって、あなたを調べましようって云ったわ」「いやだよ、ぼくは」「いやだって云うなら、今後はもう、あたしのせいにしないでね。一生、産めなくても」亮平は、黙って天井を眺めていたが、心をきめたように、「そこまで云うんなら、行つていいよ。だが、どういう調べ方をするのだろうか」と、案外、素直に納得した。康子は、ひるの産院での検診が刺戟になったのか、或いは医師とはいえ夫以外の他人に露出したのが、妙な昂奮状態に導いたのであろうか。からだがかっかっとならなくて、抱かれなくて仕方がない。

そうして、何時ものように夢を結ぶのだがうっとりとなる身内の快さだが、然しなにか燃え残った火が体内でくすぶっている感じで、彼女には、ある物足らなさが伴うのだっ

た。

翌る日、医院へ夫婦一緒で行くと、院長はニコニコ顔で、ふたりの熱心さを褒めてくれた。そして若い医師を呼ぶと何事かを命じた若い医師は「どうぞ」と二人の先に立つ。

連れて行かれたのは、患者の入院用の部屋であろうか、案外小綺麗で調度類も一通りそろっている。医者は亮平に細長い試験管を手渡し、彼女にはきこえない位の小声で「実はね、あなたのザーメン、つまり精液を検出しないと、あなたの方にも欠陥がないとは断言できませんので、此処で、あなたの精液を採って頂いて、これに入れて下さい。ではお二人でよろしくやって下さい」そう云うとさっさと部屋を出て行ってしまった。亮平は啞然たる表情で、康子をふり返ってみた。

「あなた、どうなすったのよ?」

「このガラス管に僕のアレを採るんだって」「マア! だって、あなた、そうかんたんにうまく出るんですか?」

「出やしないよ。あれしなくちゃ、出るもんか」

忽ち、彼女はポツと顔を染めて、「いやだわそんなの。こんな処で昼間から」「だって、仕様がないうじゃないか。もともと

きみから云い出したことなのだから、だれも
見ているわけではないし」

「でも、へんだわ。フフフフ、ほんとに」
所が、亮平の一物は役に立たない。昨夜の
交りで、性来淡白な体質の彼は二十九才の若
さではあるが、不甲斐なく、だらしがなく、
額に汗を浮かべながら努めようと焦るが、徒
労におわった。——そのことを医師に告げる
と、「それでは、奥さんはあちらでお待ち下
さいませんか。ご主人はこちらに来て頂きま
しょう。なかに第二の方法もありますから」
と、云うことで、更に別間で、こんどは看護
婦がお相手に色々なテクニックでやってくれ
るのだが、それでも駄目。とうとう最後のサ
ービス満点の処置で、やっと採集することが
できた。この医院の看護婦さん、仲々の熟練
工で「あーら、もう。たよりないひとネエ。
さあ、とれましたわ。ではどうぞ、奥様のと
ころにお帰りあそばせ」と、よそよそしいそ
の顔に、彼はなんだか馬鹿にされたような気
持になってしまった。

それから数日後、康子が良人の精液検査の
結果を訊くべく、医院を訪れると、院長から
思いがけない言葉をきかされたのである。

「奥さん、ご主人はねえ、お気の毒な話なん

ですが、少々性器が短小なのと、精液の方も
精子がすくなくて、全然無いというのではあ
りませんが、従って貴女は本当の性交を営ん
でいらっしゃる訳なんですよ。だから妊
娠できないのです。露骨な話になりますが：
……（中略）……わしは医者として診察した真
実を述べたまでですが、この件に就いてはご
主人には内密にされた方が宜しいでしょう。
ところで、では懐妊は絶望かというところ、そう
ではない。子供は人工受精でも生むことはで
きるのです。つまり他の男性のタネを、貴女
に注射で植えつけるんです。おいやでしたら
強いてはすすめないが、よくお考えなすった
ら良いでしょう」

院長のその言葉は、康子にとっては大きな
ショックであった。いわば良人は性的不具な
のだ。性交とはこんなものだ、と思い込んで
いたが、本当の男女の性交は、もっと別な感
覚だそうだ。そう云えば、いつも何か物足り
ない感じは、そのせいなのかしら……。

附記。

いま手許にある前記藤本雅也氏のリスト以
外のものを記すと、「情婦」「落陽」「小夜
時雨」「獣婚譚」（岩波文庫表紙）「東京の

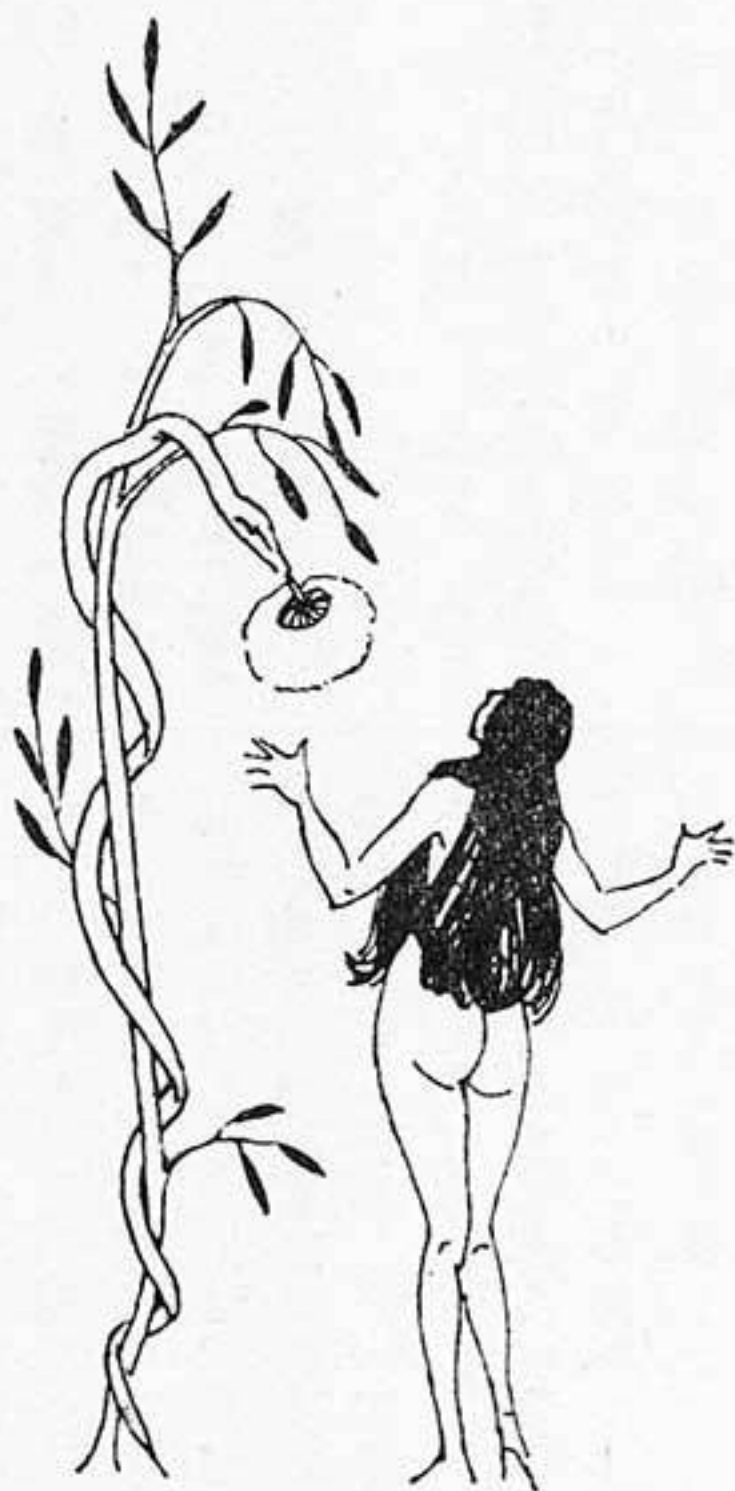
夜ひらく」「今宵こそは」「たわむれ叢書・
松越しの春」「性慾の構想」「おんな心・よ
し子の日記」「お金の恋」「現代好色・白蓮
紅蓮」「合成ゴムの榮」（これはおかしい題
名だが、四十八手の図解で、印刷工のいたず
らであろう）。

私は寡聞にして最近のこの方面の様子をま
ったく知らなかったが、聞くところに拠れば
行楽地の温泉街などでは、いまでも写真や読
物の類は密かに売られている由で、最近は大
メラも精密になり昔からくらべると写真など
実に鮮明な品が多いと云っていた。また、こ
んなのがあると、「つけ睫の女」「女学生」
「昼下りの情事」というのを見せてくれた。

なかに、百科事典のセールスマンと団地夫人
との強姦式の物語りもあり、現代は現代なり
に取材するものだ、と感心した。併し、変っ
たのは背景だけで、やってることはいつも同
じだ、と苦笑するよりほかになかった。——
この章の結びとして、通信販売の案内状（昭
和26年頃）の全文を次に掲げてみよう。こう
した物の保存は、まったく尠ない。その点に
意味があると思ったので……。また、如何に
して購読意欲をそそろうとしたか、その所
をご覧ください。

＝辻村・団・両先生へ＝

読者のたわごと



＝小 杉 千 恵＝

△カメラ・ハント▽と△花と蛇▽あつての奇
クで、おそらく大半の読者が、そうではない
かと思うのですが、私も私の友人達も、先ず

△花と蛇▽の耽美さに魅せられて愛し始めた
連中なのです。

こっそりと読んでいたらよいものを、あた

◎特別推奨品 局部大写真「春情の開扉」(略称春開)男ずれのしない若い女が欲情した最高潮時の陰部鮮明秘景 処女膜撮影に成功鮮明度確実に保証 手札判六枚一組金五百円也密送三十円

◎湯の街秘話「魔泉の宿」母の淫欲の渦中に巻込まれた姉妹と女中二人の五人の女を性力旺盛な一人の男が相手となつて、肉欲の乱舞の痴態情景を展開すると云う、不景

気知らずの湯の街春の家の情炎愛欲秘話 表紙二色刷 挿絵四枚 上下合本 金二百三十円也密送四十円

◎女の性生活を赤裸々に解放「燕館秘帖」略称令嬢・人妻 一夜に一女ずつ各異った女を相手に十二夜を語るアルバイトの情交秘話 第十夜及び第十二夜を発表 令嬢慰楽の巻・強精人妻の巻 各二百五十円密送四十円(二冊同時に)註文の節は送料不要)

◎巨匠遺作「快泣艶姿図譜」略称よがり 手札判タテ8 cmヨコ12 cm十枚一組金六百五十円也密送三十円 本図譜は何れの情景も男女の情交における交悦の最高点に達した時、男よりも女の方がよろこびの快感度が非常に高くて烈しく、平素つつしみ深い女性が、如何に狂おしくよがり泣くかの有様が、実に美事に画かれている逸品です。

ら女の身で投稿を始めたのも、結局、静子夫人の羞恥美に憑かれたからでございます。

△花と蛇▽にはじまった私の倒錯美への憧れが、鏡の中の自分自身へ移り、ナルシスの恍惚を経て、カメラ・ハントの女体へと移行したのは当然の成行ではないでしょうか。そして、金原奈加子が辻村先生の腕の中に、妊婦腹の姿を高々とだきあげられているのを見た時、私の感情が最高にたかめられたのです。

辻村先生は近頃、ハント希望の女性が多くてご満悦の様子ですが、私がお願いしたいのは、女優さんのハントを避けて欲しいということです。谷ナオミにしても、渚マリにしても非常に美しい女性ですが、彼女等の裸身は商品化されすぎており、私の求める躰ではありません。羞恥に悶える金原奈加子の真の姿を彼女等に望むことは不可能なのです。

次に川口有里子や木戸悦子の評判が良さそ

うですが、私は女体の線に美を感じる故か、あまり、このお二人も希望致しません。勿論お二人の女としての美しさについては羨む程であり、その素晴しさは肯定致します。要するに、カメラ・ハントの再登場は選りぬかれた女性に限ると云いたいのです。その意味において、好みは千差万別でしょうが、私が望む女性佐々木真弓、志摩桜子、浅井優子等です。

しかし、幾ら彼女等でも同じ肢態ではお話になりませんから、当然、羞恥責めの度合は一回目よりも、ずっと強くなることは覚悟して頂かねばなりません。佐々木真弓の双臀に前回は縄が喰いこんでおりましたが、次には鎖になることでしょう。志摩桜子は顔を隠した状態が多かったので、恥ずかしそうな表情を中心にして写し、構図は立位開脚にて、水蜜桃でもあしらって貰い、辻村先生がその果物を愛撫するというようなのは極端でしょうか。浅井優子は、下半身のみを露わにされた醜い屈辱の姿態を、安井喜久子夫人に検査される構図というようなのはどうでしょう。安井夫人なら、この大役を耽美の中に演出せしめることが出来ると思います。

今日、私の男友達の一人が、素晴らしい写真ができたから見せてやるといので、どうせ、例の写真で私を辱かしめようとしていると考えて、どこの温泉で手にいれたのと、木

で鼻でくくったような返事をしてやる。すると、そうではなく、昨夜、バーでハントした若いホステスを写したのだと云い、一日がかりでDPしたと云う。彼が現像焼付の技術を持ち、何度も、私の裸身を懇願したことがあるので、まんざら嘘でもなさそうなので、私が乗気になると、彼は、非常に美しい女で、酔わせて、門外不出の約束の上、ソーセージやビールビンをあしらって撮った秘蔵品だから、誰にも見せられないと云い出し、自分で云い出しておきながら、貸して欲しいならと私に対して色々の条件をつけるので、一応、話がわれてしまいました。

でも、私は必ず、そのホステスのフォトを入手しようと決心しております。人の手から手へ、転々としたあの種のフトオなら、私はすこしも欲しくありませんが好事家の友人の甘言にのせられて恥かしそうにながらポーズしたホステスの姿態には魅力があります。多分、私の男友達はコレクションマニアですから、本当に彼女との約束は守り通すと思われるます。そうなると本邦唯一のフトオとなるのですから、私にとっては、より一層、魅力こそあります。ブルースターでない女の、羞恥に満ちた姿を思うと、居てもたってもおられない気持です。このフォトを入手して複写の上、門外不出の快美作品を、彼が奇クの読者でないことを幸いに編集部にでも送付した

ら、どんなに胸がすっとするだろうと思ってみたり致しております。このように私は、瞬間の場の雰囲気言葉で語られ得ない耽美性を感じます。

ハントのために多額の金銭を要しても、ハントは猛進すべきです、おそらく、趣味のため、辻村先生は総べてを奉じて、その鋭いレンズを開かれると思います。そう申しても個人の力には限度がございましょう。そこで、マニヤの力の結集とも云うべき奇クの力が必要で。充実のためなら、奇ク誌の値上げを考えてもいいのではないかと思います。他誌の値上りに比較し、私は、特殊文献誌としてより高度な紙質とフォトを望み、且つ内容を求めるあまりに、値上げをさえ期待する気持です。

高額な資金で入手したハントが捕えた獲物は、金力によって人工的にポーズする。金力の限界を感じさせつつも、女は従順に四つん這いになったり恥をくねらせたりしながら撮られる間を待ちかまえる。それは悦虐の祭壇に飾られ、供えられた生贄の姿です。ハントが女の恥を全一的に支配した瞬間の、その女の羞恥と屈辱の姿態。そんなフォトを手にした時に、私自身はモデルである女の金縛りになった被羞を垣間見、そこにナルシスとエロスの耽美を発見するのです。

読者の大部分はおそらく新しい女の恥を求

めているでしょう。いくら、川口有里子さん等が美しくとも、初めて脱ぎ、初めて緊縛された女の誠の羞恥美には劣るのではないでしょう。その意味に於いて、私は理髪店の娘ミキちゃんの登場を待ち望みます。商売柄、口では勇敢な誘いの言葉を吐いていても、いざとなれば上半身の緊縛で、音をあげるかも知れませんが、今迄に例があったように辻村先生はフェミニスト振りを発揮して、簡単なフोटで終わらないようにして下さい。私は同性ながら、ミキちゃんの羞恥の悶えを期待しております。女としてアドバースするならば、女は膝小僧のあたりにパンティを、ずり下げてかためられた中途半端な姿態を恥かしかるものです。フェッチシズムの愛好家も、望まれるのではないでしょう。ぜひ、ミキちゃんにおためし下さい。

私は新しい読者であるため、新田英雄さんの奥さんであるゆう子さんが、既にハントされたあとなのか、どうか知りませんが、もしまだでしたら、ぜひ、ハントして頂きたいと思います。何故なら、ゆう子さんの爛熟の極みに達した裸身に濃厚な羞恥責めが加えられるのを鑑賞したいからです。

それから、浅井優子をはじめとする既登場の方々が妊娠なさった時は、必ずその姿をハント誌上に現わして頂きたいと申し添えます。せっかくの美態を逸しないよう、くれぐ

れも既登場の美人達にお願いすると同時に、辻村先生にも、金原奈加子の臨月腹を撮りもらした失敗を、二度と繰り返さないようにお願いする次第です。

川口有里子等はハントでなくして、他の頁で、ぜひ、ご活躍下さることを望みます。

甚だ失礼なことばかり申しましたが、一読者のたわごととしてお許し下さい。

次に私を倒錯に導いて呉れた△花と蛇▽について、団先生に一言だけ、申し上げます。

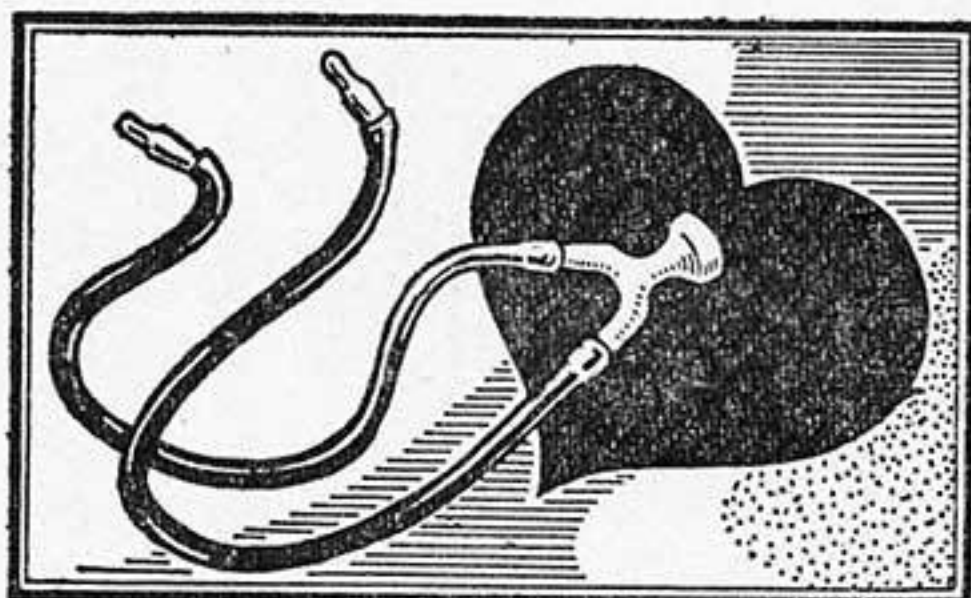
やはり、ほんの少しだけですが、マンネリのきざしが現われ始めたように思え、これを私は心配致します。私は前述の通り、△花と蛇▽の妖美に魅せられての読者であると、はっきり申しております程、△花と蛇▽だけを目当に奇クを賣うぐらいに愛しております。だから、あえて申しあげるのです。必要とあれば、作者の周囲に取材スタッフをそろえたり、贋作を懸賞で募集して、その中より、新しいアイデアを抜萃したりしては如何かと存じます。

又、このような状態から脱皮するために、再び、無理かと思いますが、挿絵を載せて欲しいと思います。駄目でしたら、カットでも良いのではないかと思います。美囚たちの面影のみでも云うのが想像力の貧弱な女性愛読者の願いでもあります。たわごとでもあるわけです。四馬孝先生が駄目でしたら、豪城二、

春川ナミオ氏の登場をお願いします。それも無理でしたら、千葉青鬼氏のイラスト画を希望します。大噴火の挿絵が△花と蛇▽なら、いつも思っているからです。先程にも書いた奇ク値上げを行ない、他誌の縛られた美女を描く才人を資力で引き抜いてでも、この物語をより素晴らしいものにして下さい。

それから、ストーリーも相当に進みましたから、そろそろ獣類の登場も、自然の成り行きと存じますが、どのようなものでしょう。

アサヒ芸能7月17日の連載小説のある女流作家の表現中に「……宮子が啞然としているあいだに、小坂はジムの欲望に満ちた軀を、手荒く宮子の花芯に近づけた。種馬をかけ合わせるやり方と同じであった……」という箇所がありました。これは気の狂った青年と宮子という女が、強制的に交合させられるシーンの表現を一字一句変えずに引用したもののようですが、勿論、この週刊誌は奇クと異り普通の雑誌です。これを読んでも奇クの遅れを知る筈ですが、今はそんなことを云っているのでは無くして、私はこのジムの巨犬に置き換え、宮子を静子夫人にして、考えてしまったのです。小坂は鬼源であり、満足そうに成功の個所を覗きこむ彼と、見物の千代等の哄笑が聞こえるような気が致しました。そして夫人の羞恥と屈辱に歪む表情と、成熟した豊かな臀部の隈えが目に浮かんだのです。



〓 S・C・R 〓 性問題相談室 〓 回答欄 〓

射精後の疼痛について

医学博士 弓削達人

〓 質問全文 〓 28才 独身 無職 〓

私がこれからおねがいしようとしていることは、本相談室のおもむきとは多少異なるかも知れませんが、編集部の記事に「この欄は、……結婚生活一般から……巾広いカウンセリングに応じます」とあるのを見て、思いきって御相談申上げる次第です。

実は私は慢性腎炎をわずらって5年ほどになりますが、比較的軽い方で、寝たきりではありません。病人のくせに異常なほどの性欲に悩まされて困ります。体にさわるからと、オナニーをがまんしていると夢精をおこし、衣服を汚してしまいます。それでいてオナニ

ー（あるいは性交）をすると、24時間以内に腎臓に痛みが起るのです。その痛みは、我慢できないほどではありません。

(1) 射性を行なうと、なぜ腎臓に痛みが起るのでしょうか（解剖学的な答えでもかまいません）

(2) 私のような者には、結婚は無理でしょうか（経済的な面とか、その他あらゆることは考えに入れず純粹に医学的に見て）

(3) 痛みを起こさずに行為（オナニーにしても性交にしても）をする方法はないものでしょうか。その際注意すべきことなど。

尚オナニーについて追加すれば次の通りで

す。

オナニーは週に1〜2回。多い時は2日に1回。時には1日1回、あるいは日に2回。ヌード写真や、雑誌のきわどい描写部分を見ながら――。

時にはそうした物一切なしに。その時は、実物よりもむしろ写真のヌードを空想しながら。

以上ですが、何卒よろしくおねがい申し上げます。

〇 〇

〓 回答 〓

先ず最初に、あなたは「腎臓部に痛みがお

こる」といっておられますが、どういうことから「腎臓部の痛み」と自己診断しておられるのでしょうか。このような自己診断をしてはいけません。自己診断をすると、またその事実について問い合わせをしなくてはならなくなります。「自己診断をせずに、ありのままの事実を具体的に書くこと」これが質問をする時の一番大切な要領です。

併し幸いこの場合は、「腎臓部の痛み」ということで大体の推察はつきますので、次のようにお答え致しますよう。

(1) 射精のときに感ずる痛みを射精痛といいます。併しこれは、射精と同時に、あるいは射精直後に生ずるもので、比較的早く消褪して行きます（射精痛についてはまたあとで述べます）

(2) また慢性腎臓炎では、普通疼痛というものは余り感じないものです。急性期に腰背部に鈍痛のあることがあります。慢性期には感じなくなるものです。腎盂炎のときは疼痛を伴いますが、これは下肢又は背部肩胛部に放散する激痛で、とてもあなたの訴えておられるような程度のものではありません。

(3) 性交時になんらかの原因によって痛みを感ずるといふことはありますが、射精によって腎臓部に痛みを生ずるといふことはありません。

(4) 私は、あなたに何か無意識的な罪悪感みたいなものがあって、そのために射精後の違和感を、「鈍痛」「軽い痛み」などと錯覚しているのではないかと思います。若し夢精の時には腎臓部に痛みを感じないのだとしたら、いよいよその疑いは濃くなります。

(5) 併し、若しあなたが射精のあと、勃起状態が長くつづいていたりしたら、そしてその勃起している時に、重いような、圧迫されるような、痛いような感じをうけるとしたら、それはたしかにあり得ることです。けれどもそれは会陰部に感じ、勃起が消褪すると共に消えるはずのもので、一種の射精痛に相等するものです。

これは持続勃起により、会陰部が充血しっぱなしになるために生ずるものです。尚余談ながら、こういったことは、「一日十回」だとか「抜かずの五郎」だとかいった武勇伝を自慢にしている人にみかける

ことが多いようです。

米軍のバルカン砲ではあるまいし、発射弾数が多いことは、決してほめたことではありません。むしろそのような空鉄砲の空威張りをしていると、ベトナムの米軍と同じように、ヴァギナムから敗退しなければならぬようになってしまいます。

(6) だいたい以上のようなことですが、悪い場合を想像してみると、腎臓から膀胱までの部分に結石があり、それがコイッス、オナニーの体動により疼痛を発生させるということも考えられなくもありません。併しこの場合は、多くは血尿、発熱などのあるものであります。

(7) しかし、いずれにせよ、一度泌尿器科の先生に診てもらわれることをおすすめします。尤も、この相談欄を利用することすら「思いきって御相談申し上げる」といっておられるあなたですから、専門医の診察を受けることはより大きなためらいを感じられると思いますが、あえて「思いきって」受診されることをおすすめします。それが一番の早道であり、あなた自身の気持ち満足し落ちつきを得る途であります。

何を恥ずかしがることがあります。コ
 イッスもオナニーも誰でもすることです。

「思いきって」医者の門をたたいて御覧な
 さい。

(8) 射精痛について

射精するときには、普通オルガスムスをと
 もなうものであります。これは、むずが
 ゆい感じから「失神」に至るようなものま
 で、段階があるといわれています。

この際に、いわゆる快感とは別に、大腿
 部の内側の筋肉がコムラガエリのように引
 きつったりして、痛みを感じることがあり
 ます。

また会陰、精管、尿道などに疼痛を感じ
 ることがあります。

原因としては、性器あるいはその周辺の炎
 症、または各種結石であることが多いよう
 です。

(追加1)

本誌4月号掲載の「独身女性の夜尿につい
 て」に対して、次のような一文が寄せられま
 したので御紹介致します。

もし御返事をなさる場合には、読者応答室

あてにお願い致します。

○ ○

前略、SCRを利用しようと思っていた矢
 先に四月号に夜尿症の質問が出ていました。

そこで少々手順を変えて、例の女性に答えて
 もらったら、ヒントが得られるのではないか
 と思いました。まことにお手数ながら、コピ
 ー同封の上お願い致しますゆえ、宜しくお計
 らいの程を。

幸いにして、例の女性から返事がいただけ
 るとした場合、封書であれば、本人直接でも
 先生経由でも、何れでも構いません。私の住
 所氏名(本名)は左の通りです。

(注)住所氏名は記載を省略しました。

○ ○

前略、突然お便りして、面識もない独身女
 性たるあなたに、夜尿の質問をするという失
 礼をお許し下さい。

私は、夜尿症とは言えない程度の夜尿をす
 る傾向があり、具体的に言うと、三十になっ
 てから現在(三十六)までに数回の失敗があ
 りました。あなたの目で見れば、夜尿傾向の
 うちに入らないかも知れませんが、私として
 は、大問題なのです。何故なら、私の夜尿は

あなたのそのように公認されていないから
 です。されていらないと言うよりは、公認され
 まいと闇に葬るからです。

幼少の頃の事は記憶がありませんが、小学
 校時代は時々夜尿をしました。そのたびに、
 私は親に叱られるのではなく嘲笑されました。
 そして話の種にされました。親は叱るよりは
 良いと思ったのかも知れませんが、私はくや
 しさが一ぱいで、今でもその時のことが、鮮
 かに思い出されます。それで長ずるにしたが
 って、夜尿をゴマカスことを覚えました。高
 学年になった時は、親の目で見える限り、夜尿
 は全く無くなりました。中学、高校、大学と
 年をとるにつれて夜尿の数は減りましたが、
 一回毎の精神的衝撃は強まって行き、夜尿に
 ついての関心は高まりました。そして今は、
 夜尿の可能性は極めて少ないにも拘らず、可
 能性があるというだけで夜が何となく恐ろし
 いのです。勿論そのために一睡もできないな
 どということはありませんが、結婚が何とな
 く憶劫になり、今なお独身を続けている次第
 です。

失礼な言い方ですが、あなたが毎夜のように
 夜尿されるのにくらべて、私は、客観的に

S.C.R(性問題相談室)案内

担当……弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

他人に打ちあけ難い悩みなどについて

編集部の長年の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室 (Sex Counselling Room 略称 S.C.R.) を開設致しました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、巾広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差支えないとの御好意あるお申出をいただいております。担当の医学博士、弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

○ 本誌の愛読者の方で、医学博士弓削達人先生に性問題に関しての解答をお求めの方は、御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○ 個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについてはすべて匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り、直接の解答も致して貰います。

○ 御相談についての診断及び回答についての費用は一切不要です。

○ 宛先は編集部気付、弓削達人先生として下さい。

御遠慮なく相談をお寄せ下さい

見たとき恵まれていると思います。誌上で見る限り、あなたは全く救い難い重症者に見えます。それにもかかわらず明るい文面でSCPに質問を出されていることに、私は強い関心を持ちました。

私は自分が夜尿そのものでなくその幻影におびえていることについて、SCRを利用しようと考えていました。しかしあなたの質問を拝見したとき、私は自分の質問を出さないで良かったと思いました。出したとすれば、せいぜい「くよくよするな」で済まされてしまったに違いありません。

あなたに対する質問というのは、質問でなくお願いです。夜尿という現実を、あなたの精神の中にどのように位置づけておられるでしょうか。あなたからの御返事は、私の問題の解決に必ず役立つと信じます。よろしく願います。

草々

(追加2)

田園調布のG・Fさんへ
あなたのご質問に対しておたずねしたいことがありましたので、問合わせの手紙を出しましたが、宛先不明で返送されてまいりました。何分のご連絡を願います。(弓削達人)



ある会合

SMプレイに関する告白

木崎進

本会も第二回を開く運びとなった。

出来る事なら、今後も続けて行きたいと思うと同時に、近県の方で、KK誌のファンであり、真面目な態度で望まれる方の参加を大いに期待する次第である。又、読者諸兄姉からの御批判並びに御意見など承れば幸である。

佐藤「前は、発足初例会と云うのに、上京中で出席出来ず、全く申し訳ありませんでした。会の様子は悦子からききましたが、木崎さんのFとしての告白を、直接、拝聴出来なかった事が残念に思えてなりません。実は

私自身もFには、かなり興味があるのです。

又近日中に、改めて御聴かせ下さい」

木崎「そう改まっておっしゃられると、何とも御恥かしい。それより今夜は、佐野さんと清水さんのおしどりコンビで、御二人のSMプレイの現状を御話し頂けるということで先刻から、うずうずしているところです」

清水「うずうずなんておっしゃられると、私、ほんとうに恥かしくなりますね。あまり苛めないで下さいね」

伊東「苛められるお人は、佐野さんだけで充分だとおっしゃりたいんでしょう」(笑)
清水「あら、そんな……」(わずかに赤面)

佐野「とに角、お手やわらかに御願いしますよ。御二人に満足して頂けるかどうか。それに、どう話を進めれば良いか判りませんので、質問に対して、御答えする、という形式でいかがでしょうか？」

木崎「結構ですとも。で、早速ですが、清水さんとは、最初からSMの要素を含んでのおつきあいですか？」

佐野「そういう訳ではありません。最初は極く普通のつきあいでした。私自身は、以前からSMのファンだったのですが、やはり結婚を約束する迄は、打明けて納得させるという勇氣はありませんでした。したがって、我

々が本格的プレイを行なう様になってからはそれ程長い時間は経過してはいません。一年を少々過ぎた程度です」

木崎「現在は、まだ一つ屋根の下に住んで居られる訳ではないんですね？」

清水「ええ。私は早くいっしょに住みたいと思うんですが、この人ったら、何だかんだと理由をつけて、のばしているんです」

佐野「おいおい、変ないいがかりはよしてくれ。いや、私にしても早くそうしたいのですが、我々の場合、隣近所のうるさい、アパートなんかは不向きでしょう。といって独立家屋というと、家賃の方が高過ぎたりして、なかなか条件がそろいません。しかし、遅くとも来年の春迄には何とかする積りです」

伊東「現在は、プレイの場所といえば、佐野さんのアパートですか？」

清水「彼は、不経済だからホテルでなく、アパートでいいじゃないかというんですけど今の所、表向きは独身の彼の部屋へ出入りするの、何となく気がひけるし、ましてプレイとなると、どうしてもお隣を気にしないでいられないでしょう。それに、いちばんいやなのは、彼の部屋にトイレがなく、共同になっ

っている事です。浣腸プレイの後、いちいち

離れの便所まで行かなければならず、落ちついてプレイ出来ないんです。どこか適当なお家があったら、ぜひ御世話して下さいな」

木崎「それは、我々の手で何とかしなければなりませんね。今後、より生々しい実況を御聞きするためにもね」笑

佐野「よろしく御願いますよ。私にしても、とぼしい生活費の中からホテル代を捻出する事は生やさしい事ではありませんからね」

伊東「私が、今後の参考のために、是非おたずねしたいのは、どのような方法でプレイのきっかけというか、意気投合されて、現段階迄に至られたか、その行程に関して御教示願いたいのですが」

佐野「むろん、私自身は、相当苦心したり思案したりしましたが、それは多分に、私一人のとりこし苦労だった訳です。なぜなら悦子の場合、意外に素直に理解し、後には、むしろ積極的に、それを受け入れて呉れましたから。つまり悦子自身もM的要素を秘めていたという訳ですよ。そういった面では我々は、似合いのカップルという事になりますか」

伊東「全く、うらやましい次第です。それ

で最初の意志表示のくだりをどうぞ」

佐野「私の場合、意志表示以前に、プレイを敢行したといえます。むろん。それがプレイである事は、私だけの独断で、その時まで、それが私のプレイとしての目的のための行為だとは想像もしなかったと思います。」

我々は、一昨年の六月に南九州へ旅行しました。いうなれば、婚約旅行といったところですが、三泊四日の予定で出かけたのですが、その最後の夜になって、悦子が腹痛を訴えはじめたのです。急なことで、私も最初は心配だったのですが、別に悪いものを食べた様子もなく、よくきいて見ると、出発以来、三日になるというのに便通がないというのです。ハハンと安心すると同時に、私はこの絶好のチャンスに身の引きしまるのを感じました。これまで御話すると、すでに御理解頂けたと思います。正直なところ、その時は激しい興奮と期待で、口渴を感じる程でした。

それで私は、「薬を服む程の事はない」という悦子に、「旅先での身体の異常は、大したことではないようでも用心にこしたことはない」とか口実をつけて、表面は心配そうな顔を、内心はワクワクしながら薬局へ出かけて行きました。私にしてみれば、最初から内



るのではないかとビクビクしてしましたのよ。やっぱり思った通りだわ。仕方ないですわね、拒否してもきき入れて下さるような方々ではなさそうだから、御話します。……それで、この人ったら何だかもしもじするだけで、いっこうにお薬を出そうとしないんです。

服薬など買う気はなく、三十瓦、二個入りの「イチジク浣腸」を買って帰って見ると、悦子の腹痛は一段と激しくなったらしく「やっぱり、お薬買って来て頂いて良かったわ」というのです。そんな風にいわれると、浣腸だとはいいにくくなって、心臓だけがむやみに音をたてるのを、どうすることも出来ない有様でした」

木崎「ちょっと待って下さい。その後の成り行きは、さっきから他人事のような顔をして聞いておられる清水さんに御願いしましょうか。どうです、伊東さん」

伊東「それは名案だ。大いに結構ですね」
清水「あらッ。さっきから、そうおっしゃ

しょう」と尋ねると「ああ、買って来るのは

来たんだけど、それがつまり……」といった出された箱を見て、アツと思いましたが。彼は少しきまり悪そうに「薬局の人が、それなら内服より先ず浣腸なさいというので買って来た」というのです。私も過去、二回程浣腸の経験があり、なる程と思いましたが、事もあるうに、この人からイチジク浣腸をさし出されようとは夢にも思っていなかっただけに恥ずかしさで顔が熱くなってしまいました。それに一旦出してしまうと「やった方がいいよ」と、しきりに進めるんです。この人ったら、凄く浣腸に対する知識と体験が豊富なくせに、その時は、そしらぬ顔をして「俺、浣

腸なんてやった事ないけど、どんな風にしようするんだろう」なんてしらばっくれて説明書を声を立てて読むんですのよ。出来るだけ深く挿入して、とか、激しい便意を催おしますとかの部分はことさら大きい声でね。ほんとにうらめしく思えてなりませんでしたわ。それからが大変なんです。「なんだ、簡単じゃないか。俺がやってやるよ」というんですもの。いくら何でも、ではどうぞなんていえる訳ありませんものね。いくら婚約した彼といっても……。いやです、そんなこと」と強く拒否したんですけどほんとに痛みが激しくなったのと、折角、薬店にまで行って呉れた彼の気持を無にするのもと思い、「では、自分でします」といってトイレへ入ろうとする

と、「いや俺がやってやる」といってきかないんです。

それでも「絶対にいやだ」というと、今度は、「婚約した相手に手当さえやらせないのか」といったり、しまいには、「お願いだからやらして呉れ」と哀願する始末で、まるで居直り痴漢みたいでした。それでも、子供みたいに駄々をこねる、この人が可愛いくなつて、一種の母性的本能から、とうとう承知するはめになったのです」

伊東「なる程ねえ、そんな手もある訳か。大いに参考になります」

清水「それから、いそいそとイチジクに穴をあけて、『さあ始めよう』というのですがやはりためらっている私を、無理にうつ伏せにねかしたのはまだいいとしても、すぐには始めようとしなくて『素晴らしい、とても素晴らしい』なんていうのですのよ。その時、変な人だとは思いましたが、もうそうされた以上は、早く済ましてくれるように頼みました。

変なもので踏切ってしまうと幾分恥ずかしさも薄れて、ほのかな幸せみたいなものを感じましたが、それもつかの間、二分とたたない内に激しい便意を感じ、トイレへ立とうとする私を、おさえつけ『まだだよ。説明書にも出来るだけ我慢するようにと書いてあるだろう』なんていいながら、もう一個のイチジクも使ってしまったのです。……これが最初にこの人から浣腸された時の実況です」

木崎「佐野さんも最初の攻撃が浣腸とは考えましたねえ。浣腸だと、さほどサディステイックなイメージを与えることなく行なえますからね」

佐野「そうなんです。最初から縛りや、ムチ打ちを強要したんだと、仮りに相手の女性

がマゾの要素を多分に持ち合せていたとしても、それを抵抗を感じさせずに上手に引き出す事は出来ないかもしれない。その点、浣腸となると、比較的ソフトムードで徐々に調教出来ると思うんです」

伊東「なる程ねえ。それで最近も浣腸プレイは行なっておられるのですか？」

佐野「もちろんです。悦子の場合、意外にA感覚が発達してしまってたね。浣腸器以外の小道具、例えば、万年筆、筆、ゴム管、ウィンナー等、思いつくままに使用します。浣腸にしてもイチジクはもちろんの事、五〇ccのガラスシリンジからゴム製シリンジ・イルリに至るまで多種多様です。したがって現在でも、プレイの花形になっていきます」

木崎「清水さんのA感覚が発達されているのを発見されたのは、やはり浣腸によってなのですか？」

佐野「いや。それが浣腸ではなく、指先でした。それ以来です」

伊東「清水さん自身もA感覚に関しては自認されますか？」

清水「今更かくしても仕方ありませんわねえ。そう思います」

伊東「それで、意志表示以前のことについては良くわかりましたが、それをプレイとして、清水さんに理解させるためには、どうされたのですか？」

佐野「なかなか、ご熱心でいらっしゃる。

『鉄は熱いうちに打て』という諺があります。私もその諺通りに実行しました。

翌日、帰途についたのですが、肚に一物で列車待ちの時間を利用して、書店をまわりました。勿論奇クを探したんですが、なかなか見つからず半ばあきらめかけた時に、正に幸運とでもいえるように古書の立売りで発見し



た時のうれしさ。

車中で、私は何くわぬ顔をして、浣腸記事の部分を開き、悦子のひざの上に置いて内心ワクワクしながら読んでいました。彼女はきつと前夜のことがまざまざと実感されたに違いありません。読み始めたのはいいんですが、いつまでもうつむいたまま、いっこうに顔を上げようとしません。ちょっと心配になりかけた頃になって、私の耳もとに口をよせてきてひとこと「変態」と云うんです。一瞬、ドキッと思いましたよ。まったく」

清水「その時、初めてこの人が計画的にイチジクを買って来たことがわかったのです。それから私は、この人が以前から私を責めたがっていたことを白状させたのです」



佐野「結果的には、うまくいったって訳です。以後は、大手を振って、私のS性を発揮出来る訳ですからね」

伊東「その時、失望したり、ショックを受けられたなんてことはありませんでしたか？」

清水「それは、全く『予期せぬ出来事』だっただけに、驚きはありました。でも、以前から、週刊誌やその他で、そんな愛の形もあるらしいということは、知っていたし、正直なところ、大いに興味は持っていました。それにこの人の『長い結婚生活に於いて、マンネリ化を防止し、常に新鮮さを保つためにはそんな刺激が清涼飲料の役目を果たすのだ』という説に、私も同感出来た訳です」

木崎「なる程、奇しくも、お二人は『おなじ穴のむじな』だった訳だ」笑

佐野「むじなは、ひどいな。しかし私にとって悦子をパートナーに出来たことは、実に幸運だったといえますね」

木崎「そうですね。末永く大切にしていなければね。で、最近のプレイは

？」

佐野「特に変わりばえはしてません。御多聞にもれず、縛りはプレイの絶対的要素として欠かせないものですし、縛り+浣腸。縛り+ムチ打ち。縛り+ロー責め、などの複合プレイが主です。しかし、同じことばかりやっていると自然、刺激が薄れて行きます。それがこの種のプレイにつきものの危険性といえますね。新しい刺激を求め過ぎて理性を失うと犯罪事故につながらないとも限らない」

伊東「大いに考えられることですね」

佐野「ですから、私は、プレイそのものを強化して行くことはせずに、新しいアイデアを考えることにしています。その一方法として最近考え出したのに、悦子に、責めの選択権を与えています」

清水「選択権というと、とても聞こえが良いようですが、それがとんでもない選択権なんですよ。御聞きになりますか？」

木崎「面白そうですね、きかして下さい」

佐野「おいおい、あまり調子にのるなよ」

清水「この人ったら、私に『淫らな女の告白』という『クジ引』をさせるんです。色々なことを書いた紙きれの中から、私に一枚選ばせて、それに書いてあることが、その日の

責めになるのです。その「クジ」の内容は彼が書くのですから、結局は、私の意志に基づいた選択権ではなく、彼の意志による責めということになりますのよ。その内容ときたら勝手なことばかり。例えば「今日、化粧品セールスマンがやって来て、素敵なおしりだ」といって、タッチしました。私も悪いと思いますながら淋しさのあまり、それを許しました。

私のお尻は悪いお尻。だから五百ccのイルリで流腸して、思い切り強く、ベルトで三十回打って下さい」とか「今夜の私は、あなた以外の男性とキスがしたい。でも、それはいいけないこと。私の浮気な唇に御仕置として、あなたの汚れきったブリーフを猥ぐつわにして大きいエボナイトの万年筆を尻尾にして、お部屋の中を引っ張りまわして下さい」などと思いつくままに書き、さも私がそれを好んで選んだようにいうんですのよ」

木崎「いや、恐れ入りました。そこまでになれば、佐野さんも、ベテランの部類に入るのではないですか」

佐野「いえいえ、とんでもありません。我々のプレイが、まあ比較的、順調に行っているのも、悦子の積極的な協力があればこそなんです。もっとも、これが「苛められること

が大好きなマゾ女」だからかもしれませんかね」笑

清水「おっしゃいましたわね」

木崎「ところで、御二人のプレイの目的はいわゆる前技的な要素として行なわれるのですか？」

佐野「そんなことはありません。セックスとは全く無関係とは申しませんが、一応プレイはプレイ。セックスはセックスと区別しております。プレイなしのセックスは不能だということになると、面倒なことになりますからね。そのあたりがよく論争的になる「正常」か「異常」かということにつながるんじゃないですか。私自身は「正常」か「異常」かなどと論争すること自体がナンセンスに思えますがね」

木崎「それで清水さんは、佐野さんを含めて御自分のことを「正常」「異常」といった点で、どう御考えですか？」

清水「そうですねえ。うまく表現出来ませんが、人間だれしも、S性とかM性、又はFとかホモ、レズ等の世間一般に異常だとされているものを、多かれ少なかれ所有しているのだと思います。只、そんな自分の欲望を満たしてくれる相手に恵まれるか否かによって

同じ欲望をもっている、立場が違って来ると思ふんです。私にしても、彼に出逢っていなかったら、M性というものは表面に現れずじまいだったに違いないと思いますわ。私達の場合は、さっき彼がいったように。プレイを行なわなければセックスの欲望がわいてこないとか、不可能だということではなく、結婚前の交際は、お互いに異性対異性という感情で接しているため総てが新鮮さにみちている訳ですが、私達のように結婚生活同然の間柄や完全に結婚してしまうと、異性対異性の感情から、人間対人間のつきあいになってしまい、一種の人間斗争みたいな形が生まれてきて、それがうまく行かないと、浮気、ひいては離婚につながるんじゃないかと思っております。そんな中で、お互いに新鮮さを保って行くためには、私共の行なっている程度のプレイは極く当然なことではないかと思ひます。ですからプレイの行為自体は正常だとは思ひ切れなにしても目的は決して異常だとは思ひていません」

伊東「なる程、なかなかしっかりした理論を御持ちですね。私もその御意見には賛成です。現代は革命の時代だといわれますが、SEX面での革命も、めざましいものがありま

す。フリーセックスなどは、いざしらず、S Mに於いても、性格的に派手に表面にあらわれなくても、静かに、しかも庄しきれない程の力で滲透していますねえ。最近では、女性週刊誌にも大々的に取り扱っているし、本人は、作品は書いてもSでもなければMでもないとかいっている梶山季之の「男を飼う」や「苦い旋律」の中にも驚く程、リアルに描かれている。映画にしても、いわゆるピンク映画以外のもので、大手五社の作品にも「ハレンチ」だとか「盲獣」だとかいったものが堂々と上映される時代ですから、一般の認識が高まるのも当然ですよ。その点、奇クなにかにも、もっとリアルな作品が掲載されてもいちいちうるさくいうことはないと思いますかね」

佐野「全くですよ。「奇ク」なんかより変な週刊誌などの方が、よほどえげつないですよ。もっと堂々と販売されてもいいと思います」

木崎「正常、異常を論じるのは確かにナンセンスかもしれませんが、明らかに異常だという場合もあると思います。それは、どの程度からなのでしょう？ つまりプレーとして許される範囲は？」

佐野「それは、当事者同士の、意志によって決まるのではないかと思います。お互いにそれによって、快感、又は幸福感を感じる内は正常だと思うんですが」

伊東「それは、どうですかね。例えば、皆さん「盲獣」はごらんになったでしょうが、あれなんかどうです。クライマックス近くでは、お互いに幸福感に満ちていた設定ですが第三者の立場から見るとあまりにもむごたらしい。やはりあれは異常だと皆さんおっしゃっていただでしょう。実際にもあれと同じような事件がありますからね」

佐野「そういわれると、返答に困る」

木崎「日本では、それ程残虐な記録は少ないけれど、外国では凄いのがあるようです」

清水「ネロなんかその代表格ね」

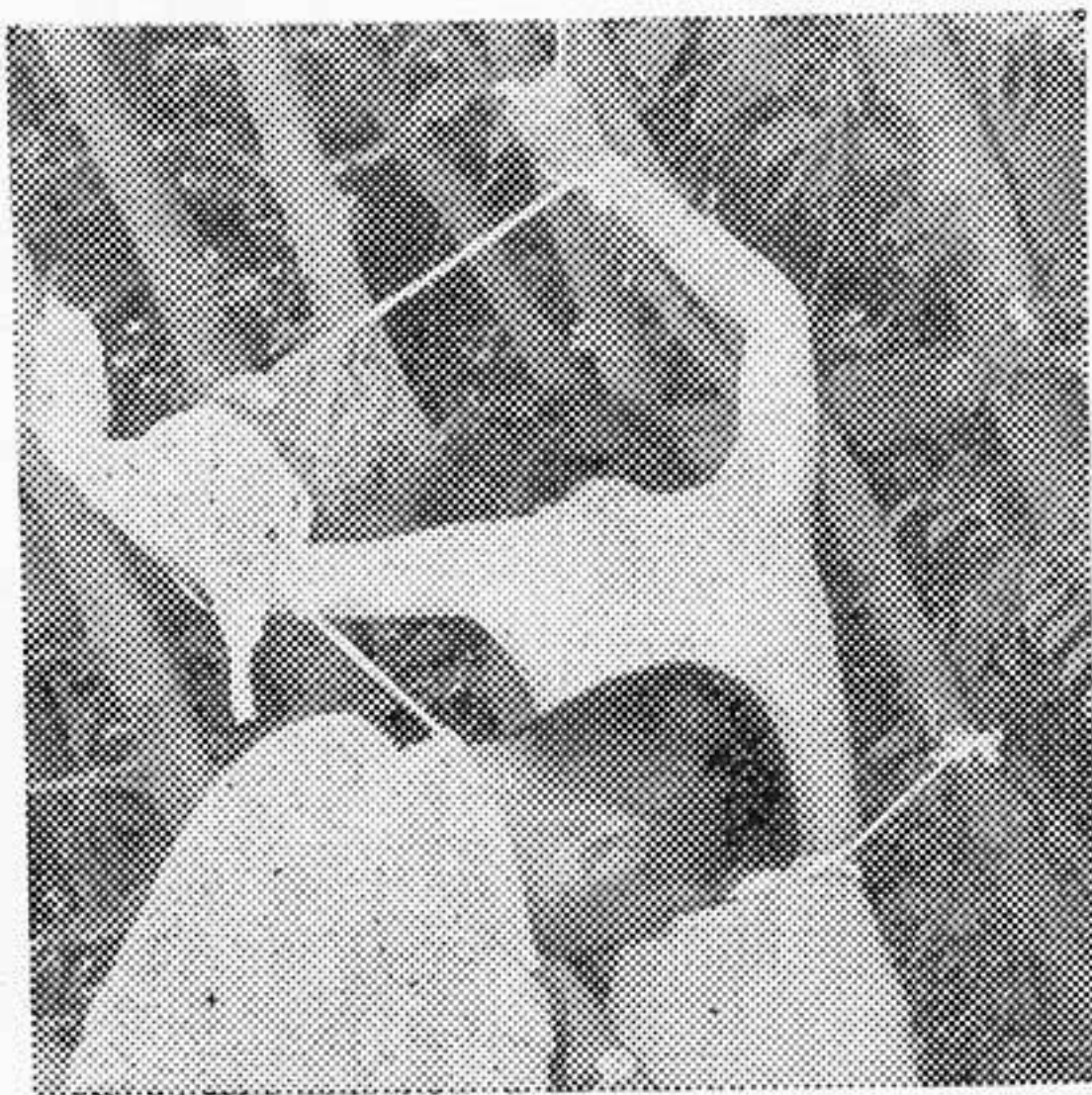
伊東「ネロに限らず、ローマ時代の皇帝なんかは総てが異常に残酷で、我々の考えている正常か異常かなどという問題など、それこそ問題ではない。サディスティックな行為が国家的慰安だったといえるらしいですよ。フリッツ・ハーマンやアルバート・フィッシュ



なんていうのは、吸血鬼、人間嗜食魔として有名だし、欧米のサディストには、常識では考えられない程凄いのがいるらしい」

木崎「伊東さんは、何かにつけ専門的な話になると、断然、強みを発揮されますね。私が、さっきつまらぬ事をいい出して、佐野さん方、御二人の御話から少々遠ざかったように申し訳ありません。清水さんにお尋ねしますが、佐野さんが貴女に行なう責めの中で、最も苦しい責め、恥ずかしさから抜けられない責め、それに最も素晴らしい責めというのがあればお話し下さい」

清水「苦しいといえば、ベルト責めの際、



お尻や背中を打たれるのは快感につながりますが、前部、つまり、乳房やお腹を打たれるのは、未だに我慢出来ずに泣いてしまうこともあります。太ももの内側も、こたえます。それから、千cc以上の高圧浣腸も苦しいわ。だけど、これは放出の快感がともないますので、実際は苦しくても嫌いな責めではありません。恥ずかしいといえば、浣腸後の、縛られたままでの排泄から始末までの間を観察されることです。それから、下着を一週間も交換を許されず、汚れきったパンティを、壁にはりつけて「何て不潔なパンティだ」なんて

いって、精神的に苛められるようなこと。例えば、相手が彼であっても、汚れたパンティを男性の前にさらすことは、女にとって耐えられない程恥ずかしいことなのです。ねえ、あなた。木崎さんね、あなたに負けない程のパンティマニヤなのよ、きっと。しかも汚れた下着のね」笑

佐野「おいおい、あまり誇大PRをしていると、後で充分、お仕置を受けることになるぞ」笑

清水「こういう時に、常々の仕返しをしておかないとね。どうせ今夜あたり又、私を苛めようという、こん胆なんでしょう」

佐野「そうだとさ、ウシシシ」

伊東「やれやれ、ここで見せつけられたのでは、かないませんなあ」笑

木崎「それで最も素晴らしい責めは？」

清水「素晴らしいといえば、やはり浣腸とA責めということになります。特にどこをどう責められるというより、プレーの時間中、といえばオーバーに聞こえるかもしれませんが、大きな意味で、彼の行なう総ての責めを素晴らしいと思っています」

木崎「それでなければ、一方的なプレーでなく、ぴたりと息の合ったプレーは出来ない

でしょうね」

佐野「そういうことになります。決して無理はしないように心掛けてるつもりです」

伊東「ところで、この前に清水さんは、屋外でのプレーを行なうと、おっしゃっていましたが、敢行されましたか？」

佐野「ええ、六月二日に、山へ出かけました。プレーの方はますますといったところですが撮影の段階で失敗をやりましてねえ。悦子がその時の写真をお見せする約束だということなんで実は困っていたところです」

木崎「そいつは残念だなあ。折角、清水さんの縛られた姿を、せめて写真でも拝ましていたけると楽しみに待っていたのに、ねえ、伊東さん」

伊東「そうですね。それで全然、駄目なのですか？」

佐野「全然という訳ではありませんが、まあまあというのが十二、三枚で、後は写真としての価値なしといったお粗末さなのです。家を出発する時には、万全を期した積りだったのですが、汗だくで悦子を縛り、さて撮影という段になって三脚を忘れて来ていることに気づいたのです。あれがないとお手あげですからね。それで、仕方なく、カメラをSM

まがいに、木の枝に縛りつけて、固定したままでは良かったのですが、六十分の一秒にセッティングしたはずのシャッタースピードが一二五分の一秒になっているのです。それもいい気になって二十枚程撮ってから気がついたというわけ。腹が立ったのなんのって。全くしゃくにさわって、そのとばかりが大いに悦子の御尻に行って、思わずベルトを打ちおろす手に力が加わり、泣き出される始末で、全く泣きづらに蜂でした」

伊東「私はカメラの知識が皆無に等しいのですが、一二五分の一では駄目なのですか？」

佐野「初めからストロボを使用しなければ『しぼり』で調節して、何とか撮れないこともないので、ストロボ使用の場合は六〇分の一秒にセッティングしないと完全に同調しないのです。それで一二五分の一秒にして撮ると、上半分は鮮明に撮れますが、下半分は真黒ということになるのです。俗に一眼レフといわれるフォカルプレキシッターの場合はね。それにスペアフィルムを持参しなかったことが決定的なミスといえます。過去にそんなミスがなかったものですから、やはり自信過剰は予期せぬ事故を引きおこす原因になるよう

です」

木崎「それで、拝見出来るのですか」

佐野「ええ、これなんですけど、笑わないで下さいよ」

清水「写真を御見せするなんて、大見栄をきったものの、いざとなると、やっぱり恥ずかしいわ。しばらく席をはずさして頂こうかしら。よろしいでしょう」

伊東「とんでもない。これから話題の中心人物になろうという御本人がいなくては、この会の意味が薄れます。何が何でも、ここにいてもらいますよ。ねえ、木崎さん」

木崎「もちろんです。どれ、一つ拝見と参りましょうか？　なる程これは素晴らしい。撮影順に並べて頂けますか？」

佐野「ほんとに期待はずれなさるかもしれませんが。悪しからず。この順です」

伊東「いや、これだけ撮れば、結構ですよ。さすがに、この場面なんか大した出来じゃないですか。ぞくっとしますよ」

佐野「そうおっしゃって頂くと嬉しいが迫力といった点では価値なしです。縛り方を見て下さい。実に雑な縛り方でしょう。それも後の方になると段々雑になる。始めの内はシャッターを切る毎に割に念入りに縛るのです

が、後になるとめんどろ臭くなって自然、雑になります。それに、この場合は、ミスのために頭に来ていたため余計そうなんですよ。伊東さん、これを見て下さい。上半分は鮮明で、下半分が黒いでしょう。これがさっき説明した失敗の見本ですよ」

伊東「なる程、そういわれれば、そう思えますね。しかし、色々細かいことを考えずに見た場合は、結構、迫力を感じますがねえ」

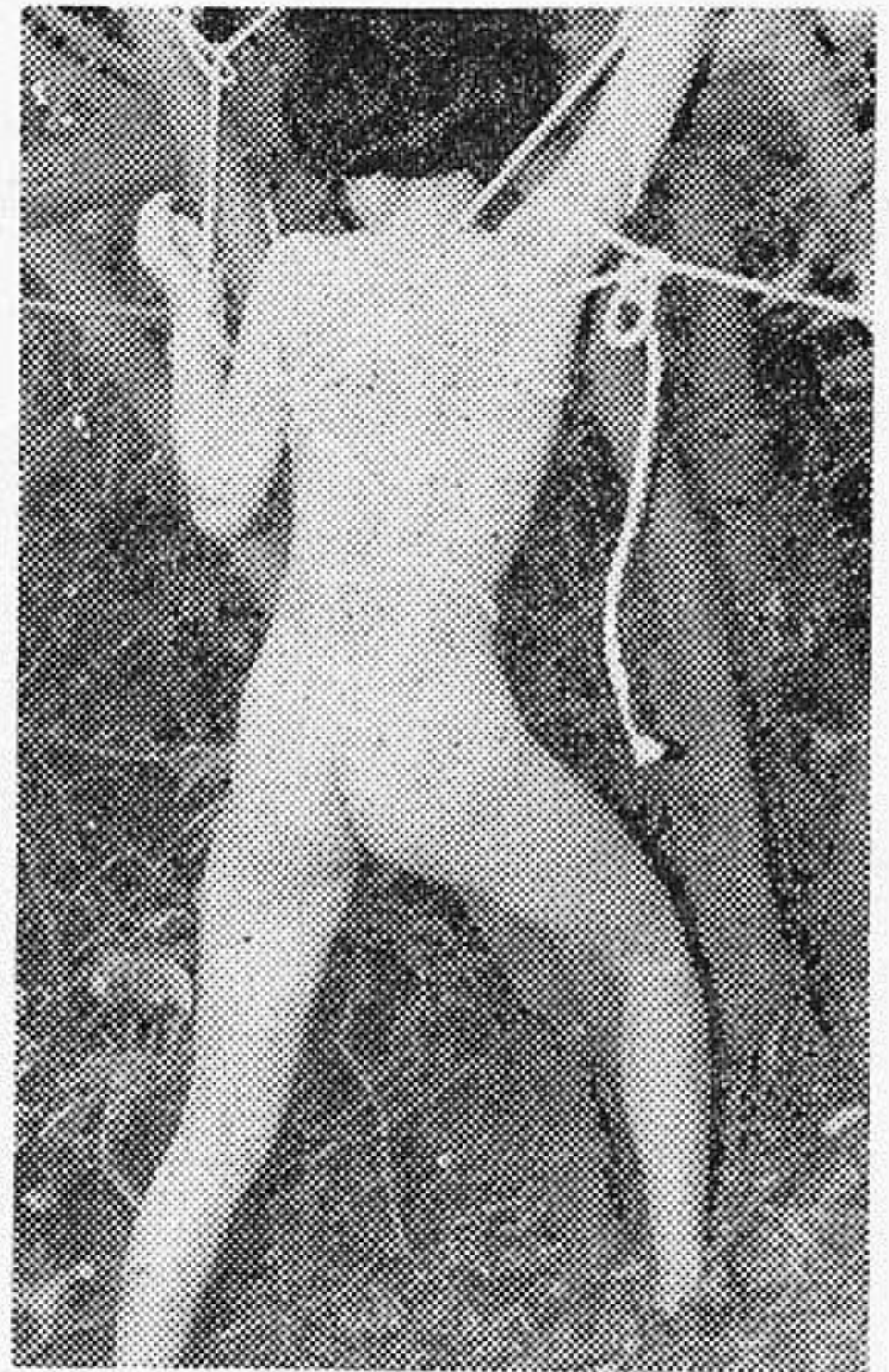
木崎「まあ、佐野さんの撮影技術に、ケチをつけようとは決して思いませんが、佐野さんのおっしゃる通り撮影は難しいものです。プレーの写真に限らずね。特にプレーの写真となると、被縛者の美の追求ということになりますからねえ。いざとなるとやたらと縛ったり、打ったり、するのを、手あたり次第に撮れば良いというものではない。ただ興味本意に撮った写真というのは、単なるエロ写真と変わるところはないと思うんです。例えば同じ縛りにしても、撮る時の角度や、もちろん縛り方ですが、苦痛の表情など、最も美しいと感じられる瞬間をとらえなければならぬ。そのあたりに写真の難かしさがあるのです。ですから、佐野さんがエネマシリンジを操作しておられるこれなんか、マニヤに

して見れば、よだれの出る思いでしょう。しかし今一つの配慮というか、注意すれば、もっと迫力ある写真になると思います。清水さんの表情が入ればいうことはありませんが、この場合でも、清水さんが両手をしっかり握りしめて体をのけぞらせ、薬液の入った容器を撮し込むと、又変わった感じになると思いませんか」

佐野「なる程、おっしゃる通りです。今後は木崎さんに指導して頂きたいくらいです。実に参考になりました」

木崎「いや、そうおっしゃられると恐縮しますよ。しかし清水さんを縛った手と手の間に、パンティとブラジャーをかけられたのは面白いアイデアですね」

清水「木崎さんは、特に下着マニヤでいらっしゃるから、尚更じゃないかしら」笑
木崎「あれ、恥ずかしくてたまらない人がハレンチなことを申される。さっきは偉そうなことを申しましたが、撮影時の条件によっても、出来が違って来ますからね。やはり戸



外で、しかも白昼に、プレイを撮影となると大変だったでしょう。いちいち細かいところまで配慮出来ないのは当然ですよ」

佐野「確かに落着いて、という訳には行きません。屋内と屋外とでは、根本的に条件が異なりますから。人里離れた山中といえども、何時、誰が現われないとも限りません。時折ねずみか、いたち等の小動物が枯葉の上を走りまわって音を立てたりすると大いにあわてます。それだけにスリルといった点では充分な効果を得られますが、ムードという面ではやはり屋内ということになるでしょう。ただ私の場合、屋内より屋外の方が余計にサディスティックな感情が高まり、責めを行なう手

に力が加わります」
伊東「それで清水さんは、屋外プレイは好きですか」

清水「やはり人目を気にしますわ。それに屋間だというのに、蚊に責められたのには閉口しました。かゆくてたまらないのに、縛られていたため、手のほどしようがないのです。」

この人に、たたいてちょうだい、かいてちょうだいとたのんでいるのに、それもプレイのうちだ、なんてって、いっこうにおっぱらってはいくれないんですもの。全く大変な目にありました。でも浣腸プレイは屋外の方がいいですわ。ぎりぎりまで我慢して、思いきり身をよじらせたり、あばれたりできるし、いよいよ最後の時が来ても、身体は多少汚れますが、寝具や家具まで汚す心配はありませんものね」

木崎「ということは、部屋でのプレイの時は、しょっちゅう、子供みたいに粗そうしてベッドを汚したりしている訳だな」笑

清水「又、変なことを……。知らない」
伊東「ところで、屋外プレイ中に、他人がやって来たりしたらどうします？ 例えばSEXに飢えたチンピラなんか現われたりし

たら。裸で縛られている清水さんは、無抵抗のまま貞操の危機にさらされる事になったりしませんか？」

佐野「その時は、その時で何とかします。男ですからね。それに私は空手は初段ですから、チンピラの一人や二人どうってことはありませんよ。それより普通の人がそんな場面を見たら、てっきり悦子が暴漢に襲われていたのだと早合点して、警察に通報されたりする方の可能性が大きいと思います。そういうことになるかと厄介ですよ」

木崎「その可能性は濃いでしょね。若い女性がみたら、どうでしょう？ 腰を抜かすようなことはないにしても、きっとびっくりして声も出ないんじゃないですか？ 特に浣腸のシーンなんかね。しかし佐野さんが空手の使い手だとは知りませんでした」

清水「この人、スポーツは万能なんです。そのためか、サディストのくせに、意外に卑猥さを感じないんですよ。きっと、プレーもスポーツだと考えているのですよ。ねえ、あなた」笑

佐野「又、変なことをいう。サディスト・サディストと軽々しくぬかしやがると、今度あたり本物のサディストになってやるから

な」

木崎「いやいや。今にきつと、本物のSのスタイルになりますよ。今でも肥満を開始されているようですが、その内、赤ら顔のデブサディストになれますよ」笑

佐野「いやあ、木崎さんもお口が悪い。サディストというより、本物の変質者のイメージというのは、木崎さんみたいに、やせていて、何となく陰気臭い感じじゃないですか」

木崎「こいつは、しっぺ返し。しかも手きびしいお返しで恐れ入りました」笑

伊東「ところで、エネマシンジとイチジクを使って居られるようですが、ほんとうにどっちも使われたのですか？」

佐野「もちろんですとも。先ずゴムのエネマで、約千ccの液を注入します。液といっても普通の水ですがね。それから、二十分後に水を放出しないまま、イチジクを行なうのです。只の水でも千cc注入されて二十分を経過すると、結構、便意をもよおします。その上に、二個のイチジクをやられると、耐えられなくなります。この写真を見て下さい。これがイチジクを施して二分後の写真です。身をよじらせているでしょう。これになると、もう我慢出来ない程のを必死に耐えていると

ころです」

伊東「なる程、そういう観念で見て行くと一層素晴らしく思えます。それに、その時の清水さんの、あがきが、まざまざと連想されますなあ」

清水「いや。そんなに見つめないで……。でも木崎さん？ いやに落着き払っていらっしゃいますわね」

木崎「どう致しまして、内心は私もゾクゾクしているところです。貴女の両手を縛ったロープの間にかけられているビキニパンティなんか、目もくらむ思いですよ。佐野さんに命令されて、一週間もはきっぱなしのパンティから香りがただよって来る感じ」笑

清水「あーら、おっしゃいましたわね」

木崎「しかし、佐野さん。この次の写真が欲しいところです。クライマックスシーンがね。実弾投下。清水さんの実弾は、大きくて、さぞ香り高い物でしょうよ」笑

清水「意地悪。ほんとに知らない。どうしてそんなに私ばかり苛めるの」笑

佐野「実はそのシーンのフォートもあるのですよ。しかし、貴殿方とはいえども、それまでは御見せする訳にはね」

清水「また。あなたまで変な事いって」

佐野「それに、今回も投稿されるのでした

ら、この写真も同時に送って下さい。えらく弁解がましいのですが、そのために、私自身の表情も悦子の表情も撮し込むのをひかえた訳です。ほんとうは、セルフタイマーでなく優秀な撮影技術をもった人に、責められて苦痛にあえぐ表情と、神鬼せまった責める人間の表情をキャッチして貰えたら、リアルな写真が出来るでしょうけどね」

伊東「いや、この写真だって立派なものです。ねえ、木崎さん」

木崎「そうですとも。さっきは偉そうなことを申しましたが、あれは、あくまで撮影の場合の理想論ですので、どうかお気を悪くしないで下さいよ」

佐野「いやいや、御心配いりません。それより、いい批評をしていただいたと喜んでい

〓御送金についてのお願い〓

現金を普通郵便物に封入することは、郵送法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願い致します。他に、小為替、定額小為替、振替等の方法もご利用下さい。封書の場合には切手代用でも結構ですがなるべく小額切手に願います。

ます」

伊東「もう一つ、お尋ねしますが、本当にプライヤーで乳房責めをなさるのですか？」

佐野「いや、あれは演出の効果を狙ったのですが、リアルさに欠ける愚作です」

伊東「これからも野外プレイは行なわれま

すか？」

佐野「やりたいとは思いますが、昼間は、やはり落着いてという訳には行かないので、夜間を利用しようと思っています。撮影するにしても、ストロボさえ使用すれば充分、撮れるし、車を利用したプレイなんか面白いと思っ

ています」

木崎「撮影されたら又拝見して下さいよ」

清水「一つ提案があるのです。男性三人に女一人というのは何とも気がひけるので、次

には伊東さんも木崎さんも、パートナー同伴でいらして頂けないかしら？」

伊東「私もそれを考えていたところです。しかし私の相手は、やっと、プレイを理解した程度で、ここに出席させると、かえって皆

さんに御迷惑がかかるのではないかと思って遠慮していたんです」

清水「それなら、なおさら出席なさった方

がいいわ。きっと急速に進歩されてよ」

伊東「そうですね。では、お言葉に甘えて次回は出席させます。それに順序として、次

回は私の話が中心になる訳ですから」

木崎「予告編を少し御話されては？」

伊東「それは、その時の御楽しみ、ということにして置きましょう」笑

木崎「では、このへんでそろそろ……」

清水「そうですね。それでは、フィナーレを飾って、木崎さんと伊東さんに、心ばかりのプレゼントを致します。これ。私達のフォート

ートじゃなくて悪いけど、プレイのフォートです。お帰りになったら、彼女といっしょにどうぞ」

伊東「これは、かたじけない」

木崎「御礼にこれから、四人で「すし」でも食べに行きませんか」

佐野「いや今夜は、私のことを、やたらとサディストだといった、悦子に、たっぷり御

仕置をしなくてはならないので……」

伊東「今夜もクジで行きますか？」笑

佐野「いや、今夜は、フルコース」笑

清水「おお、こわいこと」

佐野「じゃ、これで……」

四人「おやすみなさい。さようなら」(終)



——読むためのシナリオ——

お弓受縛譜

風流極道軒

1、下総・椎崎の海岸

一丁駕籠が、つっぱしる。

まもるように、四、五人の兄^{あにい}哥たち。

利根川が、ゆったりと、銀色に流れ、葦が、青い。

と、二つの影。

佐吉「姐御、富五郎親分は、いまごろ佐原でいい気嫌になってらっしゃるでしょうよ」
お弓「憎らしいったらありゃあしない。四年ごしの大賭場だと云うのに、妾をつれていかないなんて」

佐吉「でもさ、賭場に、女は、禁物」

佐吉、突然、口を噤む。

(エイホー、エイホオ)と、遠くの声。
お弓「もう五つをすぎているというのに」

佐吉とお弓、かげにかくれる。

通りすぎる駕籠。

(ウツ……ウ——ウツ——) 駕籠から洩

れる女の声。

お弓「お待ち！」

驚く駕籠かき、きつとなる兄哥連。

兄哥A「な、なんでえ、なんでえ」

お弓と佐吉、現われる。

兄哥B「なんでえ、女じゃあねえか」

お弓「女で、悪かったわねえ、その駕籠からはみでている赤いものは、なんよ。まさかこの笹川の縄張りで、かどわかしてはい

んでしょね」

兄哥C「かどわかし……ハッハッハ……そうだったらどうだってんでい！ 飯岡の助五

郎親分の一の身内の山勘の栄助に、ケチでもつけようっていうのかよお」

兄哥ABDE……お弓につめよる。

佐吉、ニヤリと笑い、お弓に、脇差をわたす。

お弓「見てなよ、佐吉。お弓姐御^{つるぎ}の剣の舞いを！」

お弓、みね打ちに、ABDEを、またたくまに、たたき伏せる。

兄哥C(山勘の栄助)、捨台詞を残して逃げる。

佐吉「姐御！」

駕籠のたれをめくると、まるで、大きい・いもむしのように、全裸で緊縛された女が、転げ出す。

お弓「お琴さん、お琴さんでは……」

佐吉「繁蔵親分の姉御の、お琴さん……一体どうなせえました！」

2、下総・笹川・勢力富五郎の家

佐吉「姐御、これは、ひでえ！ やくざの風上にもおけねえ仕業……」

お弓「うちのが、居ればねえ……」

全裸の身を救われて、お弓から、借りた濃淡の小菊の花を染め出した白山紬の長着に、塩瀬の染め帯のお琴が、

お琴「兄、兄の繁蔵さえ生きて居れば、いやあの忠兵衛が、博奕に、手さえ出さねばこんなことには……」

3、15 省略

利根川の河港銚子の町から七里、笹川村の繁蔵は、所謂、お旦那バクチ打ち。親の代からの造り酒屋で、田畑も多く、性格が鷹揚、小作料も二分八分、貧乏人には、時々、無料で酒を振舞うと云う人氣者。

対して、笹川から南に三里二丁。海上郡の人呼んで飯岡の助五郎。もとは、相摸三浦の漁師の小せがれ、ながれながれて銚子の五郎蔵親分の三下奴。もちまへのずるがしこさから、手作り若者、いかさま中盆、代貸しと、到々親分の跡目を相続した上に、調子にのって高崎藩御分領銚子陣屋代官鬼頭紋十郎にとり入って

今では二足わらじの十手持ち。

天保十三年、かねて仇敵たる笹川の繁蔵と、大利根河原を血で血をそめる決闘を展開。笹川方の平手造酒以下、数十人を斬り倒したにあきたらず、到々翌々弘化元年、笹川の繁蔵をやみ討ちにして、下総三郡を縄張りに、今では飛ぶ鳥おとす威勢よさ。

一方——笹川方は、繁蔵一の乾分の富五郎が、僅かに笹川村だけを縄張りに、名目を保っているだけ。繁蔵の姉のお琴は、笹川から三里離れた清滝村の銚子屋忠兵衛に嫁いではいたものの、この忠兵衛がまた無類のお人好しで、賭博好き。

お弓「そこで、お琴さんを賭代に……」

お琴……首をたてに振って、

お琴「あの人も、捕まっています……」

銚子屋忠兵衛、女房のお琴を賭けたのみならず自分自身をも賭けた。その上に、最後の一番と、お琴を、銚子陣屋の鬼頭紋十郎の、

お弓「側妾にでもさし出すと……」

お琴「いい……ええ」

佐吉「では……」

お琴「……もてあそび……一日二夜の翫りものとして……」

16、飯岡助五郎の家

土倉のなか、縛られている忠兵衛。

17、富五郎の家

お弓「うちの人は、明後日でないと帰らないしねえ……」

佐吉「あっしが、参りやしょうか……」

お弓「そうして貰おうかねえ。なにしろ親分は一世一代の大賭場を開いていなさるかと……けど、あんたが行って埒があくかねえ……」

お弓、ポント、長火鉢に煙管の灰をたたいてたち上る。

18、利根川

夏の朝もやのなかを、佐吉とお弓、走るように、飯岡村へと急ぐ。その二人の影。

19、助五郎の家・土間

お弓「ごめんなすって、ごめんなすって」

お弓、型のごとく、助五郎達の前で仁義をきる。

助五郎「これは、いたみ入ります。さあ、おあがりなすって」

20、同・座敷

助五郎「お話しはよく判りやした。お返し致しやしょう。では、忠兵衛さんへの貸金二百両、戴きやしょうか」

お弓と佐吉、顔を見合せる。

助五郎「これはこれは、金も払わずに、忠兵衛を返して欲しいとは、富五郎親分の女房殿とも思われませぬな」

佐吉「……………」

唇をかみしめる。ニヤリと笑って、
助五郎「こういっちゃあ何だが、賭場のことは賭場で。どうです、姐御。ひとつ、お遊びをなさっちゃあ……………姐御が、勝てば、忠兵衛さんに、のしをつけてお返し申しませうぜ」

お弓、じいっ……………と聞いている。

佐吉「姐御……………」

と、お弓の耳に、こっそり、
「お止めなすって。忠兵衛さんのことはあとで、どうにでもなりますぜ。ここは一旦、ひき退って……………」

お弓、ぐいっと、煙草盆をひきよせると煙管を出して、一服。

お弓「佐吉。富五郎の女房が、このままでひき下っちゃあ、親分の名前に傷がつくでしょうよ」

21、同・賭場

固唾をのんで見守るなかで、中盆をつとめるのは、崩れ^{くずれ}の文五、

文五「よござんすね」

片膝たてたお弓、

お弓「半！」

助五郎「丁といきやっしょう」

文五、つばをあける。

佐吉「二・五の半！姐御、よかった。これで、忠兵衛さんは、返して貰えますでしょ

う……………飯岡の親分さん」

助五郎「ハッハッハッ……………返すも返さねえもない。それ、佐吉！」

襖が開いて、のっそり出てきたのは、用人棒の印西典膳。

佐吉「はかったな！」

と、お弓を、背後にかばう。

助五郎「とんで、火に入る夏の虫たあ、お前たちのことよ！やっちなえ！ただし先生、女の方を傷つけちゃあいけませんぜ。あの玉の肌に、あざひとつつけねえで、つかまえておきなさい！」

印西、悠々として、二人に近寄る。

佐吉、脇差を抜き、お弓、ヒ首の鞘を払う。——激闘。——お弓の藍染めの秩父

銘仙の裾が乱れ、長襦袢の裾がひらめきちらちらと真紅の鎖繻緬の腰布が、男達の欲情をそそる。

衆寡敵せず、とり押えられる佐吉。

お弓「佐吉！」

絶叫するお弓に、男達がわらわらと近寄って行く。

22、助五郎の家・地下牢

二十坪ほどの広さ。半分は格子が入った牢。半分は土間。所せましと並べられてある三角木馬以下の責め道具。

「ギイッ！」という音がして、座敷から通じる扉が開き、助五郎達がどやどやと

入ってくる。

栄助「親分、椎崎海岸のうらみがあるんで、あつしたちにも思う存分、楽しませてくだせえ」

三下奴の音造に増五郎たち、てんでに、
(そうだ、そうだ……………)と叫ぶ。

助五郎「よからうよ、俺達が、責めたあとで煮るなとやくなと、勝手にせい！」

お弓の入っている牢格子に、額をつけた助五郎、猫撫声で、

助五郎「お弓さん……………出てきなよ……………少し、お礼がしたいんでね」

襟元は乱れ、紋博多のひとつえ帯もゆるみきった上に、乱暴に縄をかけられているお弓、ハッと、身をかくす。

気絶したのであろう佐吉は、もうひとつの牢で身うごきもしない。

牢錠を外して、印西と、崩れ^{くずれ}の文五、山勘の栄助が入って行く。

文五「でなよ、姐御。云うことをきかねえとためにならねえぜ」

よろよろと、小腰をかがめて牢の外へ。土間に一枚敷かれた薄縁^{うすべり}の上に、つきとばされる。

釣灯籠^{つりどうろう}が七つ八つ。あかあかと、牢内を照し出している。

助五郎「(冷たく)まず、この気の強え姐さんを、裸にしな」

文五「合点でえ！」

文五、いったん、お弓を縛っている縄を
といて行く。

と、反抗の気構えを見せるお弓。

一瞬、早く、栄助の赤銅色の両手が、お
弓の右手首をとらえ、増五郎と音造が、
左手を同時にかけ込む。

前に廻った文五。

文五「まず、帯じめからといきやっしょう」

と、羽二重の平打ち紐の結び目に手をか
ける。身悶えるお弓。

文五「おととと……暴れるんじゃあね
えってことよ」

(シュッ!)という音を残して、帯じめ
が文五の手に。音造が、帯のはしに手を
かけて、くるくると、力まかせに、ひっ
ぱった。思わず手をはなした栄助の前で
お弓の身体が、三回転して、よろよろと
傾くのを、

栄助「どっこい」と支える。

増五郎の手が、紋織りの伊達巻きにかか
り、

お弓「イヤッ！」

という声を残して二回転。ハラリと銘仙
の長着の前が開く。あわてて押えようと
するのを、文五と栄助、同時に肩に手を
のばしてひっぱがす。糸がきれて、裂け
た右袖が宙に舞う。

助五郎「……いい女だ。俺の目に狂いはねえ
だろう」

初めて、お弓の女の匂いが、ながれる。
ひとえ、白地の紋紗の長襦袢姿のお弓の
立姿。

文五「それも、脱いで貰いましょうか」

声よりも早く、縦しほの薄い絹の腰紐に
手をかけ、すらりと器用にときはぐす。

お弓「アッアッ……ア……」

あつと云う間に、長襦袢を背後から、栄
助にぬぎとられ、あとは、さらし木綿の
肌襦袢に、真紅に染めた鎖縮緬の腰布。

助五郎「構うこたあねえ。その襦袢も、とっ
ちまいな」

印西「儂が、とろう」

ぼつりと云うと、両手で胸をかき抱いて
いるお弓に近寄って行く。

その時、いままでされるがままであった
お弓の身体が、飛鳥のような動きを見せ
た。一間ほど離れていた助五郎の横腰を
蹴り上げると、身をひるがえして座敷に
通じる梯子へ。

倒れる助五郎。

印西「逃げる気なのかい、お弓。逃げれば……
ほれ」

印西、大刀をぬき放つと、牢内で失神し
ている佐吉の首につきつける。

印西「逃げやしないな、お弓さん。何も、我

々は、あんたを殺すとは、云っていない。
お琴の代りに、我々を楽しませて欲しいと
云っているだけだ。それを拒んであんたが
逃げ、この男と忠兵衛が殺される……それ
でも、よいと云うのかな」

お弓の足、とまる。

振り向いたお弓の唇が、わなわなとふる
える。

静寂――。

手燭に火をいれた崩れの文五が、脇腹を
押えながらおき上った助五郎に、それを
渡す。

助五郎「……どうなんだ。お弓……」
お弓「……畜生！」

呻くように云い、二歩三歩、よろよろと
進む。

印西「やっ」と決心したな……お弓。ここへ」
指さされた薄縁の上。

文五「詫びを入れなよ、お弓。逃げようとし
たこと。椎崎の海岸で山勘の栄助達に手荒
い真似をしたこと……」

栄助「先生、先ず、脱がせましょうよ。生ま
れたままの素っ裸になって、詫びを入れて
貰いてえんで」

音造・増五郎「そうだと。女が、詫びを入
れるためには、裸にならなくっちゃあ」

印西「どうする、お弓」

助五郎、手燭をお弓の顔に近づける。

助五郎「なりなよ。いやとは云わせねえぞ、そら」

助五郎、左手でお弓の肌襦袢の紐に手をかける。

閉ざしていた目をあけて、ピクッと身体をふるえさせるお弓。

文五「脱ぐぜ、お弓」

背後から抱きかかえるようにして文五、肌襦袢の紐をとく。お弓の手が襟元をかき合せる。文五、襟に手をかけ、サアッサアッ！と左右にひき下げる。豊かな乳房が露われ、お弓の手が音三に押えられ女の匂いがむうーんとたち込めて、白い晒もめんが文五の手にうつり、お弓が思わず蹲まる。

23、お弓の姿態

キメラ、そのお弓の姿態をあらゆる角度から捕える。

牢格子、壁面を埋める種々の拷問道具、釣燈籠。助五郎たちの黒い影。その真中に蹲まる半裸のお弓。たてた左膝に顔をつけるように、両手で乳房をかき抱いてがつくりと乱れた黒髪。お弓という名のよう、きりりとひきしまった腰から背中の線。助五郎、手燭を持つとかがみ込み、お弓の顔へ触れるように、蠟燭の火をちかづける。

(アッ……熱……い！) お弓の身体がう

ごめく。立てられた左脚の内側が助五郎の男心をそそる。助五郎の手が伸びる。

お弓「キャッ！ な、なにをするのさ！」お弓の身体が、はねる。

助五郎「こうするのさ」

耐えかねたように助五郎、手燭を文五にわたしてお弓にむしゃぶりついて行く。

助五郎の下に組み伏せられて、暴れるお弓。空しく宙に舞う真っ白い足。

助五郎、お弓の顔中をなめ廻す。

助五郎「……痛、痛え！ やりやがったな」

どこを噛まれたのか助五郎、お弓の横っ面を一発なぐって起き上る。

助五郎「おおいてえ。ひでえ阿魔だ！ ええい、湯文字も剥ぎとってしまいな」

その間もキメラ、喘ぐお弓の裸身を撮影しつづける。

文五「合点！」

音造と増五郎、左右からお弓の手をとって、立たせる。

反抗するお弓。

栄助「やめなつてことよ、無駄なあがきは」

(くん、くん……) とまるで犬のようにお弓の腰のあたりを嗅ぎまわった栄助は鎖縮緬の湯文字の紐に手をかける。激しく、身悶えるお弓。

楽しむように、栄助、紐を、とき終ると栄助「どうしますかねえ、姐御。あっしがこ

の手を離しゃあ、富五郎以外には見せたことのないところを、あっし等にみな見せっちゃうってことになるんですがね……え姐御。どうしやしょう」

文五が手燭を近づけ、お弓の羞恥の顔の動きを見逃すまいと、凝視する。

お弓「アウ……ア……ッ……」

栄助の腕が、大きく振られ、真紅な布が地下牢の隅にとぶ。

思わず左膝を曲げて、羞恥を、押えようとするお弓。

助五郎「なんでえ、なんでえ。どこか、かゆいのかい」

と、いいながらも助五郎、あまりの美しさに、手を出すこともならず、見とれてしまう。

24、助五郎の家・中庭

仙次郎、忍び込む。

気付かないで、

兄哥E「いまごろ、親分たちはこの下で、とっくり楽しんでることだろうよ」

兄哥F「親分のことだ、さぞかし、あのお弓姐御……泣かされてるぜ」

兄哥G「早くすまねえかなあ。親分たちがたのしんだあとで、儂等にも必ずいつものようにおこぼれがあるはず」

兄哥E「あの女、振いつきてえくらの阿魔だぜ……あいつが、素っ裸にひんむかれて

よ、縛られてる姿なんぞ、考えるだけでぞくぞくすなあ」

仙次郎、兄哥達のとおり過ぎるのを待って、脱兎のように堀をこえる。

25、利根川沿いの街道

星月夜、懸命に走る仙次郎。

仙次郎「親分に、佐原にいる富五郎親分に、一刻も早く知らさなきゃあ……」

——「佐原まで二里」……の道標。

26、助五郎の家・地下牢

薄縁の上に、全裸で坐っているお弓の遠景。キメラ、近付き、助五郎の顔。

助五郎「さあ、云いな。素っ裸で縛られて、

二日二夜の間、罵られものになるって」

文五が、まだ何事も知らず失神している

佐吉の咽喉に、脇差しをあてている。

新しく、連れ込まれた忠兵衛は、嚴重な猿ぐつわをされて、壁に、立ち縛りにさ

れている。その両眼が、痴呆のように開

いている。

お弓「……どうして……も、云わせる気なのね、親分さん。妾を、どうしても辱かしめたいんだねえ」

助五郎「あたりきよ。お琴の身代り、ここがすんだら銚子の御陣屋、さっさとほざきな縛ってくれてよ」

お弓、覚悟をきめる。

きつと、顔を上げると、崩していた膝を

あわせる。

お弓「……妾を、縛る……と、いいよ」

助五郎「なんでえ、その不貞腐れた口調は、縛っておくんなさいまし……と、どうして云えねえ！ 文五！ 殺^やっちゃまいな」

文五、ニヤリと佐吉の咽喉に刃を。

お弓「待って！ 待って……」

生唾を、ごくんとのみ込むと、

お弓「妾を、妾を縛って、くださいよ」

声とともに栄助。

栄助「合点、承知のすけ、姐御」

増五郎のさし出す黒ずんだ麻縄を両手に

お弓の背後に回る。

栄助「姐^{あね}さん、ほんじゃあお望みどおりに……さ、可愛いお手手を後に」

お弓、両手を後に回す。

栄助「もっと上へ、手首を合せて、もっと、

もっと！」

お弓、頭をたれて、手首を上へ。

栄助、手に唾すると、もうこれ以上、上

らないくらい両手首を上へあげると、き

らめくような背中に左膝をあてて、手首

を合せ三巻き四巻き。ぐいっ^ととどめ結

びをして、前にかがみ込んでいる音造に

縄を廻す。

音造、ふるえる指先で、肉づきのよいお

弓の脇腹をとおして乳房の下へ、ぐいと

かけ栄助に。栄助の手から音造へ。乳房

の上下へ、合せて六筋の麻縄が走り、栄助はさらに、二の腕の左、右と縄をかけて立ち上る。

(もう駄目だわ……貴方、もう、駄目

よ。なぜ、こんなことになったのか、女

だてらに、あんたの名代をつとめようと

思ったのだけれど……) お弓、生まれ

て初めて受ける縄目のざらざらした感触

と、その痛さに鳥肌立ちながら、富五郎

の万一の救援をまちのぞむ。

音造「姐さん、立ちなよ」

よろよろと立ち上るお弓。

助五郎が、隅の滑車をひくと、ガチャガ

チャと鎖がおりてきて、栄助がその先端

にお弓の縄尻を結ぶ。

もう大丈夫と、佐吉のそばを離れた文五

が、長さ三尺ばかりの杭を持ち出すと、

一間位離して、お弓の右左へと、土間に

打ち込む。

文五「できたぜ、姐御」

お弓「何、何をするのよ」

助五郎「女が、詫びを入れるのは、こうする

ものだ^と決^てってらあな」

お弓「……ひ、ひどい……」

栄助「何が、ひどいんですかい。男数人を手

玉にとった姐御だ。これ位のこと^で音をあげな^さるとは」

音造「さあさあ……」

かたくなに合せる両足を、増五郎と二人でかかえ込む。

お「アッ……ア……ウ、アア……ウ」

助五郎「何が……アウ……だ、お弓」

必死で閉じようとするお弓のすんなりと伸びた両脚と、増五郎、音造の戦い。勝負は、見えている。

お弓「ア……ア、アッウン……」

がっくり頭をたれ、もう、これ以上は括がるまいとみえる両足に、それぞれ鎖をまきつけてたち上る音造たち。

ピクピクとけいれんする純白の肌に、二筋、三筋、静脈がうかんでいる。思わず

助五郎が近づくと、両手を伸ばす。

お弓「あっ！ 親分さん、や、やめて、やめてよお」

助五郎「やめねえよ、やめるはずが、ねえだろうよ」

うわ言のように云うと助五郎。

助五郎「云いなよ、お弓。詫びを入れろってんだい」

喘ぎながら、お弓。

お弓「……親分、妾が、悪うござんした……

あ、あやまります。栄助、栄助さんにもお詫び……します」

助五郎「それから……どんな罰を、受けるってんでい」

お弓「……妾は、二日二夜、裸で、皆さま

方の、騷りものに……されます……わ」

お弓の全身から汗が流れる。ニヤリニヤリと文五が笑いながら、井に入れた水をお弓にのませる。

塩水である。お弓、知ってか知らずか、のみ干す。二杯目は酒である。三杯目。さすがにお弓は、激しく首を振って拒否したが、文五、鼻をつまんで唇を開かせ咽喉もとへながし込む。

27、利根川沿いの街道

ひた走りに、走りつづける仙次郎。草鞋が、早咲きの女郎花の二、三輪を踏みつける。

28、助五郎の家・地下牢

文五、ニヤリと笑って立ち上る。

文五「どうしたい。ええ、お弓姐さん……腰をもじもじさせてさあ。それにその顔は、まっさおになってるじゃあねえか」

一刻あまりも、土間にもち込んだ酒肴をのみ合っている男たちの淫らな視線と、押搦を受け、助五郎に翻弄されつづけたお弓。じつとりと汗ばんだ額を、たてよこに振って、尿意を耐えている。

文五「どうしたって、きいてるんだよ」

お弓「……」

咽喉をのけぞらせたお弓、耐えきれず、

お弓「文、文五さん……ゆかせて……。お願い……お願いよ……ゆかせ……て」

文五「どこへだい、姐さん」

手燭をとった文五、お弓の腰の周りを明かるく照らしながら二廻り、

文五「どこへだい、お弓さん」

お弓「……知ってる……くせに。お、お願い」助五郎「文五、行かせることはねえぜ、皆の前で、しっかりやって貰いな。俺も一度くれえは見てえと思ってたのよ」

お弓の全身が、ピーンと、弓のつるのようにはりつめる。

お弓「ひどい……ひどいよ、親分。アッ……早く、早くこの縄をといてよ」印西「駄目だぜ、お弓。観念しな」

たち上った助五郎、お弓の真正面に身をかかめると、木の盥たらいをおく。音造も、増五郎も、顔もふれるように近寄る。

お弓「アッ……アッ！……ア——ウ！」ついにたまらず、全身の力をぬいてぐったりと鎖に身を任しきるお弓。その態を嘲笑しながら見入る男達。

29、35、省略

仙次郎の報せをうけた勢力富五郎、急ぎ笹川にとって返し、子分たちをひきつれて飯岡へ。その中には佐吉の女房お信もいる。笹川から南へ飛んで三里二丁、清滝村にでて、飯岡へあと二十丁という所に小さな森がある。そこで待ちうけていたのが助五郎一家と、銚子陣屋からの加

勢の捕手たち。

入り乱れての喧嘩——決闘。

富五郎は鉄砲でうたれ、仙次郎達数人に守られて後退。三人の子分が斬り死にしてい、歌吉始め六人が捕まったが、その中にお信もいる。

一方、飯岡方でも五人が死に、四人が負傷。

助五郎は、勢力方の捕虜と、忠兵衛、佐吉、それにお弓を駕籠にのせ、三里の道のりを走り、銚子陣屋・鬼頭紋十郎の館へと運び込む。

36、鬼頭紋十郎館・私牢

こんもりとした庭木にかこまれた奥庭の一劃に、鬼頭の云わば私牢がある。陣屋の牢に対して、鬼頭が楽しみにつくらせた牢であり、陣屋の牢で白状しない強情者を、帰館してのち取り調べるためという口実であったが、入牢するのは若く美しい女に限られているようである。

五十坪はあろう、四つの牢があり、一段高く責場、他は床板。壁には各種各様の責め道具。

37、同・私牢内

第一の牢には、捕われた五人の子分達。

第二の牢には、忠兵衛。

第三の牢には、息をふき返した佐吉が、お信をしっかりと抱いている。この二人

だけは縄がかかっていない。

38、同・座敷

お弓、全裸で縛られている。助五郎、盃を口にしながら、じいっと眺めている。

鬼頭「ハッハッハ……。いくら拝んでいたとて、どうなるものでもあるまいよ。要は、その女が、どんな女か、どのように今まで生きてきた女かのほうが、余にとっては面白え」

助五郎「して旦那は、このお弓のからだに気に入らねえとでも」

鬼頭「いやいや。この女、繁蔵身内でも名の高い富五郎の女房。今までの生活にも文句はねえし、身体つきも満更、捨てたもんでもねえ……」

助五郎「とおっしゃると……」

鬼頭「女を責めるのは、身内の前に限るってことよ。女ってやつは魔性でな、見ず知らずの男達の前なら、裸になるくらいは何とも思っちゃあいねえ。それが、見知った男の前となるとそうはいかねえ。殊に惚れた男の前で、他の男に素っ裸にされるのを極端に恥ずかしがるものよ。この女の亭主は富五郎。……こいつをふんづかまえて、その前へこの女をひきずり出しゃあ、これ以上おもしろえことはねえんだが……」

助五郎「判りやしたぜ、旦那」

ポンと手を拍ったのち、

助五郎「亭主の代りに、数人の子分たち。それにあのお信……お信の亭主の佐吉がおり

まさあ。旦那にとっちゃあ、おあつらえ向きでしょうぜ」

初めて、ニヤリと笑った鬼頭紋十郎。

お弓、もう、反抗する気力もなくなったように、俯伏してしまふ。

39、同・廊下

高手小手に縛られた全裸の身を、くの字に曲げて歩くお弓。縄尻を持つ助五郎と鬼頭。

夕陽が、お弓の肌をあかあかとそめる。

40、同・私牢内

カメラ、牢に入るしきいの手前でためらうお弓の足をうつす。つづいて、階段を下るお弓の脛……。一転して、一の牢内の歌吉たち。助五郎の足、責場の前でぴたりととまる。

歌吉たちの「オオウ……」という声にならない声。お弓の足、大きく伸びて二尺高い責場に上る。

歌吉「姐さん！ 姐さんじゃ、姐さん！」

五人の子分たち、口々に叫ぶ。

お弓の閉じられていた瞳が開く。

お弓「お……お前……たち……」

身をふるわせるお弓。先程、座敷での二人のやりとりから、覚悟はしていたもののあまりと云えばあまりの仕打ち。

お弓の全身が、ぴくぴくとけいれんし始める。

鬼頭、あとから入ってきた栄助に何事か耳打ちする。

栄助がお弓の縄尻をとる。文五が隅の綱をひくと、ガラガラと滑車が廻っておりてくる一本の鎖。

栄助「姐さんは、しばらく休んで貰いまっしょう」

責場から抱えおろして縄をとく。

自由になった両手で、乳房を抱くお弓。

歌吉「姐さん！」

絶叫するその子分たちの見守るなかで、文五、お弓の両手をとると前手縛り。あまった縄を、天井からおりた鎖につなぎとめ、再び滑車が鳴る。

お弓の手が、乱れた黒髪が、乳房が、縄にぐいぐいと引上げられてゆく。そして爪先きだけで辛うじて身を支えるお弓。

それでも、子分達の眼から逃れようと身をよじるお弓に、

文五「子分共に、姐御の姿を充分に拝ましてやらねば、わるかろうてな」

くるり——と半回転させて正面向ける。

歌吉「姐さん！……や、やめろ助五郎！」

これが、渡世人のすることかい！ やめろってんだ、畜生！」

叫びつづける子分達。

お弓「歌吉！ 目をつぶってて。見ないで、おねがい」

歌吉「へえい！ みるものですね。おい、みんな。いいな、目を閉じろ！ 死んでもあけるんじゃないぞ！」

子分たち目を閉じる。

意にも介せず文五と栄助、お弓の足首をそれぞれ鉄の輪に結びつける。

文五「瘦我慢もいい加減にしろよ、歌吉。お前だって、姐御の素肌を拝みたかったのと同じかい。おい、安！ 常！ どうでい阿の字！ よおく見るんできい。とっくりと見なきゃあ損だぜ、この綺麗な姐さんのハダカ弁天をよ」

栄助「この姐さんはな、今の今まで俺達の前でよ、散々に泣いてくれてな。おまけによきれいなお水まで、どっさりはじき出して見せてくれなさったぜ。なあ、お弓姐さんよ」

栄助がどこをどうしたのか、お弓が悲鳴をあげる。

文五「もうこの姐さんは、飯岡一家の総嫁になっちまったことよ。俺達みんなの女によ。いい味だよなあ、栄の字！」

悲鳴とも嗚咽ともつかぬ声をあげつづけるお弓。

鬼頭、盃をしずかにあげている。

「姐さん……」と云ったのは安次だった。うつすらと目を開き、ごくんと生唾をのみ込む。

常「見るんじゃないぞ、安」

と常六が、云ったものの目を開く。阿の字も、うつすらと目を開いて、姐御すげえ……と、口の中。

歌吉「みるんじゃないぞ、安！」

「へえい！」と答えたものの、安たちの目はいつしか開いて、お弓姐御の凄じばかりに美しい裸身を見つめる。

佐吉が一きわ大きく叫んだ。

佐吉「見るんじゃないぞ、安！」

安次「だ……だって、兄貴！」

佐吉「だって何もくそもあるものか。一目でも見やがったら、ただじゃあおかねえ」

歌吉「姐御は、俺達の身代りになって下さってるんだぜ。それを眺めて妙な気でもだしやがったら……いいか、常！」

歌吉たちのやりとりを聞いていた鬼頭、

鬼頭「お弓、何とか一ことで云ってやってはどうかな。可愛い子分達に」

お弓、チラリと鬼頭をみる。

お弓の口から唾がとぶ。鬼頭の顔にかか

る。

文五「何をしやがる、この阿魔！」

いきりたつ子分達を手で制して鬼頭、

鬼頭「イキがいいのう、お弓。その方が、責め甲斐があるうというもの。まあ、ゆっく

りと……な」

鬼頭、顎で、お信と佐吉の入っている牢をさす。文五、「合点です」と。

文五「旦那のお名指しよ。お信でてこい！」

佐吉、お信をかばう。

栄助「お仲のいいことで……」

佐吉「許してくれ。お信だけは勘弁してやってくれ。俺は、俺はどうなってもいいから……た、たのむ。たのむ」

文五「そうはいかねえ。野郎をヒン剥いても楽しくはねえじゃねえかよ。……お信を今からお前の目の前で、弄ってやろうと、旦那は仰言るんではない」

お信「イヤ……イヤ！ それだけは、それだけは勘忍して。ね、お願い。……あんた、妾、イヤよ！」

助五郎「てえした子分共だ。素っ裸の姐御をジロジロ見やがるかと思やあ、妾はイヤ、妾は許して……かい、お信さん。あんた達は、この姐御を救い出しにきなすったんと違うんですかい……」

青竹で、眼を閉じ唇を噛んでいるお弓の乳房をつつき廻す。

お弓「や、やめてよ！ こんな、こんなひどいやりかたは……アッ……アウ……子分達が、見てるじゃあないか！ やめて……やめて……」

その声は次第に小さくなる。

息をとめて見つめる安次達。ほんの二尺手を格子から伸ばせば、とどく所で行なわれている凄惨な女責め。

歌吉の目もいつしか開いている。

印西が、細い杖をもち出した。尖端が、たんぽになっっている。

お弓の前にかがみ込んだ音造。ふくよかな柔肌を責め始める青竹とたんぽ杖。

喘ぎ始めるお弓、熱っぽい吐息が鬼頭の顔にかかる。全身をのけぞらせ、波立たせ、のたうつお弓。一滴、二滴と、汗が額から唇のわきを通して、白いあごから乳房の谷へおちる。

しずまりかえった牢内に、鈍い音と、お弓の喘ぎ。

お弓「……や……めて、やめてよ親分。こんな……こんな目に合せるのは、や……やめて……飯岡の親分……おやぶんさん」

その声には先刻までの男まさりの向こう気はない。責められる女の、二十八歳の人妻の、妖艶な香りが、あたり一面に漂う。

お弓「アウ……アッ」

身悶えつづけるお弓の裸身が、一瞬、その名の如く弓のように反ると、天井から伸びた鎖が、ギシギシとお弓の体重をうけて、軋んだ。笹川方も飯岡方もなく

一様に見詰めるなかで、あえかに責め立てられてのけぞるお弓の全裸身を、キヤメラ、遠景・近景で、とりまくる。

41、山の中

笹川からさほど遠くはない山の中の堀立小屋。富五郎が寝ている。

憔悴しきっている。看病している仙次郎達。

仙次郎「親分、もうこうなったら、ひと思いに天領御差配の勘定奉行、久須美佐渡守さまにお願いするほかはありませんぜ」

富五郎「……やくざの喧嘩は、喧嘩でけりをつけるものよ、仙次郎」

仙次郎「だって親分、向こうには銚子陣屋や捕方がついてるんですぜ。それに、悪いのは飯岡だ。おおそれながらと訴えて、お取り締りを願うほかは」

富五郎「いけねえ」

仙次郎「親分、お願いします。ひとつ走り、小金井まで走らせておくんなせいで。丁度、久須美様は、小金井に御滞在中で……」

富五郎、起き上ろうとするが倒れる。

鉄砲傷がいたむ。

仙次郎「姐御が、どうしているか……親分、考えてもごらんなせえ。相手は助五郎。名代の色好みですぜ親分、今頃は……」

富五郎「お弓……」と、呟く。

42、鬼頭紋十郎館・私牢

文五と栄助、全裸のお弓に本縄をかけている。抵抗をやめ、なされるままになっているお弓。

その横顔には、諦めきった表情が漂う。

助五郎「どうでい、お弓。女ってものの本性が、いやさおめえの正体が判ったかい……」
うなずくお弓。

文五「さすがは、お弓姐さん、そうこなくっちゃあ……」

第二の牢の忠兵衛が、ゴクンと唾をのみ込む。第一の牢では、安次は勿論、見るんじゃあねえ、と云っていた常六、それに歌吉までもぼう然と、文五と栄助の二人の手で縛られていくお弓を見ている。その視線を意識して、瞬間、身を固くするお弓。

栄助「姐御、恥ずかしがるこたあねえようですぜ。さっきの責められっぷりを、こいつら、もろに見てやしたからね」

お弓「歌……歌吉……常さん……見ないで見ないで頂戴……」

女の哀れさを惨ませながら言い、ひしひしと縛られて行く。

助五郎「さあ、お弓はこれでよし。次は、お信さん、覚悟はできてるな」

顎で、文五に合図する。

「勘忍してくれ、お信だけは！」と、わめき散らす第三の牢の佐吉。

その佐吉に、猛烈なビンタ。横転する佐吉。つれ出されるお信。閉められる牢。文五と栄助、お信を罵りながら、全裸にして行く。

43、お弓の裸身

天井からおりた鎖に吊るされている。美事にかけられた菱縄縛り。牢の壁から三尺はなれた空間に、『人』の字型でゆれている。

目は閉じられているが、乳房があえかに息づく。

44、同・私牢内

全裸に剥かれたお信。乳房をかかえてうずくまっている。

その右足を文五がつかみ、足首に三巻き縄をかける。その縄がぐいと引かれる。

左足を「どっこい！」とばかりにつかんだ栄助、これも器用に縄をかける。

印西典膳がフラリと入ってくる。
少しおくれて、鬼頭紋十郎。

鬼頭「佐吉とやら、よく見るんだな。恋女房が……ほれほれ、今度は後手。ホホウ……自分で回してるぜ、両手を。縄尻に別の縄がかかった。そら、もう一本、二本……よく見なよ、都合五本の縄が、お前の女房の身体からのびてるぜ」

牢の隅で向こうをむいて、耳を手でおおっている佐吉をなぶるように云う。

お信、必死で抵抗したが、全裸の身ではどうにもならない。

印西「これはこれは。また、随分と目の保養をさせて貰いますな」

と、文五をおしのけ、キリキリと肉に喰い込むようにかけられた縄目のあとをさぐって行き、突然に唇を奪う。

お信「アッ……アッ、やめて。あなた！ 佐吉さあん」

助五郎「何がアッアッでい、お信さん」
身をさけようとするお信の背後から、羽交いじめにする。

無理矢理に両方の足を、それぞれ持った文五と栄助「よいっしょ、よいっしょ」とばかりにひっぱる。

ふくよかな尻のあたりを、両手で支えた助五郎がこれに協力する。

鬼頭「佐吉！ 見るんだ。見なければ、ほれ一思いにのどを貫くぞ」

鬼頭、刀をお信の咽喉にさしつける。

鬼頭「佐吉、よくきけ。お前の女房の拷問される姿を見ればよし。見れば、生命だけは二人ともたすけてやろう。イヤとあれば、いいな、即座にお信を殺す。どうだ佐吉とやら」

佐吉「……や、やめてくれ！」

鬼頭「やめるはずはないな、佐吉。二つにひとつ。どうする？ 女房を殺すか」

お信「(喘ぎ喘ぎ……) あなたあ……」

怒りの表情もすさまじく、鬼頭を見つめていた佐吉。やがて、がっくりと顔をふせる。

鬼頭「どうするな……佐吉」

佐吉「見やしよう。……女房の生命には、代えられませんや……」

佐吉の目に、数人の男たちに罵られつくす女房お信の姿が、次々と入ってくる。

お弓にも、飽くことのない拷問が加えられる。

やがて、お弓とお信の二人とも縄を解かれて、鬼頭や助五郎たちの前に正座させ

られ、忠兵衛、佐吉の生命を助けることを条件に、すすんで拷問を受けることを余儀なくされる。

お弓「助五郎親分さん。このわたしを可愛い女に、したてあげてくださいませ」

助五郎「素っ裸でな……」

お弓「……ハイ。ス……ッパダカで、思う存分に罵ってくださいませ」

お信「鬼頭さま。どうぞ、佐吉の女房のこのわたしを、お、お好きなように……可愛がってくださいませ。お……夫のまえで、早く早く、存分にして下さいませ」

文五たちの「俺たちは」という問いに、

☆奇クサロン☆原稿募集

一、大好評の『奇クサロン』の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム(筆名)を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対しては、お応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供にしましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

お弓「助五郎親分のあとで、どうぞ、文五さんたちも、自由に、お、お好きになさってくださいませ」

唇をかみしめ、背後に手を回し、次々と縛られ、罵られていくお弓とお信。

45、同・廊下

翌朝、廊下に、さらし者に、されている二人。

お弓は、両手を上に柱に吊られ、両足首を竹の両端に縛られている。

お信は、あぐらに両足を組まれ、手は背後に高々と縛り合わされている。

お弓「お信さん、頑張るのよ。……きつと、きつとたすけに、富五郎が、たすけにくてくれるわよ」

お信は、かすかに、うなずくだけ。

次々と、姿を見せ、なぶってゆく、文五をはじめとする子分たち。

46、50、省略

仙次郎が、小金井にかけつけ、天領御差配の勘定奉行久須美佐渡守に、事の次第を報告、久須美の手で、お弓たちが救出されたのは、二日後の事であった。

富五郎とお弓、佐吉とお信の夫婦は、その後も、仲睦まじく暮らしたという。



告白

レダの血は薔薇

西条 夏

(一)

——妖精たちの黄昏とき——とサブタイトルのついた、黒表紙の本が、私の机の上に置かれています。邦訳の題名は、「五つの恋の物語」とされていて、昭和三十二年にY書房から宮本文好氏の訳で出版されたものです。

仏蘭西の小説家でもあり、詩人でもあったピエール・ルイスの「ニンフ達の黄昏」の訳本です。この一冊の本によって、私の受感性が確定したと言えるのではないでしょうか。その一節を引用しましょう。

○ ———そして、ななめから処女をじっと見るのでした。すぐそばに来てもお、すすみ寄って、白鳥は……(中略)……全身の羽を震わ

せました。

深々とした柔らかい両翼の中に、白鳥は処女の素肌の脚を抱きしめ、さらにそれを折り曲げさせようとするのでした。されるがままにレダは地に倒れました。処女は両手で顔を覆いました。畏れも、恥じらいもありませんでした。ただ名状しがたい悦びがあるばかりです。胸はときめき、乳房ははげしく波うちました。何が起ころうとしていたのか処女には解りませんでした。……

と、するうちに、白鳥はうしろへ身を引く気配でした。愛撫の仕方の様子が変わりました。あたかも、水に泛かんだ一輪の花のようにレダは徐かに、白鳥の前に開いていきました。冷たい両膝の間に、鳥のからだの燃えはてるのを感じていました。突然、処女は声を

挙げました。

ああ！ ああ！

両腕が青白い枝末のように顫えまじりました。嘴が処女をしたたかに貫いたのです。……(中略)……ながい間、彼女は身じろぎひとつしませんでした。ようやくはじめて身動きしたとき、その手は身体の上で「白鳥」の鮮血にまみれた嘴に行き当たりました。——

○ ———そしてこの物語の主人公レダは、青いサファイアのような卵が自分の身体から離れていくのを感じるのです。

○ ———「お前は夜なのだ。お前は燦然たる光と栄誉の一切を愛し、そして、そして、それと結合したのだ」——

——「象徴から象徴が生まれた。さらにその象徴からは『美』が誕生するのだ」

○

「五つの恋の物語」の第一番目の物語は、このレダの話でした。

——幸福の極みなる闇を頌える歌——

確かに、私の少年期は、エーゲ海の陽光のように、なめらかで、どこか痛々しい葉影から眺めた遙かな海辺のように、さらさらと音をたてて流れていったのですが、日常のほんの一隅に、音もたてずにうずくまっている陰のような、どこか胸の奥底で生命を持っている妖虫が、私に隠された世界があることを小声でささやくのです。

死ぬっていったいどんなことだろう？

逝った老婆の思い出に浸りながら、孤独癖を満足させるべく、部屋に閉じこもり勝ちな日々が続いたのです。全ての発端は、もしかすると、私のこの少年期の孤独癖からきているのかも知れない——と今、思ってみます。

たまの休日には下町の古本屋へ出かけるのです。忘れもしません、中学三年の春の日。

いつものように独りで古本漁りをしていると一冊の古ぼけた本が、ひときわ高い棚の上に飾られているのに気づきました。見たところ

薄汚れた本でしたが、背のびして手にした私の目に「J・K・ユイスマン著黒ミサ異聞」の表題が飛び込んできたのです。

何か得体の知れない衝動を覚えた私は、夢中でページを開きました。——淫夢女精の記

——とサブタイトルのついたその本には、当時から芽生えていた、私の文学趣味と、もう一つの何かを満足させてくれそうなものがあった、私を引きつけて離しませんでした。当時の私は中学生。その身分で二千五百円也の大金をはたいて、その本を手に入れたのも、むしろ単なる文学趣味ではなく、もう一方の要素が強く働いたのでしょう。内容は、要するに表題の通りの「ブラックミサ」の小説なものでした。

——悪魔に興味を持つ者は、半ば神のわなにかかっている——

そうなのかも知れませんが、その一冊の本が発端になって、私の休日のほとんどは、第二の「黒ミサ異聞」を捜し出すことについてやされてゆきました。

しかしその頃は、まだ、自分がどうしてそのようなものに惹かれるのかは、判然としていなかったようです。クラスの友人達はこぞって、ヌード写真が満載されている雑誌に読

み耽っているようでしたが、私は不思議と、そのようなたぐいのものには興味を感じなかったようです。

面白いように第二、第三の「黒ミサ異聞」は見つかっていきました。S氏の諸作など、その意味で私の愛読書といえるようになってしまいました。

S氏著の一冊に、十七世紀の有名な毒殺魔ブランヴィリエ侯爵夫人の生涯を扱ったものがあります。その中の一節に、夫人がパリの獄に下り、獄中で図った自殺の手段が述べられているのですが、ガラスの破片やピンを喰ってみたり、アヌスに棒を——というようなことが出ていたのです。次々にページをめくっていた私に、そのページから、どうしても眼を離せなくさせてしまいました。

こんなことも書かれていました。

——有名な彼女の「告白録」の中には、とても公開を許せないような極悪非道の体験が山のように登場します。いわく、放火、兄たちとの近親相姦、手や口腔によるオナニズム、妻子ある男との姦通、鶏姦、堕胎等々です。

のちになって、私は鶏姦の意を会得したのですが、その時は、とにかく幻のような官能

が、妖しく身の回りにたちこめてきたのを感じたのでした。

こうして、その時から、私の漁書も、単に奇書を漁るのみにとどまらず、確かに興味の中心が、あのページ、つまりアヌスへのサデイズムとマゾヒズムに移っていったのです。

日常においても、陰の世界の中で、私の妄想はアヌスへの執着から離れなくなっていました。

Eという作家が純文学の雑誌に「尻」という題の小説を発表していました。不能になった少年と三十五、六の中年女との「アヌス」の愛戯を、描いていました。それまで、ただ油ぎった、いやらしい受感しか覚えなかった私に中年の女の、ある種の魅力を教えたのもアヌスへの執着のわざでしょうか。

いつの頃からか、私はアヌスを緑のとびらと呼ぶようになっていました。

それは、その頃に刊行された、ある全集本の一冊に「情欲のサロメ」という本があり、その一節に、サロメの母親である王妃が、ローマよりの使者を身をもってなすくぐり、今も忘れられない文章があったためでしょうか。

王妃は、そのローマよりの若い使者に、あ

なた様の流儀で愛して下さいまし、と言うとその使者は、ではローマで今流行しているやり方で愛して下さいまし、と言うって、

王妃の身体のうちで、夫である王でさえまだふれてはいない一カ所を目標にします。王妃は余りの驚きに声も出せずにいると、使者はあなたの身体にはまだ処女地が残っているのです。神にささげられるべき血をもってあなたの処女地は、今私の手によって本当の女にしてさし上げます、と言い放ちます。王妃は絹のシートで声を立てないようにしながら、使者の手に身をゆだねるのです。今まで味わったことのない不思議な感覚と共に、ある程度の苦痛も伴います。しかし、その苦痛が大きければ大きい程に、王妃は、あの処女のような、おののきに身を打ち慄わせるのです。

私は、「情欲のサロメ」のこの一節を読み終えると、もう、自分の内には、決定的にアヌス憧憬の心理があることを認識しました。

高校に通う私は、その頃、三十になるかならない位の、中年と呼ぶには若すぎる女性を知りました。私の家の別荘の近くでスナックを開いていたその人と、私は、ふざけ半分の気持から、ただならぬ仲になったのです。

(二)

弟のように可愛がられていた時はよかったのですが、ある日、夜遅くまでそのスナックでジャズを聞いていた私に（何か、今、思い出しても茫洋としているのですが）そのマダムが、

——ボクちゃん、私の部屋へおいでよ——といい、私の手を引いていったのです。言われるままに部屋に入った私は、急に横に押されたおされるとマダムがのしかかってきました。少し酔っているようでした。私も夢中でしたが逃げ出しはしませんでした。色白の少し太りぎみでしたが美しい人だったと思います。

私は彼女によって異性を知らされたわけですが、時間が経つにしたがって、私の中に育っていた妄想が頭をもたげてきたのです。といて、口に出して言えるわけではありませんせん。

私はそっと、不言実行に踏切ったのですがあと少しのところ、

——ボクちゃん、そんなことしてはいや——と意外な程強い口調が拒否を示しました。

時間をおいて二、三度試みたのですが、結果は同じでした。抑えつけて無理にでも、とい

う勇氣はなかったのでしょうか。

その日限りで、二度と、そのマダムとは会わないようになってしまったのです。

私の東京での古書漁りも底をついてきた頃です。学校のクラブ活動で剣道をやっていた私は、練習が終ったあと、先輩のロッカーを間違えて開けてしまったところが、その中に雑誌が一冊入っているのに気付きました。人気がないのを幸いに、手にとってみました。そして第一ページを開いた瞬間、あの「黒ミサ異聞」を見付けた時の胸のときめきなど問題にならぬくらいの驚きに、心臓が早鐘のようには鳴っているのを感じました。

このときが、私の初めて奇クに眼をふれた時でした。しかし、人が近づいてくるのを感じて、もとの位置に返しました。ページを開いたのは初めてでしたが、よく古本屋で、表紙だけは見かけていたのです。何故もっと早く、手にしなかったのか、と思いつつ、私は帰り途の足運びももどかしく、古本屋へ飛び込み、オヤジに顔をそむけながら、積んであった奇クを二冊、買って帰ったのでした。

しかし、浣腸の記事は多くても、私の憧憬するあの「緑のとびら」に関する記事が少ないことに、不満と、意外さを感じずにはい

れませんでした。

——もしかしたら、私の「緑のとびら」のイメージは、特殊誌などではとり上げられないほどポピュラーなのか。そういえば、よく古えの川柳にも『月夜にカマを抜く』というような文句が散見できるではないか。むしろ通常の行為でしかないのだろうか——と、半ば失望気味でした。

それにも増して、その頃、私を悩ましていたことは、作家M氏やI氏の作品の中に出てくるホモセクシアルな世界でした。私はもしかしたら、ホモではないのか。私の願望は、その前期的なものではないのか。というように思われ始めていたからです。

しかし、このことは、後になって、私が男性のそれには余り感興作用を受けないということがはっきりしてから、消し飛んでしまったのでした。

そんなわけで、充足するには至らなかったのですが、やはり奇クは私にとって夜の薔薇でした。「緑のとびら」への興味は依然として最も強いものでしたが、その他にも私の漠然とした憧れに合致するものが見つかったものでした。

中康氏、田谷氏等の切腹譚がそれでした。

以来、あの白い表紙の時代のものから新刊に至るまで夢中になって集め、読み進んでいくようになったのですが、中でも印象に残っているのは例えば藤村女史の切腹体験記。皆川女史の「女性切腹についての雑感」（彼女達は、どうしているのだろうか。消息を知りたいものです）飯森氏の切腹小説——という具合で、不思議なくらい女体切腹についての文章ばかりなのです。自分の夜の独りプレイも、そんな夢想が交るようになったのです。（この切腹への傾向は現在も細々ながら息をつないでいるのです）他の大半を占める読物にはさして惹かれず、たまに、今なお活躍中の辻村氏の「クリスティール讃歌」などを、面白く読ませていただく程度でした。

今はなき懐しのグラビアにしても、絹川文代さんの男を椅子代りにしているS的ポーズ、梨花悠紀子さんに代表されるM的ポーズなどよりも、大塚啓子さんの、白禪を鏡に写しながらの血紅切腹のポーズが、今なお強く心に残っているのです。

高校生活も終りに近づいた頃、大学受験の忙しい日々の一刻を割いて私は久しぶりに古本屋へ出かけ、一冊を手にして、川岸で腰を下ろして読み耽っていました。私にとっては

本来の興味からかけ離れた副道とでもいうべき「切腹」の方に興味が移っていた時です。その一冊の中に『川端多奈子さんへ——羽村京子』という二ページ程の短信が載せられていたのです。そしてそこに、私の抱いていた原初のイメージを呼び起こすに十分な内容が示されていることを発見したのです。それ以来、私は羽村京子さんのファンになったのです。

が、忙しい日々。読者欄に羽村さんと呼び出そうと希みながら、遂に出来ずじまいで終ってしまいました。

そうこうしているうちに私も大学生となりました。現在、三年生なのですが、この大学は戦前は貴族学校だったところで、現在でも何かと特別視されるG大学です。

私はそれまでも、出来得るならば、私の趣味を判ってくれるような人と恋がしたいと思いついてきたのですが、一年の夏休みに図書館に通っていた私は、同じ学年の美しい少女Kと親しくなりました。

(三)

その恋は、しばらく続きました。そして私は、二人だけで旅行する相談まで、まとも

るようになったのです。家がうるさく、二人はやっとの思いで旅に出ました。この旅行で愛情を確かめるつもりだったのです。

北陸の山の中の宿に泊りました。

Kは、高校生の時、年上の男性に処女を捧げたことを告白しました。私も、あのマダムとのことを告げました。言い終った時、私の頭に一つのメルヘンのようなイメージがわいてきたのです。——二人共、お互いが初めての異性ではないわけですが、あの第二の処女地を拓くことによって、初めての夜といえることになるのではないかと。

夕食が済み、風呂に入り汗を流した二人はベランダに出ました。外は暗く、遠くに灯が二つ三つ浮かんでいます。

私は、思い切ってKにそのことを話しました。するとKは、私の胸の中で、意外な程はつきりした声で、瞳を大きく開きながらいいました。

——素晴らしいわ。でも、あなたそんなことしていやじゃないこと？ 私は平気よ。あなたに私の素敵なバーズンをあげるわ。思うようにしていいの——

私のその時の胸の高まりは、どんなだったでしょうか。その時まで陰の世界でしか生き

てこなかったものが、こんなに素晴らしい輝きをそえて燃えるなんて……。

私はKのプリーツスカートをそっと下ろします。Kは自分のブラウスをとり去ります。

——君のヌードがみたいよ——

Kはうなずくと、全てのものをとり去ってカーテンの陰に隠れます。私は目の中一杯に溢れ出し、流れ落ちるものを感じました。余りの喜びのためでしょうか。

Kの「緑のとびら」はかたく、容易には侵入者を許しそうではありません。しかしKは私の髪の毛をなでながら

——いいの。いたくても平気よ。だからね、さあ——

と言って、私を導きました。

私達は、私達だけの甘美な初めての儀式をそうして終えたのです。もちろん完全ではなかったけれど……。

それから私達は、何度かそうしたチャンスをもちました。しかしKはあくまで、あの旅行でのことは「儀式」としか考えられなかったようでした。私の要求に答えてくれたことは、あの旅行以来、一度もなかったのです。

それが原因といえるでしょうが、私達の関係は急速に冷却してゆきました。

そしてお互いが忘れることにしたのです、一場の夢として……。別れの日、Kは私に、一冊の本をプレゼントしてくれました。

あなたに、あの趣味から抜け出させてい

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早目に、手に入れた方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、切手代用、振替(大阪四二

う方が残酷ね。だから、これをプレゼントするわ。あなたは、御自分の趣味をよく理解してくれる人を捜すことね——

その一冊の本が今、私の机の上に置かれて

七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法ですから、必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に八本号にて前金切Vの判を捺印致しますから継続お申込み願います。継続のお申込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

いる「五つの恋の物語」なのです。

私はそれから以後、「緑のとびら」を「レダ」と呼ぶことにしました。それは、幸福の極みなる闇の中を歩く私の、最も深部に位置する永遠の憧憬なのです。悲願達成は至難なことかも知れません。しかし、最近の女性週刊誌や雑誌などの告白ものを読むと、私の憧憬する世界が、決して遠くに位置するものとは思われないのです。

あるBGが上役と関係ができ、初めての夜に、第一の処女地と第二の処女地を同時に奪われた話や、夫も愛してはいるが年下の恋人も愛しているという女性が、年下の男性には「レダ」を与えたという話。——私は、胸の血を騒がせないではいられません。

物語の中のレダの奏でた美しい響き。もしやレダの刺されて流した血は薔薇の花の如くに美しいものかも知れません。いや、きっとそうだと思います。

私は、空虚な日々の中で夢想に耽り、私に「レダ」を与えてくれる女性の出現を念じているのです。そして、その日が、必ずくるのではないかと思っております。

花を飾るは 真っ赤な布に

薔薇の香りの 炎をともし (了)

懸賞入選作品

△三回分割発表の3▽



(8)

その夜以来、私と富江は、閉館後の一、二時間をA山公園で過ごすのが何となく習慣になった。何時の間にか、私たち専用のベンチが出来た。

「こんな処でなく、もっとゆっくりお話したいわ」

富江がそう言い出したのは、秋も終りに近づき、風の冷たさが身に沁みる頃だった。こ

白

い

牡

(しろいおす)

麒麟田 欧二

の季節になると、A山公園のベンチも、夜が更けてからはさすがに人影もまばらだった。

「といったところで、おれたちは年中無休。

代りが居ない仕事だから」

「どこかへ行きたいなあ」

富江は甘えるように、私の肩に頭を乗せて来た。かすかに埃臭い、油気のない髪の毛が私の頬をなぶった。

「よかったら、おれんとこへ来ないか」

「だって」富江は、何となく身を固くした。

「爺さんも婆さんも、とっくに寝ちまってるから、大丈夫さ」

私は逡巡^{ためら}う富江を連れて、三疊の自室へ帰った。鼻をつく男の臭いが充満した狭い畳の上いっぱい、その臭気のエキスのような万年床が敷きつめてあるのを見た瞬間、彼女はぱっと赧くなり、視線を外らした。

「はいれよ」

私は蒲団の上に胡坐をかき、たじろぐ富江をうながした。彼女は雲の上を歩くような恰

好で私に近づくと、ぎごちない仕草で横坐りに坐った。富江は表情を固くしたまま、私の視界にある丸っこい両膝をスカート裾に押し込もうと頻りに努力したが、肉づきのいい臀部を包んではちぎれたスカートは、彼女の膝まで隠すゆとりはなかった。この富江の肉体の、すべての丸味を集結したような豊かな臀部が、しかも生々しい歪みを見せて、蒲団から半分ずり落ちているのを目にした時、突然、私は欲情した。自分でも意外なほど、それは狂暴な衝動だった。

物も言わず富江を引き寄せると、胡坐をかいた上に俯向けに転がした。彼女の上半身は畳の上を泳ぐ恰好になり、私の眼下に、白いズロースに包まれた丸々とした肉塊がころりと現われた。

「何するの。よして、よして」

富江は、亀の子のように両手両足をばたばたさせながら、それでも階下へ気兼ねして、低く叫んだ。

私は更に、下着を引き下げようとしたが、ソーセージのように充実した肉にびっちり食い込んだ薄いナイロンのパンティは、それ自体が皮膚に同化してしまったようだった。それは彼女の肉体から離れる代りに、恰で皮膚

の一枚を剥がすように、音を立てて裂けた。「呀——」富江が悲鳴をあげた。同時に暴れ方は一層烈しくなった。裂けた布の残片が彼女の両脚の動きにつれてぶるんぶるんと躍動するふたつの丸い肉塊の上で踊った。どこもかしこも短く丸い富江の肉体の中でも、それは完璧に丸かった。

しかも浅黒い手足の皮膚からは想像も出来ない肌理の細かさと光沢を持ち、電灯の光をはじき返すように生々と輝いていた。

私は、その丸い頂に、唇を押しつけた。

「……………」

——と、不意に彼女の両脚の動きが止まった。呼吸をひそめて、うかがうように、彼女のからだ全体が、しいんとした。混乱の中で私の行動が予期したものと違うことに彼女は気がついたのだろう。一瞬静止したふたつの小山。淡紅色の斑点をちりばめた富江の臀部は私の唾液を附着させ、裸電球の真下できらきら照り映えていた。

「何て可愛いおしりだ。お人形みたいだ」

この同じ台詞を、私は過去幾千回繰返したことだろう。木島進一と私のあの夜の儀式において、この呪文こそ、それだけを口移しに教え込まれたおうむのように、絶え間なく囁

きかけることによって、彼のリビドーを導く不可欠なプロローグだったのだ。

私の意志や生理とは全く無関係に、この台詞が口をついて出た瞬間から、富江という個体は、私の前から消えた。いま、私の両掌が優しく触れているのは、あのナルキソスの果実だ。

私の中で、眠る間も復習されていた懐かしい愛撫の手順が、楽譜を演奏するように、忠実に再現されて行く。私の唇と掌の動きにつれて、果実の運動は次第に振幅を大きくし、その合間に、彼女の唇からさざ波のような喘ぎと呻きが断続した。

——と、その時、階段の下で低い物音がした。瞬間、私の視界に、黄金色の光に包まれて存在した果実が消えた。反射的に、私の上から跳ね起きた富江の、真赧に上気した丸い顔が、私を現実呼び戻した。裂けた下着をスカートで隠して立ち上った彼女は、鼻の先に汗の粒を溜め、肩で呼吸をしていた。

「怒った？」

自らのビリドーが、肩すかしを喰って急速に昂揚力を失ってゆくを感じながら、私はいった。

「ごめんよ。下着は買って返すからね」

富江は答えなかった。棒のようにつつ立っ
たまま、時々、スカートの背後に手をやるの
は、唾液で万遍なく濡れた臀が気になるのだ
ろう。

「帰るわ」

しばらくして、富江が口を開いた。殆ど聞
きとれないほどの声だった。

「送るよ」私が大儀そうに立ち上りかけるの
へ、「大丈夫」彼女は不機嫌とも思える声で
いった。「静かに帰るから」そして、スカ
ートの下の球体を、そっと上から押えると「さ
よなら」笑顔とも思えば思われる表情を残し
て、彼女は私に背を向けた。

それから数日間、富江は敢えて私を避ける
素振で、勤めが終わると、一人で先に帰って
行った。私はかすかな後悔を感じた。

すべてに無経験な十七歳の少女を相手に、
どうしてあんな形で、不意に欲情したのか、
自分でも不思議だった。あの裸電球の下で、
富江の肉体が、突如木島進一に変身すると同
時に、私自身もまた、彼によって調教された
狂暴で従順な奉仕者に変身していたのだ。そ
れは私の意志や理性とは別なところで起こっ
たのである。

彼は、如何なる時も、私の中に君臨し、私

を思いのままに支配しているように思えた。

二週間ほど経ったある日、しかし富江の方
から私に話しかけて来た。

「今度の休み、何処かへ行きたいなあ」

昨日までの白々しい表情は微塵も見えない
ばかりか彼女の声には浮き浮きとした調子さ
えあった。私は呆気にとられて訊き返した。

「今度の休み？」

「あら、知らなかったの。改装するんです
て。十日ぐらい休めるって言ってたわ」

「へえ。初耳だね」

「ね、一緒に行きましょうよ。一晚ぐらいな
ら泊っても……」

富江には、異常な強引さがあった。気がつ
くと、丸い顔の中の両つの瞳が、しつとりと
潤んで、私を見上げていた。あの狂態の一夜
以前は、見たことのない眼だった。私には、
彼女の気持がよく理解出来なかったが、何と
なく約束してしまった。

列車が東京駅を出た時、富江は晴れ晴れと
窓外を見ながら、

「新婚旅行みたい」

と、呟いた。

彼女が、今日のために買ったという既製品
のスーツは、新しいというだけを取り柄の、

彼女の年齢にもサイズにも合わないものだっ
た。その地味な衣装と念入りな化粧のアンバ
ランスも、自分を少女に見られないための、
彼女らしい配慮から生まれたものだろう。

私は、運送会社時代に一度慰安旅行で来た
ことのある網代の二流旅館に彼女を連れて行
った。すでにシーズンを過ぎた十二月初めの
温泉町は、妙にうらさびれた感じを与えたが
富江の眼には凡てが珍しく新鮮で、一つ一つ
が彼女を感激させ、夢心地にした。

この初めての経験が、宿に着いた時から彼
女をすでに酔わせていた。全く予期しない事
態が起こったのも、多分そのせいだろう。

夕食の膳が出された時、私から無理に奪っ
て飲んだ二杯か三杯の酒が、この十七歳の少
女の、単純な脳の組織を、見事に狂わせてし
まったのだ。猿に酒を飲ませるより結果は悪
かった。

「ちょっと温まって来る。君は止しといった方
がいい、酔ってるから」

富江の狂態に辟易した私が、そう言いかけ
ると、

「何よ」

だしぬけに大声をあげて、挑むように私へ
眼を据えた。

「自分だけ行くことはないじゃないか。あなたの好きなもの見せたげるからさあ」

彼女の奇妙な言葉が私をどきりとさせた。

「よせ。大声を出すな」

「あら、照れてるの。あんたほんとは……」

そういったかと思うと富江は、自分の臀を丹前の上から、ぽんぽんと叩いた。「見たいんじゃないか、あたいのこれが」

「ばか。いい加減にしろ」

「ばかさ。どうせ、あたしはばかですよ。だから、あんたに臀なんか舐めさせるのさ」

持て余した私は、足許も定まらない彼女を家族風呂の脱衣所に押し込んだ。すると富江は私の眼の前で、皮でも引き剥ぐように衣類を脱ぎ始めた。丹前や浴衣や下着類が散乱した板の間の中央に、ちんまりとした丸い裸体が、左右に揺れながら立ったのを見て、私は廊下へ出た。

「そんなにはいりたければ一人ではいれ」

言い残して外から戸を閉め、足早に引返す私の背後から、大声で喚く富江の声が、わあんわあんと響いて来た。

当然私は不愉快な一夜を余儀なくされた。生まれて初めて酒に酔った彼女が風呂からあがるや、赤ん坊のように正体もなく寝入った

あと、別の夜具に私は眠った。

「ゆうべは、ごめんなさい」

朝食を前にして顔も上げられない富江が咽喉の奥で微かにそういった時、

(この女は、おれを愛している)

と、私は思った。

私たちは、もう一晚滞在することにした。

昨日のやり直しのような意味もあった。富江は、昨夜とは打って変わったしおらしさで、従順な犬のように優しく素直だった。

私は尻込みする富江を誘って、ゆったりと昼の風呂に浸った。お互の裸を身近に見るのは、これが初めてだった。羞恥に身を固くしがちな彼女を、私はやさしく抱いてやった。

私の腕の中で、彼女は全身を赧くし、どこもかしこも丸い四肢を小刻みに震わせながら甘えて来た。唇を合わせると、はじめは内気にしかし次第に大胆に応える彼女の、接吻に関する限り、この十七歳の少女は、立派に女になっていた。私自身、こんなやさしい気分になれることが不思議だった。彼女は安らかに陶醉し、(うれしい)と、囁いた。抱擁と接吻を繰返しただけで、私たちは家族風呂を出た。彼女の上気した顔が、これほど可憐に見えたことはなかった。

その夜の富江は、私が勧めても、金輪際、盃に手を出さなかった。彼女は新妻のように神妙に、静かな羞恥を湛えて、私が飲むのを終始見つめながら、何かを待っている風だった。

一時間ほどして、私が、帳場に電話してばつぽつ寝ようか、と言った時、富江はからだ全体で「はい」と答えると、弾むように立ち上った。彼女は、この時を待っていたのだ。

いそいそと、床の間のちがい棚にある電話機に歩みよる富江の後姿を、私はいとしさを感じながら見た。身を固くして坐っていたため、浴衣の裾に無数の横皺が寄って、その下から丸い両脚がによっきり出ていた。その両脚と腰を締めつけた赤いしごきの間の、大きな円が左右に揺れていた。その部分だけは、浴衣の下にある肉体をそのままかたちどって小皺一つなく、一枚の皮膚のように張りつめていた。私の醉眼に、だから、富江のそこだけは、はつきりと裸だった。

突然、私の中で、変化が起こった。それまでの感傷じみたいとしさの情とは全く異質の狂暴な、抗しがたい欲情が、私をめくるめかせた。巨大なすもものような物体が、白光を放って視界を埋めた。私は、理性を失った。

富江が受話器に手をかけるより早く、私の両腕が背後から彼女を抱いた。一度、私の部屋でデッサンした同じ構図が、極く自然に、手馴れた順序で、二人のポーズを固定した。

ただ、この前と違うのは、富江が理由もなく暴れなかったことだ。彼女は、この構図のむしろ積極的な素材として制作に参加し、それが呼び起こす効果を、予め計算して待つ余裕があった。

私の唇の下で、当然この前とは比較にならない速度で、彼女のリビドーが奔騰した。

階下に眠りの浅い老夫婦が居る三畳の間で、しかも初めて経験したたった一晚の知識は、現在の状況のもとで、自らの反応を抑制することの無意味を、彼女に教えた。客もまばらなこの温泉宿の一室で、彼女は自由に喘ぎ、呻き、反響した。

「ああ、どうしたらいいの。教えて。あたしは、どうしたらいいの」

富江の反応があらわになって来た時、私はゆっくりと宙を泳いでいる彼女の片手を導いた。

私の唇は丸みを求めて乱れとんだ。嵐のように身をうねらせ、彼女は悲鳴をあげた。

「いや、穢い。いや、いや、いや」

その時私は彼女の耳に口を寄せて囁いた。進一との日常で、それは極く当り前の手順だった。それは、この構図の完全な仕上げを意味している。

「いやよ、いやよ」

「簡単なことだよ。急がないと……」

「いやよ、いやよ」

彼女は多分、自分の言っていることの意味を、はつきり理解していたかどうか、機械のように同じ言葉を繰り返した。

しかし、私のリビドーはすでに、これ以上の遅延を許さなかった。

私は結局、自らの手で構図の完成を急がねばならなかった。それは、楽な作業とは言えなかった。富江の咽喉で、奇妙な音がした。

全身の力を失った私から、飛び跳ねるように離れた富江は、「きちがい」と一言叫ぶなり、走り出て行った。

それっきり富江は姿を現わさなかった。私は旅館の中を探し歩き、帳場で訊いたが判らず、仕方なく部屋へ帰って来ると、その間に彼女の衣服と持ち物だけが失くなっていった。

私は、その夜独りで泊り、翌朝、東京へ帰った。

改装が終わって映画館は再開されたが、富江は再び姿を見せなかった。

(9)

改装してから一年も経たないうちに映画館は閉鎖になった。朽ちかかった建て物を買い取った三国人は、たちまち見違えるような遊戯場に改装した。××議員、〇〇社長という肩書をひけらかした花輪が華やかに並んで店は開店したが、同時に、私は失職した。

それからの私は、さまざまの職を転々とした。といっても、戦後最初の、しかも未曾有といわれた就職難の時期に、満足な仕事に転がっているわけはなかった。短い処は一カ月長い処で半年もすると、会社が潰れたり、お払い箱になったりで、食い繋ぐのが精一杯の不安定な生活が続いた。

そんな生活の中にあっても、進一の幻影は私から去らなかつた。疲れきった私を、夜は眠らせようとしなかった。

富江とのこと以来、私は、女とは全く無縁の人間となった。「きちがい」——あらん限りの憎悪を、言葉ごと吐き出した富江の叫び声が、私の耳に何時までも残った。たしかに私は「きちがい」だったかもしれない。あの

再度にわたる私の発作的欲望は、しかし彼女に対する感情とは別のところから突如として湧き出たものであることを、富江に理解してもらおうのは到底無理なことだろう。私が欲情するとき、彼女は既に居なかったのだ。眼に見えない転轍手が私の欲情の軌道を、あのたった一つの終着駅に向かって切替えたのだ。その終着駅には、富江でも他の女でもない、黄金色に輝く果実が、視野一ぱいに私を待ち受けていた。私のリビドーを奔騰させ、彼女に「きちがい」と叫ばしめた狂暴な欲情は、その果実の声だ。黄金色の果実——それは木島進一そのものだ。

進一は、黄金色に輝く果実に抽象化されて私の奥深く棲みついていくのだ。進一が傍に居た時、私は慥かに、彼の奴隷だったかもしれない。しかも彼が去った現在なお、私はそれ以上に、彼に支配されている自分を否定出来ないのだ。彼の中に、ニンフェの桐子が棲みついたように、私の中に彼が棲みつき、意思ばかりか、時には感情まで、彼の思いのままに捻じ伏せられてしまう。私はこれから先女を愛することは決してないだろう。よしんば私が愛そうとしたところで、私の中の彼があの凶暴な手段で破壊してしまうにちがいない。

い。

涯のない欲望の砂漠に置き去られた私が、誘われるままに、すでに若くない男娼のアパートへ行ったのも、この頃だった。

相手が男娼であることは、屋台の飲み屋の暗い光の下で出会った時から知っていた。縞柄の粋なお召を着こなし、髪をアップに結いあげた後姿だけを見たら、彼を男と看破することは不可能にちがいない。だが、塗り固めた粘土細工のような顔を支えている細いくびの中央に突起した咽喉仏が、奇妙なふくみ声で物を言うたびに気味わるく上下するのを見ては、彼がすでに老醜を曝した男であることを疑うものはなからう。

畳の上ですでに冷えてしまった紅茶茶碗をはさんで、彼は絶えず私に笑いかけていた。部屋の半分以上を占めた、それだけがひどく豪勢なダブルベッドの真赤な毛布と、煤けた天井や壁にしみついた鯨えたような不快なおいが、私の神経を刺戟した。

長襦袢の裾から覗いた彼の膝が畳を軽やかに滑って、瘠せた冷たい手が、私の手を握った。私の背筋を、一瞬、悪寒が走った。

「ねえ、お脱ぎになって」

私の手を上から揺さぶるようにしながら、

彼の手は極く自然に私の腿に伸びていた。私は、彼のなすがままに任せていたが、意外なことに私は忽ち反応を示した。

「お脱ぎなさいな」

彼の声音が突然変って、甘ったるい香水の香りが私の鼻を擦った。

胡坐をかいた私の膝に柔らかく上半身をもたせかけた彼の指先を感じながら、私は彼の短い首をみつめていた。

しばらくして、私は思わず呻き声を洩らした。急がねばならない。

私は両腕を伸ばし、眼の前に不自然に捻じれている彼の下半身から、荒々しく長襦袢の裾をたくし上げた。貧弱な男の下半身が露出し、小さきみに畳の上をくねった。

瞬間、恐怖に似た衝撃が私の呼吸を詰まらせ、私の手は反射的に、彼の軀を突き放していた。

薄暗い裸電球の下に、想像を絶した醜惡な現実を、私は見なければならなかった。それは、私が日夜思い描き、求め続けていたものとは、あまりにもかけ離れていた。あの美しい曲線を描いた黄金の果実と同じ名で呼ばれることが信じられない黝んだ腐肉の塊が、私を身震いさせた。

「どうしたの」

異様に潤んだ眼が、訴えるように私を見上げていた。厚化粧がまだらに剥けて、色艶のない老化した皮膚をのぞかせた彼の顔は、泡を吹いたように唾液が唇を濡らし、それがさらに顎の方まで流れていた。

「帰る」

私は、紙幣を畳の上に置いて立ち上った。

「どうしたの。ねえ、待って」

あわてて彼が起き上った時には、私はすでに部屋を飛び出していた。

私が男娼を相手にしたのは、この時が最初で最後だった。結局、私は、木島進一以外の男にも女にも失望した。私が求めるものは、たった一つであることを思い知らされた。

あの黄金色に輝く果実の幻影は、私が死ぬまで離れることはあるまい。そして死ぬまでそれを求め続けなければならないだろう。

それ以来、私は自ら孤独をもとめ、その孤独の中で、彼への陰湿な、しかし重油が燃えるような情熱を、燃焼させていた。昼も夜もその幻影に蝕まれてゆく自分を意識しながらどうする術もなかった。

私は、ひとりぼっちの、不潔なオナニストになっていた。

中学校時代から逞しかった筋肉も、一度衰え始めるとたわいなかった。栄養失調と、疲れと、幻影との葛藤に、三十を出たばかりというのに、私は極端な力の衰弱を自覚した。少年でも容易に持ち運び出来そうな荷物に膏汗を流し、心臓はその負担に堪えかねて喘いだ。私は、凡てに自信を失った。

黝い隈に縁だられて、死魚のように光を失った眼を鏡の中に見た時、私は一瞬、自分の顔と思えなかった。

（おれは、遠からず死ぬだろう）

と、思った。

もう二度と彼に逢うこともあるまい。私はただ自分の中に棲みついた彼と俱に、身をすり減らしつつ一生を終わるだろう。

だが、奇蹟は起こった。

私は三度、彼にめぐり逢ったのだ。

去年の暮、空ッ風が針のような夜だった。

夜行列車で上信越方面へ出かけるスキー客でゴった返す上野駅の構内の喧騒とは対照的に、往来もまばらな薄暗い一角、地下鉄の入口で、私は、あの「私が書いた詩」という文字を見たのだ。

それは、幻ではなかった。よれよれのズボ

ンを穿いた内股の素足が、まず私の眼にはいった。地面から吹き上げる切れるような夜風の中にその素足だけが蠟のように白かった。しばらくの間、私は、暗がりについている相手の顔を見る勇気がなかった。と、いうより私の全身が粘土細工のように自由を失っていたのだ。自分の心臓の音が、何か別の処から聞こえる太鼓のリズムのように耳の内側で鳴っていた。

「どうも」

最初の声は、彼の方からかけて来た。その短い挨拶に、私は救われた。

「どうして、いたんだ」

懐しさを表現しようとした私の言葉は、意志とは別に、とげとげしい詰問の調子になっていた。

彼は無言で、その眼だけが笑ったようだ。

「また、やってるんだな」

それしか生きる術のない彼が、再び古巣へ舞い戻って来たとしても、不思議はないかも知れない。むしろ、当然だろう。こんな単純な事実、以前から気がついていたら、彼にももっと早くめぐり逢う機会があったのではないか、と、今更私は考えたりした。

「とにかく……」

私は、有無を言わさぬ強引さで、その場から彼を、私の部屋へ連れ帰った。

この三年間の、彼の生活を聞き出そうと、私は殆ど一人で喋ったが、彼は微かに笑うだけで、自分のことについては多くを話したがない容子だった。ただ、その間、彼が東京に居なかったこと、「大病をして」長いこと病院生活をしていたことなどは、どうやら判った。どんな病気をしたのか、むろん彼は言わなかったが、それがありふれた種類のものではないことは、何となく想像できた。それと、いうのも、僅かな間に、彼があまりにも変わっていたからだ。豊かだった両頬の肉は削いだように落ち、紅く濡れていた唇は、土色に乾いていた。皮膚だけは寧ろ白さを増していたが、それは無神経に塗料をぬりたくった壁みたいに艶を失って、たった今、病気をしているように見えた。

あの晩、突然姿を消した理由についても、「君に迷惑かけたくなかったから」と、既製品のような返事をしただけだった。

ともかく彼は、今夜はじめて上野に立ったのだという。むろん、私は信じなかった。

「昨日までのことは、ご想像にまかせます。今夜また、あなたに逢ったというのも因縁で

すね」

彼は、私の勧める焼酎をうまそうに飲みながら、次第に饒舌になった。

「ぼくは、すんでに死ぬところだったんですよ。あなたは先刻、ぼくたちがまた逢えたのは奇蹟だと言いましたが、このぼくが生きていたことの方が、もっと奇蹟なんですよ」

「ともあれ、生きていてよかった」

私が無気なく言った言葉に、彼は「いや」と首を振った。

「ほんとうは、死ぬべきだったんです。生きていることは、間違いなんだ」

彼の語調は、急に熱っぽくなった。

「ぼくは死ぬべきだった。それも、もっと早くにね。尠くとも、この間の大病は、そのチャンスだったんだ。——祖父の予言は正しかった」

「それは、どういうことだね」

「生きるということには、誰にも、それなりの意味があるだろう。同じように、ぼくの人生は、もっと早く死んでことに意味があったんだよ。それ以上、生きることとは、ぼくにとって、生まれてこなかったより、もっと悪いことなんだ」

「奇妙な論理だな」

「ナルキソスは、少年の姿のまま死んだから永久に美しいんだ。ランボオだって、現実には十九歳で死んだから、天才なんだ。ぼくはもう、遅くなってしまう。生きすぎた」

彼の口数が多いのに、私は戸惑った。彼が三年前と何よりも変わったのは、饒舌になったことだ。

あの情熱に濡れた瞳、少年のように直ぐ上気する頬、貪婪に夢を吸い尽そうとする紅い唇——それらは、壁のような仮面の下に死に絶えてしまったのだろうか。現在、私の目の前に居るのは、口の両端に分別臭い小皺を刻んで喋っている顔色の悪い小男だけだ。今にして思えば、あの暗がりで、何の躊躇もなくこの男を木島進一と確信したことが、そもそもしも不思議に思えて来る。明るいところで、見れば見るほど、彼はまさに他人なのだ。私の中にある彼と、現在の彼を繋ぎ合わせる手ばかりは三年間の断層に埋没されてしまった。にも拘らず、私は待った。強情なほど辛抱強く、平静を装った。しかし、酔いが全身を浸す頃から、私の身体の芯にめらめらと燃え盛る青い炎は、自分の意志ではもうどうにもならなくなっていた。嘗ては、彼の方から凡ゆる手段を用いて私の中に掻き立てようとし

た同じ炎が、いま、無機物のような彼を前にして、私の身内を焦がしているのだ。それはオリンピックの聖火のように、彼と別れていた三年間、夜も昼も、私の奥深く燃え続け、私のからだを酸化させた。

私は、彼の血が、あの黄金の波調を思い出すのを待った。だが、私の波調は、何時まで経っても、冷たい壁にぶつかって、徒らにはね返って来るだけだった。

彼は、まだ喋っていた。焼酎に濡れた唇がひっきりなしに、ぱくぱく動いている。それだけが、何か気味の悪い生き物のようだ。それを見ているうち、私は複雑に混乱した。

「おい」

私は、殆ど無意識に大声を出すと、彼の動いている唇を掌で塞ぎ、次いで彼を抱く恰好になっていた。

「ああ」と、彼は喘いだ。そうして、苦しうに私の唇から身を退けると、

「ぼくは、死ぬべきだったんだ。生きすぎたんだ」

と、繰返した。それは呪文のように抑揚のない、しかし臓腑から絞り出す苦痛を伴った声だった。

それから、突然、

「灯火を消して」

と、鋭く叫んだ。

私たちは、嘗て一度も、電燈を消したことにはなかった。そればかりか、この照明こそ、彼のリビドーを昂めるのに最も重要な舞台効果果を果していたのだ。が、私は、そうした不審を感じるより先に、何の逡巡もなくスイッチを切った。

暗闇の中で、私たちは、三年前のあの懐しい構図を再現した。いや、再現したのは、単なる形態だけだった。終始、私の耳元にあったのは、あの熱い吐息でも、ギリシャの森を彷徨うナルキソスの甘い囁きでもなく、噤言のように繰返される「ぼくは死ぬべきだった……」というルフランだけであった。私も彼も、ついにあの黄金の雲に包まれることはなかった。

男二人の共同生活が、再び始まった。

尠くとも形の上だけでは、過去のそれと変わらなかったが、しかし私たちの中に、あのめくるめくような情熱の波は、二度と還って来なかった。彼の中で、過去の彼は完全に冷え切ってしまった。はじめのうち、私は、何とかしてそれを蘇らせ、掻き立てようと努力した。が、それが全く徒勞と覚ったとき、

私は単なるペダラスティに過ぎなくなった。

崇高な儀式にも似た熱情をもって私たちが描いた構図も、いまは白々しい惰性のポーズとなり、一瞬の欲情が去ったあとは、嘔吐を催すような醜怪さだけが残った。壁のような内面の反応を一切示さない職業的男色者の仮面を崩そうとはしない彼に、行き当りばったりの欲情を満たすだけの、私もまた不潔な男色者に交りなくなった。

(10)

「君は、結婚すべきだよ」

ある朝、彼が言った。

「なぜ、ぼくが居なかった間に結婚しなかったんだい。ぼくは実のところ……」

「よせ」

私は、危うく彼の横面を殴りかけた。いまさら涼しい貌でこんなことを言い出した彼の独りよがりの態度が、私を逆上させた。

しかもこの瞬間、私の脳裡をよぎったのは病院のベッドから吐き出すように一言だけ、「不潔よ」と言ったS子の青い貌と、熱海の一晩、「きちがい」と叫んで私を突き放した富江の、憎悪に満ちた瞳だった。

「お前は、何を言いたいんだ」

「何をつて、別に。ただ、その方が……」

「ご心配いただいてありがたいが、ありがたすぎて張り倒されないようにしろよ。お前は……お前は、いったい……」

「ぼくは出ていくよ」

彼の声はますます冷たく、何の感情もあらわさなかった。

「ぼくは、もう死んだんだ。いまの生活に、何の意味もないことは、君にだって判ってるだろう」

「理屈を言うな。出て行って、また生き恥を曝すつもりか」

「それなら現在とは違うっていうのかい。ぼくは、もう充分、生き恥を曝しているさ」

彼の小さな顔に浮かんだ虚ろな笑いが、私の臓腑をずたずたにした。私は黙った。これ以上、私がかしようにとすれば、彼を殺すよりほかになかったろう。

私にとっては鉛を流し込むような朝食が済むと、彼は黙って立ち上った。

「ぼくは死んだ。それでいいんだ。君は結婚してくれ」

「いま、出て行くのか」

「うん。お世話になったね」

「だめだ。俺と暮らそう」

私は、われにもなくうろたえた。自分の声に浅ましい哀願の響きがあるのを、私は他人事のように感じていた。

「お前は、此处に居るんだ」

「それが、何になるの」

「理由なんか必要ない。俺たちには、それが一番いいんだ」

そういう私にとって、現在の彼はそもそも何だろう。彼にとって私が、もはや何のもでもない以上に、彼が私にとって意味があるともいえるのだろうか。私に彼を引き止める理由があるとすれば、それは、彼によって開発された私の欲情に適合する唯一の情性を、当然のことながら彼が持っている、ということだけにほかならない。色褪せた情性的肉体だけが、彼を放すまいとしているのを、彼はとくに知っている。

「やっぱり、ぼくは行くよ」

「どうしてもか。思い直さないのか」

彼は無言で首を振った。

「よし」私は矢庭に畳を蹴り、彼を引きずり倒した。チャブ台の上の食器が、がちがちと音を立てて転がり、割れた。

「お前の思い通りにはさせないぞ」

手近にあった寝巻の腰紐を掴むと、私は、

彼の細い手首を捻じ上げて、ぎりぎりと縛った。「あっ、あっ」と声をあげながらも、彼は殆ど、抵抗しなかった。さらに私は、あり合わせの荷紐や細引を動員して、これだけは今でも少年のように柔軟で軽い彼のからだを胸から足首にかけてめっちゃめっちゃに縛り上げ畳の上に転がした。長々と、一本の丸太みたいに伸びきって、彼は喘いでいた。それを見下ろしていると、発破はつぱのような狂暴な衝動と胸を締めつけるような得体の知れない甘い痺れが、同時に、私の中に起こった。

物も言わず、私は彼を足蹴にした。彼は、「あっ」と叫んで一回転した。二度三度、そのたびに彼の身体は、私の足の下で、ごろりと反転した。狭い三畳の汚れた壁に、彼の顔の半面が押しつけられ、醜く歪んでいるのを見て、

「いい恰好だ。おとなしく留守を頼んだぜ」

そういつて、私は彼に背を向けると、着換えを始めた。

ふと、背後で聞こえていた喘ぎがやんだ。その一瞬の、奇妙な静けさの中から、

「川瀬さん」

突然、優しい声がした。私は耳を疑った。それは何か、遠い処から呼んでいるようだった。

た。私の記憶の中に凍結したまま二度と聞くことのなかった、それは過去の声だった。あの黄金色の雲の中で、かつて音楽のように耳を楽しませた声を、私はいま、突如として聞いたのだ。

それが、私の聞き違いや錯覚でなかった証拠には、同じ声がもう一度、

「川瀬さん」

と、呼んだ。

私は、夢を見るような気持で振り返った。

「進……」

私は見た。三年もの間、寝ても醒めても思い描き、彼と再会してからずっと待ち続けたあの過去のまぼろし——潤んだ眼、濡れた唇それがいま忽然として其処にあった。

「……………」

棒のように不自由な全身を悶えさせて、彼の上気した顔が、必死に私を見上げていた。縄目の間から、はっきりと変化を見せているのを感じ取った時私の血は一度に奔騰した。夢中で彼の名を呼びながら、縛った上半身を抱え起こし、喰いつくように唇を吸った。

再び私の処へ来て一カ月余り、はじめて彼の唇が、しかも激しく私に応えて来た。

私と彼の共同生活の、それが一つの転機と

なった。私たちは、あのどうにもならない情性の泥沼から這い上る新しい道を、偶然にも発見した。それは、二人の生活の革命だ。全く奇妙な話だが、一本の縄が、完全に離れかけた二つの肉体と心を、再び繋ぎとめた。

一本の縄による創意と工夫が、私たち二人の愉しい日課となり、毎日の生活に新鮮さを甦らせた。私にとっても、彼にとっても、昔のように夜は二人のものとなった。

「灯りを消して」

いざとなるとそういう彼の癖だけは、三年前には戻らなかったが、闇の中で、彼の柔軟な四肢は、あの黄金色の光に包まれた時と同じように燃え、私の愛撫に応えるのだ。

一年近く、同じような生活が続いた。というより、こうした小手先の生活革命がもちこたえ得る偽装の情熱には限界があった。もともと、ばらばらになった二人の肉体と情熱が一本の縄という無機物を媒介に、昔に還ったと感じたのも、所詮幻影にほかならなかったことをやがて思い知らされた。私が狂喜した新しい発見も、二人の生活を一年だけ伸ばしたにすぎなかったということだ。

創意も工夫も底をつき、毎日が色褪せた繰

り返しにすぎなくなった頃から、まず彼の中に少しずつ変化が現われた。私の腕の中で、彼の反応は次第に熱を失い、微弱になっていった。嘗て、縄が触れただけで彼の官能を烈しく呼び起こした同じ個所が、現在は私が捨て鉢に食い込ませる縄目にも、麻痺したように無表情になった。肉体の無表情とともに、彼の貌にも、あの仮面がよみがえった。

このピンチを切り抜けるために、私はあらゆる努力をした。新鮮なアイデアを求めて、四六時中、私の頭はふくれたままになった。働いていても、歩いていても、私の頭を満たしているのは、様々の姿態に縛り上げた彼の映像だった。彼の身体に、まだ縄の触れない処女地を見つけ、新しい官能を引き出すことに精魂を傾けたが、最早、どんな縛り方をしてみても、それが過去に幾度か試みたことのある陳腐な繰り返しにすぎないことを絶望とともに知らされた。

しばらく耳にしなかった「ぼくは死ぬべきだった」という言葉が、再びルフランとなったのは、この頃からである。

私も、今となっては、私たちの関係が、すでに終わった”ことを感じた。もともと、どうにもなくなっていた二人の関係を、多

寡が一本の縄によって繋ぎ止めようとしたこと自体、滑稽だった。道化じみた見せかけの情熱が描いた虹が、あっけなく消え去ったあとには、索漠とした汚らしい男が二人、別々に残っただけだった。私にとっても、彼にとっても、互にもう何ものでもなかった。私の眼に、彼は、色艶のひどく悪い、小さな顔をした、見知らぬ三十男でしかなかった。

たった今、彼が出て行くというのなら、自由にさせてやろう。彼がまた、薄汚い中年の男娼に戻るのなら、それもよかろう。私は決して、これ以上、引き止めはしないだろう。しかし、彼はあえて私から去ろうともしないで、白けた同居生活が続いた。そして、夜になれば、砂を噛むような、あの惰性の遊戯が、何の感動もなく空しく繰り返された。

昨夜も、私に灯火を消させたあと、彼は、それが昔からの習慣である裸になって、私の寢床に滑り込んで来た。セメントみたいに無関心な互の身体が、しかし、殆ど無意識の習性のように闇を探りつつ一つの構図に向かつて、四肢を反転させ、移動を開始するのだ。それは、宗教的儀式のように、決まりきった手順で、沈黙と静寂の中で進められて行く。やがて、私も彼も、重い眠りにおちた。

(11)

朝、眼を醒ました時、私はふと、奇妙なことに気がついた。彼がまだ睡っていたことである。この一年来、これは初めての経験だった。別れていた間に彼は、いろいろ変ったが私に決して寝顔を見せなくなったことも、その一つだ。はじめに同棲した頃の彼は、少年のように天真爛漫だった。私が目覚めた時、彼は何時でも、まだ健康な軀を立てていたものだ。寝巻をはだけた私の胸に顔を押しつけ熱い息を吹きつけながら睡っていた。背中を丸めた彼の顔と、私の胸毛との間には、どちらのものとも判別のつかない汗が蒸れて、彼の寝顔を何時も湯上りのように上気させていた。前夜、私の愛撫の限りを集中させた、あの黄金色のうぶげに覆われた果実を、掛蒲団の縁からまるまると覗かせていることも珍しくなく、それが改めて彼に対するいとしさを誘い、再び朝の新鮮な欲望へと繋がったものだ。そこに私は、常に消えることのない虹を見た。

しかし、再び同棲を始めてからの彼は、私に気がついた時はいつも、すでにズボンを着き、シャツを着けていた。その習慣を、とっ

ぜん今朝、彼は破ったのだ。私は、何年ぶりかで彼の寝顔を見た。それは最早、あの少年のように上気した顔ではなかった。眼窩の黝ずんだ、色艶のひどく悪い中年男の寝顔だった。その半ば開かれた土色の唇に、私の胸毛が一筋、脱けてはりついている。私は、何気なく、それを指先で摘み取った。無気味な生き物のように粘ばつく彼の唇が、私の指の腹に触れた。私は、思わず、その指先を寝巻で拭っていた。

私が半身を起こした時それが当然のように眼に入ってきたのは、嘗て見馴れた構図だった。全身を海老のように捻じ曲げて睡り続けている彼の臀が掛蒲団からはみ出している。数年前の私たちにとっては、それ自体、何の変哲もないポーズだった。

だが、いま、その同じポーズを一瞥した瞬間、稲妻のように、私の胸の中を得体の知れない戦慄が走った。

私の視線は、眼前の異様な物体に金縛りとなり、自由を失った。恰もそれは、突如として其処に現われたかのように、私の視界に、醜さの限りを曝している。現在でも私の胸を熱くする記憶の中で、虹に包まれた黄金の果実が存在した同じ場所に私が見たのは、醜怪

な一片の肉塊だった。粘土細工みたいに青黄色にデフォルメされた肉塊、腐敗しかかった腫物のように黴ずんだものが、破廉恥に露出していた。あの男娼のアパートで見たものと同じのそれは正視に堪えない不潔さと無残さを、余すところなく示していた。

——と、不意に、私は屍臭を嗅いだ。

「彼は、すでに死んだ」

私の胸の中が、冷たくなった。と同時に、再会以来、彼の周囲を覆っていた幾つかの謎が、一度に解けた。「灯火を消してくれ」と執拗に要求し、常に闇の中に身を置いたことも、毎朝私より先に起きて、ついぞ衣服以外の姿を見せようとしなかったことも、更には「ぼくは、もっと早く死ぬべきだった」というあの繰返しも、すべてがいま、私の目の前で氷解した。

木島進一は、すでに死んでいたのだ。

長い睫毛をもった濡れた黒い瞳と紅い唇、いつも上気したような頬とかぐわしい呼吸、柔軟な白い四肢と、黄金色の産毛に覆われた丸い果実、そして、それ全体を膜のように包んだ甘い汗の匂い——これら一切のものととも、彼の中のナルキソスは死んだのだ。

彼を夜毎、ギリシャの森に誘ったナルキソ

スの果実を非情に蝕み、風化していったのは十五年の歲月であつたらう。たしかに、彼は長生きしすぎたのだ。彼が生まれた時、祖父が予言した通り、もし十歳で死んでいたら、これほど無残な形骸を曝さずに済んだらう。この予言者ケレシアスの言葉は、不幸にして的中こそしなかったが、決して外れてはいなかった。というのは彼が頭の小さい醜い三十男となって生きていること自体、とりも直さず彼にとって死を意味しているからだ。

彼は、死を生きて来たのだ。それを自覚してから彼の彼が、どれほどの苦痛を味わって来たか、私はいまさら、頭が熱くなった。再会して一年余りも生活を共にしながら、彼を理解できなかった自分を、私は愧じた。

私は、彼が眼を覚ました時の顔を見る気にはどうしてもなれなかった。で、彼の眠りを妨げないように注意深く寢床を出ると、その臀を蒲団で覆い食事もしないで戸外へ出た。汗と脂と垢と、二人の男が共同でつくり出す生活の分泌物の混淆した陰湿な空気の中に、彼を残して部屋を出る時、私は、彼の死を予知した。

活気のある朝の町とは全く無関係に、虚ろに歩く私の網膜には、いつまでもあの青黄色

の醜怪な肉塊がへばりついて離れず、私を盲にさせた。

彼が睡眠薬を飲んだことは、私が帰宅するまで階下の老夫婦も知らなかった。彼は寢床から半身を乗り出し、畳に片頬を押しつけ、背中を丸めて睡っていた。それだけなら、平常と変わるところはなかったのだが……。

私はやっぱり、今日一日だけでも、彼のそばに居てやるべきだった。取り返しのかない後悔が、私の胸を締めつけ、涙がオートメーションのように、後から後から流れた。それは、悲しみではなかった。今更、私には悲しむことはなかった。それなのに、涙は止まらなかった。

古びた冷たい鉄のベッド。クレゾールのにおいととも重く凍てついた空気の中で、彼は静かに、私の祈りと期待に応えて息を引きとった。

しかし、その死は、彼自身にとっても、私にとっても、遅すぎた。

(尾)

※

※

臨月妊婦逆吊りの感激

— 人間の牝としての妊婦像 —

高 野 原 美

妊婦マニア待望の臨月妊婦のヌード逆吊りが鮮明なカメラの前に映しだされて、妊婦ヌード・フォートの金字塔がここに打ち立てられた。

地球上の全人類は、宇宙船アポロ11号の月面着陸の壮挙に酔っているが、それに一步先んじて可愛い妖精、金原奈加子さんの若々しい臨月腹の肉体が辻村隆氏の手によって逆吊りされると云う壮挙がなされたのである。これこそ、耽美史上に永遠に記録されるべき快挙と云うべきものであろう。

伊藤晴雨老の緊縛妊婦の逆吊りがあることはあるが、私には古典的な感じしかなく実感がどうしても湧いてこない。金原さんののは、辻村氏の生々とした情景描写の記事とあわせて、そのフォートを見られるだけに胸を打つ鋭い感激が湧き起こってくるのである。

これは、金原奈加子さんの献身的な協力があつたればこそであり、M女性金原さんの勇氣と決断には敬意を表するものである。

金原さんの場合、中絶を強要し、生活力もない夫からオナカをぶたれる中で、どうしても子供を産みたいと、逆境の中で必死に生きようとしている、この悲壮な思いつめた覚悟が、

「やってみます。私は構いませんが……」
と云う答えとなって、世紀の逆吊りが実現したのである。

辻村氏は、カメラ・ハントで左近麻里子、大島照代、木村洋子等の裸身を逆吊りにしてきた。彼女たちは苦痛の声も漏らさず、逆吊りのマゾの境地を楽しんでいた。しかし、金原さんの場合は、九カ月と云う身重の身体である。その若々しい小柄な身体の中には、別の生命が宿って、臨月近いお腹は、メロンのように丸く膨れ上ってズッシリした重味を感じさせる。誌上の写真では、大きな腹部の膨らみの頂上は、まだ臍の凹みに余裕があつて臍窩も押し出されて浅くはなっているようであるが、妊娠腹の膨らみには余裕をもっている。とは云うものの、その膨らみは美しい弧を描き丸い半球を見せて形よく、妊婦の裸像の極致を描きだしている。

特に37頁の、下腹部に両手を当てて妊娠腹の重みを支えるようにしているポーズのフォートは、カメラアングルが下方から丸い腹に焦点をあてているために、妊娠腹がデホルメされて妊婦の腹の偉大な膨らみを強調しており、美しいフォートである。

また41、43頁の仰臥像も、充実した腹の美しい量感と女体の新鮮さをみせている。相対的に今回は、モデルも「童女受胎譜」と題をつけられたように、若々しい女体が効果的なフォートを作っている。

充実した膨らみは普通の場合でも膀胱を圧迫して尿意をしきりに感じさせる位である。

その生命を宿した肉体が、上と下と逆転するのであるから想像以上に苦しいだろう。

辻村氏は『確かに膨らみの位置は胸に下っていた』と記されているが、写真では不鮮明なために、腹部の臍を中心とする上下のカールが判りにくい。しかし、当然、腹の中で胎児も胎水も胸を圧迫し、上腹部の膨らみが強くなることは予想される。

危険性と激しい苦しみを乗りこえて、金原奈加子は妊婦逆吊りを演じた。

「金原さん、ありがとう」と心から感謝の言葉を送るとともに、今後とも強く生きて行かれることを祈るものである。

○

奇ク誌は、妊婦裸像の開拓のため先進的な役割りを果たしてきた功績は大きい。この世紀の事業？ があればこそ、M女性たちは、内心の欲望、心うずく衝動を発散させうる事ができるのである。

中河恵子さんが、「妊娠体験の記」の中で『異常に膨れ上がったお腹、めっきり肉がついて大きくなったお尻や太腿、生理的には当然の変化を遂げた人間の牝を、思いきりいためつけ辱かして欲しいと云う思いが、あらぬ妄想となって次第に月の進む私の心の中を責めさいなむのでした。妊婦のモデルと早変わりした私の女体が一個のオブジェとして、一つの被写体として、冷酷なレンズの前に縛られ

たままで晒されると云うことは、最も私の望むところでした』

とマゾ女性の心境をのべている。

この中河恵子さんの二十二才の若い八カ月緊縛ヌードフォートは、妊婦マニアの期待に応えるように、子を孕んだ女の動物の牝としての特徴をあからさまにして、豊かな裸身を誇らし気に晒している。

八カ月と云うと膨らみも充分でなく、丸く充実した膨らみの中心で臍窩は丸く小さい窪みをみせ、ウエストの辺りで腹部の膨らみに溝をつくっている。まだ胃の膨らみの部分まで、完全に妊娠腹の隆起の影響が及ばず、上部の小さい膨らみと妊娠腹の膨らみに分離されており、妊娠腹の月数による変化の経過がはっきりと示されているだけに貴重なフォートである。

彼女の場合、妊娠による皮膚の変化が少なく、乳暈の広大と黒味も少なく、膨れた腹部の中心を縦に走る黒線も下腹部の妊娠線も不鮮明である。それだけに、適度にのった全身の皮下脂肪が、若い裸身に色気を漂わせ、腹部の盛り上った——それも臍窩の窪みを残した——充実感だけが、妊娠による変化の最大の特徴となって目を向けさせている。

腹部の変化、別の生命の容器、安住の地としての牝の腹部の変化に、特に興味を持つマニアとしては、この被虐と露出に恍惚として

カメラの前に裸身を晒しているフォートは、実に貴重なものである。

○

辻村氏は、金原奈加子の逆吊りの快挙に至るまで、数々の妊婦の裸身の加虐を通じて、自信を得るとともに、慎重な過程を踏んでいる。勿論、モデルの女性が望む、又は承諾するよう導入するのは大切であるが、流産の危険性について充分の実験が必要となる。

○

木戸悦子さんは、『膨張した腹部の、この妊娠腹の姿を女性によっては、或いは醜いと思うかも知れませんが、私はそうじゃないんです。夫との愛の結晶の胎児が、今この中で微かに息づいて、胎動しているんだと思うと、切ない程、この妊娠の自身の姿が、いとおしくなるのです』とナルシズム的な境地から、マニアに妊娠したお腹を見せてあげたいと、献身的な心境でモデルになった。

辻村氏は、初めは「十分に手加減してやりますよ」と遠慮がちであったが、次第に本領を発揮して「彼女が妊娠九カ月の身重である」と云うハンディキャップを全然自覚しなくなっていた。

両手吊りにすると、ズボンのバンドを引抜いて豊かな臀部に鞭打ちを加え、更に両脚を大きく開かせ開股で鞭打つ。彼女は喘ぎ呻きのけぞった顔にじっとりと汗を浮かべ、悦楽

の淵に深々と身を沈めている。その中で、細い水液のしたたりが床を濡らし、自由になった木戸さんが、初めてその行為に気づき困惑と羞恥に頬を染める光景は、想像するだけでも楽しい情景である。

その機会をのがさず、羞恥をかなぐり捨てた悦子さんは又とない実験を試みているが、このルポは心を躍らせるものがある。この人間の殻を打ち破って、心と心が触れ合ったところに、辻村氏のこの人間の牝を徹底的に虐めつける態度に、徹し切った人間の美、真実性を感じられ、女性を心身ともに曝けださせることに成功したのではないかと思われる。

続いて二人は可能な限りの冒険を試みる。

そこには階段が道具として用意されてあった二階の手摺りから吊り下げ、それを一階から仰ぎみる。羞恥と被虐の極致である。

妊娠九カ月のべんべんたる腹部を晒しての緊縛、鞭打ちが三時間余にわたって演じられ疲労の極に達し、その上、バイブレーターの責めにあって、快楽の呻きとともに失神した悦子さんの熱演は、辻村氏の名文によってありありと再現できる。

このフォートを「自分の眼で見られないもの」と云う表現で欲しがった悦子さんは、この記念すべきフォートを眺めつつ、全国の多くのマニアの前に、常に九カ月の膨れた妊娠腹を晒していることを痛く感じながら、生贄

としての牝の女体を誇りつつ満足しておられるのではなからうか。

○ 新劇の卵である飯田カオルを緊縛し、羞恥緊縛責めを行なっている。

バスに入ったカオルは、パンティ一枚の姿で現われる。フォートでも映っているが、薄いパンティから充実した七カ月の膨らんだ腹をむき出しにして、豊かな臀部の肉を盛り上げ、平然としている。浴衣もつけず、緊縛と撮影を待つ心境は、やはり彼女のマゾ性をあらわにしている。その姿で緊縛を撮った辻村氏が、パンティに手をかけて「いい？」と聞いても、「いいわ」と割り切っている。しかし「見ないで丸めてね」と付け加えるところに、若い女の羞恥心と、カオル自身が動物の牝としての妊婦裸像を提供したのではなく、金のためにドライに割り切った若い女性の側面がうかがえる。

カオルは、もともと発育した健康な女体の持ち主であったのだろう。七カ月の妊娠腹も全身の豊かな裸身のために充実した膨らみを見せ、乳房も充実して突出しており豊満な妊婦裸像が映しだされている。特に坐った横向きの姿では、見事な膨らみが豊かな乳房の谷間からせり出すように小山をつくっており、鑑賞する者の眼を楽しませてくれる。

辻村氏はカオルに対しては羞恥責めを主体

としている。バイブレーターを使用し、愉悦にむせぶカオルの表情を刻明にとっている。仰向けに充実した盛り上った腹を揺すり、揺れ悶える女体と、その表情がミックスした全身像は、妖しい雰囲気漂わせたことであろう。誌上では残念ながら表情だけに終わっている。

そうして最後には、お得意の椅子をつかった開股とバイブレーション。大きく膨れた腹部を両太腿の間からのぞかせ、ハレンチ極まるポーズに肩で喘ぎながら、羞恥に身悶える彼女を悦楽とうめきに変え、錯乱する悦虐の様相をとる辻村氏。もし許されるなら、辻村氏のご好意で、このフォートをご寄贈願えれば幸せこの上ないのだが。

かくして、辻村氏は緊縛、羞恥責めの道程を経て、妊婦も少々の身体的刺激等で流産するものではないことを確認し、遂に妊婦逆吊りに踏み切られたのであろう。

○ 次々と妊婦裸像が開拓され、モデルとなる理解者も増えて来ているのも喜ばしいことである。

それにつけて思うのは、妊婦ヌード・フォート集の発行と撮影会の開催である。この点について貴誌の努力を願うとともに、妊婦ヌードの新分野として、次の機会には妊婦切腹や妊娠腹裂き、斬首等々と処刑ものを企画されたい。

連載 M 小説



爆 発

政吉は、ひとり淋しく栄子の帰りを待っていた。

政吉は部屋の中を見廻した。

部屋には身分不相応な桐のダンスと洋服ダンスが並んでいる。中は、栄子の金にあかして買った着物や洋服で埋まっているのだ。政吉のものは殆どない。

鏡台、ミシン、すべて栄子の使うものばかりだ。この頃はミシンを踏まなくなったので薄い埃をかぶっている。

栄子の欲しがるものは、どんどん買ってや

った。

その後、収入は全部、栄子が管理するようになって、ぜいたくな着物などを好き勝手に買っているようだったが、政吉は何も言わなかった。

それでも毎月いくらか貯金ができ、去年までは月々どの位、貯金してるかを栄子から聞いていたが、今年に入ってから、それさえも知らされず、家計のことは、めくら同然にされている状態だった。

「俺としては精一ぱい尽しているつもりだがそれでも栄子は不満なのか……」

若い頃は女と遊び、女をひっかけ、女をだまし、女を泣かせることばかりやってきた

ピエロ床屋

(8)

鬼き

山やま

絢けん

策さく

政吉が、いまこうして部屋の中を見廻してもよくぞこれだけ一人の女に尽してきたものだと思う。しかも、その女に裏切られるのも、若い頃、犯した罪の報いかと、政吉は思っていた。

十一時すぎになって、栄子と善夫が一緒に帰ってきた。

かなり飲んだらしく、二人が部屋へ入るなり、酒の匂いが政吉を不快にした。

「まだ起きてたの。早く寝りゃいいのに」

善夫の方は「ただいま」とも言わずに二階へ上って行く。栄子も政吉を尻眼に、梯子段へ足をかけた。

「栄子。おい、栄子」

政吉の声を無視して、白いふくら唇から太腿のあたりを覗かせて栄子は二階へ消えた。

「きゃーッ」という栄子の若やいだ嬌声が聞こえ、何かふざけ合っているらしい。

政吉は、消したテレビをまたつけて見た。「11PM」が「離婚時代」というテーマで、

——前号までのあらすじ——

斧田政吉(53)若く美しい浮気な妻に悩まされながら、我慢して働く理髪店主。善夫が現われてからは、自分が我慢しただけでは済まされなくなり、苦境に立たされた。

斧田栄子(38)5年前に政吉と結婚し、故郷、大田原市に店を出す。善夫とは浮気のつもりが、いまは真剣に結婚するつもりでいる。亭主の政吉には絶対、強い富岡善夫(33)好男子で女には堅いという評判の男だが、栄子に誘惑されたと思っせかけて、政吉から女も店も根こそぎ奪いとってやろうという野心をおこす。栄子をあやつって政吉を苦しめるが、政吉と対決すると弱い。三者三すくみの状態から、栄子と善夫が次第に強くなっていく。

鈴木清太郎(56)政吉と兄弟分。東京に三軒の理髪店を持つ成功者。政吉の店へ助力するために、子飼いの店員善夫を三カ月の約束で差し向けたのが、トラブルの因となった。

「離婚のすすめ」という番組をやっていた。

「テレビまで俺をからかうのか……」

テレビを消せば、また井戸の底のような静寂が政吉の心を滅入らせる。

二階で栄子の忍び笑いが聞こえる。

どうしても政吉の神経は、二階の物音にばかり集中してしまう。

政吉は頭を掻きむしった。薄いまばらな頭髮が逆立った。

蒲団を出してきて頭からひっかぶって寝たが、眼が冴えて神経は、ますます尖るばかりだった。

時々聞こえる栄子の嬌声が、胸を刺すようにひびいた。

政吉は、パツと蒲団をはねのけて勢いよくとびおきた。こらえにこらえていたものが、一ぺんに爆発した。

ドタドタと大きな足音を立てて一気に二階へ駆け上がった。

そこに、見るべからざるものを見てしまった。栄子と善夫が、暑さも構わずベッタリと抱き合っていた。

栄子のプックリと上を向いた乳首を吸っていた善夫は、さすがに政吉の凄まじい形相を見るとパツと離れた。

「この、不義者ッ!」

政吉が善夫の頬げたを拳固で一発、殴り飛ばした。

サツと鼻血が噴き出した。

善夫は却って度胸が坐ったのか、ニヤリと不敵な笑いを浮かべて政吉を見上げた。

「何するんだよッ!」

栄子が政吉にむしゃぶりついて顔をひっかいた。政吉の顔にも二筋、三筋血が流れた。

政吉は栄子の豊かな裸の胸をドンと突きとばした。

「おとなしくしてりゃ、いい気になりやがって。このざまは何だッ!」

ぶざまにひっくり返った栄子は、起き上がったときは存外、冷静になっていた。

「何が何だつてのさ。惚れ合った同志が愛し合っていてどこが悪いのさ」

「何を言う! お前は俺の女房なんだぞ。それなのに、こんな破廉恥なまねしやがって……」

「違うわよ。前から言ってるじゃないか。妾のすることが気に入らないなら、いつでも別れてやるって。あんたなんか、もう亭主じゃないんだからね」

栄子は、脱ぎ捨ててあった浴衣をひっかけ

た。

「こんなひどいことするんなら、別れてやるわ。いまずぐ別れてやる。別れてしまえば何をしようと勝手だろ」

「そんなこと言っちゃってお前、五年も苦勞をしてやってきたんじゃないか。そう簡単に行くもんか」

「あんたみたいな能なしの、もうろく爺いなんかと一緒になったのが、大間違いだっただよ。妾や、これからやり直すんだ。このひととさ。わかったかい。サア、とっとと出て行きなッ」

「出て行けど？ 何を言ってるんだ。この家は俺の家だぞ」

「フン、どこまで血迷っているのさ。この家は妾の家だよ。登記だって、妾の名義になってるんだし、店の名前だって、バーバーエイコと、ちゃんと妾の名前になってるんだよ」
「それはお前のためを思ってやったことだ」
「フフ、そんなこと言っちゃって通らないよ」
栄子は、ハンドバッグから札束を取り出した。

「ホラ、ここに七十万円ある。この家を買う時、あんたが七十万円、妾と清太郎旦那で百万円、出して買ったんだろ。あの時の七十万

円、返してやる。本来なら慰謝料としてもらっておいてもいいんだが、この際、金のこと、きれいにしておいてやる。ホラ、これ持って、出て行けッ」

「ま、待ってくれ、栄子。そう短兵急に言わなくたって。もう少し、考えてくれ」

いつの間に用意したのか、七十万円の札束を見て、栄子の決心の並々ならぬものを悟った政吉は、思いもよらぬ心の隙をつかれて狼狽した。

「考えることなんかないよ。妾は考えに考えてきめたことなんだからね。サア、受け取りを書きな」

「冗談じゃない。こんな金、受け取れない」
「じゃ善っちゃん、預っというておくれ。此処から出て行く時にや、この金を叩きつけておやり」

「そんな道にはずれたことができるもんか。清太郎だって、許さねえ」

「フフフ、だからお前はバカだって言うんだよ。そりゃ、妾がこのひとと浮気でもしたと言うんなら、清太郎旦那だって怒るだろう。

けど、妾と善っちゃんの仲は、そんな浮わついたもんじゃないんだよ。あんたと別れてこのひとと結婚するんだよ。いくら清太郎旦那

だって、ここまで突きつめた、ふたりの仲を裂くことはできないよ。もちろん善っちゃんだって清太郎さんから破門になるのは覚悟してるんだから」

二人がここまで突きつめて決心していると想像もしていなかった。

女のちから

「まあまあ、栄子。そう興奮しないで落ちついて、もっとじっくり考えた上で話し合おうじゃないか」

はじめの勢いもどこへやら、政吉はべたりと、その場にあぐらをかいた。

「興奮してるのは、あんたじゃないか。こんなところへ、断りもなくズカズカ入ってきてさ。プライバシーの侵害だよ。それとも、妾達の仲のいいところを見たいというのかい。見たけりゃ、拝ましてやろうか」

すでに栄子は優位に立ったことを知ると、持ち前のサジステイックな欲情が、わいてきた。

浴衣の前をはだけたまま、立ち上った栄子は、政吉の禿げ上った頭へ裸の足をあげて蹴倒した。

「このもうろく爺い！」

あつという間もなく、首の上に馬のりに跨がると

「さっきは、よくも妾の可愛い人を殴ったわね。仇をとってやる」

ピシャピシャと両手で、交互に頬げたをひっぱたいた。

「ホラ、善っちゃん。あんたも此処へ来て、さっきの仕返しに殴っておやりよ」

善夫は、蒲団に寝そべって、ニヤニヤ笑いながら眺めていた。

「いいよ。俺の代りにあんたがやってくれ。

俺は見物してる方が楽しいよ」

「ようし、じゃあいつもやってやるように、お仕置してやる」

栄子は口をゆがめ、惨忍な笑みを浮かべて尻の下で政吉を見下ろした。

「おい、よせ。よしてくれ」

政吉は、善夫の視線を意識して暴れた。

頬に三筋ほど赤い血の糸を引き、殴られてあかくなった顔が、堪えがたい屈辱と憤怒にまっ赤になった。

栄子の白い体が、馬上の人のようにグラグラと揺れた。

そのバウンドを楽しみながら、

「フフフ、恥かしいのかい。アハハハ」

と、からかうようにビンタをくれた。

「コラ！ お前、知らなかったらうけど、いつも妾が、こうやってお前を虐めてるところを善っちゃんは見ていたんだよ。妾が、コッソリ見せてやってたのさ。アハハハ」

栄子の身体が大きくバウンドして、重い尻が政吉の顔の上にドシンと、のっかった。

「アハハハ。いくら怒ったって遅いよ。お前が妾の前に出ると、どんな風になるか、毛を剃って食べたことまで知ってるんだから」

政吉は遂に全力を出して栄子を、はねとばした。起き上った政吉の眼は屈辱と憤怒に真赤になっていた。

「アハハハ、アハハハ」

だらしなく、ひっくり返ったままで、栄子は笑った。

政吉は、わけの分からぬ叫び声をあげて、

善夫に向かって、とびかかって行った。

寝そべっていた善夫が、はじかれたように半身を起こして応戦した。

二人は取っ組み合いになって、横倒しに倒れたが、年はとっても、ファイトにまさる政

吉が善夫を組み敷き、馬のりに跨がって、ポカポカと拳固を喰らわせた。

そのとき、後から栄子が脚をあげて、政吉の後頭部を思いきり蹴とばした。

形勢は一気に逆転し、善夫が政吉の上に跨がった。

「ばかやろうッ」

下になった政吉の顔を、栄子は足で踏みつけた。

裸の男女にちぢみのシャツと猿股の男という奇妙な取り合わせの三人が、プロレスまがいの格闘を演じていた。

政吉も力では善夫に負けなかった。下からはね返そうとしたが、栄子に頭を足でおさえつけられると、力が抜けてしまった。

「爺いのくせに、じたばたしやがって、往生ぎわの悪い野郎だ。善っちゃん、縛っておしまいよ」

栄子は反抗する政吉が憎かった。足先に力をこめて、ギユウギユウ踏みつける。政吉の顔は横向きになった。

善夫は暴れる政吉の両手を抑えながら、縛るものを目で探した。少し向こうに栄子の桃色のしごきがおちているが、政吉の上に跨がったままでは、手が届かない。

栄子は政吉の頭の方からしゃがみこみ、両膝で肩をおさえつけ、政吉の両手を善夫から

受け継いで、おさえつけた。

「サア、大丈夫だから、あれ取っといでよ」

善夫が政吉の身体から退いても、もう反撥する力が萎えていた。

しごきをとった善夫は、政吉の両手を腹の上で縛りあげた。

「こんなことはしたくないが、あんたは狂ってるからな。暴力を振るうなんて最低だよ。だが、あんたが暴力を振るえば我々も実力を行使するより、しかたがねえからな」

善夫が一人で縛ろうとしたら、政吉は、そうやすやすと縛らせはしなかったであろう。

だが栄子の肉体が盤石の重石となって、しかも栄子の手が自分の手首の下の方をおさえつけている。これに反抗できなくなっていたのだ。

「俺が縛ってるんじゃないやねえぜ。栄子さんが、縛ってるんだからな。俺は代行しているだけだ」

「だから、俺を怨むなよ。怨むなら、栄子を怨め」という意味で、言ったのだろう。

だが政吉は、それが憤りを新たにした。

「何という卑怯な奴だろう。この男は、自分の罪を、誰かになすりつけるようにもって行く男だ。栄子と関係するにしても、一応はイ

ヤイヤして見せて栄子を焦らせ、それから、

「結婚」という条件を出して、この「正当な理由」という、かくれみのをかぶって姦通したのだ。まるで女が男をだますような、やり口だ。男なら男らしく、女が欲しいときは卒直に求めれば、いいではないか。その点、前の友市は男らしかった。欲しいと思う女は栄子に限らず、前後も見ずに求めて行き、別れぎわも、さっぱりしていた。友市こそ政吉の若い時そっくりのやり方だっただけに何か憎めぬ共感があった。

だが、この善夫の陰険なやり方はどうにも性が合わない。

俺が東京へ帰れと言えば帰ると約束する。その約束を栄子になすりつけて反古にする。相手の弱点をつかんで、そこに罪を転嫁しようというやり方だ。此奴のやり口は、すべてこうなのだ」

かつては政吉自身、こういう手段で女を操作した経験がないではなかった。だが政吉はこれほど陰険ではなかったし、途中で男らしくないと気がついて真向から相手の男と対決した。ともかく善夫の肚のうちは、いまこそはつきり読みとれたのだった。

「サア、これでよし……」

縛りが完了すると、善夫は蒲団に戻った。

栄子は政吉の上に仁王立ちに足をひろげて立ちはだかり、足もとのみじめな夫の敗北の姿を見下ろした。そして「勝者」の善夫を見て笑った。

「ああ、善っちゃん。顔が血だらけよ。痛かったろう」

栄子は釘に吊るしてあったタオルをとって善夫の鼻から口へかけて噴き出した鼻血を拭いてやった。

「大丈夫？ 何ともなってない？」

「大丈夫だよ。そういう、お前さんだって、ほら、そこに血がついてるじゃないか」

言われて栄子は気がついた。白い太腿の内側に刷毛でなすったような血がついていた。

政吉の顔をおさえつけているうちに、返り血がついたのだった。

「ああ、汚らしい！」

栄子は自分で内股を拭いた。

政吉は二人の方を見まいとして目をつぶった。

「ねえ、あんた……」

前を締めずに浴衣に手を通しただけの栄子が、二の腕を善夫に捲きつけて、チラと政吉を横目で見ながら、耳もとに何か囁いた。

「だめだよ。俺もう、くたびれた」

「何言ってるんだよう」

栄子は善夫の頬へぴったり頬をすりつけて接吻した。

「疲れたよ。女と男と二人を相手に格闘したんだからな」

「テレくさいの。フフフ、いいわ。じゃ元氣が出るようにしてあげる」

栄子は、にんまりして手をのばした。

「よせよ。それより、あれ見ろよ。あの血だらけの顔を見てると氣持が悪くなるよ。俺達だけでなく、旦那さんのツラも拭いてやんなよ」

「フン、へんなどこではとけ心を出すのね。」

いいわ、あんたがそう言うなら、奴にも情けをかけてやるわ」

栄子は薄ら笑いを浮かべて政吉の傍へ来ると、デンと胸の上に尻をのせた。

政吉の顔の血は、もう殆ど乾いて、ドス黒くかたまっていた。栄子は、自分達の血を拭いた汚れたタオルで、政吉の顔を拭いた。こびりついた血は、なかなか落ちないので、手荒くこすりつけると、黒い血のかたまりのとれたあとから、うっすらと、また血がにじんできた。

政吉は痛さに「ウーッ」と唸った。

「どうなの？ あんた。もうこんなことになっちまっちゃしょうがないわね。別れる？」

政吉は、憐みを乞うような目で、栄子を見上げた。

「しょうがないだろ？ ここまできてしまっではさ。こんな目にあわされても、妾と一緒に居たいの？」

栄子の巨大な肉塊が、胸の上から首へと、ジリジリ迫ってくる。

「あんただって一人前の男だろ。若い時にやずいぶん女を泣かせたって言うじゃないか。何も妾みたいな女ひとりに、こだわってることはないだろ。別れちゃおうよ。サッパリとさ」

「いやだ。俺にとって、お前は最後の女だ」

「フフ、自分で勝手にそう決めても、妾の方じゃ、あんたを最後の男にやできないのさ。」

あんたの、その泣きっ面見ると、氣がイライラしてくるのさ。妾の身体は、こんなに若いんだよ。まだ三十前の女にだって、負けないくらいだよ。お前みたいな、もうろく爺いにや、ホラ、こうしてやる」

それは堪えがいた屈辱だった。

だが、あらがう両手は自由を失っている。

ムーンと迫る女体の匂いの中に、政吉は首を左右に振って弱々しい抵抗を示した。

「アハハハハ」

栄子は善夫の方を見た。

「妾のおまじないが効いてきたじゃないか」
善夫はニヤニヤ笑いながら、若さを誇示していた。

「しょうがないじゃないか。妾達はまだ若いんだもん。お前みたいな爺いが割りこんでこようってのが無理なんだよ」

栄子はチラリと後を振り向いた。そこに政吉がまだ「男」である証拠を見た。

「あんただってまだ一人前じゃないか。妾以外の女なら女房の来手は、いくらでもあるわよ。フフフ、でも妾は諦めるんだね、善っちゃん」と約束しちゃったんだもん。もうあんたとは寝ないってね。だからムダよ」

政吉はくらやみの中で足をバタバタさせてもがいた。

「サア、妾のことは、すっぱりと諦めな。でない、いまに妾に責め殺されちゃうよ。フ、ホラ、こうやって……」

はじめは、やわらかく悩ましい重味だったが次第に息苦しく、堪えがたい重圧と変わった。

恐らく政吉にとって、この夜くらい苦しく悩ましい思いをしたことは、なかったであろう。

頭に血がのぼり、混迷の極、もうろうとしたなかで、

「お前さっきハレンチと言ったね。ハレンチってのは、どんなことか教えてあげようか」と言ったのが、何か遠くの方で聞こえたような気がしたが、それきり意識を失ってしまった。

破 門

夢うつつのうちに、政吉は苦悶のひと夜を寝てはさめ、さめてはまどろみ、夢の中では栄子や、善夫や、友市に、捧や縄を持って追いかけられ、縛られて殴られ、数々の屈辱を受けた。

目がさめれば、目の前に栄子と善夫が抱き合ったまま眠っている。見まいとしても目が行ってしまう。

目を閉じて過去をふり返る。

数多く関係した女達の、怨めしい顔、泣き顔、あざけりの顔が浮かぶ。

いま、自分がこういう地獄の責め苦にあう

のも、昔、女を苦しめた罪のむくいなのだ”とも思う。

硝子戸の外は既に夜が明けて、陽がさしはじめている。

“何時頃だろう。もう八時頃になってるのだろうか”

いつもなら起きる時間だが、今日は月曜日で定休日だ。

二人も休みに気を許してか、情痴の限りをつくした疲労の故か、硝子戸を通して目が当たって汗をふき出しながら栄子は善夫をしっかりと抱いて離すまいというポーズをとったまま昏々と眠っている。そのとき、

ドンドンドン

と表戸を叩く音がした。

“ハテナ、定休日の札を出しておかなかったのかな”

性急に表戸を叩く音は続き、

「おい、起きろよ」

という声には聞き覚えがあった。

「栄子、栄子」

栄子は、やっと目をさました。

「何だろうねえ、休みだっていうのに……」けたたましく戸は叩き続けられる。

栄子は二階から表通りを見下ろすと、大型

の車が止まっていて、旅館の浴衣を着た男が立っている。

「アッ、清太郎さんだわッ」

と慌てた声に、善夫がガバとはね起きた。

栄子は急いで政吉の両手を縛ってあったしごきを解くと、階下へ駆けおりて

「はい、只今ッ」

と声をかけてシューズをひっかぶり、ブラウスとスカートを付けて、鏡の前で髪形を整えると表戸を開けた。

「まあまあ。ようこそ、こんな田舎へ……」

「昨夜、那須温泉へ来たもんだからね。寄って見たんだ」

そこへ善夫も服を着て下りてきた。

「旦那、よくいらっしゃいました」

「ウン、元気でやってるかい」

「ハイ、お蔭さまで……」

「政吉は?……」

と言いながら清太郎は店の中へ入った。

「ウン、なかなかいい店じゃないか」

だが栄子も善夫も気恥しかった。このところ掃除に政吉も善夫も身を入れてないからだった。うわっ面の掃除はひと通りしてあるが鏡の隅の曇りや、消毒液を取り替えてないための濁り具合など、玄人が見ればすぐ分

かる手入れの悪さを、清太郎が見逃がすはずがないからだ。

「今日はお休みだもんですから、取り散らかしてまして……」

清太郎を店で待たしておいて、奥の間を片づけにかかった。

だが清太郎は構わずスカズカと奥の間に入って来た。

「政吉の奴、まだ寝てるのかい」

ジロリと部屋を一べつする。

蒲団が、ひと組だけ敷かれてあるのを、栄子が大あわてに畳んでいる。

政吉は台所で顔を洗っていたが、

「何だい、だし抜けだな」

水だらけの顔を拭き拭き出て来た。その顔付は、地獄で仏に会ったように喜びにあふれていた。

「ウン、那須まで来たもんだからね。一度、来て見ようと思ってたんだ」

清太郎はトントんと二階へ上がりかけた。

「あ、旦那ッ！」

栄子が悲鳴に似た声を出したが、もうその時は清太郎の姿は二階に消えていた。

すぐ下りてきた清太郎は、

「大田原って町は、なかなかいい町だね。思

ったより活気がある。これじゃ、店の方も忙しいだろう」

「ウン、まあまあさ」

「どうだ、車を待たせてあるんだが、三人とも俺の宿へ来ないか」

栄子も善夫も行きたくなかったが、清太郎に言われては断るすべがなかった。

「ま、お茶でもひとつ……」

「いいやな。店だけ見りゃいいんだ。宿でゆっくり一ぱいやろうや」

大田原から那須温泉までは40分で行ってしまふ。清太郎は観光ホテルの、かなりいい部屋をとってあって、バーのママといった四十年配の女を連れてきていたが、

「まさ代、那須の滝でも見てきな」

と遠ざけた。

「相変わらず、さかんだな」

政吉は三つ年上の清太郎がうらやましかった。女房の他に、まだこれだけ女をこなす精力をもっていることが――。

四人前のお膳が揃うと、清太郎は

「ところで善。お前もう、東京の店へ戻ってくれないか」

ハッとしたように善夫は緊張して、うつむいた。

「約束の三カ月は過ぎているし、代りによこす片岡も、この頃ようやく一人前になってきた。善が帰ったら、すぐ片岡をよこすから」

と政吉に向かって言う。

善夫は返事をせずに黙っていた。

「急ぐんだ。今日にでも荷物をまとめておいてくれ」

栄子は善夫の顔をキッと見つめていた。

「旦那。僕、もう少し大田原に残して下さい」

善夫の声は、ふるえていた。

「ホウ……」

清太郎は予期していた答えが返ってきたように、格別、驚きはしなかった。

「どうしてだ？」

「旦那。僕はここにいろ栄子さんと結婚しようと思っています」

「なにッ！」

「申し訳ありません。旦那からくれぐれも御注意を受けたことを破りまして……」

「馬鹿野郎ッ！」

たまりかねて、栄子が口を出した。

「旦那、悪いのは妾なんです。妾が善ちゃんを好きになっちゃったんです。善っちゃんは何度も断ってましたが、結婚するなら二人で決心したことなんです。一時の浮気心じ

やないんです」

「だがお前さん、政吉の女房だろう。この政吉は、どうなるんだ」

「このひとは別れます」

イザとなると女の方が度胸が坐っていた。

清太郎は政吉を見た。政吉は虚脱したように無表情だった。

清太郎は言葉を尽して二人の不心得を説いたが「こればかりは……」と二人は折れなかった。

清太郎は、善夫には強く言えたけれども、栄子には政吉の目を盗んで二度も関係した弱味があるので、強く出られなかった。

清太郎は、さじを投げたように、

「善、お前達は悪いことはしてねえと思って
るかもしれねえが、世間じゃ許さねえぞ。栄
子さん、あんた政吉とまず別れてから善と一
緒になるんなら仕方がねえがまだ政吉の女房
だ。それなのにそういうことをすりゃ、これ
は間男だ。姦通だぜ。昔なら死罪、戦前でも
罪になるんだ。いまは法律には触れねえが、
道徳上からは許されねえことだ、と言って、
俺としてはお前さんにどうのこうの言う権利
はねえ。だが善！ お前は俺の顔を潰した。
今日限り破門だぞッ！」

「申し訳ありません。覚悟しています」

「ぬけぬけと何てこと言やがる。俺はな、お
前を信用してたんだ。いまどき珍しい堅い男
だ。神田の店を委し末は店をそのままくれて
やろうと思っただけくらい頼りにしてたんだぜ」
「すみません。つきましては旦那、通帳をお
返し願いたいんですが」

「この野郎ッ！」

清太郎の店では店員の月給から天引きして
毎月貯金し、判は本人に、通帳は清太郎が預
かっていた。

「詫びる口のそばから、よくも図々しく言え
たもんだな。そりゃ元々お前のものだ。東京
へ取りに來い。いつでも返してやる」

清太郎は政吉の前に両手をついた。

「政さん、ほんとに悪いことをしちゃった。
とんでもねえ野郎をよこしてしまつて。そう
いう間違いのねえようにと選んだつもりだっ
たが、俺の目が狂っていたよ。まことに申し
訳ねえ」

「いいよ、仕方がねえ。これも何かの因縁だ
ろう」

「ところで店はどうするつもりだ。お前一人
でやって行くのか」

政吉は暗い顔をして黙った。

「それは三人で相談して決めます」

と栄子が横から口を出した。

「そうか、わかった。もうお前さん達の顔見
るのもいやになった。出てってもらいてえ。
政吉には話があるから残ってもらおう」

二人はホッとしたように出て行った。

二人きりになると清太郎は、

「女のことについて、いつもお前から教わ
ってきた俺だ。その先生が、こんな目にあう
とは夢にも思ってたが……まあそのこ
とは俺としちゃ何も言えねえ。だが問題は店
のことだ。あれはどういうことになるんだ」

二人は額を寄せて、低声で話し合った。政
吉は恥を忍んで、これまでの事実を全部打ち
明けた。

「フーム、二人で店を乗っ取ろうってのか、
善の野郎、重ね重ね太え野郎だ。よし、俺に
も考えがある。政さん、辛いだろうがあとし
ばらく辛抱して、どんなことがあろうと家を
出ねえでくれ」

それからまた、長々と二人は額を寄せて話
し合っていた。

——(続く)——

× × × × ×

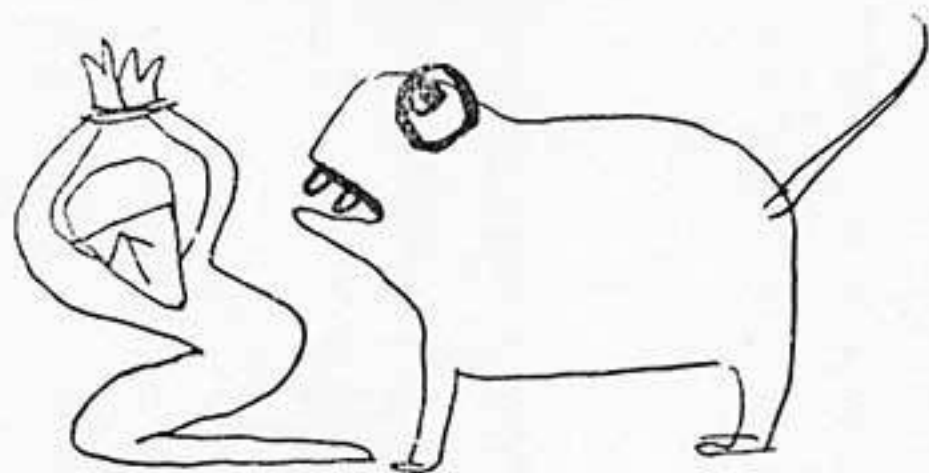
× × × × ×

懸賞応募 ♣ ♣ ♣ ♣ ♣

体験告白記

受診羞恥譜

小林 武



「小林さん、どうぞ」

看護婦に呼ばれて、泌尿器科診察室に入っ
た私は、うしろめたさと恥ずかしさで、顔が
赤らむのを覚えた。

「どうしました」

ごく事務的な医者質問に、

「実は、時たま血尿が出るので、何か異常が
あるのではないかと不安で……」

と答えながら、それとなく診察室の内部を

見廻す。

大きな総合病院だけに、総てがきれいに整
頓され、清潔な感じがする。

純白の看護服、看護帽に身を包んだ二十四
五であろうか、整った顔立ちの看護婦が三人
テキパキと立働いていた。

風邪や腹痛で通った町の医院等と違って
るのは、室内がカーテンで、いくつにも区切
られていることであった。

五十位の大柄な医者は一通りの問診の後、

「たまの出血と云うことは、いろいろの状態
で起こることもありますが、特にまだ三十六
才という若さでは癌の心配もないと思われま
す。気にすることもないと思いますが、念の
ために一応の検査だけしておきましようか」
といってくれた。いよいよこれから泌尿器
科の診察を受けることになった訳である。

「どうぞこちらへ」

看護婦の言葉に従って通された処は、周囲
を真白なカーテンで仕切った一室であった。
白いシーツを敷き、半分程はゴム布を敷いた
ひざ位の高さの平凡な診察台。小さな黒レザ
ーの枕、脱衣カゴ、そして足もとの位置に、
一〇〇〇cc用器の、何であろうピンク色の液
が満たされてスタンドに掛けられたイルリガ
ートル等が目に入る。

「これから診察をしますから、腰から下のも
のは全部とって横になって下さい」

無表情な事務的な指示だ。我々患者に必要
以上の羞恥心を抱かせぬための配慮なのであ
ろうが、看護婦は指示だけしておいて、室を
出て行ってしまった。

上衣を脱ぎ、腰から下につけているものを
全部脱ぎ去ってしまった姿は、我ながら情な

い姿である。

ベッドに仰臥するのも面はゆく、診察台に腰掛けて待っていると、先程の看護婦と医者が入って来た。看護婦は、手にガーゼとゴムの指のうが入った膿盆を持っている。

「横になって下さい」

再び事務的な看護婦の指示で、仰臥位をとらされる。

「楽にしていして下さい」

と云いながら、先生の暖かな手で診察が始った。もうマナイタの鯉である。

静かに注意深く腹部の圧診、鼠径部、会陰部、そして局部の触診が了る。

「こんどは肛門を調べますから、あぐらをかく様に脚を開いて手で持ってください」

直腸診の態位をとるよう看護婦が指示しながら手をかしてくれる。

今更恥かしがってもどうにもならぬ、と云う捨鉢な気持で、思いきって開股する。

「お腹に力を入れないで。お口を開いて。ゆっくり呼吸をして下さい」

という看護婦の指示に従う。

先生の診察が始まる。なんともいえぬ異様な感覚。前立腺の触診。そして前立腺液の採取のためかマッサージ。

「はい、結構です」

診察をすませた先生は、そのまま出て行ってしまった。

随分あっけない。もっともっと詳しく調べてくれたら……。ホッとする反面、そんなことを心のどこかで囁くものがあった。

「支度が出来ましたら、先生の処へいらして下さい」

看護婦も立去ってしまった。

身支度を整えた私は、カルテに記入中の先生の横に坐る。

「特に異様はない様です。とすると、血尿が一寸気になりますな。少しつらいかも知れないが、そちらのほうも診て置きましょうか」多少不満だった私は、即座に答えた。

「お願いします。ぜひ診て下さい」

「では準備をしますから、呼ぶまで待合室で待っていて下さい」

私はうなずいて席を立った。背後で、看護婦に何か指示する先生の声を聞きながら。

かなりいた待合室の患者も、一人へり二人へりで、いつの間にか診察をすませて帰ってしまった。私だけが一人、ポツンと取残されてしまった。『どうしたんだらう。最後に廻されるほどの大仰な検診なのか』一人考えてい

ると、だんだん不安が大きくなって来る。逃げ出したいような気になった時であった。

「小林さん、大変お待たせしました。ご一緒にどうぞ」

と、さっきの看護婦が、ガーゼを掛けた大きな盆を手にして診察室から出て来たのは――先程の冷い無表情とは変り、笑顔で話しかけてくれる。笑うととても魅力のある人だ。

今度は先程の診察室ではなく別の部屋らしく、看護婦は人も少なくなった廊下を先に立って歩いてゆく。従う私は、どこに連れていかれるのだろうかという不安がますます募る。

「外来検査室」と書かれた部屋の前に来た。

「中へ入って下さい」

彼女が扉を開けて誘導してくれる。

部屋に入って一瞬目に写ったものは、窓に黒いカーテンが掛かり床にリノリウムが張られた五坪程の部屋。そして真中に据えられた冷たく光る検診台であった。

「これから膀胱を検査します。特に痛くもありませんから楽な気持でいて下さいね。着ているものを全部脱いで、これを着て下さい」と渡されたものは丁度、短い割烹着のようなものであった。

魅力的な看護婦の前で全裸になると云うこ

とは、冷厳な病院内だけに、とても気恥かしい。しかし、看護婦は、平然として検査の準備にとりかかった。

検診台の水受けを出し二本の脚台を取付けスタンドに掛かった、二〇〇〇ccイルリガートルに滅菌水を満たす。そしてガーゼを取去った盆から尿道洗浄器、尿コップ、脱脂綿尿道ブジー、冷く光る膀胱鏡、等を検診台脇のガラステーブルにきれいに並べてゆく。

「では此処から台の上にあがって下さい」

指さされた踏み台から、生まれて初めて検診台に上る。受診衣以外には何もつけていない肌に黒レザーを張った台が冷たく感じる。

「脚をこちらに向けて仰向けに寝て下さい」

「はい脚を大きく開いて、此の台の上にあげて。お尻をもっと思いきり下げて、もっと下げて。台のへりから少し出る位迄」

テキパキと指示しながら介添してくれる看護婦に、総てをまかせる。

大きく開股し、脚台に下脚をのせられたため、短い受診衣はまくれあがる。私は観念して、静かに天井を見上げて羞恥に耐えた。

「かたくなっちゃ駄目。力を抜いて」

下脚からふともも迄の脚覆がはかされ、そして各々脚台に、かたくベルトで固定されて

臀部にガーゼが差し込まれる。これで脚の自由は完全にうばわれてしまった。大きく開かれた股が少しつっぱる。

「今、先生が見えますから」

いいながら、腰に白布を掛けてくれる。そのまま五分程も待たされたろうか。

「お待たせしました」

先生の声。看護婦の手でガーゼの目かくしをされる。いよいよ膀胱鏡検査が始まるのだ。

全身の力を抜くようにといいながら、腰の白布が取除かれた。

「膀胱まで機械を入れますから、少し気持悪いかも知れないが我慢して」

私は、だまってうなづく。

かたい異物が、静かに尿道を下って行き始め、会陰部に圧痛。思わず力が入る。

「一寸の間ですから我慢して。力を抜いてお口を開けて。楽にいきをして」

看護婦がやさしく声を掛けながら、下肢を抑えてくれる。

局部から下腹にかけて、つつばった感じがする。間もなく滅菌水を注入されたのか、膀胱が充満した感じになり尿意を催す。

それから何分経ったか。スカッとした感じに思わずホーッと息を吐いた。膀胱鏡が抜去

られたらしい。

「はい、終わりました」

と云う先生の声で検査は終わった。

看護婦の手で目かくしが外され、ベルトと脚覆が取去られた後、ガーゼで丁寧に清拭してくれる。

「なんともなかったでしょう。じゃあ服を着て下さい」

魅力的な若い看護婦の指図で、恥ずかしい姿勢をとらされ、膀胱の中迄も検査されたという一種の興奮と、何か満たされたものを感じて顔が紅潮してしまった。脱衣する時の恥かしさは今は全くなく、平気でいられる私自身の気持の変わりように、びっくりした。

「又、此の様な検査を受けたい。いやもっともっと恥ずかしい目に会いたい」と心で囁くものに気がついた時、今まで心の中に秘められていたものが、今日の検査によって引出されてしまったのではないかというくやみと驚きがあった。又その反面、なにかを発見したようなうれしさもあり、複雑な気持にさせられてしまった。

恐らく読者の方々の中で、此のような体験をされた方もあろうと思うが、拙劣な文を承知で私の体験をお送りした。

S M カメラ・ハント

(読者通信女性) 岡本 嬰子の巻

お気に召すまま

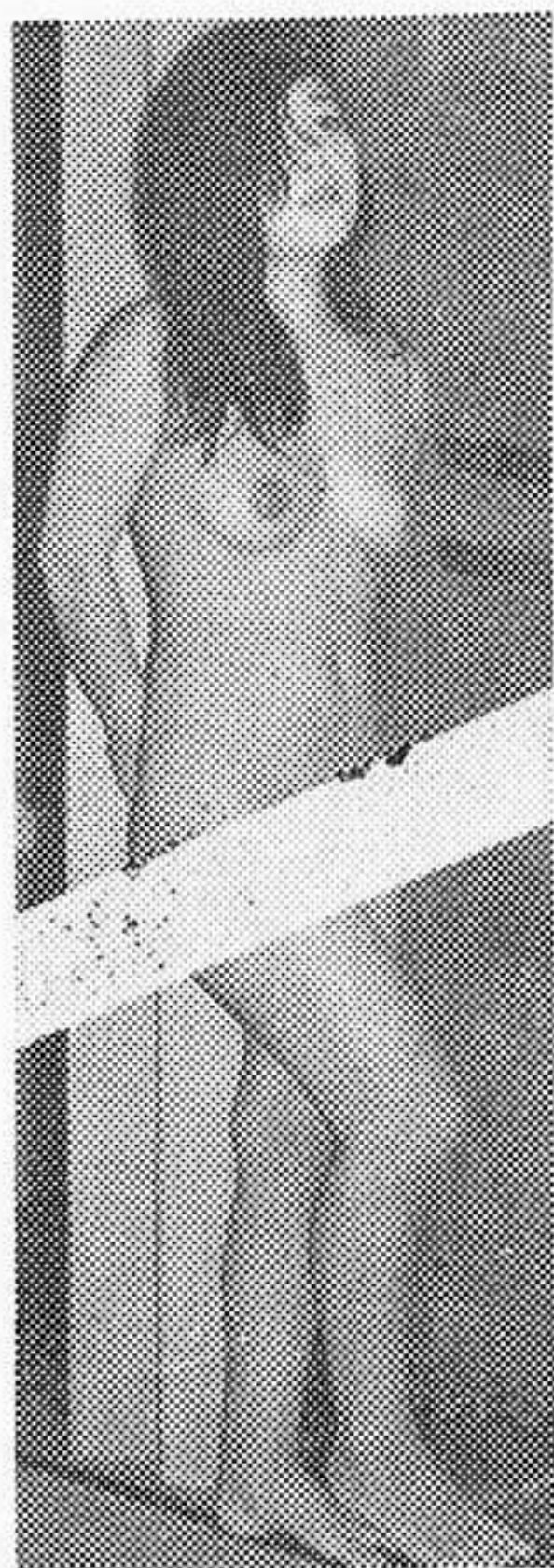
辻 村 隆

毎月新刊号が贈られてくると、先ず眼を通すのが読者通信欄である。ここには同好者のナマの声が、カメラ・ハントに対して、毀誉在りの俚にしるされているから、下手な小説よりは面白い。ついで奇クサロンと私自身の拙稿を読み返し、あとは鬼六さんあたりからボツボツ頁を繰ってゆくのが、私の奇クの読み方であった。

読者通信欄を彩る、女性の方に対しては、どちらかというと、余りハントへの関心を示さない私であった。ひとつには信憑性の問題もあるし、書くことによって、はかききれぬSM的オナニーの役割をもつとめている様に

感じられ、もし実際にプレイの出来る女性なら、わが敬愛する箕田氏より、大抵の場合、逸早く連絡してくれるから、行動性のある女性、ズバリ、モデルを志望してくるか、或いは私や編集部宛の、マル秘ものの便りの方に多いのである。こんなことをいうと、読者通信欄の女性の方にお叱りをうけるかもしれないが、決して他意はなく、むしろ通信欄の女性の方に対しては、人一倍旺盛な興味を抱いているというのが私の本心かも知れない。編集部で住所をきき出して、一度便りしてみたいと思うときもしばしばであるが、ものぐさな性格からか、その気でいながら、なかなか

か実行出来ないというのが実情である。神戸の小杉千恵さんを始め、曾根葉子、藤村由紀子、中野昭子、若宮沙登子、緒方則子の諸嬢——。それに九月号で始めて通信欄に寄せられた、大阪府茨木市の岡本嬰子、神戸市兵庫区の左根敏子(サコンとお呼びするのか、サネとお読みするのか?)さんのお二人も、新しく通信欄に登場されて、同好者を喜ばせている。これらの諸嬢は、勿論それぞれ性向は違っても実の処、私の興趣の対象であった。唯、自分の方から積極的に求めてゆかないだけであって、もし彼女達が、私に対して何らかの意志表示をすれば、忽ちその気になるに



違いなかった。

その一人、可憐な岡本嬰子さんと、それから数日も経たぬうちにプレイ出来ようとは、神ならぬ身の知る由もない僥倖さであった。

× × ×

九月号の奇クが七月の二十二日に到着し、翌二十三日、箕田氏から手紙一通舞い込む。大抵の場合、電話なのに、何事ならんと開封すると、一通の封書が同封されてある。それが茨木市の岡本嬰子から、私宛の私信であった。左記は原文の俚である。

『前略、御免下さいませ。かねがね先生のカメラハントや『花と蛇』の愛読者でございませ。先日編集部宛にお便り差上げたのですが一度書きますと、もう矢もたてもたまらず、先生宛に直接、お便りする失礼をお許し下さい。私のようなものでもおよろしければ一度是非カメラハントのモデルとして縛って下

さらないかしらと無理なお願いですが、よろしくお返事下さいますようお願いしております。私は去年の四月高校を卒業し、一年間瑞浪市の

実家で、家事の陶器づくりの手伝いをしておりましたが、今年の春上阪しまして、唯今は親戚の家のお手伝いをしております。ヒョんなことから奇クの存在を知り、もう一年間ぐらい読んでおります。奇クの言葉を借りていえば、私はM的で、時々独りで自分を縛ったりして楽しんでます。いきなりモーレッツにされると辛抱出来ないかも知れませんが、先生なら、じわじわ縛って下さると思います。いきなり見ず知らずの先生に、この様なはしたないお便りお書きして申し訳ありません。もしお気に召さなければ、なかったこととして、お破り捨て下さい。期待にかよい胸をはずませつつ、お返事お待ちしております。

えい子

これは又意外な便りである。封を切っているから、箕田氏も一応は読んだに違いないのに、ウンともスンともいってこない。早速に

電話すると、信州へ編集会議に出掛けて留守であった。私の一存でやれというのであろうか。しからば――。

お手伝先であろうか、末尾に記されてある電話のダイヤルを廻す。〇七二六局の茨木を廻して、相手の電話番号を指先ではじく。

すぐ繋がって、若い女性の声がモシモシと私の耳朵をうった。直感でお目当てのえい子さんだと感じ、いきなり単刀直入に、

「岡本嬰子さんですか？」

「ハイ、私ですが……」

てっきり私のカンは当たっていた。

「お手紙戴いた辻村ですが、今お一人？」

「ああ先生――。……（しばらく声が途切れている）……嬉しいですわ、掛けていただいで。恰度、私一人お留守番です。何でもお話出来ます」

「やはり日曜日がいいんでしょうね」

「お休みはそうなんですが、先生、お差支えあるのなら、何とか都合つけますけど」

「次の日曜日には、家族の者と若狭へ泳ぎに行くので、土、日とダメなんだがね。よかったら金曜日にどう？ 善は急げってこともあるし……（何が善なものか。不善きわまりなしのくせに）」

「金曜日という二十五日ですわね。急なことでですから、一応お伺いしないといけませんし、もし差支えある時は、先生の方へお電話してよろしいかしら？」

これはお手伝いとして当然である。いくらその気でいても、いきなり短兵急に日を指定されたのでは、彼女の方の都合だってあることだろう。私はそれを諒承して、私宅の電話番号を告げた。しかしこの電話、考えてみれば多分に私の一方的であるが、プレイのことなど、電話でながながと話す必要はない。要は日時場所の打合せだけでいいのだ。

余り地理に精しくない様子なので、国電の高槻まで迎えに行くことにする。茨木だと万一、人眼につくことを懼れて避けたのであるが、私は高槻から京都へ直行する腹をきめていた。時間は正午——。それで私は電話をきろうとした。あわてたように彼女の声が

「あッ、それから、あのう……」

「何でしょうか——」

「いえ、いいんです……分かりましたわ、出来るだけゆけるように考えます。おききしたること一杯あるんですが、お声をきくと何もいえません。いいんです……」

自分でいいきかすようにして、彼女は声を

途切らせた。はじめてのプレイ話に、万感交々、羞恥と期待と不安が、混然とミックスして彼女の胸をよぎったのではなからうか。

もう一度最後に、車のナンバーを告げて電話をきる。私にとっては日常茶飯事に近い電話でも、その要請を受取った岡本嬰子の若い胸は、はちきれんばかりに昂奮にふくらみ、不安におののき、未知の期待に震えていたに違いなかった。

年令が二十才、お手伝いというだけで、私は彼女のそれ以外は何一つ知らない。容貌、性格、身長、体重、ヒップ、バストETC……。いやそれもよからう。知らないのが却って見果てぬ夢への山脈につながっていた。

ハントをするために、孜孜営々と仕事をすのか。ハントは多忙な仕事に対する一服の清涼剤なのか、最近ではすっかり、その見境いすらつかなくなっている。

地球人が月面を濶歩する今、私は只管に、
(日々是好日) 唯、その日その日を最も愉しく過ごせれば、それでいいのだ。言い換えればそれは線香花火にも似た刹那主義の危険さを孕んではいたが——。

× × ×

入道雲が盛り上って来て、薄暗くなったか

と思うと、いきなり大粒の雨が車のフロントを撃った。激しい夕立ち。それも五分足らずで納まって、もう暑い陽が雲間からこぼれ始めている。ねとつくように暑い午下り——。クーラーの入っていない車中で、べっとりと汗ばみ乍ら高槻駅に到着。駐車禁止なので、車中で待っているより仕方がない。

数分も経たぬうちに、車の窓際に寄り添った人影がある。

「辻村先生でしょうか？」

まぎれもないあの電話の声の主であった。

「岡本さんですね。さあ、どうぞ——」

間髪を入れず返事して助手席の扉を開く。おずおず乗込んで来た女性は、私の予想に反して、滅法可愛らしい佳人であった。

肩まである黒髪を無雑作にわけて、黒眼勝ちの、この丸顔の少女めいた娘は、微かな香水の匂いを馥郁と漂わせて、そっとシートに遠慮勝ちに坐った。

「何時頃までいいんですか？」

「夜まで構いません。岐阜からお友達が来阪したといっておりますから……」

「えい子さんとお読みするんですね、むつかしい名前だなあ」

「父がいつまでも子供でいるようになって嬰子

とつけたのでしょう。嬰（えい）は、みどり児とか乳呑児とかって意味だそうです。御存知ない人は、よう子って呼びます」

てきばきと明るい娘であった。一向に人怯じもせず、ハキハキと答える。これが近代娘のいいところであろうか。

私のコルトは京都へ向かって走りつつあった。軽自動車のライトバンは長男に払い下げして、最近コルトを購入したばかりで、未だ二千キロも走っていない。

SMのプレイという行為を、この娘は何もかも承知しているだけに、私はとりわけて話すこともなかった。読者通信女性の中に、このような若い娘が存在していたことが、私にとっては驚異に近く、改めて奇ク of 購読層の幅広さをつくづく思い知らされた感じであった。常套的であるが、この娘が奇クを知ったその動機から訊ねることにした。

「もう一年以上奇クを読んでるんだってね」

「ええ」

「どうして奇クを知ったの？」



岡本嬰子は言い出しかねて、もじもじしている。私は暫くその俛で黙って運転をつづけていた。

「御存知とは思いますが、私の住んでいた瑞浪市一帯は、すべて陶器の町なんです。多治見、土岐、瑞浪から恵那近くまで、製陶工場が多く、街を流れている川はいつも白く濁っています。この川が澄むと、不景気な時だといわれています。私のよく遊びに行く知合いの工場では、近東向けの食器類をつくっていますが、片手間にいろいろと肉筆書きの、男の方達の歓ぶようなものをつくっているんです。その工場のある方が奇ク of ファンです。或る日、机上にその俛投げ出してあった本を

何気なく手にとって、拾い読みしたのが最初でした。悪いと知りつつ、思わずその本をバッグに押し込んで持ち帰ったのです」

「本ドロボーだね」

「きつと、あとで探していたでしょうね。その夜、寢床で読み返し、あれこれと読み耽っているうちに、牀中がカーッとほてりボーッとしてしまいました。恥かしいけれど、すっかり奇クのトリコになってしまったのです。その後、用事で名古屋へ出掛けた時など、かさず買い求めてくるようになりました」

「結局あんた自身、奇クの内容の、何かに惹かれるものを見出したというわけだね」

「ハイ『花と蛇』です。それに先生のカメラハントです。私も機会があったら、先生にこのように縛られてみたいと何度思ったか知れません」

岡本嬰子が、熱いまなざしで、ジーツと私を凝視しているのを、運転する手の傍らから感じた。

「京都へ出るつもりだけど、どこかで食事して、まあゆっくりとプレイしようね。兎も角暑い——。何かあんたの希望ある？」

「希望なんて何もありません。先生のお好きなようになさって下さい」



「お気に召すままってとこだね」

「ジュンとネネのそんなタイトルの唄、流行はやっていますわ」

「ところで先程一寸いつてたけど、その工場で作っている、男性の歓ぶものって、具体的にいつてどんなもの？」

「あら、先生、御存知のくせにいやですわ。

ホラあちこちの温泉場とか、みやげもの店でよくみかける、盃に仕掛けてあつてお酒をつぐと面白い絵が浮き出すのがあるでしょう。

あれなんです。大皿や、徳利や、灰皿、箸置きなど、いろんなものをつくっています。でも市中で一般に販売されているものは、殆ど

多治見辺りで、大量に生産されています。その工場では、大っぴらに売れないものを、そつと内緒でつくっているんです。本職の絵描きさんより精密に、上手に彩色して書く職人さんがいるんです。名人芸ですが、浮世絵の模写なんか、すごくうまいんです」

「いわゆる、そのものズバリのセックスなんだね」

彼女は、だまってコクリと

うなずいた。

「そのおじさんは私が遊びに行くと、恰度描いている時なんか、えいちゃん、結婚した時の参考に見ていきな——って、みせてくれるんです。顔が真赤にホてるような絵柄なんです。が、いやらしいというより、何か芸術を感じるので。大皿一杯に描いた浮世絵皿は、とってもいい値で売れるそうです。それだけに沢山はつくれません」

「一度、見学してみたいな」

「そのおじさんが奇クファンで、お家には、縛られた女の責め絵なんかの屏風を持っています。陶器が描いたのです。陶器

の人形の裸像なんかも、すごくヘンなの沢山もっていて、一度みせてやるといいですが、私、余りみない様にしてきました」

「えい子さんから頼めば見せてもらえる？」

「何かルートがあるそうで、いきなり頼んでも、みせたり売ってはくれません。今度帰った時、機会をみて頼んでみますけど……」

所謂、禁制品をつくりつつ、その人自身も楽しんでいられるらしい様子であった。全国の温泉街や好事家のルートは、こんなところにあったのか。尚も興にのってききただと、男形、女陰などをお守りと称して売る、あちこちの神社の、お守り製造元は、すべて、この辺り一帯の陶器の街の製品であるとのことであった。はしたなさから口を濁しながらも、彼女は年令以上に、男女のセックスに関しては案外、知っているに違いないと思われるのであった。

「瑞浪市（みずなみし）って、どの辺りになるのかね」

「名古屋から多治見へ出て、土岐市の次なんです。国道十九号線の広いバイパスが出来てから、すごく便利になりました。名古屋へは一時間もかからないくらいです。近くに白狐とか釜戸とかいう温泉もあって、いいところ

です」

「一度機会があったら訪れてみよう。その時は一緒にね」

「ええ、愉しみにしておりますわ」

「でもどうして大阪なんかへ出てきたの？」

「母が再婚したのです。私どうしても新しい養父となじめなくて、それで亡くなった父の弟の茨木のおじさんを頼って出てきちゃったんです」

「それじゃ、お母さん淋しいだろう」

「私、長女なんです。弟と妹が一人ずつと養父の方に女の子二人いるのです。とっても大変だと思います」

「お母さん、未だ若いんだね」

「四十になったばかりです」

とりとめない家庭の話などするうちに車は京都に入る。うだるような暑さ——。早く冷房のよく効いたホテルにしけ込みたくなる。

この娘に対しては、改めてプレイへと誘う手間が省けるので助かった。私のハントを毎月かかさず読んでおり、彼女自らが、「花と蛇」の如き被虐女性を希んでいるとすれば、ハナシはラクである。

いつも、ハントする度毎に、もうこちら辺りがそろそろきりあげ時と思うくせに、その



舌の根もかわかぬ先から、新たな次の女性を求めて遍歴する私である。奇クのハントに対する批評にも往々マンネリズムを指摘されており、その事実を私も認めている。しかし真実にハントした場合、その一人一人に、どれ程の変化があるというのであろうか。小説の様に千変万化というようには到底ゆくまい。

又、そうそう珍奇なタネが転がっているものでもない。所詮は会って、話して、しけこんで、縛ってプレイして、あわよくばものとして別れる——。それがハントの常套手段ではなからうか。こうした基盤の上に立って書くハントは、結局、縛る対象の女性が、次々と変わってゆく、それだけのものではない筈であった。私は私なりに内容に変化をもたせ、幾分でも読んで頂く方に退屈をさせぬよう、幾許かの、フィクションも混えて書いてはいても、もう五年近い毎月の間には、そう月々変わった女性も登場しないのが当然である。それが、私をして、ハントへの筆の意欲を減退させる最大の原因でもあった。だから、よく指摘されるように、前口上が長いとかダラダラと原稿料かせぎだといわれても、それがプレイへの段階の道すがらであれば、それを書くことによって、いくらかでもハントの意欲を維持させる要素になっているのである。私も家庭では人並の夫であり、月並の父である以上、五年の歳月に亘る毎月のハントは相当地に負担である。好きでプレイして、筆にせず、独りDPEして愉しんでいる同好の士が時には羨ましくも思うのである。

岡本嬰子のカメラ・ハントにしても、読者



通信によって知り得た、極くありきたりの、被縛希望女性に過ぎない。これといって、とりたてて書く程のこともない。現在進行形でこれから、どのようにプレイ出来るかが、未知であるという以外、これはむしろ安易なハントの手段であった。しかし世上言うエロモノの出生の秘密を知っただけでも、私は何

となく心楽しかった。

平安神宮の大鳥居の下で車を止める。京都も駐車出来て食事出来るところは追々と少なくなってきた。数カ月前、左近麻里子と食事した「アリーナ」に入る。

暑さのせいか人通りも疎らで、岡崎公園辺りの蝉の聲がかしましく、夏の京は静かであった。大阪なら、今日天神祭で、それこそ、どこもかしこも車でごった返している。暑さを避けてしげ込むアベックで、どここのホテルも、かなり混雑しているに違いなかった。

偶然といえば偶然だが、先程岡本嬰子がフト洩らした、ジュンとネネの「お気に召すまま」が流れてくる。

「お気に召すまま いじめてね

いけないわたしを 叱ってね

甘えてばかりいるときは

わざと冷たく するんだよ……

まったく奇妙な唄が流行るものである。それがレスビアンまがいの、娘二人が歌っているのだから、倒錯の世界は歌にまで、いつしか、じわじわと浸透しつつあった。

お気に召すまま、うんと虐めてやるか。岡本嬰子は、はしなくもそれを希んでいる。この唄を歌うネネに、どこか面影の似た彼女に

私は疼くような意欲を燃やし始めていた。

これからのプレイのひとつときを考えると、流石に胸がつまるのか、彼女は折角とったスペシャルランチの、半分も喰わずにナイフをおいた。

「どうした、たべないの？」

「ええ、何だか胸が一杯——」

「怖いのか？」

「ううん、怖くなんかないんです。でも生まれて初めての体験でしょ。それだけに……」

「嬰子ちゃんは初体験、経験済み？」

「そうみえます？」

「いや、分らない」

「御想像にお任せしますわ」

想像に任せると言う言葉は女の場合、大体経験済みといってよかった。ヴァージンならきっぱり否定するからである。

「関係ないんですよそんなこと、ハントと」

「ああ、関係ないね。でもプレイのやり方が幾分、変わるかも知れない」

彼女はフト真剣な面持ちになった。それからしばらく間をおいて独り呟くように、

「本当は失恋しちゃったんです。それでその苦しさを忘れようとして、家を出たんです」

私は黙々とフォークとナイフを動かしつつ

けていた。沈黙が相手を尚更、雄弁にするものである。てっきり彼女は自分から告白を始め出した。

「よく遊びにいった工場の若い彼と……」

でもプラトニックでした。私、隠してしましたけど、本当は先程お話しした、例の絵描きのおじさんとかへ、興味半分に遊びに出掛けたのです。いろいろと見せてもらっているうちにヘンな気持ちになってきて、ついおじさんに体を許しちゃったんです。そんな絵や沢山の陶器の製品をみていると、そんなことが何でもないような気持ちになってしまったんです。おじさんの計画にまんまと嵌ったんですわ。別段体をどうしたっていう程の気持ちもなかったんですけど、おじさんから二度、三度と挑まれ、芸術のためだといわれて色々なポーズもとったりしましたが、そのことが、彼にばれちゃいました。夜呼び出されて、白く濁って流れる川のほとりで、滅茶苦茶になぐられました。それで二人の仲はおしまいになってその時、始めて大変なことをしたとポロポロ泣きました。いっそ面当てに、奥さんを亡くしてやもめ暮ししているおじさんと一緒になつてやろうかと思いましたが、三十五も年が違うのでやめました。おじさんからかなりM的

なことを吹きこまれましたわ、その時——。

それが私の心に、しこりとなって今も生き続けていますわ。バカな女でしょ。私って若いのに」

「いや、そんなものだよ世間って……。私だって、プレイで興がのれば、いつ何時、狼になるかも知れない。男ってみんなそんな素質を持っているんだね」

「こんな話、誰にもしたことはないのに、先生だと分って貰えそうで、何もかもお喋りしちゃいました。御免なさいね」

岡本嬰子は一旦終えた筈の食事を、何と申ったか再びフォークとナイフを手にして、ボソボソと口にし出した。喋り終った途端、心の重荷の幾分かがおりて、空腹を覚えたのかも知れない。

「アリーナ」の扉を押して直射日光に当たるとムーンとした熱気が肌を包んだ。締めきっておいた車の中は更に暑い。アクセルを踏むと最寄りのT苑へ一気に突っ走っていった。

×

×



湯上りの肌をバスタオルで包んだ俤、彼女はファンターを旨そうにのみ干している。

既に逸早く、緊縛とフォートの準備を整え終り、私は彼女の湯上りと交替に、汗を落としてバスに駆け込む。シャワーを浴びてさっぱりすると、生気が蘇って来た。もう十日以上も碌すっぱ降らない雨で、地球上は乾ききっている。

クーラーを強にしても、さして涼しさを感じない暑さにうだり乍ら、やっと私はプレイの想念に頭を走らせつつあった。

パンツ一枚の素裸でカメラに向かう。「あら、先生——随分おなか出ていらっしや

るのネ」

彼女は、私の一向に身のしまらないブヨブヨの体の、そのくせ腹だけは妊娠七カ月ぐらゐに飛び出した肉体をまじまじとみて、やや慨嘆調でいった。それでも糖尿以来、痩せた方だが、肉体労働をしない体は、所謂、豚肥えという奴で、全然しまりが無い。

「中年男の豚肥えに幻滅を感じたかね？」

「そんなこと……」

えい子はクスッと笑った。

「さあ、そろそろ始めよう。その柱に立って御覧——」

「何もつけないで？」

「ああ、ヌードがいいね」

彼女はバスで濡れそぼった黒髪を掻き上げようとせず、パタリとバスタオルを外すとすっと柱を背に立った。若い体に似合わず毛深く、臍の傍らの、かなり大きいホクロが白い柔肌にくっきりと印象的であった。

柱に手をやって、無難作にえい子はさりげないポーズをつくって立っている。やや乳量の濃い、かたちよい乳房が、ふっくらと盛上って、すがすがしかった。乳量の彩どりの濃さが、男の愛撫を知っているかのように、白い肌にくっきりとしたコントラストを描いて

いた。ハントで周知の斑ら紐をとり出すと、

先ず手始めに、軽い緊縛からかかる。縄を二本にして首にかけて交叉し、乳房の下から腋へ廻して、腕から胸をぐいぐい締め上げると余った背に廻した縄で両手首を背後で縛る。縛ってゆく手に、微々と震える彼女の肌の、さざなみのゆらぎを感じとって、私は始めて縛られる娘の心の動揺をじかにさとした。

「震えているね」

「昂奮してるんです」

妙な表現をしてえい子は作り笑いをした。精一杯さりげなく振舞っているように見えても、その実、彼女の内心は不安と期待と悦虐

におそれおののいているかに見えた。腕の毛深さが、チラリとこの娘の好色さを覗かせているように、ブツリと盛り上った乳首に、思わずしゃぶりつきたいような衝動を感じる。

「どう、念願叶っての縛られた気持は？」

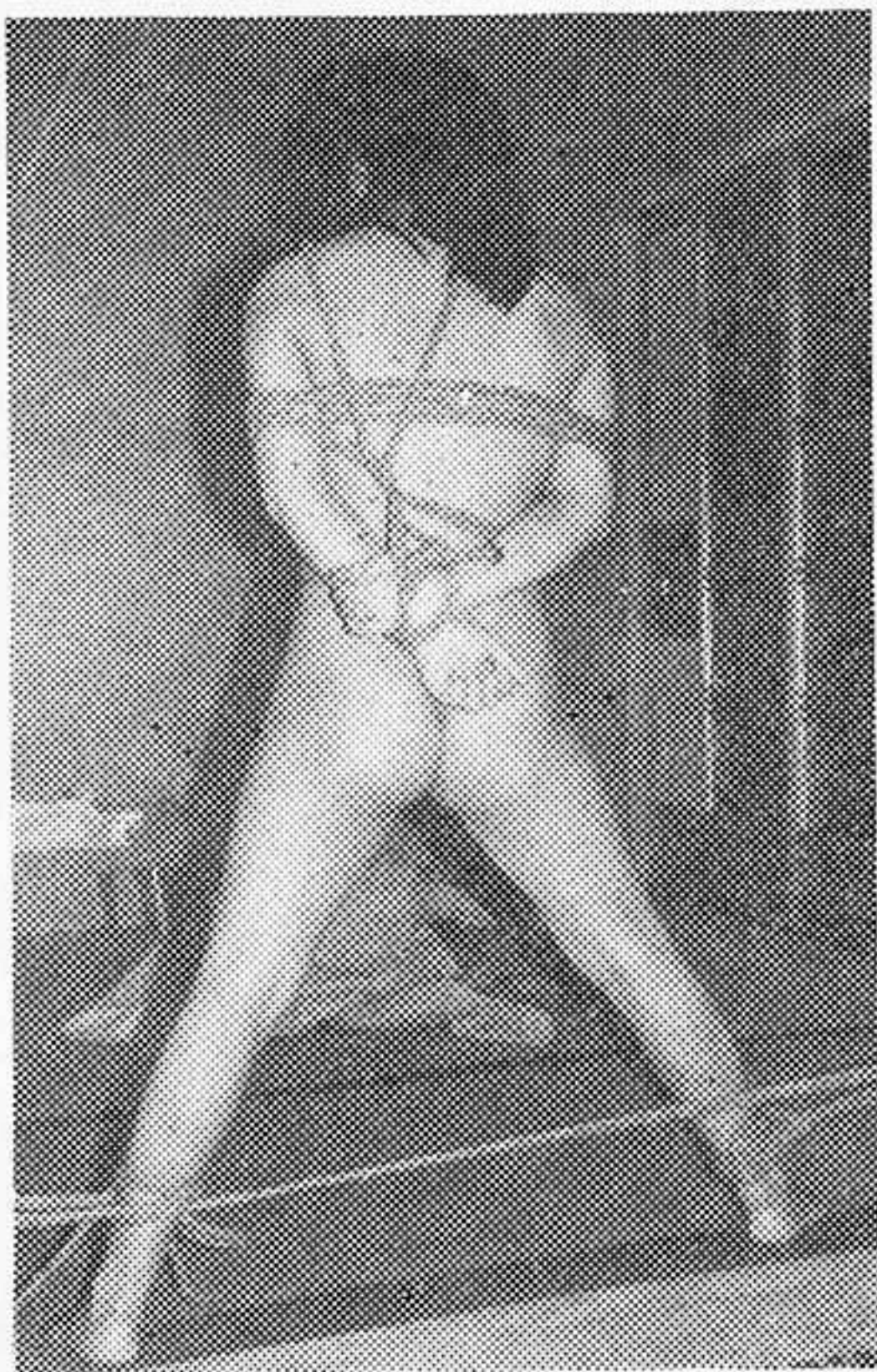
「ウン、たまらない——
もったときつく縛ったって

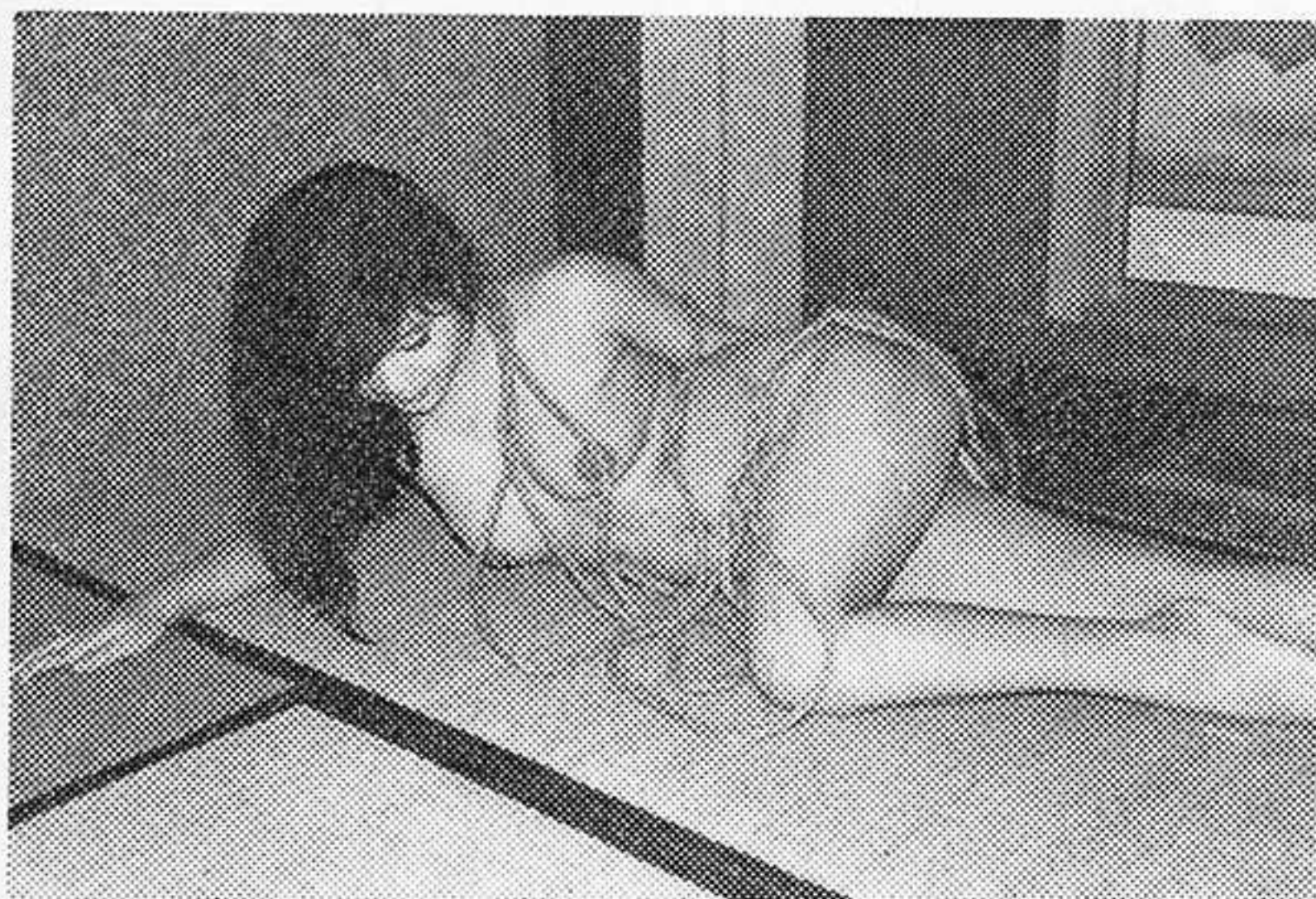
構いません」

「ああ、ボツボツとね」

岡本嬰子の眸は徐々にうるんでくると、いっしか陶酔に似た表情が泛かび上ってきた。

この間の正面の壁がV型に区切られているその壁面へ後手の縄をとって引っ張ってゆくと、V型とは対照的に、下半身自由の裸身を大きく広げさせて直立させる。これは卓抜のコントラスト。交錯V字が私の臉にありありと灼きついていった。うっとりとした表情でえい子は私の命ずる俤のポーズを易々としてとっている。そして愛らしい瞳はしっとりとうるおいを帯びて、この羞恥のポーズを、え





い子自身愉しんでいるかのようにであった。近頃好んで使用する携帯バイブレーターをとり出すと、えい子の敏感そうな肌にあてる。ピクリと体を躍らせて、彼女はいきなりヘタヘタとその場にしゃがみ込んでしまった。

「いや、いや、やめて——」

「いや、やめない。もっともっと虐めてやる

から——」

うわ言のように叫んで、私は打伏したえい子の体を抱き起こすと、次の間の、洋布団の敷いてある間の間まで抱えてゆき、どさりと布団の上に落とす。転々として、えい子のポーズは次々と変化してゆく。それに閃光がたえまなく走った。カメラをおくと、ゆっくりと煙草に火をつけ、深々と吸い終ってからえい子の体に近づいてゆく。

「いやッ、ヘンなことしないで。ねえ先生、お願い、それだけは許して——」

私が或る行為をすると思ったのか、えい子は必死にもがき乍ら叫んだ。しかしその叫びは、これからの行為に対する自己弁護のように私にはうけとられた。

その錯覚に苦笑して、私は報酬として、いきなり彼女のおしりをパシリと大きな音を立ててぶってやった。

「痛いッ」

うっすらと桃色の掌のあとが、くっつきりと白い肌に浮き上る。もう一発、二発、シリ打ちすると、いきなり両手を握って、ぐいと屈曲させて、海老に折り曲げる。双丘のひだがくっつきりと私の眼前にある。尚もじわじわと曲げていって、両足首が黒髪の頭上をこえて

洋布団にタッチする。双丘が体の中心に突出して、羽二重餅のような臀の丸みが食欲をそるように眼近にそびえている。

「ウウン、く、くるしい、離してエ……もう許してエ」

きれぎれにウンウンいい乍ら、えい子は太腿の下から喘いでいる。

両手を離すと、その俣横にどさりと倒れ、苦しげにハアハアと大きく息を吐き出していた。

「ハントのフォトは氷山の一角——。これが本当のSMのプレイだよ。これは序の口だからね。本格的に縛って、虐めるのはこれからさ。覚悟はいいね」

無意識に首を振って、身をかがめている。

私の嗜虐の血は急激に湧き上ってくる。打ち伏すえい子に俄破と近寄り、わざと縄を素早く解いてやった。自由の躰で、どの様に行動するか、確かめたかったのである。相対ずくの緊縛ではなく、嫌がる女を縛ってゆく、SMのプレイに誘導してゆきたかった。女はそうされることによって尚更にM性が昂揚し、無理矢理、自由を奪われたという、諦観の被虐が、一層悦虐をかり立てる結果になるのであった。私は今それを試みようとしていた。

私の言葉は唐突に粗々しく変化する。

「いやなのかい。何がいやだ。もっと虐めてやるから……」

「あッ、許して」

女は身を精一杯にくねらす。パシリと音を立てて、えい子の背を平手で打つ。身をすくめて、呀っと彼女は萎縮する。その腕をとると、私の手のうちの縄は、蛇のように彼女の両手にからまってゆく。のしかかるようにして、乱暴に後手縛りにすると、上半身の浮上った裸体に、早縄をかけてゆく。あッ、あッと呻いて、えい子は力弱くもがく。

「いや、よして。あッ、あッ」

断絶して悲鳴に近い拒絶の音が響く。それが一層、私の心をあふり立てる。粗々しく上半身を縛り終って一息つくと、真紅の布片を二つ折りして、猿轡をはめる。私の手は尚も生き生きと動いていた。投げ出された片足首に別の斑ら縄を結びつけると命令する。

「さあ、あそこに立つんだ。早く立たないか」

ノロノロと諦めた様に、彼女は腰をあげて立上る。足首を縛った縄を、硝子襖の下部の棧になった空間に通して折返し、反対側の床柱に廻して引っ張ると、えい子の自由の足を手に抱えて、上体が倒れぬよう、そろそろと

一杯に抔げさせてゆく。

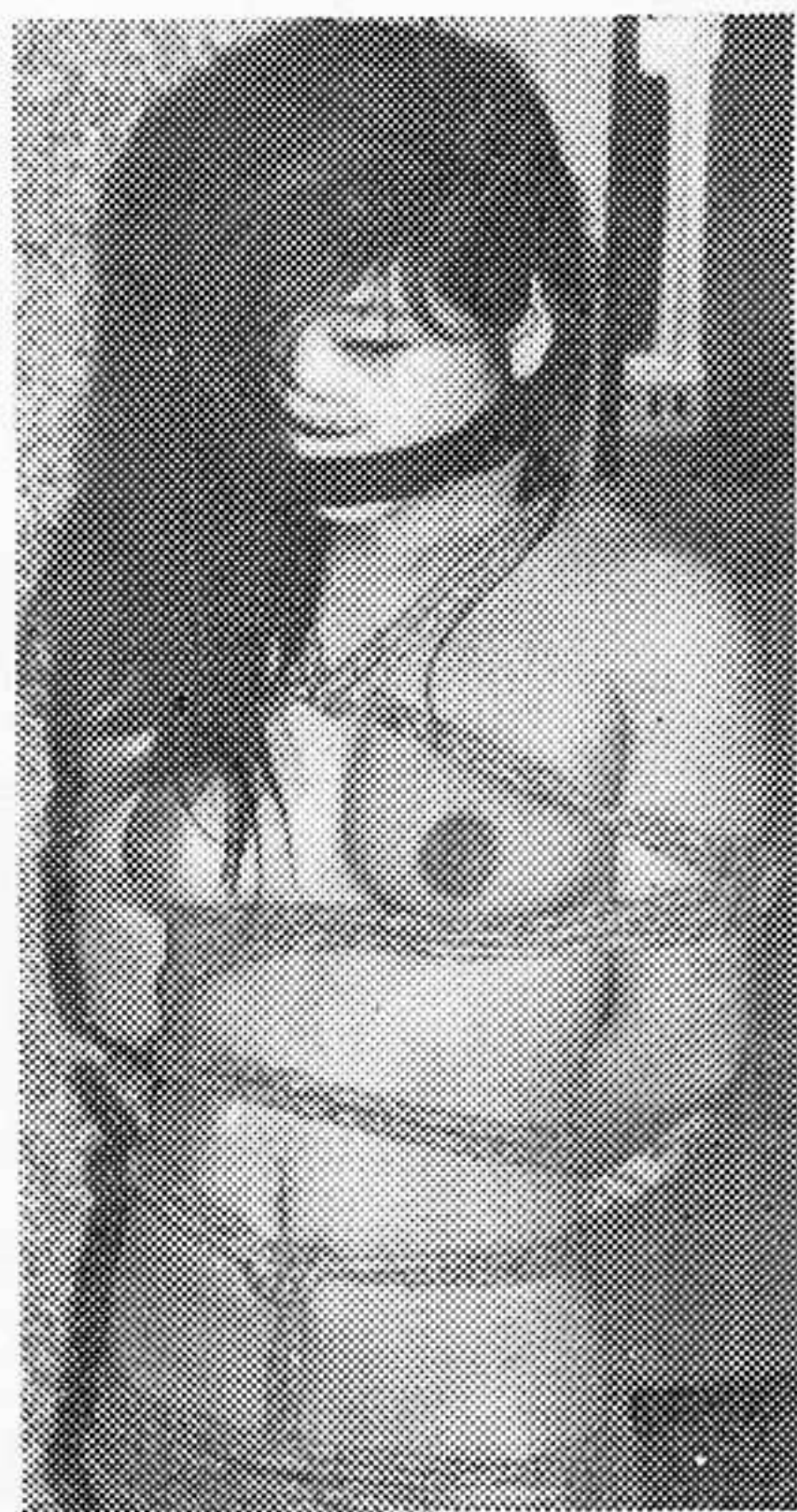
えい子は、もう拒まなかった。自分の意志で徐々に大きく開いていった。

開ききったところで足首に縄を巻きつけて縄尻をとめる。部屋と閨房との仕切りは小石のしきつめたタイル張りで、その中心が鏡になっている。どう

いう目的で、ここへ鏡を嵌めこんだのか分らないが、プレイにとっては好適の位置であった。その鏡にありありとうつし出されて仰ぎみる迄もなく羞恥が限なく反映していた。

「さあ、うつむいて御覧。よく見るんだ」

言葉につり込まれて、えい子はうつむき、自分の反映をまざまざとそこに見て、ハッと眼を閉じ、首を立ててなおした。見るに忍びなかったのであろうか。そのくせ、うつとりとした表情の中には、まざまざと愉悦が充満してあふれていた。このSMのプレイ中で、彼女は羞かしめられ、虐たげられることによって、より歓喜に燃えているに違いなかった。拒否の言葉とはウラハラに、女はそうされることによって、尚更燃え上ってゆくものであ



ろうか。小型携帯バイブがジーンと物頼い音を立てて、えい子に近づくとき尖端の一粒の桜桃にふれる。ああと悶え、猿轡で押し殺された悦虐の呻きが、わなわなと震わせた身体から、虹となって吐き出される。くぐもりの声が入大くなり始めた頃、バイブは下降線を辿り始めた。のけぞるのを、黒髪を片手でぐっと引き掴み、その赤裸々の女体責めを見よとばかりうつむかせる。くぐもり声は、（やめてえ）とも聞こえ、それが（もっと）と叫ぶようにもとれて、私のプレイの手は、根よく続けられていた。恍惚の一段落がつく迄私は微動する、この電撃を続けるつもりであった。

黒髪を掴む私の手に、その時ゆらりと上体



け出した俤、激しく双丘を波打たせて喘いでいる。眼は閉じられ、外した猿轡の唇は、だらりと半開きになって大きな息遣いをくり返していた。じっとそれを見つめる私の心中は、そうした思い掛けぬハプニングのプレイに、いきり立っていた。

解き放した縄を身体に絡ませたまま、えい子は、かなり長い時間じっとしていた。

フト夢からさめたように、のろのろと体を起こすと、満ち足りた、どんよりとした眸で私をみた。その眼に陶酔のあとの虚脱がうつろに浮かんでいた。

「どうしたのかしら私、フーツと気が遠くなつたみたい。恥かしいわ」

パツと羞恥が蘇って、えい子は裸身のいずまいを直した。

女が女である欲びを、えい子はこの時、判つきり悟ったようであった。

「失神していたよ、しばらく——。こいつが失神させた犯人だがね」

私は意地悪く、小型の桃色のパイプをみせ

びらかすようにかざす。

「本当？」

「本当だとも、私は何もしないよ。すべてはこれのせいさ」

「いやーだ。私はまた、先生だとばかり思ってたのに……。ガッカリだわ」

「ガッカリで悪かったね。私のプレイには近頃これがつきものになってね、専ら欲ばすことに専念しているよ」

「ハントにいつも出てくるのは、これね。私始めてみたわ、何処に売っていますの？」

「大人の玩具屋なら大体どこだってあるよ」

フトえい子は、物欲しげな眼付になった。一個五、六百円のシロモノ。自らの慰さめにくれてやるか。

「進呈しようか？」

「いいの？」

「ああ、又買うさ。女はチト買いにくいからね。本来の役目は、お顔のマッサージってことになってる。試してみるといいよ」

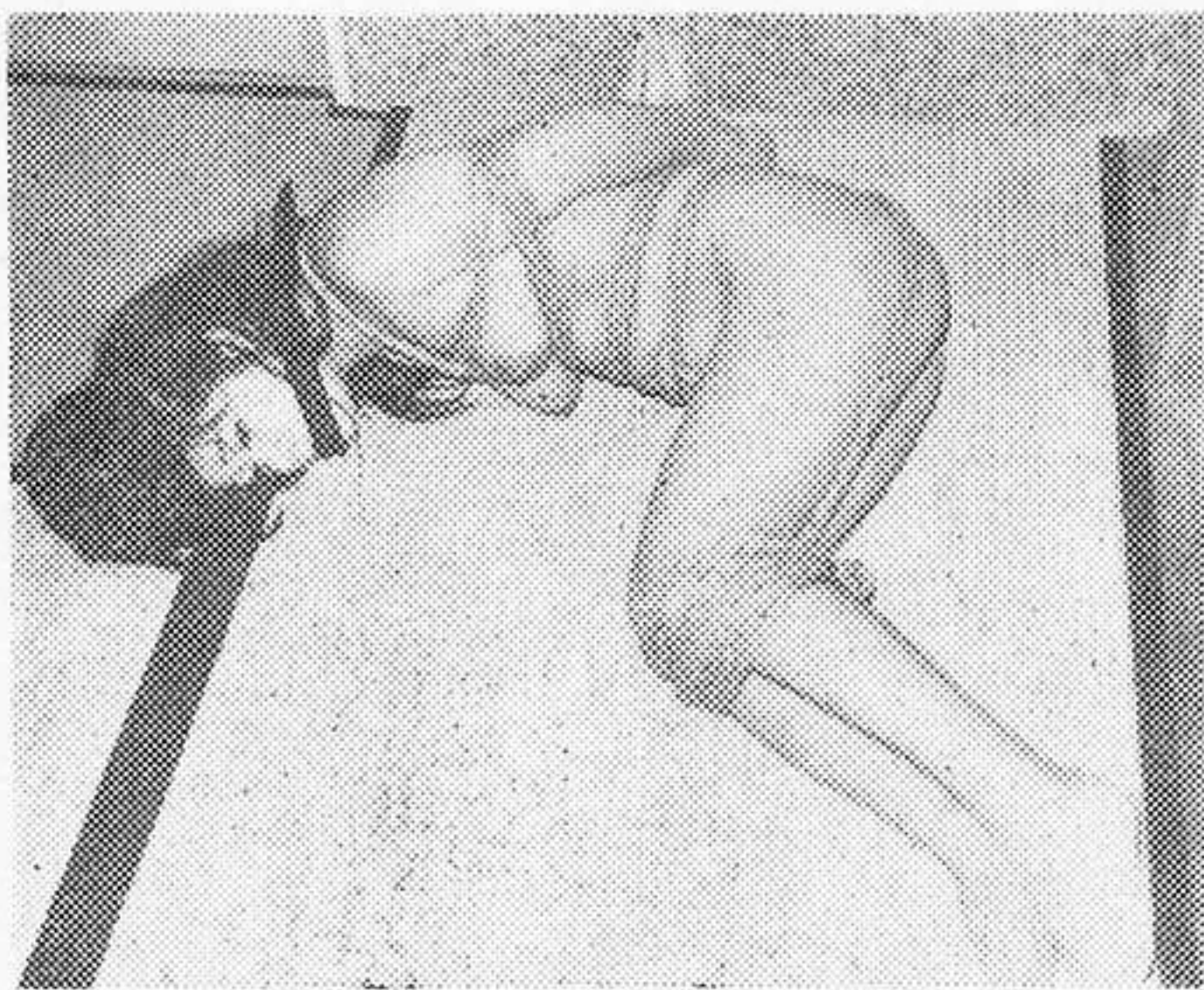
使い方を説明してやると、えい子はパイプをそろそろ回転させた。接触部分がタツチした途端、いきなりブルンと響いて思わずパツと落としてしまう。可愛い現代娘は、これで大いに独り寝の夜を愉しむに違いない。

が傾いて、もたれ込んで来た。もし手をはなせば、えい子の体は、前か後ろか、そのどちらかへ、もうこらえ性もなく、ドサリと倒れるに違いなかった。第一次の快樂の境地が、今は見栄も外聞もなく、えい子を絶叫させていた。縛られた足の爪先が空にのけぞって、忘我の境に陥っていった。若い娘は、どうしてこうも易々と失神したがるのであろうか——。

縄をとき放した今も、えい子はぐったりとのびきっていた。仰向けに大の字に転がって虚飾も羞恥もかなぐり捨てて、すべてをさら

一旦失神した我が身を、私の前にまざまざと曝していたと知って、小憩の間、岡本嬰子はすっかり大胆になり、かなり突きつめた、猥らなセックスの話へと飛躍していった。カメラ・ハントの女性との交渉は、殆どセックスを伴うものなのかとか、女性によって歓喜の程度の差異はどの様なものなのかとか、ハントの女性某や某は、好きなのかとか、次々に訊ねるのであった。適当に受け応えしていたが、その質問は次第に露骨になり、果ては私が幾人との女性と交渉をもったのかと迄きかれて、ホトホト返答により、急拠話を打ち切ると、プレイの続行を彼女に告げたのであった。急に興味を断ち切られて、岡本嬰子はやや不満気であったが、思い直したように、素直に両手をうしろに廻した。

柱に立たせて雁字搦目に縛り上げてゆき、臍下で結びめをつくると、深々と股縄をかける。股縄の端が後手に縛った縄に連結する、更にその部分を蔽って、ぐるぐる巻きに腰から下を縛ってしまった。猿轡をはめて、かなり強烈な緊縛の行程は終わった。カメラに納めたあと、どんと背後から一突きすると、よたよたとよろめいて、ドサリと前に倒れる。そ



の体を足蹴にしながら、たたみの上を、ゴロリゴロリと回転させてゆく。ウンウン唸りながらえい子はこの嗜虐に必死に堪えていた。転がすうちに腰の縄がゆるんでくる。えいい面倒と許り、その俛、引き絞って、ゆるみを締め直して膝で縛り直す。虫さされ一つない形よい両肢が、すんなりと伸びて、双曲線を鮮かに描き出していた。再び私はバイブを手にとすると、縛られて横たわっているえい子の

双丘の背後から、ゆっくりと当て始めたのであった。

確かに昔にくらべて、私のハントは変わりつつあった。近頃は必ずといってよい程、この種のものが登場する。今や緊縛は一つの前戯であり、本命はこちらにあるようにすらなってきた。のたうって歓喜にむせぶ姿態を、まざまざと見るのが、プレイの目的であるかのようにあった。大人の玩具の、セックスに関するものは、十中八九までが女体を欲ばすものであるのも、男が歓喜する女身をみて又自らも喜ぶその何よりの証拠ではなからうか。時代と共にプレイも変わってゆく。責め、いためつける前に、苦痛が快楽に変化しなければプレイの醍醐味はないといっても過言ではなからうか。東映や日活の一連の性愛路線の映画が、残酷な責苦をもって事足りてしまっているのは、真のプレイを知らない企画であった。その企画によって演技の片棒を担いだ私が、そうしたことをいうのも可笑しいが、残酷や責苦に終始しては、所詮、奇クのプレイという言葉とは追々と違った方向へと走ってゆくのを製作者自身気づいていないようであった。だからホンの一部の人々によって問題視されるだけであって、奇クの



大方のファンには大いに物足りぬ原因もそこにあるのではなからうかと考えるのである。SMのプレイは、女も歓喜し、男も悦虐に喜悅してこそ、真のプレイの成果があがるのである。徒らに虐めることのみに終始するのが真のSの姿ではない。嗜虐の果ての快樂。被虐の前戯のあとにくる悦樂がプレイの真髓だと私は思っている。

今、岡本嬰子をじわじわ虐めながら、私自身快樂に酔い、彼女も亦、あらぬ呻きをもらして隨喜の涙を流していた。しかも第二次のエクスタシーに向かって私の執拗な奉仕は飽くことなく続けられていた。数少く縛って相手に快樂をもたらす方法に私のハントは変化しつつあることを、私は判っきり自認している。その私自身の男性は、否応なく受感しながらも、この行為で、いつしか昇華されてゆくのであった。これはそろそろ中年期を過ぎる男の、哀れなプレイの仕方だと笑う人もいるかも知れない。しかし、女性と違って男は、一旦ハッスルすればハイそれまでという状態を考える時、貝原益軒の養生訓でもあるまいが、接して洩らさず式の一変型というのが、私の今のプレイの心境でもあったのである。独りよがりかも知れない。しかし私は私なりのプレイの方法で、飽くことなく、ハントの女性を次々と喜ばせつつあったのは事実である。肉と肉のつながりは余りにも退屈であり、平凡である。女体開眼のプレイの手段は未開拓に等しい。その未開拓の女体へ、私の独りよがり果てしもなく探求をつづけているのであった。

第二次のエクスタシーが襲い、岡本嬰子は

又しても息もたえだえに錯乱していた。じっと見ろす私の眼は、してやったりという、会心の笑みが、いつしか私の心をべっとりと濡らしていた。

この娘に、未だ鞭打ちの洗礼が残されていた。自ら求めて私のハントの対象となった彼女に、最後のプレイの仕上げをすべく、のろのろと女の縄をときにかかった。

× × ×

「もうダメ、くたくたになったわ。ボーツとしちゃって何が何だか分らないの。意識が薄れてゆくのよ」岡本嬰子のあどけない顔に、じっとりと脂汗が浮かび上っている。

流石に私も疲れを覚えていた。フト仕上げに逆さ吊りしたい欲求にかられたが、今の体力をもってしては、いかに彼女が五〇キロ足らずとはいえ、到底無理な様な気がして、これはあきらめざるを得なかった。

ぐったりした嬰子を抱き上げるようにして立たすと、両手を、それぞれ鴨居に吊り下げる。輝のような簡単な股縛りをして、私はカメラをとり上げる。夏の女のたしなみか、彼女の腋窩は剃っており、僅かの短い腋毛が生えかかっていた。局毛に比例して、懼らくは濃い腋毛を持て余して、自ら剃毛したのであ

ろうが、それが妙になまなましく、セックスに結びつく思いであった。えい子は、もうどうにでもなれといった表情を泛かべて、私のなすが俚になっっているが、かなり疲労の色が濃かった。プレイの初体験が、余りにも強烈すぎたのか、放心状態といった方がふさわしい無表情さであった。その無表情さを払拭しようとして、更に別の縄で、首に縄をかけて、しまらぬ程度すれすれに鴨居に吊る。

「最後のプレイは鞭打ちだよ。いいね、我慢出来るかい」

力なくえい子は吊られた首でかすかにうなづいた。もう返事する気力も薄れているというのであろうか。

斑ら紐を四つ折にすると、ごく軽く撫でるように臀部に走る。少しよろめいて、ぐっとこらえる。次第に私の縄鞭は強さを増してゆく。苦痛によるめきつつも、えい子は微かな疼痛の呻きを洩らすのみで忍耐していた。しかし痛苦のみで、悦楽の表情は泛かび上らない。悦楽に結びつくものがないのである。それでは先に述べた快楽の哲学に反する。ここは重複しても、今一度バイブの登場を願わなくてはならなかった。

呻きが嬌声に代り、恍惚に変わっていった。

私の鞭が力強く、えい子の臀部に打ち下されても、悦楽の呻きとなってはね返り、体の疼きを耐えようもなく、えい子はおこりのように体を震わせ始めていた。縄がバイブを押えて、身もだえと共に、いよいよ機能を発揮せしめているようであった。足踏みが始まり、異様なステップが激しくなる。そっとズボンのバンドを引き抜いてくると、この黒の帯革が、いきなりパシリと激しく彼女の尻を撫で過ぎた。流石にあつと痛さに呻いたが、その疼きが快楽にミックスされて、鞭打ちも次第に快いものになりつつあるのか、えい子の声に甘い響きが籠っていた。

必死に身をくねらせて身悶えする彼女に、帯革は激しさを増して間断なく飛んだ。白い双丘が条々と桃色の線に染め上げられ、赤味を帯びてきつつあった。

緊縛もバイブも鞭打ちも、生まれて始めての筈の岡本嬰子が、そのすべてに堪えて、随喜の涙を流し陶酔に身を委ねている。が、果たして、今日が始めての洗礼なのだろうか――。それにしても、いくらM性を自認する彼女とはいえ、余りにも放恣に過ぎ、耽溺にはまり過ぎる感じであった。フトきざすプレイの疑問が判っきりした形をととのえて、その

死角に、瑞浪のエロ絵師の姿が浮かび上ってくる。浮かび上ったその男の容貌は、何故ともなく上田吉二郎のようなタイプを想像させた。鞭打ち責めの手段として私は問いかけて詰問し始める。

「さあ、白状するのだ。エロ絵描きに縛られたのだろ。どうだ――」

「……」

「縛られていい思いをしたのだろ。ええッ」
かすかに、うなずく。

「判っきり言うのだ。縛られたのだろ」

「ハイ」

「縛られましたといえ」

「縛られました」

「何度プレイした」

「一度だけ、いえ、二度です」

「もっと縛られたのだろ」

「忘れました」

「忘れるぐらい多かったのだな」

「ハイ」

「縛られて、どうした」

「ピシッと鞭がとぶ」

「縛っておいて、セックスを……」

「その男の年はいくつだ」

「五十三才でした、その時」



「大皿の絵には、私の毛がうわぐすりの下に塗り込まれてあります」

「描かずに実物を使ったというんだね。では剃毛されたというわけか」

「ハイ」

その大皿というのを一眼みたい思いに、かられる。有りとなれば実に珍奇である。

「もう何でも話します。お

「お前は？」
「十八才です」
「何故そんなに年齢が違う男と度々プレイしたのだ」

「始めはいやでした、縛られて、体中いろいろと触られているうち、段々好きになったのです」

「お前の縛り絵を描かれたのだろう」

私は前後不覚、まるで酔ったように、次々と乱れた質問をつづけていった。その間にも帯革のムチが折々とんだ。

「屏風の絵と、それから羽織の裏絵と……」

「それから……」

じさんは先生の大ファンなのです。それで、私もファンになりました。私が奇クを買ったというのはウソです。おじさんからいつも見せてもらっていました。今も月に一度、大阪へ出て来て会っています。ああ、あーあ、おじさんが先生に会えと奨めて、私、読者通信に手紙出したのです。辻村隆の責め方、縛り方を覚えてこいといわれました。ああ、わーたーし」

岡本えい子は、ガクツとのけぞった。首縄が深く喰い込み、その俣放置しては危険な状態にあった。あわてて首縄をゆるめると、ガクツクリと全身の力が抜けてダラリとぶら下っ

て、仮死状態に陥っていた。又しても失神。そして鼓動のみが激しく、胸の隆起を起伏させていたのである。

嬰子を操る、影のおじさんと称する男に、私は猛烈に会いたくなった。えい子のM性は彼女自身のものではなく、その男の飼育によって、M性の女に仕立てられたことを、私はその時、判っきりと確認したのであった。

× × ×

催眠か麻酔をかがされて喋りつづけたように、ようやく失神からさめたえい子は、あのプレイの折の、たわ言は、さして記憶にも残っていないようであった。それは陶酔の頂点で、うわ言の様に口走る女の睦ごとと似かよった性質のものであった。それが何よりの証拠に、プレイを終っての語らいに、えい子はしみじみと

「私、生まれて始めて縛られましたけど、すごくモーレッツですのネ」

と、ケロリといったのけて、平気な顔をしているのであった。

「本当に始めてなの？」

とばけて、そう訊ね返すと、

「あら。こんなこと、出来っこないんじゃないでしょうか。勿論初めての経験ですわ」

真顔でいっている。あの最後の陶酔の頂点に喋った赤裸々な告白をきかなかったら、私は恐らく彼女のこの言葉を、信じて疑わなかったに違いない。それともあの告白は、彼女の虚構が生んだ夢、幻の又夢か——。私の誘導質問で、おうむ返しに応えていたというのであろうか。

私は何も聞かないことにした。プレイの夢さめた今、もうあの刹那の嬌声を現実に戻すことは出来ない。あの告白がプレイ昂揚の手段として、私をより一層、夢中にさせる手管であるとするならば、やはり女は魔物、余りにも巧まざるお芝居が出来過ぎているのである。おじさんなる男と、セックスのあった事は既に告白していたが、私の唐突の疑問に対して、ああスラスラと、当意即妙に返答したところを見ると、虚構の匂いもそこはかとしてくるのであった。どこまでが真実で、どれがフィクションなのか、私には分からない。しかし三度に亘る失神と、甘受する被虐心は一朝一夕のものでないことはあきらかであった。

とあれ、始めて出会った女性の、そうした精神分析まで、深く立入る必要もなかった。愉しくプレイして、もう明日は赤の他人でよ

かったのである。私と岡本嬰子との結びつきは、このハントを通じてのプレイのみが唯一の細い繋がりのきずなで過ぎないのであるから——。

「先生。プレイの出来る、安心してつき合える方を、紹介していただけませんかしら」
「私では物足りないの？」

「いえ、そんなことはないのです。先生とな



ら何回でも——。でも先生の方が、そう度々私とおつき合いしてくれないでしょう。そんな気がするんです。だから、いつまでもおつき合い出来る人が欲しいのです。いけませんかしら、こんなこと」

けれど、岡本嬰子は私の心中を見抜いていた。それは私のハントを読んでの卓見でもあろうか。

「S的な人はワンサというよ。よかったら編集長に連絡しとこう。但し、プレイのあと、どういう様に進展しても、又、悲しい破局があっても、それは編集長や私の責任じゃないよ。あなた自身のプレイバシーの問題だからね」

「分っています。私、あとくされがなく、偶にあってプレイ出来る方がいいのです。もしセックスを要求されても、私が気に入ればいつでも上げちゃいます。先生だってその気なら、私あげたかも知れません。いえ、あげてもよかったと思っていたのに、結局何もなかった。セックス抜きでプレイなんて本当は邪道だと私思うんです」

「そう安売りしなさんな」

「いいえ、安売りなんかしません。先生失礼だわ。私、瑞浪のおじさん以外知らないんで

す。ほんとうですよ、それだけは信じて下さい」

「その人にさんざん縛られて飼育されたんだろ、M性に」

「分かりません」

彼女はブスツとしたいいかたで、そういつて口をつぐんだ。

妙に気拙い雰囲気立ちこめた。私の言いかたも無難けだったが彼女自身、私と会うやいなや、すぐ又第三者を紹介してくれという無神経さが、いささかカンに触ったのかも知れない。

「そろそろ引揚げようか？」

「ハイ……でも先生、どうして怒ってらっしゃるの？」

「いや、別に——」

さりげなくかわしたが、彼女のカンもするどい。

「じゃあ、お別れにキスして……」

両手をさし伸ばすと、彼女は眼をつむって私を待った。とあれ二人の間に情緒らしきものは生まれずじまいであった。それが岡本嬰子のデリケートな女心を傷心に追いやったのかも知れなかった。いたわりと感謝をこめて舌を預けると強く吸込まれ、彼女の両手が私

のうなじに縛りと巻きついた。えい子は愛情に餓えていたのだ。愛情のともなわぬプレイに終始したのが、えい子にとってはこの上もない不満ではなかったであろうか。ぐっと強く抱擁すると、尚も唇を離さず、甘酸っぱい唾液が、私の口中に交流してきた。唇をやっと離して、女はきれぎれに囁く。

「何故このようにして、求めて下さらなかったの？ 悲しいわ、それが。……先生、私がおキライ？」

「いや、いい子だよ」

「口ばかり。……きっと他の人なら求めるくせに」

「遠慮したんだ、つい……」

「もう一度——」

私はこの年令以上に成熟した岡本嬰子をじっと抱きしめ乍ら、据膳の喰えなかった私自身に腹立たしくなっていた。何故あの時——バイブの奉仕ばかりで、私は我慢する必要があったというのだろう。それが、私の裸身をみて、えい子が思わすといった一言の（お腹出ていらっしゃるのねえ）という言葉が、あの時、私の心にスッと突きささり、私自ら覚えようなきコンプレックスを抱いたことに、ようやく思い至ったのであった。今更それを愚

痴ったとて何になろう。やはり、この場は潔ぎよく去るべきだ。プレイの終わった今、もう一度セックスに耽溺する気は既に私の心から抜け去っていた。

未練たっぷりの岡本嬰子と、やっとホテルを出る。

忽ち、むせかえるような熱気——。午後四時の太陽は赤く熱く、うたかたのプレイの私の眼に眩し過ぎた。

そっと手渡すプレイの報酬とは別に、一枚の紙幣を握らせ、

「タクシーで帰ってくれないか、私はこれから寄るところがあるのでね」

無言の恨めし気な視線を振り切って、私は冷酷にコルトをスタートさせた。寄るところなんてなんにもない。この息苦しさから一時も早く逃れたい。そんなはかし切れぬ男の黒い濁った情念が、私と岡本嬰子を切り裂いていったのである。

バックミラーに、いつ迄も立ちつくす彼女の姿がうつり、やがてあきらめて背を向けて歩いてゆく後ろ姿が、セカンドでゆるゆる走る私の車のミラーに、悔恨の翳りを投げかけていた。

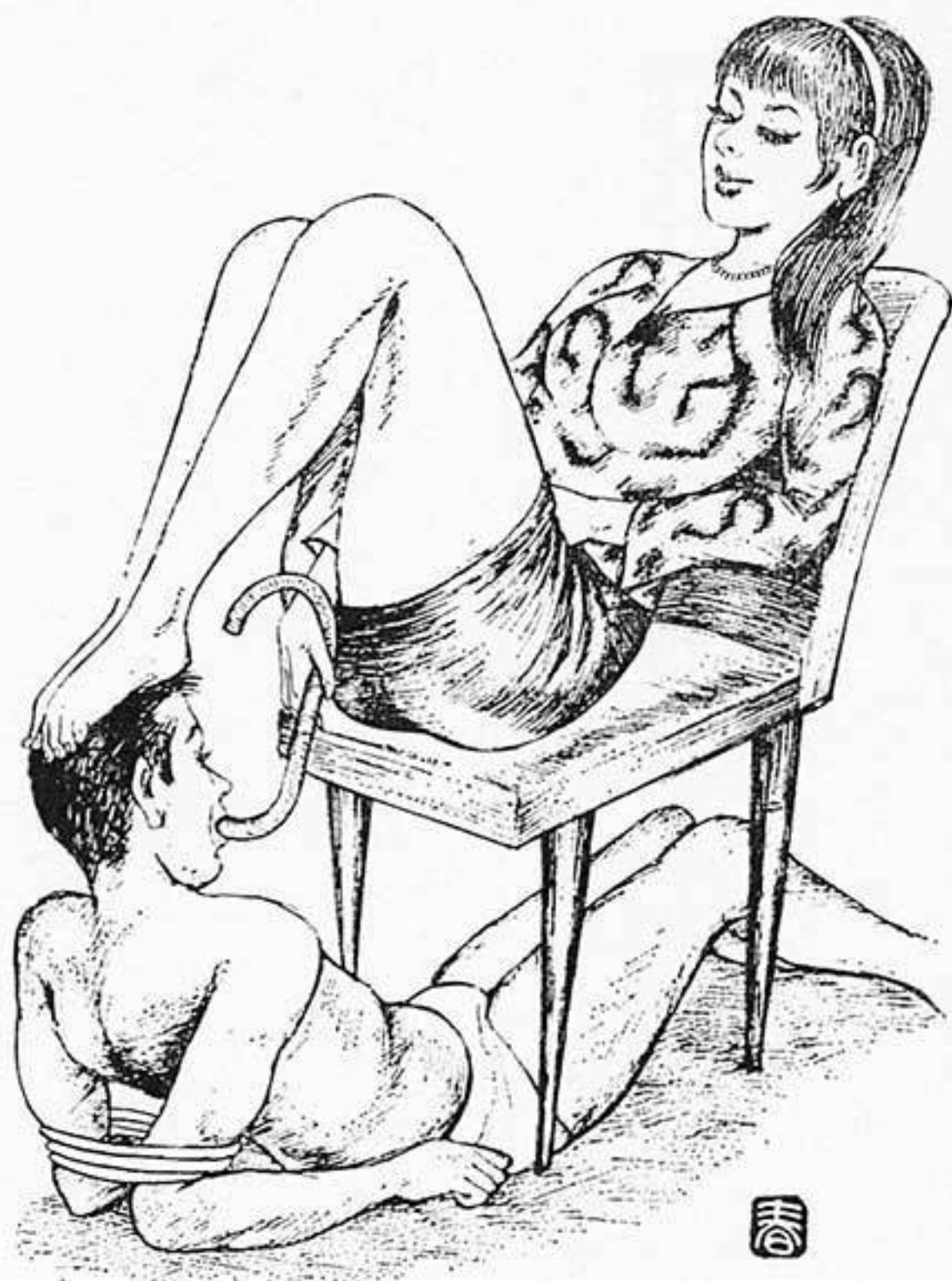
——（おわり）——

ブチックの魔女

A

パンタロンスーツに合わせたペズリー模様のロングスカーフ、ミニスカートとパンタロンを組み合わせた、ベルト付きのパンツスーツ、フードがついているオールインワンのジヤンプスーツ、ブチック（小さい洋品雑貨の

芳
野
眉
美



専門店)には、その店独特の奇抜な作品が並んでいる。

オリジナルが売りもののモードギャラリーだから、一品製作でデザイン料が馬鹿にならず、かなり高価な品が多い。

そのブチックは画廊もかねていて、油絵からイラスト、写真と無名の芸術家たちの作

品が巾広く紹介されている。

超ミニにシースルールックの女の子たちが群がっている店に入るのはかなり勇気がいるが、彼はショーウィンドウに飾られた、なんでもないTシャツが急にほしくなって車を止めた。

普通のTシャツより裾が15センチばかり長いというだけだし、横縞の柄もシンプルだが別に眼新しいというわけではない。それがなんとなくくしゃれていて漸新に見えたから不思議だった。

店に入ると、花やいだ視線の集中攻撃を受けて彼は一瞬テレてうつむいたが、サンングラスで救われた。

フリルのついたブルマースも可愛い、ロンパーススタイルの少女が近づいた。声をかけてくれなければ誰が店の子で客なのかわからない。

「あのTシャツ、男ものでしょう」と彼はきいた。

「男女共用ですので、ワンルックファッションと申します」

綺麗な声で少女は説明した。

「アメリカでは、ユニセックスとか、トランスセックスファッションと呼んでいます」

「――」

「性を超越した、という意味ですわ」

オリジナルであろうロンパーススタイルの少女は、くすつと彼を見て笑った。セックスとか性という言葉が、やはりおかしかったのだろう。

なんでもないTシャツなのに、やたらにむづかしい解説をつけたようで、もったいぶらないとニューモードにならないのかもしれない。

男女共用ときいてもじもじしている彼に、「お似合ですわ」

と少女はウインドウからTシャツをだし、かなり高価な値段で彼に買わせてしまった。

「ここのお店にしかありませんわ」

だから高くて当然という顔であった。しゃれた紙袋にいれてもらってから、彼にも少しはゆとりがでたらしい。

ブチックの壁に飾られたヌードに気がついた。うしろばかりで、か細い背中と小さなお尻ばかりのフォトが並んでいる。

女と思ったが違っていた。男のヌードであった。

金髪のおかっぱで、眼といい唇といいあどけなさが残っているのは、少女と間違えても無理もない。未熟な青いリンゴのような裸体であった。

「ママの作品ですわ」

とロンパースの少女がいった。

彼は車にもどると、買ったばかりのTシャツを着た。身体に合わせてあつらえたようにぴったりしている。

その時、彼は誰かに見られているような気がして振り向いた。

男女共有というから一つしかないと思っていたのは、考えてみればおかしなことであった。彼にちょうどいいTシャツが、女性にぴたりするはずがない。

彼が買ったTシャツと同じものが、即ち、女性用のがもう一枚あったのである。

彼と全く同じスタイルの女性が、白いボデイのスポーツカーによりかかって、彼を見つめていた。

まぶしそうに彼は見返した。薄いサングラスをとり、にこやかに笑いながら、その女性はやつくりと彼に近づいてきた。

「うれしいわ、あなたが買ってくださいったのね」

その女は彼のまわりを、サングラスの柄で頬をつつきながら歩き、じろじろと彼を見廻した。

した。

「あなたにぴったりだわ」

彼の前で立ち止ったワンルックファッションの女は、おそろいのシャツの彼の首に両腕をまわし、彼が一瞬ひるんだのもかまわず、彼の唇に軽くキスをした。

「マキのデザインがお気に召して」

「あなたがデザインなさったのですか」

「そうよ。マキのオリジナル。あなたとマキだけのもの」

マキのぬめぬめした唇が、彼の咽喉に女の勲章をマークした。一つ二つ。

マキの耳のあたりから、カプチュール（分捕り品）という香水が漂い、彼は甘い女の香の中に吸い込まれていった。

「ブチックのママ？」

と彼はマキにきいた。

「デザイナーであり、カメラマンであり……男の子をいじめるのが大好きで……」

「えっ？」

「今にわかるわよ」

マキは彼の咽喉にしるしたマークを親指と人差指でなぞり、強く押した。

「うっ」

「苦しいでしょう」

彼の首を締め上げて、マキは心持良さそうに笑い、

「殺してあげようか」

ぶっそうなことをいった。

男女共有のワンルックファッションのTシャツを買ったことが、そのままハントされたことにつながっている。

ブチックの甘い罠であった。

「ベッドの上でなら死にたい」

背のびして彼は大人のような口をきいた。

「おませさん」

ぴしゃりと彼の頬を手の平で打ち、マキはサングラスをかけると、彼をスポーツカーに導いた。

現代は男女同権ではなく、男女同力の時代であり、ニューヨークの紳士専門のスラックスメーカーでは、客の三、四割が女性の客であり、男仕立てのスラックスがよく売れ、わざわざ男ものの売り場に行く手間を客に省かすために、ユニセックスコーナーを開設したデパートもあるということを、マキは車の中で彼に話をした。

ピーコック革命は、男性の女性化を促進させた。

「金髪のおかっぱのヌードを見たでしょう」

「ええ、女かと思いました」

「別に性転換はしてないわよ」

カルーセル麻紀や佐久間サギリのように、男性資格喪失手術を受けたヒロインたちとは区別しているらしかった。

クラブのフロアショーで出演しているサギリくんは、フランスで転換の手術をし、オナとしての機能をためてきたらしい。人工の女性自身は重苦しく、うっとうしかったそうである。

日本での性転換手術では、何びとも生殖を妨げる処置をとってはならぬ、という優生保護法に違反するということで、有罪判決を受けた産婦人科の医者がいる。

またこの種の手術は、女が男になるより、男が女になりたがるのが多いそうである。

「マキがさがした範囲では、最高に女らしい少年だから、裸にして写したのよ」

「女らしい少年？」

「女でもないし、男でもないし、それでいてたべてしまいたいくらい可愛い」

マキと彼はそう年が違わないかもしれないそれなのに、マキのほうがずっと年上にみえてしまうのは、精神構造のせいと思われる。

マキは男のように振舞って、女らしい金髪

の少年を愛撫したのに違いない。

女性の男性化、いや、性にこだわらないファッションがでてもおかしくはないというのが、マキの持論であった。

ダンプやトラックの高い運転台から見下ろされ粗野な口笛に追いかけられながら、マキは彼に接吻を繰り返して、スピードをあげてブチックをはなれていった。

B

かなり年代をへた古びた洋館の庭に、スポーツカーはすべりこんだ。昔は美しい芝生であったと思われる庭も、荒れるにまかせて雑草はのびぼうだいであり、獣道のような曲りくねった細い道が、洋館の玄関に二人を導かなければ、二人は雑草の中に埋もれてしまうと思われた。

「心配しなくてもいいわよ」

繁茂した樹木が洋館を囲み、日光をさえぎって薄暗く、彼の顔に一瞬不安と恐怖が浮かんだのを、マキは素早く読み取ったようであった。

洋館の玄関に入るわけではなく、そのままマキは地下の階段を下りて、部厚い戸のカギをあけ、身体ごとぶつかって開けた。

マキは燭台に火をつけた。

「ここがマキのアトリエよ」

彼を地下室に入れ、再び重い戸を閉めてカギをかけた。そのカギをTシャツの首からブラジャーの中にしまいこんだ。

ローソクのほのかなあかりをたよりに奥に進み、小さな扉を開けるとマキの寝室兼用の仕事場であるらしかった。

アトリエに先に入ったマキが、天井から吊るされたシャンデリヤのような燭台のローソクに火をつけたとき、彼は扉に片足を入れただけで絶句した。

一人の可憐な少女が、逆に手足を背中の上で縛られ、背中を弓なりに反らせたまま宙吊りにされていたのである。

少女の背中には、短いローソクが数え切れないほど立てられ、その一本一本にマキは手に持った燭台で火をつけていくのであった。

少女は、小さなレザーパンティを穿かせられて、何ものも着ていなかった。

背中の上でまとめて縛られた手足が、短いとはいえ、ローソクの炎であぶられて熱いか、宙吊りの人間シャンデリヤは、ゆらりゆらりと風も無いのに、ローソクの炎を右に左にゆらしていた。

レザーの嵌口具でおおわれて、少女の顔半分はわからない。

少女のやわらかな皮膚は、短いローソクの炎であぶられながら、ぽとりぽとりたれてくるローソクで小さな斑紋を描いていった。

金髪が乱れたひたいに、うっすらと汗がにじみでた。かなりの苦痛が少女を襲っているらしかった。

マキは少女の真下に立つと、レザーパンティの前のファスナーを開けた。

人間シャンデリヤは少女ではなかった。金髪にまどわされてそう思っていたが、チックで見た男のヌードのモデルに違いなかった。

マキの白すぎるほど白い指先が、しなやかにくねって少年をはなさない。

「こいつはね、こうしてやると、とても喜ぶのさ」

とマキは男のような口をきいた。

「な、そうだろう」

宙吊りにされて、暗い地下室でどのくらいほうっておかれたのだろう。

「キスしてやろうか」

マキは、微妙に眼で笑いながら天井を見上げていった。

「そんなことをしていると、おまえの背中はやケドするよ」

「――」

「それでもいいのかい」

レザーの嵌口具がなければ、少年はどう答えただろうか。

マキの指先はいいように少年を颯り、マキは心持ち唇を上を持ち上げて、

「まるで運動会のパン食い競争だよ」

と笑いだし、彼を振り返ってローソクを消すようにいった。

「ヤケドさせるのはもったいないからね。もう少し遊んでからにするよ」

彼がこわごわ天井のローソクを、祭壇のローソクを消すように丁寧に消している間、マキはアトリエの周囲を本物の燭台で飾ったのである。

滑車で簡単に宙吊りにされていた少年をおろし、レザーの嵌口具を解いた。

少年が口から吐き出したのは、女性が生理の時に使用する押入式の収縮綿であった。そして、その押入式の品に、少年の唾液ではない鮮明な色を見た。

「こいつはね、マキのシャトーマルゴーが大好きなんだ」

とマキは有名な赤葡萄酒の名前をいった。

ロー涙を背中一面に点々とさせながら、全裸の少年は長々と床にのびていた。女でもない、男でもない奇妙なセックスアピールが漂い、ストロボの閃光がまぶしいほどアトリエを明かるくした。

「一枚の作品をつくり上げるってことは大変なのよ、わかったでしょう」

急に女らしくなったマキが、口もきけないほど呆然としている彼に、やさしく声をかけた。

「あなたにも、モデルになってもらおうと思ってる」

殺してあげようか、とマキがいった意味がようやくのみこめて彼は蒼白になった。

彼を半殺しにして、マキはどんな作品のイメージを湧きたたせようとしているのだろうか。

「魔女のジョーヌを」

息も荒く少年がつぶやいた。

「いいわ、今日はかなりきつかったのに、よくがまんしてくれたから、ごほうびに飲ませてあげる」

マキは少年の顔をまたいだ。

少年がジョーヌといったのは、シャトリユ

ーズ（黄）のことである。シャトリユーズはフランスのシャトリユーズ派の修導院で創製されたりキュールの女王と賞讃されている美酒である。

男仕立てのパンタロンのファスナーに手をかけたマキは、彼に洋酒棚に置いてある宝石箱を取らせてにんまりした。

宝石箱から一本のストローのようなものを取りだし、レザービキニに刺したのである。器用な慣れた手付であった。

あわてて少年が管の一方先を口に含んだ。

「そんなにあわてるとむせるよ」

おかしそうに声をたてて笑い、

「いいかい。おまえの大好きなマキのジョーヌは、そう簡単には飲ませてあげないのだから、味をよくみながら、ゆっくりと飲むんだよ、わかって？」

少年は、やはりむせた。

C

ブチツクのマキに誘拐されてから、彼はどのくらい日数がたったのかわからなかった。マキにハントされたのではなく、誘拐といったほうがぴったりするように彼はマキにあつかわれたのである。

マキのベッドの下の檻が彼にあたえられた部屋であった。マキのベッドはかなり高く、檻の中で坐ることはできた。

彼は、皮手錠をされ、皮の足枷をはめられて、マキの呼び出しが無い限り、檻の中に坐っていた。

地下室がマキの仕事場であり、日常の住居でないことは、マキがアトリエのベッドをあまり使用しないことでも知れた。

彼を監禁している檻をすっぽり包んでいるベッドは、マキが女らしい少年を愛玩するときだけ使われるようであった。

暗闇の中で、彼はじりじりしながらベッド上の気配を感じ取っていなければならなかった。

彼はマキにだまされたといっている。

檻の中の男をモチーフにした作品をとりたというので、あっさりいいなりになって檻の中に入ったのが、そのまま監禁されるはめになった。

マキは、いらいらして叫んだのである。

「だめだめ、そんな顔では。檻の中の男の表情がでていない」

無理な注文であった。マキは、はじめから彼をうつすつもりはなかったのである。

マキの目的は、彼を長時間地下室に監禁し彼を拘束した上で、じわじわ凌辱することにあった。

その結果、マキは新しい作品をつくるかもしれないのである。

マキは食事と引き換えに彼を凌辱したのである。空腹には勝てない。

ベッドの下から車のついたその檻が引き出され、ベッドの脇に置かれたスタンドの淡い灯りの中に、純白の薄絹のネグリジェを羽織ったマキが、まるで幻のように立っている。

「どうやら檻の中の男のような顔に、少しずつでも変化してきたようね」

今日のマキは、ユニセックスファッションを論ずる女性とは思えないほど、端正な頬を上気させ、翳のある眼をしっとりと潤ませながら彼を見下ろしているのである。

引き緊ったたおやかな肢体を、薄絹の中に透きとおらせ、マキは全裸体をおしげもなく彼の前にあらわにしているのであった。

「どうしたの」

とマキは一匹の獲物に、顔をあどけなくかしげるのである。

テーブルに彼の食事が用意され、彼の口からはたちまち唾液があふれて眼をぎよろつかせ

るのであった。

皮手錠と皮の足枷は鎖で結ばれ、檻から出されても彼は立つことは出来ない。やっと四つ這いになって、そろそろと床を這うのである。

そんな彼の背中にマキは坐り、

「おあずけよ」

鏡に向かって化粧をしたり、急にデザインを思いついたらしく、さらさらと画帳にブチックのためのオリジナルを走らせた。

薄絹を通して彼の背中に、肉づきのゆたかな固く緊った太腿から、成熟きったふくよかな尻の、妖しいまでにやわらかな感触がつたわり、彼を狂わせる。

「食事がしたかったら、マキのいいなりになることね。動物の調教を見たことがあるでしょう」

デザインを考えながらも、マキの口からは残酷な言葉がでる。

細くて美しいウエストが見たいからといって、彼は胴の一番柔らかいところにロープを巻きつけられ、滑車を利用して、瓢箪のように絞めあげられた。

嘔吐寸前でとめられ、舌を噛まないようにマキのスリッパが彼の口中に押し込められて

皮マスクでとめられた。

彼の呻き声はスリッパの底で消え、ウエストを極度にしぼられた彼をモデルに、マキは満足気に画帳に鉛筆を走らせる。

ブチックの店のロンパーススタイルの少女があらわれ、店の売上金をマキにわたしたらしかった。外は夜に違いない。

マキのスリッパをほうばされ、人間椅子にされている彼をちらっと見たが、別に驚きもせず、彼の尻をローヒールの厚いかかとで蹴飛ばしたりした。

「そうだ」

店の女の子を見て、アイデアを思いついたらしく、少女が穿いているブルマースに生ゴムの裏をつけるように耳打ちした。

「おしめカバーにもなるでしょう」

「おしめをするの、ママ」

「そうよ、ためしてみましょ」

少女が肯いて、フリルで飾られたブルマースを脱ぎ、いそいで仕事にかかった。

彼をようやく瓢箪責めから解放すると、マキは皿の上の肉の一切れを噛み、ガムでも噛むようにくちやくちやにしてから、彼の顔の前にぺっと吐き散らした。

彼の口から皮マスクをはずし、スリッパを

もぎとると、

「たべてもいいよ」

と彼にいった。

「マキの唾液で、香ばしく味つけしてあげたのだから感謝をおし」

マキは肉を噛んでは、彼の顔に吐いたが、うっかり床に転がった肉片を足で踏んづけ、足の裏にべったりつけてしまうと、

「気持悪い。早くおとりよ」足の裏を彼の顔におしつけ、彼の舌がべろべろと足の裏を舐めるのもくすぐったくて、彼の顔におしつづいた肉をこすりつけた。

ふと、マキは薄絹のネグリジェの裾をはだけ、ねっとりとした妖しい官能味をたたえた太腿を開き、肉片をつまむとにっこり笑った。しなやかな手が自らの太腿に触れると、つまんでいた肉片が両腿の間に残された。

「こっちへおいで」

四つ這いの彼の頸をひっぱった。

「喰べてもいいよ」

彼の食事が遅々として進まないのは、食事道具の一つに利用してしまうからである。おしめカバー兼用のロンパーススタイルの少女は、マキのいいつけのままおしめをつけてマキの前に立った。

「こんなものが売れるかしら」

「浣腸遊びがはやっているのよ、この頃は。」

病人用のおしめカバーしか売っていないから

マニアには喜ばれるわ」

「なんだかヘンな気持」

「してごらん」

とマキは少女にいった。

「しにくいわ」

「実験してみなければ、わからないじゃないの。役に立つかどうか」

「だって」

「いいことがある」

マキはまだ肉片をあさっている彼の首をつかみ、床に仰向けに転がした。

「こいつの顔をまたいでごらん。便器だと思ってすればいい」

「そんなのいや」

「馬鹿だね、おまえはおしめをしているんだよ。本当にかかるわけがないじゃないか」

「それもそうね」

マキの暗示にかかったらしく、ロンパースの少女はおそろおそろ中腰になった。が、うまくいかない。

「中腰じゃだめよ」

「むりよう」

「面倒だから、洋式だと思って腰を下ろして坐っておしまい」

「くたびれちゃった」

ロンパースの少女は、ぺたりと坐った。坐った瞬間、少女がつけたおしめをとおして、なまあたたかいぬくもりが彼の顔にひたひたと押し寄せてきた。

かなりこらえていたはずだったのかもしれない。雫が彼女の腰掛けを濡らした。

「そのくらいなら大丈夫。売れるわ」

満足そうなマキと違って、立ち上った少女は、さっさとブルマースを脱いだ。

「気持悪い」

濡れそぼったおしめが、どさっと彼の顔の上に落ち、あわててどけようとする彼の手をおしのけてマキの手がのびた。

マキは彼の顔に、少女のブルマースをすっぽりかぶせたのである。そして、その上からロープで目茶苦茶に縛りつけた。

マキは最も不潔で、最高に汚穢なものを舐ませるといふ行為が、獲物を飼育する最良の方法と考えているようであった。

天井の滑車がまわり、ロンパースのマスクをされた彼の足から、少しずつ宙に浮いてきた。

完全な宙吊りではなく、彼の頭は床に残っていた。

「明日の朝が楽しみだよ」

マキは少女にいった。

「空腹にたえかねてたべると思うの」

「えっ」

と少女がマキに聞きかえした。

明朝、マキは少女のように、彼の顔に腰をおろすつもりじゃなかった。

「マキの便器にして、しばらく飼っておこう
とっているのよ」

長い間、暗闇の中で生活すると、瞳孔拡散

にたらしむ。

そのような顔になってこそ、マキのいう檻の中の男の顔になるのかもしれない。

(カット・春川ナミオ)

きもの漫談

帯揚げは

いつも悲しからずや

(序 編)

志 高 牧

文 と 画

よくパーティなどで、一番目立つものは何かと云うと、それが着物を着た姿であれば、「帯揚げ」という小物であり、洋装であればまず月面の逆さクレーターよろしく前面に突出する、乳房のふくらみだと申してもよろしかろう。

もともと明治生まれの者ならいざ知らず、いやしくも昭和生まれの俺達は、そうは思わん。女は何と云おうと、昔から腰の線ときまってるさ……と主張したって、人それぞれの好きずきで、一向にかまわぬ。

筆者が、前者の古典帯揚げなるものを、そ

もそも採りあげた理由の一つは、およそ第一装的に着付を終わった女体は、もう文句なしに無数(と云っても多くて五、六本程度だが)の紐類や分厚い帯などで厳しく緊縛された、一個の生ける物体であって、その最終的な表徴が外ならぬ、この帯揚げだからである。

だから、パーティであろうと正月の初詣であろうと、ともすれば見落とし勝ちな帯揚げを帯の上段に派手に飾り、あるいは帯の上にちよっぴり覗かせて歩く女性を拝見した途端ハハ……お可哀想に、態のよい赤い紐類でギユウギユウ緊縛されてるなと秘かに想像す

る。

もともと近頃は、くたびれた男性の緩る禪と同様、昔の紐なし女郎式な、触ればポロリと解けるような締め方で勇敢に街をのし歩く和服の女性も多く見受けるから、一方的に想像すると、とんだ想像倒れにならんとも限らない。野球場でヒットを打ち込むには、よく選球することが大切である。

さて、この帯揚げをめぐるのは、これと云って定説がなく、どういう目的で何のためか、はっきりしないが、帯を帯枕で吊りあげた道具の一種であることには間違いなく、ま

た、たとえ帯枕が破れていようと、これを縮緬の帯揚げで包んでしまえば、少なくとも後ろからは無難であり、まして正面を大上段に飾り立てるようにすれば、豪華な帯が（反対に芯のくたびれた帯なら、なおさらのこと）さらに引立てられようと云うものだ。一言に云えばボロかくしといっていいこともない。

帯本来のサポーターは、ご承知のとおり、真一文字に締める帯締めであるが、裏方さんの役目を果たすこの帯揚げは、単に帯の裏方のサポーターであるばかりでなく、帯締め同様、いったん表へ廻ると、帯締め以上に上位に在って、装飾的なものになる。どうせ女の盛装が最終的に満鑑飾的なものなら、大いにこの帯揚げに総力をあげるべき筈なのに、どっこい案外、敬遠され勝ちなのは、一寸腑に落ちないが、飾るべき物は堂々と飾って然るべきだと筆者は、いつも思っている。戦争中の欲しがりません、勝つまでは……の時代なら、致し方ないけれども、物の豊富になった、この戦後に、妙に上品ぶって、どんな、『きもの解説読本』を見ても「それから次に帯揚げですが、この小物である帯揚げは、帯の上から見えるか見えない程度に覗かせるのが上品で決して巾広く出してはいけません。色も、せいぜい淡いピンクが、いやらしい赤より遙かによろしいかと存じます……云々」

と、乙に教養ぶっている。この分でいくと、淡いクリームでメーカーアップして、淡いピンクの蹴出しを腰に巻き、淡目の長襦袢に淡目の着物を着て薄目の帯を結び、スケスケのあかなしのかの帯揚げをする処に、美の存在があるということになりそうだ。

いやしくも今日只今、若いピチピチした肉体を誇示したいというのなら、乙に澄ました妙な教養振りななか、さらりと棄てて、原色のまま、ありったけ、野ばんに振舞いなさいといいたい。その点、時代もさることながら昔の日本はなんと大らかか？ に、女性がいても簡単に、きもので緊縛され装飾されたことか。ここに我田引水的是あるが、帯揚げの悲しき？ 変遷を、まず漫談的に振り返ってみることにしよう。

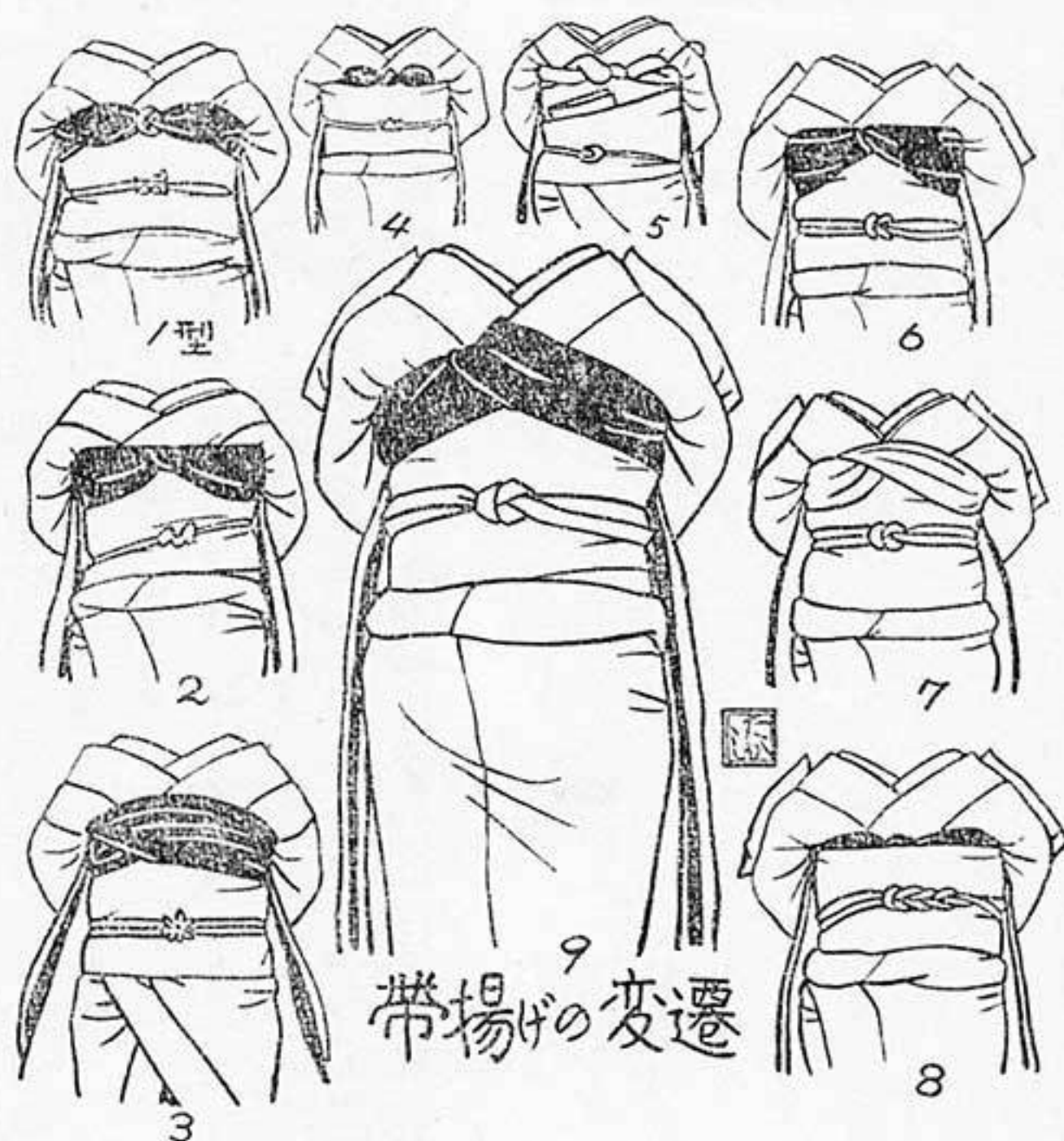
今は、もうすっかり文献的なものになったが、大正末期から昭和の初め頃に発行された映画雑誌をめぐって見ると、いわゆる、どうする、どうすると紅涙を流した色物寄席の女義太夫同様、世の大方の男性の心を、いみじくもとらえたのは、いわゆるスターと称するスクリーンの女優であって、その姿態は誠に妍を競ったものである。

動かない雑誌の色付きズバリの写真ばかりでなく、実際に正月の映画館のステージに、満鑑飾のスター連中が赤い帯揚げも胸高に、ご挨拶に出演しようものなら、ある意味で収

拾のつかぬ熱狂振りを発揮したのはいうまでもないが、九州の某炭坑町の映画館におもむいた山路ふみ子嬢の一行などは、荒くれ男達からもみくちゃんにされながら、あろうことか赤い腰巻で踊ってくれと強要されたというエピソードまであった。強要ついでに、着物のままで逆立ちするのも困るが、当時、筆者が直々に観たスター連中の和服姿はいずれも超胸高帯で、もうこれ以上は上りませんという処に真赤な、しぼり縮緬の帯揚げが、図解挿絵の1型のように結ばれてあった。余談ではあるが、何故に女の帯が胸高になったのかについては、只今と違ってその頃は、横はとも角、身長は特に短かった女が、一見すらりと見せようとするには、黄金分割以上に邪魔物になる帯を、少しでも上方へ押し上げる必要があった。決して下半身を、より開放的にしようなんて不埒な考え方からではない。昭和の初め大阪地方で流行った、和服姿のダンサーの服装が、極端に胸高帯ののっぺり姿であったのも、このためだといわれている。このような考え方の是否は兎も角として、割合素直な結び方と見られる1型の帯揚げは、2型のダンダラ幕形の帯揚げとならんで、花柳界でも結構、採用されていた。大正末期から昭和2、3年頃までの松竹映画の女優さん達、柳咲子、筑波雪子、川崎弘子といった綺麗どころが1型だとすれば、新橋、赤坂、柳橋の

大方の芸者衆は、どちらかといえば、この2型の方が多かったのである。もっとも当時、日本の恋人と云われた松竹映画の栗島すみ子嬢などは、この2型の帯揚げで堂々とプロマイドにおさまってはいるが……。

この1型の帯揚げを簡略にしたものが4型である。あたかも小さな豆の花が咲いたように愛嬌があり、ズラリ初見世にならんだ生娘の感がないでもないが、見方によっては後で出てくる8型の忍び型と1型を合わせて2で割った折衷型といえるかも知れない。京都の



帯揚げの変遷

トレードマークでもある9型で飾るのは場所柄、なんとしても気がひけるので、このような独特の結び方をしたのだというのが妥当な線であろう。ただ残念ながら、この3型の舞妓結びは、緊縛された女性の表徴と見做すには、一番甘い帯揚げの型であって、なんとなく小便臭く、出来ることならグループから敬遠したいタイプである。早い話が、お座敷が済めば、すぐその場で、かなぐり解き棄てられる浅巻きの帯揚げだからである。そういう点からいえば、渴仰あたわざる9型ないし7

芸妓はんが外が滅法寒くて思わず冷たい鏡台から離れてきた姿だと称してもよい結び方なのである。

同じ花柳界の中でも、まだ一本にならない舞妓連中は新潟、東京

京都と比べてみると、着るものに多少の違いはあるけれども、帯揚げだけは3型のトレードマークに落ちつくものと断言してよい。これは、これこそ我田引水的ではあるが、まだ乳房が一人前に張らずギョウツと一文字に巾広く陳列しても圧迫を感じないから、そうしたんだとも考えられる。もっともこの半玉時代の着物は一人前に肩が取れず、そうかといって、世の多くの令嬢方の、これはまた専ら

型なども、その範疇に入り、よく時代劇などで悪代官に手足を取られ、あわや乱暴狼藉の目にあわされようとする娘の帯揚げが、哀れにも黒縹子の帯からダラリと解き下った姿態は到底望みたくとも出来ない相談と相成る。

余計なことばかりで恐縮だが、まだピンク映画で、盛装した近代和服振袖の女性が部屋中、狭しとばかり逃げ廻るシーンは、一回も観たことがないので、3型、7型ないし、9型の帯揚げのラストシーンがどんなものであるかは、車を持たないデスクドライバー（ペーパードライバーとも云う）同様、さっぱりわからないのが実情である。ただ往年、某温泉場に行った折、ある行事で訪問着に着飾った各見番混合の綺麗どころのお姐さんがたが宴会場へなだれ込み、何かのきっかけから女プロレス顔負けのレスリングをやり始めたのには驚きはしたが、芸者故に、解けるべき筈の帯揚げが案外、安全に温存？ されて彼女等の閉戦と共に再び飾られて帰ったのを見て啞然とした経験がある。

由来、男というものはとかく女の帯を解こうとはするがサポーターである帯揚げまでを手掛けようとする者は少ないものとみえる。今は故人となった筆者の友人の中に、何の因果か女の帯揚げに熱をあげるコレクターが居て、堂々と金銭によって取引したであろうところの、赤やピンク地の帯揚げを詳細に分類

して独り悦に入っていたが、彼に依ると、女にある種のきざしが現われると、不思議に、「解いてもいいわ……」といったという。で彼の手がまず女の帯締めにかかり、続いて帯揚げを解いて帯枕を外し、蛇のように身体にからみついた帯の本体を次第に解きほぐしていく。そして畳の上一杯に、まるで小川のように横たわった帯を四隅に放りやると、今度は着物の伊達巻を解いていくという解き屋ゴッコが、なんとも堪まらなかつたと告白している。

また彼の説によると、帯揚げという奴は長さが1メートル50センチ近くあり、横巾も25センチ位だから、咄嗟の場合に2つ折りにして、これで女に猿轡をかませ、軟禁することもあるという。しかも帯揚げに依る猿轡はエロっぽく、適当に声が洩れて却って悩ましいそうである。やっぱり色々聞いてみなければ、わからない話である。

さて話を再び元に戻して、帯揚げの結びタイプのうち、5型は昭和8年頃、一部で流行した型であって1型の変形型ともいえよう。紙を、そのまま、さしはさめば芸妓タイプとなり、帯を上下にきちんと結べば当時、破竹の勢いであった高峰三枝子などが、わんさとブロマイド化されたのが、このタイプであった。次に6型の帯揚げは2型で飽き足らず、さらにもう一段下部も、このように緊縛され

ていますよという結び型を示し、2型と同じく胸の上部が水平線的なのが特徴である。最近、この2ないし6型のタイプは余程でない限り街では見られない。却ってこの7型のものが存外多く、特にナイロン製の淡いピンク色の帯揚げは、長時間に亘ってはズリ落ちる心配から、ほとんどといってよいくらい7型の結び方を探っている。

しかし盛装時の帯揚げは、なんといっても9型が代表的と申して過言でなく、本文の最初の方で触れたように、たとえ世の多くの美容師の連中が口を揃えて「それはおかしい。今時、丁度、紺の背広がどんな男性方にもピツタリするように、美醜を超越して女性上位を願うなら、何と云っても8型の忍び型を探るべきです。9型なんか野暮の骨頂で、まして、お腰に似た緋縮緬まがいの真紅の帯揚げを、事もあろうに胸部一面に展開するとは誠に言語同断。女性を侮辱するにも、これ以上のものはございません。断じてそのような世迷い師の甘言に乗ってはいけません。くれぐれも、ご用心遊ばせ……」とピーチクパーチクさえずったって、あなたは少しも気にすることはないじゃありませんか。

昔の軍歌ではないが、威風堂々、大いに胸を張って、ふくら雀結びの帯を胸高に背上げ、真紅の腰巻式帯揚げを巾広に陳展？して乳房もろとも分厚い丸帯、さしずめ袋帯ということになるが、その帯で、もう出来るだけ胸部を圧迫して、その上を帯締めで厳しく締め上げる……すると必然的に若き女の表徴ともいふべき柔らかい腹部の盛り上りは、いやが応でも前方に突出し、期せずして女の下位をはね返えす原動力ともなるだろう。

この一石二鳥の9型の帯揚げを、筆者は便宜上、入り舟型と呼んでいる。どうしてこんな豪華なタイプになったかは、つまびらかではないが、進展した経路は恐らく明治年代の産物ではなく、比較的新しく、大正末か昭和の初期に芽生えたものに違いない。別に結んだりしないで帯と着物の襟に挟むだけの構造だから、これ程簡単なものはないが、胸高帯に似合うように下からすくい上げて巾広く上部一面に飾るのが特徴である。もし帯が低いと、肝心の入り舟が舳のないペチャンコの入り舟のようになるから、飽くまで締める帯は乳房のすぐ下にくるように、うんと高目に背負い上げる必要がある。早い話が、向こうから真赤な帯揚げだらけの女がやってくるという具合に見えたら、着付は満点である。もつとも、こう徹し切ってしまったら、やや気違い沙汰で、常道を脱^はした、へそ曲り者の感がないでもないが、最近の、またぞろ緋縮緬の長襦袢の抬頭と同様、どうせ覚悟を決めてやるなら、これ位の気魄をもって血の出るような赤い帯揚げの復活に力を注ぐべきである。

話はこれより、ちょっと上品になるが、この真紅の帯揚げが帯の斜め横からちよっぴりと覗いているのは大いに色気があるそうだが、それは厳粛な結婚式場の花嫁でもそうだが、脂の乗った芸者衆をもって最いとなすといわれている。古い文献で恐縮だが、昔の心中死体には、若い女であればある程、各層にわたって、こぼれんばかりの色気が漂っていた。東京郊外の山林の中で発見された一見、水商売風の女の死体を係官が検屍立合いのため前後に左右に転がした際、裾からはみ出た緋の長襦袢と真赤な帯揚げが、場違いながら、ひどく印象的であったという。死体紛失事件で有名になった大磯の坂田山心中の某令嬢も恐らくそうであつたろうと思われる。行きずりの出来心からとはいえ、当の話題の老人が、服毒した和服姿の女の死体を抱いて浜辺をひきずり歩き廻る芸当などというものは、色気を通り越してむしろグロに近いが、ここで問題となったのは、彼女を文字通り裸体にしたことである。

老人の手が、無抵抗になった派手な女の帯にかかった。かたく結んだ帯揚げをほどこき、帯締め帯枕と、はずしていく……。二重三重巻の帯が解き放されると、訪問着の腰紐や伊達締めを緩め、やおら着物を左右に開くと緋の長襦袢がパツとめくり出てくる。彼はとうとう女の身体を赤い長襦袢一枚にして、その

前に跪ずいた。半ば陶酔した彼は、それから遂にそれが最後の布である真紅の腰巻であることを確認し、赤い腰巻からこぼれる雪よりも白い女の脛を、ぞっこん、その目で見たのである……。という具合に、講釈師、見て来たような嘘をつきではないが、記述せざるを得なくなる、当時随一の猟奇事件であつた。時代劇でひろった、たった一つの女の簪が誘拐された女を暗示するかのよう、和服であれば、まず帯と帯揚げと帯締めが十中八九、女の運命を左右するといつてもよいだろう。これを自ら堅持することなく、安易に男に譲ってしまう処に、別のドラマが展開するのが常道だ。してみると、単なる一片の小物に過ぎない帯揚げは、哀しくも余程罪深いものといわざるを得ないだろう。

最後に、以上述べたような、胸高帯のふくら雀結びに、赤い帯揚げを高々と結び上げた和服盛装の女性を、仮に緊縛するとしたら——この緊縛という文字にはおよそ二つの意味があつて、一つは縛った結び目をしっかりと結んで、ちよつとやそつとでは解けないことを主体とした縛り方を指す場合と、今一つは結び目や縄の数には関係なく、着物の上からではあるが、専ら肉にぐいぐい喰い込むように縛りあげた場合とである。亡くなった伊藤晴雨画伯のは、筆者の見る処では別口であつて、どうも縄の多いことをもって女体の自由

を奪う式のものが多く、描く絵画そのものよりも、むしろ縛る過程を存分にたのしまれたようである。——だから和服の場合は心然的に後者の肉に喰い込むように縛った方が徒らに縄の数の多いものより、より無残さが漂うようである。

さて、以下筆が興にふれて綴っていく断片の数々は、全くの荒唐無稽オールフィクションのものであつて、五臓六腑が疲れるとよく見る夢の材料に過ぎないが、帯揚げを中心とした悲しいスナップ的な物語を、しばし申上げてみたい。

風の便りに若い日本女性ばかりが、そろつて処刑されるというので、取るものも取りあえず収容所の方へ足早やに行つてみると、丁度目も鮮かな本振袖、白足袋跣足の日本女性が十数人、折柄差し廻わしのトラックに乗せられようとするところであつた。いずれも髪に花や羽の簪を挿し、豪華な丸帯を胸高に締め、赤い絞りの帯揚げを胸一杯に飾り立て、下は白足袋姿の、いわば死出の衣裳なのだ。その両腕は容赦なく後ろに回わされ、藁製の縄とも綿製の紐ともつかぬギスギスした荒い目の細引で、縮緬や綸子の振袖の上から縄目の見えない位、肉に喰い込ませて縛りあげられていた。しかも今となつては誰一人逃れようと泣き叫ぶ不心得者も居ないのに一人一人が白布できつちりと猿轡をかまされていた。

収容所の赤煉瓦の建物から曳きずり出された日本女性達は、粗末な紺色の制服を着た係員——獄吏というほどの者でもなさそうだが——の誘導で一列縦隊になり、車の方に向かって静かに歩き出した。白い足袋はだしが、ひどく印象的であった、と見る間に一陣の野分が、サアッと吹いて、襟足から胸高に結んだ帯や帯揚げ、帯から下腹部まではなんの乱れもないのに、黒髪のはつれ毛と振袖の裾だけが無残にも捲くれあがり、燃える火のように緋色の錦紗ちりめんや紋綸子の長襦袢が地上にハタハタと翻った。中には、渦を巻いて吹いて来た強風に足を取られて直すすべもない下半身を、まるで赤いほうずきを逆さにむいたような恰好にされて、思わず顔を伏せる女性もいた。きっちり華やかに盛装した日本女性は、真実これを最後に死出の旅路に赴く唯一つの衣裳でもあるのだ。お揃いの赤い総足田絞りの帯揚げは何故か、ひとときわ派手過ぎる中にも色っぽさを添え、黙して語らず衣中縛り紐の数……と云った風情を暗に示していた。

惜しい、なんとしても惜しいではないか。死出の饞けというには、余りにも美しい衣裳ばかりなのだ。

女達がトラックのところまで来ると、「乗ったら全員坐るか、腰をかかめて姿勢を低くすること。ただし街の中を晒し者として引き

廻わす時には、あたりをキョロキョロみないで顔をしっかりと上げて置くこと」などの手前勝手な注意をいい渡され、それが済むと先頭から一人ずつ車に架けられた板梯子を渡り始めた。青い軍服まがいの制服を着た係員のこまかい指図で、懸命に身体の均衡を取りながら急斜面になった巾狭の板きれの上を歩いて上るのが、少しでもよろめくと、次にもって行くどちらかの足が宙に浮いて、思わず裾がパツと開き、長襦袢の間から白い脛にからみつく真赤なメリンスの腰巻までが見え隠れした。かくて車に乗った日本女性は、思い思いの方向に坐ったりかがんだりしていたのでふくら雀や胡蝶結びに胸高に結んだ後ろ帯の上に重ね合わせたようにして縛られた両手首が、どの角度から、はっきりと見えるのだった。

私は、すかさずそばにいた係員の一人をつかまえ「一体、邦人婦女子に対してどんな処刑をするんです？ 出来れば日本人としてその処刑に是非、立合わせて欲しい」旨を嘆願した。すると「今回の処刑は上層部でも、どのような処刑をしてよいか迷った挙句、取敢えず門外秘として、もとより最終的には公開性ではあるが、最も報復手段としてふさわしいものを見本的に今日は演ってみたい。只今、刑場へ運ばれた日本の女性達は、いわば処刑の試しであって、四人で一組となり、処

刑の方法は(一) 青竜刀による斬首 (二) 同じく青竜刀による吊るし三段斬 (三) 紅槍による磔つけ (四) 火あぶり、の四グループに分かれて執行される筈である。よろしかったらご出席下さい。なお私共にとって日本人は、多年に亘る不法占領への怨恨が消えず、従って刑場での安価な憐憫は一切、許されませんから、そのつもりでお立合いの程を」と答えてくれた。私は矢もたてもたまず秘かに教えられた刑場に向かう近道を懸命に走った。

まず最初は、いずれも某貿易会社の事務員であったという野上千恵子、渚みどり、島影美喜子、小桜百合と、それぞれ名乗る二十才前後の日本女性が一人宛、姓名を呼ばれ日本人であることを確認されて列外へ曳き出された。今日を最期に身体を異国の土と化するその女達は、立ち上ったまま縛られた縄目をもう一度、念入りに調べられて、緩んだ処や解けかかったものは改めて、その場で縛り直された。この時の縛り方は実に無残なもので、大の男が力一杯、締めあげたので、島影美喜子嬢などは、ぐうっとのけぞるように顔を上に反らす有様であった。斬首場は右側前方に設けられており、仮に日本式なら喪服に似た黒白のダンダラ幕を周囲に張りめぐらすところをのっぺら棒の吹きっさらしの野天に粗末なアンペラの莫莖が地べたに一枚敷かれて、その前に血溜穴兼死体の放り込みの壕らしいも

のが寒々と掘ってあった。

「いいかね、最初の一番目の女は、このまま目かくしをさせるが、その外の者は自分達の眼で初めの女の首の落ちる処をよく見なければならぬ。ただし着る物に困っている難民のたつての要望で、あるいは、その着ているきものを剥ぎ取り裸にするかも知れない。判ったね」と係長みたいな男が改めて四人の女にいい渡す。

姓名を確認した順序からすれば、只一人運命の目かくしを初めにされているのは野上嬢なのであろうか。やや灰がかった白布が美しく輝く彼女の黒い瞳を覆った。そしてくるりと向きを変えて斬首場の方へ縄尻を取られ、不安そうに歩き出すと、あこの三人の令嬢達は彼女の後に続いて一人宛、厳しく縄尻を取られて共々追って行く。ポツリポツリと、とうとう雨が降って来た。

私は同じ邦人として特に許されて、一行と共に歩調をあわせて歩いたが、雨が一滴ずつ女の髪にあたってツウーと糸を引き、襟から胸のふくらみに流れ、そして最後は赤い帯揚げの中に、すいすいと吸い込まれて行くのがよく見えた。

斬首される日本婦人達は、一まず穴の前で立ったまま暫時の間、休憩を与えられたが、全員漸く部署に就くや最初の女、野上千恵子嬢が背中を突かれるようにして屠所の羊の如

く曳き出されて来たのである。

淡いブルー地に刺しゅうで大柄の鶴や鳳凰の吉祥紋様を浮き上らせた大振袖は、もう既にかなり雨に濡れてしっとり、たもとを垂れた中に緋の長襦袢が、ひっそりと重なり袖口からこぼれるように覗いていた。

「おーい、その女はここだ。この位置に坐らせろッ。ただ割の青竜刀が斬れんと肝心の首が穴に落ちん」今日の青竜刀は特別よく斬れると割はいつております」誰か着物の下の方をうんと捲くってやれ。血が飛んじやって折角の日本の晴着が台なしになるでう」

ぺたんとお尻をつけて坐った裾前は、長襦袢もろとも後ろの方へ十二分に捲くられて、一枚の真紅の腰巻が半ば露出しかかった白い膝頭を精一杯、覆いかくすように、もろに出たあられもない姿を、振袖だけは日本女性のシンボルとばかり横に長く地面に横たえたまま、腰より上の半身を、やおら前に倒しながら黒髪の首の部分は、さらにさらに屈折するかのように前方に差し伸ばさせる。そのさまは徳川時代の江戸伝馬町牢屋敷なら、さしずめ非人共がやったであろう手さばきと実のところ全く同様な風景であった。

前から見た姿はそれ程よくなくても、横に回って見た処刑される女の姿というものは、実に美しい。

まして着物だ。それも盛装した晴着とあっ

ては、たとえ異常に裾前が捲くられていようとも、最早一個の完璧に磨きあげられた美術工芸品なのだ。

私は、それが異国人に依って行なわれる、きびしい処刑場であることも忘れ、また身体中がジーンと硬直していくのもかまわず「おいッ、コラッ、そばへ寄っちゃいかん」という制止の声も、もううわの空で、今は見るも無残な美術品めがけて飛びついたのである。

「なんとということをしやがるンだい。お可哀いそうに、アラアラ赤い帯揚げもこんなに緩んでしまつて……苦しくないかい？ 白羽二重の丸ぐけ帯締めだって、こんなに緩んだままでは終生、日本女性の名折れというもの。も一度、私に直させて下さい」それは有難うございます。私達日本女性は罪の償いとして、この通り喜んで死んで参ります」と声は細いが凛とした意外な応答。

「おいッ、その日本人。ひっ込んでろ。邪魔立てしちゃいかんぞ。斬り手の割はどうした？ 何をぐずぐずしとるンだ」

荒野とはいえ静肅なるべき刑場が一瞬、罵声に変わろうとした時、割陳源と名乗る山東産、苦力上りの大男が、右手に無気味に光る青竜刀をひっさげて姿を現わした。



懸賞創作応募作品

黒い日記帳

(前)

加藤 広 夫

俺は、加藤広。二十六才。職業はギャンブラー。〇〇会の客分として、二年ぶりに日本に帰ってきた。半月程前にだ。本場ラスベガスの賭博学校に入学し、わずか半年で「百万ドルのユビ」として名をとどろかせたが、なぜか日本が恋しくなった、というより、日本の女が恋しくなったのだ。

胴元連があわてて止めるのを、一年間の休養と称して俺は帰った。それを知って喜んだのは、俺を預った〇〇会だ。何しろ一回ユビをふれば、何百万かの金が転がりこむのだ。だが俺は、休養に帰ってきたのだ。だから仕事は、夜の一時間だけカードをふる。あとは寝るか、ブラブラしていいという約束を

とった。

それが俺にとっての帰国の目的、女をハントする、最高の時間とするための狙いだ。俺の楽しみは、金と女。もっとも、だれだってきらいな野郎はいないだろうが……。

女といっても、ただ抱くだけなら、気がぬけたビールだ。ちっとも、うまくねエ。

そこには、やはり俺流の「ゲーム」が必要なのだ。しかし、ゲームは俺ばかりが楽しんでもだめだ。相手も、そのゲームにのってこなければ意味はない。だから俺は、俺流のゲームに、乗ってこないなと思う女は、どんな美人でも、すぐに止めることにしている。今日俺は、ブラッと電車に乗りこんだ。

前の方がいい。中にはいると、ガランとしていた。スミのほうに一人、女がいた。中年だが、なかなかのグラマーだ。水色のツーピースをまとい、おちついたものだ。俺は何気なさそうにしてその女の真向かい側にすわりこむ。電車が動きだした。俺は女の足もとに目をやった。中年らしいのにミニである。その水色のスカートから太モモまで見える。いいながめだ。しかも何という色艶だ。その肌色は、まさに十八、九の色艶だ。まったく若い肌だ。

俺は、俺流のゲームをやりたくなった。白昼の電車、しかもガラ空きでは、と考えるいではなかったが、かまうもんか。俺は思いき

って、片足のクツをぬぎ、つづいて足を組みかえてやった。その時、女はハッとしたように体を固くしたようだ。だが女の目は、外の景色をジーツと見ている。俺の足は女の足へあいさつをしに行った。とたんに女の顔は真っ赤になったが、あいさつをうけてジーツとしたままで、動かない。俺は勝利の快感に酔い始めていた。だが電車は終着駅についた。俺は、なごりおしかったが、しかたがない。

どこの奥方かしらないが、俺のゲーム相手にピッタリだ。脈も十分にある。しかし、やめておこう。ミイラとりが、ミイラになりそうな気のする女だ。俺は早足に駅を出た、と言っても、当てがないので駅前の喫茶「M」に入った。

ちょっとした店だ。二階に上がるとアベック用のイスがならんでいる。俺は、人のいないスミの方に腰をおろす。そしてタバコに火をつけようとした時、目の前でライターが鳴った。俺は瞬間に「しまった！」と思って反射的に身がまえ、ライターの主を見た。

俺のCANは外れたが、しかし、その主にまたおどろかされた。それは電車の女だったからだ。

俺は、てっきり××組のヤロウだと直感し

ていた。××組と〇〇会は、この道の勢力を二分する仇敵同士の暴力団である。

俺が、ほんと胸をなぞおろすと、女はニコリして俺の前に坐りこんだ。ここまでくれば俺も男だ。たとえミイラになっても、据膳くわぬは、男の恥だ。二時間ばかり話して、みみから、俺たちは喫茶を出て、帰国後なじみのホテルに入った。

長い廊下を通過して、小さいダブルベッドソファ、そしてシャワーと、三つに別れている部屋に案内されると、俺は女中にチップを握らせて、すぐに部屋からお出した。このホテルは、俺の第二の家と言っている。俺は冷蔵庫からビールを取り出して、黙ったまま女のコップを満たす。女も無言で俺の目を見つめていたが、思いきったようにビールをガブのみすると、『フウーッ』と、大きく、ためいきをついた。

『さあッ、始めようか。この上に上がってくれ』

俺は、ドスをきかした声で言った。女は、あっけにとられたように、俺の目をみつめていたが、やがて、フラフラと催眠術にかかったように、俺のユビさすテーブルの上に上がった。

『坐って』

女は、そのまますわりこむ。

『膝をひらいて』

女は、まったく俺の思いのままだ。女の膝がしずかにすこしずつ外側にひらいていく。

俺は、ビールをチビチビのみなながら、その変化をながめる。

『もっと広く』

女のきれいなモモの色艶が俺の目の前にある。タイトスカートの足が、もういっぱい張りだした布地に喰い込まれている。女の顔は真っ赤に燃え上った。そして、瞳は異常にひかり、肩が大きく息をしている。俺のみつめているモモの内側に、トリ肌が立ち、赤くそまり始めた。

『もうウルシテッ！』

女は両手で顔をおおって、体をクネラシ始めた。だが膝は、そのままだ。俺は、ただビールを舐めながら、じっと眺めるだけだ。女の手が、たまたまなくなったように、モモをかくして膝をとじようとした。俺は、この時を待っていたのだ。さっと寄って、女の両手を取り、テーブルの脚に、ポケットからとりだした細いナイロンロープでしばりつけ、しっかり組み直させた女の足首を片方ずつ、同じ

くナイロンロープで引っばって縛り上げた。

『おねがいッ……ユルシテーッ』

女は泣き声をだし始めた。俺はニヤリとして、水色のタイトスカートを、腰の上までまくりあげてやった。その下には、まっ白な下着が一枚だけのこっていた。

『オネガイッ、カンベンシテーッ』

俺の耳には、いい音楽としか聞こえない。

最後の一枚に指をかけて引っばってやる。

『ウーッ、アーッ!』

女は何かにたえているのか歯をくいしばって、首が盛んにはねている。俺は、また坐りこんで、しばらくそれを見詰めていたが、ビールビンを持って立ちあがり、まだ半分程のこっているビールを流し落としてやった。

『アーッ!』

女の顔が、明らかに歓喜を表現し、慄えてのけぞった。俺は、すばやく女を後手にしぱり直してやった。女はナイロンロープに噛まれた肌を喜悦の呻きと共にウネラセ始めた。俺は柔肌に酔いながら、再びミイラになる危険を感じた。

俺は、肩の重みで目をさました。女が俺の肩に頭をよせて、俺を見詰めている。

『どうだい？ 気分は』

ニッコリと女に言ってやった、

『イジワルネッ』

あまえたように俺の胸に顔をふせてきた。ナイロンロープが肌に喰いこんだままだ。俺は、それを取ってやった。

『シャワーでも浴びてきなよ』

俺はタオルを投げてやった。女はロープ痕を揉みながらニッコリとして

『あんがい、やさしいのね』

そう言ってシャワー室にとびこんだ。

『ゲームは終わったのさ』

俺はタバコに火をつけると、マクラもとの電話で、コーヒーを一つ注文する。窓から朝日が射しこんでいる。身じたくをととのえ、ロープをポケットにしまい、ついでに小さなハコをとりだして、女のハンドバッグの上におくと、俺は、すばやく部屋を出た。

俺は女に金を渡したことがない。なぜなら俺の目をつける女は、プロではないからだ。初めて逢って、気が合って、そしてゲーム。その礼として金を渡す。これでは俺が女を買ったことになる。俺はゲームは楽しむが、女の心をキズつけない。これが俺のモットーなのだ。

“さて、ぼちぼち〇〇会に顔を見せないと

組長がヘソをまげるぜ”俺は早足で駅にとびこんだ。

組につくと早速、『兄貴、組長が探してましたぜ』とチンピラがいう。『カミナリでもおちるかな』俺は、昨夜の仕事をさぼった事で、組長が呼んでいると思ったのだ。

だが違っていた。組長の用件は、今夜ある代議士の邸宅でパーティがあるから、その場で俺のうでを見せろと言うのだった。パーティと言っても、政界の黒幕と暴力団との顔つなぎみたいなものだ。俺は気がすすまなかつたが、朝帰りの弱味もあるので、しぶしぶ引きうけたのだが……。

その夜、俺は、用心棒四人に囲まれて、外車に乗りこんだ。代議士の邸宅で、組長の後につづいて会場に入る。まったく豪華なパーティだ。政界の黒幕だけの事はある。俺のような貧民そだちの目には、まぶしすぎるぐらいのもんだ。ユビ先で稼ぐようになってからは、そうとう慣れたつもりだったが、上には上があるものだ。

俺は組長からはなれると、スミのイスに腰をおろした。その時、一同がそろって拍手を شدした。俺はその拍手をする人々の視線を追って目をやった。すると二階の階段口に二

人の女性が立っていた。俺は目をみはった。

なんと美しい少女だろう。まっ白なイブニングドレスを思わせる衣裳。まっ白いミニドレス、そして、まっ白いストッキング、まっ白いブーツ、まっ白い手袋。花にたとえるなら、まさしくユリの花だ。あどけない顔だ。その瞳には一片のけがれも見えない。俺は俺なんぞが見てはならないものを見てしまったように、あわてて視線をそらし、二人めの女に目をやった。そしてまたわが眼を疑った。水色のキラキラ光るようなドレスで微笑んでいる女は……。そうだ、ゆうべの女だ。間違はなくゲームの相手だ。俺は一瞬、ゾーッとして体から血の気が引いた。

その女が、代議士の奥方と聞いて余計に血が凍る思いだった。しかも俺の目が、その女の目と合ってしまったのだ。夫人も一瞬、顔色を変えたようだ。俺はあわてて目をそらした。

大変な女をゲーム相手にしてしまったものだ。なんと言っても亭主は政界の黒幕だ。夫人との関係がもしわかれれば、いくら俺が〇〇会の客分としても、ただではすむまい。こりゃあエライことになったもんだ。もっとも、俺の方はラスベガスへさえ帰えれば、胴元連

がなんとかしてかばってくれるだろうが、女の方は、そうはいかんだろう……。などと落着けぬ俺がソワソワとタバコをふかしていると当の夫人が人をわけて俺の方にやってきた。

『庭先に出ませんか?』

ニコリと話しかけられては俺も度胸をきめざるを得ない。夫人の後から庭に出た。

『驚いたわ。……でも奇遇ね、フフフ。私ねまた逢いたいと思っていたの。……あっ、これ、ありがとう』

女、いや、夫人は、俺がおいて帰った赤いバラのブローチを、胸につけていた。

『驚いたのは、こっちだぜ。でも、いいのかい? パーティのほうは』

『いいわよ、あんなパーティなんか。それより私の隣りにいたでしょ、女の子』

『え? ああッ、あのきれいな子ね』

『フフフ、とぼけないで。私の娘なのよ、あの子ッ』

『えッ!』

これには、また驚いた。夫人はどう見ても三十ぐらいだ。娘は十七、八だ、ということだけは……。

『フフフッ。私、後妻なのよ』

『アッ、なるほど』

女はクスクス笑っている。

『明日の夜、待ってるわ。アソコで……』

夫人はニコリ笑って、パーティにもどっていった。

『おーいッ、加藤くん』

組長が呼んでいる。俺の出番らしい。

俺は、階段の中央に上がって、まずランプの手捌きから始めた。俺のユビ先の動きにためいきがもれている。つづいて客の一人とポーカールをして見せる。俺の手は、ローカルストレート、フラッシュ、相手は「7」のワンペアー。最後にローソクに火をつけて、客に持って立ってもらい。それを、こちらからカードを飛ばして火を切り消してやった。あまり大したことでもないのに歓声がわきおこった。俺はその時、少女の視線を感じていた。……

パーティは大成功に終り、組長は鼻高々であった。俺の所へグラスが集まった。

翌日、俺は夜になるのを待ちかねて出かけた。俺は、夫人が喫茶「M」にいるのか、ホテルのほうかと迷ったが、思いきって、ホテルに直行した。

カンはずだった。部屋の中で夫人がビールのはいったコップを、なつかしそうに見詰

めていた。今日は緑色のワンピースだ。

俺はゆっくりと夫人の前に坐り、待ったか
いとも何ともいわずに、夫人の持っているコ
ップをとりあげてのみほした。

夫人と俺の眼が、宙でカランで火花が咲い
た。

『ここへ来て立ちなよッ』

ソファ―に坐っていた夫人は、待ちかねた
ように、俺の前に立った。ゲームの開始だ。

『足をひらくんだッ』

夫人は目をとじて、ゆっくりと足の位置を
かえる。俺はソファ―に坐ったままだ。

『手を後で組むんだッ』

夫人は、しっかりと両手を後ろに組み、歯
をくいしばっている。俺はソファ―にふかく
腰をかけなおす。そしてゆっくりと、俺の足
先が夫人の緑色のワンピースの裾にかかり、
すくい上げてゆく。俺の足は、やわらかくで
きている。拳法できたえたおかげだ。

『ユルシテッ』

夫人の顔が赤く燃え上がってきた。緑色の
三角のスカートから、二本のすばらしい、ま
っ白なモモが顔を出してきた。さらに上げよ
うとすると、

『ヤメテッ。今日は、もうコレ以上は、ユル

シテッ』

俺は、ニヤツとした。夫人がゲームに乗っ
て来た証拠だと思った。

『ピューッ』

俺は思わず口笛を吹いた。

夫人は足をすばめて坐りこんでしまった。

『今日は、下着なし。フッフ』

『イヤッ。モウ言わないでッ』

夫人は耳をふさいで、頭をふった。俺は、
用意してきた犬の首輪を、夫人の白い首にま
きつけてやった。夫人はおなしく、つながれ
る鎖を見つめていた。

『さあーて、奥さん。今日は白い牝犬のオー
ル・ヌードを見せてほしいね』

俺はくさりをもったまま、ソファ―に腰を
おろしてタバコをくわえた。夫人は、モジモ
ジしていたが、やがて服のジッパーをはずし
始めた。俺はそっくり返ってニヤニヤながめ
てやる。

ワンピースの下に何もつけていないのだろ
う。なかなか、夫人の手が進まない。俺は、
もっているくさりをひっぱる。

『アッ。カンニンシテッ』

俺は、じれったくなつて立ち上るなりワン
ピースを、ひきおろしてやった。

夫人が、体をちぢめようとするのを、俺の
鎖がグイグイとひき上げた。

『アーッ』

俺は鎖をはなすと、うずくまる夫人の両手
を後にねじ上げ、ポケットから、ナイロンロ
ープを取り出した。片手で夫人の両手首をも
ち、片手でロープのはしを口にくわえて、そ
のままグルグルまきつけて、はしを帽子掛に
しばりつけた。

『さあ、足をひらけッ』

夫の足は、とじ合せたままだ。

『フッフッ、まあいいでしょ。どちらがいい
か。思いしらせてやるよッ』

夫人の顔に迷いがでている。俺は、夫人の
足首をしっかりそろえてしばり上げた。夫人
が、不思議そうに俺の顔を見詰める。足をそ
ろえていたら、何もできないと思っっているら
しいのだ。俺はニヤリッと笑って、カバンか
らふくろを取り出してシャワー室へ入った。

水の音を立ててから、俺は背後に手をかく
し、夫人の前に立った。そして足もとに、水
の入ったバケツをおく。どう察したのか夫人
は、まっ赤な顔をさらに燃え上がらせて、体
をゆすりはじめた。

『これは作業用のゴム手袋さ』

俺はゴム手袋のまま、バケツの水に手をつけた。作業用手袋は、手のヒラにブツブツのスベリどめがしてあり、とくに丈夫にできている。俺はゆっくりと手袋をぬらして夫人の前にたった。夫人は本能的に感じとったのか、しっかり目をつぶり顔をそむけた。俺はまず手甲のブツブツのない、なめらかな方のゴム

肌を、盛り上がった胸の上に押しつけた。
『ア—ッ!』

夫人は悲鳴をあげて、天井をむいた。ゴム手袋はゆっくりと、胸肌を円を描きながら、盛り上がった双丘を押しつぶして行く。キュッキュッとゴムのなく音が、いつか夫人のあえぎに消されて行った。夫人は、ゴムのぬれ

肌の冷く異質の感触に酔っているのに違いのないのだ。

突然! 手袋のヒラが返えって、ブツブツしたスベリどめのついたほうで、見事な乳房がグイッとニギられた。そして、その手袋はゴシゴシと柔肌を、もみほぐし始めた。
『ア—ッ、ウウッ……』

夫人は、首を左右にふり、体をゆさぶり始めた。

『どうだい奥さん。まだ逆らうかい?』

俺は、バケツの中に手袋を入れて水に充分浸してから、夫人の膝先を襲ってやる。

『ア—ッ! ツメタイワッ!』

夫人の声が変わってきた。ゴム手袋はピタリとモモに吸いついた。のがれようとしても足首を揃えてしばらくしているためにげられな

い。
『オーッ! ア—ッ!』

ぬれた、ゴム手袋が、夫人の白い柔肌を這い、いたぶり続けて悲鳴を絞り上げさせた。ゲームは最高の盛り上りをみせた。俺の心が勝利の歓声をあげて、夫人の悶えを迎えていた。チキ生、だから俺はハントが止められねえんだ。……俺の血が猛り狂った。

俺は、ゆっくりと、ベッドから降り、シャ

●躍進記念● 百萬元懸賞 △原稿募集▽

▽賞 金△

入選作品 一席	1篇	五万円	10篇
入選作品 二席	1篇	三万円	10篇
入選作品 三席	1篇	一万円	10篇
入選作品 四席	1篇	五千元	20篇

▽内容△

一、特異な風俗文獻誌を標榜する本誌の内容にふさわしい力作を、読む雑誌としての新しい脱皮を企図する本誌の内容充実のため、広く読者の間から懸賞募集いたします。一、S並にMは勿論のこと、各種各様のフェティシズム、一般女性切腹、男性切腹、男女性、美少女相撲、女斗美、生首狂、珍奇風俗、風俗嗜好、見世物、奇態、珍奇、珍奇風俗、風俗文獻、その他古今東西に亘る特異風俗に關する題材を広くとりあげて下さい。一、題名を大いに新分野の開拓による力作を歓迎します。特に従前本誌にて余り扱って

▽規定△

一、応募作品は、すべて未発表の自作の作品に限ります。作品の中に引用部分があれば、その出処(作者、書名など)を明記願います。一、原稿は二枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して三十枚以上、二枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して四十枚以上、三枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して五十枚以上、四枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して六十枚以上、五枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して七十枚以上、六枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して八十枚以上、七枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して九十枚以上、八枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して一百枚以上、九枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して一百一十枚以上、十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して一百二十枚以上、十一枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して一百三十枚以上、十二枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して一百四十枚以上、十三枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して一百五十枚以上、十四枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して一百六十枚以上、十五枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して一百七十枚以上、十六枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して一百八十枚以上、十七枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して一百九十枚以上、十八枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して二百枚以上、十九枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して二百一十枚以上、二十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して二百二十枚以上、二十一枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して二百三十枚以上、二十二枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して二百四十枚以上、二十三枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して二百五十枚以上、二十四枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して二百六十枚以上、二十五枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して二百七十枚以上、二十六枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して二百八十枚以上、二十七枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して二百九十枚以上、二十八枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して三百枚以上、二十九枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して三百一十枚以上、三十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して三百二十枚以上、三十一枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して三百三十枚以上、三十二枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して三百四十枚以上、三十三枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して三百五十枚以上、三十四枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して三百六十枚以上、三十五枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して三百七十枚以上、三十六枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して三百八十枚以上、三十七枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して三百九十枚以上、三十八枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して四百枚以上、三十九枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して四百一十枚以上、四十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して四百二十枚以上、四十一枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して四百三十枚以上、四十二枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して四百四十枚以上、四十三枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して四百五十枚以上、四十四枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して四百六十枚以上、四十五枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して四百七十枚以上、四十六枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して四百八十枚以上、四十七枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して四百九十枚以上、四十八枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して五百枚以上、四十九枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して五百一十枚以上、五十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して五百二十枚以上、五十一枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して五百三十枚以上、五十二枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して五百四十枚以上、五十三枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して五百五十枚以上、五十四枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して五百六十枚以上、五十五枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して五百七十枚以上、五十六枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して五百八十枚以上、五十七枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して五百九十枚以上、五十八枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して六百枚以上、五十九枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して六百一十枚以上、六十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して六百二十枚以上、六十一枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して六百三十枚以上、六十二枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して六百四十枚以上、六十三枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して六百五十枚以上、六十四枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して六百六十枚以上、六十五枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して六百七十枚以上、六十六枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して六百八十枚以上、六十七枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して六百九十枚以上、六十八枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して七百枚以上、六十九枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して七百一十枚以上、七十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して七百二十枚以上、七十一枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して七百三十枚以上、七十二枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して七百四十枚以上、七十三枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して七百五十枚以上、七十四枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して七百六十枚以上、七十五枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して七百七十枚以上、七十六枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して七百八十枚以上、七十七枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して七百九十枚以上、七十八枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して八百枚以上、七十九枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して八百一十枚以上、八十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して八百二十枚以上、八十一枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して八百三十枚以上、八十二枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して八百四十枚以上、八十三枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して八百五十枚以上、八十四枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して八百六十枚以上、八十五枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して八百七十枚以上、八十六枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して八百八十枚以上、八十七枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して八百九十枚以上、八十八枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して九百枚以上、八十九枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して九百一十枚以上、九十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して九百二十枚以上、九十一枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して九百三十枚以上、九十二枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して九百四十枚以上、九十三枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して九百五十枚以上、九十四枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して九百六十枚以上、九十五枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して九百七十枚以上、九十六枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して九百八十枚以上、九十七枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して九百九十枚以上、九十八枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して一千枚以上、九十九枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して一千一十枚以上、一百枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して一千二百枚以上、一百一十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して一千三百枚以上、一百二十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して一千四百枚以上、一百三十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して一千五百枚以上、一百四十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して一千六百枚以上、一百五十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して一千七百枚以上、一百六十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して一千八百枚以上、一百七十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して一千九百枚以上、一百八十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して二千枚以上、一百九十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して二千一十枚以上、二百枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して二千二百枚以上、二百一十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して二千三百枚以上、二百二十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して二千四百枚以上、二百三十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して二千五百枚以上、二百四十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して二千六百枚以上、二百五十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して二千七百枚以上、二百六十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して二千八百枚以上、二百七十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して二千九百枚以上、二百八十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して三千枚以上、二百九十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して三千一十枚以上、三百枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して三千二百枚以上、三百一十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して三千三百枚以上、三百二十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して三千四百枚以上、三百三十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して三千五百枚以上、三百四十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して三千六百枚以上、三百五十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して三千七百枚以上、三百六十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して三千八百枚以上、三百七十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して三千九百枚以上、三百八十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して四千枚以上、三百九十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して四千一十枚以上、四百枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して四千二百枚以上、四百一十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して四千三百枚以上、四百二十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して四千四百枚以上、四百三十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して四千五百枚以上、四百四十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して四千六百枚以上、四百五十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して四千七百枚以上、四百六十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して四千八百枚以上、四百七十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して四千九百枚以上、四百八十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して五千枚以上、四百九十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して五千一十枚以上、五百枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して五千二百枚以上、五百一十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して五千三百枚以上、五百二十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して五千四百枚以上、五百三十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して五千五百枚以上、五百四十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して五千六百枚以上、五百五十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して五千七百枚以上、五百六十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して五千八百枚以上、五百七十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して五千九百枚以上、五百八十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して六千枚以上、五百九十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して六千一十枚以上、六百枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して六千二百枚以上、六百一十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して六千三百枚以上、六百二十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して六千四百枚以上、六百三十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して六千五百枚以上、六百四十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して六千六百枚以上、六百五十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して六千七百枚以上、六百六十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して六千八百枚以上、六百七十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して六千九百枚以上、六百八十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して七千枚以上、六百九十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して七千一十枚以上、七百枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して七千二百枚以上、七百一十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して七千三百枚以上、七百二十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して七千四百枚以上、七百三十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して七千五百枚以上、七百四十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して七千六百枚以上、七百五十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して七千七百枚以上、七百六十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して七千八百枚以上、七百七十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して七千九百枚以上、七百八十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して八千枚以上、七百九十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して八千一十枚以上、八百枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して八千二百枚以上、八百一十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して八千三百枚以上、八百二十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して八千四百枚以上、八百三十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して八千五百枚以上、八百四十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して八千六百枚以上、八百五十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して八千七百枚以上、八百六十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して八千八百枚以上、八百七十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して八千九百枚以上、八百八十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して九千枚以上、八百九十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して九千一十枚以上、九百枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して九千二百枚以上、九百一十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して九千三百枚以上、九百二十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して九千四百枚以上、九百三十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して九千五百枚以上、九百四十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して九千六百枚以上、九百五十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して九千七百枚以上、九百六十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して九千八百枚以上、九百七十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して九千九百枚以上、九百八十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して一萬枚以上、九百九十枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して一萬一十枚以上、一〇〇〇枚用紙を四百字詰原稿用紙に換算して一萬二

ワ―を浴びてベッドにもどると、夫人の肌からロープを外ずした。夫人はニコリ笑ってロープ痕のある手でタバコに火をつけ、俺にさしだした。そして寄り添って話しかけて来た。

『あなた、"S"なのね。……いつから?』

『フフフッ。俺のは"S"って、ほどのものじゃないぜ。ハッハハハ』

『ほんと。じゃ"S"はもっとひどいの?』

『あたりまえさ。俺は相手がMならMなりにゲームするだけのこと。でなければあんなぐらいで、がまんする。フフフッ』

『Mって、いろいろあるの?』

『ずいぶんあるね』

『同じ人間の女なの?』

『同じ喰い道楽でも、喰い物はきまつてるわけじゃねえだろう』

夫人は、そりゃそうね、といわんばかりに大きく頷いた。

『じゃ、こうして欲しいってMのほうから注文できるわけ?』

俺はぐっと返答に詰った。

『注文があるのか?』

夫人は無言で、うつむいた。

俺はタバコをもみ消すと、身じたくをはじ

めた。

『今日は、何も持ってねえからな』

ニコリ笑って部屋を出たが、ホテルの出口でハッとなった。

真白のミニスカートに真白なストッキング

そして白のブーツ。頭には白のベレー帽。頭から足先まですべてが真白の少女が、じっと俺を見詰めていた。いや、睨んでいたのだ。

俺にはその白さが、まぶしかった。黒の世界に生きてきたせいだろう。だから白い服は、その少女にはピッタリなのだ。もちろん代議士の令嬢なのは間違いない。

しかし、どうしてこんなところに? と、

いぶかる間もなく、少女はツカツカと俺の前までくると、いきなり"バシッ"と、俺の横面をなぐって、さっと走って行った。

俺は直感的に悟った。"そうか、見られていたのだ"

俺は少女の後を追った。

俺は、代議士への恐さよりも、後妻にしろ母親が他の男とホテルで一夜を過ごしたのを知った少女の心が痛いほどわかるのだ、俺の体験から。子供のころの暗い思い出から。

『まってくれーッ』

何という事だ。あの少女は、どこまで見て

しまったんだ。まさかゲームまでは……?

俺にはわからない。

『まってくれッ』

いつのまにか公園に出ていた。

『話があるんだッ』

やっと追いついた。早い足だ。

『よしてよッ、変態!』

ギクッと、俺の心につきささった。俺はうろたえて、とっさに、少女のホホをなぐって見た。

『あなた、それだけしかできないの!』

少女は歯をクイしばって、いたさをこらえている。

『たのむッ。聞いてくれ。君の母さんとは、

ホンのできごころなんだ』

『よしてよッ。あんな人、ママじゃないわッそれにできごころだなんて。……ウソツキッ!』

『……』

『あなたとママが、庭で打合わせてるの、聞いていたわッ』

もうだめだ。そこまで知ってれば、あやまりようがない。俺は、ヘナヘナとベンチに坐りこんでしまった。……

―(未完)―



マニアの随想

あ　　る　　風　　景

早　木　夢　二

向こうからいえば、こちらの方が、どうかしているに違いないが、色々な責めや縛りのポスターや写真を見ても案外、平気で素知らぬ顔をしている人が多いのにびっくりする。心の中ではおどろいているのかも知れないと思うのは、こんな性癖のあるこちらからいうことで、それは結局、身びいきであるかも知れない。

そんなものを見ると、「あっ、あった」と心の中で小躍りせんばかりに喜び、それでいて何か他人の目がはばかりされて、そっと傍目で見たら、何度もその前を行ったり来たりする私などからすると、時々そんな人が羨ましくなることがある。

何の因果か、ああ、俺もあんなに平気で知らんふりをしたり、或は平気な顔で見入ってお互いの話題にしたり出来ないかと思った。

私と違った世界の人のように、羨ましくなるのであるが、その実は、そんな人たちと同じように、そんなものを堂々と見ていきたいという願望だけが、そう思わせるのであって、案外こんな世界の妖しい魅力に憑かれ切っている自身を却って誇らしく思っているのかも知れない。

そんな人たちの世界が狭苦しいもののように思っ、こちらこそ大きな様々な可能性をひたすら求めているのだと、ひそかに威張っているのか知れない。

週刊誌のさし画に、全裸の女が縛られているのを、私がこっそり隠そうとすると、

「なに、これ？」

と一べつして、

「こんなもの、私、興味ない」

といいすてる女と、ある時期つき合ったこ

とがあるが、自分がその女から軽蔑されているかのような感じは否めなかったが、同時にそんなものをすら見ることが出来ない女が、何だか哀れでもあった。

「責め地獄」の、いれずみの裸女が後手に縛られているポスターが、駅にはあってあった。

健全な？ 男女が、チラッと眺めたただけで後は素知らぬ風に、そのポスターの前のベンチに腰をかけて、ちようちようなんなんと語らっている。

私は、さり気ない風に、その前を行きつ戻りつしながら、盛んに横目を使って、責め答を当てられた女の、むっちりふくらんだ乳房をしめつけて、後手にくくっている太目の縄を確かめながら、自分の知っている縄がけのあれこれを思い描き、ひそかに体を燃やさねばならないのだった。

しかし、それにしても、いい時代がやってきたというものだ。

戦争で生きるか死ぬかばかり考えていたものにとって、こんな時代がくるなんて、思っても及ばないことだったし、Sの花咲くかどうかとも判らなかつた縛りへの憧憬が、こんなに見事に花開いていると、何はともあれ、生きている身の幸せを、しみじみと噛みしめなければならぬ。

M 派小説

獣

じゅう
ん

人

香川 泳三

(1)

「おどろいた。あんただったの。いやらしい手紙なんかよこしたのは」
呆れ顔で、うでを組んだ鈴川加代は、目の前の床に土下座し、頭をそこにすりつける男を見おろした。年は二十五才くらいか、わりに整った顔だちの肩幅の広い青年である。
「まあ、知ってるんですの？ この人」
横から道子が口をだした。

「知ってる、ってほどでもないけど、お役人さまよ。ホラ建築係の」
奇妙な手紙を受け取って、すすめられるままに会う気になった。気味のわるい手紙だったが、好奇心をおさえられなかったのだ。呼んだ相手が、こともあろうに、建築違反で摘発された役所の係員とは意外だった。
「そんなことは、どうでもいいわ。けれど、あの手紙のことは、ほんとでしょうね。まあウソでもかまわないけど、でも、ここまでき

て、実は、なんて言わさないわ」
「誓ってもいいです。ウソはいいません」
「じゃ、何をしてもいいのね」
加代は、あとへ引けなくなっていた。言ってきた通り、手ひどい目に合わせたら、イタズラかどうかは、すぐわかるだろう。
丁度いきたかったトイレのドアをあけた。細かく念をおすのは、めんどろだった。どんなご用でもいたします。と売り込んできた男を、こんな方法でためすのも、おもしろい



だろう。

手紙を読んでおいたから、この青年が何を求めているかは見当がついている。

ながいあいだの水商売で、客のなかには、実は、そんなネタ外れのことを要求するのが案外、多いことも見聞していた。

それよりも、この青年を利用したら、いま悩んでいる違反建築の事件が、うまく解決できるのではないか、という打算もあった。

「ついてくるのよ」

思わず浮々と命令口調になったら、男は嬉しそうに微笑した。

トイレは、広々と明かるくできている。

いささか気恥かしくはあったが、えいと思つて、ポーズをつくった。

たいていの酔客は、このへんで逃げだすものだけど、青年が手紙でくどくど言ってきたことは、うそでないらしい。

加代は、青年も無視して、ポーズをくずさない。異性の目に、そんなところをさらすのに妙な快ささえ感じてしまった。

朝はやくから自宅をでて、一日じゅう飛びまわる生活に、ついトイレへ入るのが、おろそかになっている。

それに、自宅の手入れのゆき届いた広いト

イレを思うと、外出先の、きたないトイレをつかう気になれないのだった。

だから帰宅すると、ながい時間、入っている習慣だった。

小型の換気扇はまわっていたが、でも多少の香気が、もれるのは仕方がない。

「すんだわ」

立ちあがる加代の腰に、男はそつと顔をよせてきた。

手紙で言ったことは、うそではない。

いささか羞かしい気もしたが、こんなことに男をつかうのは、案外わるくない。

自身では手をくださずに、さっさと、ドアのそとへ出る。

男は、しばらく中でモソモソしていたが、やっとおずおずと、すがたを現わした。

「くち、すすいでらっしゃい」

さすがに、いさか気がひけたが、男は

「はい。中で、すませました」

また床に土下座した。

「道子。うそじゃないわ、このひとのご希望どおり飼ってやることにしよう」

加代は、前にもらっている手紙の文面を、もういちど思いだしながら言った。

ポツと、顔が紅潮するのが自分でもわかつた。

(2)

三、四日まえに、加代は一通の手紙をうけとっている。忙しくて、ゆっくり郵便に目を通したことなどなかったが、

鈴川加代さま。親展。

キチツと、達筆でしるされた筆蹟に、妙に心を惹かれ、

(だれの手紙かしら)

封を切ってみた。

女王さま――。

古風な書きだしではじまる手紙には、しかし奇怪で不倫で毒々しいことが書いてある。

.....

忠実に奉仕する男をお飼いになりますか。

私はお美しいあなたさまの奴隷になってお側で奉仕することを希望しています。

ご入浴、トイレのご用、何でもやります。

よろしければ、愛犬がわりのペットになっておなぐさめする自信もあります。

私をおそばにお置きになれば、日常のくらしがべんりに、楽しくなります。

奴隷を飼うことが、いかに楽しいか、ご想像くださいませんか。

お風呂に入られて、おからだをお洗いになるのにお手をくだす必要はなくなります。そんなことは、奴隷におさせください。

お手洗いのあと始末も、ご自身のお手を汚す必要はなくなりますし、お肌につけた下着の始末などは、ぜんぶ奴隷の仕事です。寒い時や、夜中ねむいのトイレへ立つのは、おっくうな、いやなものです。ある方法で、ベッドでそのまま、ご用がすみますようにお世話するのは奴隷の特技です。失礼ながら、私はある場所であなた様のお美しいお顔を拝見し、あなた様のおすがたに女神をおもい、そのときから、私は私の一生をかけて、あなた様のおみ足の下で、奉仕することを心にきめました、どうか無礼をお許しください。

そして、人間の頭脳と機能をもったイヌをおそばにおくことは、あなたさまご自身にとっても、さぞ楽しいことと、ご想像いただけると存じます。ただし、サラリーなど全然、いりません。あなたさまのトイレか浴室、またはベッドの床下に寝おきすることはお許しください。そうなさるほうが、あなたさまにとっても都合なことは容易にお解りいただけるでしょう。食事は、ご

主人のおのこしになったものをなんでもお与えくださればよいのです。お許しくださるならば、左記へお電話ください……

○

忠実なペット湯田信一と認めてきた、その手紙は、うす気味わるくもあったが、しかしやや心をうごかす内容だった。

とにかく会ってみようかしら、とかけた電話は奇妙にも加代の住む区の区役所だった。湯田の名をいうとスグ通じた。「わかりました、今夜、伺います」という返事が帰ってきた。

指定した時間に、彼はちゃんとやってきている。

希望どおり、お供をゆるしたトイレで、ためらわず、顔いろも変えずに、彼のいう奴隷の奉仕を、なれた手つきでやってのけた。

役所の窓口のむこうでは、ひどくぶっきらぼうに、それどころか、こちらの痛いところについて思わず涙の出そうな思いをさせられた憎いおとこが、こうして足もとにひざまずくのは、いったいなぜか、わけがわからない。

○

アパートの建築が八分通り進んだところで誰かがお節介に投書したらしく、建築基準法

違反だから二階を半分以上も取りこわせと、役所から言われ、加代は悩んでいた。

固く稼ごうと意気込んだアパートづくりに思いがけないトラブルだった。

トルコ風呂が一軒と美容院が二つ。喫茶店と、季節小料理が二店ずつ。五店の経営主である加代は、仕事に追いまくられて家に帰ってくる。身のまわりの雑用に使う人間を一人ほしいと思っていた。

十年前彼女は新宿のトルコで働いていた。稼いだ金で、倒産しかけた店をこっそり買い、独特の客の心をくすぐるサービスを売物に、きわどい商法で、さびれた店を生きかえらせ、儲けた金を、うまくころがしていったら、いつのまにか不動産だけで億の財産ができていた。

社長、と従業員たちは呼んでくれるが、加代は、ついこのあいだ二十七回めの誕生日を迎えたばかりである。

美容院をもっているおかげで、化粧はお手のものだった。小柄で、しなやかなからだに大きな黒目が印象的で、社長というより、お嬢さんといった美女だった。

十七のときから、水商売に飛び込み、さんざん揉まれたので商売にかけては見かけによ

らず、すごいうでをもっている。

営業本部、と呼んでいるこのビルだって、貸した金の担保にとりあげたもので、四階から下には、貸机の事務所やマージャン荘、おにぎり屋、不動産屋などがゴチャゴチャ入っている。

いずれは、出入りの暴力団まがいの「事件屋」を使って、それらの間借人を追いだし、のべ百坪の小じんまりしたビルだけど、全階水商売のレジャービルに改装しようと考えている。

とりあえず、五階にいた前のビルの持主を追いだし、乗りこんで住まいにしたのも、間借人たちへの示威が目的だった、

自室のとなりに、しゃれた造りの四畳半を二つと、風呂場と、思いきりデラックスなトイレをつくらせた。

風呂場とトイレだけが、忙しい加代にとって、せめてもの憩いの場だった。トルコ時代の知識を生かしてつくらせた風呂場は、改造費に糸目をつけなかったので目をみはらせるほど、ぜいたくだった。別あつらえの豪華なタイルを貼りめぐらし、片隅に湯からあがったままのからだで横になれるようにスポンジマットのベッドを置いた、準備ができたら、

ここを女性専用のトルコにする考えだった。

トルコにはミストルコが居る。それと同じに、ここには教育のゆきとどいたボーイを置いて、特殊サービスをさせようと、適任者をさがしていた。身の回りのことは、道子にやらせている。二十二才になる道子は、顔もからだもたくましく、すべてボーイッシュであった。

加代が十年前、家出同様に秋田の生家を飛びだし東京にやって来て、トルコ娘になるまでの、浮浪児同然のみじめな思い出は、いまはうそのようだった。

コッペパン一個で、あとはデパートのトイレで、こっそり水をのんで空腹をごまかしたことは今でも忘れられない。

日ゼニの入ってくる、いまのくらしに、でも用心ぶかく金をかけないようにしている。

五つの店には、それぞれ責任者をおき、毎日、店をまわって帳簿を調べ、売り上げを集めるのは、楽しい仕事だった。人件費は、なるべくかけないようにしている。

いま手を焼いている、違反建築のことにしても、人をたのんで役所へいかせれば、いやな思いをしないですむのは、わかりきっていた。けれど、そんなことくらいで、何万とい

うサラリーにいる人間を雇うのなら、役所のいうとおり、家をブチこわしたほうがマシだと思う。加代は、そんな女だった。

ふだんは、口数の少ないやさしい感じだが、いちどハラを立てたら止めようがなくなり、どんな無残なことでも平気でやれた。

経営している美容院のひとつだって、暴力的にとりあげたも同然で、貸した金のカタにとった美容院とはいえ、期限が一週間おくれただけで、出入りの事件屋をつれて乗り込んでいる。

そのとき美容院には、十人ばかりの客がいたが、そんなのには目もくれず、経営者を追いだし、室を占領した。経営者が一一〇番へ電話し、パトカーがかけつけたが、正規の借用証があるので手がだせない。

その経営者が、恨みを書きつらねた遺書をして、深夜二階に忍び込み、自殺したが加代は気にも、とめてない。

アパートが建築法違反で摘発されても、そこをなんとか、と食いさがっている。

大工には、構わず工事を続けさせていた。その、窓口でギューギュー言わされている湯田信一という役人が、どんなわけで奴隷を志願してきたのかは、わからない。

わからなくても、よいのである。

むしろ、むこうから食らいついてきた、このおとこをうまくあやつって、違反をウヤムヤにしておもう、と考えていたのだった。

加代が求めるトルコボーイにぴったりの青年が、こうして飛びこんだのは、まことに好都合だった。

初対面でやらせた、数々の羞かしいサービスも、期待以上にやってのけている。

おまけにサラリーは全然いらぬという。

こんな、うまい話があるだろうか。

加代はいっぺんで、このおとこを使う気になった。じぶんのオモチャに生きた青年を使うというのは、すばらしいことだと思った。

(3)

信一は、湯ぶねからあがって、濡れたからだのままベッドに横たわると主人さまの加代の足の前にひざまずき、セツセと足ゆびのツメを切っている。

下着いちまいつけない裸体であった。ただ腰部に、筒形のビニールのバッグのようなものがつけられ、そこから細い鎖が、ベッドの加代の手もとまで伸びている。

ビニールのバッグを、加代も道子も「マス

ク」と呼んでいる。

このマスクが、たったひとつの、かれのキモノだった。マスクの口にはガッシリした金環がついており、番号をきざんだダイヤルが光っていた。奴隷といっても男だから、どんなときでも反抗しないように、こんな器具が必要だった。

このマスクは、外見はなんの変哲もないけれど、案外すばらしい性能をもっている。

ダイヤルのナンバーは、加代とそして道子しか知っていない。二人のうちのどちらかがナンバーを合わせ、鎖をゆるめてくれないことには、トイレへもゆけない。犬を去勢するより、もっと無慈悲な器具が、いつも下腹を辛うじておおっているのだった。

カギをかけ腰からのばしたメートルばかりの鎖を、柱にくくりつけるなり、用のときは、ご主人さまが手にまきつけて引っ立てれば、犬は、いやおうなしに、ご主人さまのゆくところなら、どこでもお供しなければならぬ。この奇抜な器具は、道子が考えだしたものだった。

わざわざ医療器具の工場へ注文してつくらせたこのマスクが、時には、かれをひどく苦しめるのだ。

逆に言えば、鎖を手におさめているかぎり

イヌには、どんなひどいことでも強いことができるのだ。足ゆびのツメを切るのも、ハサミをつかうのではない。

指を一本一本、口に含み、すこしずつ歯でかみきってゆくのである。

はじめは、どうしてもうまくできず、深ツメを切ったり、あやまって指をかんたり、失敗をやった。そのたびに、仕置き、といって加代は道子に命じて、信一のからだに、皮のムチをあてさせる。

マスクをぬがされ、からだのいちばんさどく痛みを感じる部分をめがけて振りおろされる皮のバンドは、失神するほどの痛みを感じさせた。

道子は、でも力をゆるめてくれるので、まだよかったが、気がむくと、加代自身で、バンドをふるう。コッを知らないのに、命がけだった、ヒスをおこした加代が、じぶんも着ているものを残らずとって、たけり狂ってバンドをふりあげるのを下から見あげるのはすばらしい、みものだった。

でも、いままでに二回は、あまりのバンドの痛さに気をうしなっている。

ピシッピシッと、下半身にバンドがあてら

れ、ぼうつと、意識が遠のくのは、恐怖であり快感でもあった。

タイルのつめたさに、意識がもどりかけ、まだおののいて目をつぶっている顔面から、胸いちめんに、湯とはちがった、温かいしびきがパツと散り、陶酔をさそう。

「気絶から、さめたらしいわ。道子も、めぐんでおやり」

どこか、うきうきした加代の声に、そっと目を開くと、いっか道子も、加代と同じように着ているものをおしげもなくはぎとり、良介の前に立ちはだかっている。

目の前に八の字に開いた両足が、まぶしくもういちど、顔面から胸いちめんに温かさを感じた。

……あの失神したときの雨を、もういちど思ふさま浴びたい。そんなことをぼんやり考えながら、懸命に、形のよい加代の指のツメをかみ切っていた。

「おまえ、役所のほうは、どうするの？」

足を良介の口にあずけたまま加代はいう。

かれは、役所はやめるつもりだった。

加代がおかした建築違反を、書類を偽造し上司の部長のハンを、そっとぬすみ押しして表面をつくろい、おかげで加代のアパートに

は正式の許可がおりて、違反事件のモミ消しには成功した。

だが、その不正は、やがてバレるだろう。

バレたらバレたときだ。

出世する気など、はじめからなかった。

二十五になる今日まで、灰色の生活に生きてきた。もうどうなっても、いいと思う。

地位がひくく、役所ではバカにされ通した。だまってつとめていれば、衣食住に事欠くことはなかったのに、その生活すら捨てようとしている。

しかし後悔はない。加代や道子の足の下に生きるくらしは、案外わるくなかった。

大学中退のかれの学歴では、役所での前途は見えていた。

えらくなることを考えるより、おもしろおかしくくらししたほうがよいと思っていた。違反建築の係りは誘惑が多かった。

たまたま手がけた管内のトルコ風呂の不正事件で、何回か現場へ出むいた信一が、あるとき、ふと見たシーンが、大きく運命を変え結果になったのだ。

一人の中年の客が、タイルに伸びて、皮のバンドで背中を打たせていた。それだけではない。しまいには、客の胸や、顔面まで素足

で踏みつける。むちゅうで見とれた背後のドアがあき、でっぴりした経営者が、うすらわらいの顔をのぞかせた。

「おもしろいでしょう。このごろは、あんな客がふえてねえ」

なんとか役人のかれにとり入ろうと、わざと仕組んだ芝居だとは思ってもみなかった。

「でも、あんな遊びも、たまにはいいとお客さんがいうので」

どうです。あなたも、ものはためし、あんなキレイなコに踏まれてみたいと思いませんか、とさそわれ、おそろおそろタイルに横たわったのが、病みつきになった。

いけない、いけないと、自分をおさえながら、でもズルズルと、そんな遊びにおぼれてしまったのだ。

でも、そんな遊びにはかなりの金がいる。薄給の信一は、なんとか金がほしかった。

金で遊ばなければ、そんな女性にめぐり会えるだけでもよいと思っていた。

窓口を訪れる客の中には案外、女性が多かった。違反の弱みは、ちゃんと握っている。

窓口ではわざと必要以上に意地のわるい態度をとり、相手を充分くやしがらせておいて何くわぬ顔で手紙を書いた。

奴隷志願という風変わりな手紙が、気味がるのか、反響はあまりないが、でも十通に一通は心をうごかす相手が電話をよこす。

女性のほうは、妙な手紙にふと心をうごかされ、ひやかし半分に呼んだのが、いじめられた役人だとわかると、反動的に憎悪の目で役人をにらむのだった。奴隷志願に心をゆるして手痛い目に合わせる。それが、彼のつ目であった。その多くは人妻であったが、好ましい女性なら、それでも平気だった。

しかし、女性たちは自宅を避け、外の料亭などを場所にえらぶ。三回、成功した。

ときには住み込みを希望したが、さすがにそれは聞き入れられてはいない。

後難をおそれ、違反のモミ消しに成功すると、そこで縁が切れてしまうのだった。

加代のように、信一を奴隷に使うことに異様な興味を示し、住込みを命じたのは珍しいことであった。炊事は道子が、やっている。

でも信一が住みこんだといっても、別に用意はされてない。

のぞみ通り、二人が食べたあとの捨てるものを、あてがわれるだけだ。二人の食事がすみ大型の西洋ザラに食べあましたものがかまわず集められ、それが良介の食事になった。

食いちぎったパンのかけらや、歯型のついたチーズ、ころもだけのカツレツ、つばきでジトジトにぬれた魚のフライ、お茶づけののこりなどが、ゴチャゴチャになって、サラにもられている。そのサラを、道子が良介に与えようとしたとき、

「ちよっと待って、あたしが味つけをしてやるから」

加代が、ふと思いついて、ペッと、そのサラに、つばを吐いてから、その「味つけ」は習慣になり、二人はかわるがわる、サラにむかって、くちのなかにためた、つばのかたまりをはいた。

ある日の夜食は、すごかった。

なにか、きげんをわるくした加代が、ふと残酷な目つきになり、

「せっかくのごちそうが冷えちゃった。かわいそうだから、スープで温めてあげる」

着物をたくしあげ、そのサラをまたいだ。

そうされながら、しかし、信一は、いやということは、ゆるされていない。

与えられるものは、なんでもくちに入れるやくそくだった。

道子も、加代のまねをして、気がむくと、サラをまたぐことがある。

「アラアラ、トマトケチャップかけちゃったいいかしら」

よいにもわるいにも、奴隷には拒否する自由はない。

さからえば、幾日間でも、せいぜい、すえためしに、たくあんだけ。それも、茶わんに一杯。それなら、トマトケチャップをたらされたサラでも、がまんして食うほうが、まだマシというものだろう。

やくそくの通り加代は、うちにいてトイレのときは、かならず、かれにお供を命じた。

そんな用事に、奴隷をつかうのは、べんりだったし、貴婦人になったみたいで、気が晴れる。

ときには、用のすんだあとの、なかをのぞいて、

「これ、たべられるんじゃないかしら。私のだから、きつとうまいと思うよ」

からかうように、かれを、上から見おろすのである。

においには、慣れていた。

いわれるまでもなく、サラにあげられるおあまりの量が少なく、ものたりないときなど、かわいい形をしたそれを、食べられないものか、などと、ふと思う。

中世のむかし、ほんとうの奴隷は、ご主人から、それを常食にするよう、命ぜられ、反抗は、いっさいゆるされないままに、命令に従い、ブタのように、それを、むさぼり食ったという。

信一は、加代に命ぜられたら、やはり昔の奴隷のように、それを食べたかもしれない。でも加代は、かれの心を見ぬくように、くちではそんなことをいいながら、しかし、実際には、あわててハンドルを押して、流してしまうのであった。

そのときは、まったく惜しいと思う。いつもおがむだけで、さすがにそれ以上のことは、ゆるされていない。

でも、そのものの前に、心から拝跪するときこそ、ほんとうの奴隷といえるだろう。

かれは、高価な宝石でも眺めるようなきもちで、底のほうをのぞくのだった。

しかし、トイレのお供などは、仕事のうちには、はいらないのかもしれない。

女性を神とあがめ、その足もとに心からひれ伏し、たとえ、足で蹴られ、踏まれ、ムチで打たれようと、反抗どころか、よろこんでそれを受け、命令とあれば、手や足を切りおとしたり、場合によっては生命をうばわれ

ようとも顔いろを変えない。そのような男性をつくりあげてトルコを開く計画であった。

信一は、いわば、その試験台であった。

(4)

加代のベッドの下、ほこりくさいせまい空間に、信一が飼われるようになってから、用もないのに、岸本由美がやってくる。回数 はたしかにふえている。

由美も、もとは加代とおなじトルコにいて二人の稼ぎは毎日追いつ追われつ、よいライバルだった。

由美も四、五年まえに独立して芸能社を経営している。

芸能社というと、きこえはよいが由美を知る人たちは「ニュー芸能」という名をよばず「オトコヤ」と呼んだ。

事務所に使っているアパートには、電話が三本。いつも、服装だけは、きちんとした、得体のしれない若い男が二、三人、ゴロゴロしており、電話が鳴ると、そのうちの一人があたふた出ていく。

由美の考えだした新商売は、加代ほどではなかったが、でも月々かなりの利益をあげ、加代と一才ちがいの二十六の若さで、あちこ

ちの銀行に変名で組んだ定期預金、もう二千万円を越している。ニュー芸能へ電話をすると、こちらが女でも男でも、好みの男性が即座に間に合うのである。

客の九〇パーセントは女性だったが、このごろでは男の客も、ふえている。

女性客には、しかし若い人は余りいない。ブクブク太った、中年の金まわりだけはよい、おんなが大部分を占めていた。

事務所にゴロゴロしている青年たちは、でもそれら女性を客にとり、けっこうチップを稼ぐ。

売上げは、由美が三、ホストが七の割合でわけることになっている。

中年の女性というのは、金まわりはよいけど、やたらに欲がふかく、注文した男性の、骨のズイまで、しゃぶりたかった。

たいていの若いおとこは、えらい意気込みで入ってくるが、二、三カ月もたつと、ガツクリ来て、すっかり若さを失ってしまう。疲れきった男たちを、もういちど若返らせるのは、由美の仕事だった。

オーバーホールとかいって、二日か三日、由美は近隣の温泉場へ引っばっていく。ここでの由美の作業は猛烈だった。

どんなしぼんだ男でも、由美の手にかかれ、ば、元の通りに回復した。

貧欲な女性たちに、骨までしゃぶられたのでは、たまらないが、手なれた医師のような由美は、たちどころに治してしまふ。

その手当ては由美の独特のものであった。からだのすべてをつかい、献身的な介抱の手をさしのべられるのが、なんともいえないと、命がけでやってくる男が多いので、由美は人集めには苦勞がなかった。

加代も、前にすすめられて、由美のすすめる「商品」とデートをしたことはある。

でも、売込みに反してスタミナのないヒロヒヨロの若いおとこには、ガッカリした。ムダづかいのきらいな加代が、大してほしくもない男を買ったのは、由美にたいする義理からだった。

実は、由美から、かなりの額の運転資金を用立てもらっている。

由美が、どんな下心で、金を貸しているのかは加代は知っていない。もしも、本心を知ったら警戒したであらう。

とにかく由美は、二つ返事で、いるだけ貸してくれる。

へたなところから金を借りると、なにかと

煩わしいことがつきまとうが、由美はその点あっさりしていた。

そのかわり、由美が、加代の室で気ままにふるまったり、不自由もしていないのだろうに、加代のマネをして、良介をからかったりするのには、見て見ないふりをするしかないのだった。

今夜も、加代の室に坐りこんで、しきりにブランドーを楽しんでいる。あまり強いほうでもないのに、やたらグラスをあけるので、もうかなりの酔いだった。

「トイレへゆきたいけど、面倒だな」

ポツリと言った。

彼女は、そんな用事のとくに加代が公然と信一をお供に使っていることに、好奇心をもっていた。なぜそんなことをするのか、いちど聞いてみたいと思っている。

「でも、あるけないんじゃないの」

加代が、由美の本心を見すかすようにいったのは、由美の視線が、ベッドの下の信一に伸びていたからだらう。

「いきたい、いきたい、いきたい」

由美は、こどものように、くり返した。

加代は気がなくなった。万一、酔ったまぎれに、ここでもされたら、買ったばかりのジュータンを台なしにされるだろう。三〇万円の代金は、まだ払ってないのだった。

「早く、なんとかしてえ」

加代は、信一のことを、生きた壺だと思っている。それも、思いきって大型の、なんでも捨てられる。広口の花ビンのような容器だと思っ

しか思っていない。

奴隷志願のときから、そういう、やくそくだった。

でも、なにかはばかられて、そのツボは、いままで一回も使っていない。それを、よりによって由美に使わせるのは、まったく、おもしろくないことだった。

由美は下腹を抱え腰を浮かせてうめいた。事態は迫っていた。

とっさに加代は信一を使うことにきめた。

今夜、もう三百万円ほど由美から借りるつもりだった。由美に先を越されて、まだその話をきりだしかねていたが、うまく信一が役に立って、由美を満足させることができれば、金のはなしも、うまく進むかもしれない。

ばあいによったら、五百万円と、アップさせてやっても、承知するだらう――。

しかし、あまり信一を由美に近づけたくなかった。由美の性格を考えれば、おそらく信

一におぼれてしまおうだろう。

ジュータンをよごされるよりはマシだとも思う。

ベッドの下から引っぱりだされた信一は、さきほどからの、由美の悲鳴に、わけは呑みこめていた。

だが、どんなばあいにも、ご主人さまの加代の許しがなければ、なにごともしやらないことになっていた。

いつものように床に手をつき、加代に甘えるように、首をかしげた。

「由美さんが、ご用よ」

「はやくウ」

由美は、顔いろを変えていた。

五秒…十秒…

静かな室のなかに、由美が吐くためいきだけがきこえ、すべてはおわったらしかった。

「ねぐらへ、おかえり」

つめたく加代が命じ、信一は、なにか名ごりおしそうに、でも素直にねぐらへ帰っていた。

「加代は、しあわせね」

由美は、酔いがさめたらしくポツリと言った。

「うん。由美も、誰かさがして仕込んだらいいのよ」

「でも、なかなか、いないわ。加代、あたしに売ってくれないかしら、あのイヌ」

「いいじゃない。この室へくれば、いつもつないであるのだから」

二人は信一をサカナに、とりとめない、やりとりをかわしている。

しかし、さりげない会話のなかに、火花が実は散っていたのである。

顔いろをみながら、五百万円の借金を申込んだ加代に、

「そうねえ、イヌを十日ばかり貸してくれたら」

心配していたとおり、そういう。それだけではなかった。

「いままで貸した分も含めて、証書にしてほしいわ」

メモ一枚書かないでもO・Kだった貸金にあらためて公正証書をいれてくれ、といいだしたので。

由美は、なにかを企みはじめたらしい。いままで冗談に「返せないときは、店をもらうわ」と言ったり「あたしが、ポツクリ死んだら死人にくちなしで、貸したお金はパアね」と言ったことがある。表面は仲よしにみえて

も、油断はできない。公正証書をいれたら期限切れを待って店の引渡しを迫るだろう。

日ゼニは入るけれど、右から左へ現金をそろえるのは、むづかしいことであった。

本人が、いやみみたいに口にした通り、交通事故ででも死んでくれたら、借金は踏み倒せるわけだ。手をかけないで、うまく殺しちまったらサバサバするだろう。

日ごろ抱いていた敵意識が、だんだんと殺意に変化していった。

(5)

由美の借金はともかくとして、加代の五つの店は、どれも順調にはやっていた。違反のおかげで信一を手に入れる結果になった、れいのアパートも売出し早々、全室満員の景気だった。

羽ぶりのよい加代をねらって、いろいろの男性が入れかわりたちかわり寄ってくる。

かれらは、独身をつづける加代を、よいカモだと思っているのである。

しかし、加代には、そんな下心をもつ男を相手にする気はまったくなかった。

夜ふけて帰宅し、道子をパートナーに、イヌを道具につかうだけで充分だった。

相かわらず信一は忠実に、どんな手ひどい命令にも喜んで従うし、道子は道子で、加代を喜ばせようと懸命だった。

二人の横たわるベッドの足のほうに、かならず信一の顔が据えられている。

このイヌは、まったく言いつけを、よくきき、背中が搔ゆいと言え、すばやく巧みに撫でてくれるし、足のうらが汚れていれば、素直に顔をさしのべて清める。

イヌでありながら、言葉がわかるだけに、べりりこのうえない。

加代は、年上のくせに、ねむるときは、道子のゆたかな白いムネに顔を埋めるのが好きだった。やさしく子守唄をうたってもらい、そっと、かすかにおう道子の素肌にくちをよせると、心がしずまるのだった。

赤ちゃんになったみたいで、そんなとき、やさしくおしめでもとりかえてもらえたらと思う。

道子に、そんなきもちを打明けたら、「わけありませんわ。信一がいるじゃない」まるで、自分の心のなかを見ぬかれたみたいな気持だったが、道子が気をきかせて、イヌに命令してくれたのだろうか。それくらいは、だまっただけで、そんな役目を果たして

くれている。

二人が、そばにいてくれさえすれば、加代は安心して、ぐっすりやすむことができたのだった。

信一は、いったん命令されると、ご主人さまが、

「ヨシ」

と、おゆるしをくれないうちは絶対にポーズをくずしてはいけないと、いわれている。

加代も道子も、つい、ねむりこけてしまい、

「ヨシ、ヤスメ」

と声をかけてやらないと、信一は、そのまま顔をあげられないのだ。

朝、目をこすりながら、半身をおこし、足のほうに、イヌを見て、

「アラアラ、かわいそうに、わすれてたわ」

道子と顔を見合わせ、思わず、わらうことがある。ついでに、そのまま使用して起きあがった朝は、とてもさわやかで、上きげんの加代だった。イヌは、おかげで、首すじがつってしまい、痛みを感じるのだけど、しかしそのしごとは、そうつらいとは思わない。

満ちたりた生活がつづいていた。

しかし、ときどき、ふっと由美の顔が浮かぶと、心が暗くなる。由美は、あきらかに加

代の事業をねらっている。六軒ぜんぶではないまでも、貸した金のカタに、何軒かはとりあげられるかもしれない。

どうにも、目ざわりな由美であった。

いつのまにか加代は、心のなかでは、由美を殺していた。あとは手をくだすだけであった。

(6)

加代の計画は、着々進んでいた。

掛金は、じぶんが負担して、一千万円の生命保険を信一につけた。もちろん万一のばあいの受取人は、じぶんにしたから、掛金を払うのに惜しくはない。

いつも帰りが十二時すぎるのに、ここ二週間ばかりはおそくても八時には帰っている。

帰れば、かならず信一を呼びつけた。

自動車のシートと同じ高さのイスに坐り、前むきにひざまずかせ、両足をひらいて坐りこむ。

加代の腰のところにちょうど顔があった。

きまって二時間は、そんなことをくり返すのだが、それが終るまでは、水一杯、与えず休むことすら、ゆるさない。

顔をねじまげることができず、息がつまり

そうだった。

「しっかり、おやり」

ときどき、顔がほとんどかくれている、かれに声をかける。

「バカ、いたいじゃない」

叱声とともに、ようしゃなく横腹を蹴ったりする。

見当がくるって、からだの中心を、いやというほど踏みにじられ、死ぬ苦しみをしたことも、二度や三度では、きかなかった。

「こんやは、実地訓練、ドライブよ」

めずらしく服をつけることを許され、一階の出口におりたら、そこには、大型のハイヤーが待っていた。

制服制帽のドライバーは、五十才をすぎた温和な、としよりであった。加代が、わざわざ本社へ

「とくべつに、口のかたい運転手を」

と注文しただけあって、まるで人形のように、だまりこくった男だった。

加代はシートに、かれは、その足もとに、ラバーのマットにじかにすわると、ハイヤーは、すべるようにうごきだした。

加代の目が、首をさしのべると、命令している。

くらい客席に、ぼうっと加代の二本の足がうかんでいる。

車は高速道路を横浜に向けて走っていた。前にかがみ、何かを命じた加代が、こんどは、まるで失神したみたいに、三回も背後にのけぞったのは、車のブレーキの反動のためでは、なさそうだった。

走行中に、運転手は加代から

「衝突しても、どこが、いちばん安全か」

と訊かれている。

「絶対というほどではないけど、座席からすべりおりて、床にうずくまるのがよい」

と答えた運転手は、男のほうが、そのように座席にうずくまっているのをチラリとみて、つきり衝突のときの練習をやっているのだと思った。

「こぼしたら、だめよ」

女が、うずくまった男に、そう言う。でも二人の会話は、運転手のじぶんには関係ないのだ。無口の、この運転手は無表情に聞き流している。

彼が、ハンドルの手をとめて、女のスカートの下をひと目のぞいたら、びっくり仰天するにちがいない。

(7)

うしろの座席に、ぶんどったイヌを積んで由美のハンドルをにぎる車はスーッとすべりだした。

加代の室まで乗りこんだ、由美の交渉は、一方的に彼女の勝利だった。

公正証書を出ししるる加代を、二千万円にのぼる脱税を、国税局にバラす、と、証拠をにぎった強みでおどかしたら、とうとう、さすがの加代もカブトをぬぎ、十日間、信一を貸すことも承知した。

コールボーイを商売にしている由美が、男に不自由するわけはなかったが、出入りする男性は何十人いても、トイレのお供までさせられるようなのは、いないし、まして、人にはいえないような羞ずかしいことまで平然と命ぜられるような男もいない。

由美は、信一みたいな、人格を無視し、商品として無慈悲に扱える男をつかって、そんなことを好む客をとり、ボロもうけしようと考えていた。

そんな訓練は、思いついたからスグできるというものではなく、そうなると、折々加代の室でみる信一が、命令ひとつで、どんなこ

とでもやってのけるのが、うらやましくて仕方なかった。

そのほしくてたまらなかったイヌは、いまうしろの座席に小さくなっている――。

「道っぺが先まわりして、うばい返しに来るといけないわ。道草くって帰ろうか」

格別に用もないのに、高速道路へあがり、急にアクセルを踏んだ。

とっぜんスピードが出たので、信一は反動をくらって、うしろへ倒れかかり、したたかに頭を打って、ぼーっとなった。

深夜の高速道路には、車の影は、ほとんどなく、たまに定期便の遠距離トラックと、すれちがう程度だった。

「このクルマすごいよ。百六十くらい出すの平気なんだ」

由美は、うしろの座席の信一に話しかけると、調子にのって、スピードをあげていたがやがて、ふと思いだしたように、スピードを落とし、

「こっちへおいで」

運転台の助手席へ乗り移るように命じた。

「おまえ、座席にすわろうなんて、生意気だわ。ここへおはいり」

ハンドルを握ったままで、思いきり両足を

開き、そのあいだへ坐れというのだ。

うすぐらい座席の床に土下座すると、由美の二本の足が、ぼんやり浮かんでいる。

「ウチへ帰るまで、もちそうもないな」

由美は、ナゾみたいなことをいい、首をまげて、のぞき込んだ。

信一は、ナゾがわかったのだろう。オズオズと、動きだした。

「フフ。気がきくわ。お加代ねえさんの仕込みは大したものだ」

頬に、ひとりでに、わらいがこみあがる。

うらやましかったイヌを、これから十日間も、思いのままに使えるのだ。

どうやって、苦しめてやろうか。

イヌが、すっかりその味のトリコになって加代のもとへ帰るのを忘れるまで、仕込んでやろうと思う。

新車はすごいスピードを出し続けている。

走る車のなかに、足もとに生きた人間を置いて、座席にすわるなんていうドライバーはまずないだろう。

それだけではない。

かれは、新しいご主人さまの歓心を買おうとしてか、じっとしていない。

天にもものぼる気持とは、これを言うのだから。

うか。由美は、なんだか失神しそうになりながら、ともすればスピードにとられそうなハンドルを、必死ににぎった。

ゆれる運転席の、踏み開いた足の間にひざまずいて、かれは、いつぞやハイヤーの内部で加代に命令されたあのと時のことを、思いだしていた。

保険をつけられたり毎ばん二時間たっぷり同じようにひざまずかされて、思いきり顔をしめつけられたナゾがだんだんとけてくる。

車は走る密室であった。

このスピードでは、内部で何が行なわれようと、わかる人はないだろう。

オーバーしたスピードを落とそうとはしない。

由美の食いしばった歯から、意味にならない声が洩れるのは、車のためか。それとも……

道路は、左にカーブしている。

だが由美の意識は、だんだん遠のきはじめていくようだ。快感が戦慄と交互におそう。

すれちがうタクシーから、運転手が手を振ったが、由美は絶対にスピードを落とそうともしなかった。

なんともいえない、するどい爆発の音をあ

げて、車がガードレールにぶつかったのは、その直後のことである。

ガードレールをへし曲げ、三メートル下の河原にころがった車は、石ころと雑草の茂る地面に、ぶざまに屋根を下にして止まった。うしろの車輪は、反動でまわっているが、もう自動車といえるものではなかった。

曲りくねったハンドルに、強く胸をおしつけられ、由美はボロきれのように座席にころがり、信一は車外にほうりだされていた。加代のところを出るとき頭からかぶらされた純白のシートも、れのマスクも吹っ飛び、腰にまかれた鎖は、ひきちぎれていた。救急車がおくれて、二人は三〇分以上も放っておかれたが、虫の息ながら、奇蹟的に、命だけはとりとめていた。

(8)

「ひどいことになって」

退院してきた信一と由美を、加代と道子はそれでも、やさしく迎えた。

信一は、両うでを肩からもぎ取られ、両足も、ひざから下は失われている。

由美のほうは、顔面を強く打ったため、両眼をえぐられている。

退院をゆるされ、加代の室へ帰ってきたのは奇蹟というべきだろう。

「すんだことは仕方がないわ。信一は、イヌだから、手や足はいらないし、由美さんもうとこがなければ、ここにいたらいいわ」

加代のあたまのなかには、ある計画が固まりかけている。

デラックスな風呂場をつかって、この二人のサービスを売物にしたら、はやるかもしれない。

視力のうしなわれた由美の前でなら、客はどんな恥しらすなことを命令しても平気の筈であった。

「今夜から、もとの通り、おまえは、ここでやすみ」

じぶんのベッドの下を、ゆびさした。

久しぶりに、ベッドの下に追いこむのは気がよかったし、完全にならだの自由をうばわれたイヌを、前にもましてコキつかえることをおもうと、しぜんにならだがはててくる。

「由美も、そうねえ、そのとなりに寝てもらおうか」

百万円を越す二人の治療費は立てかえたがうまいこと言って、由美からの借金を踏み倒すだけでなく、定期預金も巻きあげようと舌なめずりしている。

その定期預金の通帳も印鑑も、由美の社の連中が寄ってたかって盗んでとうに使ってしまったことは、まだ知らない加代であった。

——完——

(カット・春川ナミオ)

天星社刊 限定版グラビア写真集 在庫案内

山原清子『刺青の魅力を探ぐる』 一部一〇〇〇円 (送共) 略号「美7」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集『女王様に飼育される日々』 一部一〇五〇円 (送共) 略号「M特」

◎M男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。



編集長様お許へ

藤野 友子

私は本年三十二才になる一女性でございます。現在の宝塚市にまゐりまして、もう八年近くにもなおります。宝塚市と申しましてもゴルフ場が近くにありまして最近はお家も大分建ち並んで、それでもございせんが、ここへ移ってまいりました頃は夜の一人歩きも出来ないくらい淋しいところでした。

お恥かしゅうございますが、私は二十四才から六年間、お妾でございまして。私が好んでなったのははございません。田舎育ちの私は妾とか二号とかいう言葉さえ知らず、そういうことを知って気づいたときは、そういう関係になつていました。こんなわけで、まだ一度も結婚はしておりません。

相手の方は交際に奥さんを亡くされ、その後、再婚されていきます。相手の方に再婚話が起ると同時に別れ、一人になって二年が

過ぎました。今住んでいますこの家は別れる時に頂いたものです。広い庭もついている二階建て一人住まいには広すぎるのですが八年前に比べると十倍ぐらいの値うちがあるとかで売ったりするのにも惜しくて住みながら値上りを待っているといった気持ちでございます。

故郷は岡山県の津山市に近い田舎で幼い頃は、お行儀は両親がともきびしかったものでございまして、自然嫉妬は身に具っていました。四人姉妹の末っ娘で気ままに大阪へ飛び出したのは高校を卒業して家事の手伝いにも飽いた頃でたしか二十才の頃でございました。多感な夢に胸をふくらませて上阪した都会ではございましたが女一人の事務員生活と寮の生活は何の感激もございませんでした。会社勤めをして一年半ばかりした頃でしょうか、私の前に現われ

たのは彼でした。身長一米四八、体重四二KGの色白で小柄な私を可愛いとお茶や映画に誘って下さったのでした。そのうち会社の寮では殺風景だろうと、今の家を買って下さったのでございます。

それが何を意味するのか田舎育ちの私には、はっきりわからず、時折り彼が遊びにきて、いつとはなしに二号の生活をするようになってしまったのでございます。でも二号とかお妾とか、そんな意味のわかったのは大分してからで、私は相変らず通勤電車に揺られて大阪にある会社へ通っておりまして、彼は土曜日の午後か日曜日にゴルフの帰りだといって時折り立寄るくらいのものでした。

私の性格はおとなしい面と激しい面と両方を持ち合せているように思います。清潔好きで賑やかな騒々しい場所よりも落ち着いた静かな場所を好みます。趣味は何でも好きでございしますが、とりあげていうなら、生け花、園芸、人形集めぐらいでしょうか。

別れた彼は中小企業の経営者で私をはじめて知り合ったときは四十二才でございました。彼は御誌の愛読者で女性を縛るのが好きだと申しておりました。すべての点

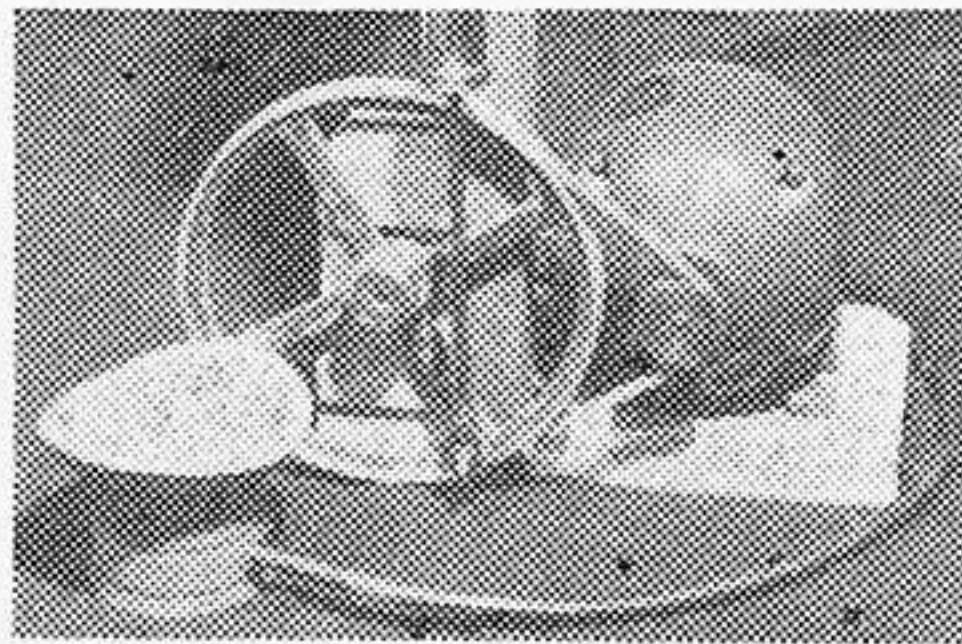
でトランジスタの私は彼にとって恰好の飼育の対象だったのでしよう。でも、そんな知識は何もない私は、男女の愛の表現の仕方ってそんなものかと思っていたのでございせん。彼が私に御誌を見せてくれたのは二年以上も経ってからで、その頃は二人にとって最も幸福で、そしてプレイも一番激しかったのでございます。会社勤めをやめたのも、その頃でした。

時たま、その頃の楽しかった思い出にふけり、彼の残していったプレイ写真を眺めたりしますと、一人暮しの淋しさがひしひしと身に迫ってまいります。一人暮しの二年間で、はじめの年に六人、今年になって三人の方とお見合いをしました。お逢いした全部の方が交際したいと言って下さいました。が、私がおつきあいたいと思うお方はございませんでした。

私の身も心も燃え上らせて下さる方って、いらっしやらないでしようか。私宅には電話がございまして。お返事は電話でして下れば幸いです。二匹の犬がいるだけの一人暮らしでございますので若し電話に出ないようでしたらお買物か入浴中でございます故、お掛け直し下さいませ。

『豊胸用吸引器』—— 沢潟しの

＝ 私が試作した



てみたのが写真のものです。

シリンジは四百ccくらいのもので、半分くらい使って、最大ストロークの時の吸入量を二百ccくらいに作り、内部に逆止弁をつけ、ホースの先の吸着カップには、適量の外気を流入させる加減弁がつけてあります。

又、シリンジが長い点を利用して、ピストン上部の空隙を加減することにより、吸入量を一定に保ちながら、吸引力を変化できるようにしました。

使用法は、クランクピンとシリンドラーの位置を調整して吸入量と吸引力を適当に定め、加減弁によって戻衝程中の乳房の保持力を加減して、吸引カップ中に乳房を吸引しながら、更に適当な脈動を加えるわけです。

何分にも女の急所に用いるものですから、それほど大きな力はいらないだろうと思っておりましたが、依頼者に実験していただくに不足でした。私が考えていたよりもはるかに強大な吸引力が必要らしく、何回か調整の後、試作器の最大能力のところで、どうやら合

格ということになりました。

何分、きわめてプライベートな用途のもので、依頼者の奥様にはお目にかかったこともないのに、実験には立合いませんでした。が、私も製作者として実際の作用を知っておきたいと思い、自分の乳房で実験してみました。

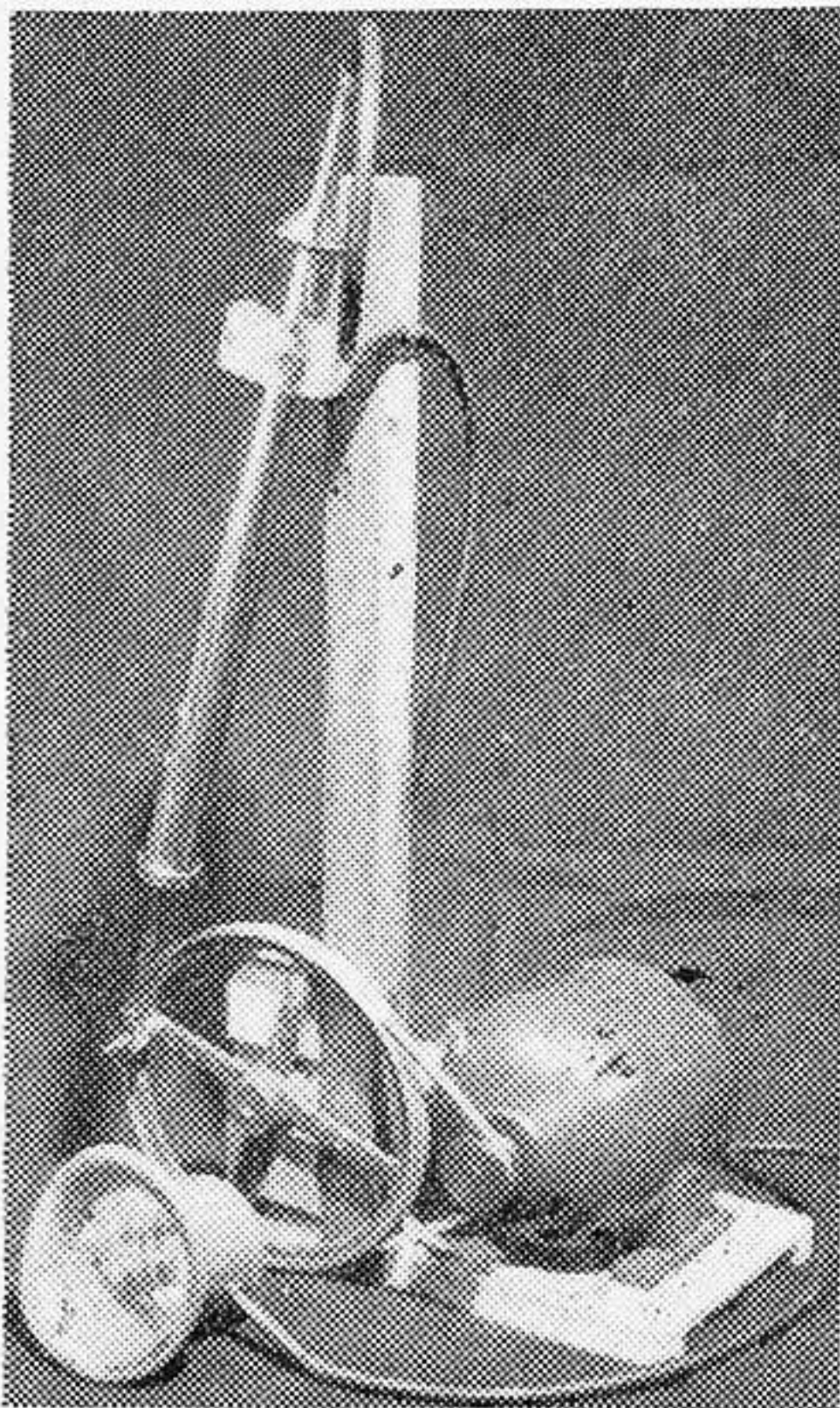
カップを乳房に当ててスイッチを入れると、驚くほどの吸引力でカップは胸に喰いこみ、 $\frac{1}{4}$ 馬力の電動機は全負荷でウナっておりま

す。それでも、どうにか二十分ほど辛抱してからスイッチを切りましたが、カップを外してみると、苦しいのも道理、乳房全面が皮下出血を起こして真赤になり、カッ

プの縁に当たったところはスリムケで、ところどころ血が滲んでいた。二カ月ほどで一応きれいに治りましたけれど、内湯だからよかったものの、銭湯などへはともに行けませんし、病気でもしたら困るところでした。

どうも私が使ってみた感じでは通常の美容豊胸用ならば、一般に市販されているものがよさそうに思われます。

しかし、依頼者は大変お気に召したらしく、パブリカのカンニング器を使った、両乳房用の実用器を、鉄工所に注文なさることです。が、私も少し呆れております。





(第六十四回)

辻村 隆

箕田氏が、一度台湾か香港あた

りへ、ハント旅行しようといひ出して、私もその気になって、トラベルサービスへ連絡したのが縁でそれから隔月毎に案内が来て恐縮している。結局は、お互いの体の調停がつかず、ハント旅行の計画はオジャンになったが、狭い日本を離れて、台湾辺りで中国娘との一夜のハントもまた愉しからずやと、心の片隅ではいつもそれを求めているのだが、仲々実行が伴わない。ハントして、ネガのま持ち帰れば、税関はOKでも、それが万一、国辱問題とでも騒がれたなら、その結末はどうなるかと思うと、やはり日本国内で同胞の女性を相手にしている方が無難なようである。いっそ連日のうだるような猛暑を避けて、北海道の原野で、青空の下のびのびとプレイした方が台湾へ行くよりも安全

且健康的であるかも知れない。

前月号の楽我記で、甲子園のS的未亡人のことを一寸紹介したら早速、数名の方の聞き合せがあった。中にはS的性格の人もいて、一カ月四回、十萬円の魅力もあってか紹介して欲しいと仰有るが、お門違いもいいところで、ほどほどに捌かないと、いくら大金持の未亡人でも、そうそうは出しておられない。箕田氏の方へも大分殺到したらしい模様で、結局、一番最初から熱心な求道者の、箕田氏の知友のKという人が出掛けたそうである。手錠、足鎖などをはめられたままベッドの奴隷にされて、相当重労働だったらしい。殆ど二十四時間ぶっ続けで、彼女に口の奉仕を強要され、半睡半醒になって半病人のようになったというが好きな者の道は又、別。次の水曜日

には又、出掛ける気でいるらしいとのことであった。プレイ内容については精しく知らないが、すべて口で御用を足されたいというから推して知るべしである。飽くことなき未亡人の貪婪ないけにえといった感じであった。一カ月に四回つづけないと報酬はないそうで、その第一回目には、交通費はおろか、鏝一文貰えず、一切彼の自弁だったそうである。世の中やはりそうは甘くないものらしい。

岡本要子という読者通信の女性をハントしたのはいいが、締切りまでに僅か二、三日の余裕しかない。ハントして帰るや、すぐさまDPEにかかり、露出やどぎついフォトは、ゆっくりと改めて焼くとして、取り敢えずハント用のフォトをつくり、すぐさま徹夜で書き上げたが、体力なく、舌足らずのものになってしまった。せめて一週間以上あれば、もっとじっくりと構想を纏めて書けるのであるが、日がないだけに駆足のハントになった。可愛い現代的なお手伝いさんで、もう一度、今度はゆっくりと会ってみたい気がする。始めてあっていきなりバイブを使つて失神させたのだが、或いはそれ

に懲りて、もう現われないかも知れないと思うと、もっとゆっくりと女心を操ぐり乍ら飼育すればよかったと後悔している。

長井葉津子を撮ってみたいかと箕田氏からいわれ、そういえば彼女、分譲フォトにもかなり顔を出しているのに、未だ撮る機会に恵まれていなかったと、改めてさとした次第。たしか昨年の五月号かで、山本一章氏が「この女と」でカメラ・ルポを書いていた。その当時は意欲もあったが、先を越された感じで、二番煎じも、どうかと思ひ、あきらめたのを覚えているが、早いもので、あれからもう一年以上、経過している。一時、艶名を馳せた彼も、その後、谷山久美子さんをルポしたのを最後にバツタリと姿を消してしまい、私の方にもとんと音沙汰がない。S Mのプレイに対して情熱を失ってしまったのであろうか。谷山さんも山本氏と同行して撮り、その後二度ばかり撮り乍ら遂々ハントに書く機会を逸してしまった。これとても一章氏の「この女と」で既に発表されたため、二の足を踏む気になったことを今更ながら白状しておこう。

長井葉津子さんは、未だ十七才のお嬢さんである。私は私の観点から、彼女をハントし、一度ゆっくりとプレイしてみたい気になっているが、何にしても暑い今日此頃、この暑さも峠を越した頃、彼女をハントするつもりである。金原奈加子も再び要請してきているし、先日、撮った理髪師の小池のミキちゃんからも電話あって、これでは財政的にももてそうもないと嬉しい悲鳴しきりの昨今――。



ファンタジック・ギャラリー
『コンドルのいけにえ』

五 屋 和 十

七月三十一日号の週刊大衆に「
× × ×
ついに登場した物凄い撮影会——
サド・マゾごっこもOKのヌード
・スタジオ」という見出しで、ヌードスタオでS女対M男のショーをとらしているとあった。場所は東京の秋葉原、ピンクデパートのダゲール、である。私はこの記事をよんで苦笑を禁じ得なかった。実をいうと、今年の正月上京の節、賀山社長と二人、この店を遥々訪問し、社長の大坪利夫氏にもじかにお目にかかったからであった。坊主頭の精力的なこの人に、正直いってSM気は全然、感じられなかった。一階がセックス玩具二階はサイケ喫茶、三階がヌードスタジオになっており、専らオイロケオンリーの感じであった。賀山社長と大坪氏は懇意で、私も関西の辻村として紹介されたが一向に、御存知ない様子であった。その人が今、SMヌードスタジオをやっているときいて、その商魂のたくましさには唖然とするだけで、御本人自体もその趣味はない、と判っきり割切っておられるが、趣味のない人が始めたSMショウ、果たして同好者にとってどこ迄満足のゆくものやら、これは見ての

お愉しみというところである。因みにここで、賀山社長の口利きで大型パイプ、こけし、ずいきなど多数買込み三割引にして戴いたお礼、改めて申上げる。
× × ×

先月号のこの欄で、ノーベル書房のことに触れたら、早速一兩日ならずして編集長から電話があった。編集の諸種の渋滞で、六月発刊のびのびになっているが、必ずその節には何分の御返事することであつた。私も事実を在りのまま書いたのであつて、別段ノーベル書房に対して他意はないが一応礼を尽して来られたなら、進呈する気で作った晴雨氏の貴重なフォトも、その後ウンともスンともいって来られないまま、私の机架で眠っている状態である。敬愛措く能わざる晴雨氏のことだから全面協力する気でいたのに、そのまま放っておかれては、幾ら私でも送る気になれないのは当然というもの。変屈かも知れないが、好事者とは所詮こんなもので、斉藤夜居氏がいつか書かれていた立腹の記も、今にしてしみじみわかるような気がするのである。一日も早く斯界最高の本を発刊されることを切望している。



同好者大いに語る

女優よ、縛られろ

金岡直行

A II (28) 金岡直行、刈谷の製パン工場に勤務。縛り経験なし。
B II (32) 河村三津利、岡崎の会社員。縛り経験は、トルコ嬢を一度だけ。

C II (?) 桑村保彦、岡崎の会社員。経験はなし。(全員仮名) 三人とも同好者である。ある日の一刻、おおいに語った。

A 我々は、みんな実際の経験が少ない。まあ観て楽しむ方だが今までに印象に残った名場面を……

C 数え切れないくらいの女優が縛られたのを観たが、最近で最も印象に残っているのが松原智恵

子。スリッパ姿で後手に縛られて白ペンキを吹きつけられていた。

A ああ予告編で見た。松原智恵子はそのほかに縛られているのを見たネ。ドギついのはピンク映画の谷ナオミ辺りにまかせて、

かれんな所で酒井和歌子。空想天国で谷啓の夢想の中で縛られる。浜三枝、加賀まり子、団令子も美しく縛られた。もうずいぶんとなるが、浅丘ルリ子の縛られたのは興奮したネ。

B そうか、それを見なかったのは残念だ。しかし、最近縛りが少なくなっただけに思うが……。昔の東映の時代劇などは、一作品に一場面はあったものだが……。

C テレビでは最近、清水まゆみ、梓英子。その他名前は知らないがよく縛り場面が出てくる。

A シャボン玉ホリデーでザ・ピーナツが縛られていた。勿論、笑わせる番組だが、珍しかった。

B 安田道代も坊主あたまで縛られたね。

A “盲獣”で緑魔子。たいしたことはなかったけれどね。

C “大奥マル秘物語”での佐久間良子。さるぐつわが痛々しかった。スチール写真は大事にしまっている。

A そうそう、忘れられない作品は“三匹の侍”。当時人気絶頂の桑野みゆきが何と半分くらいの写真時間に縛られて出ていた。その写真が手許にないのが残念だ。何しろ当時高校生だったもんで。

B ボクも見えた。確かにあの縛られ姿は美しかった。同じ映画で百姓の娘に扮した、もう一人の美しい女優も縛られていたね。香山美子だと思ったが。

C 内藤洋子がくさりで縛られるのが近く公開されるらしい。

A 何れにしろ、女性の縛られ姿は美しいネ。では今後、どんな女優を縛りたいか。

B 吉永小百合の縛られ姿を見

たことがない。

C 西野バレエ団の5人娘が縛られたら素晴らしいと思うよ、足がきれいだし。

A よし、それでいい。まず最年少の江美早苗。まあ、セーラー服でイス縛りというところだろうな。勿論さるぐつわ。

B 原田糸子。背が高いから立姿柱縛り。パンティーとブラジャーのみ。足にもナワが絡みついて。さるぐつわは日本風。静かに目をとじ無念の涙がおちる。

C 奈美悦子。これは宙づりといくか。手首でつられて、ブラジャーは片方はずれ、パンティーはぎりぎりの線まで下げて……。太ももにも無惨なナワが……。それをムチうちしているのが金井克子。ブラジャーとパンティーだけで、苦しげに胸をそらせる悦子。

A 残るは由美かおるだが。

C ミニスカートのいいだろうよ。さるぐつわをされて、後ろからだきすくめられ、今にも縛り終ろうとしているところ。スカートの裏で、真っ白いパンティーがあらわに……。

A ではまあ、勝手なネツはこの辺で。

『続・あるグロなたわごと』

須 渾

朔

8月号「奇クサロン」に、拙文「あるグロなたわごと」をのせて頂くという光栄を得ましたが、あげた作品はほんの一部でありまして、こういう、何ともグロテスクな話となると、よほど巧妙な「お

こうしたカンニバリズム的な話は、大昔から、「あだちが原の鬼婆」はじめ、怪奇物語に、また伝説に、最も単純な恐怖を起こさせるべきテーマとして、夥しく存在するものと考えられるものです。

自然的神秘なんかを骨子としがちなので、こうした美食(?)テーマとか、死体いんとく処理はよくあると思われる、最近創元推理文庫中で「怪奇小説傑作集」というものが出版された。

早速読んでみたが、例えば、アルジャーノン・ブラックウッド作「秘書奇譚」では、やはり美食小説的なことが書かれている。何でも生で食う趣味だというへんな人物が出て来て、犬なんか生喰いしたり、勿論、人間もそうするらしい趣味(?)が……なんてことを暗示する書き方なので、一寸うれしく(?)なった。

同じ文庫中の、S・ローマー作「チェリアピン」というのが又傑作で、植物でも動物でも、何でも小指の爪大の宝石様物体に圧縮することが出来るという科学者が出て来て、天才バイオリニストの死体が、やはり圧縮されてしまうというへんな話。

死体いんとくの画期的トリックということになるが、もともと探偵小説ではないので、乱歩さんの分類表にはとても入れられはしない。これは当然だけれど、何ともうす気味悪く、近頃感心の他ないので、つけ加えておく次第です。

Mプレイ

昆虫標本台

犬 畜 生

深夜、ドレイ礼装? に身を固める私。犬の首輪やクサリ輝の冷たさと、手錠、足枷の非情さにさ

いなまれながら私はその夜一個の「人間昆虫標本」になりました。

胸や腹や腿に、気味悪い姿形をうごめかせるように蛇、ゴキブリ、くも、蛙、芋虫、トカゲ等々が、虫針ならぬ注射針の一本一本で膚に縫いつけられたのです。

針を刺し貫く痛苦は激しいのですが、一瞬の後には快感と感じとれる私なのです。年毎に、月毎に、いや日毎に、より強く、より深いM的エクスタシーを追求している私は、この痛覚ももっと激しいものを、という恐ろしい欲望に馳られてなりません。そのものは、或いはナイフ、或いはメスかも知れない。しかしそ

れを求めた時は、私の現世との訣別の時でしょう。首吊り刑の私の膚で、ゆらゆら蠢きながら虫類が嘲笑しています。



隠花の夢想

英 堅 守

最近、発刊になった雑誌で「えろちか」というものがある。

まだ第一号以外手に入っていないので、これから先どうなるのかわからないが、編集後記にあたるらしい「発刊にあたって」というところを読むと、興味本位ではない性の雑誌というところらしい。

「奇ク」ファンが期待するような記事はあまりないが、それでも第一号にはレズビアン特集があり、次号にもフェティシズムの記事が出るらしいから、ある程度の匂いはするかも知れない。

とにかくこうして世に出た限りは、どうか長く息を置いてほしいものだ。「奇ク」も数多くの苦難の道を歩みながら（本当に編集部全員がM男と化してがんばった時もあったことだろう）今こうして全国の固定したファンによってささえられている（失礼！）現実をみるに当り、先の「血と薔薇」の例もあることだ——。どうか見込み出版などという愚は冒さずがんばってもらいたいと思う。

もっとも私は「奇ク」を捨ててまで「えろちか」に走る気はないが、ともかく性の解放に向って日本国民すべてが立上がりたいたいもの（少々オーバー？）だ。

実際そうではないか。街を歩こう、そしてハントの場合を考えてみよう。どうだあの面倒な手続きの数々。まずお茶へ、そして若者ならゴーゴー、年配ならお食事。そして再び同伴喫茶。大抵の女の子ならそのあたりで「私もう帰らなくちゃ」とくる。

私は夢想する。道を通る女の子に、はっきりこう言える日を。「お医者さんごっこしませんか」そして彼女のこう答える日を。

「いいですねえ。患者は私よ」また私は夢想する。世の中の人間全部が、SかMのバッジをつけて道を歩く姿を。流腸の自動販売器を。皆が輝姿で暮せる日を。

よそう。俺たちはしよせん陰の花なのだ。そんな日が来ようはずがない。たとえみんながそんなことをするようになって、みんな「私だけは違う」といった顔で道を歩くんだ。

でも俺は頑張るぞ。書くぞ、書き続けてやるぞ。たとえ人にどう言われようとも。

『奇ク』に望む

和田 平助

早いものだ。「光陰矢の如し」というが、「奇ク」誌を始めて手にしたのが昭和二十九年の四月号だから、既に十五年の歳月が流れる。当時は、現在の編集代表者の杉原虹児氏、カメラハントでおなじみの辻村隆氏の両氏の構成による口絵写真。松井籟子、飛田良二氏等の小説。滝麗子氏のさし絵等現在のようにSMなるものが巷間に氾濫していない時代のこと故、20才になったばかりの小生は血滾らせ胸躍らせ貪り読んだものだ。

憧れにも似た願望が、よもや現実には自分の手で緊縛プレイを行なえるとは夢にも想像しなかった。幸いにも理解ある（といっても次第にマゾ化したものだが）妻とプレイが出来るのは「奇ク」誌のお蔭であり心の師といっても過言ではない。（以前、奇クサロンに小生の愚文が掲載された中に、11PM出演の辻村隆氏を妻がピタリと当てた云々と書いたのでご記憶の方もあるかと思う）

15年間に、「奇ク」誌を真似た雑誌が発刊されては消滅していったが、その根本原因は粗雑な編集方法ではなかっただろうか。現在も類似雑誌が出版されているが、宣伝広告のやたらと多い、愛好者を利用するが如き興味本位の偽物誌など「クタバレ」と叫びたい。

本題より脱線してしまっただが、小生の云いたいことは只一つ。15年経過した現在も愛好者との繋りがない現状故、「奇ク」誌を中心に横の繋りを強化する意味上から会員クラブを結成して戴きたいということだ。勿論、種々の弊害も生じるであろうが、是非ともお願いしたいものだ。

それから私的なお願いを一つ。夫婦プレイを撮影したくても、DPEが出来ずに困っています。「奇ク」誌を通じ紹介して下さいれば幸いです。尚、夫婦プレイの方にお便り下さい。又お詫びを一つ。今年の正月、辻村氏上京に際し、モデルの件で速達を戴きましたが相憎とK・F嬢が岐阜に帰郷のため残念なことをしました。この件は、カメラハントで辻村氏が書いておられる通りです。末筆ながらおわび致します。

○

代償行為ではない創作を

梶井 利一

乱歩が再評価されている。

文学の指向性の一つとして、人間の心理が追求されるのならば、不安、恐怖の世界の構築も立派に文学の一ジャンルとなりうる。しかし、この点において広い読者層の獲得はむずかしいと思うが、マラルメが分かる人間には「仲間内」のみに通ずる普遍性のない芸術」とトルストイがいかに彼の芸術論中において批判しようと、マラルメは尊崇されるように、乱歩を評価しうる人間の中では正しくこの方向において「純文学」として、認識されうるはずである。

また、サディズム文学に目を転じて、今、私は、SMの心理世界の構築を望まなければならないとのべたい。

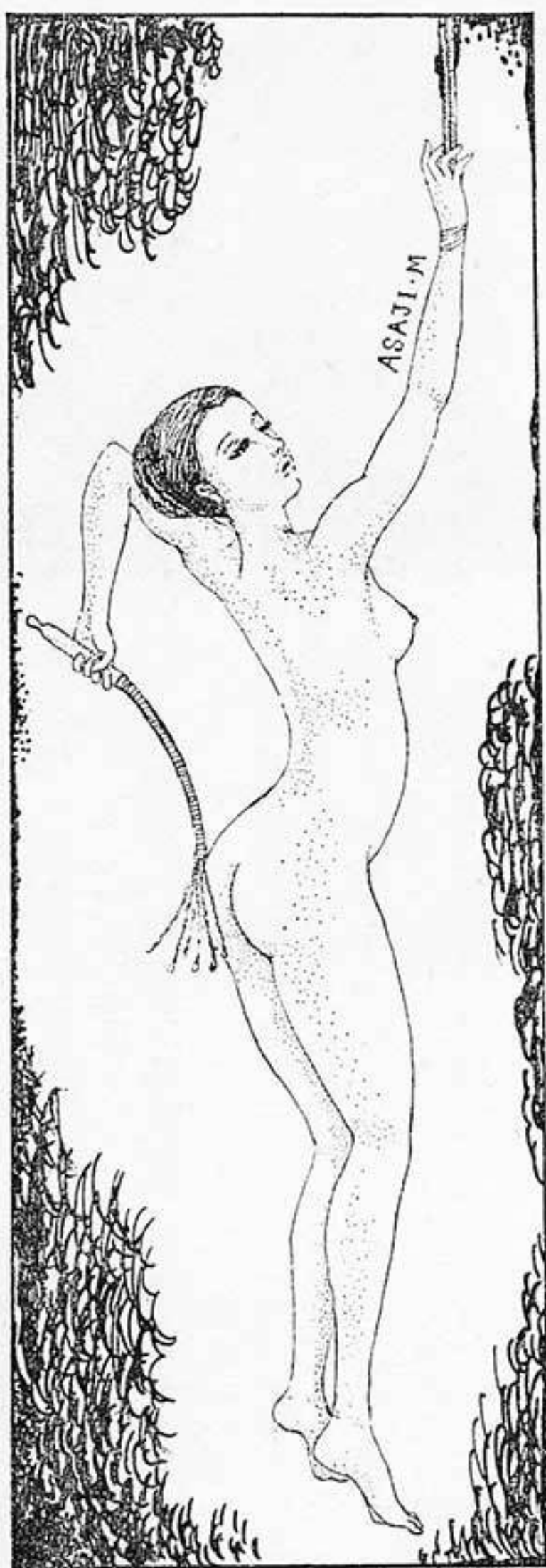
乱歩の謎解小説としての面白さを追うばかりのように、SM小説を、自己の欲望が果たされたいための代償行為としてのみ読んではいけないのではないだろうか。

また創作者は、己のSMの行為の蒸留作用としてのみ、作品を書いてはいけないのではないだろうか。SMのあくなき心理追求がな

されなければならない。その世界は我々にとって「純文学」と定義されうるにちがいない。

この観点にたってみれば、SM小説は、入手しにくい「エロ本」の代償でもなく、その行為のみを拾い読みして、己の情痴を満足させる代償作用でもなくなるのだ。カタルシスではない。

我々によって書かれる小説の主人公は、カール・ベルグの事例のペーター・キュルテンの如く扱われるのではない。生きている。冷たい対象——事例ではないのだ。KKの愛読者によって書かれる真のSM小説をのぞむ。



僕のイメージ画集

『神よ、わが欲望
を罰し給え』

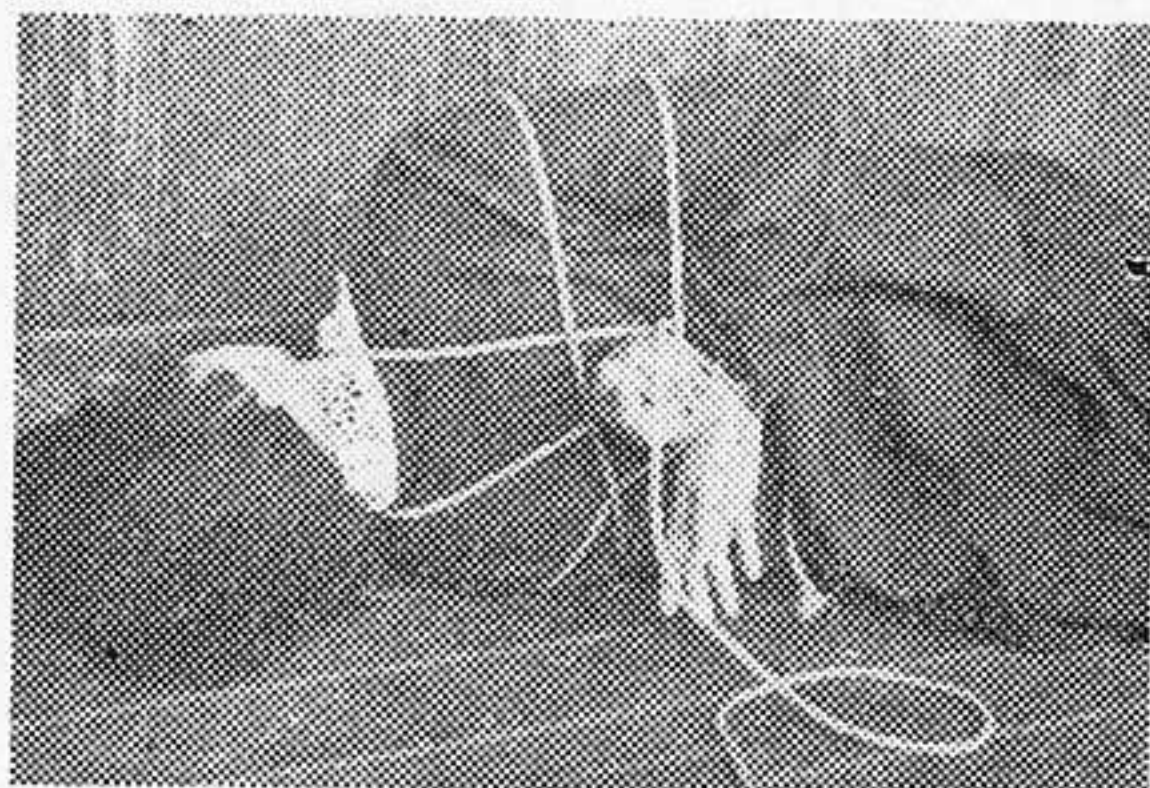
室井亜砂路

イメージ画 『引き責め』小妻 容子



自作の緊縛写真

柴 利 美



小学生の頃から、縛られた女性の美しさに魅力を感じ、映画、芝



居、雑誌の挿画などにそのような場面が出てくると、夢中になって眺めたものです。ただ芝居の縛り場面では、ほとんどの場合本当に縛らず、後手で縄を握っているのに失望したものです。その点映画ではキッチリと縄をかけて縛っており、縛られた後手の見えるのを期待して眺めたものです。

戦後、奇クはじめ種々緊縛をテーマにした雑誌が発行され、私の要求を満足させてくれるように思っていますが、自分の手で女性を縛り、カメラで写してみたい気持はまた別で



す。

しかしモデルを得るのがすごく困難です。私の場合はそれでも二、三知り合いの女の子に頼んでモデルになって貰いました。しかし再々は頼めず、またポーズもいろいろと要求するわけにはゆかず考えた末、女装して自縛し、それを撮影してみることにしました。女装用の服装は最近は容易に入手できるようになりました。デパートや専門店では婦人用のものを買うのは気がひけますが、スーパーマーケットでは気兼ねなく買うことができます。

パンティ、ブラジャー、スリッパを身につけたら、一応女性の形になります。更にその上にワンピースなりスーツを着て、ストッキングをはけば立派な女性姿です。(ヌードは不可能ですが)

編集部だより

○団鬼六先生がかねて三浦半島の一角に建築しておられた邸宅がこの程完成されたことを心からお祝い申し上げたい。しかし七月上旬から風邪で身体の不調を訴えておられたため、お目当ての連載小説「花と蛇」が休載のやむなきに至ったのは誠に残念である。次号はこの埋め合せのため質量共にボリウムのある力作を寄せて下さる由なので、どうかご期待願いたい。

○長井葉津子さんからの告白文章を待っていたのだが、どうやら辻村隆氏のカメラハントに取材されその方で記事になる方が早いようである。カメラハントと言えは先月号で読者通信を寄せられた岡本優子さんを早速ハントした辻本隆氏の手の早さには全く驚くばかりである。他に名古屋市と高槻市からハント志望の二女性から便りがきている。いずれ記事になるかもしれないので楽しみに待とう。

○久方ぶりに関谷富佐子さんから便りが届いた。鞭打ちと吊り責めに対して飽くなき憧憬と限りない期待を抱いた文面にカメラマン塚



うな気がします。うなだれたり横倒れになったりして、もがいていると、自然に快感がつき上げてきて、写真などいいような気持ちになることもあります。休日の

半日をこのようにしてすごすのが私のたのしみになりました。

添付の写真は、本当の女性のもと、私のものです。私の分には女性の顔をはりつけてあったのですが、女性の方のご迷惑を考え、はがしてありますので、よろしくお願ひします。

付記 D・Pについて

せっかく撮影した写真だが一般D P屋に出すのはどうも、という人が、多いと思います。そういう

人達の為に、愛読者のうちから特志者に申し出て貰い編集部に登録しておき、希望者は編集部を通じてD P登録者に送るようにしたらどうでしょうか。編集部としてはご迷惑とは



でき上がった写真に顔を画くなり、女性の顔をはりつけるなどして楽しんでるわけです。若い女性的な顔をしていたら、ヘアーピースで頭をつくり、化粧で顔をつくり変えることもでき、こんなことをしなくてもいいだろうかと思いますが、いままら仕方ないことです。

不思議なことに女装して縛られていると何となく女性になったよ



本鉄三氏がいち早く行動を開始し写真撮影を行ったようである。○スナックバーのマダムとしておさまっている山原清子女史は、やはりS Mに対する関心は捨て難いらしく思い出したように電話が掛かってくる。熾烈な焰に身を灼くような往年のプレイの思い出が忘れられないのだろう。本誌へのカムバックが望まれる一人である。○先月号の『サロン楽我記』に編集部から転送した一文を辻村氏が公開してしまった。そのため編集長や編集部宛に、この未亡人を紹介してほしいという依頼や、中には奴隷志願の応募が殺到して困ってしまった。この未亡人はなにも奴隷を募集するといった真意があつて編集部へ通信を寄せられたわけではないと考えるのでその点、充分ご諒解を願いたいと思う。○最近は女性上位時代とかで年輩の有閑婦人が年下の男性奴隷を紹介してほしい。自分の好みに飼育してみたいという依頼をよく受けるが、本誌はあくまで雑誌の発行が目的なので編集部としては編集に関係あることのみタッチしている故、それが誌上で取扱うといった性質のものでない限り取上げる意図は持っていない。



私の映画愚評

SM映画生

最近見た映画を感じたままに書いてみよう。

日活の「夜の最前線」シリーズの第二作「東京女地図」に浣腸シーンが登場したことは、9月号でも紹介されていたが、佐藤サト子、全身革の拘束衣に蔽われ、嵌口具を噛まされ、両手吊りのまま激しく鞭打たれるシーンも悪くなく、後半、全裸の女性（サト子に非ず、無名の新人か？）が、強制浣腸され、衆人環視の中で、ガラス製の便器に豊満なお尻をのせて極限まで堪える。ひたいに脂汗がにじんでくる。もしやという期待

があったが、流石に排泄は有り得べくもなかった。しかし五社の作品に浣腸シーンが正に堂々と描写されたことは、未曾有のことに違いない。

東映十八番の性愛路線に代って登場したのが「やくざ刑罰史・私刑」

オムニバス形式に各種各様の凄じい私刑が紹介されているが、その第三部の現代篇で、前作「責め地獄」で思わぬ拾いものの主役を演じた片山由美子が、ボスの情婦でありながら子分と浮気し、セメント詰め込まれて海中に沈められる役を、懸命に演技しているが迫力無く、それよりもフランク・シナトラ主演「コンクリートの女」の冒頭に現われた、海底にゆらゆらと揺れていた金髪的全裸女性の美しさが、今でもありありと臉に浮かんでくる。

同時上映「温泉ポン引き女中」は、これでもかこれでもか式に大ヌード作戦を展開しているが、単なる乳房や、お臍の陳列だけではサッパリ。但し、ラスト近く、高橋昌也扮するボスが、鼻下長紳士どもを招待して開催した野外パーティは、一寸瞠目に価する。全裸（といっても、どうも全身ピッ

タリのタイツ着用の疑い濃厚）の女性が、股間に申し訳けの布を当てたきりで首輪をはめ、全員四つ這いのまま会場内を右往左往したり、首をならべて、手を使わないで犬の如く皿のものを食い散らす凄じいシーンがあり、思わず一膝のり出した途端、警察の手入れにあって、チョン。ガッカリした次第。

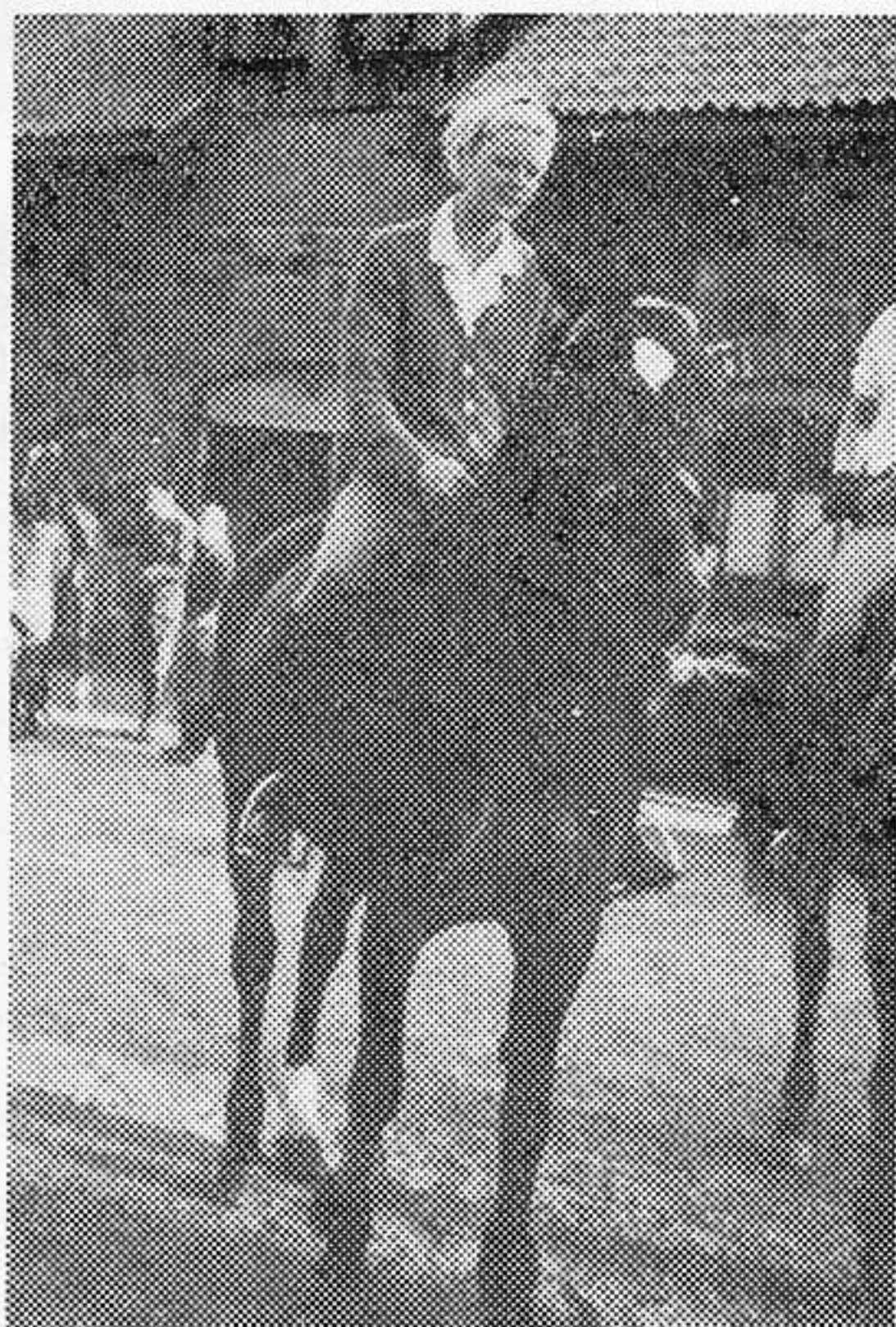
東映さんよ、斯くの如きシーンはもう少し克明に丁寧に見せてほしいと思いますよ。SMファンとして……。

閑話休題。時折ピンク映画をのぞく私にとって、珍事が起きた。というのは同じ作品を三日間に亘って通って観賞したのだ。僅か二つのシーンの数カットを見るために。それほどに私を惹きつけた映画の題名は「魔性の夜」主演女優は「一星ケミ」である。そして私のSM的官能をゆさぶった二つのシーンとは、一つはケミの扮する人気漫画家が一個の鞆と画集を携えて唯一人、郊外の別荘に赴く。机に向って画集をひもとくと、悉くそれは緊縛され手錠足枷をはめられた女体ばかり。その一頁一頁をめくりながら、次第にケミの瞳の中には妖しい昂まりと潤いがた

たえられ、身悶えしている内にオーバーラップして、画中の女性がケミ自身に変わり、全裸の彼女が鎖にからまれ、手錠の両手が空を切り、悩ましく身をくねらす……。実は彼女自身が生来のMであり、携えた鞆の中には、おぞましい責め具が一杯つまっているという寸法。一人、Mの妄想に悩まされているとき、別荘荒しの夫婦強盗に侵入され、本当に手錠と鎖で縛られることになる。二つ目のシーンとはラストで、電話で打ち合わせをすませる彼女。すると、なんとさきに襲った強盗の夫の方が、椅子にふんぞり返ってタバコをくゆらせ、右手の指に犬用のくさりをからませている。カメラが静かにくさりの先端を追っていくと、驚くべし、机に向かって執筆中のケミの左足に足枷がはめられているではないか。この二つのシーンを見たいために、愚かな私は三日間も映画館に通い続けたのであるがケミ嬢は正に彼女自身がMでなくかと錯覚するほどの好演であり、私の夢だが、フランス地下文学の最高傑作「O嬢の物語」が映画化可能だったなら、是非彼女にO嬢を演らせてみたいものだ。

＝ドイツのアマゾン＝

佐野 寿



このフォトはドイツからのもの（アグファのカラーズライド）です。複雑な行程を経て印画にしたのですが、

ほとんど解説不要なほどのクリテリオンの高さであります。この洗練された乗馬姿から広がる夢を、私はすばらしいと思います。ただ誌上ではカラーでないのが残念。





解臭剤と

オトイレ

酒井 米子

オトイレに入ったとき、つくづく臭くないウンコとオシッコが出ればよいと思います。

いろいろのおくすりが発明されていますが、なんとか臭くないように出来るおくすりを発明できないものでしょうか。

とくに病室で、便器での排便のときなど、卵のくさったようなたまらない悪臭は、当人は勿論、同室の者はみんないやな思いをします。

お浣腸をされるときは、長いこ

と便秘しているのですから臭いのも当然でしょう。

カプセルの解臭剤を発明してくださったら、家庭で、病院で、どんなに大助かりでしょう。臭くないのでしたら、塵箱へ鼻紙をすてるように、気楽に紙につつんで塵箱へすてられますわねえ。汲取り式お便所も汲取りタンク車も、あのいやな臭いを発散しなくてすむことになるわけですもの。

下着デザイナーの鴨居さんがお部屋に洋式オトイレを据えつけたという記事をみました。臭いのをしたのではお部屋にいますから、やはり解臭剤が必要でしょう。

鴨居さんのお部屋へオトイレを備えるアイデアについて、私は、病気を長くしている人とか、文筆、画家、彫刻家、などのように、長いことお部屋にいてお仕事をされる人には、大へん便利と思います。

もっとも、臭くないのならオマルでもよいわけですね。

オマルといえば、フランスはベルサイユ宮殿をつくったときお便所はなく、貴婦人達も宮廷の茂みで用を足したそうですし、また、ルイ王朝風の立派なおマルを使用



イメージ画『うごかないで』 杉 よしお

したそうです。中国でもオマルを馬桶といって、昔から使用されているとのこと。私も臭くないのが出るなら、なんとかルイ王朝時代の豪華で美術的価値あるオマルを手に入れて、愛用したいと思えますわ。

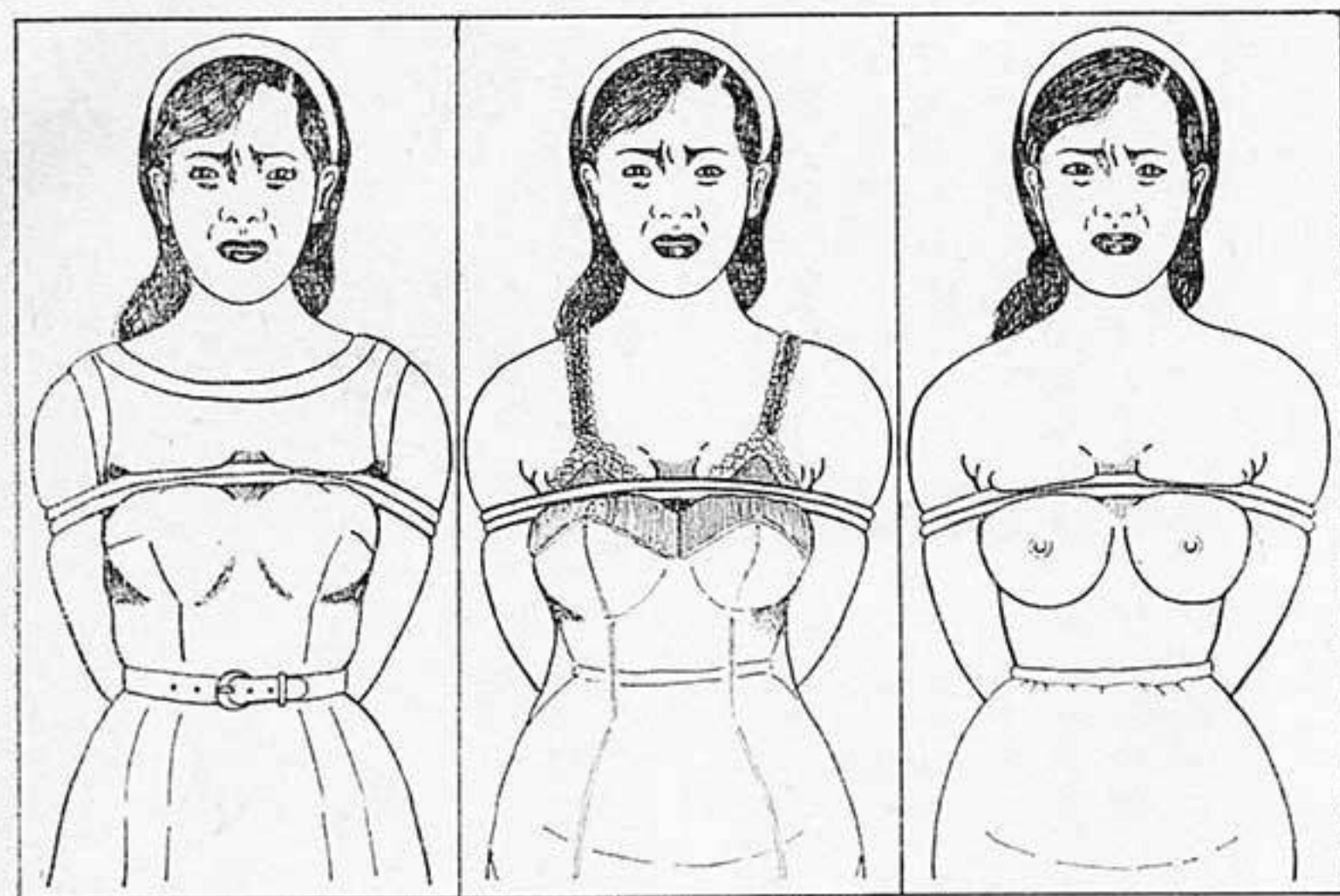
現在私達が使用している洋式、和式水洗オトイレは、お水がいつも残っているのです、どうしても音

が雫になって聞えます。

一間か二間の小さいお部屋ですと、音がつつぬけですからほんとにこまりますわ。洋式オトイレで排便後のお水の音がしない装置は出来ましたが、使用中の音がしないように、オトイレの構造を工夫改造出来ないものでしょうか。

副作用のない解臭剤と、洋和式水洗オトイレの音をなくす発明を

イメージ画 『透視式三面鏡』 木 真佐男



「メイ文句」

青井 松造

研究。追求。探美。いかにも聞えのよい言葉である。そしてある意味で、正真、間違いのない表現単語だヨネ、プレイ愛好者の自己装飾用としては……。

ナニヲゴタゴタ、クダランコトヲ。オラア、アオクサイリクツナシカヨミタカネエ。「春本」ヲキタイシテンダヨ「春本」ヲ……。

ボクは真似てみたよ、女房相手に……。「キミの美しさを、もっともって研究したい」って。アイツめ、後手のままで吹き出しやがった。それなら、といてやった「テメエに、昔の女郎を期待してるんだ」って。ヤツはじいっとボクを見詰めていたが、プイッとふくれて、シクシク泣き出したのには弱った。折角の名文句も、相手に依ってえことなんだと判った。

切望しています。

解臭剤が出来にくいなら、せめて、お流腸するとき、お流腸液と一緒に使う副作用もない防臭液を發明出来ないものでしょうか。

日本にはまだヌーディストクラブがありませんが、私は日本にも一つ位いは、夏は涼しく冬は暖かく、温泉あり川あり池あり山ありという、緑につつまれた風光明媚な処に国際的なヌーディストクラブがあつてよいのではないかと思います。

お風呂場でだけ全裸になれるというのではなく、空氣の清浄な佳い土地で、大氣を思い切り吸いこんで全裸体操をし、身体のすみずみまで新鮮な空氣を与え、日光浴や水浴を楽しむ樂園は、必要だと思います。

釣り、乗馬、水泳など、思い思いのスポーツ。花や野菜などの栽培などをして大地に親しみ、またはフォークダンス、キャンプファイヤー、アングル劇なども行ない幼児や病人の看護法でお流腸やオシメの仕方などの実習もして、医学と看護知識も体得する。

排便も木陰の茂みで、お互になんのか恥しさも屈托もなくして、あと仕末は仔豚にさせる。……この

ような雰囲気で皆んなが心から愉快にすごせる、風光明媚で、周囲の環境の良いヌーディストクラブが出来れば、世界各国のヌーディストクラブにも必ず反響を呼ぶことでしょうし、会員の志望も殺到するものと予想しますわ。

ヌーディストクラブを、単にセックスの場と考えるのは偏見で、健全で美しい人間の本能を享受させ、自然を思う存分楽しませ、国際的にも価値あるヌーディストクラブでなければ、と思います。

臭くないウンコやオシッコばかりとなると、これが好きなフェチの人達は困るかも知れませんが、これは解臭剤をのまなければよいのですから、フェチの人にも迷惑はかけません。

出来れば、臭くないオナラのお薬も出来ればと思います。満員電車や人ごみでくさいくさいオナラをされるとたまりませんもの。

臭くないウンコ、オシッコ、オナラのための、解臭剤と申しますか解臭薬と申しますか、万人のなやみを治すお薬と、洋和式水洗トイレの溜り水をなくして、音がしないオトイレの發明や、世界的なヌーディストクラブの出現を待ち望んで止みません。以上

奇クよ高級悪書に徹せよ！

高 杉 愁 郎

没を覚悟の提案！

毎月のことだが、二八〇円也の電車賃を払って、遊びかたがた都内の書店に本誌を求めに行った。すると懇意にしている親爺、高校生に本誌を万引きされたと嘆く。『踏まれる麦は強くなる』さね。

しちやいかんといわれりゃ、したくなる。見ちゃ駄目よとお達しあれば、見たくなる。それが、愛すべき人間どもの市民的根性、反骨の精神さ。青少年の保護、育成などどダンビラふりかざして、出版者を押えつけても、当の青少年は平気のヘイザ。賢母のオバちゃん達や、ケイサツのお巡りさんなんかの手に負えるものか、悪書を読むひまに、実践している。勇気のない者が万引き。愛の鞭ばかりで馬がいう事を諾くものか。

スエーデンあたりでは、ポルノグラフィが堂々と書店で販売されるようになってから、性犯罪が激減したそう。アメリカにおいても相当すごい映画が上映されるし春本も簡単に手に入る。ヌード写真なんか、大分以前から無修正。

ところがこの日本では、恥毛などと活字にするのも憚られ、写真はチラで発禁。珍妙なポーズや修正で、アンバランスなものばかりの世界では、保護・育成すべき青少年が、不満と探求心の消化不良から、犯罪に走るのも道理ではないかな。

舶来一辺倒の国で、ことセックスに関する限り、あくまで弾圧の手を緩めないのは誠に立派の一言に尽きる。欧米が、処女懐胎のキリスト教で、ミトのマグワイの神サマを思想の土台にしていた我が国、不思議。

過保護の檻に入れられた未成年者の性犯罪のたびにヒステリーを起す。悪書追放審議会だか、懇親会だかの鼻息を窺い乍ら、汲々としている本誌編集者、執筆者、読者こそいい面の皮。真摯に耽美と取り組む吾人を踏みつけにする連中、縛り上げて鞭で目茶苦茶にぶちのめしてやりたい。婦人連中には浣腸だ、もし食指の動くようなのがおれば。

畢竟、彼等は、自らの心の中に



イメージ画「黒い枷」 志羽 利也

うごめく醜い（と、思っている）欲望と憧憬を、赤裸々に剔出されるのが怖いのではないか。真の探美者に対し劣等感を抱いているのではなからうか。その窮屈な倫理の中で、憧れと嫉妬の相剋の反動が悪書というレッテルになって、襲いかかってくるのでは、あるまいか。

社会学の初步に必ず出てくる、健全な社会を営む人間の本能、即ち、社会を動かす最大の条件は、生存本能、種族保存本能、斗争本能であり、倒錯心理は種族保存、性欲に結びつく心理の状況なのである。人間とは悲しい動物であっ

て、その本能のままに性欲を満足させる訳にはゆかず、種々の条件下で苦勞し乍ら処理せねばならない。外的なものはさておき、心理条件のみ取り上げると、少なくとも相手と舞台と愛情の三者を同時に満たす事が必要とされる。各人の個性、嗜好から、千差万別の条件、状況がある筈。その相手や舞台が、一般多数の求めるそれとは非常にかけ離れている者を、識者が倒錯性愛者など称し、異端と呼び、設計図を載せた本誌を悪書ときめつけて、虐待する。

異常といわれても「健全」と区別する線など何処にもないし、悪



東京 赤ちゃん
イメージ画「シャワー」

書・猥褻と申されたところで、善書・ゴ清潔のない以上、比較もできまい。ひねくれ連中の価値判断やお役所尺度ではたまったものじゃない。

なにせ、宇能鴻一郎氏の異常な世界、早乙女貢氏書くS過剰忍法もの、梶山季之、山田風太郎、戸川昌子、堤玲子各氏の諸作、SF作家小松左京氏すらその長編「エスパイ」において、華麗、かつ妖美な拷問ショーを展開して、斯道氾濫の昨今、ひとり奇クのみが、自肅自肅で萎縮している。小学校

の壁新聞じゃあるまいし隅で小さくなっていることもなからうに。倫理、道徳は時代と共に変わるもの。このままでは「風俗文献誌奇ク」は、バスに乗り遅れてしまいう前衛どころか後塵を拝するのがオチ。

走る凶器といわれる自動車が存在を許されている如く、すべて物事には表裏二面ある以上、いつこの際開き直って徹底的に悪書として存在したらどうか。

我々、団結、協力して、本誌を「高級なる悪書」にしあげてみな

いか？ 一大高級悪書として、中途半端の良書を駆逐し、人々を猟奇の渦にひきずり込み、青少年を保護・育成しようではないか、と提案。

サロンの雰囲気の芳野眉美氏の文章、齊藤夜居氏の研究、黒淵嬰一氏の該博な知識、幾多の論評、感想、真面目な告白、既に足掛かりはある。あと一步の努力で実現も近い、と愚考。

悪書も高級と名がつけば、そこは弱い日本人のこと、争って理解しようとするのではないか。大学の講堂で、空港の待合室で、貧富・老若を問わず、SだのM、Fだの傾向を示す金バッジを胸に、奇クが話題になって奇クを読まざる者、現代人に非ず、の未来図。その日を夢みて、筆とる手も軽い小生の希望、如何ですか？

以下、私事に互るけれども、ご容赦願って——。

今春三月号、鬼六談義において近親相姦に対する団氏ご意見、予告を読み期待するうち病に倒れ、空しく病床に四カ月。こんなことなら予約にして置くのだった、と思っても後の祭。少しずつ、バック・ナンバーを揃えてゆく皮算用

だか。

さて、その近親相姦。倉橋由美子、立原正秋氏等が書かれているが、本誌上には殆ど顔を出さない——といった切るのは、小生の認識不足かな、如何？ なにぶん、本誌と親しむようになって六年。それも隙間だらけの有様、豊富なきリアを誇る諸先輩方の御意見だが、たよりなので。

小生、性向は目標倒錯が羞恥責め一本槍のS、対象倒錯傾向が近親相姦であると自己分析。その他に對しては無関心。前者については、本誌から多大の満足を得ている現在、唯一の希みがそれ。近親相姦、特に兄弟姉妹間のもの。

団氏の「花と蛇」中にて、小夜子と文夫姉弟が、悲惨な地獄の業火に身を焼かれて、泣いてくれたら、諸兄の議論、批評が、サロンを賑わしたなら、と弱った頭で考えた。昨年九月号では入口まで来ていたのに——。

団氏、近親相姦には興味ないと。の事。かくなる上は自分の腕で、と恢復後、書き出した超大作(?) あわや！ という処で主人公が力萎え、作者も挫折。口惜しさに涙しながら、各位に訴える。

どなたか、小説なり論文なり、発表して下さいませんか。

〔秘蔵版特選 S M 資料〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

入墨女賊仰向け木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よひ V

全裸入墨女賊拷問折檻

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よせ V

女賊答打ち白洲糾問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よゆ V

入墨女賊ハリツケ拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よめ V

入墨女賊海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よす V

入墨女賊全裸四這い木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よも V

入墨女賊逆さ吊り仕置

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よき V

女賊全裸大の字磔処刑

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よさ V

女囚拷問木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もと V

女囚石抱き算盤責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もへ V

美人女囚海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もに V

白洲女囚竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もち V

美人女囚答打ち折檻

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もほ V

女囚開股羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もぬ V

美貌女囚土壇で胴斬り

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もり V

艶美女囚白洲に悶える

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もは V

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号△なの V

猿ぐつわにあえぐ裸女

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号△なむ V

女奴隷を弄ぶ二人の女

大手札八枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△きあ V

くすくす責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚・東浦 略号△きす V

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚・東浦 略号△きせ V

豊満な乳房を責める女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きそ V

女奴隷を飼育する美女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きて V

凌辱されるマソ女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きと V

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚・東浦 略号△きな V

可憐な牝犬の調教

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めあ V

足舐めをたのしむマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めく V

足舐めを強要されたマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めゆ V

足舐め訓練を受ける牝犬

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めや V

愛玩用牝犬の生態

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めえ V

足首縛りの表情美

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あひ V

美しき足首の縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あは V

素足を縛られる快感

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あふ V

生ゴムの猿ぐつわに喘ぐ

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△むこ V

股間縛り恍惚境場面

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△るね V

鼻責めいたぶられ集

大手札四枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号△るえ V

首縄股間膝頭縛り

大手札五枚一組 六〇〇円
一宮百合子 略号△るそ V

鼻いじめ三態

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△はね V

鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 一二〇〇円
山原清子外一名 略号△はた V

乳房責め五態

大手札五枚一組 六〇〇円
山原 清子 略号△てら V

全裸女麻縄強烈縛り

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原 清子 略号△いね V

刺青裸女を踏みにじる

大手札八枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号△いつ V

洋髪全裸刺青強烈縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△いこ V

可憐島田髻全裸縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△いみ V

黒フンドシ高手小手縛り

大手札八枚一組 一二〇〇円
山原 清子 略号△ひろ V

刺青女体エビ責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△ほか V

文身女体股間縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△ほき V

「最近版」粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z 組 百態 大手札型印画紙 (9×13 寸) 極鮮明焼付

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇円

十組十枚 一〇〇〇円

二十組二十枚 一八〇〇円

五十組五十枚 四〇〇〇円

百組百枚 七〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号
天星社宛お申込み下さい。

一枚一枚、いづれも一粒選りの素晴らしい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

☆

1 鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)
2 後手は高く縛る(佐々木真弓)
3 八の字の開股縛(左近麻里子)
4 狂う女体の表情(ローズ秋山)
5 縄に苦しむ長身(川越美佐子)
6 弄ばれる全裸縛(長井葉津子)
7 ゴム衣縛りの極(木村 洋子)
8 白肌輝く股間責(山原 清子)
9 全身縛りを吊る(大塚 啓子)
10 悦虐に悲泣する(関谷富佐子)
11 亀甲股間縛り晒(山原 清子)

12 開股強烈羞恥責(木村 洋子)
13 妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)
14 縛りの好きな顔(一宮百合子)
15 美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)
16 縛の全裸を見て(金原奈加子)
17 憂愁の佳人縛り(左近麻里子)
18 前面を晒す裸像(長井葉津子)
19 亀甲縛りの正面(左近麻里子)
20 後手縛を見せる(川越美佐子)
21 鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)
22 逞ましき臀部晒(左近麻里子)
23 真白の柔肌責め(左近麻里子)
24 ムチ責めの果て(安井喜久子)
25 鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)
26 湯責めにあう女(山原 清子)
27 変型高手小手縛(川越美佐子)
28 洋子をいじめて(木村 洋子)
29 緊縛のホステス(佐々木真弓)
30 柔肌に喰込む縄(長井葉津子)
31 均斉のとれた体(佐々木真弓)
32 蠟涙責めの熱演(ローズ秋山)
33 脚吊りで責める(ローズ秋山)
34 片足吊りの狂態(大塚 啓子)
35 猿轡の開股縛り(木村 洋子)
36 股間縛の縄掛け(ローズ秋山)
37 妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)

38 二つ重ねの裸女(佐々木真弓)
39 縛られた洋裁生(長井葉津子)
40 椅子開股羞恥責(左近麻里子)
41 責め抜いた挙句(安井喜久子)
42 黒髪をいたぶる(大塚 啓子)
43 全裸の股間縛り(山原 清子)
44 黒総ゴム衣縛り(木村 洋子)
45 パンティを剥く(大塚 啓子)
46 緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)
47 猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)
48 全裸高手小手縛(長井葉津子)
49 黒髪をいたぶる(ローズ秋山)
50 後手の厳重縛り(左近麻里子)
51 麗わしの妊婦縛(中河 恵子)
52 炸裂する革ムチ(安井喜久子)
53 剥がされた布片(金原奈加子)
54 浴槽と荒縄の責(山原 清子)
55 髪吊りの擦り責(ローズ秋山)
56 高手小手の裸女(左近麻里子)
57 海老縛りに泣く(関谷富佐子)
58 恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)
59 悶える全身縛り(一宮百合子)
60 伸びやかな素足(一宮百合子)
61 卓上の人身御供(左近麻里子)
62 皮紐の柔肌責め(中河 恵子)
63 股間縛を羞らう(金原奈加子)
64 宙吊りにもがく(木村 洋子)
65 裸身を晒す表情(金原奈加子)
66 輝く全裸の悶え(関谷富佐子)
67 全裸をもがく女(ローズ秋山)
68 豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

69 乳房強調縛猿轡(左近麻里子)
70 媚を撒く縛り女(佐々木真弓)
71 縄のブラジャー(左近麻里子)
72 逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)
73 逆エビで責める(ローズ秋山)
74 美しき緊縛立像(関谷富佐子)
75 悶える緊縛全裸(金原奈加子)
76 鞭で責める女体(ローズ秋山)
77 両手吊りで晒す(金原奈加子)
78 豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)
79 あどけなき表情(金原奈加子)
80 厳しい縄目の肌(金原奈加子)
81 白肌にむごき縄(左近麻里子)
82 両手大の字吊り(関谷富佐子)
83 首縄縛りの裸女(佐々木真弓)
84 美しき全裸肢体(佐々木真弓)
85 柱に繋がれた女(長井葉津子)
86 尻挙げ海老縛り(安井喜久子)
87 鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)
88 荒縄縛りの刺青(山原 清子)
89 股裂きで責める(ローズ秋山)
90 ドレイ洋子の姿(木村 洋子)
91 後手に縛上げる(ローズ秋山)
92 滑車吊りの裸女(大塚 啓子)
93 若々しき緊縛美(佐々木真弓)
94 S男がいたぶる(佐々木真弓)
95 強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)
96 正面全裸柱晒し(長井葉津子)
97 開股縛りに羞う(左近麻里子)
98 白肌に喰込む縄(大塚 啓子)
99 尻立て股間縛り(木村 洋子)
100 悦虐に泣く美女(安井喜久子)

〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号(むら) 五〇〇円

足挙げ開股責め

大手札三枚一組 略号(あけ) 四〇〇円

猪吊り三態

大手札三枚一組 略号(いの) 四〇〇円

責め衣縛り

大手札三枚一組 略号(せめ) 四〇〇円

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号(ねむ) 四〇〇円

後手首の高縛り

大手札三枚一組 略号(ねへ) 四〇〇円

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 略号(ねと) 四〇〇円

全裸脚挙げ縛り

大手札三枚一組 略号(てい) 四〇〇円

全裸アグラ縛り

大手札三枚一組 略号(てへ) 四〇〇円

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 略号(てほ) 四〇〇円

強烈エビ責め

松本アサ子 略号(まと) 四〇〇円

吊り打ち

大手札三枚一組 略号(やり) 四〇〇円

股間縛り法悦境

大手札三枚一組 略号(ぬこ) 四〇〇円

踊り子緊縛

大手札三枚一組 略号(りこ) 四〇〇円

月経帯のまま縛り

遠藤百合子 略号(ゆす) 四〇〇円

縄目に悶える夫人

大手札三枚一組 略号(ほく) 四〇〇円

髪を引き回される夫人

関谷富佐子 略号(ほむ) 四〇〇円

膨満正面縛り

大手札三枚一組 略号(へな) 四〇〇円

マニヤ全裸緊縛フォト

栗本ミチ子 略号(いな) 四〇〇円

強烈エビ縛り

大手札三枚一組 略号(もい) 四〇〇円

乳房責の苦悶

関谷富佐子 略号(もろ) 三〇〇円

全裸ムチ打ち

大手札四枚一組 略号(もた) 五〇〇円

強打に泣く裸身

関谷富佐子 略号(むち) 五〇〇円

裸身の晒し

大手札三枚一組 略号(わあ) 四〇〇円

全裸股間縛

関谷富佐子 略号(せら) 五〇〇円

双胸の強調縛り

大手札三枚一組 略号(そう) 四〇〇円

動感海老責地獄

大手札三枚一組 略号(とう) 四〇〇円

色禪の開股縛り

長野 良子 略号(いふ) 四〇〇円

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 略号(はす) 四〇〇円

乳房しばり

大手札三枚一組 略号(うは) 四〇〇円

鼻責めと緊縛

大手札五枚一組 略号(うい) 六〇〇円

木馬責三態

大手札三枚一組 略号(もく) 四〇〇円

椅子責めの果て

大手札二枚一組 略号(いす) 四〇〇円

檻に入れられた女

山原 清子 略号(もの) 三〇〇円

浴室の全裸刺青

山原 清子 略号(よな) 六〇〇円

鼻いじめ三態

山原 清子 略号(はね) 四〇〇円

鼻責め万華鏡

山原・鈴木 略号(はた) 一二〇〇円

碧玉裸身緊縛

大手札三枚一組 略号(のん) 四〇〇円

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 略号(きす) 四〇〇円

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 略号(きせ) 五〇〇円

豊満な乳房を責める

大手札五枚一組 略号(きそ) 七〇〇円

女奴隷を飼育する

大手札五枚一組 略号(きて) 七〇〇円

凌辱されるマソ女

大手札五枚一組 略号(きと) 七〇〇円

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 略号(きな) 三〇〇円

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 略号(なの) 四〇〇円

猿ぐつわにあえぐ裸女

大手札三枚一組 略号(なむ) 四〇〇円

全裸の緊縛姿態開陳

遠藤百合子 略号(ゆり) 五〇〇円

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かみ)

強制 空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かな)

浣腸 責の極致

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号 (一五〇〇円)
梨花悠紀子 略号 (れち)

強制 女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
絹川 文代 略号 (きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号 (一五〇〇円)
梨花悠紀子 略号 (いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆか)

浣腸 器と女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
絹川 文代 略号 (ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るは)

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ほは)

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ほい)

浣腸 後の排便

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (へか)

浣腸される清子

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
山原 清子 略号 (かる)

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号 (一三〇〇円)
山原 清子 略号 (かへ)

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号 (一二〇〇円)
山原 清子 略号 (かに)

イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けか)

いちじく浣腸の実施

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けき)

百CCのポンプ浣腸

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けく)

オマルに排便の姿態

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けし)

浣腸後オシメ着用

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けこ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
遠藤百合子 略号 (のけ)

高圧 空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (むろ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆか)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ちり)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ちら)

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かね)

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かて)

シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かた)

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かち)

アーヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号 (七〇〇円)
山原・東浦 略号 (かの)

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
山原・東浦 略号 (うも)

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
山原 清子 略号 (うわ)

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
美木乃々子 略号 (ぬる)

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
美木乃々子 略号 (ぬか)

挿入された嘴管

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るて)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るち)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ると)



毎号「ピエロ床屋」楽しく読んでいます。末長く続けて下さい。さて私の希望を述べますと、栄子のグラマー美人は、とても圧迫感があつてよい。栄子のために、政吉も善夫もウンと鍛えてほしい。政吉は年のせいで、かつてのプレイボーイも、今は栄子の前に顔色なしという感じを強く出してほしい。栄子が政吉を責めさいなんで行く有様を十分、見せてほしい。政吉が主人面して、栄子と善夫を

引きはなすため善夫を東京に帰そうとするが、栄子の怒りを買ってコテンコテンに吊るし上げられ、かえって栄子に、善夫は正夫（ベターハズ）政吉は副夫（スペアハズ）ということを言い渡され、それが嫌ならば私は善夫と一しよに出で行ってやるとおどかされ、政吉は栄子の前に尻尾を巻き、栄子に去られるよりは、まだと諦めてスペアの位置に甘んじる。そのうち栄子は、二人を同時に責め、同時に愛することに刺戟を求めるようになる。床屋の主従二人が、栄子女王の責めに随喜の涙を流して、交互に栄子を一夜に愛する情景を描いてほしい。

（東京・元宮健一）

京都の加藤博様。私は二十七才の主婦です。浣腸のたのしみを覚えてしまったようです。最近はいじめたばかりなのですけれど、あのときの何ともいえない気持を忘れることができません。自分で浣腸の責めをしてみるのです。ぜひ、あなた様のような方とプレーしてみたく、お便りを出しました。加藤様、いかがでしょうか。もし、よろしかったらお便りを下さいませ。心まことに、お待ちいたしてお

ります。（名古屋・小島友子）

左根さん、お元気ですか。貴女の通信、拝見させていただきました。ぼくは二十二才の青年です。貴女は便秘症で浣腸をされているとか。それをぼくにさせていただけませんか。貴女が出来るかぎり満足されるよう努力するつもりです。そしてアブノーマルな、ひとときを過ごしませんか。ぼくは土曜日の夜から日曜日にかけて、いつもひまですから、左根さんのお相手をする事ができます。左根さん、どうかよろしくお願いいたします。（大阪市・細川竜二）

大阪の岡本嬰子様。貴女の通信文、拝見いたしました。私はSMに興味を持つ青年です。本誌を愛読して約一年になります。SMについて人に話す勇氣もなく、かといって本誌に手紙を書くこともできません。だからプレーの経験はもちろんありません。貴女は大阪私は神戸と、住まいも近いので、一度お会いして色々お話ししたいと思っています。このような私ですから、ガールフレンドを作る勇氣もないのです。今までSMをわかってくれる女性はいないかと待

ち望んでいたのです。今まで何回も投書しようかと思いましたが、つい決心がつかかねていました。今になってやっと勇氣が出て貴女に手紙を出した次第です。（神戸市・浜中亜夫）

はじめて手に入れた七月号の、「ふんどしハプニング」を見て、感激しました。さしえを参考にしたりフンドシを作ったり、鏡の中の、りりしい姿に興奮してしまいました。通信をと思っている内に二カ月たってしまいました。九月号を見て、またびっくりしました。「ふんどし物語」に出てくる四十人近い女性が、ふんどし生活を送っておられたのです。私も勇氣を出して露出につとめます。ゆり子お姉さま、どうぞよろしくね。（東京杉並区・今井陽子）

奇クを愛読して二年余になります。最初、本屋の店頭で本誌を発見しましたとき、何か知ってはならないことを知ってしまったような気がしました。しかしSMに対する魅力にひかれて心理学書や歴史書などをひもといで研究した結果、SMとは人間の一種の愛情表現で、人間の本性に基づくことを

知りました。先日ある週刊誌で現代にはSMに対する偏見のため自分の本当の性向を隠し、一人悩んでいる女性が多いことを知りまして。そんな人達、よろしかったらぼくとプレイしてくれませんか。悩んでいるより、互いに理解しあえる者同志交際したら良いと思います。ぼくはSで医学を志す、まじめな学生です。名古屋の近くで十八から二十五才くらいの方、お便り下さい。(名古屋・おさむ)

東区の女王様、最近の御活躍、喜んで拝見いたしております。私も同じ東区にいる淋しい一匹犬です。女王様が私の直ぐ近くにおられ、毎日のように犬どもを飼育しておられるのかと思うと、たまりません。私とて同じ畜生、ぜひとも女王様に飼われたいと願っております。どうぞ私の顔の上に、女王様の偉大なヒップを乗せて下さい。そして小用のときは私が一滴余さず飲み干します。その後で、私の舌がペーパーの代りをいたします。大きい方ときも同様に、私が奉仕させていただきます。また食物は、女王様の食い残しを足の指にはさんで、お与え下さい。近日中に女王様にお会いできることを

とを期待しております。

(大阪東区の一匹犬)

神戸の小杉千恵様。あなたの六月号での読者通信、拝見いたしました。私も神戸に住んでいる本誌の愛読者ですが、貴女のような同好の方が同じ土地におられることを知って、大変うれしく思いました。私は三十二才になるサラリーマンですが、SM両方に趣味をもっております。いつも「花と蛇、カメラハント」などは楽しく読ませていただいております。貴女のような方とお友達になれましたら幸せです。お便り心よりお待ちしております。(神戸・山田英二)

数年、奇クを愛読しておりますが、皆様の仲間入りがしたくて今回、長崎に住む一男性です。「花と蛇」や「カメラ・ハント」また読者の皆様の活躍など、意気盛んな現在の奇クをみますと、となく希望も薄れがちな今日の現実社会において、その夢を奇クが満たしてくれそうな気がいたします。私は特にカメラ・ハントに興味を持っております。やはり、読んで感じるより直接、見て感じるこの

方が強烈ですし、なによりもプレイの事実を裏づけることになるからです。現在、プレイの相手を探しておりますが、なかなかその機会に恵まれず、淡々とした生活を送っております。生まれたまの姿で縛られ、羞恥に全身を紅潮させて、もだえるM女性。女性としての最高の美かと私自身、固く信じております。近県(九州内)に在住の方で常識ある方でしたら、年令性別を問わず、お便りお願い

いたします。いろいろと、お互いの趣味を語り合い、気持の一致したところでプレイなど楽しみたいと思っております。同じ長崎の本山正美様、お便りいただければ幸いです。(長崎市・柴谷雅彦)

△飼育の愉しみ▽小池美喜嬢分譲写真

奇クとは、もう二十年近いおつき合いをしております。写真も大分、たまっております。しかし、残念ながら良いプレイの相手にめぐりあえず、ただ妻に隠れて奇ク

本誌九月号のSMカメラハントで紹介された純情可憐な小池美喜嬢での緊縛姿態を好事家に限りごらんにいれます。女優とかヌードダンサーにない素人じみた初々しさを彼女の中から見つけて下さい。

後手首を縛られて

大手札三枚一組 四〇〇円

小池美喜 略号ハレヘ

全裸正面の縄掛け

大手札三枚一組 四〇〇円

小池美喜 略号ハレヘ

羞らういを含んだ幼い膨らみに情容赦なく縄目が喰い込んで素肌がわなわなとふるえている。

飼育された美少女

大手札一組 四〇〇円

小池美喜 略号ハレヘ

柔肌の高手小手縛

大手札三枚一組 四〇〇円

小池美喜 略号ハレヘ

自分の裸身を縛られるという好奇心がいつとはない興味に変化してきた美喜嬢の縛られ姿態。

を読み、写真を見ている。奇く誌上で夫婦プレーの記事を見るたびに羨ましくも残念にも思っております。しかし私の妻は、一般の家庭では上の部にはいる良い妻で感謝こそすれ、悪くいうところはありません。最近縛りのある映画を見て、お茶をにごしてありますが、最近の映画、ピンク映画の縛り方は、単に縄を巻きつけたようなものが多く、体にくいこむような緊縛感の出たものがなく、失望しています。縄をもっと細くして、アツと思うような本格的な縛りのものを作って欲しいものです。

(愛媛県・島津責雄)

増田みゆき様。奇譚クラブ七月号のSMカメラ・ハントを読み、お手紙を書かずにはいられない気持ちにかられ、ペンを取りました。私は若い頃から、女性の鼻の責めに興味を持っておりまして。一度心ゆくまで、女性の鼻を責めてみたいと思ひながら、勇気がないままに年をとってしまつて三十才になりました。妻を持ち、子を育てる身となりましたが、私の妻は平凡な女で、何度も鼻責めのことは言つてはみたのですが、そのたびに固く拒絶され、最近では鼻責め

の話をお口にしますと、別れたいと言ひ出す有様です。せめてもの慰めに、奇くから鼻責めの写真を購入して、一人で慰めております。七月号のSMカメラ・ハントで貴女の鼻責めの記事を読み、鼻責めの貴女のお写真をみて、これこそ私のあこがれ求めていたものだと思つと、夜も眠れないぐらいです。貴女とプレイすることは、とてもお許しいただけないと思いますので、せめて貴女の鼻責めのお写真を何枚かでもおわけいただけないでしょうか。一枚五百円程度で何枚かわけていただけますなら、喜びの上であります。日曜日は休みでだめですが、月曜日から土曜日までは、毎日午後六時以後は勤務から解放されます。貴女のご都合のよい曜日と場所をお教え下されば、毎週その曜日には午後七時にご指定の場所へ、目じるしに奇くを持ってお待ちしております。

(大阪市・今村道夫)

私にお便りを下さった皆様へ、お礼を申し上げます。でも「花と蛇」のように云々の形容語句だけのお誘いや、余りにも抽象的な字句の羅列では、SMの傾向一致の程がわかりません。私の探し求める

安井・中河・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フォト

開股羞恥責めの姿態

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
髪吊りで強烈ムチ打ち 略号 八しうV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
片足首引きつけ縛り 略号 八したV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
尻立て鞭打ち艶姿 略号 八しちV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
柔肌に炸裂するムチ 略号 八しつV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
エビ縛りの鞭打ち 略号 八してV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
貞操帯着用鞭打ち 略号 八しとV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
痛打にもかく美女体 略号 八しやV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
あくら縛りの羞恥責 略号 八しゆV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
片脚挙げで晒す裸身 略号 八しよV

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とはV

強烈エビ縛りで苦悶

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とにV

竹棒開股足首縛り

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とほV

股間縛りの裸身表情

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とちV

菱縄縛り猿ぐつわの表情

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とりV

乱痴戯騒ぎの結末

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とぬV

菱縄縛りで床に喘ぐ

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とるV

浣腸責めの甘い恐怖

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とかV

浣腸液の注入直後

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とまV

強制浣腸の各姿態

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とみV

浣腸責めの美態開陳

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とめV

浣腸を待つポーズ

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八ともV

のは、同好の友なのです。それから北野弘様の通信が見出せなかったのが残念でした。同じく私の求めるのは、何度も続けて投稿なさる程のSMに対する熱情です。私は次に「花と蛇」に対するアイデアを簡条書きにしてみます。これによって私のSMの性向の一端をご洞察ねがえれば幸いかと思うからです。(一) 衆人環視の中で、大きなグレートデンの体の下に、雌犬のように四つん這いになって喘ぐ静子夫人。苦心惨胆の結果、見事に成功した調教師、鬼源は相好を崩して夫人の羞恥の個処を点検する。(二) 恋人、美津子の目の前で、文夫は生ゴムとスポンジゴムの特製助け舟を装填し、桂子と凄じくも妖しいショーを繰りひろげる。(三) 文夫を桂子より奪取しようとして、美津子は鬼源の調教指導に素直に従い青大将の頭部を：そして一段と艶を増した二本の太腿をピッタリと密着せしめる。(四) 適当な間隔を空けて配置された二基の踏台の上に、開脚中腰になった京子の大きく豊かな小麦色の双丘が突き出される。京子の自発的排便ショーである。以上ですが、最後に尼崎の岡田敏夫様に、一言。噛みくだいた仁丹を私の恥

かしいのも構わず直接口移しされ痺れさせられ、それから色々な恥かしい芸を仕込まれてる私の夢を見ました。もっともっと素晴しい夢はないものでしょうか。ご先輩の方の夢かと疑うほどの、楽しいお手紙をお待ちいたしております。(神戸市・小杉千恵)

○ 寝屋川市の塚原信夫様。七月号で貴方の投稿文を拝見しました。小生も全く貴方と同様なプレーに對しての感覚の持主です。本当に共鳴しています。お互いプライバシーの秘密を厳守して、末長いご交際ねがいたいと思います。

(東大阪市・加藤生)

○ ぼくはオリーブの葉が白々と風に揺れる、小豆島という美しい島に住む二十才の青年です。楽しい盛夏が訪れ、海水浴場は都会からやってきた美しい娘達で埋もれます。ぼくは今年も、お嬢さん達の脱いだ衣類の入った籠を出し入れするアルバイトをします。フェチのぼくには最高の幸福が訪れて、まっ赤な水着に着かえて砂原を走って行った娘の美しい肢体を脳裏に描きながら、ぼくは花模様のパステイを裏返しにして、その中心

可憐表情の全裸縛り	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆめ	五〇〇円
立縛り正面裸晒し	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆえ	五〇〇円
両手吊り全裸晒し	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆひ	五〇〇円
雁字搦目後手縛り	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆあ	五〇〇円
股間縛り柔肌責め	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆも	五〇〇円
猿くつわ開股責め	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆに	五〇〇円
豊満な臀部強烈責め	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆほ	五〇〇円
強制全裸開股責め	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆみ	五〇〇円
股間縛り悶える	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆる	五〇〇円
全裸縛りに羞らう	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆへ	四〇〇円
私の妊娠腹を見てね	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
中河恵子	略号	八ゆわ	五〇〇円
縛られた妊婦横臥す	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
中河恵子	略号	八ゆよ	五〇〇円
被虐に燃える全裸妊婦	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
中河恵子	略号	八ゆぬ	五〇〇円
尚も見せたい妊婦腹	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
中河恵子	略号	八ゆる	五〇〇円
股間縛り首縄正面	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よれ	四〇〇円
両手吊り正面晒し	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よそ	四〇〇円
全裸高手小手の麗身	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よの	四〇〇円
全裸股間縛りの媚態	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よや	四〇〇円
強烈な変型エビ縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よい	四〇〇円
正座猿くつわの仕置	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よふ	四〇〇円
凄絶海老責め地獄	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よえ	四〇〇円
女体二つ折り縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よぬ	四〇〇円
あくら縛り全裸晒し	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よあ	四〇〇円
イルリの浣腸責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よた	四〇〇円

の残り香に酔い、そっと口づけします。ぼくの好きな連載は「花と蛇」。八月号の静子夫人が、お刺身を食べさせられるシーンは、圧巻でした。しかし、ぼくの期待していた中国の秘法が尻切れとんぼで、がっかりさせられました。夫人がガラス棒を段々と太いの代えられ、やがてシスターボーイたちによって交互に、それを使って玩弄され、屈辱にもだえながら恥かしい姿を衆目に晒すシーンを期待しているのは、ぼくばかりではない筈であると思います。

○(小豆島・左根情雄)

小杉千恵様。私は同じ神戸に住む四十四才の中年サラリーマンです。今までSMプレイの経験は、三名の女性相手に何度も行なっております。しかし最近面倒になり、また体面も気にするようになり、行なっておけません。しかし同じ神戸に住む貴女の通信を見て投稿する気になりました。もちろん私はSであり、それも気の弱い私は余り残酷なのは好きでなく、どちらかと言えば縛り第一であり完全な緊縛を伴う責めしか行ないません。そのかわり、緊縛については自他ともに自信があり、恐

らく貴女を満足させることは間違いないありません。最初は、いくらMでも痛いらしいが、何度も行なっておりますと馴れてくるらしく、その頃になると、いくら強く緊縛しても何ともないそうです。二十四才と言えは身体はまだ固まっていけないので、素晴らしい被縛体になることは間違いありません。

○(神戸・吉岡徹男)

奇ク九月号を拝見しました。拙い絵、それに一般向のしない肥満体の女性の絵を掲載して頂いて、感激のききみです。十数年前、箕田編集長からの便りを頂いたときの絵とくらべると、割に進歩したでしょうが、いつもながら自分の文が活字になるのは、いい気持ちですが、普通の投稿と違って貴誌に載せてもらうと、数多くの読者の前に自分が丸裸にされたような、露出症患者にとつてこの上ない満足であり、一種のM的快感に浸るのです。Mといえば、今まで同性と数回プレイをしたことがありますが、一度、異性のその味を体験したいと、いつも考えてはいるものの体面上なかなか踏みきることができず、年甲斐もなく空想の域を脱せず残念に思っています。

〔緊縛女体美のシリーズ〕

両手吊りに悶える女体

大手札三枚一組 略号△もえ▽
関谷富佐子 四〇〇円

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 略号△もゆ▽
関谷富佐子 四〇〇円

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 略号△もよ▽
関谷富佐子 四〇〇円

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 略号△もす▽
関谷富佐子 四〇〇円

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 略号△もせ▽
関谷富佐子 四〇〇円

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 略号△もれ▽
関谷富佐子 四〇〇円

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 略号△もる▽
関谷富佐子 四〇〇円

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 略号△もて▽
関谷富佐子 四〇〇円

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 略号△もな▽
関谷富佐子 四〇〇円

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 略号△もね▽
関谷富佐子 四〇〇円

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 略号△もむ▽
関谷富佐子 四〇〇円

鞭は柔肌に炸裂する

大手札三枚一組 略号△もう▽
関谷富佐子 四〇〇円

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 略号△もき▽
関谷富佐子 四〇〇円

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 略号△もこ▽
関谷富佐子 四〇〇円

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 略号△もみ▽
関谷富佐子 四〇〇円

浴後の剣玉子縛り

大手札三枚一組 略号△はゆ▽
中河 恵子 四〇〇円

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 略号△はよ▽
中河 恵子 五〇〇円

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 略号△はて▽
中河 恵子 五〇〇円

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 略号△はお▽
中河 恵子 四〇〇円

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 略号△はの▽
中河 恵子 五〇〇円

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 略号△はひ▽
中河 恵子 四〇〇円

それにしても奇クサロン楽我記の後尾の五十四才の姥桜？のSの未亡人に大いに食指が動きます。何としても今も変らぬ中年以上の女体に異常な魅力を感じているヘンな男です。から……。私にいわせると、高峰三枝子氏云々というより、もっと脂ぎった肥満体の女性であれば、もう何をかいわんやという処で、そういう女性に家畜扱いにされる満足と悦びに、心がかきめくのです。しかし金とはともかく、週に一回というのは、チト都合がつかねますがね……。ほんとうに許されることなら何もかも投げ打って、五十四才の未亡人の道楽に飼育される一びきの妙ちきりんの家畜として、彼女の足元に丸裸でうずくまり調教の鞭をうけ、懸命に喜ばれるように努力したいと、現在そんな心境で一ぱいです。クタバレ！社会的地位や体面、美德という処です。まあしかし、いろいろな制約が身体をがんじがらめに束縛していて自由にならないことは確かで（いくら自分縛られていても、この方は少しもM的な悦びをとまなわないうつまらなものです）せめてその合間の楽しみとしては、奇クとそれによる楽しみが訪れることを願

っているだけです。イロよい返事を、といたいたところですが、まづ儚い夢でしょう。せめてまた私なりの拙い絵や文でもお送りしたいと思っております。その中に夢の中の理想像のような肥満体の中年の美人？に会えるような気がします。

（西宮・高浜満六）

わたしは最近、成年に達したばかりの女子学生ですけど、ボーイフレンドの家で奇クを知って以来わたしが猛烈なS女性であることを自覚するようになりました。大変ずるい方法だとは思いますが自分では直接、手を下すことなくなるべく多くのM男どもを徹底的に辱かしめてやる計画を立てました。そこで、わたしの生理のときに使って汚れたパットでいじめてほしいM男がいたら、そのパットを上げてほしいと思えます。もちろん粗末にあつたら承知しません。わたしの手で手足をくぐられて猿ぐつわをされた上、散々に鞭打たれることを願ひ、それをひそかに自分で実行することを誓える男だけに上げます。わたしは、もうそろそろ今月の生理が始まりそうなので、この文が掲載される頃までには、現物を編集部宛に送

開股縛りに喜ぶ女

大手札四枚一組 略号△はわV
中河 恵子

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号△はふV
中河 恵子

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号△はほV
中河 恵子

悦虐に身もだえる美女

大手札四枚一組 略号△はあV
中河 恵子

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号△はうV
中河 恵子

柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 略号△はさV
中河 恵子

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号△はめV
中河 恵子

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号△はしV
中河 恵子

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号△はもV
中河 恵子

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号△はむV
関谷富佐子

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号△はめV
関谷富佐子

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号△はもV
関谷富佐子

ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 略号△はさV
関谷富佐子

両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 略号△はしV
大島 照代

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号△はすV
大島 照代

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号△はせV
大島 照代

両手吊りであえぐ女体

大手札四枚一組 略号△はゆV
大島 照代

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号△はたV
大島 照代

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号△はちV
大島 照代

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号△はつV
大島 照代

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 略号△はてV
大島 照代

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 略号△はとV
大島 照代

っておきます。数に限りがありませんから、希望者はなるべく早く申し込みなさい。（東京都大田区久力原・春川さと子）

奇ク九月号を拝見し、読者通信で左根さんの原稿が目につき、ぼくにとって大変魅力のある女性だと思ひました。そして居ても立つても居られず、お便りした次第です。ぼくは三十才の独身で、現在は兄の貸家（一戸建）を借り、自炊しております。ぜひ貴女のような女性と文通でも結構ですから交際して頂きたいと思ひます。ぼくの職業は旋盤工で鉄工所に勤めております。貴女 of 原稿を拝見すると、真面目な男性に色々な方法や楽しい姿勢でエネマをして貰いたいのことですが、ぼくも女性を色々な型のエネマ嘴管で責めてみたいと空想しております。ぼくは職業上、色々なエネマ嘴管を作るのが可能です。御返事楽しみにお待ちしております。

東京の田端美代子様。貴女のお呼びかけが、もう一年、早かったらと残念です。何故なら、私達夫婦も夫M、妻Sで、ややマンネリ

化して複數プレイによる打開を望んでいたのですが、妻の健康上の理由で当分、静養専一になっているのが現状だからです。マンネリ化の一原因は、御主人に対してのムチだけでは、やはり限界があるのではないのでしょうか。適当な場所で奴隸を交換して徹底的に責められれば、相互に新境地が開けたのではないかと思います。貞節な奥様として雌犬を求められるお氣持は分かりますが、忠実な雄犬の用途はないでしょうか。御主人相手に試みかねる惨烈な責めを行なって、血と汗と涙と呻きを、御主人とのプレイの刺戟になさるのは如何でしょう。仕事上で上京の機会も多いので、お役に立ちたいと思います。多少の器具も持っています。大阪東区の女王様にもぜひ奉仕させていただきたいと望んでいます。

（北九州市・南生）

金原奈加子さん、貴女の「童女受胎譜」を見て、貴女の羞恥美に感激しました。その後、無事ご出産の由、おめでとうございます。お腹の大きい貴女と充分にプレイをたのしみたいと思っていました。が、おそすぎました。でも花電車は経産婦に適すると聞き及んでお

最新撮影 総天然色
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号△てき▽

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組
大塚啓子
略号△てか▽

繩目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 二〇〇円
大塚 啓子 略号△てく▽

豊麗な裸身をくひる縄目
大手札四枚一組 二二〇〇円

大塚 啓子 略号△でこ▽
後手・高手・小手・縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
大塚 啓子 略号△てま▽

長襦袢の緊縛色模様
大手札三枚一組 一〇〇〇円

東浦ひかる 路号へてみ
緋の腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組
東浦ひかる
略号△てむ▽

猿ぐつわに呻く女

東浦ひかる 略号△てめ▽
柱宙吊り強烈縛り

大手札三枚一組
一〇〇〇円
東浦ひかる
略号△ても▽

ポリウムを縛りあげる

東浦ひかる 路号△でん▽

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てる▽

真紅の腰巻着る姿態

大手札二枚一組 八〇〇円
大塚 啓子 略号△うお▽

大手札二枚一組 八〇〇円

東浦・大塚 略号△うて▽
真紅の腰巻着用縛り

大手札四枚一組 一 二〇〇門
大塚 啓子 略号△うこ▽

華麗なる緊縛裸身
大手札三枚一組 一〇〇〇円

一宮百合子 略号／＼るむ、
みだらな開股縛り

大手札三枚一組
一宮百合子 略号△るの▽

責めに疲れた諦観
大手札三枚一組 一〇〇〇円

一宮百合子 略号へるお

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るま▽

羞らいの真正面縛り

大手林三枚一糸
一宮百合子
略号△るけ▽

大手札三枚一組 一〇〇〇円

一宮百合子 略号／＼るふ／＼
 高手小手後手縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るや▽

股間縛りの開股姿態—
大手札三枚一組—1000円

中河 恵子 略号△れよ▽

大手札三枚一組 一〇〇〇〇円
中河 恵子 路号ハれに✓

ります。まして貴女は幼い体つきに似ずに、異様なほどに発達しているとか。正に適役です。貴女がサロンに託した呼びかけはすでに空想の域を脱しましたが、あのサロンをもう一度、想い出して頂き、更にもう一步、前進した耽美さを私とともに追求して下さい。普段着で赤ちゃんを抱いて、おいで下さい。明るい太陽の輝くお昼のひとときを、目のくらむ羞恥のひとときに変えてみせます。痛みを伴う責めを私は好みません。貴女を後手に縛り上げておいて、羞恥責めを混合させた快感責めを主軸としながら、排尿ショーなどの研究をいたします。貴女は、敏感な素肌を私になめられたり、すすられたりして、恥かしい快感に体を悶えさせねばなりません。貴女と私をとりもった奇クへの贈物として、私のポラロイドで次のように素晴らしいマリヤの像を撮影してお送りしましょう。童女のように愛らしい貴女が、生まれたままの姿の横臥位で赤ん坊に乳房を含ませていて、その生々しく艶やかな腰に縄がうたれ、むんむんと香る太腿のまわりには、折れた剥身のバナナや茹玉子が転がっている以上が奇ク用。私の愛蔵分は、そ

のもののずばりで、貴女の恥かしい姿をとらせて頂きます。プレー成就の暁には、ご相談の上、赤ちゃんに立派な贈物を致したいと思えます。再びサロンの呼びかけを實現して下さい。

(兵庫・風流粹人)

富山の曾根葉子さん、私は貴女のような方を夢に見てきました。まだ少女の、あどけなさを残した小妖精のような貴女。生来、内気でフェミニストの私は、こちらから女性にプレイを要求するなど、思いも及ばぬことでしたが、貴女の告白を読んで世界が開けた感じがです。私は身体を傷つけるような残酷な責めには吐き気を催すのみです。それより、そこはかとなく哀愁の漂う羞恥責めに生甲斐を見出します。葉子さん、絶対に迷惑はかけません。ぜひ一度、会って下さい。(岐阜・夢野虹二)

八月号誌上にて紹介しました、以前に飼育していた奴隷の一日奉仕の事、皆さん覚えておいでになるかしら。その奴隷より礼状がきたの。「女王様、先日は偉大なるお恵みを頂戴し、お礼の申し上げようもございません。一日のご奉

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れやV

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れゆV

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れえV

黒縄縦縛りの媚態

大手札三枚一組 一〇〇〇円
中河恵子 略号八れぬV

立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村洋子 略号八れねV

開設された股間縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村洋子 略号八れのV

豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村洋子 略号八れむV

柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やかV

高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やきV

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やくV

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やもV

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やしV

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やみV

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 五〇〇〇円
大塚・東浦 略号八なるV

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 一〇〇〇円
中河恵子 略号八ぬめV

孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 一〇〇〇円
中河恵子 略号八ぬねV

八の字の開股責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しいV

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しみV

全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しけV

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しこV

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しらV

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しれV

大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しわV

お申込みは大阪阿倍野局私書箱第14号天星社宛へ願います。

仕でしたが、女王様も満足の御事と察し、またの日のご奉仕を、ここに誓約いたします。この奴隷も心より満足、いや身体の各部が今になって覚えております。特にお礼申し上げるべきものは、女王様の非常に汚されてシミのついた芳香のパンティをこの私めに下げたまわり、口の中にてその部分のみ洗濯上げたことです。女王様の御身から出る如何なる排泄物も、この奴隷にとって最上の賜物です。ご神水を直接、口をつけていただけたこと、ペーパー代りを命令されたとき、顔全体に尻を乗せられて擦られたとき、喜びの極に達しました。グラマーである女王様、女王様の芳香に生き、滴りに生きる奴隷です。二度、私が劣情を起し、女王様の御指とタイルを汚したときの罰、よく身に応えました。くさりによるフンドシくさりによる下腹部、アヌスの摩擦。喰い込むくさり。噛み込むバンド。またアグラ縛りのまま足首を顔に無理矢理に近づけられて固定されたときは全く苦痛でした。いくらお願いしてみても許してほぐれないこと、よくわかっています。しかし女王様は優しく「一日だけの奉仕だから剃毛だけは許し

てあげましょう」と言われたときは、ご寛大さに胸打たれました。私の考えた尾っぽを賞められ光栄です。今後は、もっと太いものを尾っぽにするつもりです。記念に賜った女王様のはき捨てられたパンティ、メンスバンドも、大切にしています。毎晩、寝る前に鏡の前で全裸になり、それらを身につけてみます。これが私の楽しみです。女王様は奴隷の私が身につけたことに対して御立腹でしょう。その責めは、再度ご奉仕できるとき、如何なる重い責めもお受けします。あの御奉仕が終って帰るとき、ブリーフをとり上げられ、女王様御手製の小さい真赤な三角布をつけ、その上からピンクの腰巻をつけさせられズボンをその上にはいて帰宅を許されたとき、道を歩いていても非常に気になり、自分自身でムズムズしたものです。大切に始末しております。女王様私自身、一生お仕えしたい気持ち一杯です。恵みを戴きたいのです。又きつと参ります。それまで、この奴隷犬をお忘れにならないように、節に節に、お願い申し上げます。乱筆、乱文、平にお許し下さい。以上でしたの。立派な心がけの犬でしょう。全国の奴隷志願者

全裸後手柔肌縛り 大手札三枚一組 略号△こよ▽ 四〇〇円
乳房強烈膨隆責め 大手札三枚一組 略号△こわ▽ 四〇〇円
海老責めに苦悶する 大手札三枚一組 略号△こお▽ 四〇〇円
全裸の緊縛全身晒し 大手札三枚一組 略号△こぬ▽ 三〇〇円
煙草責めに喘ぐ女 大手札二枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円
緊縛麗姿に映えるライト 大手札三枚一組 略号△ここ▽ 四〇〇円
臀部強調後手縛り 大手札三枚一組 略号△ここ▽ 四〇〇円
羞恥に悶える全裸緊縛 大手札三枚一組 略号△ここ▽ 四〇〇円
ホステスの緊縛姿態 大手札三枚一組 略号△ここ▽ 四〇〇円
二つ折りで責める女体 大手札三枚一組 略号△ここ▽ 四〇〇円
佐々木真弓 略号△ここ▽ 四〇〇円

脈打つ全裸の臨月腹 大手札三枚一組 略号△こふ▽ 四〇〇円
中河 恵子 略号△こふ▽ 四〇〇円
臨月腹の革紐股間縛り 大手札三枚一組 略号△こや▽ 四〇〇円
中河 恵子 略号△こや▽ 四〇〇円
猿轡の臨月妊婦腹縛り 大手札三枚一組 略号△この▽ 四〇〇円
中河 恵子 略号△この▽ 四〇〇円
卓上の股間縛り狂態 大手札三枚一組 略号△こそ▽ 四〇〇円
長井葉津子 略号△こそ▽ 四〇〇円
羞恥の足挙げ責め 大手札三枚一組 略号△こた▽ 四〇〇円
長井葉津子 略号△こた▽ 四〇〇円
悦虐責めの女体終着駅 大手札三枚一組 略号△こた▽ 四〇〇円
長井葉津子 略号△こた▽ 四〇〇円
片足挙げる鞭打ち責め 大手札三枚一組 略号△こた▽ 四〇〇円
関谷富佐子 略号△こた▽ 四〇〇円
柔肌に弾ける惨酷な答 大手札三枚一組 略号△こな▽ 四〇〇円
関谷富佐子 略号△こな▽ 四〇〇円
あぐら縛りの女体鑑賞 大手札三枚一組 略号△こえ▽ 四〇〇円
佐近麻里子 略号△こえ▽ 四〇〇円
対談用に縛られた女 大手札三枚一組 略号△こて▽ 四〇〇円
左近麻里子 略号△こて▽ 四〇〇円

○ (大阪東区の女王)

の皆さん、このような忠犬になれるか知ら。皆の者どもを一堂に集めて飼育できたらと思うことよ。

東北も連日、暑い日が続いております。私は例の夏ぶとりで、また一段と肉がつき、苦しい有様です。昨年のワンピースなどは全くウエストがきつくて着れない状態

です。お腹ばかりふくらんできてどうしようもありません。私は元来、便秘ぐせがあり苦労しておりましたところ、お友達から毎朝何も食べない前に冷たい牛乳を二三本、飲めば、よく効くといわれ最近それをつづけております。私は一週間ぐらい便秘の苦しいのを我慢して、お腹の張りが最高限になり、強く歩くとビンビンとお腹に響いて苦しいぐらいになったとき、牛乳を飲んでお腹を掃除することにしております。さて、私のアパートに牛乳配達にくる二十才前後の男の子が前から気に入っていましたので、考えた末、つぎのようなことを実行いたしました。先ず集金に来る時、牛乳配達箱の中に「お金を用意してありますから戸を開けて入って下さい」と紙切れを入れておきました。朝八時頃だったでしょうか「ごめん下さい」という男の声がありました。私は「体が悪くて寝ていますから中へ入って下さい」と言いました。私は、大きくふくらんでいる太鼓腹に手をやって苦しうにうなつておりました。その人は心配そうに見ながら「お大事に……」と言って帰ろうとしました。私は、ここでこの人に帰られては……と思

い、勇気を出して「すみませんが冷蔵庫の中の牛乳を全部、出して下さい」と頼みました。私は、如何にも大儀そうに坐ると胸がはだけ乳房が丸見えになりました。私は、その人の前で冷たい牛乳を次々と飲み干しましたが、四本目になると吐き出しそうになって、なかなか喉にとおりません。やっと飲みこむと「ああ苦しい」とうなりながら、仰向けに倒れました。「お願い、静かにお腹をさすって下さらない」驚いているその人に頼みますと、気の毒に思ったのか私の丸々とふとったお腹に手を当てました。五分ぐらいマッサージしてもらっていると、お腹がゴロゴロなりだし、すごい腹痛におそわれました。私は、こらえにこらえ、身をよじってたえましたが、でもその内、とうとう我慢ができなくなり、トイレにかけこみました。と言うわけです。私は、これからの猛暑に、この太鼓腹をかかえて、毎日つとめなければなりません。けど、決して辛いと思いません。肥った女でなければ嫌やと言ふ人があらわれるまで、今のままでよいと思います。

（太鼓腹の美川英美子）

○

小杉千恵様、貴女のお便り拝見いたしました。私は三十一才で、五年ぐらい奇クを愛読している会社員です。貴女とのプレイについては、花と蛇の静子夫人のように乳房縛りに始まって、竹を使った開脚縛りや、バイブレーターによる局所責めから、コケシ、毛筆、その他による、くすぐり責めなど貴女が希望する羞恥責めを主に、プレイいたしたいと思えます。また貴女のカメラで恥かしいところを多く写して楽しみたい。岡山山の谷山久美子様、貴女とも一度プレイをするか、話だけでもしたいと思っています。

（岡山・近藤次郎）

私の拙ない文章が、貴重な二頁を使ったことを申しわけなく思っている。しかしながら、自分のものが活字になることは、やはり気持ちのよいものである。とりわけ、私の拙文のため、すばらしいカットを下さった日本武士氏に対しては、誌上を借りてお礼申し上げておきたい。また私をしてペンをとらざるを得ない心境に誘導して下さった小杉千恵さんには、限りなき愛着を愛じるとともに、深く感謝している。恐らく距離的にも千

恵さんとのプレイはできそうもないが、いつかの機会に二人だけの時間が持てればと夢みている。思いきり千恵さんの羞恥心をかりたて、私には顔乗り、神酒拝受、アヌ責めとともに満足できるプレイを満喫したいと思う。もちろん千恵さんが私を認めてくれなければ別であるが……。それと、もう一つ。私は今、ワキガの女性とプレイしてみたい。ワキガの香りは私にとっては最高ののだから。

（岐阜・座頭孝司）

私は四、五カ月前より奇クを読み始めた者だが、奇クサロンに抽象的なカメラ・ハント讚美論を送ったついでに、本欄を借りて卑俗的なカメラ・ハントに対する要望を書いてみる。先ずは全裸姿態のみにとどめず、パンティをずらせた姿やオシメを当てがった姿を撮ったり、ミニスカを捲って、その下にフンドシをしているのを見せたりして、フェティシズムを満足せしめること。つぎに適当な長さに切られたバナナや、へしゃげたイチジク浣腸の殻、それに水の入った洗面器を裸女のそばにおいてシンボリズムを展開せしめる。更に生まれたままの姿の女性と大型

(次号十一月号)は九月二十五日に発売いたします

犬とを並べて写したり、小型犬を膝の上にのせて頭を撫でている裸女の妖しい姿態や、その周囲に取り散らかされたままの太いコケシやソーセージを写して、読者のフロイド風の拡大解釈を待つこと尚、フォートの女の姿態だけを眺めるならば、週刊誌はいうに及ばず他の平常な月刊誌にさえ、奇クは一步、譲っていると考えられる。とびきり美しく若いモデルが「モーレッツ」姿のスカートの下をノーパンティで写させたり、おケケではないのかと首をかしげるほどの姿態を露出せしめている。臀部の撮影に到っては、もう双丘の下部の肉贅が、ずばり想像する状態にまで、上手に工夫されているのだから、すべて奇クなど比較できないし、奇クは小さなフォートであるに比較して、他誌はグラビヤなのである。それなのに奇クの写真に何故、私達が拍手を送るかという、もちろん奇クの真面目さに対してなのである。この私達の期待に答えて奇クは、もう一步、前進してほしいと思う。安井夫人あたりが介添役になって、ハントさ

れた女性に、幼児にオシッコを捧げるようなポーズをとらせるのも一興であろう。この際に、現在のカットのための白線は太すぎるから、もう少し細くすべきである。白線を、もう少し細くすることだけでも前進を試みてほしいと思うのだ。結論を述べると、女の裸を縛ったぐらいでは倒錯でも何でもない世俗に変わったということである。この意味でも、妊婦責めは大成功であったが、更にこれに私のアイデアがプラスされることを切望する次第である。

(神戸市・九鬼好太郎)

○

初めてお使いいたします。新婚にホヤホヤの女性でございます。独身の頃、伯母(奇クの写真だったのです)にそのかされ、おフンドシを締めさせられて以来、すっかり、おフンドシが好きになり結婚後も下着は、おフンドシで過ごしております。私、思いますのに、男性の場合は「褌」と漢字で書いても良いと思いますが、女性の場合は「おフンドシ」と接頭語の「お」をつけて呼ぶのが何と

なく柔か味があって女らしく、好きでございます。私のように、おフンドシに興味を持っておりますと他の人が何気なく見過ごしてしまふ週刊誌や新聞の記事の中にもおフンドシと関連したものが、充分あるのに気がつきます。最近の例を御紹介しますと、つぎのとおりです。プレイボーイ、七月十五日号の巻頭グラビヤ、篠山紀信傑作シリーズ②「エロスの館」と題して、谷口リエさんという人の、六尺ではなく三角フンドシとでもいうものですが、そのものズバリおフンドシいっちゃんの素裸の写真。週刊文春、七月二十八日号の三十二頁で「ミニスカートのつぎは貞操帯で」という題で、貞操帯の流行をほのめかしており、男性ヌードカメラマンの福島昌子さんは、ミニスカートの下から貞操帯がのぞいたら感じが良いという意味のことを述べており、貞操帯は形態上、おフンドシと似ているので、貞操帯をおフンドシと読みかえたら……と、うれしくなっています。朝日新聞、七月二十日(日)十八頁、型破りな遊びと題して、大阪府豊中市新千里西町三の一〇一三一一〇二にお住いの伊藤幸恵とおっしゃる方の写真入り

投書。二人の男のお子さんに、オシメでまわしを締めさせ、お相撲をとらせて遊ばせているということとです。写真には褌いっちゃんの素裸で四つに組んだ坊や達の勇姿が写っております。このお母さま、きっと私と同様おフンドシ愛用の方ではないのでしょうか。自分のことはたなに上げて、他人のことばかり書きましたが、いざれ私自身の体験談など、お知らせしたいと思っております。

(千葉県・梅本八重子)

○

弓削達人先生や編集の方々に深く御礼申します。私は、「金魚などを抱いた女性のオナニーについて」のご解答を頂きました女性でございます。私の誰にも相談できない悩みについて親切にお答え下さり感謝にたえません。お蔭様で自傷行為の危険もよく理解できましたので、適度なオナニーにて、自らのナルシスを楽しむ程度に止めおくことに致します。本当にありがとうございます。

(神戸市・オナニーに悩む女)

○

フェチ・マゾの皆様、バンドマニヤの安田です。ずい分、ごぶさたしました。仕事に忙殺され、投

稿の方が永らく手がつかず残念に思ってますが、バンドマニヤの私が、最近どんな方向に傾いたか御報告の意味で筆をとりました。最近、サウナ風呂でホステスの女性相手に、私のメンスバンド姿や、ズロース、パンティ姿を見てもいい、数人の女性の物笑いになったりして随分と楽しい思いをしました。その私が、どういうものか、この一カ月前頃から無性にオシメがしたく、この頃では毎日のようにオシメを二枚宛、T字型に当てダンロップで特製してもらった大人の総ゴム、オシメカバーの小サイズのものをピッチリと当て、ズ

ボンをはき、仕事にはげむようになってしまいました。人と会いながら、デパートで美しい売子と話をしながら、少しずつ尿を洩らす楽しさ！ 一時間も当てているとオシメ全体が、じっとり濡れ、腰をヒンヤリと包み、ヒップにキチキチに作られた生ゴムのオシメカバーがピッチリ締めつけ、何とも形容のできない気持よさに包まれて過ぎております。サウナの娘さんも、この頃はなれてしまい、オシメの小父さんとか、バンドの小父さん等、ふざけて呼んでくれます。「あら、オシメの小父さん丁度よかったわ。脱衣場が今、空

いているわよ」といって、ガムを噛みながら脱衣場までやってきて私がオムツカバーをはずしたり、時にはズロースや月経帯を脱ぐのを、おもしろそうに見ている時もあり、露出癖も満足させてくれます。全く天国のような気持です。先日は極上のバンドを進呈し、グショグショに濡れたオシメを彼女の手ではずしてもらったこともあります。「いやだあーこんな大きな赤ちゃん。そうそう、私には、もう派手で着られないユカタがあるから、あれであんたにオシメを作って上げましょうね」といってくれました。正に病、膏盲に入る

のたぐいですね。三十も終りに近い中年の男の告白です。ご批判下さいませ。

(山口県徳山市・安田隆夫)

九月号のサロン楽我記で五十四才の未亡人、M男紹介されたし、の記事、拝見いたしました。小生は三十八才です。条件は三十才から四十才までの奴隷的献身男性で週一回のプレイで月十万円のとことです。小生は身許確実ですが念のため戸籍とう本でも住民票でもお送りします。応募者が多いと思います。古くからの奇巧の愛読者である小生を、ぜひ採用して下さい。おねがいします。

(東京・村山貞夫)

本誌既刊号在庫一覧表

○本誌既刊雑誌は左記一覽表の通り在庫しておりますが、40年分の発行のものについては在庫の僅少な御注文願います。送料は当社にて負担しております。注文は、今後は三ヶ月以上予約注文が、多送料二〇円含みず、は一部につき、多送料二〇円のお求めの際は、ハ小包Vにて発送申し上げます。

昭和41年4月号	昭和41年3月号	昭和41年2月号	昭和41年1月号	昭和40年12月号	昭和40年11月号	昭和40年9月号	昭和40年8月号	昭和40年7月号	昭和40年6月号	昭和40年5月号	昭和40年4月号	既刊雑誌在庫案内
(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	

られてともかく発表した形だ。「入選作」とするには「チトお軽いが……」という意味にご理解の上、ご諒承をお願いしたい。

○原稿用紙のマス目を埋めてゆくという作業が楽なことでないのも、折角投稿したのに手応えのない頼りなさも、ご当人の身になってみるまでもなくよく判るつもりだが、発端、導入部分だけを送ってこれられ、採用するなら続きを書くから返事をしろ、感想を聞かせろと云われても、その労は謝しながら、たいていの場合はホオカムリで欠礼することにしてゐる。載せるかどうかともわからぬのに長々と書けるか、という気持も無理ないところとは思ふが、いいものなら必ず採り上げさせていただく故、手前勝手ながら、自信ある作品はどしどしお寄せ下さるようお願いしたい。

卷末の読者通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放しています。御遠慮なくお寄せ下さい。

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

昭和四十四年九月二十日
昭和四十四年十月一日
印刷
発行

編纂人 杉吉北
発行人 原田俊
印刷人 児稔夫

印刷人
北村俊夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

郵便番号
△振替口座大阪四二七八三番△
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日
国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号)

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に注意する各条例に指定されないうち、充分に注意して編集いたしております。また、本来成人向として発行を企図しておりましたが、本係上、十八才未満の方には絶対お売り下さらないよう、特にくれぐれも、お願ひ申し上げます。